
MONSTER HUNTER EVOLVE

CENTER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MONSTER HUNTER EVOLVE

【Nコード】

N5780H

【作者名】

CENTER

【あらすじ】

人とモンスターが生きる狩りの世界は長い時間の果てに少しだけ姿を変えた。人型になるほどに進化した【進種】、古の姿の【原種】、そして【ハンター】。進化した狩りの世界で、新たな物語が始まる。

第一話「ゼロからの始まり」(前書き)

あらすじでわかると思いますが、オリジナル要素、設定の捏造が満載です。

第一話「ゼロからの始まり」

誰かの声がした。

私の記憶はそこから始まる。

しゃがれた老人の声だ。

「お前は希望なんだよ。ミラ」

その後、言葉は何と続く筈だったのだろう。

私とその言葉を聞く事は永遠にない。

崩れ落ちた天井の下に、その続きは埋まってしまった。

瓦礫の山を踏んで、一人の女性が歩いて来る。

長い黒髪、黒い瞳、黒い鎧、黒い翼。何もかも黒い。

周囲は真っ暗なのに、その姿ははっきりと見えた。

まるで、黒すぎて闇からも浮いているみたい。

彼女が口を開く。

「あなたはまだ、世界の調和を乱す存在ではないのね」

私の記憶は、そこで終わっている。

MONSTER HUNTER EVOLVE

第一話「ゼロからの始まり」

開け放たれた窓から朝の日差しが差し込み、窓枠に留まった小鳥が明るく囀る。

「そう……困ったわね」

「はぁ……」

ベッドサイドの椅子の上で眩く少女に、ベッドの上の少女は曖昧に頷いた。

椅子に座っている少女は、あくまで見た目の印象だが、ベッドの上の少女よりは少し年上に見える。

瞳の色は褐色で床に届きそうな程長い青い髪に頭の後ろで赤いリボンを結んでいた。

立ち上がった後も、腰の辺りまではあるだろう。

それに比べて、ベッドの上の少女には色彩がない。

肩より少し長いくらいの髪の毛は清潔なシーツに負けない位真っ白で、瞳の色は銀。

日差しに触れると、溶けてしまいそうにさえ見えた。

ベッドサイドの少女の名はミュリエリア。

彼女が川岸に打ち上げられていた白い少女を拾ったのが三日前。

ようやく目を覚ました白い少女に事情を聞いたところで冒頭に戻る。

「どうでしょうか。私、記憶喪失の人にあつたのは初めてだわ」

「記憶喪失、ですか？」

「あ、ごめんなさい。記憶喪失と言うのは」

「いえ、それはわかります」

説明を始めようとしたミュリエリアを白い少女が遮った。

「何と言うか、常識みたいな事はちゃんとわかってるみたいですよ」

「あら、そう？」

「はい、多分」

白い少女は頷いたが、ミュリエリアは半信半疑で首をかしげた。

少し考え、ぽんと手を打つ。

「では、テストをしてみましようか」

「はあ、テスト」

「あ、テストと言うのは」

「……それもわかりますって」

「そう？ では、第一問よ」

マイペースに話を進めていくミュリエリアに、白い少女は諦めのため息を吐いた。

「はあ、どござ」

「進種しんしゅとは何でしょう？」

問題を出された白い少女は、頭の中から知識を引っ張り出す。

「ずっと昔にモンスターと呼ばれていた種族が進化して、かつての人間に近い姿になった種族……」

「はい、正解」

にっこりと笑うミュリエリア。

正解した事に安心した白い少女も、釣られるように笑みを浮かべた。

驚く事に、笑っただけで彼女の存在感の希薄さが一気に払拭され

る。

本当に嬉しいのだと思わせる、無邪気な笑みがそう思わせただのかもしれない。

「可愛らしく笑うのね。その方がずっといいわ」

「あ、ありがとうございます……」

恥ずかしそうに、頬を染めて俯く。

記憶は無くても、感情は失くしていない。

それがわかったミュリエリアは胸を撫で下ろした。

「良かった」

「はい？」

「いえ、こちらの話。

では、次の問題にいくわね」

「あ、はい」

「私は、あ！ 私、まだ自己紹介もしてなかったわ！」

ミュリエリアが慌てて言った。

「私はミュリエリアよ」

「ミュリエリア、さん？」

「ミュリーイでいいわ。皆そう呼ぶから」

「わかりました、ミュリーイさん。」

あ、でも……私……」

白い少女は困った顔で呟く。

お返しに自己紹介したくても、記憶が無いのだからどうしようもない。

それがすぐにわかり、ミュリエリアも首を傾げた。

「どうでしょうか？ 名前が無いのは不便ね」

ミュリエリアが眉を寄せる。

「……ミリア」

白い少女がぼつりと呟いた。

「ミリアって、もしかしたら私の名前かもしれないわね」

「あ、そうかもしれないわね」

「ミュリーイさんもそう思ってくれますか？」

「ええ。たった一つ覚えていた事なんだから、大切にすべきよ」

ミュリエリアに太鼓判を押されて、白い少女は嬉しそうに笑った。

「はい。私は、ミラ、です」

「ええ、よろしく。ミラちゃん」

「はい。ミュリーさん」

ミュリーとミラは顔を見合わせて微笑み合う。

「それでは、テストの続きに戻りましょうか」

「え、まだするんですか？」

「次で最後よ。」

問題。私はハンターでしょうか、進種でしょうか？」

「えっと、進種ですよね？」

ミラの知識では、この時代の【ハンター】は昔ほど人間の形をしていない。

少し妙な話だが、昔の人間らしい方が【進種】なのだ。

「正解。私はランポス進種なのよ」

「ランポス進種……」

特筆すべき能力を持たず、個々の能力では【進種】の中で最も弱い種族だ。

しかし、元々集団戦法を取っていた事もあり、最も早く集落作って生活を始めた種族でもある。

次第に高い技術力を持つようになり、古い時代における人間にそっくりなのがこの種族だ。

そんな知識をミラは思い出した。

そして、次に当然の疑問に行き当たった。

「……私、何なんだろ」

ほとんど無意識に呟いた言葉だったが、ミュリエリアはそれを聞き取った。

「そうね……何なのかしら？」

二人して首をかしげる。

「リオス進種や進古龍種ハイエンシェントは翼があるから、違うわね」

そう言われて、ミラは自分の身体を見下ろした。

未発達とは言えない、けれど成熟したわけでもない。10代後半くらいの身体つき。

翼もないし、目に見える特徴はまったく無い。

特徴的な外骨格を持つ【ザミ進種】や【ブロス進種】も違うだろ

う。

ミラは自分の真っ白な髪を一束摘む。

「白い髪がよく現れるのはフルフル進種とギアノス進種ですよね？」

「そうね。フルフル進種なら発電ができるはずだけど？」

「発電……」

ミラは自分の手を見下ろしてみた。

握ったり開いたり、身体のおちこちに力を入れてみる。

「……よくわかりません」

「そのようね。ここまで特徴が無いのならギアノス進種かもしれな
いわね」

「そうですね。だといいです」

【ギアノス進種】は【ランポス進種】と近い種族で、寒さに強
いと言っ点を除けばほとんど同じと思っいいい。

要するに最弱宣言されてしまったのだが、それでもミラは嬉しそ
うだった。

自分が何者かわからないと言っのは、それだけ不安な事だったの
だろっ。

だが、その笑顔はすぐに曇ってしまった。

「ミ、ミラちゃん？」

ミュリエリアがミラの顔を見てぎよっとする。

淡い色の瞳から涙がこぼれて、白い頬を伝っていた。

最初は見間違えかと思ったそれは、ポロポロと数を増やしてシートに染みを作っていく。

「どうしたの？ どこか痛いなの？」

「あ、違うんです。その、何だか急に……」

零れる雫を何度も手の甲で拭うが、涙は一向に止まらない。

「い、ごめんなさ……すぐ、ぐすっ、泣き止みますから……」

「ミラちゃん」

ミュリエリアは手を伸ばして、ミラを優しく抱きしめた。

「ミューリィ……さん？」

「ミラちゃん、どうしたの？ あなたが思っている事を、私に教えて？」

「ミューリィさん……でも……」

「いいのよ。話して?」

「……その、私」

ミラはミューリイの胸に頭を押し付けて、つつかえながら話し始めた。

「全然自分の事わからなくて……でも、名前も、ギアノス進種かも
ってわかって……」。

ミューリイさんが優しい人で、良かったって……でも、わかったら
ミューリイさんとお別れでって、そう思ったら……急に不安にな
って……」

「ミラちゃん……」

ミューリエリアはミラを抱きしめる手に少し力を込めた。

「馬鹿ね。私がそんな中途半端な状態であなを放り出すと思っ
たの?」

「え?」

涙に濡れた瞳がミューリエリアを見上げる。

「来なさい」

ミューリエリアはミラの手を引いて、ベッドから連れ出した。

「あ、あのっ、ミューリイさん?」

「いいから、ついて来て」

「は、はい」

少しふらつきながら、手を引かれるままについて行く。

部屋を出て、階段を下りる。

「うわあ、凄い」

一階に下りた瞬間、ミラが驚きの声を上げた。

壁には剣が立てかけられ、机の上には防具のパーツや素材が散らばっている。

棚には葉っぱやビンがこれでもかとはかりに並べられていた。

その混沌とした有り様に涙も引っ込んでしまった。

「これは？」

「これ、読んでみなさい」

ミュリエリアは外に通じるドアの傍に置いてあった大きな木の板を指し示した。

文字が書いてあるそれは、どうやら看板らしい。

「『武器防具アイテム調合等よろず承ります。工房・ミュリエリア』
？」

「うちの看板よ」

「ミューリイさん、何でも屋さんだったんですか？」

「最初はね、ただの雑貨屋だったの。でも、お客さんの注文に答え
てる間にそうなったのよ」

「そうなんですか。凄いですね」

ミラが言つと、ミユリエリアは大げさにため息を吐いた。

「鈍い子ね」

「はい？」

「私はね、注文されたら店を拡張するくらい面倒見がいいのよ。今
のミラちゃんみたいな子を放り出すなんて、できないの」

「ミューリイさん……」

「何？」

ミユリエリアが優しく微笑む。

「ちょっと、わかり難かったです」

ミラはそう言つのが精一杯だった。

それ以上何か言ったら、また泣き出してしまいそうだったから。

「そっかしら？」

なのに、

「仕方ないわね。ミラ、あなたが帰る所に行く所、それが見つかるまで、ここにいなさい」

ミュリエリアがそんな事を言うものだから、結局また泣いてしま
うのだった。

ミラが目を覚ましてから、一週間ばかり時間が過ぎた。

数日はベッドの上で過ごさなければならなかったが、今ではすっ
かり元気になり、出歩けるようになってる。

現に、ミラは今、ミュリエリアに頼まれたお使いの帰り道だ。

食品は、ミュリエリアの店で扱っていない数少ない物の一つなの
だ。

謎の記憶喪失少女のミラだったが、村に様々な貢献をしているミ
ユリエリアが保護者をしているからか、好意的に受け入れられてい
た。

野菜の詰まったかごを持って歩くミラに、村人達が気さくに声を

かけている様子からもそれが窺える。

「やあ、ミラちゃん」

「あ、ドスのおじさん。こんにちはっ」

ミラが挨拶を返した相手は、青い髪の一部を赤く染めた中年の男性だった。

赤い髪はドス 現在では村長 の証だ。

若い頃は仲間を率いて【ハンター】や【原種】と戦っていた歴戦の戦士だと言うが、

今は人の良さそうなただのおじさんにしか見えない。

「お使いかい？」

「はいっ」

外からミラの元気な声が聞こえてきて、ミュリエリアは作業の手を止めた。

ミラが元気になるとすぐにわかった事だが、彼女は非常に素直な少女だった。

よく笑い、よく泣き、よく怒り。とにかく感情表現が豊かなのだ。

「そこも可愛いのだけれど」

最初の薄幸の少女のような雰囲気は何だったのだらうと思わないでもない。

椅子から立ち上がると、作業の邪魔にならないようにポニーテールにしてある髪が揺れる。

一緒に暮らすようになってからの変化の一つに、二人の関係が家族になったと言うものがある。

どこか遠慮している風だったミラに業を煮やして、ミュリエリアが姉を名乗ったのだ。

曰く、姉に遠慮する妹がどこにいるのよ、である。

『お姉ちゃん』と呼ばれる度に感動し、話し言葉が砕けたものになるのを喜び、最近ではすっかり姉バカなミュリエリアなのだ。

「ミラちゃんは何を買ったんだい？」

「今日はシモフリトマトが安かったんですよー」

聞こえてくる会話を聞くとともにしに聞きながら、ミュリエリアはある事を考えていた。

ミラが気づいていないようだから言っていない、彼女の種族に関する1つの可能性。

特徴らしい特徴を持たないその種族。

その名前を【人間】と言う。

【ハンター】とは違い、ここ百年以上姿を見られていないが、

同じランポスでも、ミュリエリアのように進化した【進種】と未だ古い姿を保つ【原種】がいるように、

【人間】もまた、どこかに存在しているのかもしれない。

「考えすぎね」

首を振って、馬鹿な考えを追い出す。

ガチャ、とドアが開いて、ミラが入って来る。

「ただいま、お姉ちゃん」

「お帰りなさい、ミラ」

ミュリエリアは笑顔を浮かべて、可愛い妹を出迎えた。

NEXT > 第二話「初めての世界」

< 簡易キャラクター紹介 >

名前：ミュリエリア

年齢：18（【進種】の年齢、寿命に関しては人間と同等）

性別：女

種族：ランポス進種

能力：【技術】

名前：ミラ

年齢：???

性別：女

種族：???

能力：???

第一話「ゼロからの始まり」(後書き)

WiiがなくてTrioができない悔しさで書き始めました。
ですので、基本的なデータはP2Gの物を使っています。

第二話「初めての世界」

ミラとミュリエリアが一緒に暮らすようになって、しばらくしたある夜。

ミュリエリアとミラは、ミュリエリアの部屋で向かい合っていた。

おやすみと挨拶してそれぞれの部屋に戻った後に、ミラが尋ねてきたのだ。

「お姉ちゃんっ」

「な、何？」

やけに真剣なミラにミュリエリアが気圧されながら聞き返す。

「私に、このお店のお手伝いをさせて下さい！」

勢いよく頭を下げる。

「え？」

「だって、私、何の役にも立ってないから」

顔を上げて申し訳なさそうに言うミラに、ミュリエリアは優しく微笑みかけた。

「そんな事、気にしないでいいのよ。ここはあなたの家なんだから」

「お姉ちゃんがそう言ってくれるのは嬉しいんだけど、でも、それじゃ私、ダメになっちゃうよ!」

態度を一変させてまくし立てるミラに、ミュリエリアは目を瞬かせた。

MONSTER HUNTER EVOLVE
第二話「初めての世界」

時間を少し過去に戻そう。

「お休みなさい、ミラ」

「お休み、おねえちゃん」

挨拶を交わして、ミラは自分の部屋に戻った。

ミラが最初に目を覚ましたのは、ミュリエリアの部屋で、

この家で暮らし始めたミラのために、物置として使っていたのを片付けて開けてくれた部屋だ。

まだ荷物の少ない寂しい部屋だが、ミュリエリアが近い内に家具を作って揃えてくれると約束してくれていた。

ミラは、ミュリエリアが最初に作ってくれたベッドに身体を投げ

出した。

「ふう……疲れた」

記憶喪失のミラにとっては、あらゆる事が新鮮だった。

知識はちゃんとあるのだが、記憶が伴わないだけで、感じ方は全く異なるものになるらしい。

水を触った時など、冷たさに驚いて思わず悲鳴を上げてしまったほどだ。

そんなに大きい村でもないのに、未だに驚いたことのない日はない。

その上、その度に全力で感情表現するせいで、寝る頃にはもうぐったりだ。

「今日も色々あったな」

眠りに落ちるまで、その日にあった事を思い出して反芻する。

それが、最近のミラの日課だった。

まずは朝。

ミラが起きると、ミユリエリアは既に起きていて工房の炉に火を入れていた。

今日は武器の加工をするのだと言う。

ミュリエリアの用意してくれた朝食を食べて村に。

夕方まで村の中を散歩したり、村人と話をして過ごす。

その後、ミュリエリアと一緒に夕食の買い物。

食べた事のない食材に目移りするミラに苦笑して、たくさんの食材を買い込んでくれた。

家に帰った後は、たくさんの食材でミュリエリアが作った料理を食べながら、家具の話をした。

ミュリエリアが優しいものだから、ついあれこれと注文を出してしまった気がする。

「あれ？」

がばつと起き上がる。

「私、もしかしてすごくダメな人になってる……？」

もしかしなくてもダメダメだった。

ミュリエリアの好意に甘えすぎである。

もっとも、ミラを際限なく甘やかすミュリエリアにも責任の一端があるのだが。

とにかく、このままはよくない気がした。

『ミューリイちゃんはいいい子なのに、ミラちゃんは……』などと噂される未来図が目に見えかぶ。

そして、ある日ミラは疲れきった顔をしたミュリエリアに言われるのだ『もう耐えられない。出て行きなさい』と。

「いやああああ」

ミラは頭を抱えて叫ぶと、部屋を飛び出した。

「私、何ができるかもわからないけど、一生懸命頑張るから」

必死に、ミラが訴える。

瞳が潤んで、今にも泣き出しそうだった。

「ミラ……」

ミュリエリアは困った顔になる。

彼女から見れば、ミラはまだまだ危なっかしい。

一般常識は一応あるのだが、妙な事を知っている反面、当たり前のような事を知らなかったりする。

しかも、なまじ知識があるせいで、妙な先入観を持っている事もしばしばだ。

できれば、もう少しゆっくりしてこの世界に馴染んでいつて欲しい。

だが、それではミラの気がすまないだろう。

むしろ、精神的にはよくないかもしれない。

要するに、ミラは不安なのだ。

何の役にも立たずに、いつまでもミュリエリアに甘えるだけでは、いつか見捨てられてしまうんじゃないのかと思っているのだ。

自分が何者かもわからない時に最初に会ったミュリエリアは、ミラにとって母親のようにさえ思える大切な抛り所なのだ。

ミュリエリアは、初めて会話した日に、ミュリエリアと別れる事が不安だと言って泣いていたミラの姿を思い出した。

少しでも安心できるようにと思ってミラが不自由しないように気をつけていたが、それが逆に不安を招くことになるとは思わなかった。

(それなら、手伝って貰ったほうがいいのかもしれないわね)

店の労働力が増えるのも単純にありがたいし、あちこちから店に来る客の相手をする事が記憶を取り戻す手伝いになるかもしれない。

そう考えて、ミュリエリアはミラに手伝って貰うことを決めた。

「そうね。これからは、ミラにも手伝って貰うわ」

「本当？」

ぱっとミラが笑顔になる。

「ええ。本当よ」

「やったあ！ それじゃあ、何をすればいい？」

はしゃぐミラだが、残念ながら今はもう夜中で、この時間からする事は無い。

ミュリエリアは苦笑してミラの肩に手を置いた。

「ちょっと落ち着きなさい。仕事は明日の朝からよ」

「あ……そうだよね」

「今のミラの仕事はぐっすり眠ることね」

ミュリエリアはミラの手をとって、ミラをベッドに導く。

同じベッドに収まったところで、ようやく状況を理解したミラが少し慌てる。

「お、お姉ちゃん？」

「今日は一緒に寝ましようっ。」

「でも……」

ミラからすれば、甘えてばかりじゃダメだと思ったばかりなのだという思いがある。

でも、

「いいのよ。私は、ミラが甘えてくれるのが嬉しいんだから」

「お姉ちゃん……」

ミュリエリアの言葉で、そんな気持ちはあっさりと消えてしまつて、ミラはミュリエリアにぎゅっと抱きついた。

翌朝。

朝食の後で、二人はミュリエリアの作業場にいた。

「お姉ちゃん、今日は何をするの？」

「今日は、森丘に素材を集めに行くのよ」

【森丘】とは、エリア区分の1つだ。

地形や植生、住んでいる生物の生態などで、【密林】【砂漠】などいくつかの分類がされている。

もちろん、それぞれの地形が一つしかないと言う事はなく、地図を見れば、【森丘】とか【××森丘】と言う風にちゃんと固有名詞で区別されている。

この場合は、単純に一番近くの【森丘】と言う意味だ。

「素材？」

「ええ。この前の依頼で薬草の在庫がほとんどなくなったのよ。仕入れてもいいけど、採取してくれば無料ですむでしょう？」

「と言ってはいるが、ミュリエリアは基本的に採取には行かない。

店で行うのは実際の加工や調合のみで、素材は客に持ってきて貰うし、雑貨は商人から仕入れている。

今回は、手伝いついでにミラを外に連れ出そうと思っただけで、実際はピクニックみたいなものだ。

「森丘……。外に行けるんだ」

「ええ。ミラにとっては初めてね」

「うんっ。早く行こっよ」

「ちょっと待ちなさい」

今にも飛び出して行きそうなミラをミュリエリアが止める。

「そんな格好ではダメよ」

「あ……」

ミラが着ているのは、簡素なワンピースだ。

村の中では良くても、外に行くには軽装過ぎる。

「外に行く前に、着替えるわよ」

ミュリエリアが二人分の防具を持って来る。

「はい」

ミラは頷いて、ミュリエリアから装備を受け取った。

……

「お姉ちゃん、これでいい？」

「そつね……ええ、いいわよ」

ミラの装備を確認して、ミュリエリアが頷く。

ミュリエリアが着ているのは、金属の板と青緑色の鱗で作られている鎧だ。

少し詳しい者なら【ランポスシリーズ】と呼ばれている物だと気

づくだろう。

店の隅で売れ残っていた物で、大人の女性をモデルに作っているため、ミュリエリアには少し大きい。

それに対して、ミラの着ている装備は一見して何かわからない。

【腕装備】は手首から肘を覆い、【脚装備】は脚から膝までの金属製の鎧。

【胴装備】は頑丈な皮の上に青系統の鱗を張り合わせたもの。

【腰装備】はミニスカートで、使われた素材は甲殻種のものよ
うだ。

全体的に、動きやすさを優先している作りに見える。

実は、この防具はミュリエリアの自分で着るために作ったオリジナル防具である。

と言っても、大層なものではなく、注文されたものを作った時に余った材料で作ったものだ。

狩猟をしないミュリエリアからすれば、この位で十分なのだ。

だが、オリジナル防具を作ると言う事は、ミュリエリアの技量の高さを示している。

【進種】に進化する事で、鱗や甲殻、毛皮を失った竜たちは、衣服や鎧を着る事が必要になった。

しかし、高い技術力を持つと言われる【ランポス進種】でも、ゼ口から作るのは困難を極めた。

そこで、役に立ったのが、【人間】の使っていた装備の設計図である。

【進種】の装備文化は【人間】の模倣から始まり、【人間】の作った装備はその時点で高い完成度を誇っていた。

故に今でも同じ防具が使われているのだ。

だからこそ、それよりも優れたオリジナルの装備を考え出し、作り出すのはとても難しい。

今ミラが着ているのは単なる有り合わせだが、ミュリエリアに専用の装備を注文する客は各地から訪れる。

何も、ただ世話焼きだと言う理由だけで店が大きくなったわけではないのだ。

「私が着ているものだけど、ちゃんと着られてよかったわ」

ミュリエリアがミラに自分の装備を渡したのは、店に残っていたランポス装備がミラには大きすぎたからだ。

「あ、これお姉ちゃんのなんだ」

「ええ。そうよ」

「それで胸の所がちょっとぶかぶかなんだ」

じー。

そんな音が聞こえそうな視線でミュリエリアを見る。

彼女の女性らしい体つきに思うところがあるらしい。

「ちゃんと締めたら大丈夫よ」

ミラの視線から胸元を隠して、ミュリエリアが防具の止め具を引っ張り、ミラは「うぎゅ」と妙な声を上げた。

「後は武器だけど、今は私が使っている物しかないのよ」

そう言って、ミュリエリアは金属の1組の剣と盾を取り出した。

名前は【オデッセイ】。

【片手剣】に分類され、武器の中でちょうど真ん中くらいのランクの武器だ。

加工した余りの素材で、いつの間にかこの武器を作るのに必要な鉱石が揃っていたから作ってみたのだが、狩猟をしないミュリエリアには少しもつたいない武器だ。

最近のこの店は、専らオーダーメイドでの販売になっていて、余計な装備は置いていない。

今ミュリエリアの着ているランポス装備が、この店の唯一の特注

でない商品だ。

「だから、これは私が持つわ」

「うん、わかった」

ミュリエリアも素人同然だが、記憶喪失のミラよりはマシだろうと言っ事でミュリエリアが持つ事になった。

「じゃあ、出発しましょうか」

「うんっ」

「ミラ、この先が森丘よ」

「うん、うん」

少し緊張気味にミラが頷く。

そして、そこを越えてモンスターが来ないと言っ場所にある【ベースキャンプ】を抜けて、【森丘】に足を踏み入れた。

「わあ」

小高い丘になっているそこから眼下を見下ろしたミラの口から、自然に感嘆の声があふれた。

草に覆われた広大な大地。

きらきらと光を反射して流れる川。

遠くには木々の緑が見える。

空を鳥が舞い、草原を【アプケロス】と呼ばれる草食獣が歩いている。

「これが、世界……」

「ここでそんなに驚いたら後で大変よ。

ほら、行くわよ」

「あ、うん」

ミラは、まだぼんやりしたままミュリエリアについて行った。

………

少し歩いた所で、ミュリエリアが足を止める。

「ミラ、あれを見て」

ミュリエリアの指差した先には、大きく【2】と書かれた看板があった。

何度も修繕された跡があり、ずいぶん昔からそこにあるのだとわかる。

「あれがエリア指標よ」

【エリア指標】とは【人間】がエリアを一定の距離ごとに区切って番号を振ったものだ。

これによって、採取や狩猟の効率を良くしたり、クエストの管理をしていたと言われている。

『【エリア1】で珍しい虫がいた』とか『最近【エリア9】で重傷者が多いから低レベルのハンターは立ち入り禁止』という具合だ。

ちなみに、【進種】たちにクエストと言う概念は無い。

これは、昔の【ハンター】に相当する職業が無いというのもあるが、それ以上に【進種】が世界、自然と一体の存在だからだ。

彼らは、決して生態系に異常を与えるほどの狩猟や採取を行わない。

これは進化しても変わらない、生態系の一員と言う本能によるものだと考えられている。

似た姿になっても、管理しないと絶滅させるまで気がつかない【人間】とは違う種なのだ。

閑話休題。

【エリア指標】は【人間】の残したものだが、便利なので【進種】も変わらず使い続けている。

「もしもはぐれたら、このエリア2で待ち合わせるのよ」

「うん、わかったよ」

経験は伴わないが、外が危険な場所だと言う事はわかっている。

ミラは素直に頷いた。

「それじゃ、薬草を集めましょうか」

「うん。でも、草ばかりでわからないよ」

「薬草の生える場所は決まってるから、一度覚えたら楽になるわ」

「そうなの？」

「ええ。このエリア2で薬草が取れるのは一箇所だけね」

「そうなんだ」

「せっかくだから、自分で探してみなさい」

「はい」

返事をして、ミラは薬草を探し始めた。

ミュージエリアはしばらくそれを見守っていたが、やがて、自分も素材の採取を始めた。

しばらくして、ミラとミュリエリアは【エリア4】に来ていた。

このエリアでも薬草を見つけ、今は高台の上にいる。

ここで取れる【カラの実】や【ハリの実】からはボウガンの弾が作れるのだ。

「あ
」

ミュリエリアが短い呟きを漏らし、ミラの頭を強く押した。

採取のためにしゃがんでいたミラは、地面に倒れてしまう。

「お姉ちゃ
」

「しっ
」

抗議しようとしたミラを制して、ミュリエリアも地面に伏せる。

そこに生えていた木で体を隠しながら、【エリア3】から【エリア4】に通じる坂道を指差す。

「あ
」

ミラは、声を上げそうになって、慌てて飲み込んだ。

鶏冠が特徴的な、青い鱗に覆われた小型の肉食獣【ランポス原種】だ。

名前は同じでも、数百年の進化に隔てられた【ランポス進種】とは全くの別物である。

【人間】は猿から進化したと言うが、その二つは普通は同列に扱われない。

気にする者がいないとは言わないが、マイノリティなのは間違いない。

【原種】にとって【進種】は獲物でしかなく、逆もまた然りだ。

その【ランポス原種】が、五頭、道を駆け上がって来る。

素人二人には手に余る相手だ。

だが、来たのはそれだけでは無かった。

二メートル以上ある巨軀を頭までフルプレートアーマーで覆った人影が、その後ろから現れたのだ。

背中に、身長ほどもある大剣を背負っている。

【ハンター】だ。

【ハンター】の仲間は【ハンター】のみ。

【ハンター】は【原種】も【進種】も等しく殺す。

【ランポス原種】五頭の方がまだ可愛い相手だ。

ここで戦うことを決めたらしい【ランポス原種】が特徴的な鳴き声を上げる。

五頭が【ハンター】を中心とした円を描くように包囲する。

そして、一頭が【ハンター】に飛びかかる。

「っ！」

ミラは、今度こそ上げそうになった声を、口を抑えて何とか我慢した。

重そうな鎧を着ているにもかかわらず、【ハンター】が俊敏な動きで腕を伸ばし、

飛びかかって来た【ランポス原種】の頭を素手で握りつぶしたのだ。

かつて、【人間】はモンスターを種族名で呼んでいた。

今は、【進種】が【ハンター】を九つの分類で呼んでいる。

大剣を背負う【ハンター】は、斬り払う者【ブレイド】。

異常なほどに発達した腕を持ち、その膂力は【ティガレックス原種】の突進をも受け止める。

豪腕が、背の【大剣】を抜く。

そして、その名のごとく、【大剣】を薙ぎ払った。

【ブレイド】の背後にいた一頭だけが難を逃れ、逃げ損ねた三頭が胸を真っ二つにされた。

残った一頭も、一瞬だけ命を永らえただけに過ぎなかった。

薙ぎ払った【大剣】の軌道が、斬り上げに変わる。

発達した筋力によって、薙ぎ払った【大剣】にわずかばかりも引きずられない。

故に、一瞬。

振り上がった刀身は稲妻のごとく背後に落ち、最後の一頭を叩き斬った。

【ブレイド】が【大剣】を背中に収め、ゆっくりと辺りを見回す。

ミラとミュリエリアは必死に息を潜めた。

見つかったら、間違いなく殺される。

異常に長く感じられる時間が過ぎ

【ブレイド】は二人に気づかず、来た道に戻って行った。

「……………ぶはぁっ」

「ふう……」

詰めていた息を吐き出す。

「ああ、びつくりした。あれが、ハンター……」

「私も、実際に見るのは初めてだわ。まさか、あれほどだなんて話で聞いていたのと実際に見るのとは大違いだ。」

少しミラの気分を味わったミュリエリアだった。

「今日は、もう帰りましょうか」

「うん、そうしょ」

外は基本的に危険な場所とはいえ、

あんな化け物みたいな【ハンター】がいるのがわかっていると、さすがに平気ではいられない。

ミュリエリアが先に立ち上がり、ミラに手を差し出す。

「お姉ちゃん、ありがとう……」

手を取って立ち上がったミラの顔が引きつる。

ミラの視線は、ミュリエリアの背後にある洞窟
【エリア5】
の入り口を向いていた。

その視線を追いかけて、ミュリエリアが振り返る。

「嘘……」

呆然と眩く。

洞窟の中から、一つの影が姿を見せる。

【ランポス原種】より一回り大きな体躯、鮮やかな赤の立派な鶏冠。

【ランポス原種】の群れを率いるリーダー、【ドスランポス】だ。

大型の【原種】には劣るが、それでもそれなりの戦闘力を持っている。

一難去ってまた一難だ。

実は、さっきの【ランポス原種】達は、あの【ハンター】から逃げていたのだ。

この【エリア4】まで来たところで、逃げられない事を悟って反撃に出たが、

【ランポス原種】達は、戦闘の前に仲間を呼ぶための鳴き声を上げていたのだ。

そして、【エリア5】にいた【ドスランポス】がそれを聞いて出てきたのである。

しかし、【ブレイド】が一瞬で片を付けてしまったせいで、ミラ達だけが鉢合わせてしまった。

【ドスランポス】は状況を見て、至極まっとうな判断をした。

すなわち、ミラとミュリエリアが群れの仲間を殺したという勘違いだ。

【ドスランポス】が怒りの声を上げる。

ミュリエリアはそれを聞いて、はっと我に返った。

「ミラ！ 逃げるわよ！」

「あ、うんっ」

身を翻して、高台の上から飛び降りる。

だが、高台から飛び降りた衝撃で動きが止まってしまっ

その間に、【ドスランポス】は2人の頭上を飛び越えて回り込んだ。

（戦っしか、無いわね）

退路を断たれて、ミュリエリアは覚悟を決めた。

腰の後ろに差していた【オデッセイ】を抜刀する。

「お、お姉ちゃん……」

「大丈夫よ、下がっていて」

ミラを下がらせて、背後に庇う。

「ミラ、合図をしたら目を閉じなさい」

「え？」

「いいわね」

「う、うん」

念を押されて、ミラは頷いた。

ミュリエリアは自分の力量をよく弁えている。

初めから、【ドスランポス】とやりあうつもりなど全く無い。

【オデッセイ】を構えたまま、盾を持っている右手をアイテムポ
ーチに伸ばす。

だが、その隙を逃さず、【ドスランポス】が動いた。

踏み込みながら、ミュリエリアに噛み付く。

「っ！」

ミュリエリアが盾をかざして、何とか防ぐ。

「1Jのっ」

盾でガードしたまま、剣を横に凧ぐが、【ドスランポス】はバックステップでそれを躲した。

ミュリエリアは距離を詰めながら斬り下ろす。

【ドスランポス】はこれもバックステップで躲す。

そして、反撃に出る。

飛び退いたその足で、ミュリエリアに飛びかかった。

「きゃあっ」

ミュリエリアは反応できずに吹き飛ばされてしまう。

【オデッセイ】がミュリエリアの手から落ちて地面に転がった。

「お姉ちゃん！」

ミラが悲鳴のような声を上げる。

何とか起き上がったミュリエリアに、【ドスランポス】が喰いつく。

ミュリエリアは横に身体を投げ出して牙から逃れる。

だが、起き上がるのに失敗して尻餅をついてしまった。

【ドスランポス】がミュージエリアに狙いを定める。

今にも飛びかかろうとしているのが、ミラからはつきり見えた。

「ダメっ」

ミラは思わず飛び出していた。

【ドスランポス】に向かって走りながら、落ちていた【オデッセイ】を拾う。

「やあああっ！」

勢いよく踏み切り、ジャンプしながら斬り下ろす。

真横からの攻撃に反応できなかった【ドスランポス】の背中を【オデッセイ】の刃が捉えた。

鱗と皮膚が裂けて、血が舞う。

ミラはそれを怖いとも何とも思わなかった。

それは、今もなお受け継がれる弱肉強食の世界を生きる物の本能かもしれないし、ミラの過去に関係があるのかもしれない。

ただ、今確かにわかるのは、自分が戦えると言う事だ。

【オデッセイ】を握った瞬間、それを使ってどう戦えばいいのかが自然に頭の中に浮かんだ。

【ドスランポス】がミラに向き直り、鋭い爪で引っかいて来る。

ミラは、盾を使って爪の攻撃を横に捌き、斜めに斬り上げ、斬り下ろす。

鱗の無い胸に、深い傷が刻まれ、【ドスランポス】が後退する。

ミラは再びジャンプ斬りで追撃をかけるが、これは躲される。

「まだ！」

流れるような動きで、身体を回転させる。

反時計回りの回転斬りが【ドスランポス】の頭の左側を抉る。

【オデッセイ】の刃は、【ドスランポス】の左目を完全に潰していた。

痛みに悶え、血を撒き散らしながらギャァギャァと叫ぶ。

かなりの深手。

だが、まだ致命傷には至らない。

属性も無い【片手剣】ではそもそも決定力不足なのだ。

優勢に見えるが、ミラも（少なくとも記憶喪失になってからは）初めての戦いだ。

余裕など、欠片も無い。

このまま死に物狂いの戦いを続けられたら、どちらが生き残るかなど予想もつかなかった。

(負けられない。お姉ちゃんだっているんだから……!)

ミラは【オデッセイ】を構え直し　その時、ミュリエリアの聲が響いた。

「ミラ！　目を閉じて！」

目の前には怒り狂った【ドスランポス】。

この状況で視界を閉ざすなど、ほとんど自殺行為だ。

だが、ミラはミュリエリアを信じた。

ミラが目を閉じ、次の瞬間、白い閃光が昼をさらなる眩さで照らす。

ミュリエリアが【閃光玉】を使ったのだ。

【ドスランポス】は閃光に目を焼かれ、その場でふらつく。

「ミラ！」

「っん！」

ミラとミュリエリアは【ドスランポス】をその場に残して一目散

に逃げ出した。

その日の夜。

ミラはベッドの上でぼんやりと天井を見上げていた。

思い出すのは、【ドスランポス】と対峙した時の事。

【片手剣】の立ち回りが、頭に浮かんで、思い通りに体が動いた。

まるで、頭にも身体にも刷り込まれているみたいだった。

(……私って、本当に何なんだろう)

自分が、そんなに戦えるだなんて思っていなかった。

今の自分と昔居たかもしれない自分の差異に、どうしても不安を感じる。

(こんな風に思つのなら、何も思い出さなかったらいいのに……)

その時、ミラの部屋のドアがノックされた。

「ミラ？ まだ起きている？」

「お姉ちゃん？ 起きてるよ。どっぞぞ」

ベッドから起き上がりながら応える。

ドアを開けて、ミュリエリアが入って来た。

「どうしたの？」

「ちょっと話がしたくて。今日の事」

「あ、うん……」

ミラが身を強張らせる。

何を言われるのだろうか、不安だけが胸に満ちた。

「ミラ、ありがとう」

だから、本当にその言葉は意外だった。

「え？」

「ミラがいなかったら、私はあそこで殺されていたわ。

色々あったから、お礼を言うのが遅くなっごめんなさい」

「お姉ちゃん……怖くないの？ 私のこと」

「どうして？」

「だって、あんな風に戦えるし」

「ミラ、そんな事を気にしていたの？」

「そんな事って……」

真剣に悩んでいた事をそんな事で片付けられて、ミラが膨れる。

そんな妹の様子を見て、ミュリエリアはくすりと笑った。

「この世界では、私みたいに戦えない方が珍しいのよ。知っているでしょう？」

「あ……」

ミラははっとなる。

【進種】には、昔のハンターに対応する職業は無い。

これは、狩りという物が当たり前に生活の一部だからだ。

家を持たずに自然の中に生きる者も多くいるし、

集落を形成していても、食べ物が無くなれば狩りに行くし、素材が欲しくても当然狩りに行く。

基本は自然からの調達であり、【人間】のように分業し、商業が成り立っているのは、

【ランポス進種】 【ギアノス進種】 【ゲネポス進種】 【イーオス進種】 くらいのものだ（逆に言えば、個として脆弱な彼らはそうしなければ生き残れなかったのだが）。

大半の【進種】は今でも日々戦いながら生きている。

それ故に、力の上下はあっても、ほとんど全員が戦える者なのだ。

【ドスランポス】と渡り合える位の技量の持ち主など、掃いて捨てるほどいる。

その程度の方では、恐怖の対象になどなりはしない。

今まで【ランポス進種】の村にいたせいで、それをすっかり忘れていた。

「それに、もしもミラがどんな力を持っていても、私は怖がったりしないわ。

だって、ミラは私を守ろうとしてくれたもの。

それは、ミラは優しい子って事よ。だから、私は怖くないの」

「だからね、ミラ」と続ける。

「自分の過去を思い出すことから逃げてはダメよ。

ただ恐れるだけでは、決して前には進めないの。

知ることから逃げて、知らないことに脅えていたら、ミラは幸せになれないわ」

「お姉ちゃん……」。

でも、やっぱり怖いよ。

私、自分が怖い」

「大丈夫よ。」

ミラが何者でも、どんな力を持っていても、ミラの心があるから大丈夫」

「私の、心」

「そう、心。」

ミラが優しい心をなくさないなら、どんな大きな力も、危険な力じゃないわ」

「お姉ちゃん……」

胸の中の不安が消えて、何か暖かいもので満たされていくのを感じる。

ミュリエリアがいてくれるなら、どんな事にも向き合える、そんな気がした。

「ありがとう。私、頑張ってみるね」

「ええ、信じているわ」

「うんっ」

ミラはミュリエリアにぎゅっと抱きついた。

「甘えん坊ね」と苦笑して、ミュリエリアが優しく頭を撫でる。

その心地よい感触に身を委ねながら、ミラは自分を助けてくれたのがミュリエリアだったことに改めて感謝するのだった。

N E X T > 第三話「森丘の逃走劇」

第二話「初めての世界」(後書き)

相変わらず導入部です。

第三話「森丘の逃走劇」

【工房・ミュリエリア】。

店主の高い技術と行き届いたサービスで、結構有名な店だ。

当初は雑貨屋だったが、今では装備の作成がメインになっている。

注文してからしばらく時間がかかるが、客にあった質のいい装備を作ってくれる。

噂を聞いて遠くから訪れる客もいれば、何度も通うリピーターも多い。

今日もまた、ミュリエリアの技術を目当てに、お客さんがやってくる。

MONSTER HUNTER EVOLVE

第三話「森丘の逃走劇」

【森丘】で【ドスランポス】と戦った日から数日が過ぎた朝。

ミラはミュリエリアの作業場を訪れた。

作業していたミュリエリアがミラに気づいて顔を向ける。

「ミラ、どうしたの？」

「うん、ちょっとお願いがあるんだけど」

「何？」

「ここにある武器を触ってみてもいい？」

「武器を？」

ミュリエリアは少し不思議そうな顔をしたが、すぐに頷いた。

「ええ、いいわよ。でも、そっちにあるのはまだ途中だから触らないで」

「うん。ありがとう」

ミラは、完成している武器が並んでいる一角に向かう。

ミュリエリアが作り、持ち主の手に渡るのを待っている武器たちだ。

【大剣】 【太刀】 【片手剣】 【双剣】 【ハンマー】 【狩猟笛】 【ランス】 【ガンランス】 【ボウガン】 【弓】。

一通り全ての種類の武器が揃っているようだった。

ミュリエリア、作ることにかけてはとことん万能な少女である。

「んっ、よし」

ミラは、覚悟を決めて手を伸ばし、【大剣】を掴んだ。

その瞬間、【大剣】の使い方が頭の中に次々に浮かんでくる。

昨日、【オデッセイ】を持った時と同じだった。

次々に他の武器にも触れていく。

(やっぱり……わかる。私は、これを使える)

その全ての武器の使い方を、ミラは知っていた。

これを確認するために、ミラは武器を見に来たのだ。

失った記憶を取り戻すには、少しずつでも情報を得なければいけない。

それは、怖いことだけど、ミュリエリアの言葉がミラの背中を押してくれていた。

(過去から逃げないって、約束したから)

さて、これで一つのこと明らかになった。

どうやら、ミラはあらゆる武器の使い方を知っているらしい。

だが、そうなるともた疑問が生まれる。

それは、なぜ？

考えられる可能性に【進種】の能力がある。

現在までに確認されている【進種】は、

【ランポス進種】

【ギアノス進種】

【ゲネポス進種】

【イーオス進種】

【ランゴスタ進種】

【アイルー進種】

【クツク進種】

【ガルルガ進種】

【ゲリヨス進種】

【ザミ進種（ザ族・ギ族）】

- 【ガノトトス進種】
- 【ヴォルガノス進種】
- 【フルフル進種】
- 【リオス進種】
- 【グラビモス（バサルモス）進種】
- 【ナルガクルガ進種】
- 【ティガレックス進種】
- 【ラージャン進種】
- 【ブロス進種（モノ族・ディア族）】
- 【アカムトルム進種】
- 【ウカムルバス進種】
- 【麒麟進種】
- 【クシャルダオラ進種】
- 【テスカト進種】
- 【オオナズチ進種】

以上の二十五種類だ。

後は、進化の道を選ばなかったり、【エスピナス】や【アクラ・ヴァシム】のように絶滅してしまった種もいる。

そして、【進種】の中にそんな能力の持ち主はいない。

そもそも、【進種】の能力はモンスターの姿だった頃の名残だ。

元々武器を使っていなかったのだから、そんな能力があるはずがない。

【黒龍】 【紅龍】と呼ばれる伝説の龍もいると言われているが、これはその通称だけしか伝わっておらず、实在すら怪しい存在だ。

そんな存在について考えてもしかたないし、考えようもない。

(それじゃ、昔の私が武器マニアだったとか?)

何となく嫌な想像だが、可能性としてはまだありそうだ。

普通は一つの武器を極めるものだが、広く浅く使う者も確かに存在している。

もちろん、全てをそれなりに使いこなすとなるとかなり珍しいのだが。

(うーん、今はこんなところかなあ)

明らかに情報不足で、これ以上はわかりそうになかった。

(でも、一步前進、だよね)

それが、今のミラの偽らざる本心だった。

切羽詰って過去を求めるほど焦ってもいないし、思い出すことがただ怖いのではない。

あるがままにゆっくり受け入れていくつもりだ。

精神的にはかなりいい状態だと言えるだろう。

その時、店のほうで呼び出しのベルが鳴るのが聞こえた。

「あ、お客さんだ」

「そのようね。ミラ、出てくれる?」

「うん」

ミラはミュージエリアに店番の仕事を教えて貰っていた。

アイテムの販売くらいならミラだけで対応できるようになっている。

ミラは、頷いて作業場から店の方に移動した。

店の部分はかなり狭く、アイテムの並んでいる棚と通りに面しているカウンターの間に一人が通れるくらいの幅があるだけだった。

店と言うよりは、販売スペースくらいの言葉が似合う。

ちなみに、ミュージエリアの家は二階が居住区。

一階にキッチン、作業場、販売スペースがある。

「えっと、いらっしやいませー」

にっこりと笑顔を浮かべて客に挨拶する。

「誰だ、お前？」

訝しげな声が返ってきた。

店先に立っていたのは、大剣を背負った青年だった。

暗紫色の短い髪をツンツンと逆立てて、黄色い鋭い目でミラを睨んでいた。

【ガルルガSシリーズ】と呼ばれる装備を身につけているが、【胸装備】は少し改造してあって首を覆う襟巻きのようなパーツがついている。

おそらくミュージエリアの作品だろう。

「ここはミュージエリアの店だろ。」

何でお前みたいながきが出てくるんだ」

「ガキって……」

むっとなったミラだが、相手はお客様。ぐっ和我慢する。

「私は、この店のお手伝いをしている、ミラって言います」

「手伝いねえ。役に立ってるんだか」

(な、何この人!?)

内心で怒りを募らせながらも、お客様は神様と自分に言い聞かせて、営業スマイルを作る。

「あの、それで、何の御用ですか？」

ミラが聞くと、青年は大剣の柄をとんとんと叩いた。

「こいつを見て貰いに来たんだ。見りゃわかるだろ」

「わからないから聞いたんですけど……」

「あ？ 何か言ったか？」

「いーえ、何も」

アイテムを売る事はできるが、装備の事になるとミラの手には負えない。

「お姉………ミューリイさんをお願いしますから、ちょっと待っていて下さい」

「さっさとしてくれよ」

「わかってますっ」

(うー、感じ悪いっ)

ぷりぷりしながら作業場に入る。

「お姉ちゃん、お客さんだよ。剣を見て欲しいって」

「装備の調整ね。どんな人だった？」

作業台から立ち上がり、壁際の棚の引き出しを開けながらミュリエリアが聞く。

「えーと、目つきと口が悪くて偉そうな男の人だったよ」

言っている間にまた腹が立ってきた。

店先で営業していただけなのに、悪口ばかり言われた気がする。

「何でいきなりイジワル言うんだろ」

ぶくつと頬を膨らませて文句を言った。

引き出しの中を探しながら、ミュリエリアはくすりと笑う。

「それはエンダね。取っ付き難いけれど、悪い人じゃないのよ」

「えー、本当？」

「ミラにもいつかわかるわ。あ、これね」

引き出しから、一枚の紙を取り出す。

ミュリエリアが作った装備の覚え書きだ。

「それじゃあ、エンダを呼んできてくれる？」

「えー」

「そんなに膨れないの」

ミュリエリアがミラの頬を突つつく。

「私もちゃんと言ってあげるから、ね」

「……はい」

ミラはしぶしぶ頷いて、店に戻って行った。

……

店先に戻ると、青年 エンダと言っらしい はカウンターに
腰掛けていた。

「あの、エンダさん？」

「お、さっきのガキ」

「ミラですっ。お姉ちゃんが呼んでるから、そっちのドアから入っ

て下さい！」

やっぱり悪い人にしか思えない。

ミラは言うだけ言うと、さっさと中に引っ込んだ。

残されたエンダは「お姉ちゃん？」と不思議そうに呟きながら、工房の中に入って行った。

.....

作業場に入り、ミュリエリアと顔を合わせたエンダは片手を上げて挨拶する。

「よう、ミューリィ。元気そうだな」

「ええ、久しぶりね」

ミュリエリアを愛称で呼んでいるのを見ると、それなりに親しい関係らしい。

「で、そのガキは何なんだ？」

そう言ったとたん、ミュリエリアにじろりと睨まれる。

「ミラは大切な妹よ。意味も無く悪く言わないで」

「うっ……わ、悪い」

「私に言うてどうするのよ」

「そ、そうだな」

エンダはミラの方を向く。

「あー、なんだ、悪かったな」

「別に、いいですけど……」

一応謝ってくれるあたり、確かに悪い人ではないのかも知れない。

残念ながら、ミラの中では「この人に謝らせるお姉ちゃんって凄い」とミュリエリアの株が上がった方が大きかったりするのだが。

「ミラ。この人はガルルガ進種のエンダ。この店の常連なのよ。そして、この子が私の妹のミラよ」

ミュリエリアが改めて二人を紹介する。

「お前の妹？ 妹なんていたのか？」

「ちょっと事情があつて、家に住んでるの。血は繋がってないけど、一緒に暮らしてるのだから、大切な家族よ」

「へえ、そうなのか」

「さあ、それじゃあ用件を聞かせてもらおうかしら。確か、剣を見て欲しいのよね？」

紹介が終わり、ミュリエリアが仕事の話 시작했다。

「ああ、こいつを見てもらいたいんだ」

背中から外した【大剣】を作業台の上に置く。

金属と竜の爪から作られる【アッパーブレイズ】という【大剣】だ。

ミュリエリアはそれを一目見るなり苦い顔になった。

「……エンダ。あなた、一体何をしたのよ」

刀身に爪のような刃が並ぶ痛そうな形状が特徴なのだが、その先端の爪が欠けてしまっていた。

「実は、この前火山でピツケル代わりに使ってたら折れちゃったんだよな」

「ピツケルって……」

ミラとミュリエリアが思わず絶句する。

各【エリア】には鉱石を採掘できるポイントがいくつかあるが、鉱石の眠っている岩は非常に硬い。

あんまり硬くて、採掘に持って行ったピツケルはたいてい持って帰れない程だ。

「何考えてるのよ！ そんな事したら壊れるに決まってるでしょー！」

作業台に手をついて、ミュリエリアが怒鳴る。

自分が丹精込めて作った武器を本来とは違う用途で壊されたのだから、仕方ないだろう。

「欲しい鉱石があったんだからしかたねえだろ」

「少しも仕方なくないわよ！ はあ……」

ため息をついて椅子に座る。

「それで、これをどうすればいいの？」

「こいつがないと困るからな。できるだけ早く直してもらいたいんだけど」

「そうね……」

【アップブレイズ】を眺める。

「欠けた部分を刃の形に削って研ぎ直すのが簡単ではあるわね。一時間位で終わると思うわ。でも、この部分の牙が小さくなってしまっわよ」

「その位気にしねえよ。今からやってくれんのか？」

「ええ、いいわよ。あ、今日はちゃんとお金を持ってるんでしょっわね？」

「この台詞にはミラが驚いた。」

「え？ エンダさん、お金を払わないんですか？」

ミラの中のエンダの評価がまた下がってしまった。

「この前偶々忘れたただけだろうが。今日はちゃんと素材を持ってきた」

「ここではお金(ゼニー)を使うのよ。作業している間に換金して来なさい」

「へいへい、わかってるよ。そんじゃ、頼むからな」

エンダが作業場を出て行く。

「そっか。外はお金を使わないんだっけ」

「ええ、外の人にはあまり馴染みがないみたいね」

ミラの言葉に、ミュリエリアが頷く。

ここで、この世界の経済活動について説明をしておかないといけないだろう。

この世界には、定まった住居を構えずに放浪し続ける者がかなりの数存在する。

彼らは、必要な物をそのつど狩って生活をしているのだが、やはりそれだけでは無理がある。

装備を整えたり、アイテムを買ったりする必要がどうしても出てくるのだ。

そういう時、彼らは近くにある集落に向かう。

商売をしているのは主に【ランポス進種】【ギアノス進種】【ゲネポス進種】【イーオス進種】の四種族。

この四種族は、世界のあらゆる場所にうまく散って住んでいるため、割とどこにでも集落が存在する。

この集落の中では通貨が流通しているのだが、放浪している者は当然それを持っていない。

クエストも存在しないから、金を得る手段がないのだ。

そんな人のために、どの村にも素材とお金を取引する素材屋が存在する。

そこで換金して、集落の中で買い物をするというわけだ。

もちろん、個人的に仕事を引き受けたり、村で働いてお金を得る者もいる。

微妙なシステムではあるのだが、一応それで世界は回っている。

ついでに言えば、お金を持っていくと素材屋で素材を買うこともできるのだが。

「それにしても、こんな壊れ方始めてだわ」

「ピッケル代わりだもんね……」

「後先考えないのは、エンダの欠点なのよ」

やれやれと肩をすくめる。

その時、作業場のドアが開いた。

「早かったのね」

ミュリエリアが声をかける、が。

「あ、あの一」

「あじ？」

そこには、エンダとは似ても似つかない小さな少年が立っていた。

緑色の髪の毛の下で、丸っこい黄色い瞳が不安そうに見つめていた。

身につけているのは、布製の服で、防具ではなかった。

「えっと、お客さま、かな？」

「は、はい。そうですっ」

近くにいたミラが聞くと、少年は勢いよく頷く。

「僕はラキって言います。あの、これを直して下さい!」

そう言って差し出した手には、小さな装身具が載っていた。

「これって、ピアス?」

それは、何かの牙を飾りにつかったピアスだった。

「ピアス?」

ミュリエリアが近寄ってきて、ラキの手の中を覗き込んだ。

そして、驚きの声を上げる。

「これ、護りのピアスだね。かなり貴重なものよ」

「護りのピアス?」

「ええ。スキルを目的にした防具よ。だから、今では誰も作ってないの」

以前にも触れたが、竜たちは世界と共に生きていた。

彼らは世界と一体の存在であり、その身には世界からの恩恵を受けている。

そして、その恩恵は死んだ後の体にも僅かに残される。

【スキル】というのは、その素材を身につける事で、【人間】が受けることのできる世界の恩恵のことだ。

これによって、特定の行動を加速させたり、疲れにくくなったり、遠くにいる竜の気配を感じたりする事ができたと言われている。

言われている、と言うのは、【進種】は【スキル】を発動させることができないからだ。

【進種】は今でも世界と共に生きる存在であり、その存在が既に恩恵を受けている。

故に、他の抜け殻を纏ったところで、元来の力に打ち消されてしまふのだ。

そんなわけで、【スキル】を目的とした装備品は作られることなく、今では貴重な骨董品だ。

ミュリエリアも好奇心から作ろうとした事があったのだが、その製作のノウハウは既に失われてしまっていた。

「これをどこで手に入れたの？」

「あの、僕のお母さんが持ってたんです。お母さんもお母さんから貰ったって言ってました」

「そうだったの」

珍しいから代々受け継いでいっているのだろうか。

「僕がすっかり踏んづけてしまって……。あの、これ、直せますか？」

「お姉ちゃん……」

珍しい物だと聞かされて、ラキの顔色が悪くなっている。

ミラも不安そうにミュリエリアの表情を窺った。

「大丈夫、直るわよ。耳につける部分の金具が壊れてるだけだから、それを取り替えるだけでいいわ」

「本当ですか!？」

「ええ。今は他の仕事を先に頼まれてるから、ちょっと待ってもらうけどいいかしら?」

「ええと、夕方までなら」

「それなら大丈夫ね。お昼までに終わらせるわ」

「はい。よろしくお願いします」

ラキがぺこりと頭を下げた。

ミュリエリアが【アップブレイズ】の修理を始めて少し時間がたった。

エ نداは、何をしているのかまだ帰ってこない。

ミラとラキは、作業場にある長椅子に座って、他愛の無いおしゃべりに興じていた。

ふと気がつくのと、ミラの隣に座っているラキの頭がふらふらと揺れている。

「ラキくん？ 眠いの？」

「……うん」

ミラが聞くと、消えそうな声が返ってきた。

「それなら寝てていいよ。修理が終わったら起こして上げる」

「……いいんですか？」

「うん」

おずおずと尋ねるラキに、ミラが頷く。

それで糸が切れたらしい。

ラキは、かくっと頂垂れるみたいに眠ってしまった。

ミラは、少し考えて、ラキの頭を自分の膝に乗せた。

「そっしてると、ミラもお姉さんね」

「えへへ」

様子を見ていたミュリエリアの言葉に、照れたように笑う。

「今度、ミラにもしてあげようかしら？」

「えっ？ ……恥ずかしいよ」

「ふふ、残念」

ミュリエリアは楽しそうに笑って、作業に戻った。

ちょうどその時、ドアが開いて、エンダが作業場に入ってくる。

「金作ってきたぞ……ん？ 何でガキが増えてんだ？」

「「しいー」」

ミラとミュリエリアが、唇に人差し指を当てながらステレオで囁く。

「寝てるんだから、静かにして下さい」

「何で俺が気をつかわなきゃいけないんだよ。起きるんなら勝手に起きろってんだ」

「こんな小さい子に何て事言っんですか！」

「メスガキ。お前の方が煩いぞ」

「メスガキって……」

【進種】なのだから雄雌で間違っではないのだが、一般的には男女だ。

「ガキが増えたから、お前がメスガキだ」

「だからミラですってば！」

「……ミラ、起きてしまっわよ」

「う……」

ミュリエリアに指摘され、口ごもる。

思い返してみると、エンダは口調は乱暴だったが、ちゃんと声量は落としていた。

「それにしても、人の店で寝るとは凶々しい奴だな」

「きつと疲れてたのね。どこから来たのかはわからないけど、子供が1人でここまで来るのは大変だったはずよ」

「そう言えば、ラキ君は外から来たんだっけ」

外から来たということは、多かれ少なかれモンスターのいる地で1人で抜けて来たということだ。

「外の子って逞しいなあ」

眠っているラキの髪の毛を撫でる。

「……寝てる奴を見ると、悪戯したくなるよな」

エンダがぼそつと物騒な事を呟く。

「止めてください」

ミラが止めるが、この男が人の言うことを聞くはずが無い。

エンダは、にやりと笑い

「……!!」

【音爆弾】でも炸裂させたような大きな音が響く。

「きゃっ」

「ひゃうー!!」

ミュリエリアが【アップパーブレイズ】を磨いていた【砥石】を取り落とし、ミラは目を白黒させながら耳を押さえる。

だが、ラキの反応は二人の比ではない。

「わあああぁっ」と悲鳴を上げながら飛び起き、そのまま一目散に外に飛び出してしまった。

「」「」……「」「」

気まずい沈黙。

やがて、エンダがポツリと呟く。

「やっちまったぜ」

そして、大騒ぎになった。

「私、追いかけてくる！」

ミラが立ち上がり、ラキを追いかけて外に飛び出していく。

「俺も！」

続いてエンダも立ち上がるが、ミュリエリアが「待って」と止めた。

「外に行ったかもしれないわ。これを持っていきなさい」

磨いていた【アツパーブレイズ】を差し出す。

「直ったのか？」

「使えないものは渡さないわよ」

「よっしゃ」

「それと、売り物でいいから、ミラにも持って行って」

「わかった！」

「ラキ君！ どこにいるのー？」

ミュリエリアの工房を飛び出したミラは、村の中で声をあげた。

「ラキくん！」

名前を呼びながら走っていると、村長が声をかけてくる。

「ミラちゃん、どうしたんだい？」

「あ、ドスのおじさん。ラキ君、小さな男の子を見ませんでしたか？ 外から来た子なんですけど」

「ああ、それなら森丘の方に走って行ったよ。何かあったのかい？」

「森丘！？ おじさん、ごめんなさい！ 話は後で！」

「え、ミラちゃん？」

戸惑った声を上げる村長を残して、ミラは【森丘】へと駆け出した。

【森丘】の【ベースキャンプ】。

この先には、弱肉強食の外の世界が広がっている。

ミラの脳裏を、【ハンター】と【ドスランポス】の姿が過ぎる。

正直言っ、怖い。

でも……

(ただ恐れるだけじゃ、前には進めない)

もしかしたら、今この時にもラキが危ない目にあっているかもしれない。

(守ってあげたい。これが、私の心。そうだよ、お姉ちゃん)

「よしっ」

心を決めて、ミラは【森丘】に再び足を踏み入れた。

「ラキ君！ ラキくん！」

ミラは、ラキを探して【エリア10】に来ていた。

木々が鬱蒼と生い茂って太陽を隠し、昼でも視界が悪い。

ここにある湖には、よく【飛竜】が水を飲みに来るのだが、幸い今はいないようだった。

「ラキ君、いたら返事をしてー！」

そう言いながら、背の高い草を掻き分けた時、何かがミラの足を掴んだ。

「きゃあぁっ！」

悲鳴を上げながら、闇雲に足を振る。

「痛、あ痛！ ミラさん、僕です！」

「あ、あれ？ ラキ君？」

よく見ると、ミラの足を掴んでいたのは探していたラキだった。

地面に腹ばいになっているせいで、足しか掴む所がなかったようだ。

「あー、びっくりしたなあ。何してるの？」

「ランポスに見つかってしまって、隠れてるんです」

「ランポスに？」

「だから、ミラさんも……あ、まずい」

急に、ラキが慌て始める。

「ど、どうしたの？」

「足音が近づいて来る……見つかったんだ」

「え？」

ミラも、耳を澄ませてみる。

「……何も聞こえないよ？」

「でも、僕には聞こえるんです」

「ラキ君って、もしかしてクック進種？」

ラキが頷く。

「そっか。それなら聞こえるね」

ミラは納得したように頷いた。

【クック進種】の能力は【超聴覚】。

他の種族とは比べ物にならないほど耳がいいのだ。

遠くの音、小さい音を聞くのはもちろん、音を聞き分けるのも得

意で、老年になるころには音だけではあらゆる事を判断できるように
なるとも言われている。

それなら、ミラに聞こえない音を聞いていても不思議ではない。

「早く逃げましょう」

「そうだね。どっちから来てるの？」

「あっちからです」

ラキが示したのは、【エリア8】の方だった。

「それじゃ……」

ミラは少し考える。

【エリア10】に隣接しているのは、3、8、11の3つのエリ
アだ。

だが、【エリア8】には【ランポス原種】がいるし、【エリア1
1】の先は行き止まりだ

「エリア3に行くしかないね」

「そうですね」

「よし、行いじい」

「はい」

隠れていた草むらから出て、走り出した。

しばらく走っていると、【エリア3】の【エリア指標】が見える。

「ラキ君、ランポスは？」

「えっと、後ろから追いかけて来てるの……あ、あっちからも足音がします！」

「エリア4もダメかあ。」

でも、帰り道ならエリア2の方が近いし、そっちに行くよ！」

「はいっ」

【エリア3】を出て、【エリア2】へ。

ミラは、そこで足を止めた。

いや、止めざるをえなかった

「ドスランポス……」

【エリア2】の真ん中に、【ドスランポス】が立っていた。

しかも、ただの【ドスランポス】ではない。

左目の潰れた、隻眼の【ドスランポス】だ。

数日前にミラが戦い、手傷を負わせた【ドスランポス】である。

【ドスランポス】の残された瞳が、激しい怒りに燃えているように見えた。

さらに、退路を断つように【ランポス原種】の集団が姿を見せた。

(まさか、ここに追い込まれたの?)

思わず腰に手をやったが、武器はもちろん、アイテムポーチすら持っていない。

武器も防具もアイテムも無い。

八方塞がりの絶体絶命だった。

「あれ？」

ラクが、耳に手を当てる。

「ミラさん、何か来ます！」

「また!？」

「ガチャガチャって、これ………装備の音ですよ！」

その言葉が終わるか終わらないかのタイミングで、声がする。

「ガキ二人！生きてんな!？」

「エンダさん！」

【エリア1】の方から、エンダが走って来た。

背中に二本くくりつけてある【大剣】がガチャガチャと音を立てていた。

「どげよー！」

【アツパーブレイズ】を抜刀して、薙ぎ払う。

【ランポス原種】の包囲の輪の一部が崩れて、エンダとミラたちは合流した。

「このアホガキ！ 武器も持たずに出て行ってどろするつもりだったんだ！」

「急いでたんだから仕方ないでしょー！」

「つたく、ほら、これ使え」

エンダが、【大剣】を外してミラに渡した。

「これって……」

「売もんだ。大事に使えよ」

白く透き通った水晶のような刃を持つ両刃の【大剣】。

ミュリエリアのオリジナル武器【水晶剣【純】】だ。

「お姉ちゃんの、剣だ」

「受け取って、柄を握る。」

「何だか、ミュリエリアの温もりが伝わってくる気がした。」

「おい、メスガキ」

「何ですか？」

「大量の雑魚と大物一頭。どっちがいい」

「……私は」

「ミラは、正面に立つ隻眼の【ドスランポス】を見た。」

「私が、ドスランポスと戦います」

「特に理由はない。何となくだ。」

「ただ何となく、ミラ自身が決着をつけないければならない気がした。」

「そうか」

「エンダは何も聞かずに頷き、ラキを自分の傍に引き寄せた。」

「このガキは俺が見ておいてやる。やって来い」

「はい」

ミラは頷き、走って少し離れた場所まで移動する。

【ドスランポス】が、その後を追う。

ついでに行こうとした【ランポス原種】はエンダが【アッパーブレイズ】を振って牽制する。

邪魔された【ランポス原種】は、先にエンダを獲物に定めた。

エンダとラキを包囲して、ギャアギャアと鳴き声を浴びせる。

ラキが身体を震わせて、エンダに縋り付く。

「心配すんな。所詮雑魚だ」

エンダが自信満々に言い放つ。

【ランポス原種】が二頭、前後から同時に飛びかかった。

「甘いつての。おい、ガキ！ 耳塞いでろ！」

「え、は、はい！」

何だかよくわからないまま、指示に従って耳を塞ぐ。

エンダは大きく口を開き、

「……！！」

喉の奥から独特の音が響き渡った。

【ガルルガ進種】の持つ能力、咆哮だ。

その声は、至近で浴びた者の聴覚を麻痺させ、平衡感覚を狂わせる。

飛びかかっていた【ランポス原種】は無様に地に墜ち、他の【ランポス原種】も棒立ちになってよろめく。

エンダは、格好的になった【ランポス原種】に向かって獰猛な笑みを浮かべると、【アッパーブレイズ】を振り上げた。

ミラは、手負いの【ドスランポス】と向き合っていた。

片目を潰した相手との再戦。

今度こそ、決着がつく。そんな予感がした。

エンダの持ってきてくれた【大剣】を構える。

【ドスランポス】が鳴き声を上げる。

言葉は通じなくても、それが戦いの合図のように思えた。

「……………行くよ」

言葉を返し、動く。

【大剣】を振り上げて、縦に斬り下ろす。

だが、刀身は空を切り、地面を叩いた。

【ドスランポス】は素早くサイドステップを踏み、ミラの側面に回り込んでいる。

そこからの噛み付き攻撃。

ミラは、構え直した【水晶剣【純】】を盾代わりにしてそれを防ぐ。

防がれた【ドスランポス】が一步退き、それを追って【水晶剣【純】】が薙ぎ払われる。

【ドスランポス】はバックステップで飛び退き、【大剣】のリーチでも捕らえられない。

「このお！」

苦し紛れに縦斬りに撃いだが、それは見当外れの地面を抉っただけだった。

頭上に影。

ミラは確認もしないで、前方に飛び込みながら回転回避する。

飛びかかっていた【ドスランポス】がミラを通り過ぎて背後に下

りた。

(ダメ、落ち着かないと……)

焦ってはダメだと自分に言い聞かせる。

防具を何も身につけていない今は、一撃貰えば致命傷もありえる。

ミラは、【水晶剣【純】】を背中に背負う。

【大剣】を持ったままだと、移動速度を大きく制限されてしまうのだ。

いつでも抜刀できるように身構える。

「……！」

エンダの咆哮が、大気を引き裂いた。

次いで、【ランポス原種】の悲鳴が、断末魔の音が響く。

一瞬、【ドスランポス】の視線が逸れた。

仲間を思うが故なのか。

しかし、それは【ドスランポス】に隙を生んだ。

(今っ！)

ミラが【水晶剣【純】】の柄に手をかけながら踏み込む。

【ドスランポス】はそれを敏感に感じ取って、バックステップ。

そして、すぐさま飛びかかった。

縦斬りを外したミラの間を狙おうという魂胆だったのだろう。

だが……

【ドスランポス】の敗因は、視線を逸らしてしまったことではない。

ミラの攻撃を見極めないまま、攻撃に移ってしまったことだ。

ミラは、確かに抜刀していた。

だが、まだ振り下ろしてはいなかった。

剣を振りかぶったまま、意識を集中する。

気 生命のエネルギーのようなもの が高まり、ミラの体が
淡く光る。

【大剣】の破壊力を最大に引き出す一撃、溜め斬り。

飛びかかってしまった【ドスランポス】は、空中で止まる事も逃げることができない。

「やああっ!」

【大剣】が解き放たれる。

爆発的な破壊力を秘めた斬撃が、真正面からその身体に叩きつけられた。

.....

「はあっ、はあっ」

【水晶剣【純】】を地面に放り出して荒い息を吐く。

「私……勝った?」

実感が湧かない。だが、事実だ。

【ドスランポス】は地面に倒れて事切れている。

正面から溜め斬りを受けた頭など、見る影もなくなってしまっていた。

「何やってんだ、お前」

気がつくのと、エンダがすぐ傍に立っていた。

「エンダさん……。何って、私、ちゃんと勝ちました」

初めて仕留めたのだから、褒めてくれたって良さそうなのに、な
どと思っ。

「だからだ。勝ったんなら、やる事あるだろうが」

目の前に短いナイフが差し出される。

剥ぎ取りに使うナイフだった。

「俺達が負ければ喰われて肉になる。

俺達が勝てば、その素材を生きるために使う。

そいつの死を無駄にすんなよ」

「……はい」

頷いて、ナイフを受け取った。

【ドスランポス】の死体の傍にしゃがんで死体の状況を確認める。

素材として使ったり、商取引するためには、やはり満たさないと
いけない水準がある。

例えば、ぼろぼろの甲殻で作った鎧など、危なくて着ていられな
いからだ。

だから、それを満たす部分を探して剥ぎ取るのだが、これが意外
に少ない。

お互いに命を賭けて必死に戦うのだ。

狩りが終わった頃には、死体は傷だらけのボロボロになっている
のが当たり前なのだ。

大型の飛竜からだって、そう何度も剥ぎ取ることにはできない。
今回で言うなら、頭を持って帰っても素材には使えない。

結局、ミラは、【ドスランポス】から爪と皮を剥ぎ取った。

「これ、ありがとうございます」

ナイフをエンダに返す。

「ああ。終わったんなら帰るぞ」

「そんなに急がなくても、少し休憩させてくれてもいいじゃないですか」

ラクを探して、【ドスランポス】と戦って、ミラはかなり疲れていた。

「休憩？ 馬鹿なこと言ってんじゃねえよ」

「何が馬鹿なんですか。疲れたまま歩き回るなんて、危ないじゃないですか」

「馬鹿！ そんな格好でまた襲われたらどうすんだよ」

「へ？」

何だか、物凄く意外な言葉を聞いた気がして、聞き返した。

「あ」

「あの、もしかして私を心配して……」

「知るか！ あーもう、帰るぞ！

おい、そのクツクのガキもこっち来い！」

「あ、はい……」

エンダはそっぽを向いて歩き出す。

だが、ミラにはエンダが耳まで赤くなっているのが見えた。

(恥ずかしがってるの？)

「……おい」

「はい？」

「……意外とやるみたいだな。それなら、ミューリイの役にも立つ
だろ」

そう言って、どンドン歩いて行ってしまっ

(どうしたんだろ、急に……あ)

ミラは、あつたばかりのエンダにミューリエリアの役に立つのかと
言われたのを思い出した。

「エンダさん、もしかして私のことを認めてくれたんですか？」

「ばっ……知るかよ！」

「自分の事なのに知らないんですか？」

ラキが無邪気に痛いところを突く。

「うるさい！ 余計な事を言う暇があったらとっとと歩けよな！
急いで村に帰るぞ、ガキ！ ミラ！」

(あ……名前で呼んでくれた)

どうやら、本当に認めて貰えたらしい。

ミラは嬉しくなった。

その様子を見ていたラキがミラの服の袖を引っ張って、そっと耳打ちする。

「エンダさんみたいな人のことをツンデレって言うんですよね？」

「うーん、素直じゃない、くらいにしておこつよ」

あのエンダに随分と可愛い評価をしたものだ。

そう思って、ミラは苦笑を浮かべるのだった。

「ここらでいいだろ。俺はもう行くぜ」

村の入り口まで来た所で、エンダが足を止めた。

「一緒にお姉ちゃんの所まで行かないんですか？」

「これ以上ガキのお守りなんてしてられるかよ」

「またそんな事言つて」

「事実だろうが」

などと、ミラとエンダが言い合っているところに、ラキが口を挟む。

「あの、エンダさん」

「何だ？」

「今日は、ご迷惑をおかけしてすみません。それと、助けてくれてありがとうございますございました」

ぺこりと頭を下げる。

「別に礼なんていらねえよ」

「……………そもそも、エンダさんのせいですからね」

「へ……………」

ミラがぼそつと呟くと、エンダがたじろいだ。

どつやら、自覚はあったらしい。

「済んだことをごちゃごちゃ言うなよ。そんじゃーな」

エンダはひらひらと手を振って歩いて行ってしまった。

「あ！ もう、まだ話の途中なのに……。ラキ君はあんな風にならないでね」

「は、はい」

「それじゃ、帰ろうか。多分、ピアスの修理も終わってると思うよ」

「はい」

……

「ただい」

「ミラっ!」

工房に戻ると、凄い勢いでミュリエリアが飛び出してきた。

「まっ、」

「『まっ?』じゃないわよ！ いきなり飛び出して行って、心配したのよ」

ドアを開けるなり飛び出してきたところをみれば、ミュリエリアが心配していたのはよくわかった。

「ごめんなさい……」

「……こんなのはこれっきりにしてね」

そう言うと、ミュリエリアはミラとラキの体に目を走らせた。

「ミラもラキくんも怪我はないみたいね。良かったわ」

「すみません。僕のせいで……」

「いいのよ。悪いのはエンダだし、二人ともちゃんと帰ってきてくれたから。疲れたでしょう？ さ、中に入って」

ミュリエリアに導かれて、ミラたちは工房の中に入った。

中に入るとすぐに、ミュリエリアが作業台から何かを持って来る。

「はい、ラキ君。ご注文の品よ」

【護りのピアス】をラキに渡す。

「それでいいかしら？」

「はいっ、ちゃんと直ってます！ ありがとうございます！」

「ふふ、喜んでもらえてよかったわ。それで、代金んですけど」

「あ、はい」

「今回は無料よ」

「え？ どうしてですか？」

「実はね、恥ずかしがり屋の誰かさんにもう貰ってるのよ。びっくりさせたお詫びですって」

「エンダさんが……」

ラキとミラは驚き顔を見合わせた。

「元々金具だけなら百ゼニーもしないから、奢られてあげてくれる？」

「そうしたらいいよ、ラキ君」

「……わかりました」

ラキが頷く。

「ありがとう、ラキ君」

「いえ、「こちらこそ」？」

……

ラキは、エンダによくと言って帰っていった。

ミュージエリアとミラは、使った作業台の掃除をしている。

「ね、お姉ちゃん」

「何？」

「エンダさん、いつの間にお金を払っていったの？」

「ミラを追いかける前よ。換金してきたお金を全部置いて、『俺とあのガキの分だ』って」

「そうなんだ」

「少し余ったから、次に来た時にその分を引いてあげましょう。忘れないように、どこかにメモしておいて」

「はい」

ミラは、ちょうど片付けるところだったエンダの装備の覚え書きの隅に走り書きをした。

「んー……」

少し考えて、もう一言書き足し、それを引き出しにしまう。

そこには、こう書かれていた。

『代金超過、次回に差額を割引。意外といい人』

NEXT > 第四話「漆黒の狩人」

< 簡易キャラクター紹介 >

名前：エンダ

年齢：18

性別：男

種族：ガルルガ進種

能力：【咆哮】

名前：ラキ

年齢：10

性別：男

種族：クツク進種

能力：【超聴覚】

< オリジナル武器紹介（お遊びコーナー）。未登場は説明のみ >

名前：水晶剣【純】じゅん

分類：大剣

レア度：7

属性：なし

威力：1026

切れ味：青

会心率：5%

強化元：水晶剣【濁】

強化先：水晶剣【蒼靄】・水晶剣【虚】

不純物を含まない水晶で作られた美しい大剣。
叩くと澄んだいい音がする。

名前：水晶剣【濁】たく

硬度の高いクリスタルから作られた大剣。
技術が足りず、灰色に濁っている。

名前：水晶剣【蒼靄】そつひよう

蒼く透き通った凍気を纏う大剣。
美しさに惹かれて刀身を触ると大変な事になる。

名前：水晶剣【虚】ほ

あまりの透明度に刃があるのかすらもわからない大剣。
対峙した相手は、不可視の恐怖に切り裂かれる。

第三話「森丘の逃走劇」(後書き)

今回の話が話のテンプレです。

一話完結でゲストキャラと交流するという流れがしばらく続きます。

第四話「漆黒の狩人」

ミュリエリアの工房の裏にある空き地。

「ここは、作った武器の調整のために実際に使ってみるための場所だ。」

「試し切りをするための巻藁や試し撃ちのための的なんかがおいてある。」

「ミュリエリアは武器のを実際に使うのは苦手だから、主に客が使っていた。」

「だが、最近はこの空き地に、ミラの姿をよく見かけることができる。」

「あらゆる武器を使う事のできるミラが、ミュリエリアの代わりに武器を試しているのだ。」

「おかげで調整がやりやすくなったと、ミュリエリアは喜んでいる。」

「今日も、空き地にミラの姿があった。」

「背中には、【夜刀】【月影】。研ぎ澄まされた刃を持つ、最高レベルの【太刀】だ。」

「ふう……」

「静かに呼吸を整えて、柄を握る。」

抜刀。

斜めに振り下ろされた刃が、目の前の巻藁を一刀両断する。

切り離された藁が、ミラの足元に落ちて転がった。

「……うん」

切り口を確かめて、満足げに頷く。

「後は……」

刃を寝かせて刃先を斜め下に向ける、抜刀時の基本姿勢。

そして、刀身に深く、意識を集中させる。

すると、【夜刀【月影】】の刃が淡い赤光しゃうこうを帯びた。

気刃と呼ばれる状態だ。

要領は【大剣】の溜め斬りと同じだが、漠然と力を溜めるだけでいい【大剣】とは違い、集中して気を練り上げなければならない。

これが、練気と呼ばれるもので、これで刀身を覆った気刃状態にすることによって、切れ味と強度を増すことができる。

敵を斬っていると、勝手に練気が溜まっていくのだが、意図的に使えないうちはまだまだだ。

これができるようになって初めて、一人前の【太刀】使いと言えるだろう。

「やっ！」

気刃状態の刃を一閃。

軽く刃を振って練気を払い、鞘に戻す。

その時になって、ようやく斬られたことに気づいたかのように、巻藁がぼとりと落ちた。

「凄いわね」

「え！？」

感嘆の声を投げかけられ、ミラは驚いて振り向いた。

いつからいたのか、鞘を払った【太刀】を持ったミュリエリアが立っている。

「お姉ちゃん、見てたの？」

「ええ。凜々しくて格好良かったわよ」

「そ、そうかな？ えへへ」

照れくさそうに笑う。

「えっと、それは追加？」

「そうよ。名前は群蟲刃【雲霞】」

ミュリエリアのオリジナル武器である。

【カンタロス】や【ランゴスタ原種】とよばれる甲虫の鋭い羽が、鱗のように連なった刀身を持っていて、日光をきらきらと反射していた。

「何だか凄い名前だね」

「それらしい名前をつけるのは、職人の伝統なのよ。でも、決して名前負けはしていないと思うわ」

「当たり前だよ！ お姉ちゃんの作った武器なんだから」

「ふふ、ありがとう」

拳を握り締めて力説する妹の姿に、目を細めた。

「使ってみてもいい？」

「ええ、そのために持ってきたんだから」

ミュリエリアがミラに【群蟲刃【雲霞】】を手渡す。

「それじゃあ、やるね」

ミラは、【群蟲刃【雲霞】】を振り上げた。

ミラとミュリエリアは家の中に戻ってきていた。

作業場の椅子にミラが座り、その前にミュリエリアが膝をついている。

「少ししみるわよ」

消毒液をつけた綿で、足についた傷に触れる。

「痛っ」

「大丈夫？」

「う、うん」

涙目でミラが答える。

【群蟲刃】雲霞【】の試し切りの最中に、ミラが少し足を切ってしまった。

「うう、まさかあんな風になるなんて思わなかったよ」

「ごめんなさい。ミラなら扱えると思ったのだけど、やっぱり難しかったわね」

「武器なら何でも使えるわけじゃないんだ……」

「あの機構は一般的ではないから、昔のミラも知らなかったのかも
しれないわね」

「あ、そっか」

【群蟲刃【雲霞】】には、ある特殊な機構が組み込まれていた。

ミラはそれを使いこなせずに、自分を傷つけてしまったのだ。

「でも、また一步前進したよ」

使えない武器があるとわかることも、一つの情報だ。

「そうね。この調子で頑張りましょうか」

「うん。あ、でも、痛いのはちょっとやだなあ」

「ふふ、そうね。はい、これでいいわよ」

傷に包帯を巻き終える。

ミラは椅子から立ち上がってその場で足踏みする。

「大丈夫？」

「うん。ありがとう、お姉ちゃん」

ミラは、にっこりと笑って頷いた。

その日のお昼過ぎ。

ミラが店番をしていると、作業場からミュリエリアが顔を出した。

「ミラ、ちょっといい？」

「どうしたの？」

「荷物の配達をしてもらいたいの。沼地まで行ってもらえる？」

「配達？ そんな事もしてたの？」

「ええ。お願いしてもいい？」

「うん。もちろん」

ミュリエリアに頼りにされるのは嬉しい。

ミラは、快くミュリエリアの頼みに頷いた。

「それで、何を届ければいいの？」

「武器よ。夜刀と雲霞。あれは、二本とも同じ人の武器なの」

「あ、そうなんだ」

「あの人は、旧沼地のエリア9によくいるから、その辺りを探せば会えると思うわ」

「うん、わかったよ」

「装備は私のを貸してあげるわ。気をつけてね」

「うん。それじゃあ、準備してくるね」

村の近くに二つある【沼地】の一方。

俗に【旧沼地】と呼ばれる方の沼地にミラはいた。

「うわぁ、暗いなぁ」

【旧沼地】は濃霧に閉ざされ、昼間でも薄暗いエリアだ。

非常に視界が悪く、数メートル先もよく見えない。

ミラの装備は、最初に【森丘】に行った時と同じだ。

それにプラスして、届け物の【太刀】を2本背中に背負っている。

「えっと、ここは……」

ポーチから地図を取り出して確認する。

現在地は【ベースキャンプ】のすぐ近く【エリア2】だ。

(届ける人は、エリア9にいらんだったよね)

【エリア9】に行くには【エリア4】と【エリア5】の2通りの道がある。

距離にほとんど差は無いが、【エリア5】は少し霧の影響が少ない。

ミラは【エリア5】を経由して行くことに決め、地図をしまった。

足元が水浸しでエリア名の由来にもなっている【エリア5】を抜けて、【エリア9】に。

視界が再び濃霧に閉ざされる。

「ここでいいはずだけど」

きよろきよろと周囲を見回す。

(あっ)

霧の中に、何か大きな影が見えた。

慌てて、近くの木の陰に身を隠す。

じっと目を凝らしていると、その正体がわかった。

(シヨウゲンギザミだ)

巨大なヤドカリを思わせる甲殻種【シヨウゲンギザミ原種】だ。

鎌蟹という通称が示す通り、鎌のような鋭い爪を備える腕が特徴だ。

色々なものをヤドにして背中に背負っているが、この【シヨウゲンギザミ原種】は巨大な巻貝を背負っている。

ミラには気がついてない様子で、腕を器用に扱って餌を食べている。

今なら、逃げられそうだった。

(そーっと、そーっと)

息を潜めながら、ゆっくりと移動する。

だが

地面から、いきなり何かが飛び出して来る。

「きゃあっ!」

ミラは、思わず悲鳴を上げてしまった。

地面から飛び出してきた相手は、ニヤ、ニヤと鳴き声を上げる。

猫を二足歩行にしたような外見の獣人、【メラルー】だ。

その愛らしい見た目とは裏腹に、人を転ばせてはその荷物を奪っていく厄介なモンスターだ。

「ニヤ!」

【メラルー】は、一声鳴くと再び地面を掘って潜っていった。

その理由はすぐにわかる。

迫る足音。

濃霧の中から、【ショウグングザミ原種】が姿を見せる。

両腕を振り上げて、既に臨戦態勢だ。

さっきの悲鳴を聞きつけられてしまったらしい。

「まっ!」

短く不満を表し、腰から【オデッセイ】を抜く。

理由はどうであれ、戦わなければ生き残れない。

ここは、そういう世界だ。

【シヨウグンギザミ原種】が大きく振り上げた右腕を振り下ろす。

爪は腕の内側に折りたたまれているが、それが無くても十分に脅威だ。

ミラは、左側に転がって躲し、側面に回りこむ。

足を狙って斬り下ろすと、裂かれた殻の間から青い血がしぶいた。

【シヨウグンギザミ原種】は素早い動きでミラの側面に回り込む。

腕での薙ぎ払い。

避ける暇を与えられなかったミラは、とっさに盾を掲げた。

盾と腕がぶつかり、火花が散る。

勢いを殺しきれずに、ミラは1歩後退させられた。

【シヨウグンギザミ原種】が腕を左右に開き、抱きしめるように挟み込む。

ミラは、あえて前に身体を投げ出し、足の隙間から後方に抜けた。

振り向きの回転に合わせて、剣を横に薙ぐ。

だが、【シヨウグンギザミ原種】の背負っている巻貝に弾かれてしまう。

連続で斬りつけるが、それは巻貝の表面を浅く削るだけだ。

【シヨウグンギザミ原種】はミラの攻撃を意にも介さず、両腕を振り上げる。

(後ろにいるのに?)

そう思った瞬間、【シヨウグンギザミ原種】はその腕を左右に開いた。

そして、体ごと回転する。

「っ!」

ミラは、何とか反応して、その範囲から抜け出そうと走った。

背中ぎりぎりのところを、【シヨウグンギザミ原種】の腕が通過する。

何とか躲したと、そう思う。

だが、届かないと見るや否や、【シヨウグンギザミ原種】は折りたたんでいた爪を展開した。

鋭い爪が姿を見せ、攻撃範囲が一気に広がる。

(逃げ切れない！)

そう判断して、ミラは地面にダイブした。

爪がミラの頭上を掠めて通り過ぎる。

「あ、危なかった……」

バサ、と草むらに何かが落ちるような音がした。

そちらを見ると、草むらに【太刀】が一本落ちている。

慌てて背中に手をやると、【群蟲刃【雲霞】】が背中からなくなっていた。

ダイブした時に、爪に引っかかってしまったようだ。

(お姉ちゃんの剣が！)

ミラは【シヨウグンギザミ原種】のことも忘れて、草むらに向かう。

だが、ミラが辿り着くよりも早く、そこに辿り着いた者がいた。

「あっ、さっきの！」

それは、さっきの【メラルー】だった。

【メラルー】は【群蟲刃【雲霞】】を拾うと、引きずりながら持ち去ろうとする。

「待って！」

後を追うミラ。

だが、【メラルー】は巧みに木々を使って姿を見せない。

濃霧もあいまって、あっという間に姿を見失ってしまった。

「……盗まれちゃった。どうしよう……。」

って、あれ？ ショウグンギザミは？」

ミラは、ようやく【ショウグンギザミ原種】のことを思い出した。

辺りを見回す。

が、【ショウグンギザミ原種】の姿はどこにもない。

「いなくなってる……？」

用心しながら、さっきまでいた場所に近づいていく。

「逃げたのかな？」

（でも、そんなに傷を与えてもいなかったし……。あ、違う！）

「下！」

【シヨウグンギザミ原種】は地中からの急襲を得意とする。

それに思い至った時には、もう遅かった。

その場に潜んでいた【シヨウグンギザミ原種】の爪が、地面から突き出す。

それでも、ミラの身体は何とか反応した。

手にあった【オデッセイ】の剣を、爪に合わせる。

だが、その程度では到底受けきることなどできなかった。

【オデッセイ】が手から弾き飛ばされ、あらぬ方向へと飛んでいく。

さらに、運が悪いことに、爪が防具に覆われていない太股をばっさりと切り裂いた。

ミュリエリアが巻いてくれた包帯が千切れ飛び、ざっくりと裂けた傷口から血が溢れ出す。

地面を割って、【シヨウグンギザミ原種】が地上に出てくる。

逃げようとしても、激痛に苛まれる足に全く力が入らない。

「いた、いよ……」

勝手に涙が溢れる。

ミラの前で、【シヨウグンギザミ原種】が大きく腕を振り上げた。見開かれたミラの瞳に、鋭い爪が映る。

ズドン、と腕が振り下ろされた。

あまりの勢いに、爪が地面に刺さっている。

ミラの身体など、容易く貫くであろう一撃。

だが、その爪が貫いたのは地面だけだった。

ミラは、【シヨウグンギザミ原種】から少し離れた場所に座り込んでいた。

そして、その傍らには一人の長身の女性が立っている。

好き放題に跳ねた闇色の長い髪に、赤い瞳。

女性らしい丸みを帯びた身体を、身体にぴったりと張り付くゴム皮の鎧【ゲリヨスXシリーズ】で包んでいる。

特徴的なのは【腕装備】で、手袋だけしかなく、手首から肘まではむき出しになっていた。

だが、その部分は黒い鱗に覆われ、腕の外側に三角形に張り出している。

「ナルガ、クルガ……」

ミラが呟く。

人の姿にも古き血の系譜を残す姿。

【ブレイド刃翼】と呼ばれるその部位は、【ナルガクルガ進種】の証だ。

「大丈夫？」

「あ、はい、何とか」

足の怪我は大丈夫なんてものではなかったが、1歩間違えば死んでいたのだ。

それなら大丈夫と言うものだろう。

「良かった」

【ナルガクルガ進種】の女性が安心したように笑う。

「あの、あなたは？」

「ああ、私は」

言いかけたところで、言葉を切る。

【シヨウグンギザミ原種】が両腕を広げて突進してきたからだ。

「全く。話の途中に突っ込んでくるなんて、無粋だねえ」

そう呟くと、ミラに手を伸ばして、ひょいと抱き上げた。

いわゆるお姫様抱っこと言っちゃつた。

「え、ええ!?!」

「跳ぶよ。掴まって」

盛大にパニくるミラに告げると、【ナルガクルガ進種】の女性は【シヨウグンギザミ原種】に向けて走る。

そして、足にぐっと力を込めて、跳んだ。

重力から解き放たれたように、ミラを抱えたまま宙を舞う。

【シヨウグンギザミ原種】の爪を軽々と飛び越えて、その後ろに着地した。

【ナルガクルガ進種】の特性である【俊脚】しゆんきゃくだ。

発達した足を持ち、全【進種】の中でも随一の身軽さを誇る。

ぎりぎりの所でミラを救い出せたのも、この特性があるからこそだ。

「それ、借りるよ」

ミラを地面に下ろし、背中【夜刀】【月影】を指差す。

「でも、これは届け物で……」

「大丈夫」

「え？」

「これ、私のだから」

そう言いつと、ミラの背中に鞘を残したまま、【夜刀【月影】】を抜く。

そして、【シヨウグンギザミ原種】へと駆け出した。

(速い！)

一瞬で、距離がゼロになる。

【シヨウグンギザミ原種】は全く反応できていなかった。

地面を蹴って軽く跳躍。

そして、【シヨウグンギザミ原種】の腕の上に立ち止まった。

【シヨウグンギザミ原種】の目がぎょろりと動いて【ナルガクルガ進種】の女性を捉える。

その目に映ったのは、彼女の不敵な笑みだろう。

「遅いよ」

【夜刀【月影】】を構える。

一瞬にして気が練り上げられ、刀身が見えないほどに赤く輝く。

練気に反応して、【夜刀【月影】】のギミックが発動。

刀身に隠されていた複数の刃が、鍔の位置から展開する。

【シヨウグンギザミ原種】の腕を蹴って、跳ぶ。

気刃を纏った刃が赤い1本の軌跡を描く。

そして、その線を中心に【シヨウグンギザミ原種】の背負っていた巻貝が真つ二つになった。

上下に分割された巻貝が地面に落ちる。

ミラは、【ナルガクルガ進種】の女性の動きに見入っていた。

(あれが、本当の太刀使い……)

動きが真似られないのは種族差だから仕方がないとしても、

気の使い方だけでも、とてもミラの及ぶところではない。

使い方を知識で覚えていても、本当に自分のものにはできていない。

そんなので、使いこなせる気になっていたのが急に恥ずかしくなった。

ヤドを斬られた【シヨウグンギザミ原種】は、慌てて地面に潜っ

て行く。

【ナルガクルガ進種】の女性は何もせず、それを見送った。

「あの、潜ってしまいましたけど」

「大丈夫。あいつは逃げたよ」

「放っておいていいんですか？」

「ああ、いいよ。先にやる事があるからね」

「やる事？」

「そう。君の怪我を手当てだよ。ミラちゃん」

「え？」

名前を言い当てられて、ミラが目を瞬く。

「あれ、違った？」

「いえ、あってますけど。どうして知ってるんですか？」

「ミューリイに聞いたからね。可愛い妹ができたって」

「お姉ちゃんと知り合いなんですか？」

「私の装備はミューリイに作って貰ってるからね。もう3年くらいの付き合いかな。手紙をやり取りしてるんだよ」

「そうだったんですか。あ、痛……」

傷口がずきりと痛んで、ミラは顔を歪める。

「っと、話す前に手当てをしないとね。ミラちゃんって回復薬に抵抗ある人？」

「あ、いえ」

「そっか。なら使うからね」

「はい」

【ナルガクルガ進種】の女性は、ポーチから緑色の液体が入ったビンを取り出した。

中身は、【回復薬】だ。

その半分くらいをミラの傷にかける。

そして、残りの分を渡して「飲んでね」と言った。

ミラは、ビンに残っていた分を一気に飲み干す。

薬草の苦味が口一杯に広がる。

「うう、苦い」

「はい、よくできました」

「あ、子ども扱いしないで下さい」

「あはは、ごめんごめん」

謝りながら、今度は包帯を取り出して、傷の上に巻いていく。

包帯に少しずつ包まれていく傷口は、もう新しい肉が盛り上がり始めていた。

これは、【回復薬】の効用だ。

患部に直接かけたり、飲んだりすることで即座に傷を癒す働きがある。

いくら増強作用を持つ【アオキノコ】を使っていると言っても、不気味すぎるほどの効果だ。

その強すぎる効果が体に悪そうで、これを使うのを嫌がる人は若干いるし、安全な場所なら無理に使わないことも多い。

「ミラちゃん、ほんとにごめんね」

包帯を巻きながら、改まった口調で言った。

「あ、そんないいですよ。怒ったわけじゃないですから」

「ううん、そうじゃなくって。」

私がミュリーにミラちゃんと会ってみたって手紙を送ったんだよ。ミラちゃんがこんな怪我をしたのは、私のせいなんだ」

「え……」

「だから、ごめん」

「……そんな、謝ることなんてないです」

ミラはゆるゆると首を振った。

「ギザミに会ったのはただ巡り合わせが悪かっただけで誰のせいでもないです。だから、助けてくれてありがとうございます。えーと」

「ベルゼラ。ベルでいいよ」

「あ、はい。私、ベルさんに、お姉ちゃんのお友達に会えて嬉しいです」

「ミラちゃん……」

包帯は綺麗に巻き上がっていた。

ベルゼラは微笑みを浮かべて、ミラの頭を撫でた。

「ミラちゃんはいいい子だね。ミューリイが可愛がるわけだ」

「そんな、私なんて、お姉ちゃんに迷惑をかけてばかりです」

「いやいや、私もミラちゃんみたいな妹がいたら可愛がると思うよ」

「はあ、そうですか」

何だか知らないが、気に入られたらしい。

ミラはよくわからないまま頷いた。

「それじゃ、本題に入ろうか」

「本題ですか？」

「そ。ミラちゃん、何しに来たの？」

「あ、そうでした」

ミラは背中に残っていた【夜刀】【月影】の鞘をベルゼラに渡した。

ベルゼラは、むき出しになっていた刀身を鞘に収める。

「あれ、雲霞は？」

「あ……その、ごめんなさい！」

さっきメラルーに盗まれてしまったんです」

「ええっ!？」

さすがにベルゼラも驚きの声を上げる。

ミラは、ベルゼラに【群蟲刃】【雲霞】が盗まれてしまった経緯を話した。

「大型種と戦ってる時に不意を突かれちゃったかあ。うーん、それは仕方ないね」

「……仕方なくなんて、無いです。」

「私が、もつとちゃんとできてたら……」

「ううん。ミラちゃんはよく頑張ったよ。」

「それに、さっき盗まれたばかりだったら、まだ取り返せるかもしれないよ」

「本当ですか!?!」

「うん。メラルーは普通はアイテムを盗むからね。」

「太刀みたいに大きい物を盗むのは慣れてないはずだよ。いくらなんでも、あんなの持ったまま地面には潜れないだろうし」

「あ、そっか。」

「だったら、急いだら取り戻せるかも!」

「そういうこと。メラルーはどっちに行った?」

「あっち、エリア5の方です!」

「よし、行くっか」

「はいっ」

ベルゼラとミラは、【メラルー】を追いかけて【エリア5】へと向かった。

.....

「ミラちゃん、これ見て」

【エリア5】に入っすぐ、ベルゼラが足元を指差した。

沼地の泥に、何かを引きずったような一本の線がくっきりと残っていた。

「何だと思っ？」

「太刀を引きずった跡、ですよね」

「多分ね。」

これを追いかけて行けば、泥棒の所に続いているはずだよ」

「急いで追いかけましょう！」

「そっだね。急ごっ」

二人は、地面に残った跡を辿り始めた。

跡は、【エリア5】から【エリア10】に続き、【エリア10】にある洞窟の入り口に続いていた。

「洞窟の中に入ったみたいだね。袋の鼠だ。行くよ、ミラちゃん」

「はい！」

地図では【エリア7】に当たる洞窟に入る。

洞窟の中は、外よりもずっと気温が低く、身震いしてしまうほどだった。

奥の方に、巨大な赤っぽい水晶の柱が何本もそびえ立っている。

「あ！」

赤い水晶柱の目の前に、三匹の【メラルー】が集まっていた。

地面に置いた【群蟲刃【雲霞】】を囲んで、相談しているように見える。

「ビンゴ！ ミラちゃん、見つけたね」

「はい」

「じゃあ、取り戻してくるよ」

「私も行きます」

「いいよ。ここは私に任せて。すぐに、終わらせるから」

「……わかりました」

「ちょっと待っててね」

ミラを置いて、洞窟の入り口から奥までを、ベルゼラが疾走する。

【メラルー】がベルゼラに気がついた時には、もう目と鼻の先だ

った。

一匹の【メラルー】が【群蟲刃【雲霞】】を引きずって逃げ出し、2匹がその前に立ち塞がる。

「邪魔！」

ベルゼラが【メラルー】の一匹を蹴っ飛ばす。

蹴られた【メラルー】は、小石の様に吹っ飛び、壁にぶつかって地面に落ちた。

もう一匹は、猫の手の形をした武器を取り出し、跳び上がりながらベルゼラに振り下ろす。

ベルゼラは【太刀】も抜かなかった。

軽く腕を振ると、腕にぴったりとくっついていた【刃翼】^{ブレード}が開く。

右手のブレードで猫の手を受け止め、左手を一振り。

切り裂かれた【メラルー】が地面に落ち、傷を押さえながら地面の中に潜って行った。

「さあ、それを返して貰うよ」

ベルゼラが一步踏み出す。

その瞬間、足元から猛烈な勢いで真っ白な煙が立ち上った。

「な、何？」

足元を見てみると、【メラルー】が落として行ったらしいポーチを踏み潰していた。

どうやら、その中に盗んだ【煙玉】が入っていたようだ。

「何て運の無いっ」

「ベルさん、逃げられます！」

「させると思うっ？」

ベルゼラは、もう一歩先も見えなくなった煙を見つめる。

「ナルガクルガの本当の瞳を、見せてあげるよ」

ベルゼラの瞳が、赤い光を放つ。

目の色が赤いのではなく、本当に光を発していた。

暗く、遮蔽物も多い場所で狩りをするうちに得た能力、【判熱^{はんねつ}】である。

【ナルガクルガ進種】の瞳が赤く輝く時、その瞳は世界を熱で見

る。
熱量で識別されたクリアな世界が眼前に広がる。

煙、壁面、虫。

「見つけた」

赤い軌跡を引きながら、ベルゼラが駆ける。

煙の中から飛び出しながら、【夜刀【月影】】を抜刀する。

刀身を【メラルー】の目の前に突き出して足を止め、斬り上げて抱えていた【群蟲刃【雲霞】】を跳ね上げる。

宙に舞った【群蟲刃【雲霞】】は、くると回転してベルゼラの手にとまった。

「ふう」

ベルゼラは、【夜刀【月影】】を鞘に戻す。

「ベルさん、凄い！」

ミラが駆け寄ってくる。

「ミラちゃん、まだ終わってない！」

ミラに鋭く叫び、鞘ごと【夜刀【月影】】を投げつける。

「わあっ」

ミラは何とか【夜刀【月影】】をキャッチした。

「来る！」

「な、何がっ？ きゃー！」

ベルゼラとミラの間を、激しい水流が引き裂いた。

「ベルさん！」

「上！」

返ってきた声にしたがって、洞窟の天井を見上げる。

「あー！」

そこに、【シヨウグンギザミ原種】が逆さまになって張り付いていた。

ベルゼラは、視界の隅にその熱を見つけていたのだ。

【シヨウグンギザミ原種】は、さっきとは違い、【グラビモス原種】の頭殻を背負っている。

二人の間を引き裂いたのは、そこから噴出している高圧の水流だ。

「ミラちゃん、それを使って」

「はいっ」

【夜刀【月影】】を背負って、抜刀する。

「でも、天井には届かないですよ！」

【シヨウグンギザミ原種】が爪を天井に突き立てて、天井を移動する。

だが、下りて来る気配は見せない。

天井に張り付かれてしまうと、【ボウガン】か【弓】でも無ければ手が出せない。

「そこは、私に任せといて。落つことすから、準備しておいてね」

自信満々にそう言い放つと、ベルゼラは洞窟の奥の水晶柱へと走り出した。

それを足場にして、どンドンと高い場所へと上っていく。

そして、一番高い場所から、壁を蹴って中空に身を躍らせた。

【俊脚】をフルに使った高い高い跳躍。

だが、それでも【シヨウグンギザミ原種】には僅かに届かない。

「ベルさん！」

下から見上げるミラが、悲鳴のような声を上げる。

ベルゼラは、だが、口元に笑みを刻んだ。

「君の『お姉ちゃん』を信じなよ」

背負った【群蟲刃【雲霞】】の柄を掴む。

シャランと、涼やかな音を立てて、刀身が姿を見せた。

一瞬で練気が練り上げられ、刀身が赤く輝く。

鍔が外れ、柄に巻きつけられていた鋼の糸が解ける。

その長さは、軽く三メートルはあるだろうか。

「翔べえ！」

大きく【群蟲刃【雲霞】】を振るう。

瞬間、【群蟲刃【雲霞】】の刃が砕け散った。

一本の刃が、鋼糸に連結された無数の刃に姿を変えたのだ。

その姿は、もう【太刀】とは呼べず、刃の鞭と言うのが適当だろう。

届かなかった距離を、虫の群の如き刃が繋ぐ。

刃が、【シヨウグンギザミ原種】の右側にある足に巻きつく。

後は、重力に身を任せるだけでよかった。

自由落下するだけで、限界まで張った刃が、殻を断ち、肉を引き裂きながら巻き戻る。

胴体から足を切り離され、【シヨウゲンギザミ原種】は天井から墜落した。

体勢も整えられず、背中から地面に叩きつけられた。

その衝撃で頭殻が砕け、守られていた柔らかい部分が露になる。

「ミラちゃん！」

鋼糸を引っ張って、一本の刃に戻しながら、ベルゼラが叫ぶ。

「はい！」

ミラは、返事をして【夜刀【月影】】を構えた。

意識を集中して、気を練り上げていく。

頭にある知識と体にある感覚。

それを合致させて、少しでもそのズレを減らす。

そうして得られたものが、おそらく、ミラの技術と呼べるものになるのだ。

練気が刃に満ち、【夜刀【月影】】の刃が開く。

刀身の帯びた光は、まだまだベルゼラには届かない。

だが、少しでも確かに進歩していた。

「やあああっ！」

「はあっ！」

背中側からミラが斬りかかり、腹の側にベルゼラが刃を突き立てる。

左右に切り返しながら二連撃。

残っていた殻が完全に砕け散る。

そして、露出した部位に、赤く輝く刃を振り下ろした。

ベルゼラは、根元まで差し込んだ状態で、刃の連結を解く。

そして、そのまま柄を握って引き戻した。

体内に埋まった無数の刃が、あらゆる体組織をずたずたに引き裂きながら引き抜かれた。

青色の血が恐ろしい勢いで噴出し、【シヨウゲンギザミ原種】はそれっきり動かなくなった。

太陽が沈み、夜の帳が下りる頃、ミラとベルゼラは【旧沼地】の【ベースキャンプ】にいた。

「こんな時間まで付き合ってくれて、ありがとございます」

「気にしないでいいよ。見つかってよかったね」

「はい。ベルゼラさんのおかげです」

ミラは、腰に差した【オデッセイ】に大事そうに触れた。

【シヨウゲンギザミ原種】を倒して素材を剥ぎ取った後、どこかに吹き飛ばされてしまっていた【オデッセイ】を探していたのだ。

ベルゼラがいなかったらとても見つけれなかっただろう。

「それじゃあ、そろそろ帰ります」

「あ、待って」

ベルゼラは、ミラを呼び止めて、背中に背負っていた【夜刀】【月影】を下ろした。

「ミラちゃん、これは私からのプレゼント」

「ええっ！？ そんな、こんなもの貰えませんよ」

【夜刀】【月影】は最高ランクの【太刀】だ。

作るための素材も上質なものだし、加工の費用もかなりのものだ。

それをあげると言われても、困ってしまう。

「いいのいいの。どうせ、もう使わないから」

「使わないんですか？　こんなにいい武器なのに」

「漣なみを使った時はこれも使ってたんだけどね。

雲霞に強化されたから、もう出番が無いんだよ。

最後に綺麗にしておこうと思ってミューリイに研いで貰ったんだけど、ミラちゃんになら使って貰いたくなって思ったんだ」

「でも……私、お返しするものも無いのに」

「うーん、お返しか……。あ、そうだ、私のこともお姉ちゃんって呼んでよ」

「え、お姉ちゃん？」

「そうそう」

「えーと……」

頷かれたミラは、上目遣いに見つめながら口を開いた。

「ベル、お姉ちゃん？」

「ぐはぁっ」

ベルゼラが胸を押さえて大げさにのけぞる。

「うわぁ！　どうしたんですか!？」

「い、いや、思ってたより破壊力がね」

「はかいりよく？」

きよとんと首を傾げる。

「だから、それが可愛いんだって……。ま、いや。私のことは『ベルお姉ちゃん』って呼ぶこと」

「はい」

「お返しはそれで十分。こいつだって、飾りになってるよりは使われるほうが幸せだろうし、貰って欲しいな」

「……わかりました」

ミラは、ベルゼラの差し出した【夜刀】【月影】を受け取った。

「でも、私、やっぱり釣り合っていないと思うから、今度、お店に来てください。私、いっぱいサービスします」

「嬉しいけど、いいの？ ミューリィに叱られない？」

「あ……えーと、お姉ちゃんには内緒です」

「あははっ」

ベルゼラは楽しそうな笑い声を上げた。

「わかった。絶対遊びに行くよ」

「はいつ。私、待ってます」

「うん。それじゃあ、その日まで元気だね」

「はい。色々ありがとうございました」

ミラは、お礼を言って頭を下げた。

「バイバイ、ミラちゃん」

「さようなら、ベルお姉ちゃん」

ミラが村に辿りついた頃には、もうすっかり遅くなってしまっていた。
いた。

(こんな時間になってる……お姉ちゃん怒ってるかな)

工房の近くまで帰ると、工房の前に誰かが立っていた。

「……お姉ちゃん？」

「ミラー！」

ミラの名前を呼んで、ミュリエリアが走ってくる。

「良かった……。遅いから心配してたのよ」

「お姉ちゃん……。お姉ちゃん！」

ミラは、ミュリエリアの胸の中に飛び込んだ。

「ミラ？ どうしたの？」

「あのね、お姉ちゃん。色んな事があつたんだよ」

色々と聞いて貰いたい事があつた。

怖かったのも、嬉しかったのも、全部。

「そう。それじゃあ、晩御飯を食べながら聞かせて貰うわ。ミラもお腹空いてるでしょう？」

「あ、うん。もうお腹ぺこぺこだよ」

「ふふ、それじゃあ、帰りましょうか」

「うんっ」

しっかりと手を繋いで、二人は工房へと帰って行った。

工房のドアをくぐって、ミュリエリアが微笑む。

「お帰りなさい、ミラ」

ミラも、とびっきりの笑顔で答えた。

「ただいま!」

NEXT>第五話「密林の子猫」

<簡易キャラクター紹介>

名前：ベルゼラ（ベル）

年齢：20

性別：女

種族：ナルガクルガ進種

能力：【俊脚】【判熱】【刃翼】

<オリジナル武器紹介>

名前：群蟲刃【雲霞】

分類：太刀

レア度：10

属性：なし

威力：1416

切れ味：白

会心率：10%

強化元：群蟲刃【漣】・黒刀【終ノ型】

強化先：なし

刃の群体とでも言うべき特殊な刀身を持つ太刀。

その変幻自在の動きは、まるで生きているかのよう。

名前：群蟲刃【漣】ウツナミ

細かな刃を鋼の糸で無数に繋ぐという特殊な構造の太刀。
構造上強度が低く、扱いには熟練を要する。

第五話「密林の子猫」

一年を通して雪に覆われた深い山。

吹雪の中を、もこもこした毛皮の防寒具に身を包んだ小さな少女が必死に走っていた。

「はあっ、はあっ」

荒い呼吸に、追跡者たちの足音が混ざる。

少女を追いかけていたのは、白い体毛に覆われた猿のような【ブランゴ】と呼ばれる獣の群れだ。

少女は必死に走るが、次第に追い詰められていく。

「あっ」

雪に足を取られて、少女が転倒した。

防寒具のフードが外れて、髪がはらりとこぼれる。

その髪の毛の間から、髪と同じ色の白い毛に覆われた耳がのぞいていた。

ネコの耳に似た三角形の耳だ。

どうやら、この少女は【アイルー進種】らしい。

【アイルー進種】は【ランポス進種】と同様に、種としての特殊な力を持たず、技術を発展させるタイプの種族だ。

こんな幼い子供が、複数の【ブランゴ】の相手などできるはずもない。

雪の上に倒れた少女に、【ブランゴ】たちが殺到していく。

少女は青みがかった黒い目をぎゅっと瞑った。

閃光　青白い光が奔る。

青い雷に打たれた【ブランゴ】が体を震わせて崩れ落ちた。

嘶いななききがその場にいたものの耳を打つ。

見上げた山の頂上に、白銀の鬣たてがみを靡かせた獣が立っていた。

額に螺旋状の蒼い角を持ち、雷を操る幻獣。【キリン】だ。

突然の闖入者に【ブランゴ】たちが口々に喚きたてる。

【キリン】は軽く頭を振って、角を振り立てた。

【ブランゴ】を威嚇するように、八発の青い雷が落ちる。

【ブランゴ】はしばらく【キリン】を睨んでいたが、やがて、悔しそうに立ち去っていった。

その様子を見て、【キリン】が踵を返す。

「待って！」

少女が叫ぶ。

【キリン】が、足を止めて振り向く。

少女はぶんぶんと大きく手を振った。

「あつ、行ってきます！」

【キリン】は静かに頷くと、吹雪の中に消えていった。

MONSTER HUNTER EVOLVE
第五話「密林の子猫」

「やつ、えいつ」

工房裏の空き地。

今日のミラは、そこで【ランス】を振るっていた。

斜め上に槍を突き出し、バックステップ、サイドステップと位置を変えて、再び突き出す。

一見すると、様になっているように見えるが、ミラ自身は満足できていなかった。

頭の中にある、もっとも効率的な正しい動きと自分の動きがずれているのだ。

「うーん、まだまだだなあ」

ベルゼラとの出会いで、自分の未熟さに気づいてから、ミラは積極的に武器の練習をするようにしていた。

この世界で生きようと思えば、当たり前のように戦わなければならない。

優しいと言われる人だって、狩りをしてモンスターの命を奪って生きるのだ。

それなら、武器をきちんと使えるようになっていく方が良く決まっている。

(お姉ちゃんが戦えない分は、私がフォローするんだから)

そんな風に思いながら、ミラは練習に汗を流した。

「ただいまー」

作業場のドアを開けて、練習を終えたミラが入って来る。

ミュリエリアは、作業台に広げた紙に向かって、難しい顔をしていた。

随分集中しているらしく、ミラが入って来たのにも気がついていないようだった。

「お姉ちゃん？」

「ミラ？」

もう一度声をかけると、ようやく気がついて顔を上げた。

「ごめんなさい、気がつかなかったみたい」

「ううん、今入ったところだよ。」

どうしたの？ 何か難しい顔をしてたけど」

「注文された装備を考えていたのだけど、それが難しく困っていたのよ」

ミュリエリアは作業台に広げた紙を示す。

何重にも線が引かれて、真っ黒になっていた。

「お姉ちゃんでも難しいんだ」

新しい概念の武器さえ作るミュリエリアが悩んでいる事に、ミラは新鮮な驚きを感じた。

「ええ。新しい物を考えないといけない時はいつもね」

「そっか。どんな注文なの？」

「少しでも簡単に脱げる防具を作って欲しいらしいのよ」

「脱ぎ易い、防具？」

ミラが不思議そうな顔になる。

ミュリエリアへの注文で一番多いのが、防具の関係だ。

【進種】は、種族によって外見に結構な差がある。

【ナルガクルガ進種】の【刃翼^{ブレード}】や【リオス族】の翼などがそう
だ。

一般の店で買う時は、そういうものがあっても着られる物を選ぶ
しかない。

だが、ミュリエリアは既存の防具でも着られるように仕立て直し
てくれる。

そんな理由で、ミュリエリアには防具関連の注文が次々に飛び込
んでくる。

だが、今回のような注文は初めてだった。

「危なくないのかな？」

脱ぎ易いと言うことは、構造上脱げ易いという事だ。

わざわざ自分を危険にさらすような注文のメリットがわからない。

「注文してくれた人、テスカト進種の人だったわ。

龍化する時の事を考えての注文でしょうね」

「ハイエンシエント進古龍種の人なんだ」

【ハイエンシエント進古龍種】。

【キリン進種】 【テスカト進種】 【クシャルダオラ進種】 【オオナズチ進種】 の4つの【進種】を特に区別する時の呼び方だ。

この種族は、他の種族に無い力を持っている。

それが、人の姿から龍の姿に変わる【龍化】だ。

この時、体のサイズも形も大きく変わってしまったため、防具を着たままというわけにはいかない。

「【龍化】かあ。【ハイエンシエント進古龍種】の人って、私たちよりずっと強いんだよね」

ずっと昔も【飛竜】と【古龍】に区別されていた種。

今でも、【進古龍種】ハイエンシメントは【進種】の上位に存在する、そんな風潮があった。

「そうね。」

でも、龍化する度に服を脱いだり着たりしていると思うと、可愛らしいわよ。」

「あ、本当だね。」

2人はそんな光景を想像して、くすくすと笑った。

やがて、ミュリエリアが改まった調子で口を開く。

「何も変わらないわ。みんな、同じように心を持っているんだから。」

「うん。そうだよね。」

ミラは深く頷いた。

ミラが何者だろうと、優しい心があれば怖くないと言ったミュリエリア。

疑ってなどいないが、それを確認できた気がして、嬉しくなった。

「怖ろしいのは、力のみしか持たないものよ。」

「そんな力からは、私がお姉ちゃんを守るからね。」

ミラがそう言つと、ミュリエリアは少し驚いた顔になった。

そして、優しく微笑む。

「ありがとう、ミラ。」

「じゃあ私は、私を守ってくれるミラを守るわ」

「え？」

「私は私なりの戦い方で。この仕事が終わったら、ミラの装備を作
りましょう」

「お姉ちゃん……いいの？」

「ええ、もちろんよ」

「やったあ。お姉ちゃん、ありがとう！」

「ふふ、どういたしまして」

お礼を言ったところでミラははっと気がついた。

お姉ちゃんを守ってあげると言っていたはずなのに、なぜだか守
って貰う話になっている。

（お姉ちゃんにはかなわないな……）

優しくて、思いやりがある、ミラのお姉ちゃん。

いつか、ミュリエリアのような人になりたいと、ミラは思った。

でもやっぱり、悔しいものは悔しいわけで。

「もう、お姉ちゃんを守ってあげらって話だったのに……」

つい、こんな愚痴をもらしてしまつ。

「ふふ、そうだったわね。でも私は、ミラはもっと沢山の人を助ける、そんな気がするわ」

ミュリエリアが大真面目な顔でそんな事を言うから、

「そ、そんなこと……」

と、ミラは盛大に照れてしまつたのだつた。

「あれ？」

店に出て、棚の整理をしていたミラは、呟いて手を止めた。

見やすいようにアイテムを並べていたのだが、一角がごっそり空いてしまったのだ。

「ここ、何が入ってたんだっけ？」

うーん、と記憶を探る。

「あ！ハチミツだ」

そこは、普段なら【八チミツ】の並んでいる場所だった。

「そっか。調合の練習で全部使っちゃったんだっただけ？」

ミラは最近、店番と平行して調合も行っようになっていた。

と言っても、目下練習中でまだまだ簡単な物しかできない。

【八チミツ】はその練習をしている時に使い切ってしまった。

「ねー、お姉ちゃん」

店から作業場に顔を突っ込んでミュリエリアを呼ぶ。

「どうしたの？」

「八チミツの在庫ってまだある？」

「ええと、八チミツは店に置いてる箱で全部よ」

「そっかあ。うーん、どうしよう」

「なくなったの？」

「うん」

「そう……注文した商品が届くのはもう少し先だし、それまで店に一つもないのは困るわね」

「ミユリエリアは少し考え、

「ミラ、悪いけれど、ハチミツを集めてきてくれる？」

「私が？ いいよ」

ミラはすぐに頷いた。

「お姉ちゃん、何か武器を借りていってもいい？」

「そうね……パラディンランスを使ってみてくれる？」

なるべく軽くという注文で作ったから、実際に強度を確かめて欲しいの」

「うん、わかった。それじゃあ、準備して行ってくるね」

「ええ。気をつけて行ってきなさい。」

もしもの事があつたらいけないから、なるべく戦闘は避けるのよ」

「はい」

村を出発したミラは、【密林】にやってきた。

いつもの防具に【パラディンランス】、それから強度に問題があった時のために【オデッセイ】の剣だけという出で立ちだ。

「ここが密林なんだ」

ミラにとって初めての場所だ。

草や木に覆われているところは【森丘】によく似ているが、【ベースキャンプ】を含めていくつかのエリアが海に面しているという違いがある。

「村長さんの話だと、ここでいいハチミツが取れるらしいけど……」

出発の前に、村で出会った村長にそう教えて貰って、この【密林】を訪れたのだ。

(うー、ちゃんと取れる場所も聞いておけばよかった……)

話を聞くなり急いで出てきてしまったが、【エリア指標】くらいは聞いておけば良かった。

「仕方ない。頑張つて探そう」

【密林】の【ベースキャンプ】からは1・4・5の三つのエリアに道が続いている。

「どこから行くこうかな」

ミラは少し考えて、【エリア4】に行くことにした。

三つのエリアのうち、海に面しているのはそこだけだ。

(初めて見る海だしね)

ミラは、【エリア4】へ移動する。

「わぁ
」

ミラは歓声を上げた。

波の寄せる砂浜から海が広がり、遠くの方に大地を見ることができ
きる。

【沼地】みたいな不気味な場所は嫌だが、こんな景色は歓迎だっ
た。

広大な景色を眺めながら、砂浜を歩く。

だが、ここもモンスターたちの住む世界。

気を抜きすぎるのは危険だった。

不自然に砂浜から砂煙が上がっている。

景色に気を取られていたミラは、それに気づかなかった。

その上を踏み越えようとした瞬間、地中から鋏が飛び出してきた。

「きゃっ
」

ガン、と防具が鋏を阻み、ミラは悲鳴を上げながら跳び退った。

素早く背中【パラディンランス】を引き抜く。

収納されていた穂先が伸びて、本来の長さを取り戻した。

地面の中から、殻を背負った赤と白の斑模様の蟹が出てくる。

「ヤオザミ!？」

小型の甲殻種である【ヤオザミ】だ。

【ヤオザミ】が鋏のついた両腕を振り上げて威嚇する。

ミラは、【パラディンランス】を構えて、【ヤオザミ】目掛けて突き出した。

切っ先が甲殻を貫き、【シヨウグンギザミ原種】と同じ青い血が流れる。

【ヤオザミ】が鋏を振るって反撃。

ミラはバックステップでそれを躲し、【パラディンランス】を突き出す。

三連突きが、全て【ヤオザミ】の体を貫く。

【ヤオザミ】は、大きく鋏を振り上げて、砂の上に崩れ落ちた。

「ふう……」

ミラは、息をついて【パラディンランス】を下ろした。

槍の状態を確かめる。

【パラディンランス】は主にマカライト鉱石でできる金属製の槍だ。素材である【マカライト鉱石】が比較的簡単に入手できることもあり、武器の中ではかなりレベルが低い。

ミュリエリアが作ったこの【パラディンランス】は、軽量化のために通常の物よりも細くなっている。

それだけに、ミュリエリアは強度を心配していたのだが、ミラがざっと見た感じでは大丈夫のようだった。

もっとも、小型種を一匹狩っただけでは、まだ判断しきれないのだが。

軽量化のために、【ランス】の特徴である盾も少し薄く小さくされている。

ガード主体ではなく、回避主体で戦った方がいいかもしれない、とミラは思った。

「あ、そうだ。剥ぎ取りしないと」

ナイフを取り出して爪を剥ぎ取る。

ついでに、珍味である【ザザミン】も剥ぎ取っておいた。

今のを教訓に、緩んでいた気を引き締めて、【エリア3】に移動する。

【エリア3】は五つものエリアに通じている場所だ。

砂浜ばかりだった【エリア4】と違って、砂浜に面している森の入り口という感じの場所だ。

ミラは、慎重に様子を窺う。と、

「あ、蜂の巣だ！」

エリアの奥の方に生えている木に、蜂の巣がぶら下がっていた。

ミラはその傍に駆け寄っていく。

遠目にもわかるほどの大きな蜂の巣だ。

たっぷりと、【ハチミツ】が取れそうだった。

.....

時々寄ってくる蜂に似た甲虫【ランゴスタ】を追い払いながら作業し、【ハチミツ】（と言っよりは蜂の巣の一部）を手に入れた。

後は帰るだけだ。

ミラは元来た【エリア4】の方へと歩き出した。

「た.....て.....」

「ん？」

何か、声の様なものが聞こえた気がして、ミラは立ち止まった。
耳を澄ませる。

「たーすーけーてえええええ」

今度ははっきりと聞こえた。

女の子の悲鳴だ。

それと、何か荒々しい足音も聞こえる。

何事かと周囲を見回すミラの目に、とんでもない物が飛び込んで来た。

ドドドド、と足音を立てながら、何かが【エリア9】の方から飛び出してきたのだ。

猪に似たモンスター【ブルファンゴ】だ。

それだけならまだいい。

だが、【ブルファンゴ】の背中に白と黒のメイド服に似た防具【プライベートシリーズ】を着た少女が乗っかっていたのだ。

白い髪を短めのツインテールにまとめていて、束ねた髪の付け根辺りに白いネコミミ。【アイルー進種】だ。

呆然と見守るミラの目の前を、少女を乗せた【ブルファンゴ】が

駆け抜けていく。

「みやああああ！ 誰か止めてくださあああ！」

涙目で叫ぶ少女の声が遠ざかる。

「って、大変だよ！」

ようやく我に返ったミラは、慌ててその後ろを追いかけた。

洞窟に駆け込んでいった【ブルファンゴ】を追いかけて、【エリア7】へ。

洞窟の中は、左右が切り立った崖になっていて、広い森を眼下に見下ろすことができる。

岸壁の一部には、さまざまな色の鉱石が露出して自然の芸術を描いていた。

「たーすけてえええ！！」

「待ってえええ！！」

その景色を楽しむ余裕もなく、逆側の出口から飛び出す。

【ベースキャンプ】から見上げた高い崖の上に位置する、【エリア5】に出る。

【ブルファンゴ】は相変わらずわき目も振らずに突っ走っていく。

ミラも懸命に追いかけるが、追いつくより先にミラのスタミナが尽きてしまいそうだった。

「何とかしないと……そうだ!」

ミラはアイテムポーチから【閃光玉】を取り出し、思いっきり投げた。

【ブルファンゴ】の目の前で、【閃光玉】が破裂し、視界を真っ白に染め上げる。

大型の飛竜でも目を回すほどの凄まじい光量。

なのだが、鈍いのかどうなのか、【ブルファンゴ】は気にせず走り続ける。

その代わりに、【アイルー進種】の少女が盛大に驚いた。

「みゃ!?! にゃにごとですかあ!?!」

【ブルファンゴ】の上でじたばたと暴れる。

それが鬱陶しかったのか、【ブルファンゴ】は真っ直ぐ走るのを止めて、少女を振り落としかかった。

その際に、ミラが【ブルファンゴ】に近づく。

「飛んで!」

「みゃ!?!」

「受け止めるから！」

「わ、わかりましたっ」

【ブルファンゴ】の上で器用に体勢を整える。

「い、行きますっ」

「うんっ」

少女が【ブルファンゴ】の上から飛び出した。

ミラは、少女に手を伸ばし、危なげなくその体を受け止めた。

普段から【大剣】やら【ランス】やらの重量武器を振り回しているのは伊達ではない。

きちんと身構えていれば、多少の速度がついていても問題ない。

少女を地面に下ろして背中に庇い、【パラディンランス】を抜く。

だが、背中の上の邪魔者がいなくなった【ブルファンゴ】はそのまま走って行ってしまった。

予定と違う方法にはなったが、救出成功だ。

ミラは、ほっとして【パラディンランス】をしまった。

そこに、先ほどの少女がどん、と抱きついてくる。

「ありがとうございましたっ！ 私、あのままとんでもない所まで連れて行かれちゃうじゃないかって、不安で死んじゃうところでしたっ」

「あ、うん、それは大変だったね」

少女の勢いに押され気味にミラが頷く。

並んで立つてみると、少女はミラよりも頭1つ分背が低い。

以前あったラキと言う少年よりは幾分か年上だろうが、ミラよりは年下だろう。

「私はミラ。何でも屋のお手伝いしてるの。あなたは？」

「私、メイミイですっ。『アシストキャッツ』の養成課四年生です」

「『アシストキャッツ』？」

聞き慣れない言葉に、ミラが首をかしげる。

「あ、知らにやいですか？」

「う、うん。ごめんね」

「あ、気にしにやいでください。

あのですね、『アシストキャッツ』はお客様の要望にお応えして、お手伝いのアイルーを派遣するところじゃんですよ」

「へえ。そんなお仕事があるんだ」

【アイルー】という種族は、原種の頃から高い知性を持ち、人間社会に適応していた。

人語を操り、武器屋を経営していた【アイルー】もいるほどだ。

当時のハンターの家に住み込んで家事を引き受ける【アイルー】も存在し、『アシストキャッツ』はそれを今に引き継ぐ組織なのだ。

『アシストキャッツ』は派遣と同時に、付属校で養成もしている。

メイミイはその生徒だった。

「それで、どうしてメイミイちゃんはこんな所にいるの?」

「私、オトモ検定の試験中にやんですよ」

「オトモ検定?」

「オトモアイルーにやる資格を取る試験です」

一口に【アイルー】といっても、その職種はさまざまだ。

キッチンで働くもの、フィールドで素材を探すもの、店を営めるもの、手紙を配達するものなど。

【オトモアイルー】は、狩りをする時に、自分も戦ったりアイテムを使ったりして主人をサポートする職業だ。

「主人役の人と一緒にする試験にやんですけど、その人が怪我をしちゃったんです」

「それで、一人で？」

「はい。でも、ブルファンゴに襲われて、いつの間にかあんにや」とにやっちゃってたです」

「うーん、その人が怪我をしたのに、試験は中止じゃないの？」

「……もしかしたら、そうにやっちゃうかもです。でもっ」

ぎゅっと手を握り締める。

「私、絶対合格したいんですっ。だから、あきらめません！」

言い放った言葉には、どうやっても変えられそうにない強い意思が込められていた。

「そんなに急がなくてもいいんじゃないの？ メイミィちゃん、まだ子供なのに」

「でもでも、私、早く一人前にやっつて、誰かの役に立ちたいんです！」

「何か理由があるの？」

「はい。」

私、小さい頃に雪山で両親を亡くしたんです」

「え……」

「思ってもみない話だった。」

驚くミラをよそに、メイミイは話を続ける。

「その時、私を助けてくれたのが六花さんりっかだったんです。」

それで、私は六花さんと一緒にあちこち旅をしていたですけど、その途中でアイルーと一緒に旅をしている人と会ったんです」

「メイミイちゃんと、その六花さんみたいだね」

「同じじゃにやいです。」

私は、六花さんに迷惑かけてばかりなのに、そのアイルーさんは凄くしつかりサポートしてたんです。

それを見て、私、ずっと六花さんに頼りっぱなしだったのが情けないって思って、そのアイルーさんに『アシストキッツ』の養成校を紹介して貰ったんです」

「そうだったんだ……」

「だから私、六花さんが私を助けてくれたみたいに、誰かの役に立ちたいんです！」

「メイミイちゃん……」

(この子、私と似てるんだ)

ミュリエリアに助けて貰って、恩返しにミュリエリアを助けたい
と思っているミラと、

その六花という人に助けて貰って、その気持ちを他の人に分け与えたいと思っているメイミィ。

本人と他の誰かに、という部分が違うが、そこに至る想いは同じだった。

「ねえ、メイミィちゃん。その試験って、2人でするものなんだよね？」

「はい。そうですけど？」

「だったら、私と一緒にやるっよ」

「ええ!？」

メイミィはミラの提案に驚きの声をあげる。

「そんな、ダメですよっ」

「やっぱり部外者じゃダメかな？」

「そうじゃにやくて、危にやいですよ!？」

「大丈夫。さっきメイミィちゃんを助けたの、私だよ」

「みい……それはそうですけど」

「それにね、私がメイミィちゃんを手伝いたいの。私とメイミィちゃん、よく似てるから」

「似てるですか？」

メイミイはそう言って、自分の髪を摘んだ。

「確かに、髪の色も似てるけど、そうじゃなくてね」

見当違いなメイミイにミラは苦笑を浮かべる。

「私ね、実は記憶喪失なの」

「記憶喪失ですか!？」

「うん。名前とか全部、何も覚えてないの。」

でも、ミュリエリアさんって人が助けてくれて、家族になっ
てくれたの。

だから、私は今お姉ちゃんのお店を手伝ってるんだ」

「ほら、似てるでしょ」と言って、ミラは笑顔を浮かべた。

「だから、メイミイちゃんが放っておけないの。」

私に、手伝わせて欲しいな」

お願い、とばかりに両手を合わせる。

「えと……わかったです。お願いしてもいいですか？」

「もちろん!」

少し悩んだ後に、おずおずと申し出てくれたメイミイに、ミラは

しっかりと頷いた。

.....

「それで、試験の課題は何なの？」

ミラとメイミィは来た道を逆に辿って、【エリア3】まで戻ってきていた。

「えと、まずはエリア10までたどり着いて、そこにある武器を回収します。」

後は、何でもいからモンスターを狩猟したらお終いです。モンスターと私の働き具合で判断するって言うてたです」

「その武器を回収するまでは武器なしだなんて、危ない試験だなあ」
「主人役の人はちゃんと持ってたんですけど、リタイアしちゃったですから」

「武器なしは恐かったでしょ」

「そうなんですっ。もうすっごく恐かったんですよ！」

「だよねえ」

武器を持たずにうろつく事の恐さは体験済みのミラは深く頷いた。

「ところで、エリア10っていつち？」

「はい。あそこの小島ですっ」

「島？ 船なんかあったかな？」

「船は要らにやいです。ちゃんと道があるんです」

「え？」

不思議そうな表情のミラだったが、波打ち際までたどり着くと疑問が解けた。

潮が引いて、小島まで続く一本の道ができていたのだ。

「凄い！ 海の上に道がある」

「知らにやかったですか？」

「だって私、記憶喪失だから」

「あ、にやるほど……」

海の上の道を渡って、【エリア10】へ。

【エリア10】は中心に謎の遺跡がある小島だ。

今の技術よりも遥かに優れた技術を持った古代文明時代の遺産らしいが、入り口も見当たらず、謎に包まれている。

「えーと、この島のどこかに武器があるんだよね？」

「はい。そのはずですよ」

「それじゃあ、手分けして探してみようか。何がいるかわからないから気をつけてね」

「はいですっ」

二人は、手分けして小島を探し始めた。

しばらくして、

「ミラさん！ ありました！」

「え、本当！？」

ミラの所にメイミイが駆け寄ってくる。

その手には、ネコの手を模したピックと落書きのようなネコの顔の書かれた木製の盾が握られている。

おもちゃのようだが、【にゃんにゃんぼう】というれっきとした【片手剣】だ。

切れ味はそれほどでもないが、ネコの手の爪に麻痺毒が仕込まれている。

サポート用の武器と考えると、なるほど悪くなかった。

「どこにあったの？」

「遺跡の一番上にありました」

「何でそんなところに……」

「わかり易いからでしょうか？」

「ま、いいか。これで、後は何か狩ればいいんだよね」

「はい。やっぱり大物の方が評価が高いらしいです。私、高得点が狙いたいですっ」

「うん、そうだね」

そんな事を話しながら、【エリア3】に戻る。

「でも、そうそう都合よく大物は出ないよねえ」

「うー、何か出てきてくださーいっ」

メイミイがそんな事を叫んだ、その時。

ドドドド、と足音が聞こえてきた。

「何ですかっ？」

「またファンゴかな？」

【ブルファンゴ】は大物じゃないんだけどな、と思いつながら視線を向ける。

「あれ、アプケロスですよ」

「だね」

草食獣の【アプケロス】の群れが、大急ぎでエリアを横切って行く。

【ブルファンゴ】以上の小物だ。

だが、ミラは笑みを浮かべた。

「メイミイちゃん。運がいいかも」

「どうしてですか？」

不思議そうにメイミイが聞き返す。

「アプケロスは何かに襲われると群れで逃げ出すの」

「てことは……」

「うん。何かを追いかけてくるよ」

ミラはそう言って【パラディンランス】を抜いた。

メイミイも隣で【にゃんにゃんぼつ】を構える。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……来にゃいですね」

「あれ？」

首をかしげたミラは、頭上に木ではない影が落ちているのに気がついた。

「上!?!」

「みゃ!?!」

頭上に、翼を羽ばたかせる何かの姿があった。

「逃げてっ」

「はいっ」

咄嗟にその場から逃げる。

さっきまで二人の立っていた場所に、羽ばたきで風を起こしながら、ゆっくりと降り立った。

巨大な翼を持つ深緑の体、棘を備えた長い尾。

陸の女王の異名を持つ、雌火竜【リオレイア原種】だ。

ミラが初めて出会う、空を舞う翼を持つ飛竜だった。

「これは、ちょっと大物過ぎないかな……」

いるだけで相手に恐怖を与えるような、圧倒的な存在感。

少し、荷が重過ぎる相手ではないだろうか。

だが、

「……ミラさん」

メイミイがミラを見る。

体も、言葉も震えていた。

けれど、その瞳の光だけは、微塵も鈍っていない。

「私、やります。だから、その間に逃げ」

「逃げないよ。メイミイちゃんを見捨てたりしない」

メイミイの言葉にかぶせて、ミラは言った。

「だって、私はメイミイちゃんのご主人様役だから」

「ミラさん……」

「やるっ、メイミイちゃん」

「はいっ」

改めて、【リオレイア原種】に相對する。

【リオレイア原種】の方も、どうやら様子を窺っていたらしい。

ラキたちからの敵意を感じ取り、臨戦態勢に移った。

上体を持ち上げ、咆哮を上げる。

「みゃっ！」

咆哮をまともに聞いてしまったメイミイが立ちすくむ。

【リオレイア原種】の口の中から真っ赤な光が漏れる。

「危ないっ」

ミラはメイミイの腕を引いて自分の腕の中に抱き込み、盾をかざす。

【リオレイア原種】の口から火球が吐き出され、盾に着弾した。

火の粉がばらばらと飛び散るが、【ランス】の特徴である巨大な盾は二人を守ってくれた。

「メイミイ、大丈夫？」

「は、はいっ」

「よし、じゃあ行くよ」

メイミイが【リオレイア原種】の側面に向かって回り込み、ミラはあえて正面から近づく。

【リオレイア原種】が首を持ち上げ、口の中に再び炎の輝きが宿る。

吐き出される火球。

ミラは素早くサイドステップをしてそれを躲し、頭に槍を突き出した。

同時に、メイミイも【リオレイア原種】の足に切りかかる。

二人の攻撃は、命中したがどちらも大きく傷つけることはできなかった。

飛竜の甲殻は、天然の鎧だ。

それに対して、今の二人の武器は切れ味が低すぎる。

【リオレイア原種】が一步進みながら、ミラに噛み付く。

ミラはバックステップで後退。

続けざまに【リオレイア原種】が体を回転させ、遠心力の乗った尻尾を振り回す。

ミラはさらに後退して、その攻撃をやり過ごした。

だが、【リオレイア原種】はその半回転した状態から、さらに回転。

しなつた尻尾が、今度はメイミイを襲う。

メイミイは、姿勢を低くしてその下をくぐり、足に切りかかっていく。

ミラは一回転して戻って来た頭を狙って槍を突き出す。

一撃、二撃。

重ねた攻撃が甲殻を割り、血が流れ出した。

そして三撃目。

【リオレイア原種】が翼を羽ばたかせながら後ろ向きにジャンプして、これは空を突く。

メイミイが羽ばたきの風圧に押されて尻餅をついているのが見えた。

【リオレイア原種】は少し距離の離れた場所に着地しようとしている。

「距離を離すから！」

ミラは、【パラインランス】を腰溜めに構えて、【リオレイア原種】に向かって突進した。

【リオレイア原種】が翼を羽ばたかせて風を起こすが、十分に加速をつけたミラはそれに負けずに突き進む。

ミラはあえて頭は狙わず、【リオレイア原種】の右側に逸れた。

翼の下を通り過ぎる瞬間、前に向けていた槍を上向きに変える。

槍の穂先が【リオレイア原種】の翼に突き刺さり、駆け抜ける勢いで翼膜を引き裂く。

【リオレイア原種】が姿勢を崩して地面に落ちるが、地上近くだったために上手く着地した。

体を回転させて、尻尾でミラを薙ぎ払う。

ミラは咄嗟に盾を構えたが、尻尾に押されるままにずるずると後退させられた。

一回転して、【リオレイア原種】の頭が目の前に現れる。

爆炎。

吐き出された火球が、盾を揺らす。

連続で三発。

(受けきった！)

盾を下げる。

着弾の火の粉を割って、【リオレイア原種】が突進してきていた。盾を構えなおそうとしたが、間に合わない。

【リオレイア原種】が鋭い牙の生えた口を開く。

「ミラさん!」

メイミイの声がして、ミラの後ろで【閃光玉】が破裂した。

視界を閉ざされた【リオレイア原種】が立ち止まり、ミラはその隙に後ろに下がった。

「ミラさん、大丈夫ですか!？」

「うん、何とか。ありがとう」

メイミイと合流して、【リオレイア原種】の様子を窺う。

【リオレイア原種】は苛立たしげに吼えながら、闇雲に尻尾を振り回していた。

その口からは、吐息に混じって黒煙が漏れている。

痛手を負った【リオレイア原種】が怒っているのだ。

「メイミイちゃん、あと何を持ってる?」

「えと、角笛と回復薬と、それからシビレ罨があります!」

「じゃあ、それ使おう。仕掛けて」

「はいっ」

【シビレ罨】は、土に埋めて使う罨だ。

麻痺毒を持つ【ゲネポス】の牙が大量に仕込んであって、踏むとその牙が刺さって麻痺毒に侵される。

メイミイが【シビレ罨】を取り出して、仕掛け始める。

グルウウウウ……

それを見守っていたミラは、聞こえてきた唸り声にはっとなった。

見ると、【リオレイア原種】の視線がしっかりと二人を捉えていた。

「閃光玉の効果が切れた!？」

メイミイちゃん!」

「もう少しですっ」

メイミイがそう答えるが、【リオレイア原種】はもう少し待って
くれない。

咆哮を上げて、真っ直ぐに突進してくる。

お互いの距離が、どんどんと縮まる。

「メイミイちゃん！」

「もうちよつと……！」

「ダメ、間に合わない！」

「メイミイ逃げて！」

ミラは盾を構えて【リオレイア原種】の前に立ち塞がる。

【リオレイア原種】は盾にガツンと一当てして、僅かに後ずさった。

そして、傷ついた翼を羽ばたかせて 宙に舞う。

「その翼で!?!」

空中で後方に一回転。

下から、尻尾が跳ね上がる。

盾の上に槍を重ねて、両手で身構える が、

「きゃあああああつ！」

勢いを殺せず、ミラは空中に吹き飛ばされた。

視界の隅に、砕けた金属片が散っている。

背中から地面に落ちて、息が詰まる。

両手からもぎ取られた【パラインランス】が少し離れた所に落ちる音がした。

ミラは【オデッセイ】を抜いて、素早く立ち上がった。

【リオレイア原種】はミラを追撃せず、メイミイを襲っていた。

二回連続での尻尾の攻撃。

メイミイは横に跳んで避けたが、地面を抉った尻尾が【シビレ罨】をも抉っていた。

外装が砕かれて、内部構造が丸見えになるのがミラからもはっきり見える。

あれでは、もう使えないだろう。

ミラは横から【リオレイア原種】に飛びかかり、【オデッセイ】を振り下ろした。

刃が、翼の付け根辺りの甲殻を削り取る。

【リオレイア原種】が尻尾を叩きつけてくる。

ミラは後ろに下がってそれを避けた。

(どっしりよじ……)

完全に手詰まりだった。

アイテムも尽きたし、武器も失ってしまった。

【オデッセイ】があるにはあるが、これもそれほど上質の武器ではない。

【ランス】の突進や【大剣】の溜め斬りのような破壊力を増すような方法のない【片手剣】で【リオレイア原種】の甲殻を斬るのは一苦労どころの話ではないだろう。

(何か、何かない!?)

この際使えそうなものなら何でもいい。

ミラは、周囲に目を走らせる。

「あ……」

ミラの視界に、弾き飛ばされた【パラディンランス】が飛び込んできた。

盾の下敷きになっている槍は、中ほどで真っ二つに折れてしまっていた。

ミュリエリアの忠告が、今になって思い出された。

(うう、ごめんなさい、お姉ちゃん……。
でも、無駄にはしないから)

ミラは、心の中でそう呟く。

落ちている【パラディンランス】を見たときに、一つ閃いた事があった。

それは、ほとんど策とも呼べないような賭けだったが、ミラはそれに賭けた。

「こつち！」

ミラは、【リオレイア原種】に背中を向けて走り出した。

バキバキと木をへし折りながら、【リオレイア原種】がミラの背中を追う。

ミラの目指す場所には、【パラディンランス】が落ちている。

【リオレイア原種】はぐんぐんとミラとの距離を詰めてくる。

(間にあつて……！)

祈るような気持ちで、ミラは走る。

【パラディンランス】が落ちている場所はもう目の前だった。

だが、【リオレイア原種】は既にミラの真後ろに迫っている。

盾の下になっているランスを拾っている隙など、どこにもない。

【リオレイア原種】が、かっと口を開く。

「ええいつ！」

ミラは、【パラディンランス】の落ちている場所の手前で踏み切り、跳んだ。

ガチンと牙の噛み合う音を背中に、盾の端に飛び降りた。

盾の片方が下がり、ランスを支点にして逆側を跳ね上げる。

跳ね上がった盾が、【リオレイア原種】の下顎を強かに打ち据えた。

頭を揺らされて、【リオレイア原種】がよろめく。

「はあああああつ！」

両手でしっかりを【オデッセイ】を握り、渾身の力を込めて、腕ごと口蓋に突っ込む。

【オデッセイ】の切っ先が、上顎を抉るが、それ以上進まない。

【リオレイア原種】が喉の奥から怒号を発する。

体内から、炎の輝きが見えた。

「くっ………！」

【リオレイア原種】が火球を吐き出そうとした。

その瞬間、

「にゃあああああ!!」

メイミイが、壊れた【シビレ罫】とを持って突っ込んできた。

壊れた【シビレ罫】の中に並んでいる麻痺牙を叩きつけ、【にゃんにゃんぼう】を振り下ろす。

牙と爪が【リオレイア原種】を引っかき 【リオレイア原種】は体を硬直させた。

蓄積された麻痺毒が、【リオレイア原種】を麻痺させたのだ。

吐き出される直前で、火球は空しく消える。

「メイミイちゃん!!」

「はい!!」

メイミイがミラに駆け寄り、【オデッセイ】を一緒に握る。

「せーのっ!!」

「「いつけえええ!!」」

力を合わせて、刃を押し込む。

【オデッセイ】が頭蓋を貫き、切っ先が頭の上に飛び出す。

【リオレイア原種】は、麻痺とは違う痙攣で体を震わせ、ゆっくり

りと地面に横倒しになった。

「こ、これは……メイミイ！」

メイミイ、無事かニヤ！？」

【リオレイア原種】にもたれて疲れきった体を休めていたメイミイの耳に、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「先生？」

【リオレイア原種】の体越しにひょいと顔を出すと、そこには鎧兜を着込んだ一匹の【アイルー原種】が立っていた。

養成校でメイミイの担当をしている教師の【アイルー】だった。

「メイミイ！ 無事でよかったニヤ。

一人で残ったって聞いて、肝を冷やしたニヤ」

「ごめんなさい。どうしても諦められにゃかったんです」

「メイミイの気持ちはよく知ってるニヤ。

でも、こんな危ないのはこれっきりにするんだにゃ」

「はい……」

「わかればいいにゃ。ところで……」

教師アイルーは【リオレイア原種】の巨体を見上げた。

「まさか、このレイアを倒したのかニヤ？」

「あ、はいですっ」

「す、凄いニヤ。こんなのが一人で倒せるなら、オトモどころの話じゃないニヤ」

「にゃ！？ 違います！ 全然一人じゃないです！」

メイミイが慌てていると、剥ぎ取りをしていたミラが顔を出した。

「メイミイちゃん、見て見て！ 逆鱗だよ！」

あれ、どちらさま？」

きよとんとした顔で、教師アイルーを見る。

「先生、このミラさんが手伝ってくれて、一緒に倒したんです」

「先生？」

「ミラさん。こちらは、私の学校の先生です」

「どうもニヤ」

「どうも……って、もしかして、試験の採点する人ですか!？」

「そっだニヤ」

教師アイルーが頷くと、とたんにミラは慌て始めた。

「あ、あのですね、メイミイちゃんにはすっごく助けて貰ったんです！

もう、もの凄いオトモっぷりでしたよ！」

「ミラさん、少し落ち着いてください」

「でも、メイミイちゃんの一大事だよ!？」

「みい、慌てすぎて意味不明にやってるですから」

困った顔でメイミイが呟く。

「ミラさん」

「はいっ」

教師アイルーに声をかけられて、ミラはぴしっと背筋を伸ばした。

「あなたがメイミイを助けてくれたのかニヤ？」

「はい。あ、いえ、お互いに助け合ったと言いますか……」

「もし差し支えなければ、その辺りの話を聞かせて貰えるかニヤ？」

「わ、わかりました」

「メイミイの事を思ってくれるなら、正直にお願いするニヤ」

「……はい」

ミラは、しっかりと頷いた。

……

「これで終わりニヤ。ご協力、感謝するニヤ」

教師アイルーが何かを書いていた手帳のようなものをしまつ。

「それで、メイミィちゃんは合格なんですか？」

「それは、まだわからないニヤ。」

筆記試験の結果と合わせて、発表は後日ニヤ」

「ええー」

ミラが思いつきり不満そうな声を出す。

「これは規則だから、仕方ないニヤ」

「ミラさん。結果が出たら、一番にミラさんに教えますから。」

それまで、待っていてくれませんか？」

「……うん、わかった」

メイミィにまで言われて、仕方なくミラは頷いた。

「話はまとまったかニヤ？」

「はい」

「それじゃ、学校に戻るニヤ。みんなも心配してたから、早く元気な顔を見せてあげるニヤ」

「はいです」

メイミイは教師アイルーに頷き、ミラに向き直った。

「ミラさん。本当にありがとうございました」

「私こそ。メイミイちゃんの役に立ててよかった」

「……また、会えますよね?」

「うん。きつとね」

「じゃあ、それまで、さよならです」

「うん。また会おうね」

名残惜しそうに言葉をかわす。

「メイミイ、そろそろ行くニヤ」

「みい……わかりました」

教師アイルーに促されて、メイミイが歩き出す。

その姿が見えなくなるまで、ミラはずっと見守っていた。

その日の夜。

一人になったのに、【リオレイア原種】を倒して帰って来たメイミイの話で養成校は持ちきりだった。

嫌と言うほど話を聞かれた後、メイミイは寮の自分の部屋に戻った。

「疲れたあ……」

どさっとベッドに倒れる。

目を閉じると、瞼の裏にミラの顔が浮かんできた。

「旦那様……ご主人様の方がいいかにか？ ………………みゃっ」

思わず口に出してしまった言葉が照れくさくて、枕に顔を埋めた。

でも、そうなたらいいなと思う。

「ようしっ！ ……これからももっと頑張ろうっ！」

もっともっと頑張って、立派なアイルーになります。

だから、それまで待っていてください。ご主人様！

NEXT>第六話「姫と騎士と野獣」

<簡易キャラクター紹介>

名前：メイミン

年齢：13

性別：女

種族：アイルー進種

能力：【技術】

<オリジナル武器紹介>

名前：パラディンランス（軽量化）

一般的なパラディンランスを肉抜きして軽量化を図った武器。槍の強度に不安が残る出来栄。

第五話「密林の子猫」(後書き)

深い意味はないんですが、30分アニメを意識した作りになっています。

だから、アバンの後にタイトルを入れてるんですけど、よく考えるところページの頭にタイトルがついてしまっただけですね……

第六話「姫と騎士と野獣」（前編）

ミラとメイミイが【リオレイア】と死闘を繰り広げた【密林】に程近い洞窟。

白い岩窟を掘り抜いて作られたそこは、【ランゴスタ進種】の住む家だ。

その佇まいは、家と言うよりもむしろ城と言う方がいいかもしれない。

【ランゴスタ進種】も集まって集落を形成する珍しい種族の一つだが、ある特徴から他の種族との接触到に積極的でなく、あらゆる活動を種族内で完結させてしまっている。

豪華な絨毯が敷かれた廊下を、一人の少女が急ぎ足で歩いていた。

美しい少女だった。

女性らしい均整のとれた体つき。

大人になる直前のまだ多少の幼さを残す整った顔立ち。

何よりも目を引くのが、緩いウェーブのかかった長い金髪だ。

岩壁を切り抜いた明り取りの窓から差し込む光の加減で、青から赤へと美しくグラデーションする。

深窓の令嬢と佳人と言う言葉が似合いそうだが、青い瞳に宿る強

い光が、ただの箱入り娘ではない事を示している。

自室の扉をばん、と開け放つ。

「見つけましたわ!」

「きゃっ」

部屋の中でベッドメイクをしていた侍女アイルーがびっくり顔で振り返る。

「姫様、お帰りなさいませ。私をお探しでしたか?」

「あなたではありません。わたくしの騎士たる方をですわ!」

「え、ええ!?! 騎士をですかあ!?!」

驚きの声をあげる侍女アイルー。

「そうですね。まあお聞きなさい」

「は、はい」

「わたくしが密林の中を散歩していた時の事ですわ」

「姫様、また無断で外出なされたんですね……」

「いつもの事ですわ。それより、黙ってわたくしのお話をお聞きなさい」

「はあ、申し訳ありません」

「こほん。密林の中で、ブルファンゴに乗ったアイルーを見ましたの」

「ブルファンゴに……いえ、何でもありません。お話を続けてください」

じろ、と睨まれた侍女アイルーが先を促す。

「わたくし、これは何かあると思って、様子を窺うことにしましたの」

「要するに、こっそり覗いていたんですね」

「ちょっとあなた、見も蓋もない事を言わないで下さる？」

「し、失礼しました」

「まあいいですわ。ともかく、わたくしはそっと様子を見ていたの。」

その時、あの方が現れたのですわ!」

「あの方？」

「白く美しい髪を風になびかせ、颯爽と槍を構えた美しい……いえ、可愛らしい方でしたわ」

そして、少女は『あの方』が【リオレイア】を仕留めるまでの事を、戯曲さながらに熱く語った。

「そして、わたくしは決めたのですわ！　この方をわたくしの騎士にしようよ！」

熱く語る少女に、侍女アイルーは困惑の眼差しを送った。

「あの、姫？」

「何ですか？」

「お話を窺う限りですと、その方は女性なのでは？」

「当たり前ですわ！　わたくしが男性を騎士に選ぶなど、ありえませんが！」

『あの方』の話以上にヒートアップする。

「そう。あんな不潔で汚らわしい生き物など滅んでしまえばいいのですわ！」

「姫……」

「とにかく、明日はあの方の所へと行きますわ。城を抜け出す手配を頼みますわよ」

「……かしこまりました」

言いたいことは色々あったのだが、言ったところでこの姫様が聞いてくれないのは身に染みている。

溜息をつきたくなるのを我慢して、侍女アイルーは頭を下げて部屋を出た。

「ああ、君。少しいいかね」

部屋から出たところで、尊大な声がかかった。

見ると、やたらとごてごてした衣装を着た男が立っていた。

年は二十代の前半辺りだろう。顔立ちは整っているが、どこことなく他人を見下しているような印象を受ける。

「トレナード公爵……」

「どうだね？ 彼女のご機嫌は」

「……よろしいようでしたが」

「そうか。ならば、私も顔を見に行くとしよう」

「申し訳ありませんが、姫様はこれからお召し替えですので、ご遠慮ください」

もう使い古した言い訳だが、他に適当な理由も思いつかずにとそう言った。

「ふむ、私も嫌われたものだね」

「いえ、そのような事は」

「姫に伝えてくれたまえ。そんな我俣を許すのは婚礼の日までだね。」

彼女には、私の子を生んでもらわなくてはならないのだから」

「……はい」

侍女アイルーは静かに頭を下げた。

（権力に囚われたあんな男が婚約者では、姫様の男性嫌いも無理はないですね……）

なんだかんだで、侍女アイルーは姫と仲がいい。

去っていく背中に、ベーと舌を出した。

この【ランゴスタ進種】の特徴、それは身分制度が存在することだった。

MONSTER HUNTER EVOLVE

第六話「姫と騎士と野獣」

それは、【ランゴスタ進種】に伝わる遠い昔の御伽噺。

ある所に、それはそれは美しいお姫様がいました。

そのお姫様が欲しくなった悪い王様は、手下のドラゴンにお姫様をさらわせてしまったのです。

お姫様の夫は、ただ戸惑うばかりで何もできません。

しかし、一人の騎士がお姫様を助けるための旅に出ます。

その騎士は、お姫様の警護をしていて、密かにお姫様に想いを寄せていたのでした。

騎士は、見事にドラゴンの手からお姫様を救い出し、悪い王様を打ち倒しました。

そして、その騎士とお姫様は二人で幸せに暮らしましたとき、めでたしめでたし。

「このお姫様も本当は騎士のことが好きだったのかしらね」

「でも、それって要するに浮気ってことなんじゃ……」

パタンと本を閉じたミュリエリアに、微妙な顔をしたミラが言った。

時間はもうすぐ夕方になるつかという頃。

この頃になると、もうほとんど客は来ない。

二人は、作業場で休憩がてら本を読んでいた。

ミラが行商人から買った物で、絵本のようにまとめられている。

ありがちな英雄譚だが、人物関係が少し変わっていた。

「それに、意思の伴わない相手って、嫌いな人でしょ？」

「どうしてそんな人と結婚するの？」

「そうね。私にもわかりにくいところだけど、ランゴスタ進種には身分制度があるのよ」

「身分制度？」

「ええ。王様が一番偉くて、次が貴族、そして平民と分けられているの」

ちなみに、【ランゴスタ進種】の貴族は、上から公爵、伯爵、子爵の三つの階級に分けられている。

この爵位は世襲制だが、功罪によっても上下する。

また、違うもの同士が婚姻を結べば上の身分にあわせる事になる。

もし平民が王族と結婚すれば、その本人の地位は王族として扱われるのだ。

だが、この制度を持っているのは【ランゴスタ進種】だけで、他

の種族にこんな概念は無い。

故に、

「何でそんなややこしい事するの？」

こんなミラの発言に繋がるのだ。

これは、別にミラがおかしいのではなく、この世界ではむしろ普通だ。

身分制度を知っているミュリエリアも、その制度には首を捻るばかりだ。

この村にも村長はいるが、あれは本人に対する尊敬が形になったものだ。

皆がその指示に従うのも、その個人の今までの行動が、指示に従う価値があると思わせるからで、偉いからではない。

群れを先導するリーダーを選ぶことはあっても、先に身分という線を引くことはないのだ。

大部分の種族は、集落など作らずに好き勝手に動き回っているのだから、もっと意味がない。

「さあ、どうしてなのかしらね。

でも、それを指して、一番理性的な種族と言う人もいるわ」

本能だけでは身分制の社会は生まれないという意味だろう。

確かに、【進種】たちの行動に本能が関わることは多い。

血の気の多い【ティガレックス進種】や【ラージャン進種】を例に上げるまでもなく、生と死のギリギリの戦いをする中では、敵を排除する、生き残りたいという本能の声が大きくなる。

もしも、【進種】が完全に理性を失ってしまえば、そこにあるのは【進種】同士が殺しあう、殺伐とした世界かもしれない。

「持つてる能力とは随分違うね」

「そうね」

と、話していると、店の方で呼び出しのベルが鳴った。

「あ、いけない、お客さんだ」

ミラが作業場の椅子から立ち上がり、店に出て行く。

「いらっしゃいます……せ？」

店先にいたお客さんを見て、ミラはぽかんと口を開けた。

凄く美少女が立っていた。

フリルやレースをふんだんに使ったドレスみたいなワンピースの上に皮製の簡単な防具をつけて、邪魔そうな袖をベルトで押さえるというよくわからない取り合わせを不思議と着こなしている。

「お姫様？」

こんな事を言ってしまったのは、客の容姿がさっきの本の挿絵と似ていたからだ。

客の少女は、不思議そうな顔になる。

「わたくしのことを知っていますの？」

「あ、すみません。さっきの本が……」

さすがに絵本から抜け出してきたかと思ったと言っつのは恥ずかしくて、ごによごによと誤魔化す。

「まあいいですわ。あなた、ミラさん、ですわよね？ 先日、密林でリオレイアを狩った」

「はい、そうですけど？」

「わたくしの名前はルティエ。あなたをわたくしの騎士にいたしますわ」

「はい？ あの、今なんて……もしかして台詞間違えてませんか？」

何やらとんでもない事を言われた気がして、恐る恐る聞き返す。

「あなたをわたくしの騎士に言ったのです。間違いありませんわ」

ルティエは再びはっきりと断言した。ミラを騎士にすると。

(え、何どういこと？ 騎士って、浮気するの？ 女の子なのに？ 何で？)

ミラは盛大にパニックに陥り、

「ええええええええ！？」

とりあえず大声を上げて驚きを表現した。

「どづしたの？」

声を聞きつけて、店の中からミュリエリアが出てくる。

「お、お姉ちゃん！ 大変だよ！ 私が騎士にするって！」

「落ち着きなさい。何を言いたいのかわからないわ」

「で、ででででもでも！」

「はあ。ミラ、少し深呼吸してなさい」

ミラに代わって、ミュリエリアが前に出る。

「私はこの店の店主で、ミラの姉のミュリエリアと申します。どういった御用でしょうか」

「わたくしはランゴスタの女王ルーゼリアの娘、ルティアですわ。ミラさんに騎士になって頂きたく、申し込みに来ましたの」

「ミラに？」

「ええ。アイルーの少女を守ってリオレイアに挑む姿を見たとき、
そっ心に決めたのですわ」

「リオレイアに……」

もちろん、ミュリエリアもその話はミラから聞いて知っている。

今日は、一日それで壊れた【パラディンランス】を直していたの
だ。

「何か事情があるようですね。中でお話を窺います。そっちの扉か
ら中に入ってください」

「わかりました。失礼いたしますわ」

ルティエを作業場へと通す。

三人は、作業台を囲んで椅子に座った。

ミラの隣にミュリエリアが座り、その対面にルティエが座る。

「それで、騎士というお話でしたが、事情を話していただけますか
？」

まだミラがパニックっているため、ミュリエリアが話の口火を切る。

「わかりましたわ」

ルティエは頷いて話し始めた。

「ミラさんにわたくしの騎士になって……より正確に言うなら、決闘を行ってもらいたいのですわ」

「決闘？ 誰かと戦うんですか？」

ミラが口を挟む。

「そうですね」

ルティエが頷く。

「わたくしたちの社会では、身分が上の者の命令は絶対です。ですが、たった一つだけ、それに逆らう方法があるのですわ」

「それが、決闘というわけですね」

「その通りですわ。」

決闘に勝てば、決められてしまった事柄を覆すことができますの。挑まれた者は本人でもその騎士が受けても構いません、が、挑む側は騎士でなければならぬと定められておりますの」

（決闘の正当性の証明と主人の人望の証明だかなんだか知りませんが、面倒な決まりですわ）

内心でぼやく。

この世界では、慣習が法の代わりになっていて、明確に定められている決まりは、売買に通貨を使うことくらいだ。

ここまで決まりやら制度にガチガチに縛られているのは【ランゴスタ進種】くらいのものである。

「あー、それで、どうして私なんですか？」

「そうね。ランゴスタのお姫様なのでしょ？」

それなら、騎士になる人は沢山いるんじゃないですか？」

ミラの言葉にミュリエリアも賛同する。

だが、ルティエは首を横に振った。

「誰もわたくしの騎士にはなってくれませんか」

「どうしてですか？」

「それは、わたくしが決闘を申し込む相手のせいですわ」

「その、相手とは？」

「トレナード公爵。母ルーゼリアが倒れた今、その代理を務めている男です。」

父は早くに亡くなっていますから、現状では最高権力者ということになるのですわ」

「お父さん、もういないんだ……」

ミラが痛ましげに呟く。

が、この世界では肉親を亡くしている事はそれほど珍しい事ではない。

何しろ、基本的に狩るか狩られるかという生活なのだ。

平均寿命は、およそ四十五歳。

平均寿命は生きた時間の平均で算出されるため、長く生きる者が少なく、若くして死ぬ者が多いとこういう小さな数字が出る。

【ハンター】と【原種】という二つの外敵を抱えるこの世界は、肉体的に衰えたり、小さな子供には厳しい世界なのである。

「騎士とは主人との関係であって地位ではありませんから、最高権力者に楯突くほどの魅力が無いのでしょうかね」

「ちょっと待って下さい。麗下、どこか悪いのですか？」

驚いたように、ミュリエリアが聞き返す。

「麗下？」

「『麗しき女王陛下』が縮まった、一種の尊称ね。美しい方だったわ」

「ええ、その通りですが……母を知っていますの？」

「以前、防具を注文されたことがあります。その時に一度お会いしました」

「防具？ 王様なのに戦うんだ」

「特定の相手がない法に対する決闘は王が相手をするのですわ。わたくしも、修練は積んでいますのよ」

「そうなんですか」

「あの、それで麗下は？」

「……母は、毒に侵されて、ベッドから起きることもできませんわ」

「毒？」

「戦いの勘を鈍らせないために狩りに出て、そこで戦ったゲリヨスの毒だと聞いていますわ。あらゆる薬を試してみましたが……」

【ゲリヨス原種】。

ゴム質の皮が特徴の大型種だ。

強い光を放つ発光器官と猛毒を武器にする。

特に珍しい種ではなく、【解毒薬】は存在するのだが、

「そのゲリヨス、変種だったのでしょうかね」

【原種】にもいくつかの種類がある。

環境の違いなどで、普通の【原種】と体色や行動の異なる【亜種】

それと、突然変異的に進化した個体である【変種】だ。

【原種】に近い【亜種】と違って、【変種】は見た目や能力が全く異なる事も多い。

おそらく、その【ゲリヨス変種】が新しい種類の毒を扱うため、既存の【解毒薬】では効果が無かったのだろう。

「お姉ちゃん、何とかしてあげられないの？」

「そうね……。そのゲリヨスの毒袋があれば、解毒薬を作ることができるかもしれないけれど」

「……逃げられてしまっていますわ。今は、どこにいるのかも……」

「そうですか……」

「どうしようもない事を考えていても仕方ありませんわ。今は、わたくしにできる事をするだけですわ」

「えと、それが決闘なんですか？」

「そう、決闘に勝って、トレナード公との婚約を破棄するのですわ
「！」

「結婚が嫌で決闘するんですか？」

きょとんとミラが首を傾げる。

そんな事しなくても嫌だと言えはいいのに、という気分だ。

「違いますわよ。」

わたくしとて王の娘。たとえ意に沿わぬ結婚でも我侭で嫌とは申しません。

これは、トレナード公の暴政を止めるためですわ」

「うーん？」

ミラがよくわからないと言いたげな顔をする。

「あの男、お母様が倒れてしばらくは為政に不慣れなわたくしをよく支えてくれましたわ。」

わたくしも、トレナード公が望まれるのなら婚約する事も仕方ないと思っていました。

ですが！ あの男！

婚約が議会に認められるや、わたくしを後盾にして好き勝手な振る舞いを！」

ミラにはまだイマイチぴんと来ないのだが、【ランゴスタ進種】の社会で王とは不可侵の存在なのだ。

人間の社会においても、古代における王は神のごとく扱われているのだから、そうおかしな事でもない。

ルテイエと婚約したことで、トレナード公爵は王の系譜に連なる者となり、誰にも止められなくなってしまったのだ。

「大体なんですか！？」 最初にやった事が一夫多妻制の導入ですわ

よ？

政略結婚と言っても、通すべき筋というものがありますでしょう！
年端も行かぬ妻達を困っているという話も聞きますし、不潔です
わ！

だから、男など、滅んでしまえばいいと言つのです！」

「……………」

「……………こほん。少々熱くなつてしまいましたわ。

ともかく、あんなロリコン野る……………んんっ、少女嗜好な方に好き
勝手させておくわけにはいかないのですわ。

一部の貴族ばかり優遇する政策で随分反感を買っていますから、
婚約が無効になれば他の貴族たちが勝手に追い落としてくれますわ」

「は、はあ……………」

そもそも身分やら政治やらの概念がよくわかっていないミラは既
に話についていけない。

「つまりね、ミラ」

一応理解できたミュリエリアがミラに噛み砕いて説明する。

「ルティエさんを利用して自分だけいい思いをしている悪者を退治
しようとしているの」

「あ、悪者なんだ」

「ええ、女の敵よ」

「そうですね！ 女の敵ですわ！」

微妙にずれた所で意気投合する二人。

ミラは、自分なりに話を理解して、

「わかったようなわからないようなんだけど、私でいいのならお手伝いします」

と言った。

ルティエはミラが承諾したならすぐにも決闘を申し込みに行きそうな勢いだったが、そんなに焦るのはよくないとミュリエリアが引き止めた。

話がまとまった頃には、外も大分暗くなってきていたのもあって、ルティエは一晩泊まっていくことになった。

「ミラ、ルティエちゃん。お風呂に入ってください。

明日に備えて、早めに寝たほうがいいでしょう？」

ミラ、ルティエちゃんに使い方を教えてあげるのよ」

夕食の片づけをしていたミュリエリアがキッチンから声をかけた。

「あ、はい」

「お風呂がありますの?」

珍しそうにルティエが聞いた。

「はい、ありますよ」

「個人では珍しいですわね」

お湯を沸かすのは割りとお仕事で、基本的にお風呂といえば公衆浴場の事になる。

もっとも、ルティエの城には大きな浴室があるのだが。

「そうみたいです。でも、うちは工房ですから」

「工房と何か関係がありますの?」

「えーと、行けばわかりますよ」

着替えとタオルを持って、作業場の隣にある脱衣所に移動する。

「ごそごそと服を脱いでいたミラは、ふと手を止めた。

目の前で、ルティエが一糸纏わぬ姿になったところだった。

(綺麗だなあ……)

真っ白な肌には傷一つ無く、若々しいハリに満ちている。

ミラは自分の裸身を見下ろした。

【シヨウグンギザミ原種】にざっくり斬られた傷は薄くだが痕が残っているし、背中には【リオレイア】に吹き飛ばされた時の打ち身の痣がある。

普段はそれほど意識しないのだが、やっぱり女の子としては気になるところだ。

「何ですか？」

無遠慮に見つめ過ぎていたらしく、ルティエに気づかれてしまった。

「あ、何でもないです。あはは……」

笑って誤魔化して、ミラは残りの服に手をかけた。

……

服を脱ぎ終わった二人は、浴室に入った。

真っ白な蒸気が二人を包み込む。

浴室は、木の浴槽と簀子すしを張った洗い場だけのシンプルなつくりだ。

「このパイプを見てください」

ミラは、壁から突き出ている二本の金属のパイプの一方を示した。

「このパイプは、隣の作業場の炉を通してあるんです」

「なるほど、それでお湯を沸かしているのですわね」

「はい、そうなんです。その栓を開けたらお湯が出てきますよ。あ、でも」

と、ミラが言う前に、ルティエが栓を開けてしまった。

パイプから、お湯が噴き出してルティエの手にかかる。

「あっっっっついですわ！」

悲鳴を上げるルティエ。

金属の加工も行う炉の中は、相当な高温だ。

ただ水を通しただけで、完全に沸騰してしまう。

それが危ないからミラと一緒についてきたのに、全く無意味になっってしまった。

「熱いから気をつけて下さいって言おうとしたのに！」

ミラはルティエの手を取って、もう一本のパイプの栓を抜いた。

こちらからは水が出てきて、ルティエの手を冷やす。

「大丈夫ですか？」

「も、問題ありませんわ」

涙目でルティエが答える。

「ところで、さっきから思っていたのですが」

「何ですか？ ルティエ様」

「それですわ！」

「へ？」

「ですから、その呼び方、それに話し方。

「ミュリエリアさんやあのアイルー、メイミィさんと言いましたわね、とは随分違いますわね」

「どうも、それがお気に召さなかったらしい。

「だって、偉い人なんですよね？」

「城の外では身分に意味がないことなどわかっていきますわ。むしろ、それで威張っているのは滑稽というものですわ」

「でも……」

「ミュリエリアさんも、わたくしが客でなくなったらすっかり普通の話し言葉ですわよ」

「あ、そう言えば……」

いつの間にか、『ルティエちゃん』になっている。

「だったら、ルティエさん？」

「もう一声欲しいですわね。『ルティエちゃん』で構いませんわ」

「え、でも、ルティエさんの方が年上みたいだし」

「あなた、記憶喪失ではありませんの？」

「そ、そうでした……」

「それなら、何歳でも問題ありませんわね。

わたくしと同年の十六歳という事にしておきますわ」

「ええっ、ルティエさん、まだ十六歳なんですか！？」

もっと年上だと思ってました」

婚約なんて話も出てきたし、勝手にもっと年上だと思っていた。

「まだ十六ですわ。これで問題ないですわね。

さあ、遠慮なく『ルティエちゃん』と呼びなさい」

「そんな無茶な……」。

何かこだわりがあるんですか？」

「こだわり、と言うほどのものではありませんけれど」

ルティエは少し恥ずかしそくに視線を逸らす。

「そっちの方が、友達らしいからですわ！」

「ええ？」

物凄く意外な理由だった。

「な、何ですか？ わたくしと友達になるのは嫌だとしても言っんですの？」

強気な発言だが、視線はちらちらとミラの様子を窺っている。

(あ……普通の女の子なんだ)

その姿を見て、ミラはそう思った。

絵本から出てきたような見た目といい、自分に全く縁のない世界の話といい、妙に現実感の無かったルティエが、急に身近に感じられる。

(それなら)

「なーんだ、ルティエちゃん友達になりたかったんだ。

それならそう言ってくれたら良かったのに」

「急に馴れ馴れしくなりましたわね……」

「ダメ？」

「い、いえ、よろしいですわ」

「よかった。でも、ルティエちゃんって友達いないの？」

「ずばっと言いますわね……」

「あ、ごめん」

「いえ、構いませんわ。

そうですわね、わたくしたちはあまり外と交流しませんし、私は王族ですから。

気を許せる相手は少ないですわね。

取り巻きと友人が同じ意味なら沢山いますけど」

「そっか。じゃあ、私が友達一号だね」

「そこまで少なくはありませんわよ！」

「うわぁ、ごめん……」

「せいぜい三号というところですよ」

「……ほとんど同じだよ」

「何か言いました？」

「んーん、何でもないよ」

ミラはくすりと笑って、ルティエの手を取った。

熱湯をかぶってしまった所が、少し赤くなっている。

「うーん、ちょっと赤くなってるね。ごめんね」

「構いませんわ、このくらい」

「でも、せつかく綺麗なのに」

「綺麗……」

ルティエが顔を曇らせる。

「あれ、えーと」

褒めたつもりだったミラは予想外の反応に戸惑う。

「……わたくしの身体が綺麗なままなのは、母のおかげですわ」

「お母さんの？」

「ええ。とても優しい、と言うよりはもう過保護ですわね。

わたくしもいずれ決闘を受けなければならぬ身ですので、危ない事はさせられないと言う困った人でしたわ」

言っていることは文句だが、ルティエはとても優しい目をしていました。

「ルティエちゃん、お母さんのこと大好きなんだね」

「もちろんですわ」

ルティエは間髪いれず頷き、表情を引き締めた。

「だからこそ、わたくしはあの男に好き勝手させるわけにはいかないのですわ。」

ミラさんにはわかりにくいでしょうが、長く受け継がれ、母が守った法と制度を、我欲に走るあの男に任せるなど、ありえませんわ」

「……うん。私が、やっつけてあげるよ」

母の大切なものを守るため。

難しいことを言われるよりもよっぽどわかりやすく、ミラは力強く頷いた。

「ミラさん、ありがとうございますわ」

「ミラでいいよ。友達なんだよね？」

「わかりましたわ。ミラ」

「うん。それじゃあ、早くお風呂入ろう。身体が冷えちゃっよ」

「そうですわね、風邪を引いたりしたら大変ですもの」

「ここが私の部屋だよ」

「お邪魔しますわ」

風呂から上がって、ミラはルティエを自分の部屋に案内した。

マッチを使ってオイルランプに火を灯すと、柔らかい光が薄ぼんやりと部屋を照らした。

最初に比べると、随分と調度品が増えている。

空いている部屋がないから、今日はここを一緒に使う事になった。

「あれ？」

机の上に昼間読んでいた本が置いてあった。

ミラは持ってきた覚えがないから、ミュリエリアが持ってきてくれたのだろう。

「あら、それは」

「やっぱり知ってる？」

「城では子供でも知っていますわ。むしろ、ここにある方が驚きですわね」

「行商人の人から買ったんだ。私、記憶喪失だから知らない事が多くて」

「そう言えば、そうでしたわね。」

ミラを見ると、つい忘れてしまいそうになりますわ。

あまりに普通ですもの」

「うん、私も不思議なんだけどね。
なんだか、あんまり思い出さなきゃって気がしないの。
思い出したら思い出したでいいかなーくらいで。
大事なことを忘れてるって気がしないんだよね」

「名前も忘れてるのにそんなはずがないですわ」

暢気に言うミラに、呆れ顔でルティエがツツコミを入れる。

「うーん、そうなんだよねえ。」

あれ？ そう言えば、何で私が記憶喪失だって知ってるの？」

「あ、そう言えばまだ話していませんでしたわね。」

実は、わたくしも先日密林にいたのですわ」

「え、そうだったの？」

「ミラがメイミイさんをブルファンゴから助けたとき、近くにいた
んですのよ。」

お二人とも少しも気がつかずに行ってしまったけど」

「う、うん。全然気がつかなかったよ」

「それで、少し興味深かったものですから、しばらく様子を見させて
もらいましたの」

「それで知ってたんだ」

「そういうことですわ」

ミラがうんうんと頷く。

(最後まで覗いていた事を聞かれなくて、助かりましたわ……)

話を聞いたのは偶然だが、後半つけて行ったのは事実だ。

ルティエはミラが納得してくれたことにほっと胸を撫で下ろした。

「それじゃ、謎も解けたし、もう寝よつか」

「そうですね」

「ランプ消すから、先にベッドに入ってて」

「わかりましたわ」

ルティエが頷いて、ベッドに入る。

ミラは、オイルランプに近づき、そこでルティエを振り返った。

「ねえルティエちゃん」

「何ですか?」

「一緒に寝るけど、変な事しないでね?」

「しませんわよ!

あなた、わたくしを何だと思ってますの?」

「だって、ルティエちゃん男の人嫌いだし、騎士って好きな人なんでしょ？」

「確かに男の人は嫌いですけど、だからと言って女性が好きなわけでもありませんわ。それに、あれはあくまでもお話ですよ」

「そうなの？」

「騎士は主人の命運を背負うのだから、心から信じられるものを選ぶもの。」

「ですから、その二人が恋仲になることがないとは言いませんが、同性の騎士主人もいるのですわよ？」

「あ、そうか。ごめんね、変なこと言って」

「別に構いませんわ」

「ありがとう。それじゃ、消すね」

オイルランプを消すと、部屋は暗闇に包まれる。

わずかな月明かりを頼りに、ミラはベッドに潜り込んだ。

「おやすみ、ルティエちゃん」

「おやすみなさい」

.....

「ジュジュ」。

何となく寝つけなかったミラが寝返りをうつ。

ころんと転がると、ルティエの顔が目の前にあった。

（寝てるのかな？）

そう思った瞬間、ぱちりとルティエが目を開いた。

「眠れませんの？」

「……うん」

「そうですね……わたくしもですわ」

「ルティエちゃんも？」

「ええ」

頷くと、ルティエはすつとミラに顔を寄せた。

誰かに聞かせまいとするように、頬が触れ合う距離でルティエがミラの耳元に囁く。

「わたくし、怖いんですの」

「え？」

「意外そうですね」

「う、うん」

ミラは素直に頷いた。

「ルティエちゃん、自信ありそうに見えたよ」

「もしも敗れば、全てはトレナード公のもの。

恐らく、わたくしには二度と争うチャンスさえ与えられませんわ。彼の地位を磐石とするために、子供を生むだけの道具にされてしまつてしょう。」

覚悟はありますが、怖いものは怖いですわ。

ですが、王族とは弱さを見せてはならないもの。

震えるのも泣くのもベッドの中だけと、お母様に教わりましたわ」

「……辛くないの？」

「この話を聞いたのは、お父様が死んだすぐ後でしたわ。

昼間は毅然となさっていたお母様が、夜だけは泣きながら、そう教えてくれたのですわ」

ただ、一人で耐えろというのではない。

一緒に眠るほど心を預けた相手には弱さを見せてもいいのだと。

そうして、強くある場ではそうあることができるようにするのだと。

ルティエは、ぼす、と枕に頭を預けた。

「わたくしも、怖くなったり悲しくなった夜は、母のベッドに潜り

込んでいましたから辛くはありませんでしたわ」

その言葉は、ミラの心に引っかかった。

だから、少し考えて、ミラは聞いた。

「……今は？」

闇の中で、ルティエが少し体を震わせた気がした。

「もう、子供ではありませんもの」

だから平気だと、ルティエは言った。

でも、

(そんなの、変だよ)

たった一人、弱さを見せられる母が倒れてしまって、一人きりで震えていたのだ。

それが、辛くないはずがない。

辛かったはずなのだ。

でなければ、【ランゴスタ進種】ではないとは言え、ルティエ王族がミラに怖いなどと言うはずがない。

「ね、ルティエちゃん。火傷は大丈夫？」

「ええ、大丈夫ですわよ？」

突然の話題に、ルティエが不思議そうに答える。

「うーん、心配だから、ちょっと見せて？」

「この闇の中では見えませんわよ」

「いいからいいから」

「はあ、わかりましたわ」

ミラにせがまれて、ルティエは布団から手を出した。

その手に、ミラの手がそっと触れる。

指を絡めるようにして、ぎゅっと握った。

かすかに震えているのが、ミラの手伝わってくる。

「ミラ？」

「大丈夫」

手を引き寄せて、今度は、ミラの方が顔を寄せた。

「こつんと、額を合わせる。」

「私は、ルティエちゃんの味方だよ」

「あ
」

『ルテイエ？ また来たのですか？』

『いくつになっても、お前は甘えん坊のままですね』

『大丈夫、母はいつでもあなたの味方ですよ』

(お母様……)

「えっと、私じゃルテイエちゃんのお母さんに全然敵わないだろうけど、でも、今一緒にいるのは私だから。」

「だから、ちょっとだけでも楽になるように、震えてる時に手を握ってるくらいはできるから。」

「それでルテイエちゃんが辛くなかったらいいな……ってあれ、私何言ってるんだろ」

「考えをまとめる前に、勢いで話し始めていたらしい。」

「ミラが一人で勝手に混乱する。」

「困ってしまいますわね」

「ルテイエがポツリと呟いた。」

「え？」

(うわ、やっぱり迷惑だったのかな……)

「安心して、震えが止まってしまいましたわ」

合わせた手の平から伝わっていた震えは、いつの間にか感じなくなっていた。

「震えてなくても、握っていてくれますの？」

ルティエの手に、力が入る。

「うん、もちろんだよ」

ミラは、その手をもう一度しっかりと握りなおした。

しばらく、二人はじっと手を繋いでいた。

「ミラ」

「何？」

「どうしてミラを騎士に選んだのか、答えていませんでしたわね」

「そう言えば、聞いてないよ」

【ランゴスタ進種】の中から選ばない理由は聞いたが、それはミラを選んだ理由にはならない。

「一つは、同年代の方と友達になれるかもしれないと思ったからで

すわ。

そして、もう一つは、ミラの戦う姿を見たからですよ」

「私の？」

「アイルールの少女を守って、どんな状況でも諦めずに戦う姿。

それを見たとき、わたくしは思いましたの。

『この方なら、わたくしも守っていただけではないか』と

「ルティエちゃんを、守る……」

守ること、それにはたくさん意味がある。

命を守ることであったり、あるいは、心を守ることであったり。

「守ってくださいまし この、わたくしを」

その何が求められているとしても、ミラは守ろうとするのだらう。

「守るよ、私が。絶対に」

それは多分、それがミラであるということだから。

夜遅く。

ミュリエリアは寝る前にミラの部屋を覗いてみた。

ルティアとミラが身を寄せ合って眠っていた。

(もうすっかり仲良くなったみたいね)

持っていたランプを机の上において、ベッドに近づぐ。

「あら……」

掛布団を整えようとしたとき、二人が手をしっかりと握り合っているのに気がついた。

(本当に仲良くなったのね……)

眠っている姿は、仲のいい姉妹のようにも見える。

(……少し仲良くなりすぎじゃないかしら?)

可愛い妹が取られたような気がして、少し面白くないミュリエリアだった。

第六話「姫と騎士と野獣」(前編)(後書き)

一話の長さをなるべくそろえたいので、二分割します。

第六話「姫と騎士と野獣」(後編)

翌日。

ルティエとミラは、お昼を少し過ぎた頃に、ルティエの城へと到着した。

「うわあ、大きい」

城を見上げて、ミラが感嘆の声をあげる。

正面には巨大な金属の扉があつて、二人の門番が立っている。

ルティエが近づいていくと、ルティエに気がついた門番がぎょっと目を見開いた。

「で、殿下？」

「ただ今戻りましたわ。通していただけます？」

「は、はいっ」

人が通るたびに、この巨大な門を一々開け閉めするのは効率が悪い。

そのため、門の一部に小さな扉を作つてある。

門番が、その扉を開く。

「どうぞ」

「ありがとうございますわ」

「ありがとうございます」

お礼を言っ、扉を潜る。

扉を抜けたところはかなり広い空間が取ってあった。

「中から見ても凄いね。天井も高い」

上を見上げながらミラが言っ。

ミラたちがいる場所は高い天井まで完全に刳り抜かれていて、左右に各階に上ることのできる階段が並んでいた。

「十階までありますのよ」

自慢げにルティエが語る。

「そんなに高いんだ。凄いなあ」

物珍しそうに見回すミラに付き合っ立ち止まっていると、一人の男が階段を駆け下りてきていた。

「姫！」

その姿を見たルティエが苦い顔になる。

「トレナード公爵。さすがに耳が早いですわね」

「あの人が……」

ミラも階段を見上げてトレナードの姿を見る。

脇目もふらずに走ってくる姿だけ見ると、ルティエの事を心配しているように見える。

(いい人っぽく見えるけど、見えるだけなんだろうなあ)

そんな事を考えている間に、トレナードが階段を下りて目の前まで辿り着いた。

「姫、心配したよ。私に一言もなく、どこに行っていたんだい？」

「ご心配おかけして申し訳ありませんわ。大切な用事がありましたので」

「いや、無事に帰ってきてくれたのなら構わないよ。疲れただろう？」

人の良さそうな表情を浮かべて、ルティエの手を取る。

だが、ルティエはその手を振り払った。

「トレナード公爵、ここは皆の目のある場ですわよ。わきまえなさい」

「……は、申し訳ありません。殿下」

トレナードは一瞬驚いたが、すぐに表情を繕って頭を下げた。

「それに、プライベートの態度も考え直していただきますわよ」

「それは、どういっ……」

「こういうことですね。トレナード公爵。あなたに、わたくしとの
婚約破棄を賭けて、決闘を申し込みますわ！」

「は……？」

これには、さすがに表情を取り繕えなかったようだ。

トレナードは驚愕をあらわにして聞き返した。

城の大扉を抜けた場所の広場。

ここが、決闘の舞台だった。

上階の手すりから、大勢の見物人が興味深そうに見下ろしている。

(うわぁ……何だか大変な事になってるよ……)

ルティエが言った通り、広場は人目の多い場所だ。

そこで申し込まれた決闘はあっという間に城中を駆け巡った。

最近のトレナードは無茶なやり方で反感を買っていたのも手伝って、物凄い反響だった。

(うー、早く誰か来てえ)

ルティエもトレナードも準備がまだらしく、ミラは一人だった。

各階の手すりから無数の顔に見下ろされて、ミラは少し引きつった笑みを浮かべた。

意味もなく、着慣れない防具を直してみたりする。

今のミラはいつもと違う【胴装備】をつけていた。

珍しい古龍【クシャルダオラ原種】の素材を使った鈍色の鎧を基調に、肩から背中にかけて動きを妨げない程度の長さを整えた【クインランゴスタ】の羽が三枚ずつあしらってある。

【ロイヤルナイトメイル】という、王族から騎士に送られる騎士の証なのだそうだ。

ルティエの騎士らしくそれなりの格好をしる、ということらしい。

ちなみに、今日の武器には【夜刀】【月影】を選んでいる。

「やあ、すまない。待たせたようだね」

さまざまな虫の甲殻から作られる【オウビートSシリーズ】を着

込み、棘のついた球体が先端にある【ハンマー】を持ってトレナー
ドが現れた。

なぜか、蝶をモチーフにした【パピメルシリーズ】や花をモチー
フにした【メルホアシリーズ】を着た少女達をぞろぞろとつれてい
る。

意図的なのかどうなのか知らないが、防具のサイズが大きすぎて、
幼い肌がちらちら見えている。

「この子達は私の妻たちでね。私の身を案じてついて来ると聞かな
いんだよ。」

隅の方で大人しくさせておくから、すまないが同席させてやって
もらえるかな？」

少女達の様子を見てみると、どうみても案じてついて来たように
は見えない。

目的はよくわからないが、トレナーが無理に連れて来たのだろ
う。

(…………趣味悪っ)

ミラは顔をしかめて内心で呟いた。

ルティエが散々悪く言っていたのもわかる気がする。

「まあ、いいですけど…………」

「そうか。さあ、みんな、お許しがもらえたよ。壁の近くで大人し

くしているんだよ」

少女達は声をそろえて「はい」と返事をして、ぱたぱたと走っていった。

「さて、もう一度聞くんが、君のような子供が、本当に私と決闘するのかね？」

「はい」

改めて確認するトレナードに、ミラが頷く。

「ふむ……」

トレナードは、【ハンマー】を担いで、正面の大扉に歩み寄る。

【ハンマー】を掴んで力（と言うか気）を溜め　【大剣】の溜め斬りと同じ要領だ　頭上まで振り上げて振り下ろす。

ゴウンと、重い音を立てて大扉に【ハンマー】が打ち付けられ、触れると同時に爆発したような炎が上がった。

衝撃と同時に炎を出す機構を組み込んだ、高い火属性を持つ【溶解鎚【煉獄】】である。

金属製の大扉の一部が、爆砕されて大きな穴が開く。

「これでもかね？」

「あの、壊しても大丈夫なんですか？」

ミラがとぼけた返事を返した。

トレナードとしては、力を見せ付けてやったつもりだったのだが、完全に当てが外れた形だ。

そもそも、今のは単なる溜め攻撃で、ミラにだってできる。

だから、特に驚くわけでもなく扉の心配をしてしまったのだが、トレナードは自分が馬鹿にされたように感じた。

「平民が……」

忌々しく呟く、が、ミラはきょとんとしている。

外には身分制度がないのだから、罵る文句になっていないのだ。

ざわざわと、観衆が騒がしくなった。

【ガーディアンスーツシリーズ】を着た兵達を連れて、ルティエが広場に現れたのだ。

光沢のある深緑の甲殻から作られたスマートなシルエットの鎧【タロスSシリーズ】を着て、緋色のマントを羽織っている。

【女王笛ランゴスタ】と呼ばれる武器を杖のように持っていた。

ルティエが片手を上げると、一斉にざわめきが収まる。

兵士が一步前が出る。

「それでは、これより決闘を行う。
決着は、相手を戦闘不能にするか、負けを認めさせた者の勝ちとする。」

また、死亡は戦闘不能と見なさず、無効試合とするが、過失による殺害は罪に問われない」

「双方、よろしいですか？」

ルールを言い終えた兵士が下がり、ルティエが確認する。

「はい」

ミラが頷く。

「ああ、問題はないよ」

トレナードも、そう答えてカブトムシの頭のような【頭装備】をかぶり直した。

「それでは」

ルティエが高く手を上げる。

「始め！」

ミラは、合図と同時に【夜刀】【月影】を抜き放った。

気刃状態だと上手く当たると防具ごと斬りかねないから、練気は使わない。

「さあ、始めようか」

余裕を見せているようなトレナードだが、決して油断しているのではない。

トレナードは自分自身で何度も決闘に勝利してきた実力者なのだ。

「行きますっ」

【夜刀【月影】】を持ち上げながら踏み込む。

縦の斬り下ろし。

トレナードは横っ飛びに躲し、小さな動きで【溶解鎚【煉獄】】を振る。

ミラは、少し後退してそれを避けた。

だが、トレナードは体を一回転させてさらに追撃。

加速の乗った鎚がミラに迫る。

ミラは【夜刀【月影】】を合わせて、上手く力の方向を変えた。

刃の上を、炎を引きながら【溶解鎚【煉獄】】が滑っていく。

その炎を軌跡を追うように、ミラが刃を薙ぎ払う。

トレナードは【溶解鎚【煉獄】】の柄でそれを受け止めた。

力を入れて押し返し、距離を離して大上段から振り下ろす。

素早くミラが飛び退き、爆炎が地面を抉る。

飛んできた小さな破片を片手で払い除け、【夜刀【月影】】を突き出す。

【ハンマー】を振り下ろした姿勢のトレナードの目の前に、【夜刀【月影】】の切っ先が現れ、斬り上げる。

持ち上げている隙はない。

そう判断して、トレナードは持ち上げるのではなく引きずりながら横に転がった。

勢いそのままに起き上がる。

が、既にミラが詰めてきていた。

振り上げて、斜め下へ。綺麗な円を描いて一閃。

バックステップで飛び退いたトレナードの体ギリギリのところを刃が通り抜けた。

「やるじゃないか。少し侮りすぎていたようだね」

「……そのまま手加減してくれたら嬉しいんですけど」

「残念だね、聞けないよ」

「だと思いました」

短い会話を挟んで、仕切り直し。

「さあ、行くよ」

いきなりトレナードがうって出る。

振り上げた【溶解鎚】【煉獄】が、気で薄っすらと光っていた。

会話をカモフラージュにして、気を溜めていたようだ。

(この人卑怯だよ)

心の中で叫ぶミラの目の前に【溶解鎚】【煉獄】が落ち、盛大に土煙を上げる。

いや、土煙だけではなかった。

土と一緒に、【溶解鎚】【煉獄】が下からミラを襲う。

ミラは一步下がって何とか避ける。

トレナードはその勢いでぐるりと一回転。

側面からミラを襲う。

ミラはその場にしゃがんで、頭上に【夜刀】【月影】を持ち上げた。

横向きの力がかかっていた【溶解鎚【煉獄】】は、それをレールにされて上を通り過ぎてしまった。

トレナードの身体が泳ぐ。

好機だったが、ミラは追撃しなかった。

目の前に、【夜刀【月影】】の刃を立てる。

受け流しただけなのに、その瞬間に刃が僅かにたわむのを感じたのだ。

幸い、まだ異常はないようだったが、このまま戦うと折られかねない。

武器を破壊されてしまえば、負けみたいなものだ。

仕方なく、ミラは刃に練気を込めた。

気刃状態になった【夜刀【月影】】が輝く。

だが、手加減しているのか、その輝きは薄い。

「おや、君も手加減かい？」

「そついう訳じゃないですけどっ」

また時間稼ぎをさせるつもりのないミラは、言いながら飛び出す。

斬り払い。

トレナードは後退してそれを避ける。

ミラが【夜刀】【月影】を構えなおしながら突っ込む。

だが、同時にトレナードも前に出た。

距離が詰まり過ぎ、長い【太刀】が振れなくなる。

【溶解鎚】【煉獄】の柄で胸を突かれて、ミラがよろめいて後ろに下がる。

横薙ぎに振られた【溶解鎚】【煉獄】を、刃で受け止め、力任せに弾き返した。

(ミラ? どうしたんですの?)

戦いの様子を見ていたルティエは、ミラの様子がおかしいのに気がついた。

攻撃が雑になっていると言うか、動きが悪い。

ミラは、何かを振り払うように頭を振ると、【夜刀】【月影】を構え直した。

トレナードが突っ込んでいって、【溶解鎚】【煉獄】を斜めに振り下ろす。

ミラは、それを【夜刀】【月影】で弾き返した。

力負けして、体が泳ぐ。

すかさず【溶解鎚【煉獄】】が打ち込まれ、ミラは何とかそれを受け止める。

明らかにおかしかった。

今は、どちらも受け止めるような攻撃ではなかったし、最初の頃のミラも真っ向から受けられないように気をつけていた。

練気で刃を強化しても、それで戦い方を変えとは思えない。

「ミラ……」

思わず身を乗り出し、そして、ルティエはそれに気づいた。

何か、甘い匂いがかすかに漂っている。

(これは……)

ルティエはすぐにその正体に気がついた。

【ランゴスタ進種】の持つ能力である【フェロモン】の匂いだ。

【ランゴスタ進種】が体から放つそれは、思考能力を低下させ、濃度が濃くなれば、理性の働きを止めてしまう。

だが、これは同じ種族には効果がないため、ルティエも今まで気がつかなかつたのだ。

(でも、これほどの効果は無いはずですわ……)

この【フェロモン】は、一人が発する量はそれほど多くない。

せいぜい、少しばかりとさせるくらいが限界のはずだ。

広場を見回したルティエの目に、あるものが飛び込んでくる。

それは、トレナードの連れてきた妻たちだった。

もしも、その全員が【フェロモン】を発していたとしたら……

「っ、卑怯ですわ。トレナード公爵っ」

「殿下、決闘中です」

止めさせようとしたルティエを兵が止める。

「公爵が卑劣な手を使っているのですわ！」

「残念ですが、彼女は殿下の騎士です。

いくら殿下でも、この決闘には口出しできません。

公平さを維持するためですので、ご理解ください」

「な、あなた……」

その時になってようやく、ルティエはその兵の顔に見覚えがあるのに気がついた。

そう、確か、トレナードと一緒にいるのを見たことがあったのではないだろうか？

（はめられた、ようですわね）

トレナードは、ルティエに決闘を持ち出されたとしても、勝利するための策を用意していたのだ。

「殿下、そう心配なさらずとも、もう終わります」

「え……」

ルティエの目の前で、ミラがトレナードに踊りかかった。

集中などできるはずもなく、刃の練気は消えてしまっている。

「あああああ！」

叫び声を上げて、【夜刀【月影】】を大上段に振りかぶる。

「終わりだよ」

トレナードは、にやりと笑い、がら空きになったミラの胸に【溶解鎚【煉獄】】を叩き込んだ。

「っが……」

胸元に炎の花が咲く。

ミラは、空中を吹き飛び、仰向けに地面に倒れた。

そして、そのままピクリとも動かない。

「ミラっ！」

ルティエが悲鳴のような声を上げる。

駆け出して傍に行きたかったが、王族としての立場がそれを許さなかった。

「心配しなくてもいいよ。君が与えた鎧が命を守っただろうからね」

「トレナード公爵、あなたと言う人は、どこまで……っ」

ルティエの怒りを、トレナードは悠々と受け流す。

「ともあれ、決着はついたようだね。姫、合図を」

「た、大変です！」

血相を変えて、外で見張っていた門番が転がり込んできた。

「騒がしいね。今は決闘の決着がつくところなんだよ」

「それ所じゃないですよ！」

「どつしたのです？ 報告なさい」

尋常でない様子に、ルティエが聞く。

「はっ、それが」

報告より早く、『大変』の方がやってきてしまった。

大扉に、外側から何かがぶつかり、枠から外れた扉が内側にゆっくりと倒れた。

その向こうから、桃色の毛皮の巨体が姿を現す。

「ババコンガが！」

「見ればわかりますわ！」

頭頂部の毛を鶏冠の様にまとめた【コンガ】のボス、【ババコンガ】である。

器用に尻尾でキノコを持っている。

「なぜ、ここにババコンガが!？」

困惑もあらわに、トレナードが叫ぶ。

この城は【密林】に近いが、それでも【エリア】の中ではない。

モンスターたちの行動範囲を区切ったものが【エリア】なのだから、そこから離れた場所は基本的に安全なはずなのだ。

見張りが立っているのは、どこにでも現れる【ハンター】の警戒のためだ。

「このババコンガ、様子がおかしいですわ」

ルティエの言う通りだった。

【ババコンガ】の顔と尻が真っ赤になっている。

極度の興奮状態を示すもので、戦いで手傷を負い、怒ったときなどに見られる特徴だった。

「一体、何に怒っているんですの？」

まだこちらからは何もしていないのだ。

勝手に襲ってきて怒られても困る。

「殿下！ お下がりにください！」

揃いの【ガーディアンスーツシリーズ】を纏った衛兵たちが駆けつけて来た。

【近衛隊正式銃槍】を【ババコンガ】に向ける。

「撃てえ！」

号令一下、【近衛隊正式銃槍】が次々に火を吹く。

火薬の爆発による爆風でダメージを与える槍、【ガンランス】なのだ。

【ボウガン】と違って弾は出ないが、ただの爆風と言ってもその

威力は馬鹿にできない。

音に匹敵する速度で伝わり、圧力をもって攻撃するそれは、立派な凶器になりうる。

【ババコンガ】の表皮が引き裂かれ、桃色の毛が散る。

だが、【ババコンガ】はその攻撃に何の反応も示さない。

ただ、何かを探すかのようにきよるきよると見回している。

そして、唐突に一人の衛兵に目を向けた。

四つんばいになって、衛兵に向かって突進する。

「ひっ」

その迫力に気おされて、衛兵が【近衛隊正式銃槍】の柄についている引き金を引く。

弾倉が回転して薬筒が送り込まれ、火薬が炸裂。

爆風が【ババコンガ】を襲う。

柔らかい眼球が破裂しかねない爆圧に襲われているのに、【ババコンガ】は突進を続ける。

「く、来るなあ！」

連続で砲撃を放つ。

二回、三回、四回目に、ガチと絶望的な音が響いた。

砲撃に必要な火薬の薬筒を使い切ってしまったのだ。

【ババコンガ】が、衛兵を鷲掴みにして、地面から持ち上げる。

「離せっ、このっ」

槍で【ババコンガ】を突き、仲間も一斉に攻撃を加える。

だが、【ババコンガ】はそれを完全に無視して、衛兵の胴と腰を持った。

「う、嘘だろ？」

衛兵が引きつった声で呟く。

【ババコンガ】は、ぐっと力を入れて、衛兵の体を引っ張る。

防具を着ていても、引く力にはどうしようも無かった。

「ぎゃあああああああ！」

悲鳴が響き、そしてすぐに静かになった。

ルティエは思わず目を背けた。

衛兵の体は、上半身と下半身に引きちぎられていた。

【ババコンガ】は、その上半身の方を、口に放り込む。

もごもごと口を動かし、血塗れになった防具を吐き出した。

また口を開いて、前脚に残っていた下半身に喰らいつく。

【ババコンガ】は、確かに戦闘中でも食事をする事もあるモンスタ―だが、これはいくらなんでも異常だった。

「……！　そういうことでしたのね」

はっと、ルティエが何かに気づく。

「こ、これは……一体どういうことだ？」

「まだわかりませんか？　あなたのせいですわ」

呆然と呟くトレナードに、ルティエが冷たく言い放った。

「あのババコンガは、食欲を満たすために、本能のまま動いているのですわ」

扉に大穴を開けた状態で、理性を麻痺させる【フェロモン】を使ったために、それが外に流れてしまったのだ。

それも、複数人が一斉に使っていたのだから、その量はかなりのものだっただろう。

この【ババコンガ】はそれによって、極端に本能を刺激された状態になった。

生活のテリトリーさえ忘れて、この城まで餌を求めてやってきたのだ。

【ババコンガ】は今度は地面に座り込んで尻尾に掴んでいたキノコを食べ始めていた。

毒々しい紫色のそれは、【毒テングダケ】だろう。

好機と見て、衛兵たちが【ババコンガ】に突きかかる。

「いけませんわ！」

ルティエが叫ぶが、遅かった。

【ババコンガ】は頭を低くして、毒の混じったブレスを吐きかける。

まともに浴びてしまった衛兵たちが、ばたばたと倒れる。

「無事な者は毒を浴びた者を運んで治療しなさい！」

ああ、その娘たちも連れて行くのですわよ！」

「は、はっ！」

ルティエの指示で、衛兵とトレナードの妻たちが逃げていく。

【ババコンガ】が獲物を追いかけようとする。

「行かせませんわ」

ルティエは、その前に立ちほだかり【女王笛ランゴスタ】でぶん殴った。

凍気を放つ先端が氷の粒を撒き散らしながら【ババコンガ】の横面を打つ。

そして、【女王笛ランゴスタ】を逃げようとしていたトレナードの前に突き出す。

「トレナード公爵、手伝って貰いますわよ」

「いや、しかし、避難したほうがいいのでは？」

「これ以上被害を出しては、お母様に面目が立ちませんわ。無事に討伐できたなら、議会で多少の弁護はしてさし上げますわ」

これは、トレナードの失態だった。

公爵からの降格、下手をすれば、今回の罪を問われて罪人にされるかもしれない。

「わ、わかった」

ここで逃げても、どうせ未来はない。

トレナードは【溶解鎚】【煉獄】を構えてルティエに並んだ。

「来ますわよ！」

邪魔なマントを脱ぎ捨てて、ルティエが鋭く叫ぶ。

「わかっているよ」

【ババコンガ】が宙に飛ぶ。

ルティエとトレナードは、ぱっと左右に分かれた。

地響きを立てて【ババコンガ】が腹から地面に落ちる。

ルティエとトレナードは左右から踊りかかる。

ルティエが【女王笛ランゴスタ】を振り回し、トレナードが【溶解鎚【煉獄】】を連続で振り下ろす。

炎と氷が【ババコンガ】の背中に散る。

これはさすがに効いたのか、【ババコンガ】が呻きながら前方に突進する。

ルティエとトレナードはすかさず後を追う。

が、破裂音と共に、黄色い霧もやが立ち込めた。

鼻を突くような悪臭が漂う。

【ババコンガ】の放屁による攻撃だ。

凄まじい臭気のせいで、呼吸もままならない。

ルテイエたちは慌てて霧の中から脱出した。

新鮮な空気を吸い込む。

「けほ、けほっ。やってられませんわ！」

「姫！」

トレナードの警告。

黄色い霧を飛び越えて、【ババコンガ】がボディプレスをかけてきていた。

ルテイエは横に飛び退いて躲す。

地面を揺らした【ババコンガ】は、トレナードに向かって突進する。

「突っ込んでくるだけとは、芸がないね」

トレナードは【溶解鎚【煉獄】】に力を溜めながら【ババコンガ】を待ち、タイミングよく振り抜いた。

右から左に振られた【ハンマー】が【ババコンガ】の頭を叩き、動きが止まったところで下から振り上げる。

顎を打ち抜かれた【ババコンガ】が仰け反る。

トレナードは【溶解鎚【煉獄】】を大上段に振り上げて、振り下ろす。

だが、【ババコング】は仰け反った勢いで体を反らし、腹を膨らませた。

角質の腹が、【溶解鎚【煉獄】】を弾き返し、これが予想外だったトレナードは後ろに跳ね返された【ハンマー】の重さに引きずられて尻餅をついた。

そこに、【ババコング】が毒の混じった吐息を吐きかける。

動けなかったトレナードは、なすすべなく、毒に侵されてしまった。

何とか立ち上がったが、すぐに毒が回り始め、足元がふらつく。

【ババコング】は弱った獲物に無慈悲な目を向ける。

その時、戦場に笛の音が響いた。

ルティエが【女王笛ランゴスタ】を吹き鳴らしたのだ。

【狩猟笛】に分類されるこの武器は、吹き鳴らす旋律を組み合わせることで、精神に作用し、さまざまな効果を起こす。

どうしてそんな効果があるのかはよくわかっていないのだが、実際に起こるのだ。

【進種】たちは、それが【人間】の技術なのだろうと勝手に思っている。

だが、今回は特定の旋律を吹いている余裕はなく、音で【ババコング】の気を引こうとしたのだ。

しかし、食欲に支配されている【ババコング】には、もはや目の前の獲物しか見えていない。

「面倒な方ですわね！」

ルティエは吹くのを止めて【ババコング】に駆け寄り、振り上げた【女王笛ランゴスタ】を後頭部に叩き付けた。

さつきから散々頭を叩かれていた【ババコング】は、めまいを起こして、どう、と地面に倒れる。

「何をしていますの。早くお逃げなさい」

トレナードにルティエが言い放つ。

「いや、しかし……」

「そんな体では足手まといですわ」

「……その様だね。」

でも、一つだけ聞かせて貰えるかな？」

「何ですか？」

「君にとって、私は死んだ方が都合がいいはずだろうか？
どうして助けたんだい？」

「……わたくし、確かにあなたの事は嫌いですわ。ですけど、毒はもっと嫌いなんです。毒で死んだりして、わたくしに嫌なことを想像させないで下さいませ」

話は終わったとばかりに、ルティエは背中を向ける。

トレナードは、重い体を引きずって広場を出る。

すぐに衛兵が駆けつけてきて、彼の体を支えた。

「薬を早く！」などと叫ぶ声を聞きながら、トレナードはゆっくりと目を閉じた。

(なるほど……それが、王たる者なんだね……)

閉じられていく瞳に映る背中も、微塵の不安も見せず、ただ堂々としていた。

(さて、とうとう一人になってしまいましたわね)

【女王笛ランゴスタ】を担ぎなおしながら、ルティエはそんな事を考えていた。

目の前では、意識を取り戻した【ババコンガ】が起き上がっている。

後ろ脚で立ち上がり、前脚を振り上げてルティエを威嚇する。

「頭は冷えていないようですわね」

ひゅっと【女王笛ランゴスタ】を振る。

「わたくしが頭を冷やしてさしあげますわ!」

頭を狙って、【女王笛ランゴスタ】を振り下ろす。

【ババコンガ】はバックステップで飛び退り、空振りした【女王笛ランゴスタ】が地面を叩く。

【ババコンガ】が、ルティエに向かって突進する。

ルティエは横に走ってそれをやり過ぎ、行き過ぎた【ババコンガ】を追いかけて、脇腹に【女王笛ランゴスタ】を叩き込む。

【ババコンガ】は振り向くと同時に、毒のブレスを吐く。

ルティエは飛び込むように前転して躲し、【ババコンガ】の側面に回り込む。

【女王笛ランゴスタ】を振るが【ババコンガ】が前に走っていつてしまったため、尻尾を叩くだけに終わった。

【ババコンガ】が振り向きざまに跳躍する。

ルティエは前に走って、【ババコンガ】の下を通る。

ルティエの背後に【ババコンガ】が落ちて、地面を揺らす。

一瞬ふらついたが、体勢を立て直して振り向く。

【ババコンガ】も既に振り向いていた。

【ババコンガ】が、大きく前脚を振り上げる。

振り下ろされる右前脚を、すれ違うようにして避ける。

攻撃のために体の向きを変える。

「え……」

目の前に、【ババコンガ】の爪があった。

すれ違った瞬間に、【ババコンガ】の方も九十度方向を変えていたのだ。

振り下ろされた左の爪を【女王笛ランゴスタ】で受ける。

だが、支えきれずに手から弾き落とされてしまった。

【ババコンガ】が、体を捻りながら思いつきり右前脚を振り上げる。

そして、凄まじい勢いで振り下ろされた。

ぱっと、赤い血が飛び散り、ルティエの頬を濡らす。

【ババコンガ】の爪が、右腕に深々と突き刺さっていた。

ぼた、ぼた、と地面に血の雫が落ちる。

爪の突き刺さった右腕がだらりと下がり、ルティエは抱き込まれていた腕から開放された。

「ミラ、さん……」

呆然と、ルティエが呟く。

間一髪の所で、ミラが後ろからルティエを引っ張ったのだ。

「ミラ！」

ルティエの声にミラは答えない。

傷ついた右手を垂らして、低く唸っている。

まだ【フェロモン】の影響から脱していない。

いや、むしろ完全に意識が飛んでいるようだった。

それなのに、ミラはルティエを助けた。

(一体、どういうことですか?)

ミラは、停止した思考の中を漂っていた。

理性は完全に働きを止め、ただ本能のままに動くはずだった。

だが

ミラの中には、何もなかった。

理屈ではない、無意識下の階層。

そこに刻まれていたもの、それは、十種類の武器の扱い方だけ。

種の保存、生きようとする本能さえ存在しない。

ミラが死にたくないと思ったとすれば、それは全て頭で考えて思っているのだということになる。

生きようとも思わないから、たとえ自分の身に危険が迫っていても、戦えない。

それなのに、ルティエを助けるために、わざわざ飛び込んでいた。どうしてだろうと、思考にならない思考が問う。

何で私は戦うの？ と。

その答えは

『ミラ』

青い髪の少女が、優しく笑う。

(……そうだ。私は言われたんだ)

誰かを守る優しい心、それが、ミラをミラたらしめるのだと。

それが、まっさらだったミラの心に初めて深く染み込んだ言葉だった。

記憶を失う前のミラがどんな存在だったのか、わからない。

でも、今ここにいるミラという少女が、確かにミラだというための根拠。

それが、守ること。

誰かを守るとき、ミラは頭で理由を考えるだろう。

大切な人だから、思いに共感したから、頼まれたから、殺されるのが可哀想だから、等と。

だが、それとは別に、心の根源から守れといわれるのだ。

記憶を失った後に生まれた、何もかも不確かな自分を自分と認識するために、そのためにミラは守るのだ。

より正確に言うなら、ミュリエリアの言葉を基準にして、今のミラをミラだと認める。

それで、自分自身が何者かわからない恐怖から身を守ってるのだ。

それが、本能のレベルさえほとんど白紙だったミラに刻まれた、行動原理。

誰かのため、そして、自分のために、

(マ、モル……)

「ガアアアツ！」

獣、いや、竜の如く咆哮する。

【ババコンガ】の本能が、それを恐れた。

身を竦ませる【ババコンガ】を、押し返す。

右手は動かない。

左手一本で【夜刀【月影】】を持つ。

切っ先が地面をガリリと削り、下から弧を描く。

右の前脚を深々と斬られた【ババコンガ】が二、三步後退する。

流れるような動きでミラが追撃。

真一文字に薙ぎ払われた【夜刀【月影】】が、【ババコンガ】の胸を切り裂く。

【ババコンガ】が前脚で薙ぎ払う。

ミラはわずかに体を反らしてそれを躲す。

爪が頬に掠り、赤い線が引かれる。

最小限の動きで躲したミラは、下から【夜刀【月影】】を突き上げる。

切っ先が【ババコンガ】の腕を貫き、胸に突き刺さった。

「凄い……ですわ……」

ミラの動きは、思考が働いていないのにも関わらず、洗練されている。

いや、むしろ、普段のミラよりもずっと鋭い。

意識して戦うよりも、本能の命ずるままに戦っている今の方が、強いのだ。

「まさか、武器の使い方を本能に刻まれているとも言っんですの？」

（ありえませんか！ ミラ、あなた何者なんですか？）

【ババコンガ】が胸を貫く【太刀】を握り、引き抜こうとする。

ミラはそうはさせまいと力を込めるが、片手ではそれ以上押し込めない。

ミラは押すのを諦め、【ババコンガ】の力を利用しながら斜めに引いた。

傷を広げながら、刀身が抜け落ちる。

傷口から激しい勢いで血が溢れ出し、ミラに降りかかった。

一瞬、ミラの視界が閉ざされる。

血を拭ったとき、【ババコング】の爪が振り下ろされていた。

【夜刀【月影】】を掲げて、爪を受け止める。

だが、やはり片手なのが足を引っ張る。

じりじりと、押し負けていく。

ミラの顔がゆがむ。

「ミラ、手伝いますわよ」

ルティエが【女王笛ランゴスタ】を吹き鳴らす。

旋律が組み立てられ、ミラの体に響く。

傷の回復を促す癒しの旋律だ。

継続的に働く治癒力強化から、短時間に強い効果を持つ回復の旋律に繋ぐ。

ミラが、右手をゆっくりと持ち上げ、しっかりと柄を握った。

気が練り上げられて、刀身が煌々と赤く輝く。

刀身を一回り大きく見せるほどの輝きは、ベルゼラの見せたもの以上だ。

赤い刀身が、爪に食い込み、切り落とした。

押さえる力がなくなり、隠されていた刀身が展開する。

【ババコンガ】が、ミラにのしかかる。

自分の体で、ミラを潰すつもりなのだろう。

ミラは、【夜刀【月影】】を振りながら、一步下がった。

【ババコンガ】の巨体が、地面に倒れ込む。

だが、その体にはあるべきものがなくなっている。

もう動かなくなった【ババコンガ】の体の上に、一太刀で刎ねられた首が落ちた。

【夜刀【月影】】から練気の輝きが消え、地面に転がる。

そして、ミラの身体がゆっくりと倒れていった。

「ミラ！」

ルティエは慌ててミラに駆け寄っていった。

目が覚めると、見覚えのない天井と、ルティエの顔が目に入った。

ミラは、大きなベッドに寝かされているようだった。

「ミラ、気がつきまして？」

「ルティエ、ちゃん？」

「ええ。体はどうですか？」

そう聞かれて、ミラは体を起こした。

全身の状態を確かめて行く。

ルティエの演奏で大部分の怪我は治っていたし、残っている傷にもきちんと手当てがしてあった。

「うん、大丈夫みたい」

「よかった……心配しましたのよ」

「ごめんね、ルティエちゃん。ルティエちゃんは大丈夫？」

「ええ。ミラが守ってくれたおかげですわ」

「そっか。良かった」

「ミラ、起きられますかしら？」

「うん、大丈夫だよ」

ルティエに答えて、ミラはベッドから立ち上がった。

「ほら、全然大丈夫」

「それじゃあ、わたくしについて来てくださいますか？」

「いいよ。どこに行くの？」

「わたくしの母の所ですわ」

.....

長い廊下を歩いて、一つの扉の前に立つ。

「ここですわ」

ドアをノックして、部屋に入る。

「お邪魔します」

「ミラ、こちらですわ」

ルティエに呼ばれて、ベッドの傍に近づく。

ベッドを覗き込んで、ミラは息を呑んだ。

一人の女性が眠っていた。

顔色は紙のように白く、頬がすっかり痩けてしまっている。

「……この人が？」

「ええ、母ですわ。ミラを紹介したかったのですが、今日は起きていらっしやらないようですわね」

「起きてる日もあるの？」

「最近では、数日に一度くらいですわ」

サイドテーブルにおいてあるグラスと綿を取り、乾燥しきった唇に水を含ませる。

そして、それをテーブルに戻してから、ルーゼリアの手を取って話しかけた。

「お母様、今日はわたくしのお友達を紹介しますわ。ミラ」

「うん」

ルティエに促されて、ミラが近くまで歩み寄る。

「はじめまして、ルーゼリアさん。私はミラと言います。ルティエちゃんの友達第三号なんですよ」

「もう、何を言っていますの」

「でも、ルティエちゃんが言ったんだよ」

「そう言えば、そうでしたわね」

ルティエはそう言って、ルーゼリアに語りかける。

「とても頼りになる方ですよ。わたくしは、ミラに騎士になってもらいたいと思っていますのです」

ルーゼリアの手を離して、ミラと向かい合う。

「ミラ。お母様の前で、もう一度申し込みますわ。わたくしの騎士になってくださいませ」

「ルティエちゃん？」

「でも、私もう騎士だよね？」

「いいえ。違いますわ。」

わたくしは、最初、あなたにトレナード公爵と決闘をしていただけたくて、騎士になって欲しいとお願いしました。

ですが、今は、ただあなたに傍にいて欲しいのです。

だからこうして、もう一度申し込んでいますわ」

「それって……ルティエちゃんと一緒にこのお城に住むってこと？」

「そういうことになりますわね」

「それは……」

ミラは少し口ごもった。

だが、すぐにはつきりと答えを出す。

「ごめんなさい」

頭を下げる。

「……何となく、そう言われると思っていましたわ。ミラには、帰りた場所があるのですわね」

「ルティエちゃん……。でも、騎士じゃなくても友達だから、困ったときは絶対助けるよ」

「その言葉だけで、十分ですわ。ミラ、もう少しだけお母様とのお話に付き合っただけですか？」

「うん。もちろんだよ」

ルティエの問いに、ミラは喜んで頷いた。

その日の夜。

ミラは部屋のベッドの上でぼんやりしていた。

「お母さん、か……」

ミラには家族の記憶がない。

その事をそれほど気にしたことはなかった。

いないのが当たり前だと思っただけに、綺麗に忘れていたのだろうか。

覚えていないことを寂しいと思ったこともなかったのに。

(私の家族も、どこかにいるのかな?)

母親に語りかけるルティエの姿を思い出す。

突然に、胸の中に冷たい風が吹き抜けた気がした。

「寂しいのかな、私……」

昨日は、このベッドにルティエがいた。

一人きりで眠るベッドは、なぜか、とても冷たい。

「うー……」

ミラは、ベッドの上で一人唸った。

……

ミュリエリアは、寝る仕度を整えて、二階へと上がった。

「あ、お姉ちゃん……」

「ミラ?」

廊下の壁にもたれて、ミラが立っていた。

「どづしたの？」

「うん、あのね……」

恥ずかしそうに、持っていた枕に顔を埋める。

ひょこつと目だけを出して、ミュリエリアの顔を上目遣いに窺う。

「一緒に寝ても、いい？」

「ええ。いいわよ」

断る理由もない。ミュリエリアはすぐに頷いた。

……

ミラとミュリエリアは、並んでベッドに入った。

ミラは、ミュリエリアの腕をぎゅっと握って、何を言ってもなくじっとしている。

「どづしたの、ミラ」

「うん……何だろっ……」

要領を得ない返事。

ミラ自身にもよくわからない複雑な感情を抱えているようだった。

「ミラ」

ミュリエリアはミラの背中に手を回して優しく抱きしめた。

言葉だけが伝える手段ではない。

温もりや、鼓動が伝わる。二人の気持ちがあふつと重なっていく気がした。

「ミラ、ありがとう」

突然、ミュリエリアが言った。

「え？ 何が？」

「そうね……帰ってきてくれて、かしら」

「？ 変なお姉ちゃん」

そう言って、ミラは笑った。

「私が帰ってくる家は、ここだよ」

そう言った後、少し慌てた感じで「だよね？」と伺いを立てる。

「ええ。もちろんよ」

微笑んで、ミュリエリアが頷く。

帰る家がある。

私の家族は、ここにいる。

た。
いつの間にか、ミラの心に風を呼んでいた隙間は、埋められてい

NEXT>第七話「水を渡る者」

<簡易キャラクター紹介>

名前：ルティエ

年齢：16

性別：女

種族：ランゴスタ進種

能力：【フェロモン】

名前：トレナード

年齢：24

性別：男

種族：ランゴスタ進種

能力：【フェロモン】

第七話「水を渡る者」(前書き)

(修正)

素材集めの代行についての部分に加筆しました。

第七話「水を渡る者」

こぼこぼと泡が水面に浮かんでいく。

水の中は陸とは全く違う景色を見せていた。

揺らめく光の中を、草が揺らめき、魚が泳いでいる。

幻想的な光景の中に、一人の青年がいた。

瑠璃色の髪を揺らめかせて、同色の瞳でぼんやりと水面を見上げている。

手首と足首に鱗に覆われたヒレのようなものがある。【ガノトトス進種】だ。

水中という環境に適応した彼らは、水中では皮膚から酸素を取り込むことができる。

水の中は、彼らのテリトリーなのだ。

……なのだが。

その青年の顔は真っ青だった。

手が水をかくが、その指は空しく水を引っかくだけだ。

青年が声にならない声で叫ぶ。

(誰か、助けてくれええええ！)

口から溢れた気泡が水面に上がっていく。

しばらく後、偶然通りかかった同族に救い出されるまで、彼は水底に沈んでいた。

MONSTER HUNTER EVOLVE

第七話「水を渡る者」

朝の村に、ギャオギャオギャオ、と独特の音が響く。

【フルフル原種】と呼ばれる飛竜の鳴き声だ。

どつやら、その声の出所はミユリエリアの工房らしい。

工房まで歩いてきた村長がぎょっとして足を止めた。

「武器の調整中なんです。気にしないで下さい」

店先のカウンターでミユリエリアが苦笑しながら話しかけてきた。

「ミューリイちゃんが店番をしているのは久しぶりだね」

「そうですね。最近はミラに任せっぱなしでしたから」

「すっかりこの店の看板娘だね」

「ええ。随分助けられています」

「うんうん、それはいいことだね。あ、そうそう。手紙が届いていたよ」

村長が二通の手紙を取り出す。

この世界で、遠距離での連絡手段はやはり手紙だ。

一般的に使われるアイルーの郵便屋だろうか。

定住しないで生活する人にも手紙を届けてくれるので重宝されている。

逆に、一箇所に住んでいる人は道を覚えさせた鳥を使ったりもする。

集落の場所を覚えさせた鳥を売る鳥売りもいるくらいだ。

そして、そう言う風に売られた鳥は、村の代表者の所に手紙を届ける。

村長はそれを持ってきてくれたようだ。

「ありがとうございます……あら？」

宛名を見て、ミュリエリアは少し驚いた。

「これ、ミラ宛だわ」

「そうなんだよ。いやあ、ミラちゃんも村の一員になったということだね」

「ええ、そうですね。ミラの家は、ここですから」

その時、ギャオギャオと続いていた声が、ギャーと、一声を上げて静かになった。

「あら、どうしたのかしら？」

「すみません、ちょっと行ってきます。お手紙、ありがとうございます
ました」

ミュリエリアは村長に頭を下げて、店の中に入っていった。

「あれ？」

ミラは、首を傾げてぶんぶん振り回していた【ハンマー】を下ろした。

フルフルの皮で覆った袋状のヘッドを持つ【フクロダダキ】と呼ばれるハンマーだ。

その内部に発電機構を内蔵しており、打撃と共に雷属性のダメージを与えることができる。

その機構の構造上、振ると【フルフル原種】の鳴き声をするのが大きな特徴だ。

なのだが、ミラがいくら振っても、うんともすんとも言わなくなってしまうた。

「あれえ？」

「ミラ、どうしたの？」

「あ、お姉ちゃん」

工房を抜けて、ミュリエリアが出てきた。

「うん、急に声がしなくなちゃって」

「そう、やっぱり……」

「え？」

「修理を頼まれたのだけど、もう随分ボロボロだったの。
一から作り直すと値段が高くなってしまつから、何とかしてみた
かったのだけれど、やっぱり作り直さないとダメみたいね」

「そうだったんだ」

「ええ。悪いけど、作業台に運んでおいてくれる？」

「うん、わかった」

「それから、手紙が来てたわよ」

「手紙が？」

ミラが驚く。

「誰から？」

「ルティエちゃんとメイミィちゃんよ。作業台に置いておいたから」

「ルティエちゃんとメイミィちゃんから？ 嬉しいなあ」

ミラは嬉しそうに笑って、工房の中に入っていった。

「あー、よかったあ」

ミラは読み終えた手紙を机に置いた。

「何が書いてあったの？」

作業台で【フクロダダキ】を分解していたミュリエリアが手を止めて聞く。

「うん、あのね、ルティエちゃんの婚約、破棄されたんだって。それと、メイミイちゃんは試験に合格したって」

「あら、そうなの？」

「うん」

ルティエからの手紙には、城の近況が書いてあった。

トレナードは城に【ババコンガ】を招いてしまった責任を追求されて爵位を剥奪。

それに伴って、ルティエとの婚約も白紙に戻されることになった。

取りあえずルティエが王代になり、議会と図ってトレナードの定めた法制度を撤回した。

トレナードの妻たちは罪に問われることはなかったが、行き場を失ってしまい、ルティエが侍女として引き取っただらしい。

ようやく、色々な問題が片付いて、元通りの日常を取り戻すことができたと書かれていた。

「そう。良かったわね」

「うんっ」

ミラが頷く。

そのとき、店からベルの音が聞こえてきた。

「いけない、店番のことを忘れてたわ」

「あ、お姉ちゃん、私が行くよ」

「そう？ それじゃあ、お願いね」

「うん」

頷いて、ミラは店に出て行く。

「すみません。お待たせしました」

「いや、そんな……あぁっ、図々しく呼びつけたりして、すんません！」

店先にいたのは、ミラより少し年上に見える、瑠璃色の髪 of 青年だった。

なぜかいきなりぺこぺここと頭を下げる。

「あのー、頭を上げてください」

「あ、すみませんっ。店先でこんな、迷惑っすね」

なぜか物凄く腰の低い人だ。

偉そうなお客さんは結構来るが、こういう人は珍しい。

「えーと、それで、ご注文は？」

このままだと話が進みそうにないから、ミラは話を進めた。

「あ、はい。防具を作って欲しいんですけど」

「防具ですね。ちょっと待ってください、カタログを出しますから」

「いや、そうじゃなくて、オリジナルのものを注文したいんですけど」

「オリジナルですか？」

ミラが少し嬉しそうな顔になる。

オリジナルの装備を求めてくるということは、ミュリエリアの腕が認められているということ、ミラは自分のことのように嬉しくなるのだ。

「それなら詳しく注文を聞くので、そちらの扉から中にどうぞ」

オリジナルの注文は、ミュリエリアが直接注文を聞かなくてはならない。

ミラは、青年を店内に通し、作業場に案内した。

「お姉ちゃん、お客さんだよ。オリジナルの防具の注文だって」

「ええ、わかったわ」

ミュリエリアが頷く。

「私がこの店の店主、ミュリエリアです。どうぞ、お掛けください」

「あ、どうも。俺はグレイって言うっす」

ミュリエリアに進められて、グレイと名乗った青年が椅子に座る。

その間に、ミラは棚から紙を取り出してミュリエリアに渡した。

「ありがとう、ミラ」

受け取った紙の隅に、『グレイ』と名前を書き込む。

「それでは、ご注文をどうぞ。なるべく細かく話してください」

「あ、わかったっす。でも……」

「どうかしましたか？」

「いや、そんな細かい注文ってないんすよ。すみません」

「そうですね。では、こちらから必要な事を聞きますから、取りあえずどんな物をお求めなのか教えてください」

ミュリエリアがそう言うと、グレイは少し躊躇った後、思い切ったように口を開いた。

「実はその、欲しいのは水着っす」

「水着ですか？」

「そつす。その、『泳げるようになる水着』が欲しいんす」

「お、泳げるようになる水着？」

大人しく聞いていたミラだが、思わず口を挟んでしまった。

「や、やっぱり変つすよね！ 今のなしつす。すみません！」

ぶんぶんと手と首を振る。

そんなグレイに、ミュリエリアが優しく話しかける。

「いいえ、そんな事はないですよ。お客様の注文に応えるのが私の仕事ですから。詳しい話をうかがってもよろしいですか？」

「……わかつたつす」

グレイは、一つ頷いて話す始めた。

「実は俺、カナヅチなんつす。その、ガノトトス進種なのに……」

「ええ！？ ガノトトス進種なのに？」

「うう、やっぱりおかしいつすよね……。もう、存在自己否定って感じつすよ。はは……」

がっくりと肩を落として、自嘲気味に笑つ。

「ミリア……」

「あ、ごめんなさい……」

「いえ、いいつす。ガノトトス進種は泳げるのが普通なんすから。でも、俺、どうしても水に浮けなくて、沈んでしまっつす。仲間にも馬鹿にされっぱなしで、もう、何をするにも自信がなくなっつて……」

目に見えてずんずん落ち込んでいく。

「でも、そんなとき、この店の噂を聞いたつす。その人にあつた装備を作ってくれるつて。」

それで、最後の望みを賭けてここに来たんすけど。でも、無理つすよね。俺は、俺は、もう駄目だあああ！」

「お、落ち着いてください。」

お姉ちゃん……」

困りきつた顔でミュリエリアに助けを求める。

「……そうね」

ミュリエリアは、目を閉じて何事か考えていたが、やがて目を開いて頷いた。

「何とかしてみましようか」

「ほ、ほんとうすか！」

ばつと、身を乗り出してグレイが聞く。

「ええ。泳げるように、とはいきませんが、そのお手伝いになる水着でよければ」

「もちろんいいです！ 泳げるようになる可能性があるなら、何でも歓迎です！」

何度も何度も頷く。

よほど嬉しかったのか、目の端に涙が浮かんでいた。

「わかりました。それでは契約の方ですが、グレイさん、狩りはできますか？」

「……昔はできたっすけど、最近は失敗続きます。泳げない上に狩りもできないなんて、俺は何て駄目なんだあああ！」

「だ、大丈夫ですよ！ 泳げるようになったら、狩りもきつと上手くなります！」

またしても落ち込むグレイを、ミラが必死に励ます。

「それでは、必要な素材はこちらで用意しますね」

ミュリエリアはメモを取っていた紙に何事か書き込む。

以前は、素材を持ってきてもらわなければ装備を作れなかったのだが、最近はミラが狩りに行って代わりに素材を取ってくるという

サービスも始めている。

ただし、あまりに希少な素材を大量に使うような依頼は受けられない。

例えば、名前の通り滅多に出会えない【リオレウス希少種】の素材を使う【シルバーソルシリーズ】を一式などと言われても、それは無理な話だ。

「その分手数料がかかりますが、構いませんか？」

「構わないです。迷惑かけるっす」

「いえ、仕事ですから」

ミラがパタパタと手を振りながら言う。

「素材がまだ決まってるのでまだ正確に金額は出せませんが、恐らく八千ゼニー位になると思います。問題ありませんか？」

デザインから素材集めまですることを考えると、かなり安い。

「大丈夫です。友人にこき使われて溜めてきたっすから」

「そうですか。では、ここに署名をお願いします」

ミュリエリアが差し出した紙に、グレイが名前を書く。

「ありがとうございます。では、採寸をしますから」

こうして、グレイとの契約は成立したのだった。

二日後。

【沼地】にミラの姿があった。

【ランゴスタ進種】の城であった例の事件解決のお礼として、ルテイエから送られた【ロイヤルナイトメール】を身につけて、【大剣】を背負っている。

この【大剣】は、以前に狩った【リオレイア原種】の素材からミユリエリアが作ってくれた【ジークリンデ】だ。

湿地帯の泥を蹴立てながら、【ゲリヨス原種】が突進してくる。

頭にある発光器官は既に破壊されていて、体にもかなりの傷を負っていた。

左右に頭を振りながら毒液を吐き散らす【ゲリヨス原種】をミラは真正面で待ち構えた。

交錯の一瞬。

ミラは【ゲリヨス原種】の足の間を抜けつつ、背中【ジークリンデ】を抜刀した。

腹部に深々と刀身が突き刺さり、駆け抜けた【ゲリヨス原種】自身の速度で、苦もなく切り裂く。

【ゲリヨス原種】は血と内臓を溢しながら数歩前進し、どうと倒れ付した。

ミラは、【大剣】を構えたまま、油断なく近づいていく。

【ゲリヨス原種】は死んだふりをする狡賢いモンスターなのだ。

その攻撃をするということは、既に瀕死の状態であり、死力を尽くして攻撃してくるため、死に真似中の【ゲリヨス原種】に近づくのは非常に危ない。

だが、この【ゲリヨス原種】は本当に死んでいるらしい。

時間をかけてそう判断したミラは、【ジークリンデ】を納刀して、剥ぎ取りを始めた。

それから、さらに四日後。

またしても、村に【フルフル原種】の音が響いていた。

工房の裏で、ミラがミュージエリアが作り直した【フクロダダキ】を振り回しているのだ。

工房の裏口が開いて、ミュリエリアが顔を出す。

「ミラ、 그레이さんが見えたわよ」

注文された水着が完成したのが昨日。

それから、郵便アイルーに手紙を渡して、完成したと伝えたのだ。

그레이は、その手紙を受け取って、すぐに工房を訪れていた。

「あ、来たんだ。今行くね」

ミラは、【フクロダタキ】を持って、工房に入って行った。

作業場に入ると、 그레이が椅子に座って待っていた。

「こんにちは、 그레이さん。お久しぶりです」

「あ、ミラちゃん。どうもっす」

挨拶を交わす。

そこに、ミュリエリアが折りたたんだ服のような物を持ってくる。

「お待たせしました」

「そ、それが？」

그레이が身を乗り出して尋ねる。

「はい。これがご注文の品です。ゲリヨススイムスーツと名づけました」

ミュリエリアが、作業台の上に【ゲリヨススイムスーツ】を広げる。

【ゲリヨス原種】の皮で作られた、上下が一体になった半袖半ズボンの水着だった。

「水を吸いにくいゲリヨスの皮を使って、重さと水の抵抗を最小限にしてあります」

水着を指しながら、ミュリエリアが説明する。

「それから、袖と腰の部分を袋状にしていますから、息を吹き込むことで、浮きになります。これで、取りあえず沈むことはないはずです」

「その代わりに、潜れないんだけどね」

横からミラが補足する。

「一応、空気を抜けば潜ることもできます。ガノトトス進種なら、水中で空気を入れ直すこともできるでしょうから」

一通りの説明をして、グレイの様子を伺う。

「どうですか?」

「どつって、もう、完璧っすよ! いや、もう最高っす!」

と、大喜びするグレイ。

「そうですか。良かったです」

ほっとしたように、ミュリエリアも笑みを浮かべる。

「これで、俺も泳げるように……っ」

「いえ、あくまでも浮くだけです。しっかり練習しないとダメですよ」

「あ、そうっすよね……はは、何を調子に乗ってるんだか……」

「あ、あの、そんなに落ち込まなくても……」

（難しい人だなあ……）

ずーんと落ち込むグレイを慰めるミュリエリアを見ながら、ミリアはこっそりと呟いた。

対岸まで二十メートルはありそうな広い川幅。

流れは穏やかだが、深さは割とあって、底の方は水の色が濃く見える。

川の岸には草原が広がっていて、かなりのどかな風景だった。

「ここが 그레이さんの泳いでる場所なんですか？」

【ロイヤルナイトメール】を着て、腰に【フクロダタキ】を差した格好のミラが聞く。

「泳ぐってというか、沈んでたっすけどね。はは……」

しっかりと【ゲリヨススイムスーツ】を着込んだ 그레이が虚ろに笑いながら答える。

【ゲリヨススイムスーツ】を受け取った後、そのまま練習すると言った 그레이に、ミラが【フクロダタキ】のチェックも兼ねてついて来ているのだ。

「ここは、丁度大型種の縄張りから外れてる場所で、安全なんすよ」

「へえー。そうなんだ」

ミラはそう言いながら、辺りを見回す。

(ここで、お姉ちゃんが私を見つけたんだよね)

ミラは、配達に出たこの川岸を通っていたミュリエリアに拾われたのだ。

この川を下流に下ると【密林】を通って海に注ぐ。

そこまで流されていたら、ミラの命はなかっただろう。

ちなみに、上流に遡れば【旧密林】を通って、【廃都メゼポルタ】に到達できる。

【廃都メゼポルタ】はかつて【人間】で賑わっていた都市だ。

今はほとんど廃墟になってしまっているが、【ハンター】がよくうろついでいて、【進種】にとつての危険地帯になっている。

「いよしっ、じゃあ、行くっす」

「頑張ってください！」

生唾を飲み込んで、 그레이が水に入っていく。

その緊張が伝わって、ミラも息を飲んだ。

肩まで水に浸かり、体の力を抜く。

すると、当然と言えば当然だが、浮きの浮力で 그레이の身体が浮き上がった。

「やった！」

ミラが快哉を叫ぶ。

「お、おおおお。浮いてるっすよおおおお！」

그레이も喜びの声を上げ、

「おおおおおおお………」

その声がどんどん遠くなっていく。

「って、 그레이さん、流されてますよ！」

「お？ うおっ」

流れて行く 그레이が驚く声が小さく聞こえてくる。

「泳いで！ 早く泳いでください！」

ミラが叫ぶと、 그레이は手足をばたつかせる。

泳ごうとしているらしいが、どうも動きがちぐはぐで、全く進まない。

手足のヒレを上手く使えば普通の【進種】よりずっと早く泳げるのに、こんなに泳げないのはある意味驚きだった。

「……浮いてもダメなんだ」

그레이に聞かれたら沈んでいきそうなことをぼそつと呟く。

浮いたら流されました、と一見すると笑い話なのだが、実はそう笑ってられない。

何しろ、下流にはモンスターの住む【密林】があるし、その先は海だ。

「大変っ」

ミラは慌ててグレイを追いかけた。

幸い、流れは速くなく、すぐに追いついた。

「グレイさん！ 岸に向かってください！」

「わ、わかってるけど！」

必死に水を叩いているが、一向に前に進まない。

そもそも、水はかくのだから進むのであって、叩いていては進まない。

根本的に泳ぎ方がわかっていなかった。

(どうしよう………あ！)

ミラは、あることに気がついた。

「グレイさん！」

「何すか！」

「ガイアタイズ大地の絆を使えばいいんじゃないですか!？」

「タイズ絆を？」

この世界には、どうしてそうなるのかわからない事がいくつか存

在する。

例えば、【回復薬】の異常な回復速度であったり、【狩猟笛】が引き起こす効果であったり。

一応、こうなのだろうという説明はつけられているが、実際には明確な根拠はない。

そして、その最たるものが【大地の絆】^{ガイアタイス}だ。縮めて単純に【絆】^{タイス}と呼ぶこともある。

これは、【スキル】の時に説明した、世界からの恩恵のことだ。

特に【進種】^{ガイアタイス}が使う場合、【大地の絆】^{ガイアタイス}と呼ぶ。

【大地の絆】^{ガイアタイス}とは、明らかに身体構造に依存していない超常の能力のことだ。

例えば、【リオス進種】は手に炎弾を生み出して攻撃に使うことができるし、【グラビモス進種】は同様に熱線を放つ。

そして、【ガノトトス進種】^{ガイアタイス}の【大地の絆】^{ガイアタイス}は、『自分から一定以内の距離にある一定量の水を操る』ことだ。

「どうやって使うんすか!？」

「水を固めて、壁みたいにするんですよ!

岸に向かって斜めに固めたら、勝手に流れ着きます!」

「あ、なるほど!」

グレイは【大地の絆】ガイアタイスの能力を発動させた。

一部の水の流れを止め、それだけではなく、まるで氷のように固体に固める。

グレイの身体は、その壁に引っかかり、少しずつ岸に向かって流れていった。

「ああー、マジで焦ったっす」

グレイが岸に這い上がる。

「大丈夫ですか？」

「何とか。ミラちゃんのおかげで助かったっす」

「自分の能力なのに、気がつかないものなんですね。焦ってたんですか？」

ミラが聞くと、グレイは首を横に振った。

「普通はあんな使い方しないっすよ。基本は攻撃とかに使うし……」

「しっ？」

「普通は泳げるっすからね……。こんな使い方、前代未聞、お笑い種っす」

そう言って、また落ち込んでしまっす。

「そ、そんな事ないですよ。便利じゃないですか。ほら、他の種族の人がおぼれかけてるときとか」

「そんなの、泳いで行ったら一発っすよ……」

「あ……」

ミラのフォローも届かなかったようだ。

「もうダメっす。生きてる意味を失った感じっす」

「そんな大げさな……」

「もう、身投げしてやるっすうううう！」

「だ、ダメですよ！ て言うか、水の中では死ねないじゃないですか！」

などと騒いでいると、近くの木立から何か物音が聞こえた。

「何か、いる」

ミラが、【フクロダタキ】を手に取る。

流されたせいで、随分【密林】に近づいてしまった。

【エリア】の外とは言っても、騒ぎを聞きつけて出てくる可能性はある。

がさがさと茂みが揺れ　ひよこつとネコミミの少女が顔を出した。

「あー！　メイミイちゃん！」

ミラは、ネコミミ少女を指差して大声を出した。

その少女は、以前に密林で出会った【アイルー進種】のメイミイだった。

以前と同じ【プライベートシリーズ】を身につけて、巨大なリュックを背負っている。

「あ！　ご主人様！」

メイミイも驚きの声を上げる。

「ご主人様？」

妙な呼称で呼ばれたミラが首を傾げる。

「あ、ごめんによさい、ミラさん。気持ち先走ちゃってたです」

「先走……？　ま、いつか。久しぶり、でもないかな。元気だった？」

「二週間ぶりくらいですから、久しぶりですつ。私は元気だったですよ」

「そうそう、手紙読んだよ！　合格おめでとう！」

返事も出したんだけど、まだ届いてないかな？」

「貰いましたよー。わざわざありがとうございます！」

再会を喜ぶ二人。

だが、グレイが置いてきぼりになってしまっていた。

「俺の存在感なんてその程度なんっすねええええ！」

「みゃ！？」

やけくそ気味に叫んだグレイの声にメイミイが驚く。

「あの、ミラさん。この人は？」

「あ、紹介するね。この人はグレイさん。うちのお客さんだよ」

「どうも、すっかり忘れられていたグレイっす」

「私、メイミイですっ。よろしくお願いしまーす」

テンションが全く逆の二人が挨拶を交わす。

「ところでメイミイちゃん。今日は何をしてるの？」

「私ですか？ 今日は、爆弾を使う練習をしてたです」

「爆弾？」

「小タル爆弾とか、大タル爆弾です。次のオトモ検定は爆弾の使い方にやんです」

【小タル爆弾】 【大タル爆弾】は、文字通りタルに火薬を詰めた爆弾だ。

【小タル爆弾】は相手を驚かすくらいの爆発力しかないが、【大タル爆弾】になると、大型種を仕留めることもできる。

「オトモ検定つて、前の試験だよね？ 合格したんじゃないの？」

「あれは三級の試験にやんです。次は二級です」

「一回で終わりじゃなかったんだ。大変だね」

「はいです。でも、夢のために、頑張るです！」

「そっか。応援してるからね」

「ミラさんに言って貰ったら、百人力ですっ。それで、ミラさんはどうしてここに？」

「え、私？ 私は、その……」

言葉を濁してグレイの方を伺う。

「構わないっすよ。思う存分笑ってくれっす」

「そんな事しないですよ。メイミイちゃん、実はね」

ともかく、許可が出たので、メイミィに事情を説明する。

「そうだったんですか」

「笑えよ。ガノトトスのくせに泳げない俺をあざ笑えばいいんすよ
！」

「 그레이さん、またそんなことを言って…… 」

いい加減呆れ顔で呟くミラ。

「笑ったりなんかしません！」

力強く主張したのは、メイミィだった。

「私だって、半人前ですつ。これを見てください」

そう言って、メイミィは手袋を外した。

見えやすいように、手の平を前に出す。

「それは」

「どうしたの!?!」

그레이が絶句し、ミラが驚きのままに問いかける。

メイミィの手の平には、たくさんの火傷の痕があった。

ちゃんと治療されているのが窺えるのだから、元はもっと酷かつ

たのдарろう。

「オトモアイルーは小タル爆弾を投げて使っんです。でも、ちょうどいいタイミングで投げるのは難しくって、何度も持ったまま爆発させちゃったです。」

『練習用の爆弾じゃなかったら手がなくなってるニヤ』って先生に怒られたくらいですから」

【原種】のオトモアイルーは【大タル爆弾】だろうと持って体当たりしていくが、【進種】にはそれは真似できない。

だが、導火線に火のついた【小タル爆弾】を持って戦うのも十分に危険だ。

「何で、そんなになるまで……」

「夢があるからです。一人前になって、お手伝いをしてあげたい人がいるんです」

問いかけたグレイに、メイミイはきっぱりと答えた。

「グレイさんは、泳げるようににやりたいんじゃないんですか？」

「そ、そりやなりたいたっすよ。でも、無理なんだ」

「何で、諦められるんですか？」

私は、諦めることなんてできないです。無理だって言われても、私だけはそう思わないですっ」

メイミイの後を、ミラが引き継ぐ。

「グレイさん。私がメイミィちゃんに初めて会ったとき、メイミィちゃんはオトモアイルーの試験の真っ最中だったんです。

一緒に試験を受ける人が怪我でリタイアして、武器もなくて、一人つきりで、それでも試験を続けてたんです。

もし、どうしてもやり遂げたいことがあるなら、諦めない人だけがそれを達成できると思います」

そこまで言って、ミラはがらつと口調を変えた。

「だいたい、お姉ちゃんが苦労して作った水着を無駄にするのはダメなんだからね」

二人に代わる代わる説得されたグレイは、

「……そうっすね。俺は、心のどこかでどうせ泳げないって諦めてたっす。でも、それじゃダメなんだ。泳ぎたいのなら、頑張るしかないんすよね！」

「そうです！ その意気ですよ！」

「私も応援します！」

「やるっす……やってやるっす！」

グレイは威勢よく叫ぶと、再び川の中に入っていく。

そして、

「うおおおおおおおおおっ！」

と叫びながら、猛然と水を叩き　流されて行った。

気の持ちようだけではどうしようもなかったようだ。

「みみみミラさん！　流されちゃったですよ！」

「グレイさん！　力を使って、一度戻ってください！」

岸からミラが叫ぶ。

「嫌っす！　俺は、諦めないっすよ！」

「諦めるの反対は無茶することじゃにやいです！

私だって、普通の爆弾を使えるようになるまで、練習用の爆弾でした！

未熟な間は、自分にできることをするんです！」

(うーん、メイミイちゃんも十分無茶してたと思うけど……)

初めて会ったときを思い出して、そう思うミラだったが、今はそこに突っ込んでもしかたない。

「そうですね！　グレイさん、取りあえず安全な場所で練習しましょうー！」

必死に呼び戻そうとしたのだが、グレイは「俺は、自力で泳いでみせるっす！」と意地を張ったまま【密林】へと流されて行ってしまった。

「じいじめんにやさい。こんじやことじにやるとは思わなくて……」

「メイミィちゃん、のせいじゃないよ。私だって思わなかったから。取りあえず、追いかけてよう?」

「はいっ」

ミラとメイミィは、大急ぎでグレイの後を追いかけた。

【密林】 【エリア3】。

ミラとメイミィが【リオレイア原種】と戦った場所だ。

「おおお!?!」

【エリア3】に入った瞬間、グレイの叫び声が聞こえてきた。

何だろう、と声の聞こえてきた方に視線を向ける。

グレイが空を舞っていた。

そして、グレイを追うように、海面から飛び上がる巨体。

「ガノトトス!?!」

メイミィがその名前を叫ぶ。

魚に似た見た目から、魚竜種と呼ばれる種族の一種【ガノトトス原種】だ。

大型種の中でも特に大きい部類の体と、口から吐く高圧の水流を武器とする。

「翡翠色の、ガノトトス」

通常の【ガノトトス原種】の鱗が瑠璃色なのに対して、この【ガノトトス原種】の鱗は翡翠色だった。

【亜種】と呼ばれる種族だ。

どうやら、グレイはこの【エリア】まで流され、【ガノトトス亜種】に遭遇したらしい。

【ガノトトス亜種】の攻撃で、水中から空中に投げ出されたのだろつ。

【ガノトトス亜種】が大きく口を開いて、グレイに喰らいつく。

だが、グレイは水から弾き出されたときに、周囲の水を操作して一緒に持ち上げていた。

水を四角形に固め、盾のように目の前に展開する。

【ガノトトス亜種】の牙は、水の盾を噛み砕いたが、グレイには届かなかった。

砕け散った水の破片と共に、グレイが地面に落ちる。

飛び出してきた【ガノトトス亜種】も地面に落ちて、魚のようにビチビチと跳ねた後、二本の脚で立ち上がる。

ミラとメイミイは、急いでグレイに駆け寄った。

「グレイさん、大丈夫ですか？」

「結構効いたっすよ」

顔をしかめながら、グレイが立ち上がる。

「ミラさん、どうするんですか？」

「うーん、ばつちり見つかったるし、戦うしかないかな」

こちらを見つけている大型種から逃げるのは、かなり難しい。

走るのは早いし、遠距離の攻撃手段を持っていることもある。

逃げているところを背中からやられた、という目に会いたくなければ、戦って倒してしまおうか、追い払う、それか、逃げる隙を作るかするしかない。

「グレイさん」

「わかってるっす。武器を用意するから、少し頼むっす」

「わかりました。メイミイちゃん、またサポートを頼めるかな？」

「はいです！」

話がまとまるのと、【ガノトトス亜種】が攻撃してくるのがほぼ同時だった。

頭を大きく持ち上げ、前に首を突き出しながら水のブレスを吐き出す。

一直線のブレスは、目の前にいなければ当たらない。

三人は素早く散開した。

標的を失った水ブレスが、立木に当たってその幹を抉る。

貫くほどの威力はないが、直撃すればかなり痛い目に遭うのは間違いないだろう。

散開した後は、グレイが海辺に走り、ミラとメイミイは囷になるためにわざと【ガノトトス亜種】の正面に走った。

【ガノトトス亜種】はそれに誘われ、再び水ブレスを吐く。

ミラは、わずかに進路を変えることで水ブレスを躲し、首下に潜り込んで【フクロダタキ】を抜いた。

振り上げた【フクロダタキ】が、鳴き声を上げながら【ガノトトス亜種】の首を打ち、打撃と共に電撃を放つ。

メイミイは、線香のような火種を使って【小タル爆弾】の導火線

に火をつけ、【ガノトトス亜種】に投げつけた。

何度も失敗したというのが嘘のように、見事に【ガノトトス亜種】の顔で爆発が起こる。

その間に、海に辿り着いたグレイは、海面に手をつき、ゆっくりと持ち上げる。

水が渦巻きながら持ち上がり、螺旋に固まって槍になった。

水着だけでは心もたなく、水の鎧でも纏いたいところだが、グレイは一度にいくつも制御することはできない。

水の槍を構えて、【ガノトトス亜種】へと向かう。

【ガノトトス亜種】は目の前のミラに噛み付く。

ミラは斜め前に移動して躲し、的確に【ハンマー】を首に叩き込んでダメージを重ねていく。

メイミイは、【ガノトトス亜種】の側面に陣取り、【小タル爆弾】を次々に投げつける。

【ガノトトス亜種】の背中で小さな爆発が連続して起こり、剥がれた鱗がパラパラと降ってきた。

【ガノトトス亜種】は脚を少し引いて力を溜め、その巨体でメイミイに体当たりする。

メイミイは尻尾の側に飛び込んで体当たりを避ける。

そこに、グレイが走ってきて、脇腹に槍を突き立てた。

鱗の無い柔らかな部分を貫き、血が穂先を伝う。

怒りの声を上げて【ガノトトス亜種】が回転する。

尻尾が広い範囲を薙ぎ払い、三人は慌てて尻尾の当たらない距離まで逃げた。

【ガノトトス亜種】は回転を止めると、小さくジャンプして腹ばいになり、体をくねらせて地面の上を泳ぐように突進する。

迫力もさるものだが、本当に恐ろしいはその攻撃範囲だ。

圧倒的な質量差で轢かれるのもお断りだし、睡眠毒をもつヒレに当たるのも洒落にならない。

目標にされたミラは、【ガノトトス亜種】の進行方向に対して直角に走り、最後は前に体を投げ出して何とか突進を避けた。

【ガノトトス亜種】はそのまま海岸まで這いずって行く。

「逃がさないすよ！」

グレイがそれを追いかける。

【ガノトトス亜種】は首を振り上げて、立ち上がりながら振り返る。

腹を見せるように仁王立ちになった【ガノトトス亜種】が水ブレスを放つ。

今までの直線のものとは違って、【ガノトトス亜種】を中心に円弧状に薙ぎ払う。

「うわっ」

グレイは、咄嗟に水の槍を盾に変えてそれを防いだ。

そうしてグレイの足が止まっている隙に、【ガノトトス亜種】は海に飛び込んでしまう。

水面に背ビレを出して、ゆっくりと旋回しながら泳ぐ。

ミラたちは波打ち際に集まる。

「音爆弾とか持ってるすか？」

【ガノトトス原種】には、大きな音で驚かすと水から出てくるといふ習性がある。

それは、【亜種】も同じだ。

近接武器で戦うときは、とりあえず水から引きずり出すのがセオリーだ。

「小タル爆弾じゃダメですか？」

「大丈夫のはずだよ。お願い」

「はいです！」

メイミイが【小タル爆弾】に着火して、【ガノトトス亜種】に投げつける。

【小タル爆弾】が爆発。

だが、【ガノトトス亜種】は悠々と泳いでいる。

【音爆弾】に比べると音の小さい【小タル爆弾】では十分ではなかったようだ。

「もう一回やりますっ」

「待って、メイミイちゃん」

新しい【小タル爆弾】に着火しようとしたメイミイをミラが止める。

「ガノトトスだって、水から頭を出さないと攻撃できないんだから、そこを狙おう」

もしかしたらその前に逃げてしまつかもしれないが、別に素材が必要なわけでもないのだ。

逃げて行ってくれるのなら、それはそれで歓迎だ。

泳いでいた【ガノトトス亜種】の背ビレが水面下に沈む。

一瞬の静寂。

そして、水柱を上げて、【ガノトトス亜種】が上半身を現す。

「今っ」

「はいっ」

メイミイが【小タル爆弾】を投げる。

【小タル爆弾】は【ガノトトス亜種】の顔面で爆発し、【ガノトトス亜種】は水面から跳ね上がって水に沈んだ。

「これで、飛び出してくるはずっす」

三人が見守る前で、海を割る巨体が飛び出す。

だが、それは、低い位置を滑空するというものだった。

最初のように、高く跳ねて落ちるのを想像していたミラたちは、反応が遅れてしまう。

「きゃあー！」

メイミイの悲鳴。

【ガノトトス亜種】は、メイミイの胴体に噛み付き、横銜えにして地面を滑る。

「メイミイちゃんー！」

ミラとグレイが声を揃えて叫び、【ガノトトス亜種】の後を追う。

【ガノトトス亜種】は、立ち上がって回転しながら尻尾を振る。

巨大な尻尾に邪魔されて、ミラとグレイは【ガノトトス亜種】に近づけない。

一回転半して振り返り、【ガノトトス亜種】は上体を起こしたポーズで海へと走る。

そして、メイミィを銜えたまま、海に飛び込んで行ってしまった。

「メイミィちゃん！」

ミラが絶叫して波打ち際に駆け寄る。

グレイも、そのすぐ後に続いた。

【ガノトトス亜種】はメイミィを銜えたまま、浜辺から少し離れたところを泳いでいる。

ミラは海面に目を走らせた。

「赤くない。まだ大丈夫……っ」

単なるメイド服に見えても、【プライベートシリーズ】はれっきとした防具だ。

【ガノトトス亜種】の歯は、まだメイミィの肉には食い込んでい

ないようだ。

だが、だからと言って余裕はない。

いつ食い破られるかわからないし、そもそも水中では息ができない。

「でも、どうするっすか？」

「どっつて……何とかしてガノトトスを引きずり出さない」と

「引きずり出さなくても、音で驚かせるだけでいいんじゃないすか？」

「あ、そうですね」

とりあえず、メイミイを放させればそれでいい。

だが、そうは言っても、音を発するアイテムは持っていない。

「そうだ！　メイミイちゃんの荷物に何かあるかも」

「そっつすね！」

二人は、紐の千切れたリュックに駆け寄り、ふたを開けた。

「……………」

思わず無言になってしまっ。

なぜなら、中から出てきたのは

「大タル爆弾っすか」

「他には、何も無いみたいですね……」

リュックをひっくり返したミラが言った。

【大タル爆弾】。

音で驚かせるには十分すぎるアイテムだが、文字通りの大きさで、投げたとしてもとても届かないだろう。

「……こうなったら、俺が泳いで」

「無理ですよ！ 気持ちだけでは泳げないって、さっきわかったじゃないですか！」

「でも、他に方法がないじゃないですか！ 俺は、メイミイちゃんに夢を諦めさせたくないんすよ！」

「私だって！ こんな形で、何もかも終わりだなんて……」

こうしている間にも、時間は過ぎていく。

タイムリミットは、もうすぐそこだった。

「お、俺は、どうすれば……」

グレイは頭を抱えた。

水は得意な場所のはずなのに、何もできないなんて。

(俺は、未熟だ。もう、どうしようも……………未熟?)

思考に浮かんだ一言が、ある言葉を思い出させる。

『未熟な間は、自分にできることをするんです!』

「そ、そうっす!」

グレイは大声を上げた。

「この爆弾、使わせて貰うっす」

「え?」

「すまないっす。後のことは、頼むっす」

そう言うと、グレイは火種を使って【大タル爆弾】に点火した。

そして、その【大タル爆弾】を抱え上げる。

「俺に、できることを!」

グレイは海に向かって走り出した。

「助走をつけて投げるつもり!?」

(無茶だよ、届かない！)

「うおおおおおっ」

グレイは、【大タル爆弾】を抱えて、そのまま海に突っ込んだ。

だが、その身体は、海に沈まない。

「そっか、ガイアタイズ大地の絆！」

グレイは、海の水面を固定して、その上を走っていたのだ。

【ガノトトス進種】らしくないやり方かもしれない。

だが、この瞬間、グレイは確かに水を渡っていた。

「喰らえっ！」

投擲された【大タル爆弾】が【ガノトトス亜種】の背中爆発する。

グレイは爆風に煽られて海に落ち、海面から飛び上がった【ガノトトス亜種】の口からメイミイの身体が零れ落ちた。

【ガノトトス亜種】は、そのまま海面から飛び出し、陸に落ちる。

「もう、逃がさない！」

地面で跳ねるガノトトスが起き上がるより早く、ミラが距離を詰

めた。

気を溜めた【フクロダタキ】が光る。

「やあっ！」

振り上げて、【ガノトトス亜種】の頭に叩きつける。

振り下ろされた鎚が、電撃を放ちながら【ガノトトス亜種】の頭を叩き潰した。

ぐったりと動かなくなる【ガノトトス亜種】。

それを確認して、ミラは海岸に走った。

「メイミイちゃん！ グレイさん！」

海に向かって呼びかける。

その声に応えるように、海の一部が盛り上がった。

そこから、メイミイを抱えたグレイが出てくる。

海の中で、水を階段のように固めて、それを上ってきたのだ。

「グレイさん！」

グレイは、ミラに向けて手を振る。

「大丈夫。気を失ってるだけっす」

「本当！？ 良かった……」

安心のあまり、力が抜けたミラは、砂浜にぺたりと座り込んだ。

「ここでお別れですね」

「そうっすね」

意識を取り戻したメイミイを含めた三人は、街道の分かれ道に立っていた。

「ここから、三人の帰る方向がばらばらなのだ。」

「 그레이さん。助けてくれてありがとうございます」

メイミイが頭を下げる。

「いやそんな、元々俺のせいみたいなものっすから」

「そんなことないですよ。 그레이さん、立派でした」

「そうですよ！」

「私もメイミイちゃんも感謝してるんです。素直に受け取ってください」

「あ、ああ。わかったっす」

グレイが頷く。

「ミラさん、グレイさん、また会いたいです」

「うん。私もだよ」

「そっすね。俺、次に会うまでに、泳ぎの練習をしておくっす」

「あ、それにやら私は、オトモ検定二級に合格しますっ」

そして、二人が期待に満ちた瞳でミラを見る。

「えーと、私は、頑張って記憶を取り戻します？」

「記憶？」

「あ、グレイさんには言っただけです。私、記憶喪失なんです」

「ええ！？」

グレイが驚く。

「それは、大変すねえ」

「じゃあ」と言っ、手を出す。

その上に、メイミイとミラも手を重ねた。

「三人で、頑張りましょうっ!」

元気よく、メイミイが宣言する。

「うんっ」

「おーっす!」

二人も、それに負けないように声を張った。

そして、三人の手が離れ、それぞれの帰る場所へと歩き始めた。

NEXT>第八話「マグマスマイ」

<簡易キャラクター紹介>

名前：グレイ

年齢：17

性別：男

種族：ガノトトス進種

能力：【水中呼吸】 【大地の絆・水】

第八話「マゲマスイマー」

グレイの依頼を解決してから数日が過ぎ、今日も、ミラはいつもの様に店番をしていた。

「ミラ、ちょっと来てくれる？」

作業場からミュリエリアがミラを呼んだ。

「あ、はい」

ミラはそれに返事をして店の中に入る。

今日は作業場の炉に火が入っていなかった。

火が入っていると夏の外気以上の室温になるため、いつもより居心地がいい。

だが、ミュリエリアは髪をポニーテールにしている、作業中なのがわかる。

作業台には細々とした部品と工具が並んでいて、中央に組み上げられた【ボウガン】が置いてあった。

【ボウガン】は、遠距離用の武器だ。

【ボウガン】という名前だが、主に火薬を利用して弾を撃ち、弩よりは銃に近い。

作業台の上に置かれているのは、特に【ライトボウガン】と呼ばれる軽量級の【ボウガン】で火力は低いが、取回しが容易な武器だ。

「ジェイドテンペストよ」

ミュリエリアが【ボウガン】を示しながら言う。

【ガノトトス亜種】の素材から作られる【ライトボウガン】で、銃床に翡翠色の鱗が見て取れる。

【滅龍弾】以外の全ての弾を撃つことができ、非常に汎用性が高い。

「これを試せばいいの？」

修理したり作成した武器の最終確認はミラの仕事だ。

いつものように持って行くこととする。

「あ、そうじゃないの。これはミラのものよ」

「え？ 私なの？」

ミラが驚いて自分の顔を指差す。

つい一週間くらい前に、【ジークリンデ】を作って貰ったばかりだ。

「そうよ。ミラには色々と危ないことをしてもらっているから、少しでも力になりたいのよ」

ミラは武器の確認や、素材を集めるためによく狩りに出かける。

戦いの腕はかなりのものだが、それでも危険なのに変わりはない。

ミュリエリアはそれが心配だった。

だが、ミラに止めると言っても止めないだろう。

だから、ミュリエリアは自分にできる精一杯のことをするために、ミラの武器を作っていたのだ。

この前は、素材の関係で【大剣】の【ジークリンデ】を作ったが、戦いに幅を持たせるという意味では、遠距離用の武器は適切だった。

「私にはこれくらいしかできないけど、受け取ってくれる？」

【ジェイドテンペスト】を持ち上げてミラに差し出す。

「うん、ありがとう」

ミラは笑顔を浮かべてそれを受け取る。

これで二つ目だが、ミュリエリアがわざわざ自分のために作ってくれた、それが嬉しかった。

ミュリエリアのためにもっと頑張ろうと心に決める。

当たり前だが、頑張るといふことはより危ない目に遭うことだ。

武器の種類が増えたのと合わせてプラスマイナスゼロというところだろうか。

微妙に思惑の噛み合っていない二人だった。

MONSTER HUNTER EVOLVE
第八話「マグマスマイマー」

昼食を終えて、ミラは自室で装備を整えていた。

午後は、注文された装備のために、素材集めに行くのだ。

【ロイヤルナイトメイル】を中心としたいつもの装備を身につける。

持つて行く武器には、ミュリエリアから貰ったばかりの【ジェイドテンペスト】を選んだ。

昔は、近接戦闘を行う【剣士】と遠距離攻撃を行う【ガンナー】で作りの違う装備があったが、今は全ての武器が共用になっている。

【人間】の残したレシピ通りに作ると、【ガンナー】用の装備は

同じ素材を使った【剣士】用のものよりも脆い。

『遠距離攻撃をするから、攻撃される機会が少なくて強度を求める必要がなかったんでしょうけど、頼りないわね』とはミュリエリアの言だ。

ただし、銃口の付近を支える手 一般的には利き手の逆だがは弾を撃ち出す火薬の炎を浴びるために、防火性の手袋を余計にはめたり、【腕装備】に専用の追加装備をつける必要がある。

ミラは、その前者を選んだために見た目にはいつもと変わらない。着替えを済ませると、部屋を出て一階に降りる。

作業場に入ると、ミュリエリアが待っていた。

「それじゃ、これをお願いね」

「うん」

ミュリエリアに、足りない素材の書かれた紙を受け取り、内容を確認する。

今日は随分と鉱石の素材が多かった。

どこに採りに行こうかと頭を悩ませながらリストを辿っていくと、その中に【獄炎石】とあるのを見つけた。

「獄炎石……それなら火山かな」

【獄炎石】はマグマに近い場所でのみ採れる鉱石で、当然火山地帯でしか採掘することができない。

「火山は初めてね。大丈夫？」

心配そうな顔でミュリエリアが言う。

【火山】と【雪山】は非常に過酷な環境なのだ。

【火山】なら暑さ、【雪山】なら寒さが襲いかかり、ただいるだけで命を落としかねない。

「大丈夫だよ。ちゃんと準備するから」

「クーラードリンクを忘れないで」

「うん。わかってます。」

それじゃあ、行ってくるね」

「ええ。気をつけてね」

ミュリエリアに見送られ、一度店に移動する。

持っていく道具を決めるためだ。

もちろん売り物なのだが、ミラは好きに使っていいと許可を貰っていた。

「えーと、回復薬と……」

棚から必要な道具を取り出して、アイテムポーチに詰めていく。

【回復薬】 【解毒薬】 【携帯食料】 【閃光玉】、それに【クーラードリンク】を用意した。

次に、【ボウガン】の弾を用意する。

一部の例外を除き、全ての【ライトボウガン】は同じ規格の弾を使うことができるが、各【ボウガン】毎に、安全に運用できる弾の種類と上限弾数が定められていて、威力以上に【ボウガン】選びで重視される。

また、リボルバー式の【ボウガン】は少なく、マガジン弾倉に弾を込めておいて運用するのが一般的だ。

「うーん、どれにしよう……」

【通常弾】 【貫通弾】 【散弾】 【徹甲榴弾】 【属性弾】 【状態異常弾】等の様々な弾が存在するが、その全てを持ち歩けるほどアイテムポーチは大きくない。

悩みながら弾を選ぶ。

結局、破壊力の高い【徹甲榴弾】や【拡散弾】、状態異常にさせるための各種の弾は今回は狩りが目的ではないから置いて行くことにして、【LV1通常弾】 【LV1貫通弾】 【LV1散弾】。

それから、属性弾に【氷結弾】の計四種類の弾を選んだ。

【LV】というのは、文字通り弾のランクで、使用される素材で

分けられ、数字の大きい方が強力である事を示す。

弾倉マガジンに込めて、アイテムポーチに詰め込む。

「あれ、これでも入らない……」

【氷結弾】の弾倉マガジンが三つ余ってしまった。

一つの弾倉マガジンに三発の弾丸が込められているので、九発余っていることになる。

「ま、いつか。こっちに入れとこ」

普通のアイテムポーチの余ったスペースに弾倉マガジンを詰め込み、最後に棚から【ピッケル】を取り出して肩に担ぐ。

これで、準備完了だ。

「行ってきまーすっ」

作業場に叫んで、ミラは家を出た。

まず最初に、村の中の素材屋に向かう。

ミュリエリアの工房と同じように、この店も通りに面したカウンターがある。

ミラはそこから中に声をかけた。

「こんにちはー」

「おやミラちゃん、いらっしやい」

恰幅の良い中年の女性がミラを出迎えた。

この女性も【ランポス進種】で、この素材屋の主人だ。

実は、村長の奥さんでもある。

「これ、お願いします」

素材のリストを渡す。

「はいよ。ちょっと待ってておくれ」

リストを手に店の奥に引っ込んでいく。

しばらくすると、再び女性が姿を見せる。

「うちにあるのはこれだけだね」

リストをミラに返す。

リストを見てみると、いくつかの素材が斜線で消されていた。

これは、必要な個数が素材屋にあるという意味だ。

個数が足りない場合は、その数が書き添えてある。

「いつもと同じでいいんだね？」

「はい。よろしく願います」

確認されて、ミラが頷く。

素材屋にある分は、ミュージエリアの工房まで運んで貰える事になっている。

もちろん、買い取る必要があり、ミラが集めてくるよりもお金がかかるのだが、注文された数がミラ一人で何とかできる量を超えているのだ。

今まで通り、行商人や素材屋を利用しつつ、足りないものをミラが採りに行くというやり方になっていた。

ちなみに値段だが、これは素材によってピンからキリまである。

【ランポスの皮】なら数百ゼニーくらいだが、飛竜の素材になると軽くその十倍はする。

住み込みで料理をするキッチンアイルーの食事が一食五十ゼニー四百ゼニーと言えば何となく相場はわかってもらえるだろうか。

「ミラちゃんはこれから行くんだろ？ 気をつけるんだよ」

「はいっ。じゃあ行ってきます」

元氣良く返事をして、ミラは【火山】へと出発した。

【火山】地帯は、【森丘】のさらに向こうに存在し、鬱蒼とした森に阻まれたその場所まで行くのは、かなりの危険を伴う。

そのため、【火山】に行くときは、村の裏手を流れている川を行くことが多い。

ミラも、渡し舟を運営している【アイルー原種】に頼んで、【火山】に運んでもらうことにした。

歩いて行ける【旧火山】と呼ばれる場所もあるのだが、こちらは【火山】よりも強い【原種】が多く住んでいて、危険度が高い。

川から一度海に出て、しばらくの船旅を経てから岩に囲まれた入り江に入る。

そこが、【火山】の【ベースキャンプ】だ。

灰色の岩に囲まれていて、木や草はほとんど存在しない。

海に面しているためまだ涼しいが、山の方から熱気を感じる。

「それじゃ、帰りはこのネコケムリ玉を使ってくれたら迎えに来るニヤ」

船から降りたミラに【アイルー原種】が手の平に握れるくらいの黄色の玉を渡す。

煙を出して身を隠す【けむり玉】を改良したもので、空に真っ直ぐ黄色の煙を伸ばす、一種の狼煙だ。

「うん。どうもありがとう」

「気をつけて行くニヤ」

【アイルー原種】は器用にオールを操って、入り江を出て行った。船の影がみるみる小さくなって、岩の向こうに見えなくなった。

「それじゃ、行こうかな」

一人呟いて、ピツケルを肩に担ぐ。

「あ、そうだ」

ミラは、【ベースキャンプ】に置いてある赤と青の二つの箱へと歩いて行った。

かなり大きな箱で、ミラー一人くらいなら中に入れそうなサイズだ。

赤い方は【納品ボックス】。

【人間】がクエストで集めたものを入れておく箱だが、今は単に私物を入れて保管する箱だ。

【ネコケムリ玉】を箱の中に入れて蓋を閉め、次は青い箱を開ける。

こっちは【支給品ボックス】。

過去の【ハンター】を管理していた組織である【ハンターズギルド】が、アイテムを無償で提供していた箱だ。

今は、有志によって管理され、様々なアイテムが入っている。

ミラは【支給品ボックス】から【地図】を取り出した。

【火山】で迷子になったら、それだけで死活問題だ。

地図を開いて、道を確認する。

【ベースキャンプ】からは【エリア1】と【エリア4】に道が続いている。

【エリア4】にはオレンジ色で斜線が引いてあり、【クーラードリンク】が必要な高温の場所であることを示していた。

さらに暑い場所には赤い斜線が引いてある。

わざわざ危険な所から行く必要はない。

ミラは【エリア1】に行くことに決めた。

【ベースキャンプ】を出て、【エリア1】に移動する。

ここも灰色の岩だらけで、僅かにサボテンのような植物が生えている程度だ。

ミラは、岩の壁に目を走らせる。

岩肌は非常に頑丈で、鉄製の【ピッケル】も歯が立たないような場所が多い。

そのため、強力な爆弾である【大タル爆弾G】を使って鉞脈を露出させた採掘場所が何箇所か存在するのだ。

周囲を見回していると、採掘場所より先に、モンスターの姿が目に飛び込んだ。

亀のような甲羅を背負い、先端に鋭い棘のついた尻尾を持つ四足歩行の草食獣【アプケロス】だ。

同じ草食獣である【アプトノス】と比べるとかなり獰猛で、積極的に攻撃を仕掛けてくる。

【アプケロス】はミラに気づいたらしく、後ろ足で立ち上がって威嚇をした。

こうなってしまうと、もう倒すか逃げるかしかない。

ミラは【ピッケル】を地面に置き、【ジェイドテンペスト】を構えた。

【LV1通常弾】をポーチから取り出して、マガジン弾倉を装着する。

【ボウガン】という名前の由来になった弦を引き、初弾を薬室に装填する。

【ボウガン】には精密射撃用のスコープがついているが、動きの遅い【アプケロス】に使う必要は無い。

銃口を【アプケロス】に向けて、引き金を引く。

銃口から火花が散り、飛び出した弾が【アプケロス】の頭に命中した。

空薬莖が排出され、次弾が自動で薬室に送り込まれる。

【アプケロス】は一瞬足を止める。

だが、すぐに何事も無かったかのようにミラに向かって来る。

【通常弾】は着弾時の衝撃でダメージを与える弾だ。

【アプケロス】の頭は武器に使えるほどに硬質な皮膚で覆われていて、その衝撃を防がれてしまっていた。

狙いを変えながら、二度、三度と連射するが、今度は甲羅に弾かれてしまう。

側面からなら、柔らかい脇腹なども狙えるが、正面からは柔らかい部分が狙いにくい相手なのだ。

近接武器なら、迷わず側面に回るところだ。

だが、【ボウガン】ならば、別の対応の仕方がある。

ミラは【L V 1 通常弾】の弾倉マガジンを抜いた。

薬室に装填していた一発も弾き出す。

そして、アイテムポーチから取り出した【LV1貫通弾】を装填した。

発砲。

【ランポスの牙】を先端に使った、名前の通り貫通力の高い弾が、今度は【アプケロス】の頭を貫いた。

頭を撃ち抜かれた【アプケロス】が地面に倒れ、動かなくなった。

「ふう」

ミラは、息をついてボウガンを下ろし、【アプケロス】の死体を見下ろした。

「……………どうしよう」

【アプケロス】の肉は食用になる。

剥ぎ取って行きたかったが、今日はこれから鉱石を集めなければならぬ。

だが、この世界には奪った命を無駄にすべきではないという不文律がある。

モンスターに襲われているのならともかく、荷物が重くなるからという理由で放置するのは気が引けた。

だからと言って、荷物を増やせばいいというものでもない。

ただでさえ鉱石は重く負担になる。

さらに荷物を増やせば、それが万が一の事態を引き起こすかもしれない。

臨機応変な判断ができなければ、この世界では生き残れないのだ。

「うー……よしっ」

ミラは、心を決めて、剥ぎ取り用のナイフを手を取った。

【アプケロス】の傍にかがんで、一片だけ肉を切り取る。

「これだけ貰って行くね」

肉を持っていた紙　抗菌石の成分が染み込ませてあり、生ものを持ち運ぶのに便利。生臭い臭いも通さない優れたもの　に包んでアイテムポーチにしまい、立ち上がる。

採掘の邪魔になる【アプケロス】は片付けた。

これで、採掘に集中できる。

置いていた【ピツケル】を拾い、岩壁に向かう。

壁に沿って歩いていると、表面が崩れている場所があった。

「ここが採掘場所だ。」

ミラはその前に立ち、【ピッケル】を振り上げた。

【エリア1】 【エリア2】と移動しながら、採掘を続ける。

【エリア2】は【エリア1】と似たような見た目の場所だが、強い衝撃を受けると爆発する白い岩が点在し、溶岩が流れているのが見える場所もある。

気温も上がり、本格的な【火山】の一步手前のエリアだ。

【ピッケル】を振るうと、上質な鉱石である「カブレライト鉱石」を含む岩が落ちて来る。

ミラはそれを拾って、持ってきていた袋に入れた。

今までに集めた分と混ぜてガチャガチャと音を立てる。

必要な分の鉱石はこれでほとんど集まった。

リストを取り出して確認する。

「後は、獄炎石だけかあ」

一つでいいのだが、ここまでの採掘場所では一度も見かけていな

い。

【獄炎石】はマグマに近い場所でのみ掘れる鉱石だから、まだ遠いこの場所には無いのかもしれない。

「行くしかないよね」

ここに無いのなら、ある場所に行くしかない。

ミラは、【エリア2】にある洞窟の入り口に向かった。

中に入ると、【3】と書いてある看板が目に入る。

左右には赤々とした溶岩が流れていて、照り返しが岩肌を赤く染めていた。

地面にも所々亀裂があり、そこを溶岩が流れているのが見て取れた。

「あ、あつーい」

手で扇ぎながら呟く。

洞窟に入った瞬間から一気に体感温度が上がり、もう汗が噴出している。

今まで、想像していたほどじゃないと思っていたが、その認識は改めなければならぬようだった。

こんな所をうろろろしては、あつと言つまに体力が無くなっ

てしまうだろう。

ミラはアイテムポーチを開いて、中から【クーラードリンク】のビンを取り出した。

【クーラードリンク】には体温を下げる働きがある飲み物だ。

蓋を開けて、中の白い液体を一気に飲み干す。

「うう、苦い……」

原料に使われている【にが虫】のせいだろうか、酷く苦い。

ミラは涙目になって口の端についた液体を拭う。

だが、苦いだけの効果はあって、すぐに暑さが緩和された。

【クーラードリンク】然り【回復薬】然り、現場で使われる薬は即効性が高いのだ。

「これなら、大丈夫だね」

ミラは、空のビンをきちんとアイテムポーチに片付け、採掘できる場所を探し始めた。

採掘場所を見つけ、しばらくの間ピッケルを振るっていたが、相

変わらず【獄炎石】は見つからない。

「ここにも無いのかな……」

無いのなら仕方がない。

ミラは、その場で採掘するのを諦めて、【エリア】を変えることにした。

【獄炎石】の特徴を考えると、より火口に近い方がいいかもしれない。

そう考えて、ミラは【エリア5】に移動した。

【エリア3】と似た見た目の場所だが、陸地の真ん中に溶岩が溜まっている場所があり、行動を制限している。

「あ、あそこ」

壁に大きな亀裂が走っているのが見えた。採掘場所だ。

ミラは亀裂に駆け寄る。

(今度がありますように)

祈るような気分で、【ピッケル】を振り上げた。

ガツンガツンと【ピッケル】の先端が岩肌を抉る。

壁を削っていると、下から赤色の鉱石が見えてきた。

もしかして、と期待しながら岩を削る。

鉱石が掘り出されて、地面に転がった。

「なんだ、エルトライト鉱石だったんだ……」

しゃがんで掘り出した鉱石を確認し、がつくりと肩を落とした。

鉱石の中では最高級の素材だが、残念ながら今は必要が無い。

家のストックにするか、素材屋に売ろうかと思いつながら、袋に入れる。

もう一度採掘に戻り、【ピッケル】を振り上げる。

そのとき、ミラの視界の端で何かが動いた。

ミラはすぐに採掘を止めて、後ろを振り返る。

そこにいたのは、五頭ほどの【ガブラス】の群れだった。

色は黒く、翼と足のある蛇を思わせる風貌をしていて、かなり小型だが飛竜に分類される。

主に群れで行動し、死体や腐肉を食べる行動から不吉な竜と呼ばれている。

鉱石採掘に夢中になっていて、【ガブラス】の接近に気がついていなかったらしい。

一頭の【ガブラス】が一鳴きして、ミラを狙って滑空する。

「くっ」

ミラは、自分の不注意を反省しながら、【ジェイドテンペスト】を構えた。

引き金を引くと、薬室に装填されたままだった【LV1貫通弾】が発射され、【ガブラス】の胸に命中する。

体に風穴を開けられた【ガブラス】が地面に墜ち、体を痙攣させて動かなくなる。

ミラは空になった弾倉マガジンを取り出し、新しく【LV1通常弾】の弾マガ倉ジンを入れる。

【アプケロス】相手に使った物ではなく、新しい物だ。

二発しか装填できない【LV1貫通弾】と違って、【LV1通常弾】の装填数は六発。

【ボウガン】最大の間であるリロードの回数を減らすのが目的だった。

弦を引いて初弾を装填し、銃口を上に向ける。

【ガブラス】はこっそりと近づいていたようだが、足元に影を落としてしまっていた。

連続で二射。

翼に弾を受けた【ガブラス】が体勢を崩して地面に落下してくる。

【ガブラス】は飛行を得意とする反面、地上での行動は苦手としている。

ミラはもたもたと起き上がろうとする【ガブラス】の頭に狙いを定め、引き金を引いた。

(これで二頭、弾は後三発)

残弾を数えながら、【ガブラス】たちの様子を窺う。

早くも二頭を倒したミラを警戒したらしく、滞空しながら遠巻きにミラを取り囲んでいた。

ミラは最も近い位置にいる【ガブラス】を狙って引き金を引く。

【ガブラス】は空中を滑るように移動してそれを躲した。

狙いをつけようとする端からひらりひらりと射線から逃げられてしまう。

「このっ」

狙いをつけて一発、避ける先を予測してもう一発撃つ。

だが、そう上手くは行かず、銃弾は見当外れの場所を撃ち抜いた。

これで残弾ゼロ。

【ジェイドテンペスト】から空の弾倉マガジンを抜き取る。

それを好機と見たのか、一頭の【ガブラス】が急降下をかける。

ミラはその【ガブラス】に空弾倉マガジンを投げつけた。

思わぬ反撃に【ガブラス】が慌てて上昇する。

その隙に新しい弾倉マガジンを取り出す、が、そこに別の【ガブラス】が滑空して来る。

やや遠い位置で口を開き、ミラ目掛けて紫色の毒液を吐き出した。

ミラはサイドステップを踏んでそれを躲し、弾倉マガジンを【ジェイドテンペスト】に叩き込む。

弦を引こうとするが、そこに別の【ガブラス】が向かって来る。

ミラは前転してその下を潜り抜けた。

素早く起き上がり、振り向きながら弦を引く。

大雑把に狙いをつけて発砲。

銃口から放たれたのは【LV1散弾】だ。

空中で銃弾が弾けて、中に詰められていた小さな金属弾が【ガブラス】を襲う。

広範囲に広がる散弾が【ガブラス】の翼を捉え、地に落とす。

続けて別の【ガブラス】を狙い、引き金を引く。

避けきれずに、【ガブラス】が銃弾の嵐を浴びる。

小柄な体はその衝撃に耐えられず、空から落とされた。

(四頭、残りは　！)

そう思った瞬間、最後の一頭がミラに襲いかかって来た。

反射的に銃口を向けて引き金を引く。

その銃口から弾が放たれる事はなく、ガチンと音が響く。

弾切れだ。

「しまった！」

失策を嘆く間も与えず【ガブラス】が迫って来る。

ミラは身を捻って避ける。

だが、空撃ちしてしまった間に【ガブラス】の接近を許しすぎていた。

【ガブラス】の牙がミラの腰を掠める。

防具に阻まれ、ミラの体には届かないが、その牙が腰に巻いていたアイテムポーチを引っ掛けていった。

「ああ！」

そのアイテムポーチは弾を入れている方だった。

弾の無い【ボウガン】では全く役に立たない。

ミラは慌てて残っているアイテムポーチを探り、そっちに入れておいた【氷結弾】を取り出した。

弾を装填し、【ガブラス】の背中に撃ち込む。

【氷結弾】が背中弾け、【氷結晶】から作り出した低温の液体が飛び散る。

零下数十度の液体が大気を冷やし、その中の水分を氷結させる。

氷の破片を纏いながら【ガブラス】が飛ぶ。

だが、その方向はミラから逆だ。

群れの仲間をやられた上に、背中から氷水をかけられたらそれも無理は無いだろう。

「わあ、逃げないで！」

逃げてくれるのはありがたいが、弾を持って行かれては困る。

ミラは、慌てて【ガブラス】に一発撃ち込む。

だが、それは外れる。

「それなら……」

ミラは、【ボウガン】のスコープを覗き込んだ。

スコープの真ん中に刻まれた十字に【ガブラス】を捉え、引き金を引く。

【氷結弾】が【ガブラス】へと真っ直ぐ向かう。

だが、途中で失速して【ガブラス】まで届かなかった。

【氷結弾】の装填数は三発。

スコープを覗きながら、手探りでアイテムポーチを探る。

ドンっ。

背中に強い衝撃を受けた。

「あっ」

ミラが前のめりに倒れる。

アイテムポーチから手が抜け、その拍子に中身がバラバラと零れ落ちた。

転がって上を仰ぎ見ると、さっき撃ち落しておいた【ガブラス】が再び飛び上がった。

地上での活動が苦手だからと放っておいたのがまずかったようだ。周りの様子が見えなくなるというスコープの欠点も気づかなかつた一因だ。

ミラは地面に転がっていた弾倉マガジンを拾い、【ジェイドテンペスト】に装填。

撃ち込んだ弾が【ガブラス】の顎に命中し、【ガブラス】が怯んでいる間にミラはその場を逃げ出した。

「うーん……」

ミラは唸りながら地図をぐるぐると回した。

「これは……迷ってる、よね」

ガクツと項垂れて溜息を吐いた。

地図が読めないのではなく、自分の位置がわからないのだ。

逃げ出した後、アイテムポーチを持って行ってしまった【ガブラス】を追いかけていたのだが、上ばかり見上げている間にすっかり

自分の位置を見失ってしまった。

地図を折りたたんで、アイテムポーチにしまう。

そのとき、アイテムポーチの中が目に入って、また溜息を吐く。

中に入っているのは、【回復薬】【閃光玉】【生肉】に【氷結弾】の弾倉が一つずつ、他の物は落としてきてしまっていた。

【火山】での生命線である【クーラードリンク】を失くしたのがミラを慌てさせた。

最初に飲んだ分の効果が切れてきて、さっきからかなりの暑さを感じている。

周囲は相変わらず溶岩の流れる火山地帯で、暑さが容赦なくミラを襲っていた。

(急いでここを出ないと……)

ミラは額に浮いた汗を拭って、歩き始めた。

……

それからどれくらい歩いただろうか。

まだ道は見つからず、ミラは溶岩の流れる洞窟の中を彷徨っていた。

とっくに【クーラードリンク】の効果は切れ、熱がミラの体力を

削っていく。

「はあ……はあ……」

息が上がリ、足元も覚束ないほどだが、ミラはそれに気づかないほどに疲弊していた。

シューッ！

そんな音と共に、目の前に水蒸気の柱が噴出した。

地熱で暖められた地下水が噴出する、間欠泉だ。

その勢いに驚いて、ミラはその場に尻餅をついた。

水蒸気は少しの間吹き上がり、やがて収まった。

「……ああ、びっくりした」

ミラは手をついて立ち上がるうとした。

だが

「あれ？」

視界が斜めになる。

支えようとした手に力が入らず、ミラはその場に倒れた。

視界が霞み、ミラの意識は黒く塗り潰されていった。

「ん……」

意識が覚醒する。

薄っすら目を開くと、布の天井が見えた。

切り揃えられた木の枝が中央から放射状に伸びていて、骨組みになっっている。

テントのような所にいるらしい。

床に敷かれた布の上に、ミラは寝かされていた。

体に重さを感じる。

ミラの上に、誰かが馬乗りになっていた。

いや、馬乗りと言うより上に乗ってぴったりとくっついていた。

「……あ、ん……擦れて……」

どこか艶かしい声を上げながら、ミラに体を擦りつけている。

ぬるぬるした液体が二人の間に広がり、柔らかい感触が伝わってくる。

布越しなどではなく、明らかに素肌の感触だった。

「つて、えええっ!」

驚きのあまり、ぼんやりしていた意識が一気にはつきりする。

「ああ、気がついたか？」

ミラの上に乗っていた誰かが体を起こす。

ミラより少し年上の褐色の肌の女性だった。

予想通りと言うか、体には何も身につけておらず、肉体を惜しげもなくさらしている。

何かの液体で体が濡れていて、油を塗っているようにてらてらと光っていた。

「火山で倒れてたのを見つけたんだ。大丈夫か？」

テントの隅に置いてある水瓶から水を汲んで、ミラに渡してくれた。

「あ、はい。ありがとうございます」

ミラは体を起こして水を受け取り、口をつけた。

失った水分が補給されて、人心地着く。

そこで、ミラは自分も裸にされているのに気がついた。

「あ、きゃー！」

下に敷いてあつた布で体を隠す。

「女同士だろ。気にするなよ」

「き、気にします」

俯いてもじもじと布の端を弄る。

「あはは、恥ずかしがりだな」

そう言って、快活に笑う。

短く切られている金髪とあいまって、少年のような雰囲気になつた。

「あたしはアンゼリカ。ここに住んでるんだ。お前は？」

「私はミラです。平原の村に住んでいます。今日は素材集めで」

「なるほどな。それであんなに石ばっかり持ってたのか」

そう言って指差した先に、ミラの装備や集めた素材がまとめて置いてあつた。

「拾ってくれたんですね。ありがとうございます」

「運んだのはシラタキだけだな。後で紹介してやるよ」

「はい、お願いします」

「ああ。でも、あいつは雄だからな。服は着ておけよ」

アンゼリカは床に置いてあった服を取って身につけ始める。

ミラも、装備の中からインナーを探し出して服を着ようとする。

が、あることに気がついて手を止めた。

腕を擦ると、体についていた液体がにちゃ、と音を立てた。

粘度が高く、手との間に糸を引く。

「これって……」

「どうかしたか？」

アンゼリカが近寄って来る。

体には胸と股を覆うだけの下着のような服を着ている。

金色の鱗が表面に張ってあるのを見ると、下着ではなく防具なのだろうが、単にビキニタイプの水着にも見える。

「あー、これ、べとべとするんですけど」

「あ、それか」

手についた液体を見せながら言うと、アンゼリカが頷いた。

「気になるだろうけど、我慢してくれ。でなきゃ、外に出られないからな」

そう言うと、アンゼリカはテントの入り口に歩いて行き、入り口を開いた。

今まで見えなかった外の景色が、ミラの目に飛び込む。

溶岩が固まった黒い岩が突出する地面。

その向こう側には、溶岩の川が流れている。

「じじって……」

「そう、ここはエリア10の対岸　灼熱のエリアだ」

「溶岩がこんなに近くに……でも」

ミラが意外だという顔になる。

溶岩の流れる場所だというのに、ミラは少しも暑さを感じていなかったのだ。

「これがそいつの効力だ」

「これの？」

「ヴォルガノスの保護液って知らないか？」

「あ」

ミラははっとする。

【ヴォルガノス進種】は皮膚に外分泌腺を持ち、意識的に特殊な体液を分泌することができる。

それが通称保護液と呼ばれる液体で、数ミリの厚さで体表を覆うと、外部からの熱を遮断する。

この液体で身を守ること、【ヴォルガノス進種】は一千年前後の溶岩の中で活動することができる。

「これが、そうなんだ」

ミラは自分の手を見下ろした。

知識としては知っていたが、実際に見たのは初めてだった。

それがわかると、何で裸にされていたのかもわかった。

熱にやられて倒れていたミラの為に、ミラに保護液を塗ってくれていたのだ。

「旦那、準備ができたニヤ」

アンゼリカが開けた入り口から、一匹の【アイルー原種】が顔を出した。

「シラタキ」

アンゼリカがその【アイルー原種】の名前を呼ぶ。

「シラタキ、さん？」

聞き覚えがあったミラが鸚鵡返しに呟く。

ミラの荷物を運んでくれたのがその名前の人だったはずだ。

ミラの顔を見て、アンゼリカが「ああ」と呟く。

「紹介しておくよ、ミラ。こいつがシラタキだ」

「さっきの子、目が覚めたのか……ニヤ！？」

語尾と言つか悲鳴のような声を上げて、シラタキが横を向いた。

ミラが不思議そうに小首を傾げた。

「さっきも言ったけど、こいつ、雄だからな」

「はあ」

「その格好は刺激的すぎるんじゃないのか？」

「……あ」

ミラが、まだ裸の自分の体を見下ろして、あっという間に真っ赤

になる。

「き、きやあああああつー!!」

テントの中に、ミラの悲鳴が響き渡った。

.....

しばらくして。

「知らなかったとはいえ、申し訳なかったニヤ」

「あ、いえ、あんな格好してた私も悪かったですし」

「いや、それでも見てしまったのが悪かったニヤ」

「そんな、私が」

「いやいやこつちが」

「ほら、そこまでだ。両方悪かった。それでいいだろ」

ペコペコと頭を下げあっているミラとシラタキの間にアンゼリカが割り込む。

「む、そうだニヤ」

「それは、はい。そうですね」

二人とも悪者になりたかったわけではなく話の落とし所が無かつ

ただけだ。

アンゼリカの用意したそれに乗って際限の無い謝りあいを終わらせる。

「それでよし。で、シラタキ、準備できたんだな？」

「ばっちりだニヤ」

シラタキが頷く。

「わかった。それじゃ、行くか」

「どこに行くんですか？」

「いい所だ。暇ならお前も来てみるか？」

「私も？」

問われて、ミラは少し考える。

「本当は獄炎石を見つけないといけないんですけど……」

【ピッケル】は【ガブラス】と戦ったところに置いてきてしまったし、弾もほとんど無い。

これでは、【獄炎石】を探すのは難しいだろう。

幸い、今日見つけなければ期限に遅れてしまうものでもないし、他の鉱石は見つかっているのだから、そちらを先にすればミュリエ

リアの作業が滞ることもないはずだ。

それに、アンゼリカの言ういい所にも少し興味があった。

「今日はもう諦めますから、私も行っていいですか」

「もちろんだ。あたしが誘ったんだからな」

「あそこをいい所なんて言うのは旦那ぐらいのものだニヤ」

「シラタキ、余計なことを言うな。行くぞ、ミラ」

「あ、はい」

テントを出たアンゼリカの後を追って、ミラもテントを出る。その後ろにシラタキが続いた。

少し歩き、ミラたち二人と一匹はテントの近くにある溶岩の川の岸へとやってきた。

保護液のおかげで、溶岩のすぐ側まで歩み寄っても全く暑さを感じない。

「ここだニヤ」

川岸には、色々な道具が準備してあった。

まず目についたのはフルフェイスのヘルメットだ。

アンゼリカの着ている水着と同じように、金色の鱗が表面に張っ

てある。

これは、【ヴォルガノス原種】の鱗だ。

普段の姿から黒いと思われがちなのだが、あれは冷えて固まった溶岩であり、本当の鱗は薄い金色をしている。

その口の部分から長い管が伸びていて、その先が箱型の装置に繋がっていた。

「これって、^{ふいし}鞴ですよ。何に使うんですか？」

ミラは箱型の装置　箱鞴を指差して不思議そうな表情を浮かべる。

鞴というのは、金属を加工する為に炉に風を送り込む道具だ。

燃料に使う炭は多量の空気を送り込まれることで、通常より数百度も高い温度で燃え盛る。

それすることで、金属を柔らかくするために必要な温度を得るのだ。

鍛冶屋には欠かせない道具で、当然ミュリエリアの工房にもある。

だが、ここで鞴が出てくる意味はわからない。

「これか？　これはあたしが泳ぐための道具だ」

「泳ぐって……まさかここをですか!？」

平然と答えるアンゼリカにミラが驚きの声を上げる。

「旦那は変わりものなんだニヤ」

シラタキも賛同して頷いた。

確かに、【ヴォルガノス進種】の能力なら溶岩に入ることでもできる。

だが、それはあくまでも入っても大丈夫程度の話であり、好き好んで入るものではない。

飲み込んだ溶岩を吐き出すという攻撃すら行う【原種】と違って、体内に溶岩を取り込めば火傷ではすまないし、息をする事もできない。

保護液無しでは、その皮膚も溶岩の温度には耐えることもできない。

【進種】は、既に溶岩を生きる場にするには進化しすぎているのだ。

「雇い主を変わり者呼ばわりか。失礼な奴だな」

「そう言われてもニヤ」

「私も変わってると思いますけど……」

「お前らにはわからないだろうな。溶岩に身を浸したときのあの高

揚感が。あれは、そう、あたしのヴォルガノスとしての本能なんだ」

「ほ、本能なんですか。なるほど……」

「絶対嘘だニヤ。溶岩で泳いでるのなんて旦那意外に見たこと無いニヤ」

本能なら確かに理屈ではない。

納得しかけたミラだが、ぼそつとシラタキがツツコミを入れた。

「うるさい奴だな。ともかく、あたしはここで泳ぐのが好きなんだ」

そう言つと、アンゼリカは地面に置いてあつたヘルメットを拾い上げた。

ミラとシラタキから同意を得るのは諦めるようだ。

ヘルメットをかぶり、首元に垂れている紐を引くと、ヘルメットの下についていたゴムのような布が絞られて首周りを隙間無く覆う。

その布に丁寧な保護液を塗りつけて、しっかりと耐熱加工を施した。

シラタキが近づき、慣れた様子でそれをチェックする。

「ばつちりだニヤ」

「それじゃ、こっちは頼むぞ」

「了解だニヤ」

シラタキが頷き、箱鞆の側に駆け寄る。

アンゼリカは、それを確認し、川のすぐ側まで歩く。

「じゃあミラ、行ってくるな」

「あ、はい。行ってらっしゃい」

ミラがそう言うと、アンゼリカは「やっ」と掛け声をかけて頭から溶岩の中に飛び込んで行った。

水面（？）に上がってこないのを見ると、どうやら潜って行っているようだ。

「うわぁ……」

大丈夫なのだとわかっていても、その壮絶な光景にミラが絶句する。

「あれは何度見ても心臓に悪いニヤ」

猫の顔でわかりにくいのが、シラタキが苦笑を浮かべる。

その手は、箱鞆の取っ手を握って、ゆっくりと押したり引いたりを繰り返している。

取っ手は、箱の内部のピストンに繋がっていて、それを押すことで、空気を送り込んでいるのだ。

普通の箱鞆は、箱を二つ使うことで押したときも引いたときも空気を送り込むように作られているが、これは引いたときには空気を吸い込むようにできていた。

それによつて、ヘルメットの中の空気を循環させているのだ。

「いつもやってるんですか？」

手馴れた感じで空気を送るシラタキにミラが聞く。

「そつだニヤ。溶岩で泳ぐためのサポートで雇われてるんだニヤ」

「そうなんですか」

「そんな依頼は『アシストキャッツ』でも前代未聞だったニヤ。この方法で泳げるようになるまでも試行錯誤の連続で」

よほど大変だったのか、しみじみと語り出す。

ミラはその話に相槌を打ちながら、見るともなしに周りを見回していた。

その視界に、赤い影が映る。

「あつ。シラタキさん、イーオスが……」

ミラは思わず声を上げた。

その赤い影は【イーオス原種】だ。

シルエットは【ランポス原種】に似ているが、こちらの方が厚みのある頭をしている。

最も大きな違いは、口から毒液を吐いて攻撃をすることだろう。

「どうせ対岸の火事。心配要らないニヤ」

暢気にシラタキが言う。

【イーオス原種】が現れたのは、【エリア10】。

つまり、今ミラたちがいる場所の対岸だ。

ただの川ならともかく、溶岩の川は渡ってこられないだろう。

【イーオス原種】は川越しにミラたちをじっと見ている。

「シラタキさーん。すっごく見られていますよ」

ミラが不安そうな声を上げる。

「今までこつちに来たことは無いから大丈夫だニヤ。この前はドスイーオスだって悔しそうに見てるだけだったニヤ」

「ほ、本当に大丈夫なんですかあ？」

ミラはきよろきよろと周りを見回す。

そして、あるものを見つけて固まった。

「どろした……ニヤア!？」

シラタキがミラの視線を追い、素っ頓狂な声を上げる。

対岸ではなく、こちら側の岸にある岩の上に、一頭の【イーオス原種】が立っていた。

いや、ただの【イーオス原種】ではない。

通常の【イーオス原種】より二回りは大きい体躯。

頭の上には紫色の立派な鶏冠がある。

【イーオス原種】の群れを率いるボス、【ドスイーオス】だ。

「ドドドドドドスイーオスだニヤ!」

「来たじゃないですか!」

「前は来なかつたんだニヤ!」

「だから学習したんじゃないんですか!？」

「……それは盲点だったニヤ」

【ドスイーオス】が軽やかに岩の上から飛び降り、慌てふためくミラたちの前に着地する。

グアーグアーと【ドスイーオス】が鳴くと、対岸の【イーオス原

種】も囃し立てるように鳴いた。

こっち側に来ているのは、この【ドスイーオス】だけのようだ。

他の【イーオス原種】はここに来る方法を道を見つけられなかったのかもしれない。

ミラは、肩にかけていた【ジエイドテンペスト】を構える。

「時間を稼ぎますから、アンゼリカさんに上がってもらって下さい」

「倒せないのかニヤ？」

「弾が無いから、無理です」

ミラはきっぱりと言った。

残っているのは【氷結弾】が五発だけ。

それで倒せると言うのは、いくらなんでも無茶だ。

「だから、早く」

「でも、ここから送れるのは空気だけなんだニヤ。エリア外だと思つて油断してたニヤ」

急かすミラに、言い難そうにシラタキが答える。

「ええ！？」

驚くミラ。

そこに、【ドスイーオス】が向かって行く。

「くっ」

噛み付いてきた【ドスイーオス】の頭を【ジェイドテンペスト】の本体で横に払う。

わざと視界に入るように横に移動し、【ドスイーオス】の注意を引き付けた。

シラタキか鞆に何かあれば、アンゼリカの身を危険にさらしてしまっからだ。

【ドスイーオス】はミラの思惑に乗り、ミラを追いかけた。

高く跳び上がって、ミラに襲いかかる。

ミラはサイドステップで躲し、銃口を向ける。

攻撃後で隙を見せている【ドスイーオス】に照準が合うが、ミラは引き金を引くのを躊躇った。

もう弾の残りは少なく、普通に撃っていても倒せないのは明白だ。

それなら、もっといいタイミングがあるのではないかと思ったからだ。

ミラが躊躇っている間に、【ドスイーオス】が射線から飛び退き、

振り向きざまに毒液を吐きかける。

ミラは横に移動して毒液を躲し、【ドスイーオス】の後ろに回り込もうとする。

モンスターの攻撃は前方が最も苛烈で、後ろに回るのはセオリーだ。

そうはさせじと【ドスイーオス】が振り向き、前脚の爪でミラを引っかこうとする。

ミラはバックステップで避け、【ジェイドテンペスト】を向けるが、やはり攻撃できない。

ミラと【ドスイーオス】は互いに牽制しあいながら、じりじりと横に動いた。

ミラはアイテムポーチの中身を思い出す。

武器が火力不足なのだから、アイテムでサポートするしかない。

アイテムポーチの中身で使えそうなのは【閃光玉】だろう。

だが、たとえ目を眩ませて手持ちの弾全てを撃ち込んでも倒せない可能性は高い。

一人ならばその隙に逃げることもできるが、シラタキとアンゼリカを置いて逃げるわけにはいかなかった。

(何か……何かないの?)

「ミラ！ 足元！」

シラタキの声にはっとなる。

いつの間にか、溶岩のぎりぎりの所まで来てしまっていた。

思考と【ドスイーオス】に集中しすぎて、足元に気を配る余裕が無かった。

溶岩の川で、横に動けなくなったが、それは【ドスイーオス】も同じだ。

ミラに向かって真っ直ぐ走り、跳びかかる。

(溶岩を避けた……ドスイーオスも、溶岩相手なら！)

ミラは川と逆側の斜め前に前転回避し、素早く立ち上がる。

「じ、こっちに来たニヤ〜！」

シラタキの悲鳴に振り向くと、【ドスイーオス】がシラタキの方に向かっていているところだった。

ミラに声をかけたせいで、【ドスイーオス】の狙いに入ってしまったようだ。

ミラは、【ドスイーオス】の背中を追って走り出した。

作戦は思いついた。

(またこんな一か八かの……でも、やるしかない！)

後は、その綱渡りのような作戦を渡りきるだけだ。

「こつち向いて！」

転がっていた石を拾って、【ドスイーオス】に投げる。

シラタキに迫っていた【ドスイーオス】の背中に当たり、【ドスイーオス】が振り返った。

【ジエイドテンペスト】を構えて、連続で引き金を引く。

だが、【ドスイーオス】が横つ飛びに避けて、弾は後ろに飛んで行く。

「そこっ」

アイテムポーチから取り出した新しい弾倉マガジンを投げつける。

だが、弾倉マガジンは【ドスイーオス】とは見当違いの場所に飛んで行って、溶岩に落ちた。

弾丸に詰められた弾を飛ばすための火薬が爆発し、弾倉マガジンが弾ける。

「何してるニヤ！ 弾は撃つものだニヤ！」

シラタキが騒ぐが、やってしまったものはもうどうしようもない。

弾を失ったミラに、【ドスイーオス】が飛びかかる。

ミラは横に逃げ、【ドスイーオス】の後ろ側に回り込んだ。

【ジェイドテンペスト】で【ドスイーオス】の尻を叩く。

だが、元々打撃用の武器ではない【ライトボウガン】では大したダメージにはならない。

【ドスイーオス】が振り返り、ミラに噛み付く。

ミラはバックステップでそれを躲した。

だが、今の移動で溶岩際に追い詰められてしまった。

じり、と【ドスイーオス】が間合いを計る。

前傾姿勢からかつと口を開き、ミラに襲いかかる。

その瞬間、ミラは取り出した【閃光玉】を後ろ手に投げた。

真つ白な光が周囲を満たし、直視した【ドスイーオス】の目を灼く。

盲滅法うめつぽうに繰り出された爪の一撃を掻い潜り、ミラはさらにアイテムを取り出した。

視界を奪われた【ドスイーオス】の嗅覚を、嗅ぎ慣れた匂いが刺激した。

血の臭いだ。

【ドスィーオス】は反射的にそれを追って足を踏み出していた。

ミラは、血の滴る【アプケロス】の生肉を溶岩に向けて投げた。

【ドスィーオス】がそれを追って足を踏み出す。

とは言え、溶岩に踏み込めば、例え片脚を焼かれてもそこで気がつくだろう。

だが、【ドスィーオス】の足元には、道があった。

【氷結弾】が溶岩を冷やしてできた、水面の薄氷のような道に【ドスィーオス】は踏み込んだ。

一歩、二歩と足を進めた、次の瞬間。

【ドスィーオス】の体重で道が砕け、溶岩に沈み始めた。

【閃光玉】の効果から開放された【ドスィーオス】はようやく自分のいる位置に気がついたが、もう遅すぎた。

灼熱の溶岩がその両足を取られ、踏ん張ることもできずに沈んで行く。

生きながら身を焼かれ、【ドスィーオス】が苦痛の叫びを上げる。

狙い通りではあるのだが、その声の悲痛さに、ミラは思わず目を背けた。

だが、それがいけなかった。

モンスターとの戦いの場では、本当に最後の一瞬まで気を抜いてはならないのだ。

【ドスイーオス】が体を倒しながら限界まで首を伸ばす。

ミラを道連れにしたかったのか、それともミラを支えにして脱出したかったのか、それはわからない。

しかし、【ドスイーオス】の執念は、その口にミラの【腰装備】の端を捕らえさせた。

「え、きゃあ！」

ミラと【ドスイーオス】には、明らかな体重差がある。

ミラは、【ドスイーオス】に溶岩に引きずり込まれてしまった。

溶岩に尻餅をつくような姿勢で引き込まれ、あっという間に腰まで沈む。

【ドスイーオス】は倒れ込んだときに頭まで溶岩に沈み、もうどこにいてもわからない。

「あ、やだ……」

ずぶずぶと胸まで溶岩に沈む。

アンゼリカの保護液のおかげで、【ドスイーオス】のように焼かれることはないが、このまま頭まで沈んでしまえば、呼吸ができなくなつて助からない。

「ミラ！ 掴まるニヤ！」

シラタキが走ってきて、そこから拾つたらしい木の棒を差し出す。

ミラは必死に手を伸ばすが、少しだけ届かない。

そうしている間にも、もう首まで沈んでしまつて、木の棒がより遠くなる。

「ミラ！」

「シラタキさん！」

声を上げる口元まで溶岩が届き　ミラの体に力がかかり、沈降が止まつた。

さばつと溶岩を跳ね上げて、ミラのすぐ傍にアンゼリカが顔を出す。

「旦那！」

「アンゼリカさん！」

シラタキとミラが快哉を上げる。

ミラに至つては、安心して泣きそうだった。

「溶岩で泳ぐのはあまりお奨めしないぞ、ミラ」

そう言うと、ミラを抱えたまま岸に向かう。

本気で命の危険を感じていた割には岸はすぐそこで、簡単に上がることができた。

溶岩から上がると、溶岩が冷えて黒く固まる。

「か、体が重いです……」

「はは、簡単に剥がせるぞ。見てろ」

ヘルメットを脱いだアンゼリカが笑って溶岩を叩く。

すると、溶岩が割れて、下の保護液ごとぼろぼろと剥がれ落ちた。

「わ、凄いですね」

ミラもそれを真似て溶岩を剥がす。

「ミラ、髪にも付いてるぞ」

「え？」

「あたしが取ってやろう。じっとしてろ」

髪に手を伸ばしたミラを制して、アンゼリカはミラの後ろに回った。

手櫛で髪をすくと、固まった溶岩が剥がれ落ちる。

「ん？」

アンゼリカはそれを見て不思議そうな顔をした。

「どうしました？」

「……いや、ミラの髪が金色に見えた気がしたんだ。光の加減だろうな。ところで、何でミラは溶岩に落ちてたんだ？」

「実は、ドスイーオスに襲われて」

「それをミラが捨て身の方法でやっつけたんだニヤ」

ミラの後をシラタキが引き継いで説明する。

「そうか。何か沈んで行っただのが見えたから上がってみただけど、あれはドスイーオスだったのか」

「その通りだニヤ」

「ミラには助けられたみたいだな。それじゃ、そのお礼だ」

アンゼリカが片手を上げる。

今まで気づかなかったが、その手には炎のような朱色の石が握られていた。

アンゼリカはそれをひょいっとミラに投げる。

ミラは、それを受け取って、驚いた。

「これ、獄炎石じゃないですか！」

その石は、ミラが探していた【獄炎石】だった。

「川の底にたくさんあるから、潜ったついでに取ってきたんだ。探してたんだろ？」

平然と答えるアンゼリカ。

確かに、溶岩の近くで見つかる石なら溶岩の川の底にある可能性は高い。

しかも、そんな場所の鉱石は普通取れないのだから、たくさんあるというのも頷ける話だ。

「でも、私も助けて貰ったのにお礼なんて」

「気にするなよ。お礼は言ってみただけで、元々拾ってたんだからな。

あたしはこんなの要らないから、ミラが要らないのなら川にでも投げておいてくれ」

「そんな……」

潜ったついでとは言っても、わざわざミラの為に拾ってきてくれたのには間違いない。

それを投げ捨てられるはずがなかった。

「じゃあ、これは頂きます。ありがとうございます」

「だから気にするなって」

頭を下げるミラに、アンゼリカがひらひらと手を振った。

……

「ここから真っ直ぐ行けばエリア2に出られる。そこからはわかるな？」

「はい、わざわざありがとうございます」

アンゼリカのテントから少し山を下った場所。

そこに、アンゼリカとミラの姿があった。

アンゼリカが道のわかるところまで案内をしてくれたのだ。

シラタキは道具の片づけがあるらしく、テントの側で別れの挨拶を交わしていた。

「次からはもう迷うなよ」

「もう大丈夫ですよ。それじゃあ、私はこれで」

「ああ、またな」

「はい。また来ますね」

一礼した後、手を振ってミラが歩いて行く。

アンゼリカも手を振り返してそれを見送った。

やがて、ミラの姿が岩の向こうに見えなくなる。

「あいつ……何者なんだろうな」

去って行ったミラの姿を思い出しながら、アンゼリカがぼつりと
呟く。

アンゼリカの胸中には疑問が渦巻いていた。

（あの髪……）

髪に溶岩が付いていたということは、その部分が溶岩に沈んだと
いうことだ。

溶岩の高熱にさらされれば、間違いなく髪の毛は焼けてしまうだ
ろう。

だが、髪には保護液を付けていなかったにも拘わらず、ミラの髪
は焼けるどころか少しも痛んでいなかった。

アンゼリカは自分の髪に手を通す。

（あたしの、ヴォルガノス進種の髪は溶岩の熱にも耐えるんけどな）

【ヴォルガノス進種】の体毛は熱に強い。

だから、保護液をつけなくても平気なのだ。

ミラも同種かと思ったりもしたが、それだと熱さで倒れていた説明が見つからない。

（もしかして、変種か？ 能力が欠けてるから言いたくなかったのかもしれないな）

【進種】の中にも、能力の異なる【変種】は存在する。

もしかすると、ミラは【ヴォルガノス進種】の中の【変種】かもしれない。

ちゃんと種族を聞いておけば良かったと思ったが、後の祭りだった。

（まあいい。また火山に来たときにでも話を聞かせて貰うとするか）

ミラが素材集めで火山に来るなら、また会うこともあるだろう。

そんな風に考えながら、アンゼリカは帰って行った。

<簡易キャラクター紹介>

名前：アンゼリカ

年齢：20

性別：女

種族：ヴォルガノス進種

能力：【耐熱】

<オリジナル防具紹介（作中で説明できなかったの）>

名前：ラヴァダイバースーツ

丁寧に溶岩を落としたヴォルガノスの鱗から作られる水着一式。
金色の鱗は耐熱性に優れ、溶岩の熱でも変質しない。

第八話「マゲマスイマー」(後書き)

ボウガンの設定はちょっと変えてあります。

上手く説明がつかなかった連射は無しに、多段ヒットするタイプの属性弾も一ヒットにしました。

第九話「対の翼」(前編)(前書き)

(修正)

一般的な薬莢の素材が金属になっていたのを修正。

第九話「対の翼」(前編)

六年前

まだ日の昇りきらない薄暗い時間。

ミュリエリアの工房の前に、三つの人影があった。

一人はミュリエリア。

後の二人は、背中に桜色と蒼色の翼を持つ【リオス進種】の双子の姉弟だった。

「これが、注文の品よ」

ミュリエリアが差し出した二本の剣を、姉弟が一本ずつ手に取る。

長さからすると片手剣だろうか。

刀身が緩やかな曲線を描く片刃の剣で、その刃は鋭く研ぎ澄まされてる。

双子のようにそっくりな剣だが、一方は峰に金色に輝く鱗があしらわれ、もう一方は銀色の鱗が使われている。

二人は、ミュリエリアから渡された剣をベルトの後ろに留めた。

「どつしても、もう行くの?」

「ええ。私たちは、どうしても知りたいの」

きっぱりと言って、首から提げたネックレスのチェーンをぎゅっと握る。

どうしたって覆せない強い意志を感じて、ミュリエリアは引き止めるのを諦めた。

「次までに、私も武器を扱えるようになっておくわ。今度は私が見てあげるから、だから、また必ず会いに来て」

「わかったわ。また会う日を楽しみにしておくわね」

「行ってくるね、ミュリイ」

危険な旅に出る友人に、せめてもの言葉を送るミュリエリアに、姉弟が揃って頷く。

そうして、数日間の同居人は旅立って行った。

MONSTER HUNTER EVOLVE
第九話「対の翼」

工房の裏にある木の枝に小鳥がとまっていた。

何という名前の鳥かはわからないが、綺麗な声で楽しそうに鳴いている。

ミラは視界一杯に広がっている薄緑色の羽に向かってゆっくりと手を伸ばす。

すっ、と手が空を切った。

「届くはずがないんだけど、つい手が伸びちゃうんだよね」

呟いて、覗いていたスコープから目を離す。

【ボウガン】に使われる部品だが、ただの照準用のスコープとは違い、遠くの物を拡大して見ることのできる、可変倍率スコープと呼ばれるスコープだ。

名前の通り、拡大する倍率も操作することができる。

ミラが見ていた小鳥も、実際にはミラの手が届く距離からは遠く離れていた。

【ボウガン】に取り付けて使うものだが、今は本体に取り付けられておらず、ただの望遠鏡状態だ。

もう一度スコープを覗いて、十字の照準に小鳥を捉える。

スコープの横についているつまみを操作すると、小鳥の像の大き

さが変化した。

「うん、動作は良好っと」

スコープから目を離して、一度地面に置く。

そして、その代わりに地面に置いてあった【ヘビィボウガン】を手に取った。

【ヘビィボウガン】は【ボウガン】の一種で、【ライトボウガン】よりも威力に優れるが、当然重量も重く扱いにくい。

一メートルを越える銃身は【エルトライト鋼】、銃床には【神龍木】という最高級の素材が使われていて、シンプルながらも精錬されたフォルムをしている。

【ヘビィボウガン】にしては珍しく中折れ式の構造を持たず、弾を一発撃つ度に手動で装填するボルトアクション式が採用がされていた。

【MASR - 4 ヘブンスサイト】。

異常な視力を持ち、視界の外から攻撃をしてくる【ハンター】である、狙い撃つ者【スナイパー】にヒントを得た、ミュリエリア製長距離狙撃ボウガンだ。

ミュリエリアは、以前にも同じコンセプトで【試作型長距離狙撃砲】【MASR - 2 クロスディスタンス】【MASR - 3 ホークアイ】の三つの【ヘビィボウガン】を作っている。

その中で最も完成度の高い【ホークアイ】の最大有効射程距離
狙った相手に対して十分なダメージを与えられる距離　はおよ
そ四百メートル。

単純な飛距離ならその倍は飛ぶ。

【ヘブンスサイト】は今までの集大成であり、理論的にはその上を
行くはずだ。

通常の【ボウガン】の最大有効射程距離がおよそ百メートル前後
であることを考えると、その凄さがわかるだろう。

ただ、射程が長いものにも困ったもので、工房の裏庭では試射の距
離がまるで足りないのだ。

(どこかに行かないとダメなんだよね)

そんなことを考えながら、スコープを本体に取り付ける。

とりあえず、今できるのはスコープの確認だけだった。

スコープを覗き、何となく空を見上げた。

(……あれ?)

天頂に太陽を頂く晴れ渡った青空に、小さな黒い点が二つ見える。

鳥かと思っただが、鳥にしては少し大きい気がした。

「なんだろ、あれ」

倍率を上げて、点を拡大してみる。

スコープのレンズの中に映ったのは、二人の【リオス進種】だった。

ぐんぐんと近づいてきて、すぐに姿がはっきりと見えるようになる。

一人は背中の真ん中まで伸ばした桜色の髪を風に遊ばせた少女で、背中には同じ色の翼がある。

もう一人は、蒼い髪、蒼い翼の少年だ。

少し長めに髪を伸ばしていて、先端が肩にかかるくらいの長さがあった。

顔立ちは二人ともよく似ていて、血縁の関係を感じさせる。

同じ空色の瞳だが、少女の方は少し吊り上った目が勝気な印象を与えるのに対して、少年の方は温和な印象を受ける。

二人の姿は、もうスコープなしでもよく見えるところまで来ていた。

どつやら村に降りるようだ。

【ハイエンシメント進古龍種】以外で唯一翼を持ち、自在に空を飛ぶ【リオス進種】

ミュリエリアの店には色々な種族が訪れるが、【リオス進種】を見るのは初めてだった。

興味を覚えたミラは村に出て見に行くために、工房の中に戻って行った。

.....

「おかえりなさい、ミラ」

作業場に入ると、作業台に向かっていているミュリエリアが声をかけた。
「来た。」

目の前の作業台にはたくさんの金属筒や秤、量り分けられた火薬の粉などが並んでいる。

【ヘブズサイト】は一般規格外の【ボウガン】で、弾（弾薬）も専用の物を作らなければならないのだ。

弾薬は、主に【カラ骨】と呼ばれるモンスターの脊椎を加工した筒である薬莖に、燃烧し弾を飛ばすための火薬と先端部にあたる弾丸を収めることで作られ、火薬の量や弾丸の種類によって、弾の飛距離や威力は大きく異なる。

今作っている弾は、ミュリエリアが【狙撃弾】と名づけた弾だ。

弾を普通の弾よりもかなり重くすることで風などの外的要因の影響を押さえ、遠距離での命中精度を高めている。

薬莖には金属を使って重さを増し、弾丸には硬度の高い鋼鉄が使

うことで高い貫通力を持たせてある。

大型の飛竜を相手にしても、的確に急所を狙えば一発で致命的なダメージを期待できる特殊な弾だった。

「どうだった？」

「スコープはちゃんと見えたよ。拡大も問題なし。後は、撃ってみないとわからないかな」

壁際の武器置き場に【ヘブンスサイト】を立てかけながらミラが答える。

「それでね、お姉ちゃん」

「どうしたの？」

「リオス進種の人が村に降りてくるのが見えたんだよ。本当に飛べるんだね」

「リオス進種？」

「うん。桜色の羽の女の子と蒼い羽の男の子だったよ」

「え……」

ミラは何気なく特徴を口にしたのだが、それを聞いたミュリエリアの顔が驚愕に彩られる。

「お姉ちゃん？」

どうしたのかとミラが聞こうとした、そのとき。

作業場に通じるドアが勢いよく開かれた。

注文を聞くときに客を作業場に通すことはあるが、勝手に入られては困る。

「あ、すみません。こっちは立ち入り禁止で」

「約束通り来てあげたわよ！」

ミラの言葉を遮って、声が響く。

言いながら作業場に入ってきたのは、桜色の翼の少女だった。

さっき見たときは気がつかなかったが、着ているのは【エンプレスXシリーズ】と呼ばれる装備だ。

【胴装備】の【エンプレスXメール】の背中が大きく切り取られて、そこから翼が外に出ている。

【エンプレスXシリーズ】は【古龍】である【ナナ・テスカトリ】の素材から作られる装備で、青い甲殻と鱗に覆われた鎧は実戦に十分耐えうる強度と共に優美な気品を漂わせている。

【古龍】は数が少ない上に強い力を持っており、倒すのが難しい。

その素材から作られる防具を着ているということは、相当な実力の持ち主なのだろう。

その少女を見るや否や、ガタッと音を立ててミュリエリアが立ち上がる。

作業台が揺れて粉末の火薬が零れたが、それにも気がついていないようだ。

こんなに驚いている様子のミュリエリアを見るのは初めてだった。

「セルティ！」

驚きと喜びの混じった声で名前を呼び、ミュリエリアが駆け寄る。

「久しぶりね、ミューリィ」

「ええ、本当に」

手を取り合って、再会を喜ぶ二人。

ミューリィと呼んでいるところから、親しい仲なのだろうとわかる。

状況についていけないミラが戸惑っていると、開けっ放しのドアから、今度は蒼い翼の少年が姿を見せる。

こちらは同様に【古龍】である【テオ・テスカトル】の素材から作られる赤い鎧【カイザーXシリーズ】を着ていた。

【エンプレスXシリーズ】同様、素材と布で意匠を凝らした、防具として最上級の一品だ。

「お邪魔します」

先の少女とは違って、きっちり挨拶してから作業場に入ってくる。

それだけ見ても店の奥に勝手に入るような性格には見えないから、作業場に入るのは彼にとって当然のことなのだろう。

「久しぶりだね、ミューリイ」

「セレスタ、あなたも元気そうね」

「うん。おかげさまでね」

にっこりと笑ってミュリエリアに答える。

こっちの少年も、親しい仲のようだ。

「……お姉ちゃん、この人たちは？」

蚊帳の外に置かれていたミラがおずおずと尋ねる。

ミュリエリアはその声に、はっ、と気づき、【リオス進種】の二人はミラに誰だろうという視線を向けた。

「ミューリイ、誰なの、この子」

「そうね。紹介するわ」

ミュリエリアはミラと二人を向き合わせる。

「この子はミラ。事情があって一緒に住んでいるのよ。私は妹のよ
うに思っているわ」

「えっと、ミラです」

ミュリエリアに紹介されて、ぺこりと頭を下げる。

今度は、【リオス進種】の少女が口を開く。

「ミラね。私はセレスティア。ムーリィの友達よ。それで、こっ
ちが」

「双子の弟のセレスタイトだよ。よろしくね」

「あ、こちらこそ、よろしくお願いします」

ミュリエリアとの関係ははっきりわからないのだが、セレスタイ
トに柔らかく微笑みかけられて、とりあえず頷く。

名前がセレスティアとセレスタイトということは、ミュリエリア
が呼んでいたのは愛称だろう。

「二人は昔、両親と旅をしていて、子供の頃に何度も会ったことが
あるの。でも、随分長く会っていなかったわ」

「そうね。だいたい六年ぶりってところかしら」

「六年も……」

ミュリエリアの後をセレスティアが引き継ぎ、それを聞いたミラはようやく納得した。

大怪我をしたり死んだりすることも珍しくない世界だ。

六年も会っていないなかった友人が急に訪れれば、それは驚くだろう。

「そうよ。六年も一切連絡してこなかったの。こっちから手紙を出しても、見つからないから返ってくるし」

少し拗ねたような口調で言いながらミュリエリアがジト目で睨む。定住していない人を探して手紙を届けてくれるアイルーもいるが、ある程度の期間で見つけられなかった場合は差出人の所に戻ってくる。

頻繁に居場所を変えている相手に手紙を出すと、届かないことが多かった。

「ごめんね。二人で旅を始めた最初の頃は連絡する余裕もなかったし、何の進展も無いのに連絡するのが嫌だって姉さんが言うから」

「余計なことまで言わなくていいのよ！」

セレスティアがセレスタイトの頭を小突き、セレスタイトは「痛い」と言っ頭を押さえた。

「まあ、連絡しなかったのは悪かったわ」

罪悪感はあるらしく、ばつが悪そうにそう言う。

「無事だったならいいわ。それで、ここに来たということは何か進展があったの？」

「それがなーんにも。ここに来たのは、これがそろそろ限界だと思っただからよ。ほら、あんたも出しなさい」

「あ、うん」

セレスティアは、腰の後ろに差していた剣を作業台の上に置く。

セレスタイトも、自分の剣をセレスティアの剣の隣に並べて置いた。

それぞれ、金と銀の鱗で美しい装飾のなされた短めの剣だった。

刀身には無数の傷が刻まれ、相当に使い込まれているのがわかる。

丁寧に手入れされているらしく、刃は鋭く輝いているが何箇所か大きく欠けている部分があった。

「これは……」

ミュリエリアは一目見るなり眉を顰めた。

「こんなに刃が小さくなって……今まで修繕をしなかったの？」

名工が作るうが、きちんと手入れをしようが、実戦で使っているならば、武器の磨耗は避けられない。

戦いの中で刃を毀すのは珍しくもないし、切れ味を保つために砥石を使えば当然刃を削ってしまう。

そういった武器の劣化を防ぐために、職人に定期的な修繕を頼むのは基本的なことだ。

「約束したじゃない。次はミューリイが見てくれるって」

「この武器は特別だから、誰にでもは任せたくなかったんだ」

その言葉を聞いて、特別の意味を知っているミュリエリアは一瞬痛ましげな表情を浮かべた。

だが、すぐにその表情を打ち消し、呆れたような表情を作った。

「そう言ってくれるのは嬉しいけれど、それならもっと早く来なさい」

軽く頬を膨らませるおまけつきで、ミュリエリアが文句を言う。

「うん、ごめん。つい後回しにしちゃって」

セレストライトが小さくなって謝る。

その様子を見て、ミュリエリアは表情を緩めた。

「もういいわよ。それで、私はこれの修繕をすればいいのね」

「そうよ。ミューリイに任せるわ」

「お願い、ミューリイ」

「ええ、わかったわ。ミラ」

「はい」

軽いお願い感覚で頼まれたが、注文は注文だ。

ミラはいつものように棚へと向かう。

その背中に、ミユリエリアが呼びかけた。

「二人の分はまだないから、新しいのを取ってちょうだい」

「え、ないの？」

作ったものは全部きちんと記録を取っていると思っていたミラが驚いて聞き返す。

「この剣は私が作った武器ではないのよ。私が刀工を習い始めたのは、セルティたちが旅に出た後なの」

「それじゃあ、これは」

「これを作ったのは、ミューリイのお父さんだよ。あれ、そう言えばおじさんとおばさんは？」

口を挟んだセレスタイトが首を傾げる。

そう言えば、とミラは思う。

自分に親の記憶というものが無いせいで今まで気にしていなかったが、当然ミュリエリアには親がいたはずだ。

村に家を持っているのだから、普通なら一緒に住んでいるだろう。

六年前はいて、今はいない。

もしかして、と悪い考えが頭を過ぎる。

が、ミュリエリアはあっさりと答えを言い放った。

「父さんと母さんは四年前からあちこちを旅しているわ。新しい武器のアイデアを追い求めているそうよ」

「そうだったの？」

とセレスティア。

連絡を取っていなかったから、知らなかったらしい。

セレスティアも驚きの表情を浮かべている。

「ええ。でも、ちゃんと連絡はくれるわよ」

「誰かさんとは違ってね」とミュリエリアが悪戯っぽく笑う。

今日のミュリエリアはなんだかいつもより幼く見える。

小さな頃の友人との再会が、彼女を童心へと帰しているのだろう

か。

いつもの『姉』とは違う顔を見せるミュリエリアに、ミラは新鮮な印象を感じた。

「ふん、悪かったわね」

惘然としてセレスティアが言う。

「ところでミュリー、この店、いつの間にかこんなに手広くなったのよ。昔はただの鍛冶屋だったのに、表の看板見て驚いたわよ」

「両親が旅に出た後、私はまだ鍛冶師としてやっていく自信がなかったから、仕入れて売るだけでいい雑貨屋にしていたのよ。」

でも、父さんがいないのを知らずに装備の注文をしにくる人が多くて、なし崩し的に手広くなってしまったのよ」

「そ、そう。それで今ではあんたが名工って呼ばれてるんだから恐れ入るわ」

少し呆れた顔でセレスティアが呟く。

今ではすっかり何でも屋になっている【工房・ミュリエリア】だが、そこに至るまでには色々あったようだった。

夕刻。

キッチンでミラとミュリエリアは夕食の準備をしていた。

セレスティアとセレスタイトを歓迎する意味で、今日の料理は「
馳走だ。」

ミラがお使いに出て買ってきた食材が机の上に積んである。

「……………」

調理場の前で、可愛らしい空色のエプロンをつけたミラがまな板
に向かって呻っていた。

手に包丁を持っていて、ヤングポテトの皮を剥いている。

普段武器を振るっている姿からは想像もできないほどたどたどし
い動きだった。

武器の使い方は体に染み付いていても、料理は勝手が違うらしい。

ミュリエリアの手伝いをしたいのに、現状ではどちらかと言うと
邪魔になってばかりである。

「ミラ、代わりましょうか？」

お揃いのエプロンをつけて別の食材の下ごしらえをしていたミュ
リエリアが心配そうにミラの手元を覗き込む。

その様子は、まるで子供を心配している母親のようだ。

「大丈夫だよ、やらせて 痛っ」

ミラがミュリエリアに言い返す、が、それで気を逸らせてしまったのだらう。

ヤングポテトを持っていた手が滑って、包丁で指を切ってしまった。

指に赤い線が引かれ、そこから血が滴り落ちる。

だが、大型のモンスターから受ける傷に比べると、この程度はかすり傷のようなものだ。

むしろ、食材に血が付くのが心配だった。

「あっ、お芋が汚れちゃう」

「そんなことはいいから、早く手当てしてきなさい」

ミュリエリアが横から手を伸ばし、ミラの手からヤングポテトを取る。

「このくらい大丈夫だよ。そんなに痛くないし」

「痛くなくても、血が出ていたら料理ができないでしょう」

「うー……わかったよ」

不満そうな顔で頷き、ミラはキッチンを出て行った。

キッチンを出て作業場に入ると、セレスティアとセレスタイトが作業台の椅子に座って何事か話している。

作業台の上には、柄と装飾の外された二振りの剣が置いてあった。

修理方法を相談した結果、もうボロボロの刃をミュージエリアが新しく打ち、まだ使える部分は修繕にとどめることになり、今は分解されている。

作業場に入ってきたミラに気がつき、二人がミラに顔を向ける。

「どうしたのよ」

というセレスティアの質問にミラが正直に答えると、

「どんくさいわね」

「切ったの？ 大丈夫？」

全く正反対の反応が返ってきた。

セレスタイトが椅子から立ってミラに近づき、指を切った手を取る。

「うわ、この傷結構深いよ」

傷を確かめて、セレスタイトが眉をひそめる。

「手当てするから、こっちにきて」

「あ、自分でやりますから」

「片手じゃやりにくいでしょ。やってあげるよ」

有無を言わずにミラの手を引いて作業台へと連れて行き、側の床に置いていた荷物から包帯やガーゼを取り出す。

「はい、手を出して」

ここまでしてもらって断るのも悪いし、実際、片手では治療がやりにくい。

ミラは大人しく手を差し出した。

セレスタイトはその手をとって治療を始めた。

熟練のハンターらしく、手馴れていて手際がいい。

それを見ながら、セレスティアが椅子から立ち上がった。

「あんたが出てきたってことは、今はミューリイが一人で作ってるってことね」

「はい。そうですけど」

「それじゃあ、私が手伝ってくるわ」

「あ、お客様なんですから待っていてください。私が戻りますから」

「何言ってるのよ、そんな手で何するつもり？」

セレスティアがミラの手を指差す。

セレスタイトの手当てで、切った指に包帯が巻きつけられていくところだった。

その状態だと、水を使う仕事はできないだろう。

「それはもつともだけど、姉さんがやるの?」

手当ての手を止めて、セレスタイトが聞く。

「何よ、文句ある?」

「あるよ。いつつも僕に食事当番させるくせに。ミューリィの前でいい格好しようとして」

「なっ……」

絶句するセレスティア。

「違うわよ! 馬鹿なこと言わない!」

「じゃあ何で?」

「え、それは……」

口ごもって、視線を中空にさまよわせる。

何かを誤魔化すための理由を探しているような様子だった。

が、いい説明は思いつかなかつたらしい。

「そんなの、どうだっていいでしょー!」

怒ったように、と言うより、事実怒っているのかもしれない。

乱暴な口調で言い放ち、足音も荒くキッチンへ入って行った。

「全く、姉さんは……」

セレスタイトは呆れたように呟いて、ミラの手当てに戻った。

ふと気になって、ミラは聞いてみることにした。

「セレスティアさんって料理できないんですか？」

「できないんじゃないかな。僕は姉さんとずっと一緒にいるけど、料理してるところなんて見たこと無いからね。」

そもそも、姉さんってそういう家事みたいなことは全部僕任せだからね」

「それは、大変ですね……」

「え？」

全く意外そうに、セレスタイトが聞き返した。

ミラが言ったことなど予想外だと言わんばかりだった。

「大変じゃないですか？ 全部セレスタイトさんがやってるんですよ？」

「あー、そっか」

ミラが改めて言うと、セレスタイトはようやく納得したように頷いた。

「普通は大変って思うんだ」

と言って、一人でうんうんと頷く。

「でも、僕は大変って思ったことはないかな。だって、それが僕らの当たり前だからね」

当然のことだから、大変だとも思わないし嫌だとも思わないのだと、そう言った。

「あれ、さっき文句言ってませんでしたか？ 『いつも食事当番させる』って」

「食事当番することに文句は無いよ。ただ、できないのに手伝ってミューリイに迷惑かけたらいけないって思っただけだよ」

と、セレスタイトが言ったちようどそのとき、台所の方から何かひっくり返るような大きな音が聞こえてきた。

二人分の悲鳴と陶器の砕ける音が響く。

「……ほらね」

「あはは……」

肩をすくめるセレスタイトに、ミラは苦笑を返すしかなかった。

それからしばらくして、夕食。

テーブルの上には、最初にあつた材料からすると随分と少ない料理が並んでいる。

普段と同じ量の材料で作ろうとしていたら、おかずが無かったかもしれない。

並んでいる料理にしても、形が歪だつたり焦げていたりする。

ミラはミュリエリアが料理上手なのを知っているし、セレスタイトはセレスティアが料理ができないのを知っている。

惨状の犯人は一目瞭然だつた。

「えーと、頑張つてはいたのよ？」

ミュリエリアのフォローも虚しく響くだけで、無言の抗議を浴びたセレスティアは「ふんっ」とそっぽを向いた。

翌朝。

もう随分と日が高くなってきた頃。

ミラが作業場で武器の手入れをしていると、どたどたと慌しい足音を立てながら、セレスティアが階段を下りてきた。

「寝すごしたーっ！」

髪の毛はぼさぼさで、服装は寝たときと同じインナー姿。

今まさに起きたばかりらしい。

すっかり仕度を整えて、装備まで身につけているミラとは正反対だ。

「おはようございます。セレスティアさん」

「おはよ セレスタは？」

辺りを見回しながらセレスティアが聞く。

「セレスタイトさんならお姉ちゃんと物置に素材を見に行ってますよ。何でも、お姉ちゃんに教えてもらいたいものがあるらしくって」

朝食を終えて、仕事にかかろうとしたミュリエリアにセレスタイトが頼んでいた。

ミラは細かい話は聞かなかったが、ミュリエリアから教わるのだから何らかの加工技術だろう。

それを作るための素材があるかどうかを、物置へと探しに行っているのだ。

「ミューリイと一緒に？」

あいつ、私を起こしもしないでそんなことを……」

セレスティアが苦々しく呟く。

寝坊の原因はそれらしい。

「セレスティアさんって、セレスタイトさんに起こしてもらってるんですね」

「何よ。それがどうかしたの？」

「いえ、特にどうもありませんけど」

そう言いながら、ミラは一つの疑問を解決していた。

昨夜、寝る時になってようやく、ミラたちはもうこの家に空き部屋が無いことに気がついた。

結局、ミューリエリアの部屋でミューリエリアとミラが、

ミラの部屋でセレスティアとセレスタイトが寝ることになったのだが、双子とは言えない歳（二人はミューリエリアと同じ年だ）の男女があっさり一つの部屋で寝るのを了承したのが気になっていたのだ。

どうやら、この二人、普段から一緒に寝ているらしい。

まあ、旅をしているのだから当然と言えば当然なのだろうが、これも昨日セレストライトが言っていた『当たり前』なのだろう。

「これでよし、っと」

手入れをしていた【夜刀【月影】】を鞘に収める。

「それじゃあセレスティアさん。私はちょっと出かけてきますね」

ミラは椅子から立ち上がり、【夜刀【月影】】を背中に取り付ける。

「どこに行くのよ？」

「森丘まで、素材集めに」

客人がいようが、仕事があるのは変わらない。

今日の目的は、【ニトロダケ】だ。

自然に生えている状態で七十度近くの高熱を持つ不思議なキノコである。

抜いて（死んで）しまうとその温度は失われるが、粉末にした物は他の物の燃焼を助け、調合素材として重宝されている。

【ニトロダケ】は、所詮はキノコであり、襲ってきたりはしない。

モンスターの素材を集めることに比べると、まさに『ちょっと』出かけてくるレベルなのだ。

「ならちよつと待つて。私も行くわ」

「セレスティアさんも？」

「特にやることもないし、暇なのよ。いいでしょ？」

「それは、構いませんけど」

「じゃ、決まりね。用意してくるわ」

そう言うのと、セレスティアは身を翻して階段を上っていった。

しばらくして、

ミラとセレスティアは【森丘エリア】を歩いていた。

ミラは【夜刀】【月影】を武器にしたいつもの装備。

セレスティアは【エンプレスXシリーズ】を着込み、修理中の武器の代わりにミラの【オデッセイ】を持っている。

だが、セレスティアが持ってきたのは剣の方だけで、盾の方は置いてきてしまっていた

別に、剣だけで使つてはいけないという決まりがあるわけでもな

いが、【片手剣】と言う武器カテゴリが剣と盾のセットであることを考えると、やはり変わった使い方である。

「本当に剣だけでよかったですか？」

「いいのよ。普段から使っていないんだし、無理に使っても怪我するだけだわ」

「あ、そうなんですか」

確かに、修理に出されたのは剣だけだったな、とミラは思う。

あれは、盾が壊れたわけではなく、元々使っていなかったらしい。

「だいたい、あんな小さい盾なんてあっても無くても同じだと思うのよね」

「そうですか？ あれはあれで便利だと思いますけど」

小さくても盾は盾だ。

あるのと無いのとではやはり違う。

【ランス】の大きな盾のような防御力は望むべくも無いが、それでも、鎧一枚よりはずっと防御力を上げることができるし、

小さいということは取り回しが容易であるということであり、打撃攻撃にも使える。

伊達や酔狂で付いているわけではないのだ。

「要らない要らない。攻撃あるのみ、よ」

そう言っつて、ぐつと拳を握る。

どうやらこの少女、やたらと攻撃的なスタイルらしい。

火を操る【大地の絆】持ちにふさわしい苛烈な性格と言っところ
だろうか。

「そう言えば、セレスタイトさんも剣だけですよね？」

ふと思いついて、ミラは言っつた。

「セレスタイトさんも盾を使わないんですか？」

口調からして激しい感じのセレスティアが盾を使わないのはまだ
頷けるが、セレスタイトはむしろその反対の印象だ。

優しそうと言っつか、控えめなイメージのセレスタイトが攻撃特化
のスタイルと言っつのはどうも想像しにくい。

だが、

「そうよ」

とセレスティアは肯定した。

セレスタイトもセレスティアと同じ戦い方をするのだと、そう言
つた。

「私とあいつは二人で一つ。それなのに戦い方が違うんじゃないわ、やりにくくてしょうがないわ」

「そういうものですか？」

正直、ミラにはセレスティアの言いたいことはよくわからなかった。

複数人で狩りをするときには、武器がばらけることが多い。

【エリア】において、多少の傾向はあっても、基本何と遭遇するかはわからない。

例えば、ある種類のモンスターの目撃情報を得て行った場所で全く違うモンスターに会うことなど何も珍しくは無いのだ。

あらゆる状況に柔軟に対応するには、ある程度武器がばらけていた方がいい。

得意とする間合い、機動力、アイテムの使いやすさ、等々。

戦い方の違いは選択肢の多さであり、戦い方の可能性だ。

「そういうものよ」

「はあ」

断言するセレスティアに、ミラは半信半疑で曖昧な返事を返した。

セレスティアはミラの生返事を気にする様子もなく、「そう言えば」と話を変えた。

「あんだ、セレスタが何をしてるか知ってる？」

「いえ、聞いてないです」

ミラは首を振った。

「多分、何か作るんだとは思いますが。何かまでは聞いてませんでしたから」

「そう……」

セレスティアはそう言うと難しい顔で何事か考えているようだった。

「どうかしたんですか？」

不思議そうにミラが聞くと、セレスティアは難しそうな顔のままで口を開く。

「変なのよ」

「変？」

「何でか知らないけど、セレスタの奴、急にミューリィに会いに行くとか言い出したのよね」

「そうなんですか？」

「そ。偶々寄ってた村から出たら急に。」

あいつは煌竜剣が限界だからって言うってたし、確かにもうボロボロだけど、その村に入る前とはそう変わらないし、使えないほどってわけでもないのよ。」

来たら来たで、私を起こさずにミューリイとこそこしてるし。ね、おかしいでしょ。」

「確かに」

ミラは頷いた。

「で、私はこう思うわけ。」

あいつ、ミューリイに惚れてるんじゃないかって」

「ええっ!?!?」

驚いて、ミラは大声を上げた。

だが、良く考えてみるまでもなくそれはそれで不自然な話だ。

「でも、六年も会ってなかったんですよ？ それこそ急だと思っ
んですけど」

「それは、ほら、あれよ。会えなかった間に想いが募って、それが
爆発したのよ」

「うーん、そうかなあ?」

その説明もどうも根拠に欠けていて頷きにくい。

寝ていたセレスティアは知らないが、今朝の朝食はミュリエリアとミラが用意した。

そのときには、既にセレスタイトが起きていたにも関わらずだ。

もし、セレスタイトがミュリエリアに近づきたいと思って訪れたのだとしたら、そこは手伝うなりしてアピールするところだろう。

ただでさえ、再び旅に出ることは決まっていて、時間は少ないのだから。

「もっとまじめに考えなさいよ！ あんたのお姉ちゃんが取られるかもしれないのよ！」

煮え切らないミラの態度に業を煮やしたのか、セレスティアが大きな声を上げた。

ミラよりも、よっぽどセレスティアの方が焦っているようだった。

もしかして、とミラは思う。

「セレスティアさん。お姉ちゃんにセレスタイトさんを取られるかもって思ってるんですか？」

「んぐっ」

セレスティアは妙な声を上げて沈黙した。

見る間に、顔が真っ赤に染まっていく。

「どうやら、凶星だったらしい。」

「ち、違うわよ……私は別に……」

ぶつぶつ言い訳してみたことを呟くが、真つ赤な顔で言っでは全く説得力がない。

その様子が可愛くて、ミラはくすくすと笑い声を上げた。

「な、何よ！」

「セレスティアさんはセレスタイトさんが大好きなんですね」

「な、なななな何言ってるのよ!？」

ミラに笑いを含んだ声で言われて、セレスティアがさらに赤くなる。

こんなに赤くなれるものなのかとびっくりするほどだ。

「好きとか嫌いとかじゃなくて、あいつがないと調子狂うのよ。私とセレスタはずっと一緒だったし、それに」

セレスティアは一度言葉を切り、首に提げているネックレスのチエーンを握った。

どこか遠くを見るような瞳で、言う。

「それに たった二人の家族なんだから」

「え……」

たった二人の 二人きりの家族。

それは、他の血縁者がいないということだ。

つまりそれは、セレスティアたちの両親が死んでいるということ
を意味する。

そんなこと、考えもしなかった。

思いがけず深いところに踏み込んでしまって、ミラはうるたえた。

なんとやっていいのか、言葉を探すが急には出てこない。

「ていつ」

そんなミラの額を、セレスティアが小突いた。

少し高い位置にある顔を見上げると、セレスティアは困ったよう
な優しい苦笑を浮かべていた。

「そんな顔するんじゃないわよ。そんなに珍しいことでもないでし
よ」

「でも」

と、言いかけたセレスティアに手の平を突きつけて遮り、話はお
しまいとばかりに歩き始めた。

「さあ、さつさと行くわよ！ それから、この話をセレスタにするんじゃないわよー！」

「あ……はいっ」

ミラは、セレスティアの気遣いに甘え、その背中を追いかけた。

夕方になって、ミラとセレスティアが大量の【ニトロダケ】を抱えて工房に帰ってくると、工房の中にはいい匂いが漂っていた。

ミラがキッチンを覗いて見ると、エプロン姿のミュリエリアが大きな鍋をかき混ぜていた。

「ただいま、お姉ちゃん」

後姿に声をかけると、ミュリエリアがおたま片手に振り返る。

「おかえりなさい。ニトロダケは集められた？」

「うん、ばっちりだよ。モンスターにも会わなかったし、今日はい日だったなあ」

「そう、よかったわね」

と、今日の報告をしていると、作業場の方から何か言い争いをし

ているような声が聞こえてきた。

「どうしたんだろ？」

「どうしたのかしら？」

ミラとミュリエリアは顔を見合わせて首を傾げた。

「私、見てくるね」

「ええ。よろしくね」

ミラはキッチンから出て、真っ直ぐに作業場に向かった。

作業台の上には、そっくりな二本の刃が置いてある。

セレスティアたちが持ってきた剣をそのまま大きくすればこうなるだろうという形だ。

これが、ミュリエリアの作り直した刃なのだろう。

この時点で刃が完成しているのか、まだ工程が残っているのかはわからないが、刃が形になるまでには作業が進んでいるようだ。

この分だと、明日にも完成していそうだった。

そして、同じ作業台にセレスタイトとセレスティアがいた。

セレスタイトが作業台に置いた何かを隠すように突っ伏していて、その背中にセレスティアがくっついていた。

「セレスタ！ 何隠してんのよ！」

「だから姉さんには見せられないんだって！」

「弟の分際で姉に隠しごとなんて、百年早いだよ！」

「双子なんだからほとんど関係ないじゃないか！」

「うるさい！ とにかく見せればいいのよ！」

「明日になったら見せるから！」

「明日見せるなら今でもいいじゃない！」

「ダメなんだって！」

本人たちは必死になっているようだが、傍目には二人がじゃれあっているようにしか見えない。

ミラは、呆れたように肩をすくめて、無言でキッチンに戻って行った。

「どうだったの？」

戻って来たミラに、ミュリエリアが聞く。

「仲良く喧嘩してたよ」

と、呆れ顔でミラが言うと、ミュリエリアは「まあ」と苦笑した。

「それは大変ね」

そう言っつて、キッチンから作業場に呼びかける。

「セルティィー、少しこっちを手伝ってー」

「ごめーん。今取り込み中だから！」

「でも、今やっつておかないと後で困るわよ」

ミュリエリアが重ねて言うと、しばらく沈黙があったから、

「わかったわよ！」

と返事が返ってきた。

少し間が空いて、不満そうな顔のセレスティアがキッチンに入ってくる。

「もうちょっとで奪い取ってやれたのに……」

どうやら、セレスタイトは無事に隠し通すことができたらしい。

「三人いると少し手狭ね」

工房のキッチンはそれほど広くない。

三人も入ると、ほとんど身動きが取れないほどだった。

「ミラ。今日はセルティに手伝って貰うから、向こうで待っていてくれる?」

「うん。わかった」

ミラは、ミュージエリアの手伝いをセレスティアに任せて、キッチンを出た。

その足で、作業場に向かう。

作業場に入ると、セレスタイトが慌てて机の上を隠す。

「私ですよ、セレスタイトさん」

「なんだ、ミラだったんだ」

ほっと息を吐いて、体を起こす。

見られてはダメなのはセレスティアにだけらしい。

「見てもいいんですか?」

「いいよ。でも、姉さんには内緒にしてね」

一応確認すると、セレスタイトはあっさりと頷いた。

セレスタイトの手元を覗き込むと、そこには平べったく伸ばされた白っぽい粘土が置いてあった。

およそ三センチ四方の大きさに切り出されていて、彫刻刀で細か

い模様が刻まれていた。

その物体の正体は、銀粘土だ。

銀粘土とは、大雑把に言ってしまえば細かい銀を含んだ粘土のことで、造形しやすく、また焼くだけで比較的簡単に銀製品を作ることができる。

ミラもミュリエリアが何度かそれで装備の装飾を作っているのを見たことがあった。

簡単な分、地金に彫金を施して作るものに比べて強度が劣るのだが、下世話な話、そちらの方が安いのだ。

もちろん、それを選ぶのはミュリエリアではなく客の方だ。

「朝、お姉ちゃんに頼んでたのはこれだったんですね。アクセサリ一ですか？」

「うん、まあ、そういうこと」

少し恥ずかしそうにセラスタイトが頷く。

「それを作って」

どうするんですか、と聞こうとしたのだが、そこにミュリエリアの声が被さった。

「ミラー。もう準備ができるわよー」

「あ、はい」

「うわ、不味い」

料理が完成したら、セレスティアも戻ってくる。

二人は大慌てで作業台の上を片付け始めた。

ちなみに　その日の夕食は、前の日よりほんの少しマシな出来栄だった。

その日の夜。

部屋割りは前日と同じで、ミラはミュリエリアと同じベッドに入っていた。

「ねえ、お姉ちゃん」

「なあに？」

「セレスタイトさんが何でアクセサリを作ってるか知ってる？」

夕食の前からずっと気になっていたのだが、夕食の後からはセレスティアがセレスタイトにびったりくっついて監視していて、本人に聞くことができなかった。

「ええ、知ってるわよ」

「ほんと？ だったら教えて欲しいなあ、なんて」

ちよつと甘えるように言ってみる。

ミュリエリアは少し考えてから、唇に人差し指を当てて、

「セルティには内緒よ」

と前置きしてから話し始めた。

「これは人間の習慣なんだけど、人間は家族とか友達の生まれた日にお祝いをするものなんだそうよ。」

「ご馳走やケーキを食べたり、プレゼントを渡したりするらしいわ」
「へえー。そんな習慣があるんだ」

ミラは目を丸くして眩く。

【進種】の社会は、【人間】の習慣や文化が結構な量引き継がれているが、忘れ去られているものも多い。

「この誕生日を祝うという習慣も、そういう忘れ去られたものの一つだった。」

「セレスタたちの立ち寄った村では、その習慣が今でも生きていて、お祝いの様子を見たらしいの」

そこまで言われて、ミラはぴんと来た。

「もしかして……セレストライトさんが作ってたのって誕生日のプレゼント？」

「ええ。セルティの、双子だからセレスタもだけれど誕生日は明日なのよ」

セレストライトが作っていたのは、セレスティアに贈るためのプレゼントだったようだ。

それは確かに、贈る相手のセレスティアに見られるわけにはいかない。

「そっか。それで急いでたんだ」

恐らく、アクセサリーを贈ると決めて、それを贈るための方法でミュリエリアを思い出してここに来たのだろう。

「どづいつこと？」

「セレスティアさんに聞いたの。村を出たら急にここに行くって言い出したって。セレストライトさんがお姉ちゃんのが好きになっただんじやないかって心配してたよ」

ミラがそう説明するとミュリエリアは面白そうに笑った。

「あの二人は、本当にお互いが大好きなのね」

「あ、お姉ちゃんもそう思う？」

そう言って笑って、そして、ミラはセレスティアの言葉を思い出した。

『それに たった二人の家族なんだから』

セレスティアは確かにそう言っていた。

深い事情までは聞けなかったが、付き合いのあるミュリエリアな
ら事情を知っているかもしれない。

「お姉ちゃん。その……セレスティアさんたちの両親って……」

おずおずと切り出すと、ミュリエリアの顔から笑みが消えた。

真剣な瞳で、ミラの顔を見つめる。

「知っているの？」

「……うん。セレスティアさんが、たった二人の家族だって」

「……そう。それなら隠しても仕方ないわね」

ミュリエリアは、遠い過去を思い出しながら、ゆっくりと話し始めた。

「私とセルティたちは子供の頃からの知り合いだけど、元々はお互いの両親が知り合いだったのよ。」

鍛冶屋だった私の両親が旅人だったセルティの両親の武器を作ったのが馴れ初めだったそうよ。

あの人たちは、リオス進種で最も珍しい金と銀の翼を持っていて、

とても強いたち人だったの。

あちこちを旅しながら困っている人たちの依頼を助けていて、危なそうな依頼の時はセルティとセレスタを家に預けていたから、私たちは仲良くなったのよ。

あの日も、いつもと同じように家に二人を預けて行って、そして……帰ってこなかったわ」

「……モンスターに、やられちゃったの？」

「ラオシャンロンよ。あの人たちは、たった二人であの化け物に挑んだの」

「ら、ラオシャンロンに!？」

驚きのあまり、ミラはベッドから起き上がってしまった。

【ラオシャンロン】。

巨大なモンスターの中でも最も巨大な部類の【古龍】だ。

その体長は優に五十メートルを越え、最大では百メートル近くに
もなると言われる。

その馬鹿げたサイズに見合う生命力を持ち、討伐は非常に難しい。

普段は山の岩の中に潜んでいるが、時折移動することがあり、【
エリア】も無視してその巨体で進路上のあらゆるものを踏み潰す。

【飛竜】に襲われるのとは桁が違い、もはや台風と同じような自然災害のレベルだ。

だが、【ラオシャンロン】は大部分の【進種】にとってさほどの脅威ではない。

なぜなら、【ラオシャンロン】は積極的に攻撃することではなく、ただ歩いていくだけだからだ。

【ラオシャンロン】が通過する進路から逃げてしまえば、それだけで安全なのである。

【ラオシャンロン】が脅威になりえるのは、村を構えて生活する一部の種族だけだ。

「あの日」

ミラがベッドに戻るのを待って、ミュリエリアが話を続ける。

「ラオシャンロンの進路には、この村があったのよ。」

村長は家や財産は諦めて逃げることに決めただけで、それにあの人たちが反対したわ」

村を捨てる。

それは、並大抵のことではない。

家は、村は、ちっぽけな人々の生活を自然の脅威から守るための砦だ。

破壊されてしまったら、そこに住んでいた者たちはどこで身を休められるだろうか。

再建するにしても、そのためには危険を冒して材料を取ってこなければならぬし、すぐには完成しない。

そして、再建の作業に疲れ切った体を休める場所はないのだ。

それでも、【ラオシャンロン】は止められないから、村を捨てるしかなかった。

だが、彼らは挑んだ。

たった二人で、村を守るために。

「私たちはみんな避難して……そして、一夜明けてもラオシャンロンは現れなかった。

父さんたちが様子を見に行つて、持ち帰ることができたのは、剣二本分の装飾になるだけの量の鱗だったわ」

様子を見に行つた村人たちが見たもの。

それは大地に刻まれた戦いの跡と、息絶えた巨龍。

そして、バラバラになつた二人分の武器と防具と原型を留めていないほどに破壊されつくした肉片だった。

誰もが認めるしかなかった。

村を救つた英雄は、その功績と引き換えに散つたのだと。

ミュリエリアの父は、戦場跡を必死に探して、戦いの中で翼から

剥がれたのだろう二人の鱗を見つけた。

それを使って作られたのが、セレスティアたちの使っている剣。

頑なに、他人の手を入れることを拒んでいた剣。

あれは、二人にとって両親の形見なのだ。

あれに触れることが許されるのは、ミュリエリアとその父親だけだろう。

「そんなことが……あつたんだ」

「ええ……そうよ」

ミュリエリアは、手を伸ばしてミラの目に浮かんだ涙を優しくすくい取った。

「でも、憐れんではダメよ。謝るのもダメ。悲しいと思うのも、今だけにしなさい」

「……どうして？」

「それは、あの二人が、そうしているからよ」

セレスティアとセレスタイトは、両親は英雄だと信じている。

無謀な戦いに挑んで散った愚か者でもなければ、子供を残して死んだ哀れな親でもない。

自らの心に真つ直ぐに、己の意思を曲げず、誇り高く戦った英雄なのだ。

ならば、守られた者たちにできることは一つ。

「だから、誇りなさい。英雄の守った、この村に生きていることを誇りに思うのだ。」

そして、語るのだ。

遺された子たちの思う両親の姿が、語り継がれる姿と同じであるように。

そうすることでは、彼らに報いることはできない。

「うん……わかった」

ミラは、今度は自分の手で涙を拭った。

「……でも、死んじゃうのは、悲しいよ」

「……そうね」

誰かが死ぬことなど珍しくもない世界だ。

だが、だからこそ、命の大切さが見えるのかもしれない。

「だから、人間は誕生日を祝ったのかもしれないわね。また一年生きられて良かった、おめでとぅって」

「……うん。きつと、そうだよ」

そう答えながら、ミラは自分自身のことを思う。

生まれた日も、ミラの記憶の中からはすっぱりと抜け落ちている。焦っても仕方ないとわかっているし、実際、普段はほとんど意識していない。

それでも、こうやって記憶がないことを突きつけられると、ほんの少し不安になるのだった。

（弱気はダメ！ 私は大丈夫なんだから！）

心の中で気合を入れて、さっきとは違った理由で滲んだ涙を拭う。

そして、ことさらに明るい声で言った。

「じゃあ、次はお姉ちゃんの誕生日を祝おうね！」

「私の？」

「うんっ。私、お姉ちゃんが生きていてくれたら嬉しいから」

「そう。それなら、ミラの誕生日もお祝いしないといけないわね。

私は、ミラが生きていてくれたら嬉しいもの」

「でも……私の誕生日っていつかわからないよ」

気にしないようにと思っても、どうしても声が沈んでしまう。

「いつだっていいのではないかしら？」

ミュリエリアが何でもないことのように言った。

ミラは驚いてミュリエリアの顔を見返す。

ミュリエリアは優しく笑って、ミラを抱き寄せた。

「生きていることをお祝いする日でしょう？」

ミラ、私の可愛い妹。私は、毎日あなたが無事でいられることに感謝しているのよ？ 毎日お祝いしてもいいくらいだわ」

「お姉ちゃん……」

どうしてこの人は、こんなにも簡単に私の不安を消してしまうんだらうと、ミラは思う。

「それじゃ、私……あつと言つ間におばあちゃんになっちゃうよ」

半分くらい涙声で言って、ミュリエリアの胸に顔をうずめた。

「あら、そうね。それなら、やっぱり一年に一度にしましょうか。思い出すまでは、私たちの出会った日がいいかもしれないわね」

そんなことを言いながら、ミラの髪を撫でる。

ミュリエリアの温もりに包まれて、ミラはミュリエリアが生まれしてきたこと、生きていたことに深く感謝するのだった。

第九話「対の翼」(前編)(後書き)

長いので二分割します。

第九話「対の翼」(後編)

翌朝。

ミラが目を覚ましたとき、ベッドにミュリエリアの姿はなかった。

ミラもそれなりに早起きだが、ミュリエリアはそれよりも早い。

ベッドから出て、階下へと向かう。

階段を降りて作業場に入ると、とたんに凄まじい熱気が押し寄せてきた。

炉の中で、炭が赤々と燃えている。

「わ、熱……」

思わずミラが呟くと、その声に気がついて作業台にいたセレスタイトが顔を上げた。

「あ、ミラ。おはよう」

「おはようございます。早いですね」

「うん。姉さんが起きる前にこれを作りたかったからね」

セレスタイトの手元には昨日よりも細かく模様のつけられた銀粘土がある。

所々歪になつているところもあるが、素人が作ったにしてはいい出来だった。

「これでもう完成なんですか？」

「形はね。後は焼いて磨けばいいんだって」

朝から炉に火が入っていたのはその作業のためのようだ。

「それにしてもミューリイは凄いね。僕が一つ作ってる合間に片手間であれだけ作るんだから」

そう言つて指差した先には、余つた銀粘土で作つたらしいアクセサリーが並んでいた。

クロスや剣、髑髏など、シルバーアクセサリーでも売り出すつもりなのだろうか。

二人が感心していると、店の方から小さな箱を持ったミューリエリヤが入ってきた。

「ミラ、起きたのね。おはよう」

「おはよう、お姉ちゃん」

挨拶をして、ミューリエリアは箱をセレストタイトの前に置いた。

蓋を開くと、中には装飾用のチェーンが並んでいる。

太いもの、細いもの、鎖の形が特徴的なものなど、様々だ。

「ここから好きなものを選んでおいて。長さは後で調節するから気にしないでいいわ」

「うん、わかった」

セレスタイトは箱からチェーンを取り出して考え始める。

ミュリエリアは棚から巨大な鉄板を取り出してきて、銀粘土をその上に並べた。

その鉄板を炉の中に入れて、蓋を閉じる。

「セレスタ。言った側から悪いけど、選ぶのは後にしてもらえませんか。セルティを起こしてくるわ」

「姉さん？」

「起こして欲しいって頼まれてるのよ。一緒に朝食を作る約束なの」
「だから隠しておいて」と言って、ミュリエリアは階段を上っていった。

「急に隠せって言われても……」

「あ、私が」

困った顔のセレスタイトから箱を受けとり、棚に置いてある他の箱の中に混ぜる。

「ここに置いておきますね」

「うん、ありがとう」

セレスタイトは頷き、そして、顔を曇らせる。

「また姉さんが料理するんだ。何で急に……？」

「さあ……何ででしょうね」

セレスティアはセレスタイトがミュリエリアに惚れていると勘違いしているから、二人が一緒にいる時間を減らそうとしているのかもしれない。

ミラはそう思ったが、口には出さず曖昧に誤魔化しておいた。

そこに、ミュリエリアに連れられてセレスティアが入ってくる。

「おはよー……っであっつー！」

「おはよう、姉さん」

「おはようございます」

「あんたら、よくこんな所にいられるわね……」

朝一からげんなりした顔で呟く。

「私はもう慣れたわ」

「あ、私もです」

「砂漠とか火山よりはよっぽど過酷しやすいと思っけど」

「……ああそう、まあいいけど。」

「ミュリー、行くわよ」

同意を得られなかったセレスティアはミュリエリアとキッチンに行こうとする。

その背中にセレスタイトが声をかける。

「姉さん、別に姉さんがしなくても、手伝いなら僕がしてもいいし」

「ダメに決まってるでしょ」

「何で？ 姉さん料理できないのに」

「うぐ……だからやってるんじゃないのよ」

ダメージを受けてから小声で呟く。

「え？」

「何でもない！ いいからあんたは大人しくしてなさい！」

セレスティアはそう言い捨てると、肩を怒らせてキッチンへ入って行った。

慌ててミュリエリアが後ろについて行く。

「……本当に、何考えてるんだろ」

セレストタイトの不思議そうな声がぼつりと落ちた。

ちなみに その日の朝食は、目玉焼きになりそこねたスクランブルエッグだった。

午後になって、示し合わせたわけではないが、全員が作業場に揃っていた。

とは言え、ただ集まっているだけでやっていることはバラバラだ。

ミラは、ミュリエリアのお手本を元に【狙撃弾】を作っているし、ミュリエリアは剣の仕上げに入っていて、柄になめした動物の皮を巻きつけている。

セレストタイトは荷物から取り出した【薬草】や【アオキノコ】を使って【回復薬】を調合していて、

セレストティアは椅子に座って何かの本を読んでいた。

表紙を見ると『クック先生の料理教室』とタイトルが読める。

どうやら、料理の本らしい。

本なら部屋で読めばいいと思うのだが、セレスティアはセレスタイトを監視しているようだ。

セレスタイトの隠し事が余程気になっているのだろう。

セレスタイトも、調査をしながらセレスティアの様子を窺っている。

こちらは、セレスティアがいるとプレゼントの仕上げができないから気になっているのだろう。

その二人のせいで、妙にぴりぴりとした空気が作業場に満ちていた。

(居心地悪いなあ…………)

そんな事を思いながら、完成した【狙撃弾】を作業台に置く。

【ヘブンスサイト】は一発ずつ装填するタイプの【ボウガン】で、^{マガジン}弾倉に弾を詰める必要はない。

「ミラ、弾は何発できたの？」

「え？ えーと、一、二…………」

机の上に並べている弾を数える。

「十五発だよ。お姉ちゃんが作ったのが五発あるから、全部で二十発かな」

「そう、それなら十分ね。試射に行ってみたらどうかしら？」

「あ、うん。そうしようかな」

「セルティ。悪いのだけれど、ミラと一緒に行ってくれない？」

「私が？」

声をかけられたセレスティアが本から顔を上げる。

「何かあったときに一人では心配だから、あなたがついてくれないなら安心なだけだ」

どんなアクシデントがあるかわからないし、長距離狙撃用という用途ゆえに、普通の【ボウガン】以上に接近戦に弱い。

本来、狙撃は狙撃手と、周囲の状況把握をするための観測手とがセットで行うものなのだ。

アクシデントがなかったとしても、一人で行くべきではないだろう。

「セレスタじゃダメなの？」

「ダメではないけれど、セルティの方が都合がいいのは確かね」

そう言って、剣を持っていた手をすっと持ち上げる。

剣先を下にして手を離すと、手から滑り落ちた剣が、作業台に突

き立った。

ただ落としただけなのに、剣先は数センチの深さまで突き刺さっている。

「まずは一本目、完成よ。金の方はセルティのでしょうっ？」

「剣の峰に施された鱗の装飾は金。」

金は【リオレイア希少種】の色、母親の形見だ。

「ついでに使い心地を試してきてくれると助かるわ。それに」

料理本を指差して、セレスティアだけに聞こえる声でささやく。

「アプトノスの肉は新鮮な方が美味しいわよ」

「行くわ」

きっぱりと、セレスティアが言う。

ミラは、突然乗り気になったセレスティアの様子に面食らった。

（何を言ったのかわからないけど、お姉ちゃんってやっぱり凄い！）

とか思っているのと、目の前にぎらりと輝く切っ先を突きつけられた。

セレスティアが机から引き抜いた剣だ。

「ミラ、行くわよ。さっさと準備しなさい！」

「は、はいっ」

ミラは文字通り椅子から飛び上がり、準備を始めた。

ミラとセレスティアは昨日に続いて【森丘】に来ていた。

試射だけなら【エリア】に入らない方が安全なのだが、【アパート
ノス】を狩るためにここに来たのだ。

見通しが良くて南北に長い【エリア3】を選び、工房から持って
来た的 三十センチ四方の鉄板 を立てる。

撃つ場所はその反対の端、【エリア2】に入るか入らないか
くらの場所だ。

その場所で、距離はおよそ五百メートル。

既に【ホークアイ】の有効射程を百メートルも越えているが、そ
れでも大丈夫だろうとミラは思っていた。

「おっそろしい切れ味ねえ……。ミューリイの奴、おじさんより腕
がいいんじゃないの？」

ミラの隣に立っているセレスティアが、いつそ恐ろしいものを見

る目で手にした剣を見下ろす。

【エリア1】を通ったときに、【アプトノス】を仕留めたのだが、ミユリエリアによって鍛え直された剣は切ったセレスティアが驚くほどの出来栄えだった。

鱗も甲殻も持たない相手ではあるが、肉も骨も一刀両断。

恐るべき切れ味だった。

「うーん。多分お姉ちゃんの方が凄いんじゃないかなあ」

妹の鼻肩目でそう答えながら、ミラは【狙撃弾】を装填した。

「よし。準備できました」

「それじゃ、始めるわよ」

「はい」

頷き、ミラは【ヘブンスサイト】を構えた。

スコープを覗き、つまみを回す。

点にしか見えなかった的が拡大され、視界に大写しになる。

狙撃中はこんな風に、狙っているものしか見えなくなってしまう。

その時に、周囲の状況を観察し、狙撃手をサポートするのが観測手の仕事だ。

スコープに刻まれた十字に目標を入れる。

長距離の狙撃は風の影響を強く受けるが、重量の大きい【狙撃弾】ならある程度は無視できるといふミュージエリアの言葉を思い出した。

正確に言えば、この発言は間違いだ。

重い弾が風の影響を受けないのは確かにそうだが、狙撃の照準に影響する要素はその他にも色々ある。

が、現状の技術レベルでは、風とせいぜい重力の影響くらいしか把握できていない。

その他の要素が確かな根拠と共に解明されるには、数百年の科学的な進歩が必要だろう。

原因不明の照準のずれを修正するのは、経験をもってするしかない。

要するに、撃ってみるしかないのだ。

「いきます」

静かに、引き金を引く。

バーン、と爆弾を爆発させたような発砲音が響き、予想以上の反動でミラは尻餅をついた。

「外れね」

【双眼鏡】を覗いてセレスティアが言う。

「わかってます」

ミラは立ち上がって薬室から薬莖を排出しながら答えた。

発射の瞬間に、反動で銃身を跳ね上げてしまった。

あれで当たる方が驚きだ。

新しい弾を込めて、薬室を閉鎖する。

「あんなに反動が凄いなんて、思いませんでした」

「吹っ飛んでたわね。拡散弾撃つてもそうはならないわよ」

「もう一回、いきます」

再度スコープを覗いて、的に狙いをつける。

発砲。

「きゃあっ」

今度はしっかりと身構えていたにも関わらず、ミラはまた反動で尻餅をついた。

「はーずれ」

一応【双眼鏡】で確認してセレスティアが報告する。

「立って撃つのは無理なんじゃないの？」

「……そうですね。どうしましょうか」

「そのまま撃つたら？ 立ってるよりは安定するんじゃない？」

「そうですね。やってみます」

ミラは色々な座り方を試して、やりやすい姿勢を探す。

最終的に、片膝を立てた姿勢で撃つことにした。

新しい弾を装填して、【ヘブンスサイト】を構える。

スコープを覗いて照準。

「撃ちます」

発砲。

「ひゃっ」

反動を受けてミラは後ろにひっくり返った。

「……………」

呆れたように首を振って、セレスティアがミラを見下ろす。

ミラは勢いをつけて起き上がり、地面にぺたりと座った。

「うー……」

ミラが唸る。

心なしか目が潤んでいるようだ。

「もう寝そべって撃ったら？」

「……そうしてみます」

適当な感じのセレスティアのアドバイスに頷く。

動きながら撃つのが当たり前のこの世界では考えられない撃ち方だ。

咄嗟に動けないこの姿勢は、自殺行為もいところである。

安全な位置からの長距離狙撃でしかありえないだろう。

「ちゃんと周りを見ててくださいね」

「わかってるわよ」

セレスティアが頷くのを確認して、弾丸を入れ替えてから地面に伏せる。

伏射の姿勢。

銃床を肩と頬に触れさせてしっかりと固定する。

スコープを覗くと、的しか見えなくなった。

トリガーを引く。

今度はしっかりと反動を押さえ込むことに成功した。

飛び出した銃弾は緩やかな放物線を描いて飛び、的から右下に外れた空間を貫いた。

「惜しい。もうちょっと左上よ」

「はい」

薬莖を排出し、新しい弾丸を装填する。

今の失敗を踏まえて、照準を修正。

発砲。

銃弾は空を引き裂いて飛んで的に命中し、容易く鉄板を貫いた。

鉄板には、銃弾の直径よりも遥かに大きい穴が開いている。

「やった！ 当たった！」

「……それもまた凄い威力ねえ」

セレスティアが【双眼鏡】を下ろして呆れたように呟く。

「威力があればいいってもものでもないですけどね」

威力がある分反動も大きいし、弾の装填にも時間がかかる。

複数の相手と戦うのは非常に難しく、使いどころの難しい武器だと言える。

「当たったけど、もう終わりにする？」

「えっと、もう少し続けます」

「わかったわ」

ミラに頷いて、セレスティアは観測手としての役目を果たすために周囲に視線を走らせ

「ミラ！」

セレスティアが警告を発する。

ミラがはっとして振り返ったとき、既に燃え盛る火球が放たれていた。

セレスティアが前に飛び出す。

指を開いて、左手を下に広げる。

手元に小さな火花が散り、次の瞬間、セレスティアの手に火球が生まれていた。

【リオス進種】の【大地の絆】ガイアタイズである。

アンダースローでボールを投げるように、セレスティアが火球を投げる。

二つの火球が空中で激突し、相殺。

パラパラと舞い散る火の粉の向こうに、紫色の甲殻に覆われた怪鳥の姿が見えた。

鋭く尖った嘴と背中や尾に備えた棘が攻撃的な印象を与える姿。

黒狼鳥こと、【イヤンガルルガ原種】である。

臆病な性格のモンスターが多い【鳥竜種】に分類されるが、非常に獰猛かつ好戦的な性格で、火球や毒のような多彩な攻撃手段を持つ。

「あなたは隠れてなさい！ 隙を見つけたらそいつで撃ってやりなさい！」

右手で剣を抜きながら言い放ち、【イヤンガルルガ原種】へと駆け出す。

【ヘブンスサイト】で接近戦はできない。

ミラはセレスティアの指示に従って木の影に移動して、伏射の姿勢を取った。

スコープを覗くと、まだ遠くにいる【イヤンガルルガ原種】の姿が大写しになる。

（このイヤンガルルガ、傷だらけだ……）

片目の上下に亀裂のような傷跡が走り、左の耳は半分に切り落とされている。

全身の甲殻や嘴にも、無数の傷跡があった。

だが、傷跡に出血はなく、手負いというわけではなさそうだった。傷を負い、それが癒えているということは、何者かと戦い、生き残っているということだ。

その相手が、【進種】や【ハンター】だったなら、この【イヤンガルルガ原種】は戦いの経験値を持っていることになる。

釣られ損なった魚が慎重になるように、モンスターもまた、戦いから学ぶのだ。

「セレスティアさん、この相手は手強いよ……」

呟いて、口に溜まっていた唾を飲み込んだ。

弾を取り替えて、【イヤンガルルガ原種】を狙う。

スコープの中で、【イヤンガルルガ原種】が頭を持ち上げた。

予備動作。

【進種】も狩りの中で学ぶことは多い。

火球の予備動作だ。

ミラには気づいていない。

さっきは気がついていたらかもしれないが、今はセレスティアに気を取られている。

狙いはセレスティアだ。

【イヤンガルルガ原種】から見て、右から左に薙ぎ払うように三連射。

セレスティアを二発目の火球に捉えて、逃げ道を制限する吐き方だ。

左に動けば一発目に当たり、動かなくても二発目に当たり、右に動けば三発目に当たる。

だから、セレスティアは上に避けた。

踏み切って、跳ぶ。

そして、飛ぶ。

桜色の翼が風を捉えて、セレスティアの体を上空へと運ぶ。

【イヤンガルルガ原種】が再び火球を放つ。

セレスティアはロール 体の中心を軸にした一回転 しながら横に移動して火球を躲す。

左手に火球を生み出し、反撃とばかりに投げつけた。

火球が【イャンガルルガ原種】の背中に炸裂する。

だが、【イャンガルルガ原種】にそれほどのダメージがあるようには見えない。

【大地の絆】^{ガイアタイス}の攻撃力は、基本的に【原種】のそれに劣る。

【リオス進種】の火球は【リオレウス原種】や【リオレイア原種】の火球ほどの攻撃力はないのだ。

甲殻の上からではそれほどのダメージは期待できない。

だが、そんな事はセレスティアも承知している。

火球を牽制に、セレスティアが飛び込む。

【イャンガルルガ原種】は回転しながら尻尾を振り上げ、セレスティアを叩き落そうとした。

セレスティアは急降下して尻尾の下を潜り抜け、地面に降りる。

剣が上方に弧を描き、【イャンガルルガ原種】の尻尾の付け根を切り裂く、が傷は浅い。

【イヤンガルルガ原種】は足踏みしながら後ずさる。

鳥と言われるだけあって細い脚だが、足先には鋭い爪を備えていて踏まれればただではすまない。

前には脚。

後ろには鋭い棘を持つ尾。

セレスティアは後ろに転がって尾の下を潜り抜けた。

【イヤンガルルガ原種】が半回転して振り返り、尖った嘴を勢よく振り下ろした。

セレスティアは仰向けの状態から翼を使って体を跳ね上げ、さらに後方へと羽ばたく。

嘴は危ういところでセレスティアを掠めるにとどまり、スコップのように地面を抉った。

セレスティアは地面に降り、【イヤンガルルガ原種】へ向かっていく。

猛攻と、そう称するより他にない攻撃だった。

斜めの斬り上げ、さらに体を捻りながら斬り下ろす。

そこからほとんど間を置かずに回転しながら斬りつける。

連撃が【イヤンガルルガ原種】の顔を切り裂き、傷だらけの顔に

さらに傷を刻む。

だが、連続で攻撃しようにも限界がある。

そこで攻撃が途切れてしまった。

隙を突いて、【イャンガルルガ原種】が反撃に移った。

嘴を開いて、セレスティアを啄む。

セレスティアは慌てて飛び退き、ぎりぎりですれを躲した。

そして、すぐさま反撃を始める。

【イャンガルルガ原種】の右側面に飛び込み、脇腹を連続で切り裂く。

【イャンガルルガ原種】は翼を羽ばたかせて、翼でセレスティアを打った。

背中を打たれて、セレスティアが地面に叩きつけられた。

【イャンガルルガ原種】が嘴を振り下ろして追撃。

セレスティアは横に転がって避け、立ち上がり、また即座に攻め始める。

限界まで連携攻撃を繰り返す、かなり危険で乱暴な戦い方だった。

戦い慣れしているはずなのに、攻撃の後に大きな隙を作っていて

随分と危なっかしく見える。

この攻防の間、ミラは一発も撃たなかった。

いや、撃てなかった。

セレスティアが絶え間なく攻めているせいで、照準の中にセレスティアの姿が入ってしまうのだ。

【ヘブンスサイト】の攻撃力でうっかり当てようものなら、セレスティアの体が千切れてしまう。

(もうちょっと離れてくれないと……)

ミラは焦りを押し殺しながら、攻撃のチャンスを待つ。

【イャンガルルガ原種】が首を振り上げ、火球を吐きかけた。

火球がセレスティアの足元に着弾し、爆風がセレスティアを煽る。

体勢を崩したが、素早く建て直し、正面から切りかかった。

軽く首を振って、【イャンガルルガ原種】が斬り下ろしを弾く。

セレスティアは左手に火球を生み出し、その手を直接【イャンガルルガ原種】の顔に叩き付けた。

炎が上がり、【イャンガルルガ原種】が怯んだ。

セレスティアはその隙に突っ込んでいく。

【イヤンガルルガ原種】はバックジャンプし、大きく口を開いて咆哮する。

大音量の咆哮を浴び、セレスティアが一瞬怯む。

バックジャンプした【イヤンガルルガ原種】は羽ばたいて空中で滞空し、後方宙返りする。

回転した尻尾が、セレスティアを襲う。

セレスティアは前方に跳び上がり、羽ばたいて体重を殺し、尻尾を踏み台にして後方宙返りをうった。

回転しながらも剣を振り、【イヤンガルルガ原種】の尻尾を斬りつける。

尻尾は先端から切り裂かれ、血を溢しながら二股の尾になった。

お互いに宙返りをしたために、セレスティアと【イヤンガルルガ原種】の距離が開く。

（今だ！）

ミラは【イヤンガルルガ原種】の頭を照準に入れて引き金を引く。当たれば必殺の一撃になるだろう銃弾は、しかし、外れてしまった。

ミラはまだ動いている獲物を精密に狙えるほどの腕には達してい

ないのだ。

普通の武器の使い方ならマスターしているミラだが、【ヘブンスサイト】は【群蟲剣【雲霞】】と同じくミュリエリア特性の『規格外』の武器だ。

実質、今日始めて使うようなものなのである。

幸いと言うべきか、外したせいで【イヤングルガ原種】には気づかれなかったが、セレスティアが攻撃を始めてしまい、攻撃のチャンス逃してしまった。

セレスティアの連続攻撃が【イヤングルガ原種】を切り裂く。

【イヤングルガ原種】は鳴き声を上げ、攻撃後の隙を狙ってセレスティアを襲った。

尖った嘴を使った、連続の啄み。

セレスティアは嘴を剣で弾き、何とかそれを捌き切った。

(もう、戦い難しい！)

攻撃は乱暴だが、思考は冷静だ。

セレスティアは自分の不利をきちんと理解していた。

「ミラ！ 立て直すわよ！」

聞こえてるかわからなかったが、大声で叫び、アイテムポーチか

ら【閃光玉】を取り出した。

タイミングを計り、【閃光玉】を【イャンガルルガ原種】の目の前に投げる。

次の瞬間、起こったことにセレスティアは目を疑った。

どんなモンスターでも、【閃光玉】を投げつけられるとその軌道を目で追いかける。

だが、この【イャンガルルガ原種】は頭を下げて飛んできた【閃光玉】から素早く目を逸らしたのだ。

かつて、傷を負った戦いで【閃光玉】を使われ、そこで学んでいたのだろう。

【閃光玉】が爆ぜ、強烈な光が周囲を満たす。

しかし、目を逸らしていた【イャンガルルガ原種】には効果がない。

目を潰せると思っていた分、セレスティアの反応の方が遅れてしまった。

【イャンガルルガ原種】は頭を下げたまま突進し、嘴でセレスティアを空中に跳ね上げた。

セレスティアは翼を広げ、空中で体勢を立て直す。

だが、その瞬間、セレスティアは中空で動きを止めてしまった。

首を振り上げ、【イャンガルルガ原種】がセレスティア目がけて火球を吐き出した。

「セレスティアさん！」

ミラは叫んで身を乗り出した。

手を打つにはあまりに二人の距離は離れている。

何とかしようとスコープを覗いたが、狙いをつけるよりもセレスティアに命中する方が早いだろう。

ミラにもセレスティアにもどうしようもなく

だが、彼は間に合った。

【イャンガルルガ原種】の吐き出した火球を、さらに上空から振ってきた火球が撃ち落とす。

蒼い翼を広げ、セレスタイトが双子の姉を守るように立ち塞がった。

「遅いわよ、セレスタ」

全く予想外の登場にも関わらず、セレスティアは文句を言った。

まるで、そこにセレスタイトが現れるのが当たり前のよう。

「うん、ごめん」

セレスタイトもそれを当たり前に受け止めて謝った。

セレスタイトがここに現れた理由は、何となく嫌な予感がしたから、だ。

双子には不思議な絆があると言うが、それがセレスタイトにセレスティアの危機を教えたのだろう。

何も今回が初めてではなく、今までにも二人は互いに互いの危機を感じ、助け合っていた。

「何でセレスタイトさんがここに……？」

ミラの声はセレスタイトまで届かなかったが、聞こえていたらこう答えただろう。

『僕と姉さんは二人で一つだからね』と。

【イャンガルガ原種】の口に炎の輝きが宿る。

「行くわよ、セレスタ！」

「了解、姉さん！」

二人はぱつと散開し、【イャンガルガ原種】へ向かう。

セレスティアは右手に金の剣を、セレスタイトは左手に銀の剣を。

剣を持たない手から次々に火球を放ちながら、【イャンガルガ

原種】に肉薄する。

背中 of 棘を切り裂きながら、【イャンガルルガ原種】の左右に降り立つ。

そして、同時に【イャンガルルガ原種】へと斬りかかった。

「凄……」

姉弟の攻撃を見て、ミラは感嘆の声をあげた。

二人は完璧な連携で【イャンガルルガ原種】に攻撃をかけていた。

絶妙な時間差で互いに注意を引き合い、攻撃の連携が途切れたときはもう一人がフォローに入る。

セレスティア一人では危なっかしかつた攻撃が、二人になっただけで隙のない怒涛の攻撃に変わっていた。

剣撃と火球が絶え間なく【イャンガルルガ原種】を襲い、瞬く間に全身に傷を刻んでいく。

紫色の体が、流れ出す血で赤で斑に染まった。

【イャンガルルガ原種】が回転しながら尻尾を振る。

セレスタイトは前転して尻尾の下を潜り、そのまま立ち上がる。

二人が左右から尻尾に斬りかかり、半分に切り裂かれていた尻尾を根元から切り落とした。

【イヤンガルルガ原種】は上体を持ち上げ、苦悶の声を上げる。

その声が咆哮へと変わり、姉弟を怯ませた。

【イヤンガルルガ原種】はその隙に勢いよく駆け出し、そのまま翼を羽ばたかせて飛び立った。

「姉さん、逃げるよ！」

「逃がさない！ 決めるわよ！」

「うん！」

セレスティアとセレスタイトが空へ【イヤンガルルガ原種】を追う。

火球を放って【イヤンガルルガ原種】の頭を押さえ、その上を取る。

「姉さん！」

「セレスター！」

声をかけ合い、剣を持っていない方の手をしっかりと握り合う。

そして、それぞれの剣を天空にへと掲げた。

剣と二人の体が、赤い光に包まれる。

練気によって肉体と武器を同時に強化する、鬼人化と呼ばれる双剣の固有技だ。

体力の消耗が激しいという欠点があるが、気の使い方の中で最も強力な使い方である。

そう、セレスティアの金の剣、セレスタイトの銀の剣は、盾のない【片手剣】ではない。

【煌竜剣【比翼】】。

二本で一つの双子の武器 【双剣】なのだ。

鬼人化した二人が【イャンガルルガ原種】へ急降下する。

すれ違う瞬間、双剣が閃いた。

乱舞。

双剣の奥義とも言うべき高速の連続攻撃が【イャンガルルガ原種】に炸裂する。

【イャンガルルガ原種】は、対の刃によってズタズタに引き裂かれ、地上へと落ちた。

もはや起き上がることはない。

【イャンガルルガ原種】はその命を終えていた。

ミラはスコープから目を離し、銃を下ろす。

結局、ミラと【ヘブンスサイト】には活躍の機会は回ってこなかった。

その日の夜。

セレスティアと一緒に夕食の準備をしていたミュージエリアがキッチンから顔を出す。

「ミラ、そろそろ夕食にするわよ。机を片付けて」

「はい」

ミラが返事をして机（実は作業台と食卓は共用だ）を片付けていると、二階からセレスティアが降りてきた。

手にはリボンのかかった小箱を持っている。

「セレスタイトさん、できたんですか？」

「うん。どうにか間に合ったよ」

セレスタイトは悪い予感を感じてすぐに作りかけのプレゼントも放っておいて工房を飛び出したらしい。

プレゼントはまだ完成しておらず、工房に帰ってから大急ぎで作

っていた。

セレスティアが帰るなりキッチンに籠っていて、ばれずに作業できたのが幸이었다。

おかげで何とか間に合っただらしい。

「ミラ、片付いた？」

キッチンから大きな皿を抱えたミュリエリアが出てきた。

皿には銀色の覆いがかぶせてある。

「うん、片付いてるよ」

「そのようね」

ミュリエリアは机の真ん中に大皿を置く。

「これ何？」

ミラがその蓋を開けようとする。

「開けてはダメよ。準備ができるまで待つて」

「あ、はい」

「ミュリー、早く帰ってきて手伝いなさいよ」

と言いながら、パンの入ったバスケットを抱えてキッチンからセ

レスティアが出てくる。

セレスタイトは慌ててプレゼントの箱をポケットに押し込んだ。

ミュリエリアがキッチンに戻って、鍋を持って戻ってくる。

用意した皿に鍋のスープを注げば準備は完了だ。

全員が席に着く。

ミュリエリアとセレスティア、ミラとセレスタイトが横に並び、セレスティアとセレスタイトが対面に座る配置だ。

「ミラも気になっているようだし、この蓋を開けましょうか。セレスタ、あなたが開けて」

「僕が？ いいけど」

ミュリエリアに言われてセレスタイトが大皿の蓋に手を伸ばし、蓋を開いた。

皿の上には葉野菜が敷いてあり、その上に焼いた肉が乗っている。

骨の付いたままの【アプトノス】の肉の塊を火で炙り、焼けたところから削いでいった料理だ。

「わあ、美味しそう」

「実はこの料理、セルティが作ったのよ」

「え？」

「嘘！？ 姉さんが？」

「何なのよ、その態度は……」

ミラとセレスタイトが盛大に驚き、セレスティアがジト目で呟く。

「セルティ。ほら、ちゃんと言いなさい」

「う、わかってるわよ」

セレスティアはそう答えてからもしばらくもじもじとしていたが、意を決したように言った。

「セレスター！」

「うわ、びっくりした。な、何？」

セレスティアの勢いに押されながら聞き返す。

「えーと、その……おめでとう」

「おめで……何が？」

不思議そうに首を傾げる。

「何って、誕生日に決まってるでしょ！」

「え？」とセレスタイトとミラの声が重なった。

「誕生日にはご馳走を食べたりプレゼントを贈ったりするんでしょっ？」

セレスタのためにセルティが頑張ったのよ」

「姉さん、わざわざ作ってくれたんだ」

「別に……ちよとどよく料理を覚えてくれる人がいたからやってみただけよ」

「それにしても、姉さんが誕生日を気にしてるなんて思わなかったな」

「見たばかりだもの。そりゃ少しは気にするわよ」

「そっか。」

実はさ、僕もあるんだ」

「え？」

と、今度はセレスティアが言う番だった。

セレスタイトはポケットからプレゼントを取り出し、セレスティアに差し出した。

「姉さん、誕生日おめでとう」

「嘘、あんたも!？」

セレスティアは驚いて口元を押さえた。

押さえた手には、包帯が巻かれている。

肉を削いでいるときに、手を切ってしまったのだ。

「どうも、剣と包丁というのは同じようには扱えないものであるらしい。」

「姉さん、驚いてないで受け取って欲しいんだけど」

「あ、そうね」

セレスタイトに促され、セレスティアがプレゼントを受け取る。

「開けるわよ？」

「うん、いいよ」

リボンを解き、箱を開く。

中からは銀細工のブレスレットがでてきた。

「これ……」

「ネックレスと迷ったんだけど、姉さんはもうつけてるから。どうかな？」

「嬉しい。ありがとう、セレスタ」

右の手首にブレスレットを巻きつけて、セレスティアがお礼を言

った。

「えっと、どういたしまして」

意外に素直にお礼を言われたのに驚きながらセレストイトが答える。

「ふふ、これで二人とも疑問は解けたわね」

くすくすと笑いながらミュリエリアが言う。

セレストイトが急にミュリエリアの所を訪れたのはプレゼントを作るためで、

セレスティアが急に料理をし始めたのは誕生日に料理を作った
げるためだった。

それをお互いに秘密にしようとするから、二人が微妙に噛み合っ
てなかったのだ。

結局、ミュリエリアだけが全ての事情を把握してしたというわけ
だ。

「それじゃ、食事にしましょうか。せっかくのご馳走が冷めたら台
無しよ」

「そうだね、お姉ちゃん」

ミュリエリアの言葉にミラが頷く。

「普通なら『いただきます』だけれど、今日は特別ね。セルティ、セレスト、誕生日おめでとう」

「おめでとつございます」

そうして、誕生日を祝う宴の夜は更けていった。

誕生日を祝う宴から一夜明けて、

早朝から、工房の前に四人の姿があった。

「もう行ってしまふんですか？」

旅装を調えたセレスティアとセレスタイトにミラが聞く。

「もうちょっとゆっくりしていてもいいのに」

「そうね。じっくり体を休めてもいいのではないかしら」

ミュリエリアも言葉を重ねるが、二人は揃って首を横に振った。

「悪いわね、二人とも」

「そう言うてくれるのは嬉しいけど、僕たちにはやることがあるか
」

「やること？」

「ある竜、もしかしたら人かもしれないけど、とにかく、僕たちはその誰かを探してるんだ」

「それって、どんな人なんですか？」

「えーと……」

セレスタイトが口ごもる。

言うか言わないか迷っているようだった。

「私の両親の死の真相を知っているだろう相手よ」

あっさりとセレスティアが言う。

「真相？ ラオシャンロンと戦ったからじゃないんですか？」

「何でそんなところまで知ってるのよ」

じろりとミラを睨む。

両親がいないことはセレスティア自身が言ったのだからミラが知っているのはわかっていたが、事情まで知っているとは思っていなかったようだ。

「ごめんなさい、私が教えたの」

「勝手に教えてるんじゃないわよ。まあ、ミューリィならいいけど」

家庭の事情を勝手に話されるのは嫌だが、両親のことを正しく英雄だと話すのなら構わない。

ミュリエリアならそのところをきちんとかわっているだろうとセレスティアは思った。

「あなたがどのくらい詳しく聞いたか知らないけど、おかしいと思わなかったわけ？」

「え……？ 何かおかしかったですか？」

「おかしいわよ。いい？ ラオシャンロンは死んでいて、私の両親も死んでいたのよ？」

「あ」

確かにおかしい話だ。

その場にいた全員が死んでしまっている。

もし、先に【ラオシャンロン】が死んだのだとすれば、セレスティアの両親は生きていただろうし、

逆に、先に殺されてしまったのなら【ラオシャンロン】が村を襲ったはずだ。

「もしかしたら、止めを刺した後には力尽きてしまったんじゃない？」

「それはないよ」

と、セレスタイトが反論する。

「そうだったとしたら、父さんたちの死体がばらばらにはならないでしょ。」

それに、ラオシャンロンにやられたんだとしたって、死体はあんな風にはならないよ」

セレスタイトが見た両親の死体は、体のパーツがバラバラに切断されていた。

切断だ。

踏み潰されたわけでもなく、噛み千切られたのでもない。

【ラオシャンロン】のいかなる攻撃をもっても、そんな死体はできない。

となれば、必然、そこにはバラバラ死体を作り上げた何者かが存在したのだ。

「私たちは、そこにいたはずの何者かを探してるのよ。」

見つけ出して、あの時あの場所で、何があったのかを聞き出してやるわ。」

もしもそいつが犯人だったら、そのときは 「

仇を討つのだ、とセレスティアは言った。

セレスタイトも同意するように頷いている。

「それで、もう六年も……。
何か、手がかりはあるんですか？」

世界は広い。

何の手がかりも無しでは、六年どころか六十年経っても見つけれないだろう。

「一つだけ、あるわ。父さんの手が、一枚の鱗を握っていたの。今まで見たこともない、珍しい鱗をね」

セレスティアが首に提げていたネックレスを引っ張り出す。

そこにつけられていた、ペンダントは、何かの鱗だった。

バラバラになった手が、握り締めていた一枚の鱗。

それは

「あ……」

無意識に、ミラが後ずさる。

「ミラ？」

どうしたの、とミュリエリアが顔を覗き込むが、それも目に入らない。

目を見開いて、その鱗を凝視していた。

黒い鱗。

夜より暗く、闇より深い、底無しの深淵を思わせる黒。

それは、ミラの記憶に唯一残る、

記憶に焼きついた、あの、黒い女の纏う色だった。

NEXT>第十話「黒き鎧の戦士 変身！」

<簡易キャラクター紹介>

名前：セレスティア

年齢：18

性別：女

種族：リオス進種

能力：【大地の絆・火】 【飛行】

名前：セレスタイト

年齢：18

性別：男

種族：リオス進種

能力：【大地の絆・火】 【飛行】

<オリジナル武器紹介>

名前：煌竜剣【比翼】（にじりゆうけん【ひよく】）

分類：双剣

レア度：10

属性：なし

攻撃力：532

切れ味：紫

会心率：20%

強化元：煌竜剣【双蝕】

強化先：なし

太陽と月を冠する金と銀の飛竜の命から生み出された対の剣、を三
ユリエリアが鍛え直した双剣。

太陽と月は同じ空に輝き、互いを翼^{たすく}。

名前：煌竜剣【双蝕】（にじりゆうけん【そうじょく】）

分類：双剣

レア度：10

属性：なし

攻撃力：525

切れ味：白

会心率：0%

強化元：煌竜剣

強化先：なし

太陽と月を冠する金と銀の飛竜の命から生み出された対の剣。
太陽は月を喰らい、月は太陽を呑む。

名前：MASR-4 ヘブンスサイト

分類：ヘビィボウガン

レア度：10

攻撃力：2028（狙撃弾使用時）

反動：特大

リロード：とても遅い

会心率：30%

装填可能弾：狙撃弾 1

一射一殺の理想を体現する狙撃用ヘビィボウガン。
天空より見下ろす瞳は、あらゆる獲物を逃さない。

名前：MASR-3 ホークアイ

高い命中精度を誇る狙撃用ヘビィボウガン。

その瞳に捉えられたものに逃げる術はない。

名前：MASR-2 クロスディスタンス

飛距離を限界まで追い求めた狙撃用ヘビィボウガン。

その射程の前にはいかなる距離も意味を失う。

名前：試作型長距離狙撃砲

名工の手による狙撃用ヘビィボウガンの試作品。

未だ未完成で、実戦レベルには届いていない。

第九話「対の翼」(後編)(後書き)

お久しぶりの投稿です。

一話の量ってどのくらいがちょうどいいんだろう？

第十話「黒き鎧の騎士 変身!」(前編)

【旧火山エリア】。

岩と溶岩に支配された地を、数人の【進種】が走っていた。

先頭の一人は防具を着込み、【大剣】を背負っているが、他の数人は無防備な姿だった。

その一行の頭上を、赤い影が飛び越える。

紫の鶏冠を持つ赤い姿、【ドスイーオス】だ

一行は慌てて足を止めた。

「逃げろ、あっちだ!」

背の【大剣】を引き抜きながら、先頭の男が叫ぶ。

「でもリーダー!」

「いいから行け!」

「わ、わかったわ! さあ!」

後ろについていた女性が皆を急かし、走り出す。

が、いくらも進まないうちに足を止めた。

岩の陰から、【イーオス原種】が姿を見せ、その前に立ち塞がった。

「きゃー!」

「ちっ!」

男がそちらに駆け出そうとするが、それを【ドスイーオス】が阻む。

【イーオス原種】が迫る。

そのとき

「とっっ!」

と、勇ましい掛け声と共に、一人の男が現れた。

近くの大岩の上から飛び降りてきたようだ。

炎で焼いた岩のような黒い鎧。

顔には目の部分に細いスリットの入った黒い仮面をつけている。

その仮面は、竜を模したものだった。

明確に現存するモンスターに似ているわけではないが、角や牙の意匠が竜を思わせるのだ。

仮面を被った男は、【ドスイーオス】たちと戦いを繰り広げ、見

事に一行を守った。

後に、マスクドドラゴン【竜仮面】あるいはブラックマスク【黒仮面】などと呼ばれるようになる戦士が初めて姿を現した瞬間だった。

実に、今から五十年前の話である。

MONSTER HUNTER EVOLVE
第十話「黒き鎧の騎士 変身!」

村に程近い草原。

朝も早いこの時間、人通りもなく、風の吹き抜ける音が聞こえるほどの静けさだけがあった。

その静寂を爆音が引き裂く。

一瞬の後、草原に立ててあった木の板が砕け散った。

少し、いや、かなり離れた場所で、草むらからミラが顔を出す。

手には【ヘブンスサイト】。

伏射の姿勢をとっていたために、草に隠れて見えなかったようだ。

「当たった？」

「ええ。命中よ」

もう一人、ミラの隣にミュリエリアが起き上がる。

観測手としてミラに付き合っていたのだ。

「凄いわね。もう百発百中よ」

「えへへ。止まってるからだよ」

姉に手放して褒められて、ミラは照れたように笑った。

セレスティア、セレスタイトの姉弟が再び旅立ってから一週間。

ミラは、暇を見つけては狙撃の練習をしていた。

どうも、【イャンガルルガ原種】との戦いで役に立てなかったのを気にしているらしい。

そのかいあって、固定されている目標にはほぼ完璧に当てられるようになっていた。

ただし、相手が移動する標的となると話は別だ。

実戦で使いこなせるようになるにはまだまだ練習が必要だろう。

「そろそろ戻りましょうか。帰って朝ご飯にしましょう」

「うんっ」

二人は地面に転がっていた空薬莖を拾い集めて、村へと帰って行った。

……

「あら、手紙だわ」

工房に戻ると、店の扉に手紙が挟まっていた。

ミュリエリアが扉を開けて、手紙を取る。

表には宛名が書いてあり、肉球模様のスタンプが押しあてられていた。

留守の間に郵便アイルが届けて行ったようだ。

「誰から？」

ミラがひょいとミュリエリアの手元を覗き込む。

「ちょっと待ってね……あら？」

ミュリエリアが手紙を裏返し、驚いたような顔になった。

「セルティからだわ」

「セレスティアさん？ 何って書いてるの？」

「ええと」

ミュリエリアがセレスティアからの手紙に目を落とす。

「今は西の方、樹海の辺りにいるみたいね。それと……」

セレスティアからの手紙には、今自分たちが【樹海】近くにいることから始まる近況の報告が書いてあった。

特に重大な用件はなく、単なる雑談と言っていていい内容だった。

「前は六年も連絡しなかつたくせに、現金ねえ」

ミュリエリアが呆れたように呟く。

ミラに黒い女の話聞いたセレスティアたちは、手がかりを見つけたら連絡をし合おうと約束して旅立って行った。

セレスティアは、ミラが何らかの手がかりを見つけたときに連絡を取りやすくするために自分の居場所を教えてきたのだ。

ようやく掴んだ手がかりを逃さないようにと、セレスティアも必死なのだろう。

「お返事書かないと」

「ふふ、そうね。一緒に書きましようか。でも、新しい手がかりがなかったら怒られそうね」

「あ、確かにそうかも」

手紙にぶつぶつ文句を言うセレスティアの姿が目には浮かぶ。

二人は顔を見合わせて苦笑を交わしあった。

その日の午後。

ミラはミュリエリアと二人で山の中を歩いていた。

大荷物である。

背中に身長のは半分はありそうな大きな木箱を背負っていて、肩にも細長い木箱をかけている。

荷物が多かったために大きな武器は装備できず、【オデッセイ】を装備していた。

ミュリエリアの方は、手に小さな鞆を提げて、背中に【夜刀】【月影】を背負っている。

これはミュリエリアが使ったためと言うよりは、ミラの代わりだ。

灰色の岩に覆われた地形は【火山】特有のものだが、ここは【火山】ではなく【旧火山】と呼ばれる場所の近くだ。

大まかに言えば、村を挟んで【火山】と反対の位置にある【エリア】で、こちらは陸路で行くことができる。

近くとは言え、ここは【エリア】の外なので、二人とも割と気楽に歩いていた。

【エリア】。

植生や地形で大地を分類する区分。

しかし、この【エリア】にはもう一つ大きな意味がある。

それは、モンスターが多数生息しているということだ。

【エリア】とは危険地帯とイコールで結ぶことができる場所なのだ。

エリアの外は比較的安全であり、村を作ったり旅人が休息をとる場所は【エリア】の外というのが常識である。

むろん、比較的ではないのだが、それでも中よりは随分とマシだ。

それなら【エリア】に入らなければいいじゃないかと思うかもしれないが、物事はそう簡単にはいかない。

良質な鉱石や武具素材、調合素材は【エリア】内に多く存在し、食用になる草食獣や魚も同様だ。

生活するためにはどうしても【エリア】に入る必要があるのだ。

閑話休題。

ミラは【アイテムポーチ】から地図を取り出す。

「そろそろだよね」

「そうよ」

ミュリエリアは地図を見ないで頷いた。

もう、何度も通って通い慣れている道だ。

今日の二人の目的は、完成した装備の配達だった。

普段ならミラー一人で行く仕事なのだが、今回は装備が多少特殊なため、ミュリエリアも同行していた。

目的の場所はもうそろそろだ。

周囲を見渡すと、大きな岩の合間に木で組まれた柵のようなものが見える。

「あ、あそこ？」

「ええ」

ミュリエリアが頷く。

ミラは荷物の箱を担ぎ直して、柵の見える方へと歩き始めた。

.....

岩の合間を抜けると、村の姿が見えてきた。

先を削って尖らせた背の高い柵に囲まれていて、一部だけ入り口のように隙間が開いている。

入り口近くには建物はなく、たくさんの荷車が置いてあった。

荷車にはやはり大量の袋が積んであって、袋の口から鉱石が覗いている。

それほど大きな村ではない。

と言っても、小さいわけではなく、この世界では標準的な大きさだ。

ミラの住んでいる村と同じくらいの規模で、人口は五十人程度だろう。

主に【イーオス進種】が住んでおり、火山で掘り出した鉱石の取引で生計を立てている。

産出される鉱石は良質で、ミユリエリアもこの村の商人から鉱石を買っている。

ミラが住み始めてからは初めてだが、今回装備を注文した人は工房のお得意様らしい。

ミラが入り口から村に入ると、一人の男が歩み寄ってくる。

「こんにちは、ミュリエリアさん。そちらは？」

男は、柔らかい笑みを浮かべてミラに話しかけてきた。

【イーオス進種】らしい赤毛をオールバックに丁寧に撫で付けていて、その一部だけが紫色に染めてあった。

ドス、すなわち村の代表者の印だ。

「こんにちは。この子は私の妹で、ミラと言います。最近工房を手伝って貰っているんです」

「初めまして、ミラです。あの、村長さんですか？」

少し意外に思いながらミラが聞く。

その理由はその村長の姿にあった。

「ええ、そうですよ」

と、にごやかに頷く村長は、真っ白なシャツの上に黒い上着、黒いズボンと言う装いだ。

【人間】が言つところのスーツである。

ほとんど汚れも痛みもなく、体を動かす労働をしていないのが見て取れる。

細身の体は、全く鍛えられているようには見えず、狩りなどしたことはないのではないかと思うほどだった。

ミラの村の村長は歴戦の戦士であり、その功績によって村長の地位にある。

普段はただの人のいいおじさんという印象だが、その体は鍛え上げられていて、見た目からして頼れる人物なのだ。

全く反対の印象だったために、ミラは驚いたのだった。

だが、驚きはしたが、それだけだ。

記憶喪失なミラは、色んな村長さんがいるんだなあ、とあっさり納得した。

「今日はルクスさんに？」

「はい。装備を新調したので、その配達に伺いました」

「それはそれは。いつもお世話になってます」

「いえ、こちらこそ。質のいい鉱石を卸していただいて」

「実は最近、新しい採石場を開拓したんです。

エリア外なので多少質が劣りますが、その分お安くできますよ。どうですか？」

「いえ、最近はこの子が素材を集めてくれるので、これ以上仕入れ

を増やすつもりはないんです。

自前で集めた方が、手数料を含めてもお客様にも安く提供できま
すし」

「ですが、安定した供給が」

と、ミュリエリアと村長は世間話からいつの間にか商談に入っ
ている。

大人の会話だった。

ミラは、お姉ちゃんは凄いなあ、と思いながらすっかり傍観者で
ある。

「そうですか、ではこのお話はまた」

「ええ。そうですね」

どうやら話がまとまったようだ。

「では、ルクスさんの家まで案内しますよ」

「はい、よろしく願いします」

家は知っているが、案内してくれるという好意を無にする事もない。

「こちらです」

ミュリエリアとミラは先導して歩き始めた村長の後について歩き
出した。

荷車の置いてある入り口部分を抜けて奥に進むと、家の立ち並ぶエリアに入る。

道の左右に整然と並んでいて、種類は色々だが、看板を出している家　店と言つべきだろうか　が多い。

普通の家よりも店の方が多いようだった。

「何だかお店が多いね」

「そうね。この村は少し特殊だから」

ミラに答えたミュリエリアの後を村長が引き継ぐ。

「ええ。この村は今、商業で成り立っているんですよ」

そう答える村長の言葉には、誇らしげな響きがあった。

「先々代の村長である私の祖父が始めたことですが、火山に住むグラビモス進種ヤリオス進種と契約して鉱石を掘り出してもらい、それを村で加工して他の村や旅人に売ります。」

そして、それで得たお金を使って、他の村から食料を買い付ける。それによって、我々は危険なエリアに入らなくても、安全に生活できるようになったんです」

「じゃあ、狩りはしないんですか？」

と、ミラが素朴な疑問をぶつける。

「そうですね。私達は弱いですからね。無理に戦いをすることはないでしょう?」

【イーオス進種】（【ランポス進種】 【ギアノス進種】 【ゲネポス進種】も同様だが）は弱い。

いや、それでも【人間】と同程度の身体能力を持っているのだが、【人間】とは違い、【進種】には様々な能力を持つものがある。

故に、相対的に弱く見えるし、事実として、最も命を落としやすい。

だから、普通は技術でそれを補おうとするのだが、先代の村長はそうは考えなかった。

技術を用いて優れた武器防具を作り出そうとも、それは他の【進種】も手に入れることができる。

それならば、結局その差は縮まらないだろうと考えたのだ。

そして、その代わりにと考え出したのが、狩りと採取を行わないという思い切った方法だった。

弱いことから、危険な場所に近づかず、技術だけを生かす生き方をしようと言うのだ。

力が足りないのだからいつそ捨ててしまおうとは随分と極端に走ったものだが、その考え方も正しいと言えばまあ正しい。

もちろん、それは簡単なことではなかった。

全く新しいその試みに村人の理解を得、安定した流通ルートを考
え、契約を結ぶ。

そこにあつた障害と苦労は並大抵のものではなかった。

だが、先々代の村長はそれをやり遂げ、モンスターによる被害を
激減させた。

それによつて、この村は、商取引によつて成り立つと言う他に類
を見ない生活形態を得た。

試みは成功だと言えるだろう。

村長の座を世襲で得られるほどの信用を得ているのだから。

この村は、力ではなく、知こそを必要とする村なのだ。

「でも、それって危なくないんですか？」

危険に近づかなくても向こうから勝手にやってくるのがこの世界
だ。

狩りをしなければ戦いの経験を得ることはできず、力を捨てる選
択をして、鍛えてもいないだろう。

【エリア】の外は安全な場所ではあるが、それでもモンスターが
来ないわけではない。

偶然迷い込んできたモンスターに村が全滅させられましたなど、

冗談ではない。

「ああ、それなら大丈夫ですよ」

村長はこともなげに答えた。

そんな危険などありえないと、そう言いたげな声だった。

安全だと確信している。

モンスターが現れることなどないと思っているのか、

あるいは、モンスターが現れても問題ではないのか。

「この村にはルクスさんがいますからね」

「ルクスさん？」

依頼人の名前だった。

その人物がいるから、この村は大丈夫なのだという。

つまりそれは、そのルクスという人物が、この村を守っているということだ。

そう考えると、ルクスが工房の常連として装備を買っているのも頷ける。

「そのルクスさんって」

と、ミラが聞きかけたとき、家間の路地から三人の少年が飛び出してきた。

木の棒を持った一人の少年がもう一人の腕を掴んでいて、それを最後の一人が追いかけているという構図だ。

「ハンター！ その子を放せ！」

追いかけていた少年が叫ぶ。

その叫びを受けて、棒を持っている少年は無言でにやりと笑った。どうやら、ごっこ遊びをしているようだ。

悪者の【ハンター】を正義の味方が追いかけているシチュエーションだろう。

【ハンター】が喋らない（喋るかもしれないが、【進種】とは会話をしない）のを再現するあたり、芸が細かい。

【ハンター】役の少年が、おそらく人質役だろう少年を突き飛ばし、木の棒を剣のように構える。

いよいよ戦いが始まるようだ。

だが、正義の味方役の少年は無手だ。

それでどうやって戦うのだろうか。

「行くぞ！」

少年は力強く叫ぶと、右手、左手、と、手首のところでは交差させながら空に掲げた。

そして、手首を返しながらその手を腰の前に下ろす。

さらに、右手を一度左前方に突き出してから右に弧を描きながら腰に引き寄せ、それと同時に左手を右斜め上に突き出す。

そして

「変
」

「こらこら。狭い所で暴れたら危ないっていつも言ってるでしょう」
ポーズを決めていた少年の頭に手を置きながら村長が言う。

止められた少年は、不機嫌そうな顔になって、村長の手を払った。

「何だよー。いいところだったのに、邪魔するなよなー」

「そつだそつだー」

と、他の子供たちも追従する。

「ちゃんと私の言うことを聞いてくれたら邪魔はしませんよ。
この道は人が通って危ないですから、もっと広いところで遊びなさい」

「ちえ、わかったよ。行くうぜ」

「行くつぜー」

村長に言われた子供たちは、連れ立って立ち去って行った。

「お待たせしてすみません。では、行きましょつか」

村長が二人を促して再び歩き始める。

ミラは、それについて行きながら、

「あの男の子のポーズって一体何なんですか？」

と質問した。

「ああ、あれはルクスさんの真似をしているんですよ」

「真似、ですか？」

不思議そうに、ミラ。

「ルクスさんは、この村のヒーローですから。私も幼い頃にはああやって遊んでいたものです。」

まあ、昔はもっと簡単なポーズだったんですけどね」

「はあ……そうなんですか」

一人で村を守っている人物で、ポーズを決める人で、村長が子供の頃からヒーロー。」

ルクスとは、一体どういう人物なのだろうか。

「さあ、着きましたよ。あそこがルクスさんの家です」

あそこ、と指された家は木で作られた普通の一軒家だった。

ミラが首を捻っている間に目的の場所に到着していた。

「ありがとうございます」

ミラは頭を下げてお礼を言った。

「いえいえ、では私はこれで」

相変わらずにこやかに言い、振り返って、村長が去って行く。

その背中を見送ってから、二人は教えられた家に近づいた。

ミュリエリアが手を上げて、ドアを叩く。

「すみません。『工房・ミュリエリア』のミュリエリアです」

「ああ、今開けるよ」

声をかけると、すぐに返事が返ってきた。

歳月を経た、深く渋みのある声だ。

足音が近づいてきて、ドアが開かれる。

開いたドアから現れたのは、白に近い灰色の髪の人だった。

顔には深いしわが刻まれ、かなりの高齢であることをうかがわせる。

（この人が、ルクスさん？）

只者ではない雰囲気だが、この老人が一人で村を守っているというのにもわかには信じられない。

「こんにちは、ルクスさん」

ミラは半信半疑だったが、ミュリエリアは普通に話しかけた。

「どうやら、この老人がルクスで間違いのないようだ。」

「よく来たな。まあ入ってくれ」

「ええ。お邪魔します」

「お邪魔します」

ルクスに続いて、家の中に入る。

一人暮らしなのだろうか、一目で家の中の全容が見えるほどの大きさの部屋だ。

壁際に半分ほど埋まった本棚と大きな筆筒が並んでいて、部屋の両端にベッドとテーブルがそれぞれ置いてある。

テーブル側の奥に背の低い仕切りがあつて、その向こうにキッチンが見えた。

きちんと整頓はされているが、物が多くて手狭な印象があつた。

「それで、君は？」

ルクスがミラに目を向ける。

「あ、初めまして、ミラと言います。今は工房のお手伝いをしています」

ミラが自己紹介をすると、ルクスは「そうか」と頷く。

「俺はルクスだ。よろしく」

「はい、よろしくお願ひします」

挨拶を交わすルクスとミラ。

それにしても、若々しいと言うか、力強い言葉遣いの老人である。

言葉だけ聞いていると、若者と話している気分になつてしまひそうだった。

「それで、注文したものは？」

「できていますよ。ミラ」

ミュージアに言われて、ミラは持っていた二つの箱を下ろした。

背負っていた方の蓋を開けると、いくつかの仕切りが入っていて、頭から脚までの装備一式が納められている。

ミラは装備を箱から取り出して、テーブルの上に並べていく。

【グラビドヒーローシリーズ】。

黒い【グラビモス亜種】の甲殻を薄く削って加工し、その上を薄い金属板で覆ったミュリエリアのオリジナル防具である。

【人間】の使っていた【グラビモス原種】を素材とする防具はかなり大きくシルエットを膨らませてしまいが、これはそれとは対照的にスマートなシルエットだった。

全体的に丸く滑らかな作りで、見た目には大人しい感じの防具だ。

異彩を放つのは【頭装備】と【腰装備】で、【頭装備】は【グラビモス原種】の頭をそのまま再現したような形をしており、【腰装備】は大きなバックルのついたベルトと言う感じだ。

そして、どの装備にも共通して言えることだが、重量がかなり軽い。

ミラが箱に納めるとき、こんなに軽くて大丈夫なのかと不安になっってしまったほどだった。

「注文通りに新調してあります。最後の確認をしますから、着てみてもらえますか」

「わかった」

ルクスは頷いて、おもむろに服を脱ぎ始めた。

服の下には、手と足が出るだけの全身タイトのようなインナーを着ていた。

露出は服と変わらないが、ミュリエリアとミラは礼儀として一応振り向いて目を逸らした。

しばらく「ゴゴゴ」と防具を身につける音がして、ルクスの「もういいぞ」という声がする。

二人が振り向くと【頭装備】まできつちり着込んだルクスが立っていた。

「どうですか？ 違和感とかありませんか？」

「ああ、ぴつたりだよ」

「そうですか。ちょっと失礼しますね」

ミュリエリアはルクスに近づいて、防具のあちこちをチェックする。

一通り確認して、ミュリエリアは元の位置に戻る。

「問題は無いようですね」

「君の仕事なら問題は無いだろうな」

ルクスはそう言っただけで、と笑った。

ミュリエリアはこの老人からかなりの信頼を得ているらしい。

それだけの仕事をしているのだから大したものだ。

「ありがとうございます。今回も装備の機構は前回と同じですから、同じ感覚で使えると思います」

ミュリエリアはお礼を言って、防具の説明を始めた。

「でも、今回の軽量化で強度は下がりましたから、その点は気を付けてください。

はつきり言って、防具の用を成すためのギリギリの強度ですから、相手によっては破壊されてしまう可能性もあります。

もっと何とかできればよかったですけど……」

申し訳なさそうに言うミュリエリア。

いかにミュリエリアの腕がいいと言っても、限界はある。

元々最高級の素材を使っていた防具を軽くするには、強度を犠牲にするしかなかった。

実は、軽量化の依頼は初めてではなく、これでもう数回目だ。

今回の軽量化で、ミュリエリアももう限界だと思わずにはいられなかった。

ただ軽い防具がいいのなら、モンスターの皮を加工した防具の方が防御力が高いくらいだ。

一人で村を守っていることを思うとこんな強度の低い防具は渡したくなかったのだが、それでもこっぴどして渡すのは、ルクスが『それでも』と望むからだった。

「いや、それでもいいから軽くして欲しいと言ったのはこっちだ。ミユリエリアはよくやってくれているよ。」

この村の職人では、こんな仕事はできないからな」

「私の言うことではないかも知れませんが……あまり無理をしないで下さいね」

「それはわかってるけど、俺は無理をしないわけにはいかないからな。」

俺は、決して負けられないから」

「……そうですね」

ミユリエリアが痛ましそうに目を伏せる。

「そんな顔をするな。大丈夫だよ。」

俺は負けられもしないけど、死ぬわけにもいかないからな」

一人で村を守っているからだろうか。

だが、ルクスの言葉には、それ以上の何かが込められているような響きがあった。

そのとき

「ルクスさんっ！」

ドアが勢いよく開いて、村長が飛び込んでくる。

「どうした？」

「火山から、イーオスが！ もうすぐ村に入ってきます！」

「何！？」

言うが早いか、ルクスは家を飛び出して行った。

それに続いて、村長も家を飛び出す。

「え、ちょっと、ルクスさん！？ 武器は！？」

と、慌てるミラ。

慌てていたのか、ルクスは防具だけの姿で飛び出して行ってしまっていた。

防具の強度が下がったという話を聞いた後ではより不安が募る。

「お姉ちゃん！ 私、行ってくる！」

「ミラ！」

ルクスの後を追いかけて家を出ようとしたミラをミュリエリアが

呼び止める。

そして、振り返ったミラに、【夜刀】【月影】を投げる。

「気をつけて」

「うん！ お姉ちゃんはここにいてね！」

ミラは、【夜刀】【月影】を背中に背負いながら、今度こそ家を飛び出した。

来るときに通った道を逆に走って、村の入り口に向かう。

村長がもうすぐ村に入ってくると言っていた以上、そこにいるだろう。

道を駆け抜け、村の入り口にたどり着いたとき、

「え……」

ミラは、自分の目を疑った。

村の入り口の広い場所で、三頭の【イーオス原種】とルクスが睨み合っている。

そして、その様子を、村人が遠巻きに見守っていた。

いや、見守っていたと言っのは正しくない。

正確に言うなら、見物していた、だ。

逃げ遅れたのでもなく、見世物を見るように見物しているのだ。それなりの距離を取ってはいるが、危険な場所に変わりは無い。

それなのに、ミラがその場にたどり着いた後に集まってくる村人さえいた。

「村長さん！」

見物している村人の中に村長の姿を見つけて、ミラは村長のとこに駆け寄った。

「何やってるんですか！？ 早く皆を避難させないと！」

焦るミラを、心底不思議そうに村長が見る。

そして、言った。

「大丈夫ですよ。この村にはルクスさんがいますから」

「そんな」

ルクスがいるから大丈夫。

少し前にも聞いた言葉なのに

頼もしい言葉のはずのそれが、今は空恐ろしく響いた。

他の村人も同じ気持ちなのだろう。

己の命を脅かす存在であるはずのモンスターを前にしても、全く脅えているような様子は無い。

パニックになるのも困るが、全く緊張感が無いのも問題だ。

大型だろうが小型だろうが、モンスターは人を殺す力を持っている。

恐れるべきなのだ。

その脅威を正しく理解できているのなら、恐れなければならない。

狩りをしない村。

力を捨てた村。

数十年という時間、戦いを忘れた人々は、ここまで変わってしまったのだろうか。

ミラは、人をかき分けて、ルクスの元へと向かう。

「ルクスさん！」

「ミラ。どうした？」

睨み合っている【イーオス原種】から目を逸らさずに、ルクスが聞く。

「武器を　片手剣と太刀、どっちが得意ですか？」

ミラはどっちの武器も同じように使いこなせる。

無手のルクスに選んでもらって、残った方を使うつもりだった。

だが、ルクスは首を横に振った。

「悪いが、俺には必要ない。この鎧が、俺の剣だ」

「え？」

「離れている」

ルクスに押されて、ミラが一步下がる。

反対に、ルクスは【イーオス原種】へと一步踏み出し、身構える。

両手を手首のところで交差させながら空に掲げ、手首を返しながらその手を腰の前まで下ろす。

そして、右手を一度左前方に突き出してから右に弧を描きながら腰に引き寄せ、それと同時に左手を右斜め上に突き出す。

遊んでいた子供が取っていたポーズ。

ルクスの真似。

そのオリジナルが、ミラの目の前で披露される。

「変身！」

と、叫び、左手を鋭く左に薙ぎ払う。

次の瞬間、ルクスの体が赤い光に包まれた。

練気の光　鬼人化だ。

それに呼応するように、【腰装備】のバックルが赤く光る。

そして、鎧に変化が起きた。

【腕装備】の表面の金属部分が手の甲側の中心から左右に開き、手の平側に回る。

そして、むき出しになった黒い【グラビモス亜種】の甲殻から、【ナルガクルガ進種】のブレードのように刃が飛び出す。

【脚装備】にも同様の変化が起こり、脛部とつま先、それから踵に刃が展開する。

【胴装備】は胸の中心部から四方向に展開し、肩と脇腹に向けて金属部分が開いた。

【頭装備】の【グラビモス原種】の顔は上下に開いて後頭部と顎の下に回り、その下から黒い竜の仮面が現れた。

僅か数秒の変化。

だが、その間に、丸みを帯びていたシルエットは鋭く尖った攻撃的な姿に変わっていた。

色も、金属の銀色から、甲殻の黒へと反転している。

(お、お姉ちゃん……一体何作ってるの……)

驚きと呆れが半々の感想を内心で呟く。

【太刀】の中には、【夜刀】【月影】のように練気に応じて姿を変えるものがある。

どうやら、その理論を利用した、練気によって変形する鎧のようだ。

理屈はわかるが、作るとなるとそれは別の話である。

ミュリエリア鼻肩のミラだが、技術者としてのミュリエリアの評価はさらに上げる必要があるようだった。

「俺は、マスクドドラゴン・ブラック！」

誰に聞かれたわけでもないが、ルクスが高らかに名乗りを上げ、村人が歓声を上げる。

ますます見世物のようだった。

【イーオス原種】たちが鳴き声を上げて、戦闘態勢に移る。

二頭がルクスに向かい、一頭はミラへと向かった。

この期に及んでも、村人たちは逃げようとはしない。

むしろ、戦いが始まるのを待ち望んでいるようだった。

「この状況で、何て暢気なっ」

ミラは、【夜刀【月影】】の柄へと手を伸ばす。

自衛の手段を持たないどころか、身を守る気が無い。

間違っても、そんな人の所に通すわけにはいかなかった。

柄を握り、姿勢を低くして向かってきた【イース原種】へと向かう。

正面から突っ込み、それに合わせて【イース原種】が振り下ろしてきた爪を体を左にズレて躲す。

そして、すれ違う瞬間に【夜刀【月影】】を抜き放った。

抜いた瞬間から、赤い練気が刀身を包み、峰の側に隠し刃が展開する。

抜刀から直接の気刃斬り。

赤い軌跡は【イース原種】の胸から背中へと抜け、両断された上半身が地面に落ちた。

鎧袖一触。

ミラの力は小型モンスター一頭には遙かに勝る。

それでも、状況、数、あるいは運。

そんな要素で簡単に狩る者と狩られる者の立場は容易く逆転する。

誰もが常識のように知っているそれを、この村の住人は知らない。

だから、こんなにも暢気に見物していられる。

わあっ、と村人の中から歓声が上がった。

ミラがそちらを見ると、ルクスの足元の血溜まりに一頭の【イーオス原種】が倒れ伏していた。

首筋を深く切り裂かれ、既に息は無い。

死体を見下ろしていたルクスは、腕を一振りして腕のブレードに付いた血を振り払った。

その背中に【イーオス原種】が飛びかかる。

ルクスは素早く振り返り、鉤爪の一撃を腕で受け止めた。

腕のブレードに阻まれ、勢いがあつた分、【イーオス原種】の手が切り裂かれる。

怯んだ【イーオス原種】が手を離して後退。

それを許さずルクスが追撃。

一足で懐に飛び込み、回し蹴りを放つ。

モンスターに対して武器を使わない格闘攻撃はそれほど有効な攻撃手段ではない。

せいぜい牽制になる程度だ。

が、ルクスが着ているのはただの防具ではない。

防具にして武器。

本人の言う通り、鎧う剣である。

脛部の刃が【イーオス原種】の首を捉え、その首を刎ねた。

首を失った体がゆっくり傾き、地面に倒れる。

観客となっている村人が再び大きな歓声を上げた。

ミラも、取りあえず胸を撫で下ろす。

だが

「まだだ！」

ルクスが鋭く叫ぶ。

仮面越しで分かり難いが、視線は空を向いていた。

ミラも視線を向ける。

そこにいたのは、一頭の羽のある蛇のようなモンスター。

【ガブラス】だ。

「ガブラスまで……何で？」

ここはエリア外、一応ではあるが、安全な場所だ。

安全なはずの場所だ。

【イーオス原種】か【ガブラス】か。

一種類だけならまだ偶然だと納得できる。

だが、異なる種族が、続けざまに現れた。

なぜ？　と思うが、考えている余裕は無い。

【ガブラス】は太刀の届かない上空にいる。

こちらからの攻撃が届かないのと同様に【ガブラス】からの攻撃も届かないが、【ガブラス】は毒液による遠距離攻撃を持っている。

相手が一頭なら対処するのはそう難しくないが、こっちは全く無警戒な村人がたくさんいる。

そちらを狙われれば、間違いなく被害が出るだろう。

「いけないっ」

「いや、問題ない」

焦るミラに冷静に返し、ルクスが右手を持ち上げる。

何かを驚掴みにするように曲げられた五指。

その指先の延長線上、五指の重なる場所に小さな光点が生まれ、一瞬で爆発的に光量を増す。

一際ひときわ大きな光が爆ぜ、空を一条の閃光が駆けた。

収束された火炎　熱線だ。

【グラビモス進種】の【大地の絆】である。

真っ直ぐに伸びた火線が、空中の【ガブラス】を捉える。

【リオス進種】の【大地の絆】が燃やすための炎だとすれば、こちらは焼き切るための炎だ。

【ガブラス】は、熱線の軌跡そのままに斜めに両断され、地面に落ちた。

「今度こそ、終わりのようだな」

周りを見回して、ルクスが言う。

今までで最も大きな歓声が村人から上がり、村人がルクスの周りに集まっていく。

「流石ルクスさん！」

「相変わらず余裕の勝利でしたね！」

「どうせなら大型種との戦いを見てみたいな！」

口々に賞賛の言葉がかけられる。

それを、ミラは複雑な面持ちで眺めていた。

「……おかしいよ、こんなの」

ポツリと呟く。

戦いとは、狩る者と狩られる者が互いに命を賭ける、最も重い真剣勝負だ。

命を賭けた戦いを、命を賭けて戦うものを何だと思っているのだろう。

それ以上その光景を見ていられなくて、ミラは身を翻して歩き始めた。

その背後で、

「ルクス爺ちゃん」

一人の少年　ルクスの家に行くときに変身の真似をしていた少年　がルクスに飛びつく。

「おっと……」

ルクスは少年を抱きとめたが、その勢いで少しよろめいた。

「この状態のときに飛びついてきたら危ないぞ」

ルクスは、少年を地面に下ろし、練気を収めた。

鎧から漏れていた赤い光が消え、鎧が元通りの姿を取り戻す。

「はい。ごめんなさい」

少年が素直に頷く。

ルクスは、ぽん、と手甲をつけた手を少年の頭に置いた。

「もうしないと、約束できるな」

「おう！ ルクス爺ちゃんとの約束だな！

俺は、爺ちゃんとの約束は守るぞ」

少年が大きく頷く。

「そうか。なら、他の約束も覚えているな？」

「もちろん！ なぁみんな！」

少年が呼びかけると、他の子供たちも一斉に肯定の返事を返した。

子供だけでなく、大人たちも頷いている。

「村から出ないこと、それから仲間を大切にして、絶対に見捨てないこと。だろ！」

「ああ、そうだ」

ルクスが満足げに頷く。

その約束は、親たちがまだ子供だった頃から、ルクスが変わらずに言い続けていることだった。

その頃。

【旧火山】エリア。

火山の色と言えば岩の灰色と溶岩の赤が大部分だ。

しかし、今の【旧火山】は赤一色に塗り潰されていた。

溶岩ではない。

血だ。

夥しい血によって、全てが真っ赤に塗り替えられていた。

数え切れないほどの死体の山。

【イーオス原種】 【ガブラス】 【ブルファンゴ】 【アプケロス】。

あらゆる種類のモンスターたちの死体が積み重ねられている。

その中心に、一つの人影が立っていた。

頭までを金属の鎧にすっぽりと覆われていて、性別さえもわからない。

だが、その鎧を見るだけでわかることが一つある。

この鎧に似たデザインの防具を作らないことはあらゆる職人の暗黙の了解だった。

なぜなら、その鎧は【ハンター】の証だからだ。

手に持っているのは血に塗れた巨大な鎚。

【ブレイド】と同様に恐ろしい膂力を持ち、【ハンマー】を武器にする【ハンター】。

叩き潰す者【クラッシャー】である。

この場に破壊の嵐を撒き散らした、化け物。

野生に生きるものの本能が敗北を悟らせたのか。

【クラッシャー】を取り囲んでいたモンスターたちが逃げ始めた。

重そうな鎚を軽々と肩に担ぎ上げ、【クラッシャー】が後を追う。

最後尾の【アプケロス】に後ろから追いつき、頭上でぐるんと回転させた【ハンマー】を叩きつける。

【ハンマー】を背中に叩きつけられ、背の甲羅ごと背骨を粉碎された【アプケロス】が崩れ落ちる。

【クラッシャー】は【ハンマー】を担ぎ上げ、後ろから二頭目、を追い抜き、三頭目の【ブルファンゴ】を叩き潰した。

仲間 種族が混在していて仲間かどうか不明だが、逃げているという意味では仲間だ がやられている間に、他のモンスターは【ハンター】からの距離を稼ぐ。

無事に逃げ切れそうに見えた、だが

ヒュン、と風を切る音が響き、上空を飛んでいた【ガブラス】が墜落する。

その背中にはどこからか飛んできた矢が突き刺さっていた。

狙い撃つ者【スナイパー】の長距離射撃だ。

矢は次々に飛来し、次々にモンスターを射抜いていく。

足が鈍くなったところに【クラッシャー】が飛び込み、【ハンマー】を振り回す。

【クラッシュャー】に叩き潰され、あるいは【スナイパー】に射殺されて、瞬く間にモンスターは数を減らしていく。

だが、その中にはそれから逃れるモンスターもいた。

いや、逃れると言うのは正しくない。

一部のモンスターは、例え【ハンター】の目の前にいても、その存在を無視されているかのように見逃されていた。

まるで、殺す相手を選んでいるようだった。

破壊と殺戮の宴はしばらく続き、殺されるべきものは全て殺された。

生き残った 正確には殺されなかったモンスターたちがどこへ行こうと、それは【ハンター】にとってどうでもいい話だった。

【クラッシュャー】は【ハンマー】を担ぎなおすと、新しい獲物を求めて歩き始めた。

第十話「黒き鎧の騎士 変身!」(後編)

「おかしいよ、絶対!」

村長の家の一室。

ベッドの縁に腰掛けたミラは、隣に座っているミュリエリアに不満をぶつけていた。

【イーオス原種】たちの襲撃の後、ミュリエリアはルクスの装備をチェックし、村の装備屋で話を聞かれていた。

その話が随分と長引いて日が落ちてしまったために、今日は村長の家に泊めてもらうことになった。

道に街灯などあるはずもなく、真っ暗になってしまいう夜道を歩くのは非常に危ないのだ。

「ミラの気持ちもわかるけれど……」

私も最初はそうだったわ、とミュリエリア。

「でも、この村ではそれが普通なのよ。部外者の私たちが口を出す問題ではないわ」

「うー、それはわかるけど……」

諭すように言うミュリエリアに、ミラは不満そうに口を尖らせる。

「実際、ルクスさんしか戦える人がいないのだから仕方がないですよっ？」

それに、あんな風に見世物になるのはルクスさんのせいでもあるのよ」

「え、そうなの？」

「ええ。なるべく人の目を引く鎧を作って欲しいって注文だったのよ」

「そ、そうだったんだ」

釈然としない感じでミラが頷く。

「でも、私が言いたいのでっけ？　そういうのじゃなくて……」

「そうなの？」

ルクスだけに戦わせているのが不満なのかと思っていたが、そうではないらしい。

「うん。だって、私もお姉ちゃんとか村の人たちのためだったら一人でも戦うと思うし。」

一人で戦ってたら目立つちゃうのは仕方ないよね」

「それじゃあ、どうして？」

「うーん、上手く言えないんだけど……」

ミラ自身も明確な言葉にしにくいようだ。

「つつかえつつかえ、言葉にしていく。」

「例えばだよ。もし私が戦ってお姉ちゃんを守ったら、お姉ちゃんは私にお礼を言ってくれるでしょ？」

「ええ。そうね」

わざわざ確認するまでもなく、ミュリエリアはそういう人物だ。

初めて【森丘】に出た日も、夜になってわざわざお礼を言いに来てくれた。

その夜の会話がミラの心を救い、今のミラを形作っていると言っても過言ではないだろう。

「でもね、ルクスさんにお礼を言ってる人、いなかったんだ」

ルクスには賞賛の言葉が惜しみなくかけられていた。

だが、感謝の言葉は一言もかからなかった。

それどころか、大型モンスターとの戦いが見たいなどと言われていた。

「ルクスさんがみんなのために頑張ってるのに、誰も『ありがとう』って言ってくれないのは寂しいよ。」

ルクスさん、グラビモス進種だったし、もしかしたら、いいように利用されてるんじゃないのかなって……」

【原種】は異なる種族を仲間になどしない。

ほとんど同じ姿に進化している【進種】にしても、やはり同じ種族でまとまる傾向があった。

事実、この村に住んでいる【イーオス原種】以外の【進種】はルクスだけだ。

ただ一人の、異端。

それは、【ランポス進種】の村に一人住むミラにも置き換えられるが、ミラはそれなりに村に受け入れられているという多少身勝手な自信があったし、何よりミュリエリアがいる。

だが、ルクスにとってのそういう相手がないのだとすれば、それはとても悲しいことだと思った。

要するに、ミラはルクスのことを心配しているのだった。

「ミラ……」

「わ
」

ミュリエリアがミラの頭に手を置いて、頭を撫でる。

「あなたは優しい子ね。

でも、私は大丈夫だと思っているわ。この村の人たちにとって、ルクスさんは大切な仲間のはずよ。

ルクスさんが戦って守ってくれるのが当たり前になりすぎて、ほんの少しだけわかりにくいだけなのよ」

「そう、なのかな？」

「ええ。私はそう思うわ」

ミュリエリアははっきりと頷いた。

「……うん。お姉ちゃんがそう言うのなら、私もそうだって思ってみる」

なでなでと頭を撫でられながら、ミラが言った。

「それにしても、何でルクスさんってこの村を守ってるんだろ？」

お姉ちゃん、知ってる？」

「ええ……知ってはいるけれど」

ミュリエリアは何度目かの軽量化の際に、その話を聞いていた。

その話を聞いたからこそ、ミュリエリアは受けるつもりが無かった更なる軽量化を引き受けたのだ。

ルクスが戦う理由、それは

「お客様のプライバシーに関わることだから、話せないわね」

「あ、そっか」

友人でもあるセレスティア、セレスタイト姉弟のときのように話すわけにはいかない。

それはよくわかるので、ミラは大人しく引き下がった。

.....

ルクスの家。

ルクスはベッドに仰向けに転がっていた。

床には脱ぎ捨てられた防具が無造作に転がっている。

『……おかしいよ、こんなの』

ミラが呟いた言葉が脳裏に過ぎる。

あの少女は、何に対しておかしいと言ったのだろうか。

ルクス自身に対してか。

それともこの村の在り方が。

そのどちらにしても、確におかしいのだ。

それはわかっている。

だが、それはもう変えられない。

もう決めたことだ。

あの、誰も死なないですむような安全な村を作ると決めたとき。

そして、この村を守り続けると、今は亡き友に誓った日に。

物語は、五十年前のある日へと遡る。

当時、ルクスは十九歳。

そして、後にこの村のドスに選ばれることになる男 レスター
もまた、十九歳だった。

その頃のこの村は、他の村と同様、【エリア】に狩りに、採取に
出る生活様式だった。

レスターは優秀な男であり、狩りのときのリーダーを務めていた。

しかし、彼がドスに選ばれることはないだろうと、当時の誰もが
思っていた。

なぜなら、彼は乱暴者だったからだ。

荒れていたと言ってもいい。

狩りに出る度にどうしても出してしまう怪我人、減ることのない犠
牲者。

リーダーであったレスターはそれに苛立ち、その苛立ちは高いポ
テンシャルを持つ他の【進種】へと向けられた。

他の【進種】に対して誰彼構わず喧嘩を売る日々。

そんなある日、レスターはルクスと出会った。

もちろん、レスターがそんな人物だった以上、出会いは最悪だった。

顔を合わせると喧嘩を売り、若く血の気の多かったルクスも片っ端から喧嘩を買った。

しかし、いつしか喧嘩相手が喧嘩友達になり、そして友人になった。

そしてある日、決定的な事件が起こった。

ルクスの家族が、死んだのだ。

【イーオス原種】の群れに、殺された。

そのとき、レスターは悟った。

強い【進種】だろうと、死ぬときは死ぬのだと。

誰も死なないためには、危険に近づかない。これしかない。

「ルクス。俺たちで、誰も死ななくてすむ、そんな村を作ろう」

レスターは夢物語を語り、それは二人の夢になった。

狩りに出る必要のない村。

その計画を聞いたとき、ルクスは微妙な顔をしたものだった。

「この計画、他の進種への悪意を感じるんだが」

「皆が皆狩りをしなくなったら、どうにもならないだろ。俺が死なせたくなひのは、俺の村の奴だけだよ」

「おい、俺はどうなんだよ？」

「この計画の途中で、お前は俺の村の奴になるだろ」

「……なるほど、そういうことが」

そんな会話があつた後、二人は計画を実行に移した。

仮面の戦士の登場である。

中の人とは当然ルクスなのだが、レスターは徹底的に正体を隠させた。

顔を見せるのはもちろん、能力を使うことも禁止した。

ルクスは、村に住む者が【エリア】に出るとき、必ず影から護衛をした。

リーダーであるレスターと協力すれば、その予定を把握することは容易い。

結果、村人に危機が迫ると必ず現れる仮面の英雄、という存在が作り上げられ、頼られるようになっていった。

同時に、レスターは水面下で動き、必要な交渉を少しずつ進めた。そして、ある程度形になったところで、その計画を公表した。夢のような話。

だが、レスターはそれを夢物語で終わらせられないように準備をしていた。

無茶ではあるが、現実味はあった。

何より、危ない目に遭わなくてもいいという話に喜ばない村人がいないはずが無い。

レスターの計画は村人の支持を得るようになった。

そして、最大の難関が立ちはだかる。

レスターの計画に反対する者の最大の主張は、モンスターに村が襲撃されたときの対処法についてだった。

このタイミングで、レスターは最後の切り札を切る。

村で開かれた意見交換会。

そこに現れたレスターは、正体不明のはずの仮面の男を伴っていた。

そして、ついにその男は仮面の下の素顔をさらした。

「俺の友人、ルクスです。彼を村に迎え、モンスターに対する守り
とします」

この切り札によって、悪い言い方になるが、レスターは村人を操
った。

反対意見としては、今すぐよりも、むしろ未来の心配をしていた
のであり、ここでルクスが出てきても何ら解決策になっていないの
だが、大部分の村人の支持によってその反対を押し切ってしまった
のだ。

とかく世論というのは、目に見える強烈な印象と勢いに流されや
すいものである。

虚構の英雄を擁した印象操作によって、レスターは反対派に勝利
したのだ。

その罪滅ぼしというわけでもないが、その後の二人は村のために
尽くした。

高い期待によって村長に選ばれたレスターは、すぐさま計画を実
行に移し、

ルクスは、村の守り手としての任を全うするため、その日以来、
一度も村を離れたことが無い。

もちろん、レスターはきちんと将来的な村の守りについても考え
ていたのだが、ルクスはそれを聞くことはできなかった。

計画実行から十年目。

未だ道半ばにして、レスターは命を落した。

原因は、子供たちが【旧火山エリア】に遊び半分で探検に行ってしまったこと。

村を離れられないルクスの代わりにレスターは子供たちを探しに行き、

そして、無事な子供たちを連れて、傷だらけになって帰ってきた。

その傷は深く、レスターはそのまま帰らぬ人となった。

『ルクス……村を、頼む』

それが、レスターの最後の言葉だった。

ルクスはレスターほど頭がよくなかったが、それでも考えた。

なぜ、子供たちは外へ出たのかと。

もちろん、【エリア】に入っただけとはいけないと言う決まりはあった。

だが、子供たちはそれを破った。

その理由は、子供たちが、外の危険を理解していないからだ。

そして、子供の好奇心は、大人の言葉で押さえられるほど小さなものではなかった。

だから、ルクスは再び仮面を身につけた。

再び、英雄になろうとしたのだ。

強烈な印象こそが人の心を動かす。

ルクスは、レスターからそれを学んでいた。

今度は正体を隠すことはしなくていい。

ルクスは、能力をフルに使い、まるでシヨーのように、村を襲ったモンスターを倒して見せた。

敵を溶断する強力な熱線。

そして、体を岩のように強固に硬化させる【がいそう鎧装】。

変身は、本来この能力からきたものだ。

ルクスは子供たちのヒーローになり、子供たちは彼の言葉をよく聞くようになった。

だからこそルクスは戦いを止めることも敗北も許されない。

マスクドラゴンという英雄ヒーローが消えた瞬間、この村の平和は崩れてしまうのだから。

「ルクスさん！」

ドンドンとドアが叩かれる音と、村人の声に、ルクスは古い思い

出から引き戻された。

「どうした？」

ベッドから起き上がりながら聞く。

「グラビモスが村の近くで暴れてて、こっち来そうなんです！」

「なんだと!？」

【グラビモス原種】。

【ガノトトス原種】に匹敵する巨体を、鎧竜の名が示す通りの強固な甲殻で包み込んだ【飛竜】だ。

巨体を生かした体当たりや、口から放つ強力な熱線を武器にする、危険な相手である。

(勝てるか? いや)

勝つしかない。

「わかった。すぐに行く」

ルクスは、床の防具を拾い上げ、身につけ始めた。

数年ぶりの、大型種襲撃だった。

松明の光に【旧火山エリア】に【ハンター】が築いた屍の山が照らされる。

松明を手に、それを見る二つの人影があつた。

「先生、これは……」

と、男の声がつ。

「ハンターの仕業だな。殺すだけ殺して剥ぎ取りもしないのは奴らだけだ」

先生と呼ばれた女性がそう返す。

【進種】は無駄に狩りをしない。

そうは言っても、モンスターに襲われて、それを返り討ちにするのはよくあることなのだが、その場合でも死体をそのまま放置したりはしない。

【進種】は、糧を得るために殺し、身を守るために殺す。

対して、【ハンター】は殺すために殺すのだ。

「ハンターから逃げたモンスターが近隣の村を襲ってるかもしれんな。先を急ごう」

「はい。先生」

そんな会話を交わして、二人は足早にその場を立ち去っていった。

村の入り口に、ルクスは立っていた。

村人たちは柵に鈴なりになっている。

その中にミラの姿を見つけ、ルクスはミラに近づいた。

「ミラ」

「あ、ルクスさん。聞きました、グラビモスが来るって」

「ああ、だから、一つ頼みがあるんだが」

「もちろん村を守るお手伝いをします！」

そう言うミラに、ルクスは首を横に振る。

「いや、むしろ、絶対に手伝わないで欲しい」

「え？ どうしてですか？」

驚いてミラが聞き返す。

「それは」

とルクスが言いかけたとき、

オオオオオオオ!

凄まじい咆哮が夜の大気を振るわせる。

ルクスは話を打ち切って振り向いた。

闇の中から、ぶつかれば岩でも砕きそうな勢いで【グラビモス原種】が走ってきていた。

「これは……」

思わず絶句するルクス。

月明かりに照らされた【グラビモス原種】は酷く傷ついていた。

尻尾は根元からへし折れてだらりと下がり、全身に無数の矢が突き刺さっている。

【グラビモス原種】は、口にあるものを啜っていた。

特徴的な鎧。

【ハンター】だ。

今日のモンスター襲撃はこの【ハンター】のせいか、とルクスは納得する。

「どうやら、この【グラビモス原種】を仕留めるまでにはいかなかったらしい。」

【ハンター】は化け物じみて強いが、別に無敵ではない。

当たり前だ。

もしそうなら、進種は今頃【ハンター】に狩り尽くされているだろう。

【グラビモス原種】が頭を上げ、【ハンター】を口の中に送り込む。

鉱石を主食とする【グラビモス原種】には鎧も関係ないのか、そのままバリバリと音を立てて咀嚼し、飲み込んでしまった。

(さあ、どう出る……?)

できれば、このまま【旧火山】に戻って欲しい。

そんなルクスの願いは、どうやら通じなかったようだ。

【グラビモス原種】は村の方向へと歩き始める。

「明かりをつけろ！」

側にいた村人にそう言いつけ、ルクスは村から飛び出した。

なるべく遠い場所で迎え撃たなければならない。

【グラビモス原種】に見つかりにくくするために消していた篝火がつけられ、闇を照らす。

ルクスは、走りながらポーズを取り、

「変身！」

と叫んだ。

練気の光を漏らして、鎧が展開する。

ルクスは、左手で右肘についている棘を掴み、それを引っ張る。

すると、その棘と、それにくっついて腕のブレードが抜けた。

続いて、逆の手にも同じようにブレードを抜く。

格闘戦の挑み辛い相手に対処するために、双剣として使うこともできるのだ。

ルクスは、【グラビモス原種】の腹下に潜り込みながら、頭上から前に双剣を振り下ろす。

ガリガリと、岩を削るような手応えが伝わる。

甲殻に弾かれて、ダメージが通っていない。

【グラビモス原種】は、ゆっくりと体を下げる。

これだけの巨体になると、その質量だけで立派な武器だ。

腹に押しつぶされないように、ルクスは右脚側に抜け、脚に向かって後ろ回し蹴りを放った。

踵の刃が、脚に食い込む。

だが、【グラビモス原種】にはほとんど効いていない。

サイズが違いすぎるのだ。

大木の幹に、釘を一本打ったようなものだった。

【グラビモス原種】が脚を踏み出し、それに引っ張られてルクスが地面に転ぶ。

慌てて逆の足で【グラビモス原種】の脚を蹴り、その反動で刃を抜いた。

ルクスが立ち上がったとき、【グラビモス原種】は頭を村の方向に向けていた。

ゆっくりと、頭を持ち上げる。

「不味いっ」

ルクスは、急いで【グラビモス原種】の首の下に回りこみ、双剣を上に掲げた。

頭を振り下ろした【グラビモス原種】は、自分から首に双剣を刺してしまう。

剣はほとんど刺さらなかったが、【グラビモス原種】は驚いて僅かに頭を上げた。

次の瞬間、夜を赤々と照らし出して、【グラビモス原種】の口から熱線が迸る。

熱線は村人の一角の頭上を抜け、その後ろにあった建物の屋根に命中した。

屋根が吹き飛び、残った壁の部分が勢いよく燃え上がる。

一歩間違えればこの熱線を浴びるところだったことに気づいた村人たちが、泡を食って逃げていく。

一人だけ残っているのは、ミラだろう。

【グラビモス原種】が頭を下げてルクスに噛み付く。

ルクスは後ろに下がってそれを躲し、反撃に熱線を放った。

【グラビモス原種】の頭に熱線が直撃するが、溶岩の熱にも耐える甲殻は熱線をも防いで見せた。

【グラビモス原種】がルクスに向かって足を踏み出す。

そのままでは踏み潰される。

ルクスは走って【グラビモス原種】から距離を取ろうとした。

だが、少し走った場所で足を止めてしまっ

た。練気の光が消え、鎧の変形が解除される。

スタミナ切れだ。

鬼人化は、武器と肉体を強化する反面、体力を消費する。

戦いの間、常時鬼人化を維持していれば、体力がなくなってしま
うのは当然だった。

荒い息を吐くルクスに、背後から【グラビモス原種】が迫り、体
当たりをかける。

ルクスの体は、木の葉のように宙を舞い、地面に叩きつけられた。

その衝撃で、鎧が嫌な音を立てた。

ミュリエリアの危惧していた通り、強度の下がった鎧が壊れてし
まったのだ。

【グラビモス原種】は村に向かって悠々と歩き始める。

「村には、行かせない」

ルクスは、ふらつく体を叱咤しながら立ち上がった。

その体から、壊れた鎧がぱらぱらと落ちる。

「ルクスさん！ 大丈夫ですか!？」

村から、ミラが走ってきた。

「ルクスさんは逃げて下さい。後は私が」

と言って、背中【太刀】に伸ばした手を、ルクスが掴む。

「手は、出さないでくれ」

「な、何言ってるんですか!？」

「俺が一人で勝たなければ、意味が無いんだ。他所の村の者に助けられて勝っても、村の人々は安心して暮らせなくなる」

常に村にいるルクスが決して負けないから、村人は安心して生活しているのだ。

協力して勝つことは、負けることと同じだ。

「でも、このままじゃ!」

「それなら、お前はそのまま村に残って村を守ってくれるのか?」

「それは……」

そんなことはできない。

今だけならともかく、ずっとこの村に住み続けることなんて……

「その覚悟がないのなら、引っ込んでいろ」

ルクスが強い口調で言うと、ミラは唇を噛みしめ、村の中へと走って行った。

「……これでいいんだ」

左手を顔の前で握り締め、右に薙ぎ払う。

「変、身！」

鎧を身につけていない体が、変化し始める。

皮膚が黒い岩のような見た目に変じ、輪郭が一回り大きくなる。

【グラビモス進種】の二つ目の能力【鎧装】だ。

転がっていた一刀を拾い上げ、【グラビモス原種】へ向かう。

脚に斬りつける、が、刃が弾かれて通らない。

【グラビモス原種】は煩そうに向きを変え、尻尾を振った。

折れた尻尾を躲せずに、ルクスが吹き飛ばされる。

勢いよく体が地面に叩きつけられ、皮膚に亀裂が入り、血が流れ出す。

【鎧装】によって硬化したはずの体が、いとも簡単に傷つけられた。

能力が、全く意味を成していない。

村のヒーロー、旧火山の英雄。

五十年間そう称えられた男。

彼は、もはや老いていたのだ。

長い時間が、容赦なくルクスから力を奪っていた。

それでも、ルクスは戦った。

老いた体を鎧に隠し、その鎧すら軽くしなければ纏えなくなっても。

戦いの度に苦悶に歪む表情を仮面に隠して、戦い続けた。

友との約束のために。

この村のために。

「ここは……通さない！」

よろよると立ち上がり、【グラビモス原種】の前に立ちはだかる。

命を失うまで、決して戦うことを止めない、そんな覚悟があった。

だが、その命が失われるのも時間の問題だろう。

そう思われた、そのとき

誰かが、ルクスの前に飛び出した。

ミラか？　と思うが、違う。

その人物は、ミラよりももっと小柄で、手にはどこの家にもある包丁を握り締めている。

「こ、今度は俺が相手だ！」

震える声でそう言い放ったのは、村に住む、一人の少年だった。

ルクスを真似たポーズをとって、

「変身！」

そう叫ぶ。

何も変わらない。

けれど、戦うという意味を示した。

「なぜ……」

信じられずにそう呟いたルクスに、少年は振り返らずに答える。

「仲間を絶対見捨てない！　爺ちゃんとの約束だろ！」

少年だけではなかった。

村人たちが、次々に村から飛び出して来る。

「うちの爺さんのボウガンだ！ ええと、どうやって使うんだ？」

何十年も使っていないなかった武器を引っ張り出してきた村人がいたり、

「売り物の剣だけどよ、こいつは強いぜ！」

剣先を引きずりながら武器屋をやっている男性が現れたり、

「へっぴり腰で何言ってるんだい！ こっちの爆弾の方がよっぽど強いよー！」

荷車に普通より一回り大きい【大タル爆弾】である【大タル爆弾G】を満載した道具屋の女性がいたり。

皆、ルクスに守られて、その言葉を聞いて育った者たちだった。

「馬鹿なことを……すぐ逃げる！」

ルクスが叫ぶ。

気持ちは嬉しかったが、出てきてもどうにかできるような相手ではない。

急に数を増やした敵を睥睨して、【グラビモス原種】が咆哮を上げた。

【バインドボイス】とも呼ばれる大音量の声に、村人たちが耳を

押さえてうずくまる。

【グラビモス原種】は体を左に捻りながら、ゆっくりと頭を持ち上げる。

左から右に薙ぎ払う熱線の予備動作だ。

村人たちが揃って消し炭にされる、容易にそんな光景が目には浮かんだ。

「逃げろお！！」

ルクスが叫ぶが、もう遅すぎる。

その瞬間、バーンという大きな音が響いた。

村人が、ぎよっとした顔で爆弾満載の荷車を見る。

だが、爆弾は爆発しておらず、しかし、荷台が壊れていた。

載っていた【大タル爆弾G】が次々に【グラビモス原種】の下に転がっていく。

そして、その爆弾が突如爆発を起こした。

次々に誘爆する【大タル爆弾G】。

連続した爆発が、【グラビモス原種】の腹の甲殻を砕いて、肉を露出させる。

ルクスは、力を振り絞って【グラビモス原種】に駆け寄り、腹に剣をつき立てた。

さらに、両手を重ねて、腹に押し付ける。

光が爆ぜ、放たれた熱線が【グラビモス原種】の腹を貫く。

灼熱の火線に体の中をかき回された【グラビモス原種】は苦悶の声と共に、体を仰け反らせて熱線を天空に放ち、

そして、それが断末魔となった。

.....

【グラビモス原種】の巨体が地に沈む。

「ふう……何とかなったかな」

村を見渡せる村長の家の屋根の上で、ミラは安堵の眩きを漏らした。

屋根の傾斜に身を伏せていて、傍らには細長い箱が開いて置いてある。

荷車を撃ち、【大タル爆弾G】を爆破したのは、その中身 長距離狙撃ヘヴィボウガン【ヘブンスサイト】による狙撃だ。

ミラは【ヘブンスサイト】のスコープ越しに戦いを見守っていたのだ。

手伝うなと言われたが、いざとなったら援護するつもりだった。

ばれないようにこっそり手伝うならいいだろうと、そんな考えだ。どうなることかと冷や冷やしながら見ていたが、どうやらいい形で終わったようだ。

ここからでは何が起こったか、視覚から想像するしかないが、村人たちがルクスに協力していたのは一目瞭然だった。

「よかったわね」

隣から声をかけられて、ミラは一度スコープから目を離した。

ミラの横では、【双眼鏡】を片手に、ミュリエリアが優しく微笑んでいた。

村の人たちは、ルクスのことを大切な仲間だと思っている。

ミュリエリアが言ったそれが、正解だった。

「うん」

ミラは大きく頷いた。

「本当に、よかった」

.....

生きているときは脅威以外の何者でもないが、死んでしまえば、

その体は立派な財産になる。

【ハンター】とルクスとの連戦で、【グラビモス原種】の甲殻はかなりボロボロになっているが、使い道は素材だけではない。

これだけの大きさだ。

肉を解体すれば、村人全員に行き渡る量になるだろう。

「さあ、剥ぎ取りを」

と、言いかけたルクスの言葉が不自然に途切れた。

「ルクス爺ちゃん？」

子供の一人が訝しげに声をかける。

「……逃げ……る」

そう言って、ルクスの体が、地面に崩れ落ちた。

うつ伏せに倒れた体の下に、真っ赤な血が溢れ出す。

腹部に穴が開いていた。

そこから、ドクドクと血が流れている。

それを成した矢は、ルクスの体を貫き、地面に突き刺さっていた。

……

ルクスが倒れた。

続けざまに、今度は村人を狙ってどこからか矢が飛んでくる。

慌てふためいた村人たちが、【グラビモス原種】の死体の影へと逃げ込んでいくのが見えた。

「な、何で!？」

「落ち着きなさい、ミラ。ハンターよ」

経験の差だろうか。

ミュリエリアが冷静な判断を下す。

「こんな芸当ができるのは、スナイパーだけよ」

「狙い撃つ者!」

遠距離攻撃を得意とする【ハンター】。

狙われた者は、逃げるか撃ち抜かれるかのどちらかの選択しかできない。

だが、この場にだけは、その常識は当てはまらない。

ミュリエリアが作り上げた【ヘブンスサイト】の規格外の射程距離は、【スナイパー】にも劣らない。

矢が飛んでくる方向を見れば、おおよその位置はつかめる。

ミラは【ハンター】が潜んでいるだろう方向に【ヘブンスサイト】を向け、スコープを覗き込んだ。

だが

「暗くて見えない！」

スコープの中に広がるのは、夜の闇。

村で焚かれている篝火の明かりも、そこまでは届いていない。

「しまった……」

【双眼鏡】を覗いていたミュリエリアも、悔しそうに呟く。

「ミラ、篝火を撃ちなさい！ これでは、こちらが狙い撃たれるだけだわ」

「う、うん！」

ミラは、【ヘブンスサイト】の照準を、入り口近くの篝火に変え、トリガーを引いた。

銃声が響き、篝火が吹き飛ばす。

燃えていた薪が粉々になって、地面に散らばった。

薬莖を排出。

新しい【狙撃弾】を装填して、もう一射。

今度は、入り口の反対側にあった篝火が吹き飛ばされる。

「……ダメだわ」

ミラが篝火を吹き飛ばしたことによって少しは暗くなったが、それでもまだ薪は燃えている。

【ハンター】が狙うのには十分な明るさだった。

【スナイパー】からの攻撃は、止むことなく続いている。

(何とか、しないとっ)

弾を装填し、必死に敵の姿を探すミラだが、スコープの中にその姿を捉えられなかった。

どれだけ倍率を上げて、暗いところは見えるようになりはしない。

唯の眼では捉えられない。

そう、例えば、【ナルガクルガ進種】の眼でもなければ。

闇を見通す、あの瞳が欲しい

「見える」

「え？」

傍らからの声に、ミュリエリアは【双眼鏡】から目を離して振り向き、

そして、驚きに目を見開いた。

薄明かりに照らされるミラの髪が、闇色へと変じている。

スコープを覗く瞳は、はっきりとした赤い光を放っていた。

「ベル……？」

思わず、同じ色彩を持つ友人の名を呟く。

【判熱】。

【ナルガクルガ進種】の瞳は、世界を熱で見通す。

冷たいものは黒く、熱いものは赤く。

村人たちは赤。

【グラビモス原種】の死体は暗めの赤。

燃えている薪は真っ赤。

岩場は黒。

黒一面の場所に、赤い人型がはっきりと見えた。

【ヘブンスサイト】を向け、照準。

人型が、何かに気づいたように顔を上げた。

右手と左手が、【弓】を引く形に動く。

【ボウガン】と【弓】を向け合ったその刹那。

ミラと【スナイパー】と、二人の視線が交差したような気がした。

発砲／射。

銃弾と矢が空中で激突し、単純に重く早い銃弾が競り勝った。

矢は砕かれて地に落ち、銃弾は僅かに軌道をずらされて【スナイパー】の右腕を吹き飛ばした。

黒い世界に、暖かい赤が散る。

【進種】を前にすれば、死ぬまで戦いを止めないのが【ハンター】だ。

だが、前衛の【クラッシャー】を失い、【弓】を引く片手も失った。

戦う術を失った【スナイパー】は、その場を引き上げ、去っていった。

.....

【ハンター】を撃退した後、ミラとミュリエリアはすぐにルクスの所に向かった。

ミュリエリアは、村の中を走りながら、横目でミラを窺う。

ミラの髪も瞳も、今は元の色を取り戻している。

見間違えだったのだろうかと思う。

火の照り返しと影がそう見せたのかもしれない。

だが、ミラはあるとき、確かに暗闇を見通していた。

「お姉ちゃん、あそこ！」

ミラの指の先で、村人たちが集まっている。

「急ぎましょう」

ミュリエリアは、ミラのことは後回しにすることにして、足を速めた。

二人がルクスの下に辿り着いたとき、ルクスは村人に囲まれて横たわっていた。

ルクスは目を閉じていて、既に意識はないようだ。

「血が、血が止まらない！」

ルクスの腹部の傷を押さえていた男が叫ぶ。

傷を押さえている手の下から、血が留めなく溢れ、その命を減らしていく。

「お姉ちゃん！」

「ミラ……」

ミラにすぐるような瞳を向けられ、ミュリエリアは困ったように眉を寄せた。

当然だ。

いくらミュリエリアが天才的な腕を持つ鍛冶師であっても、傷を治すのは専門外だ。

「とにかく薬、回復薬を！」

とりあえず、そんな指示を出すしかなかった。

「ルクス爺ちゃん、死んじゃまうのか……？」

そんな子供の問いに、誰も答えられない。

答えたくない。

このままでは死んでしまうのが、もうわかっているから。

沈黙だけがその場を支配し、

「怪我人はいないか!？」

そんな声が、沈黙を破った。

村の入り口に、一組の男女が立っていた。

女性の方は額の位置でヘアバンドを巻いて蒼銀色の前髪を押さえ
ていて、手にトランクを提げている。

ヘアバンドの中心を貫いて蒼い小さな角が生えている。

【キリンホーン】と呼ばれる装備に似ているが、彼女のそれは自
前 【キリン進種】だ。

その後ろに立っているのは、金髪を短く刈り込んだ長身の男性だ
った。

背中には馬鹿でかい背囊を背負っているが、中身はあまり入って
いないのか、潰れているように見えた。

「け、怪我人ならここにいる!」

村人の一人が叫ぶと、二人は走ってくる。

地面に倒れているルクスの姿を見ると、すぐさまその側に屈んで
傷の様子を調べ始めた。

と、そこに、【回復薬】を取りに行っていた村人が帰って来た。

「回復薬を持ってきたぞ！ 回復薬Gも！」

「待て、それは使うな」

女性が村人を止める。

「な、何でだよ！ このままじゃルクスさんが死んじゃまうだろ！」

「回復薬は傷を塞ぐ薬だ。内臓が傷ついている場合に表層の傷を塞げば、かえって危険なこともある。」

この出血からすると、どこか大きな動脈を傷つけている可能性も考えられる」

「どつみやく？」

聞き慣れない言葉に、ミラが首を傾げる。

「お姉ちゃん、知ってる？」

ミュリエリアに聞くと、ミュリエリアも「知らないわ」と首を横に振った。

「先生……この傷では……」

「大丈夫だ」

男の言いかけた言葉を、女性がぴしゃりと遮る。

「絶対に助けてみせる」

女性は、トランクを地面に置き、その蓋を開く。

トランクの中には、液体の入った沢山のビンや大量のガーゼ。

そして、鈍く光る小刀や鋏、その他見たこともないような道具が入っていた。

「あれは……」

それを見たミュリエリアが、何か思い出したように呟く。

「お姉ちゃん？ 何か知ってるの？」

「ええ。父さんの覚え書きで見たことがあるわ。珍しい形だったからよく覚えているの。」

あれは、医刀【メス】。依頼したのは確か……六花と言う人だったわ」

六花。

【人間】の医療技術を蘇らせて身につけた、この世界有数の名医である。

NEXT>第十一話「閃光と電光」

<簡易キャラクター紹介>

名前：ルクス

年齢：69

性別：男

種族：グラビモス進種

能力：【鎧装】【大地の絆・熱】

名前：六花

年齢：25

性別：女

種族：キリン進種

能力：【大地の絆・雷】【龍化】

<オリジナル武器紹介>

名前：グラビドヒーローシリーズ

分類：防具／双剣

レア度：9

属性：なし

攻撃力：280

防御力：全身で201

切れ味：青

会心率：5%

強化元：なし

強化先：なし

変身機能を備えた鎧う剣。

希望の象徴として、孤独に戦う英雄の証。

名前：医刀【メス】

分類：アイテム

切れ味のみを追求した小刀。
よく切れる反面、薄く脆い。

第十話「黒き鎧の騎士 変身!」(後編)(後書き)

また二分割です。

この話はずっと短いはずだったのに……

幕間

壁も床も天井も、全てが金属で作られた殺風景な部屋。

置いてあるのは木の机と椅子、それに本棚くらいで観葉植物の一つも置かれてはいない。

窓が一つもないのも、部屋の閉塞感に拍車をかけている原因だろう。

もつとも、窓があったところで、その窓の外に見えるのは土か岩だけだ。

なぜなら、この部屋 正確には、この部屋を含む建物全体は地下に存在しているからだ。

昼だろうと光の届かない世界。

しかし、部屋の中は太陽の下の様に明るい。

松明やランプの火の光とは全く違う白い光が、天井から部屋を明々と照らしていた。

電氣を利用する、人口の灯火 蛍光灯だ。

現代に記録として残る人間の文明よりも更に以前。

ほとんど伝説上の存在となっている時代に存在したと言われる古

この蛍光灯だけではなく、この地下施設には、いたるところに過学の力が用いられていた。

そうでなければ、何百年間もの間、一度も【進種】に見つからないなどということは不可能だっただろう。

そんな部屋の中に、二人の男がいた。

一人は白いローブを身にまとい、木製の机についている。

深く被ったフードのせいで顔は見えないが、ここにいる以上【進種】では無いだろう。

もう一人は、血に汚れた鎧を着た片腕の男。

鎧を見れば、その男が【ハンター】だとわかる。

【旧火山】近くの戦闘で、ミラに腕を吹き飛ばされたあの【スナイパー】である。

室内だからだろうか、兜は脱いでいて、素顔をさらしている。

兜の中に入っていたのは、こげ茶色の短い髪の若い青年だった。

恐ろしく無表情で、二の腕から先の無くなった右腕に巻いた包帯には未だ血が染み込んでいるというのに、顔色一つ変えていない。

鳶色の瞳は、まるでガラス玉の様に無機質な光を湛えていて、精

巧な人形だと言われれば納得してしまいそうだった。

が、彼は人形ではなく、生きている。

その証拠に、【スナイパー】は、フードの男に報告を行っていた。

【進種】相手に口を利かず、喋れるのかどうかすら疑問視されている【ハンター】だが、仲間同士では喋るらしい。

「銀の瞳、それに力と色を変える髪、か……。メゼポルタの一件で死んだとばかり思っていたが、生き残っていたのだな」

報告を受けたフードの男が呟く。

「捕獲しますか？」

「……いや、その必要はない」

【スナイパー】の言葉に、フードの男は首を横に振る。

「必要なデータはもう取ってある。まして、あの黒い災厄を呼び寄せしてしまう力など必要無い。」

アレは我らと目的を同じくするが、我らの上位に存在するものだからな。

それに狙われる力。あの娘は結局は世界にとって進種であり、我々の力にはなりはしない。

結局、我々自身の手でなさねばならないと言ったことだ」

「世界を、再び人間の手に取り戻すのですね」

「そうだ。世界には原種と人間だけが存在すればいい。進種も、進化しようとしている原種も、この世界には必要ない」

「それが、我々の使命」

「進種によつて、この地より追放された人間の帰還の為、進種を滅ぼす。それが」

ローブの男は、一度言葉を切つて、上を見上げた。

見ているのは、天井か、空か、それとも、その更にか。

「我らが神に、与えられた使命だ」

そう言つと、ローブの男は【スナイパー】に目を戻し、

「その進種の村、何人か戻つて来たなら殲滅に向かえ」

と言つた。

事のついでのように、村一つに住む命を奪えと、命令を下した。

それは当然のことだ。

それが、【ハンター】達の存在する理由なのだから。

第十一話「閃光と電光」（前編）

【旧火山】の村でルクスと会ってから四日後の朝。

ミラたちの住む【ランポス進種】の村。

普段は他所から来るのはミュリエリアの客と行商人くらいの村なのだが、この三日間は妙にたくさんの人がこの村を訪れていた。

「うわあ、今日も凄い人……」

窓から外を眺めて、ミラが呟く。

他の村の住人や、旅をしている人、訪れる人は多種多様だが、その目的は一つだ。

長い行列の先は、工房のすぐ隣に建てられた布のテントへと続いている。

「押さないで、順番に並んで下さい！ 優先的に診察が必要だと思っ方は僕のところの名乗り出て下さい！」

六花と一緒にいた男性 アウリオ が声を張り上げて行列を整理していた。

彼の名はアウリオ。

六花の助手のようなことをしながら一緒に旅をしているらしい。

六花とアウリオは今、この村に滞在して診療所を開業していた。

普段は、旅をしながら出会った相手の治療をしていて、一所に留まるのは珍しいらしいが、今回は元々この村に来るつもりだったらしい。

理由は、六花の使う道具、【医刀【メス】】だ。

この刃は、人体に使うだけなので、硬度を捨てて切れ味だけに特化している。

その脆さと衛生上の理由から、ほとんど使い捨てのように消費してしまいうらしい。

小さくて軽いため、以前ミュリエリアの父に注文したときに大量に作ってもらったのだが、その在庫も無くなってしまった。

それで、新しい【医刀【メス】】を求めて、この村に向かっていったのだと言う。

ミュリエリアの父がいないと聞いたときには悩んだようだったが、今のミュリエリアの腕を見て、ミュリエリアに注文することに決めた。

なるべく早く二百本、と注文され、ミュリエリアはこの三日の間【医刀【メス】】ばかり作っている。

そして、その完成までの間、六花は村に診療所を構え、噂を聞きつけた病人や怪我人が尋ねてきているというわけだ。

「それだけ腕がいいと言う事ね。私も名前までは知らなかったけれど、人間の技術を使う医者の話は有名よ」

作った【医刀【メス】】をチェックしながらミュージリエリアが言う。

大量生産でも、少しも手を抜くつもりはないようだ。

「実際、大した腕だったわ。あれが普通だと言うのなら、人間たちは長生きしたでしょうね」

「うん。ちゃんとルクスさんも助かったもんね」

六花は、見事な腕でルクスの手術を成功させた。

その手際の良さは、門外漢のミラには、何をしているのかわからないほどだった。

そもそも、怪我は【薬草】や【回復薬】などを使うだけ、病気になるったら薬草を飲んで寝てるだけ、というのが普通の治療のレベルだ。

一般的な医者には、経験則で多少の知識を持っているだけだし、怪しい祈祷師のような医者も多い。

【人間】の技術はそれより遥かに進んでいるのだから、それを使う六花の評判が高まるのも当然だろう。

「うーん、六花さんかあ……」

ミラが首を傾げる。

「どうかしたの?」

「うん、どこかで聞いたことがある名前なんだけど……うー、思い出せない」

もう少しで思い出せそうなのに、出てこない。

もどかしさにミラが唸る。

「有名な人だから、どこかで聞いたのではないかしら?」

「そうかなあ……?」

「きっと、きっかけがあれば思い出すわ。ところでミラ、そろそろ出かけた方がいいんじゃないの?」

「あ、そうだった」

ミュリエリアの言葉に、ミラがはっとする。

「私は六花さんの注文で行けないから、代わりに謝っておいてちょうだい。それから、またの機会を楽しみにしていると、伝えておいて」

少し残念そうにそう言うミュリエリアに、ミラは「うん」と頷いた。

MONSTER HUNTER EVOLVE
第十一話「閃光と電光」

「って、お姉ちゃんが言っていました」

「そっか、ミューリイ来られないんだ。

それにしても、急に大口の注文が入るなんて、ミューリイも災難だね」

【旧沼地】 エリアの近くで、ミラから話を聞いたベルゼラはそう言った。

位置的には沼地に存在する洞窟の上側にあたり、岩場のような場所だ。

その中で一番高い岩の上に、ミラとベルゼラの二人は並んで座っていた。

ベルゼラは、以前にミラが武器の配達をしたときに出会った【ナルガクルガ進種】の女性だ。

そのとき、ミラのことを気に入ったようで、ふらっと村に立ち寄ったり、手紙をくれたりして、ミラを妹のように可愛がってくれている。

今日は、ベルゼラの誘いでミラ、ミュリエリア、ベルゼラの三人でピクニックの予定だったのだ。

だが、六花に大量注文をされたミュリエリアは、事が命に関わることだけに、そちらを優先することにしたのだ。

「でも、お姉ちゃん生き生きとしましたよ。今までに無い注文だったみたいです」

「あー、ミュリーイって色々と考えて作るのが好きだよ。職人気質って言うのかな。」

私の雲霞も、ただ攻撃範囲の広い太刀が欲しいって愚痴から作ってくれたし。

まさか、伸びる剣なんてものが出来上るとは思わなかったけど、傍に置いていた【群蟲刃】【雲霞】を見て、ベルゼラが笑いながら言う。

「ま、来られないってならしょうがないか。また今度誘うよ」

「はい。お姉ちゃんも喜ぶと思います」

「ミラちゃんも?」

「はい?」

「ミラちゃんも喜んでくれる?」

「それは、もちろん」

ミラが答えると、ベルゼラは満足げに頷く。

「それじゃ、近いうちに誘うとしようかな」

「楽しみにしておきます」

「うん、楽しみにしててね。でも、とりあえずは先の楽しみより、今の楽しみ。お弁当食べよっか」

「あ、そうですね」

ピクニックということで、今日はお弁当持参である。

二人は、荷物の中から弁当箱を取り出す。

「残念ながら、視界はイマイチだけどね」

辺りで一番高い場所から見下ろしているが、眼下に広がる光景は、じめじめした沼地の風景だ。しかも、霧のかかっている場所もある。

一望できるのはいいが、とてもいい景色とは言えない。

「もっと綺麗な物が見えるところにすればよかったね。」

「ごめんね、ミラちゃん。気の利かなくて」

「そんなことないです。」

私、ベルお姉ちゃんと一緒にご飯が食べられるだけで嬉しいです

「よー」

しゅんとするベルゼラに、ミラは慌てて言った。

「嬉しいこと言ってくれるね、ミラちゃん。」

でもそれって、景色は悪いって意味だよな」

ベルゼラががっくりと肩を落とす。

「え、それはその……」

胸の前で手を振りながら慌てて言葉を探すミラ。

その様子を顔を伏せたままこっそりと盗み見て、ベルゼラはこっそりと笑いかみ殺した。

どうやら、落ち込んでいるのではなく、ミラの反応を見て楽しんでいるようだ。

「えーと、あ！ それなら、ベルお姉ちゃんを見えます」

「へ？」

ミラの意外な言葉に、ベルゼラは落ち込んだ振りをするのを忘れて顔を上げた。

「何で私？」

「だって、ベルお姉ちゃん綺麗だから……って、何言ってるの私」
「っ」

慌て過ぎて思わず口走ってしまったらしい。

ミラは、赤くなって頬に手を当てる。

「私、綺麗？」

と、どこかの都市伝説に出てきそうな台詞で聞くベルゼラ。

この世界にそんな伝説は無いので、ミラは素直に頷いた。

実際、ベルゼラは美人だ。

体のラインがわかりやすい【ゲリヨス装備】のせいで見事なボディラインがよくわかるし、跳ね放題の長い髪がワールドな魅力を放っている。

「綺麗かあ、そっかそっか。ミラちゃんが言うとお世辞っぽくないから照れるなあ」

「お世辞なんかじゃないですよ」

「わかってるよ。ミラちゃんはいいい子だからね」

ベルゼラがミラの頭をいい子いい子と撫でる。

ミラは、感情の動きが非常に素直だ。

つい最近まで何もかも覚えていない状態だったために、純粹なのかもしれない。

だから、彼女の言葉は聞く側の心にも素直に響くのだ。

「それじゃ、私はミラちゃんを見ながら食べようかな。」

ミラちゃんは綺麗　　じゃないけど

「え……」

「だって、ミラちゃんは『可愛い』だよ。うん」

「も、もうっ、からかわないでください！」

「あはは、ごめんごめん。それじゃ、そろそろ食べようか」

ちよつと残念そうにしたり、嬉しがつたり恥ずかしがつたりと、ころころと表情を変えるミラを堪能して、ベルゼラはようやく弁当箱を開いた。

ミラも、それに倣ってふたを開ける。

弁当箱の真ん中に仕切りがされていて、半分にはハムや野菜を挟んだサンドイッチが、もう半分にはおかずが入っている。

おかずは、トマトケチャップのついたハンバーグがメインで、それに卵焼きや野菜のサラダなどだ。

「あ、美味しそうだね」

横から覗き込んだベルゼラが言う。

そう言うベルゼラの弁当は、何と云うか、豪快だった。

弁当箱の底に野菜を敷き詰め、その上に適切切られた焼肉と薄いパンが載っている。

「それ、ミラちゃんを作ったの？」

「えーっと……ほとんどお姉ちゃんが……」

恥ずかしそうに告白するミラ。

料理の練習はしているが、まだまだ未熟なのである。

「ミューリイの料理って美味しいよねえ。ほんと、技巧派だ」

「ベルお姉ちゃんも食べたことあるんですか？」

「前に遊びに行ったときにね。あときのシチューは絶品だったな

」

と、過去を振り返るベルゼラ。

心なしか頬が緩んでいる。よほど美味しかったらしい。

「よかつたら、食べます？」

ミラが自分の弁当箱を差し出す。

「いいの？」

「はい。あ、全部食べないで下さいね」

「はい」

ベルゼラは子供みたいに返事をして、ミラの弁当箱に手を伸ばし、ひよいと卵焼きを摘み上げた。

「あ、それは……」

「あれ、ダメだった？」

「ダメと言うか、それ、私がつったんです」

目玉焼きは涙目にしてしまうミラだが、この卵液を薄く焼いて巻くタイプの卵焼きはなぜか綺麗に作れる。

得意料理、と言うよりは数少ないまともに見える料理の一つだ。

「ミラちゃんが？ ふーん」

ベルゼラは手に持った卵焼きを眺め、

「ぱくぱく」

と、食べてしまった。

もぐもぐと咀嚼して、飲み込む。

「ど、どうですか？」

ミラがベルゼラに聞くと、ベルゼラは「うーん」と難しい顔で唸り、

「微妙」

悩んだ割にはばっさりだった。

「び、微妙ですか……」

「塩入れすぎじゃないかな？ ちょっとしょっぱいよ」

そう言われて、ミラは取り出したフォークで卵焼きを口に運ぶ。

「……しょっぱいです。また失敗かぁ」

がくりと落ち込むミラ。

さっきのベルゼラと違って、本気でがっかりしている。

その様子を見ていたベルゼラは、良いことを思いついたと言わんばかりに、にやり、と笑みを浮かべた。

「ねえ、ミラちゃん。その卵焼きを美味しくする方法、教えてあげようか？」

「え、そんなのあるんですかっ？」

「あるよ。しかも、すっごく簡単」

「教えて下さいー！」

ミラが、ベルゼラの話に勢いよく食いつく。

「いいよ。他ならぬミラちゃんにそこまでお願いされちゃしかたない、教えてあげよう。」

「ミラちゃん、料理を美味しくする最大の調味料って何か知ってる？」

「えーと、空腹、ですか？」

「ぶー」

ベルゼラは腕で×印を作る。

「正解は、愛情でしたー。聞いたこと無い？」

「それは、ありますけど」

単にお腹を空かせればいい空腹と違って、愛情には形がない。

ミラは、何となく『愛情』とラベルのついた調味料のビンを鍋に振っている自分を想像して首を捻った。

「愛情って、どうやって入れたらいいんですか？」

「わかってないなあ。愛情は入れるものじゃなくて、付加するものだよ」

「付加？」

「ま、ほんとには作る相手のことを考えたら具材の大きさとか味の濃さが自ずと調整されるものって意味なんだけど、今回は手っ取り早

く、補正をかける方向で」

ベルゼラはそう言うと、ミラの手を取って、フォークで卵焼きを刺した。

そして、自分の口を開ける。

「あーん」

「えっと……」

ミラは卵焼きをベルゼラを見比べる。

「食べさせる、んですか？」

「そう。この行為によって、ミラちゃんの愛情がプラスされて美味しくなるってわけ」

「……そうなんですか？」

「そうなの。ほらほら、あーん」

「えと、それじゃあ」

ミラがベルゼラの口元に卵焼きを運ぶが、

「ダメダメ、ミラちゃんも『あーん』って言わないと」

「な、何で？」

「そういつしきたりだから。そうしないと愛情半減だよ。手を添えるとなおグッド」

「は、はあ。それじゃ、あーん」

「あーん」

ベルゼラに言われた通りにして口元に差し出された卵焼きを食べる。

「うん、美味しい」

「……本当ですかあ？」

半信半疑で聞くミラに、ベルゼラは力強く頷く。

「ほんとだよ。あ、次はハンバーグね」

「あ、はい。あーん」

と、なぜか甲斐甲斐しく食事の世話をすることになったミラ。

純粹すぎるのも考えものなのかもしれなかった。

ミラがベルゼラと弁当を食べているその頃。

工房に残っていたミュリエリアも昼食の用意をしていた。

用意した料理は三人分。

六花とアウリオの分だ。

引っ切り無しに患者が訪れて忙しい二人を見かねて、用意することにしたのだ。

「これでいいわね」

テーブルの上に最後の料理を並べると、ミュリエリアはエプロンを外して工房を出た。

相変わらずの行列を横目にテントに入る。

テントの中は白いカーテンで二つに区切られていて、手前は机と二つの椅子が置いてある簡単な処置をするための空間、奥は手術を必要とするような患者のためのベッドが置かれた空間になっている。

ミュリエリアがテントに入ると、ちょうど前の患者が出て行くところだった。

「六花さん」

「ミュリエリアか、どうした？」

六花がミュリエリアを見て聞く。

「昼食の用意ができましたから、手が空いたときに食べにきてくだ

さい」

「そうか。すまないな」

食事の用意をすることは朝に伝えてあるので、話はすぐに済んだ。

六花は、机の上から紙の束を取ってペラペラとめくる。

その紙は、アウリオがあらかじめ取っておいた問診票だ。

「しばらくは簡単な処置が続くな。

アウリオ、手伝いはいいから少し休憩を取ってこい」

「あ、はい。わかりました」

アウリオは頷いて、手に持っていた器具を机の上に置く。

「先生、僕がいない間に急患が来ても、ちゃんと助けるべき人を助けてくださいよ」

「む……」

アウリオの言葉に、六花は何か言いたそうな顔をしたが、結局何も言わずに頷いた。

「ああ。わかってる」

「それじゃあ、休憩に入らせてもらいます。行くつか、ミュリエリア」

「はい。では、失礼します」

ミュリエリアとアウリオはテントを出て、工房へと戻った。

さっそくテーブルにつく。

「どうぞ」

「うん。頂きます」

アウリオはそう言うと、早速料理に手をつけた。

「あ、美味しい」

「そうですか？　ありがとうございます」

「旅から旅だし、たまに村に留まってもいつもあの忙しさだからね。こつやってちゃんとした料理が食べられるのは久しぶりだよ」

嬉しそうに料理を食べるアウリオ。

「ええ。大変そうですね、見ていればわかります」

ミュリエリアも同意を示し、「ところで」と話を続けた。

「アウリオさんも、六花さんのようにお医者様になるんですか？」

アウリオは、あくまで六花の助手だ。

簡単な治療の手伝いはしているようだが、行列整理や聞き取りの

ような雑用をしていることが多い。

それでも一緒にいるのだから、いつかは六花の技術を身につけて医者になるのだろうかと思ったのだ。

「ううん、違うよ。僕は、ある人の治療方法を探してるんだ。

今ある方法じゃダメで、先生と一緒に旅をしていたらどこかで見つけられるかもしれないと思ってるんだ。

ただついでに行くだけじゃ迷惑だから、手伝いをさせてもらってるだけだよ」

「そうだったんですか……」

「先生と一緒に旅を始めて、もうすぐ一年になるかな。

……これだけ探しても何も見つからないと、もうダメなんじゃないかって思えてくるよ」

暗い顔で呟くアウリオ。

「アウリオさん……」

「っと、変な話になったね。ごめん」

「いえ、そんな……」

「あ、早く先生の手伝いに戻らないと」

アウリオはわざとらしく話題を変え、残っていた料理を一気に頬張る。

コップに注がれていた水で一気に流し込み、席を立った。

「ご馳走さま。美味しかったよ。それじゃ、僕はこれで」

アウリオはそう言って、慌しく工房を出て行った。

「あれ？」

昼食を終えて、岩場の上で話に花を咲かせていると、ベルゼラが空を見上げて呟いた。

「どうしたんですか？」

「ミラちゃん、あれ見て」

ベルゼラが指差した方を見ると、【旧沼地】エリアから赤い煙が空に伸びているのが見える。

「あれ、何ですか？」

「知らない？ ネコケムリ玉だよ」

【ネコケムリ玉】。【けむり玉】を改良したもので、主に【アイルー】が連絡用に使う狼煙だ。

ミラも、以前【火山】に行ったときに渡されたことがある。

「私が見たのは黄色いのでしたけど」

「連絡の内容で色が違うんだよ」

ベルゼラはそう言って立ち上がり、【群蟲刃【雲霞】】を背負う。

「赤はモンスターに襲われてるって合図。どうする？」

「もちろん、行きます！」

間髪入れず、ミラが答える。

「そう来なくっちゃね。援護頼むよ」

ベルゼラは、ミラが持ってきていた【ジェイドテンペスト】を見ながら言っ手て手を差し出す。

ミラはその手を取って立ち上がりながら、「はい」と頷いた。

.....

狼煙の上がっていたのは【旧沼地】の【エリア3】だった。

腰辺りまでの長い草が一面に生えた草原で、比較的に見通しがいい場所だ。

霧に包まれているが、それでも敵の姿を見失うほどの濃さではない。

霧の中に浮かび上がる敵の姿。

種。
ピンク色の体と、襟巻きのような形をした大きな耳が特徴の大型

怪鳥の通称で知られる【イヤンクック原種】だ。

通り名の通り、細い二本の足などの見た目は、竜よりも鳥に近い。

以前戦った【イヤンガルガ原種】と似ているが、背中や尾の棘は無く、大人しそうな【イヤンガルガ原種】と言った感じだ。

口から高熱の液体 通称、火炎液 を吐きかける攻撃以外は、見た目から想像できない攻撃は行わず、大型種の中では比較的御しやすい相手とされている。

もちろん、比較すればの話であり、小型種よりはずっと強力な相手だ。

そして、【イヤンクック】から離れた岩壁の側に、背の高い草に隠れている【アイルー原種】が数匹。

その側には、荷物を載せた荷車がある。

人や荷物を【ネコタク】と呼ばれる荷車で運ぶ、配達アイルーだ。

全員が肉球をデザインした印の入った帽子をかぶっている。

ミラも最近知ったことだが、その印はアシストキャッツ所属の印だ。

「ああ！」

と、そこまで考えたところで、ミラはようやく思い出した。

（六花さんって、メイミィちゃんが一緒に旅をしていたって人だ！）

どこかで聞いた名前だと思っていたが、初めてメイミィに会ったときに聞いた名前だった。

「どづしたの？」

「あ、何でもないです」

思い出せたのは嬉しいが、今はそんなことを考えている場合ではない。

「行きましょう。ベルお姉ちゃん」

「そつだね。急がないと、あの子がやばそつだ」

「あの子？」

ミラは、【イャンクック原種】の方に視線を戻す。

と、その側に一人の少年がいるのに気がついた。

ミラと同じか少し年下くらいに見える少年だった。

防具を身につけていて、【ランス】を手に持っている。

「はああああ！」

勇ましい声を上げて、少年が【イャンクック原種】に突っ込んでいく。

が、【イャンクック原種】の羽ばたきが起こす風圧に圧されて、地面に尻餅をついた。

【イャンクック原種】は低空を飛んで、少年から距離を取る。

少年は勢いよく起き上がり、槍を腰だめに構え、前方に突き出しながら走り出す。

突進と呼ばれる【ランス】の特徴的な攻撃だ。

上手く使くと、モンスターにダメージを与えながら反撃される前にモンスターの攻撃圏から逃げることもできるという、攻撃と移動を同時に行う技である。

重さで移動速度の落ちる【ランス】使いにはほぼ必須の技と断言していいだろう。

だが、そんな重い物を持ったまま同じ姿勢で突っ走るわけであり、長々と続けられる行動ではない。

少年も、【イャンクック原種】との距離が遠すぎたようで、攻撃する前に疲れて足を止めていた。

そこに【イャンクック原種】が突っ込んで行き、尻尾で少年を吹

っ飛ばした。

「あれは、初心者だねえ……」

ベルゼラが呟く。

よく見ると、防具は薄い金属板と編み込んだ鎖から構成される【チエーンシリーズ】と呼ばれるものだ。

簡単に素材を集めることができるが、防御力は低く、素材を持っていない狩りの初心者くらいしか着ている者はいない。

持っている【ランス】も、割と簡単に作ることのできる【パラデインランス】という金属の槍だった。

この世界で、親元を離れて独り立ちする平均年齢は十五歳前後と言われているから、独り立ちしたばかりなのかもしれない。

「あの人、うちのお客様です」

「え、そうなの？」

驚いたように聞くベルゼラ。

「はい。あの槍に見覚えがあります」

見覚えも何も、【リオレイア原種】と戦ったときにへし折られた軽量版【パラデインランス】だ。

ミュリエリアが芯に【ドラグライト鉱】を使って強度を上げて作

り直した後で、依頼者に渡されたはずだ。

「そっか、初心者だから軽くして欲しいって注文だったんだ」

ルクスが鎧をどんどん軽量化したのと同じだろう。

一概には言えないが、普通は重いよりは軽い方が扱いやすい。

「未来のお得意様を殺されちゃまずいね。急ごうか」

「はい！」

ミラは【ジエイドテンペスト】に【Lⅴ1通常弾】を装填しながら、ベルゼラは【群蟲刃【雲霞】】を引き抜きながら走り出す。

【ナルガクルガ進種】の誇る【俊脚】で、ベルゼラが先に立って【イャンクック】へ向かう。

ミラは【イャンクック原種】の頭に狙いをつけて引き金を引いた。弾倉が空になるまで連射して、【イャンクック原種】の注意を引く。

何発かが頭に当たり、ダメージは大してなさそうだが注意を引くことはできたようだ。

【イャンクック原種】が振り向く。

そこにベルゼラが切り込み、翼の下を抜けながら切りつけた。

ぱつ、と血が飛び散る。

【イャンクック原種】が回転しながら尻尾を叩きつける、が、ベルゼラはその回転方向に合わせて周囲を回り、脚を刃で薙ぎ払った。

その間に、ミラは弾倉を入れ替え、少年の下に駆け寄る。

「大丈夫！？ えっと、確か、レグル君」

「え？」

突然名前を呼ばれて、少年が驚いた顔でミラを見る。

短めの紫色の髪と深緑の瞳の少年だ。

前髪の間から、額に透明の水晶のような物があるのが見える。

【ゲリヨス進種】だ。

「あんだ、武器屋の……」

少年 レグルの方もミラの顔を覚えていたようだ。

「ミラです。大丈夫？」

「このくらい、何ともないっての」

そう言って、起き上がるレグル。

強がりを行っているのではないようで、足取りはしっかりしてい

る。

派手に吹き飛ばされていたにしてはダメージが無いようだ。

「俺、打撃には強いんだぜ」

自慢げに言うレゲル。

【対衝】^{たいしゅう}。【ゲリヨス進種】^{しんしゅ}の能力の一つだ。

原種同様にゴムのような質感の皮膚は、打撃による攻撃をある程度緩和、無力化してしまうことができる。

「あんにやる、今度こそ串に刺してやる」

【パラディンランス】を構え直す。

と、そこに、

「あー、いいよいいよ。もう終わるから」

【イャンクック原種】の相手をしていたベルゼラが声をかけてきた。

余裕の表情で、【イャンクック原種】に背を向けている。

【イャンクック原種】はというと、頭を大きく振り上げて火炎液を連続で撒き散らしていた。

直線で飛ぶ火球と違って、放物線を描くために、距離を取ってい

るベルゼラには全く届いていない。

襟巻きのようだった大きな耳がぺたりと倒れてしまっていた。

それが示すのは、瀕死に近いダメージを負ったということだ。

ミラとレグルが話している間にそこまでの傷を与えていたらしい。

【イヤンクック原種】が火炎液での攻撃を止め、ベルゼラに突進して行った。

ベルゼラの背後に迫り、嘴を振り上げる。

「ベルお姉ちゃん！」

「危ねえ！」

ミラとレグルが叫ぶ。

【ジエイドテンペスト】を【イヤンクック原種】に向けて引き金を引いた。

撃ち出された弾は、【イヤンクック原種】の頭上に飛び、そこで破裂した。

キーン！ と高い大きな音が鳴る。

ミュリエリア製特殊弾【音響弾】だ。

手投げ式のアイテムである【音爆弾】のそのまま弾丸にしたもの

で、同様の効果を持つ。

【イヤンクック原種】は大きな耳からわかる通り、非常に敏感な聴覚を持ち、至近距離での大きな音に弱い。

それだけでは終わらなかった。

ミラが【音響弾】を撃つたのと同時に、強い光が周囲を照らしていた。

レグルの額の水晶状の器官が光を放つたのだ。

【ゲリヨス進種】の二つ目の能力である【閃光】である。

聴覚と視覚に同時に攻撃を受けた【イヤンクック原種】は堪ったものではなかっただろう。

ベルゼラを襲おうと嘴を振り上げたまま、ふらふらと頭を揺らしている。

「お、ナイスアシスト」

「気をつけて下さいよ……」

暢気に言うベルゼラにミラがため息混じりに返す。

「それじゃ、そろそろ決める、よ！」

ベルゼラが大地を蹴って【イヤンクック原種】に飛びかかる。

【群蟲刃【雲霞】】を振ると、刀身が分裂し刃の鞭になった。

鞭と化した【群蟲刃【雲霞】】が【イヤンクック原種】の首に何重にも巻きつき、ベルゼラはそれを支えにして【イヤンクック原種】の肩の辺りに着地する。

そして、ぐつと足に力を溜め、肩を足場にして跳ぶ。

刃が【イヤンクック原種】の首を引き裂きながらベルゼラの後につき、首全体から血が噴出す。

ベルゼラは、地面に着地すると同時に【群蟲刃【雲霞】】を元の形状に戻して鞘に収める。

その背後で、絶命した【イヤンクック原種】が大地に倒れていった。

「あの姉ちゃん、強え……」

「相変わらず痛そうな武器だなあ……」

レグルとミラが二者二様の感想を呟いていると、ベルゼラが二人を手招きした。

「おい、何してるの二人共、さっさと剥ぎ取りするよ」

「あ、はい。今行きます。レグル君、行こう」

「お、おう」

ミラとレグルはベルゼラの元へ行き、三人は【イヤンクック原種】の体から使えそうな素材を剥ぎ取り始めた。

「ところで少年」

剥ぎ取りながらベルゼラが言う。

「俺は少年じゃない。レグルだ」

ガリガリと鱗を削りながらレグルが言い返す。

剥ぎ取りの腕も初心者だった。

「じゃあレグル君。君はまだ大型種に挑むには早すぎると思うけどね。」

自分の力量を把握してないと、死ぬよ？」

「……言われなくてもわかってるよ」

むっとした顔でレグルが言う。

そこに、【ネコタク】を引きながら配達アイルーたちが近づいてきた。

「その人を怒らないうで欲しいニヤ。」

僕らがイヤンクックに襲われてたから、助けに入ってくれたんだニヤ」

「ふーん。正義感ってわけだ」

「別に、そんなんじゃないっての。俺だって普通ならあんなでかいのと戦ったりしないぜ。」

でもその荷物、セアラんここに持ってくやつだろ」

レグルが言うと、配達アイルーが驚いた様子で頷く。

「確かにこれはセアラ様宛ての荷物だニヤ」

「やっぱりな。俺もセアラんところに行く途中だったから、付き合っ
ぜ」

「それなら、私も一緒に行こうかな」

と、ベルゼラが言う。

「何であんたがついて来るんだよ」

「あんたじゃない、ベルゼラ」

「……何でベルゼラがついて来るんだよ」

「だって、レグル君だけじゃ頼りないしね。また何かに襲われても、私がいたら安心でしょ？」

ベルゼラの言葉に、配達アイルーたちが頷く。

「確かに心強いニヤ。配達先まで護衛を頼んでいいかニヤ？」

「もちろん。ミラちゃんはどうする？」

「私も一緒に行きます」

「マジかよ……」

頷いたミラを見て、レグルが頭を抱える。

「ま、そんなわけだから、よろしく。セアラって子にも会ってみた
いしね」

「だから、なんであんなにセアラに会いたがるんだよ」

ベルゼラは悪戯っぽく笑い、

「あれ、二人きりで会いたかった？」

「んなっ」

レグルは絶句して赤くなる。

「別に違ってたの。さっさと行こうぜ」

言葉通り、レグルはさっさと歩いていく。

「急にどうしたんだろ？」

「さあね〜」

首を捻るミラの横で、ベルゼラが面白そうに笑っていた。

「お疲れ様です」

そう言いながら、ミュリエリアが六花にお茶を出す。

六花はようやく休憩に入って、遅めの昼食を終えたところだった。

「行列、いつまでもなくなりませんね。どこにこんなに患者がいたんでしょうか」

「それは仕方ない。調子が悪いけれど原因がわからないとか、もう諦めた怪我のような患者が私ならと思って通って来るんだろう」

「そう言えば、この村の人も何人か……。普段は元気そうに見えていたんですけど」

「我慢していれば日常生活は送れるというケースは少なくないからな。傍目にはわからないことも多い」

「それを治療できるのですから、六花さんは凄いですね。さすがは進古龍種の方です」

ミュリエリアが言うと、六花は苦笑いを浮かべる。

「年寄りみたいに言うのはやめてくれ、私はまだ若いつもりだ。古龍と言っても、古いのは起源だけだからな。」

それに、凄いのは私ではない。あくまでも人間の遺した技術だ」

「いえ、それを身につけている六花さんも十分凄いと思いますよ。その技術はどこで？」

今に伝わっていないから珍しい技術なのだ。

それを知るだけでも難しいだろう。

「私の友人に古い遺跡を掘り返すのが好きなのがいてな。

本人は考古学者などと言っているが、あれは単なる変わり者だと思っが……。」

私の知識はその友人に貰った本から学んだものだ」

「そうだったんですか」

誰にも教わることなく、本から独学で身につけた。

言うのは簡単だが、実際にやるのはかなり大変だっただろう。

ミュリエリアの鍛冶師の技も人間のものだが、こちらは進種も長年研究して伝えてきたものだし、ミュリエリアも基礎は父親に教わった。

そういうものを一切無しに、名医と呼ばれる技術を身につけた六花は、やはり『凄い』と言われてしかるべきだろう。

「あの、六花さん。一つ聞きたいことがあるんですけど」

「何だ？ 私に答えられることなら答えよう」

「進種の固有の力を使うときだけ容姿が変わるような事例をご存知

ですか？」

「容姿、と言うと？」

「その、髪の色が変わるような……」

「髪の色か……」

六花はしばらく考えて、

「私の知る限りでは、ラージャン進種だけだな。金獅子の名の通り、大地の絆を発動したときには、髪に金が混じるはずだ」

六花はそう言ったが、ミュリエリアもそれは知ってる。

「それでは、ナルガクルガ進種にそういうことがあるというのは？」

「いや、それは聞いたことがないな」

「そうですか……」

ミュリエリアが聞いたかったのは、ミラのことだ。

【旧火山】の村で、夜の闇を見抜いたミラの力。

あれは、間違いなく【ナルガクルガ進種】のものだった。

そのとき、確かにミラの髪は普段の白から闇色に変わっていた。

ミラはそれに気がついていなかったようだし、ミュリエリアも黙

っていたが、ずっと気になっていたのだ。

「もしもそれがあるとすれば、変種、と言うことになるだろうな」

「変種ですか？」

「ああ。原種に突然変異種としての変種がいるように、進種にも変種が存在するだろう。」

変種的能力は普通とは異なることが多いからな。それならば、十分に考えられる」

「……なるほど」

「私に言えるのはこのくらいだが、参考になったか？」

「はい、ありがとうございます」

「いや、気にするな。」

ところで、私からも一つ聞きたいのだが」

「何ですか？」

「ミユリエリアは調査もしていたな？」

最近、新しい種類の解毒薬を扱ったことはないだろうか？」

「新しい解毒薬ですか？」

「ああ、何でもいいんだが、あるのなら教えて欲しい」

「いえ、既存の解毒薬の調査はしていますけど、新しい種類はない

ですね」

「そうか……もしかして、と思ったんだがな」

残念そうに六花が言う。

「あの、それってもしかしてアウリオさんの……」

「ああ、聞いていたのか」

「少しだけですけど。誰かの病気を治す方法を探していると」

「ああ。一年ほど前だったか、私は毒に侵されたある患者の診察をした。

その毒は既存の治療法では解毒できなくな。

私もいつまでもそこに留まっているわけにも行かず、旅の途中で解毒法を見つけたら必ず立ち寄ると約束して旅に戻ったんだがな、アウリオは見つけたら少しでも早く持って帰れるようにと私について来たんだ。

昔は会う人会う人に聞いていたのだがな。最近はどうも諦めかけているようで、こうして私が代わりに聞いて回っているんだ」

ミュリエリアは、昼にアウリオから聞いた話を思い出した。

確かに、アウリオはもう見つからないかもしれないとそう言っていた。

「旅に出るほど大切な人だったのに、諦めてしまうなんて……」

「アウリオを悪く思わないでやって欲しい。それは、私のせいでも

あるんだ」

「え？ それはどういう」

そうミュリエリアが聞こうとしたとき、にわかには外が騒がしくなった。

何か言い争っているような声が聞こえる。

「どうしたのかしら？」

「行ってみよう」

「はい」

二人は席を立ち、工房から出た。

騒ぎが起こっているのは工房のすぐ隣、臨時の診療所になっているテントだった。

「すまない、通してくれ！」

人垣を掻き分けてテントの前に行くと、そこでアウリオと見知らぬ男性が言い争っていた。

男性の傍らには一人の男を乗せた【ネコタク】が止まっている。

防具が脱がされていて、上半身裸の男は、目立った外傷がないのに、口から断続的に血を吐いている。

「アウリオ、どうした？」

「先生……」

六花が声をかけると、アウリオが振り向く。

その顔にははっきりと「不味いところに来た」と書いてあった。

「あ、あんたが医者か？ 頼む！ こいつを助けてくれ！」

男性が六花にすがりつくようにして頼む。

「あいつが、この患者は治療できないって言うんだ！」

「何？ アウリオ、どういうことだ？」

「……この患者、腹部に深い裂傷を負った後に、回復薬で傷だけ塞いでるんですよ。」

内臓のどこかが傷ついていて、そこから血が逆流してるんです。こつこつという患者は、ほとんど助かりませんし、無駄ですよ。」

「アウリオ！ お前はいつから医者になった！」

怒声を上げて、六花がアウリオを睨みつける。

だが、アウリオも引き下がらない。

「先生、患者が次々に来て、もう包帯も消毒液も薬も残り少ないんですよ？」

この患者の治療をしたら、また大量に使います。

そうしたら、今ここにいる患者の分もなくなってしまっんですよ！
助かるかどうかわからない患者よりも、もっとたくさん患者を
救うべきです！」

ざわざわと、周囲にいた人たちがざわめいた。

誰も「その男を見捨てて自分を診る」などとは言わないが、心情的にはそんな感じだろう。

そこまでいなくても、薬がなくなったらどうなるんだろう、という不安は感じているはずだ。

「先生だって、わかってくれたじゃないですか!？」

「あれは、旅の途中だからやむを得ずにだ。今は状況が違う!」

「違いますよ!」

この小さな村のどこに、先生が必要とする薬があるんですか?」

「それは……」

六花が悔しげに顔を歪める。

そして、助けってくれと言った男性に向かって、

「すみません、この方は」

「待って下さい、六花さん」

六花の言葉を遮って、声をかけたのはミュリエリアだ。

「必要になる薬や包帯は、特別な材料が必要なものですか？」

「いや、製法や規格が特殊なだけで、材料自体は一般的なものだが……」

「それなら、教えて下さい」

困惑顔で答えた六花に、ミュリエリアがきっぱりと言った。

「私に医学の知識はありません。

けれど、調合ならできます。

私が、必要な物を必要なだけ揃えてみせます。

だから、だから、その人を助けて下さい」

静かに、六花とミュリエリアが見詰め合う。

そして、

「手術をする。患者を奥のベッドへ。

アウリオ！ 不足する備品をリストアップして、本と一緒にミュリエリアに渡しておけ！」

矢継ぎ早に指示を出し、六花がテントに向かう。

テントに入る手前で、一度足を止めて振り返り、

「君の腕を、信頼している」

「はい。私は、私の仕事をやり遂げます」

「ああ。私も、私の仕事をやり遂げてみせよう」

六花はそう言ってテントの中に入って行った。

ミュリエリアの側に、アウリオが近づく。

「意外だったよ」

「はい？」

「君は、もっと冷静に判断する人だと思っていた」

「私は冷静ですよ？」

「あんな賭けみたいなのを言って口を挟んだのに？」

「特殊な材料が必要だったらどうするつもりだったんだい？」

「そのときは、誰かが持っていないか探して、それでもなければ、誰かに取りに行ってもらうか、自分で取りに行きます」

「どうしてそこまで……」

「確かに、アウリオさんの言うこともわかります。

多分、そうすることが必要な場面があったということも。

でも、だからって、それを受け入れて諦めたらいけないと思っただんです。

そうして見捨ててしまったら、優しいあの子は、きっと悲しむから」

『おかしいよ、絶対!』と、ただ一人ルクスの身を案じていたミラの姿を思い描く。

ミラならきつと、諦めて見捨てるなんて選択肢を選びはしないだろう。

もっとも、その『優しい』という性格に影響を与えたのはミュリエリアの一言なのだが、彼女自身はそれに気がついていない。

「そっか。諦めない、か」

「ええ」

「……リストを作ってくるよ。あんなことを言ったんだから、必ず完成させてね」

「はい」

テントに向かって行くアウリオの後姿にミュリエリアはしっかりと頷いた。

モンスターと戦うのとは違う、ミュリエリアたちの戦いの始まりだった。

第十一話「閃光と電光」(前編)(後書き)

後編に続きます

第十一話「閃光と電光」（後編）

配達アイルー、ミラ、ベルゼラ、レグルの一行は、【旧沼地】を突っ切って【エリア】の外に出た。

足元は岩場で、見た目はミラとベルゼラがいた場所に似ている。

先には山があつて、天然の洞窟がいくつもある岩の壁が見えた。

「確かこの辺のはずだニヤ」

地図を見ながら配達アイルーが言う。

「セアラの巣ネストだろ。あそこの洞窟だぜ」

岩壁に開いた洞窟の一つを指差してレグルが言う。

洞窟の入り口には、目印のように一本の【ランス】が立てかけてあつた。

巣ネストと言うのは、文字通り、巣だ。

集合して村を作らなくても、一人、または一つの家庭で一箇所に住むことがある。

そのときの家の事を巣ネストと呼ぶのだ。

ちなみに、短期間の拠点でもそう呼ぶので、例えば六花のテント

も一種の巣だ。^{ネスト}

ぞろぞろと洞窟の前まで移動する。

「セアラー。荷物が届いてるぞー」

レグルが声をかけると、しばらくして中から一人の小柄な少女が出てきた。

おかつぱ頭の白髪の少女だ。

右側の前髪を長く伸ばしていて、右目は完全に隠れている。

露になっている左目は、鮮やかな赤色をしていた。

「……………」

いきなり無言だった。

赤い片目がミラたちを順番に見て、配達アイルーで目を留める。

「な、何かニヤ？」

「…………荷物」

「あ、そうだったニヤ」

配達アイルーたちが、【ネコタク】から荷物を下ろし始める。

何の配達を頼んだのか知らないが、凄い量だった。

「中に運んでいいかニヤ？」

「……よろしく」

「わかったニヤ。みんな、運ぶニヤ」

配達アイルーたちが、荷物を抱えて洞窟に入って行き、手ぶらで帰って来る。

それを何度か繰り返して、ようやく全ての荷物が無くなった。

「それじゃあ、確かに運んだニヤ。またよろしくだニヤ」

配達アイルーたちは、【ネコタク】を引いて帰って行った。

セアラはそれを見送るでもなく、さっさと踵を返して洞窟の中に入って行った。

後に、ミラたちがぽつんと取り残される。

「これは、完全に無視されたねえ」

「まったく、相変わらず付き合い悪いやつだぜ」

ベルゼラがぼやき、レグルはぶつぶつ言いながら洞窟に入ろうとする。

「勝手に入っていいの？」

とミラが聞く。

「いいぜ。いつものことだからな」

そう言っつて、レグルは中に入って行った。

ミラとベルゼラは、顔を見合わせてその後ろを追いかけた。

洞窟はそんなに深くなく、すぐに奥に行き当たった。

壁に沿うように大量の本が積み上げられ、その真ん中に草で作った敷物が敷いてある。

配達アイルーが運んだ荷物が敷物の手前に置かれていて、セアラはその梱包を解いていた。

「おい、セアラ」

レグルが呼びかけると、セアラが荷物から顔を上げる。

「……ナグルさん、また来たんです？」

「俺はレグルだ！」

「……そうでした？」

「そうだったの。いい加減に覚えてくれよ……」

「……興味無いこと、覚えられないです」

「……………」

一言毎にレグルがダメージを受けている気がする。

セアラはレグルから興味を失ったように視線を逸らし、後ろに立っていた二人に目を向ける。

「……………誰です？」

「えーと、私はベルゼラ。で、こっちがミラちゃん」

ベルゼラが答える。

それを聞いたセアラは、

「……………」

無言で荷解きに戻っていた。

何のために聞いたんだろうか。

「あのお」

と、めげずにベルゼラが再チャレンジする。

「……………何です？」

一応顔を上げてくれた。

「えーと、君の名前が聞きたいな」

「……私、セアラです」

そう答えて、また荷解きに戻る。

「……………」

「変わった子ですね……………」

「ねー、セアラちゃん」

ベルゼラがまだ粘る。

「……………今、忙しいんです」

「う、うん。そうみたいだね。だから私たちも手伝ってあげようか？」

「……………そう思うなら黙っていて欲しいです」

「ぐ、思わぬ強敵……………」

「無駄だぜ。そいつ、人付き合いする気がちつとも無いからな」

壁際で適当に本を弄んでいたレグルが言う。

「セアラが興味あるのは本だけなんだ」

そう言って、持っていた本をペラペラと捲る。

「セアラ」

「……何です、レダルさん」

「だからレグルだっ！」

「今のは惜しかったね」

「一画違いでしたね……」

気を取り直して、レグルがセアラに問いかける。

「セアラ。『クック先生の料理教室』、六十四ページ」

「……焼きザザミ、魚竜の肝ソース添え」

レグルの開いている本をベルゼラが覗き込む。

「凄い、合ってる」

「ええ！？ 本当ですか？」

ミラも横から覗き込む。

確かに、レグルの言ったページの料理は『焼きザザミ、魚竜の肝ソース添え』だった。

「凄い……」

「本の内容はほとんど覚えてるみたいだぜ。人の名前は覚えなないけ

どな」

「それってレグル君だけなんじゃない？
ねー、セアラちゃん、私の名前は？」

問いかけたベルゼラに、セアラは顔も上げずに一言。

「……ミラゼラさん」

「誰！？」

「セアラちゃん、混ぜってるよ……」

「ほら見る」

がっくりとうな垂れるベルゼラを見て、レグルが勝ち誇って言い放った。

……

しばらく時間が過ぎ、セアラはまだ荷物の片づけを続けていた。

驚くべきことに、大量の荷物の大半は本だった。

セアラはその本をいくつかの山に分けて積み上げていた。

よくわからないが、彼女なりの分別基準があるようだ。

「……暇だ」

敷物の上に寝転がっていたベルゼラが呟く。

「そうか？」

「そりゃ、レグル君はセアラちゃんを見てたら退屈しないだろうけど」

「な、何でだよ」

「そもそも、何で私たちまでここにいるんですって？」

適当に借りた本を読んでいたミラが不思議そうに言った。

荷物の護衛のはずが、なぜかセアラの家に居座ってしまったている。

セアラが全く相手をしてくれないために、ある意味帰るタイミングが見つからないのだ。

「よし……」

一人呟いて、ベルゼラが立ち上がる。

「ベルお姉ちゃん？ 何するつもりですか？」

「しーっ。セアラちゃんとスキンシップを取るの」

「え……」

「無理やりでも相手になってもらうよー」

ベルゼラはにやりと笑ってそう言いつつ、セアラの背後から二つそりと近づいて行く。

後二歩。

一歩。

一歩。

「……何です?」

背中に目でもついているのだろうか。

後一歩というところでセアラがぐるりと振り返った。

抱きしめようとしてもしていたのか、両手を広げた変なポーズで固まるベルゼラ。

「……何です?」

繰り返すセアラ。

ベルゼラはとりあえず両手を下ろし、

「ねえセアラちゃん、暇だからみんなで遊ばない?」

「……私、暇じゃないです」

「でも、外に出るのも気持ちいいよ?」

「……嫌です。……外、怖いですから」

「そ、そう……」

取り付く島もない態度だった。

ベルゼラはアプローチの方向を変えることにする。

「セアラちゃん、前髪長いね。ちゃんと顔が見えた方が可愛いと思うよ?」

ベルゼラはそう言って右目を隠す前髪に手を伸ばした。

「あ、それは」

とレグルが呟いたが、セアラの方が早かった。

「嫌っ!」

鋭い声とともに、青白い光が瞬いた。

「うわっ」

慌ててベルゼラが手を引く。

セアラの全身が青白く発光、いや、発電していた。

彼女は、【フルフル進種】だ。

発電機能を持つ細胞を持ち、体に直接触れるものに電撃による攻

撃をすることができる。

【キリン進種】の落雷とは異なり、大地の絆ではなく、身体由来の能力だ。

また、微弱な電流を発電して体の周辺に電場を作ること、視界が利かなくても周囲の状況を把握することができる。

ベルゼラが忍び寄っていたのを察知したのは、こちらの能力だろう。

「あ、危ないなあ……」

手を振りながらベルゼラが言う。

「何だ、痺れなかったのか」とこっそりレグルが呟く。

その反応からして、同じことをして痺れさせられたようだ。

「……触らないで下さい」

少し乱れた前髪を直しながらセアラが言った。

だが、

「やるなど言われればやりたくなるのが人の性だよねえ」

そんなことを言って、ベルゼラが再びセアラに掴みかかる。

セアラは見事な身のこなしでひょいとベルゼラの手を躲す。

「まだまだ！」

ベルゼラはしつこくセアラに手を伸ばす。

セアラはひよいひよいとベルゼラの手を避け、避けられないときは発電してベルゼラを牽制した。

「……止めて下さい」

「ベルお姉ちゃん、そんなに嫌がってるんだから、止めた方がいいですよ」

見かねたミラが止めるが、それでベルゼラの勢いを止めることはできなかった。

「ふっふっふ、勝機は見えた。」

セアラちゃんはこっちを脅かす程度の発電しかしていない」

当たり前だ。

【フルフル進種】の本気の電撃攻撃を受ければ、普通に死ぬる。

「つまり、ちょっと我慢すれば、触れる！」

そう言い放ち、ベルゼラはセアラに飛びかかった。

まさかそんな行動に出ると思っていなかったのだろう。

驚いたセアラは、発電はもちろん、身を躲すこともできなかった。

ベルゼラの手が、セアラの前髪を払い、右の目が露になる。

驚きに見開かれた目は、赤い目だった。

左目とは違い、瞳の部分だけでなく、本来は白い部分までが赤く染まっている。

それも、単なる赤ではなく、固まりかけた血のような濁った赤だ。

よく見ないとわからない程度だが、目蓋の上に爪痕のような傷があった。

恐らく、モンスターとの戦いで怪我をしたのだろう。

ベルゼラの手が離れ、前髪が自然に右目を隠す。

不気味と言ってしまっていていい、そんな目だった。

ベルゼラも、ミラも、レグルも、三人揃って絶句していた。

ベルゼラからすれば、ただ軽くふざけていただけで、こんな結果になるとは予想もしていなかったのだ。

「……………えっと、ごめん。その……………」

とりあえず謝ったベルゼラだが、言葉が続かない。

そこに、レグルが口を挟む。

「あのさっ、俺は綺麗な目だと思っぜ。真っ赤で、宝石みたいでさ」
何とかフォローしたいというレグルの気持ちはわかるが、それはあまりにも無理がありすぎた。

ぎょっとして絶句した後に綺麗だなどと言われて、一体誰がそれに納得するだろう。

セアラは、左目でレグルを睨み、

「……うそつき」

そう言うなり、ぱっと走り出して洞窟を出て行ってしまった。

「セアラ！」

叫んでレグルが追いかけてよとすると、その腕をベルゼラが掴む。

「待った。ミラちゃん、追いかけてくれる？」

「私が？」

「私とレグル君はそれぞれイメージマイナスだろうから、お願い」

「でも、私も何を言ったらいいのか……」

「大丈夫。ミラちゃんはね、思ったままに言えばいいんだよ」

「……わかりました。行ってきますー！」

ミラは大きく頷いて洞窟を飛び出して行った。

洞窟には二人が残される。

嘘つき呼ばわりされてしまったレグルは、酷く落ち込んでいた。

床に座り込んで地面を弄っている。

「ねえレグル君」

「……何だよ」

「あの子のどこを好きになったわけ？」

「うえ!？」

変な声を上げてレグルが跳び上がる。

「好きなんですよ？ 見てればわかるよ」

レグルはしばらく黙っていたが、やがて、ぼつぼつと話し始めた。

「……どこがってわけじゃないんだ。」

独り立ちして、初めて会ったのがセアラだった。

あいつ、いつもここにいるから、ちよくちよく会いに来てたんだ。セアラはいつもあんな感じで大して相手してくれないんだけど、たまには話し相手になってくれたりして、いつの間にかって感じだな」

「そっか。純愛だ」

「……何だよ、それ」

「でも、あんな見え透いた嘘は良くないよ。嘘つきって言われたし」

「元はあんたのせいだろ！ ああ……絶対嫌われたよ……」

再び地面を弄りだす。いじいじ。

「多分ミラちゃんがつれて帰ってくれるから、そうしたら正直に言うしかないよ」

「はあ」

ベルゼラの言葉に返って来た返事は、レグルの重い溜息だった。

……

ミラがセアラに追いついたのは、【旧沼地】の【エリア10】だった。

ぬかるんだ地面の、いかにも沼地らしい場所だ。

その場所で、セアラは数頭の【ゲネポス原種】と【イーオス原種】に囲まれていた。

いや、それは正確な表現ではないだろう。

その大半は既に大地に沈み、【ゲネポス原種】と【イーオス原種】が一頭ずつしか残っていない。

セアラの手には、洞窟の入り口に立てかけてあった槍、【エメラルドスピア】が握られている。

【ガノトトス原種】を素材に作られる三叉の槍で、その先端から高圧縮の水を噴出すという機構の槍だ。

異種族でありながら、【ゲネポス原種】と【イーオス原種】が呼応してセアラに襲いかかる。

眼前で【イーオス原種】が吠え立てて注意を引き、それを囿に背後から【ゲネポス原種】が迫る。

だが、電場によって索敵を行っているセアラに対して、それは無意味だ。

セアラは距離の離れている【イーオス原種】を無視して、【ゲネポス原種】に振り返る。

眼前に槍先を突き出されて、【ゲネポス原種】が思わず立ち止まる。

セアラはそれに構わず【エメラルドスピア】を突き出した。

三叉の穂先に頭を貫かれて、【ゲネポス原種】が絶命する。

その背後から【イーオス原種】が襲いかかる。

セアラは振り向き、両手で持った【ランス】で攻撃を受け止めた。

そのまま力を横に流し、サイドステップで一歩距離を取る。

盾を持たず、両手で槍を使うことで突き以外の攻撃と身軽さを得る。

通例の使い方とは異なるが、それがセアラのスタイルだ。

セアラは【エメラルドスピア】を頭上でぐるぐると回転させた。

遠心力によって、内機構から水が溢れ出る。

そして、その槍を【イーオス原種】に振り下ろした瞬間、セアラの体が青白く光った。

電流は、【エメラルドスピア】を通じて水にまで伝わる。

水を利用した電撃の槍が【イーオス原種】を打ち、強力な電流を流し込まれた【イーオス原種】は全身を痙攣させながら崩れ落ちた。

電流による攻撃を使えば、突き以外の攻撃に適していない【ランス】でも十分に武器になるということだ。

セアラの下にミラが駆け寄る。

見つけたのはいいが、何を言えいいのかは全くわからないままだった。

「……ニラさん」

意外にも、セアラの方から話しかけてきた。

名前は間違っていたが。

「ミラなんだけどな……」

一応言ってみたが、特に訂正してはくれなかった。

ミラも興味を感じない相手だということだろう。

「えっと、強いんだね。外は怖いって言ってたのに」

話題に困ったときというのは、見ればわかる事を話題にしてしまうのが人の性であるらしい。

「……怖いのが、人です。嘘つきが多いですから」

「う……」

とりあえず振ってみた話題がピンポイントだったようだ。

「……この目を見た人、たいてい驚きます。

……でも、それはいいんです。

……それって普通の反応だと思えますから。

……もっと酷い怪我をしている人もいっぱいいますから、別に気にしてないんです」

意外ついでに、セアラは話を聞かせてくれるらしい。

「……でも、結構な人が嘘を言うんです。

……『気にならない』とか、レグレさんみたいに『綺麗』って言

う人もいました」

ミラは、レグルなんだけどな、と思ったが、訂正するのは諦めることにした。

「どうして、嘘だって思うの？」

「……本当にそう思っているなら、痛ましそうな目で私を見て……言わないはずですよ。」

……気にならないものなら、見たって驚きません……違います？」

「それは、確かにそうかもだけど……」

「……そんなわかり易い嘘をつくんです。……きっと……もっとたくさん嘘をつけてます。」

だから、私……人が怖いです」

左目を見る人が、嘘をつく。

嘘だって、簡単にわかるような嘘を。

それなら、わからない嘘はどれだけついているんだろう。

そう思うと、他人を信じられない、他人が怖い。

だから、他人と関わりたくない。

だって、人は嘘つきばかりだから。

「でも、本当になの？」

「……………違ってます?」

「うん」

いつもよりも長い沈黙の後で返って来た言葉に、ミラは頷いた。

「私は、違うと思う。だって、さっきのレグル君、セアラちゃんを騙そうとは思っていなかったよ」

「…………嘘、騙すためにつくものです」

「それはそうだけど。でも、レグル君はセアラちゃんを騙して、傷つけたり、悲しませたりしようとして嘘をついたんじゃないよ。

むしろ、その反対。今までセアラちゃんに嘘をついた人も、そうだったんじゃないかな?」

「…………でも、私…………傷つきました」

「それはね、気がつかなかったただけなんだよ、セアラちゃん。傷ついているって、気がつかなかったの。

嘘をついた人は、セアラちゃんがその目のことで傷ついていると思っただけだから、励ますために嘘をついたんだよ」

施す者の善意が、受ける者にとっての善意だとは限らない。

少なくとも、セアラにとって、それは全く反対の意味だった。

でも、それでも、施した者が持っていたのは、間違いなく善意だったのだ。

「……私、わからないです。励ますためなら、嘘をついてもいいんですっ。」

「きつと、その人たちは嘘をつくことでしか励ませなかったんだよ」

「……そう、ですか」

そう言って、セアラは髪の上から右目を押さえた。

「……私の目は……綺麗だと言ってもらえないんですね」

「あ……」

全ては善意の言葉。

セアラのための、優しい嘘。

そうしなければ励ませないということとは、その嘘をひっくり返した言葉が嘘を言った人の真実になる。

いくら気にしないなんて言っても、自分の目を他人が見て不気味に思うなんてことを、気にしない女の子がいるだろうか。

「そ、そんなことないよ！」

ミラが言うと、セアラは悲しげに笑った。

「……ミルさん……それ、嘘ですか？ 本当ですか？」

「それは……」

どつ言えはいいのだろうか。

嘘も、本当も、そのどちらもセアラを傷つけてしまう。

そのとき、脳裏にベルゼラの言葉が蘇った。

『ミラちゃんはね、思ったままに言えはいいんだよ』

(私の、思ったことを)

「セアラちゃん。右の目を、見せてくれる？」

「……いいですよ」

セアラが前髪を上げて、赤い右目を晒す。

目全体が、濁った赤に染まった目。

ミラは、セアラに近づいて、その目を覗き込んだ。

「……綺麗だつて言えないよね」

ミラがそう言ったとき、セアラの体がぴくりと震えた。

「でもね」

セアラのその肩に手を置いて、ミラは続ける。

「エルトライト鉱石って知ってる？」

セアラがこくりと頷く。

「それじゃあ、見たことは？」

「……ないです」

首を横に振るセアラ。

本を読んで得た知識はあっても、実物を見たことはないらしい。

「エルトライト鉱石はね、赤の強い鉱石でね、大きい塊だと黒く見えるくらいなんだよ。」

セアラちゃんの目の色と、似てる色。

エルトライト鉱石は、私のお姉ちゃんのお仕事に必要な大事な素材なの。

色んな装備に使うから、すぐ足りなくなっって、火山に掘りに行くんだけど、出てくると嬉しいんだよね。

この色を見つけると、嬉しくなるの。綺麗じゃないかもしれないけど、私は、大好きな色だよ。

これが、私の本当」

そう言って話を終えたミラの瞳を、セアラの両の瞳が見つめる。

まるで、ミラの真意を図るかのようだった。

ミラは、少しも目を逸らさない。

セアラに話したのは、間違いなくミラの本当の気持ちだったから。

長い長い沈黙。

実際にはそう長くなかったかもしれないが、セアラの言葉を待つミラにはずいぶんと長い時間が過ぎた。

「……不思議です」

ぼつりと、セアラが言う。

「……好きって言われたのに、あんまり嬉しくないです」

「う、うめん……」

「……でも、綺麗じゃないって言われたのに、悲しくないです」

ぼつりと、沼地の水溜りに落ちた雫が波紋を広げた。

セアラの目から溢れた、綺麗な雫が落ちる。

「か、悲しくないのに何で泣くの!??」

すっかりうるたえてしまつミラ。

「……悲しくないのなら、嬉しいに決まっています」

セアラはそう言つと、目の前のミラの体に抱きついた。

震える体。

少しずつ、泣き声が大きくなっていく。

ミラは、セアラの背中に手を回して、優しく抱きしめた。

「エルトライト鉱石に反射した光ってとっても綺麗な赤色なんだよ。だから、こんな霧ばかりのところじゃなくて、もっと明るいところに行ってみよう」

背中を撫でながらそう言うと、腕の中でセアラが何度も頷いた。

……………

「あ、お帰りー」

連れ立って巢^{ネスト}に帰ったミラとセアラを出迎えたのは、ベルゼラのそんな暢気な声だった。

セアラを泣かせるような事態の原因になつたくせに、と非難の気持ちを含めた視線をミラが送ると、ベルゼラはさつと表情を切り替えてまじめな顔になった。

「セアラちゃん、さっきはごめんね。そんな事情で隠してるって思わなかったから」

「だったらどうして隠していると思ったんだ、と聞いてみたいものである。」

「…………ベルゼルさん、嘘はつかなかったから、許してあげます」

「ありがとう。でも、私、ベルゼラだからね」

「セアラちゃんに酷いことした罰です。しばらく間違われていてください、ベルゼルさん」

「そんな、ミラちゃんまで……」

さりげなくミラがベルゼラを凹ませていると、神妙な顔をしてレグルがやってくる。

「セアラ……ごめん。俺は、ただ……」

「……ミラさんに聞きました。ラグルさん、私のために嘘をついたんです？」

「あ、うん。そうなんだ。でも、俺の名前はレグル……」

「……ミラさんに免じて、許してあげます。でも……もう嘘つかないで下さい」

「お、おう！ もちろんだ！ 約束するぜ！」

頭が取れそうな勢いで頷くレグル。

そんなレグルに、セアラは、

「……それから、レグルさん」

「おう！ って、あれ？」

ちゃんと名前を呼んでもらったのが信じられないという顔をする

レグル。

「……………」ありがとう

そう言って、セアラは花が綻ぶように微笑んだ。

その微笑に、レグルの胸がときめいたのは間違いないだろう。

意味不明の言葉を叫びながら洞窟を走り回り、ベルゼラに頭を叩かれてようやく止まった。

「よかったね。でも、ようやくスタートラインって感じたと思うよ」

ベルゼラがレグルに声をかける。

レグルは、そうだな、と頷いた。

「これから頑張るよ。やっと少しは興味を持ってもらえたみたいだしな」

「そ、前向きだね。でも、ライバルは手強いと思うよ」

「ライバル？」

「あれ」

ベルゼラの示した先で、ミラとセアラが二人で話していた。

「……………」ミラさん。また……………遊びに来てくれますか？」

「もちろんだよ」

「……嬉しいです。そうしたら、一緒に外に行ってください」

「うん。綺麗な赤を見に行こうね」

とか言っつて、仲良く手を取り合っている。

「ほらね」

「ど、どついつことだよ、あれ……」

「んー、ミラちゃんには人を惹きつける魅力みたいなものがあるからね。」

彼女の純粋さがそうさせるんだろうけど、お客さんとも仲良くなるってミューリィの手紙に書いてたし」

「じゃあまさか、あのとき俺じゃなくてミラに追いかけさせたのは……」

「ミラちゃんなら丸く収めてくれるかなーと思って。まさかあそこまで懐かれるとは思わなかったけど」

「ありえないだろ……なんだそのライバル……」

がくりと肩を落とすレグル。

だが、すぐにがばっと顔を上げる。

「いや、俺だっつてちゃんと名前を呼んでもらったんだ！ 少しくら

いは特別になつたはずだ！

なあ、セアラ！」

急に名前を呼ばれたセアラはきよとんとした顔で振り向き、

「……………どうしたんです？ レグノレ」

微妙に惜しかった。

「ぶつ……………あはははははっ！ レグノレって、くくっ、やっぱり間違われてる。」

あんなに自信満々だったのに、あははっ！」

「セアラちゃん、また間違ってるよ……………」

堪えきれずにベルゼラが爆笑し、ミラが苦笑いで指摘する。

「だから俺の名前はレグルだぁーっ！！」

狭い洞窟に、レグルの叫びが響き渡った。

「う、ん……………」

作業台に突っ伏して眠っていたミュリエリアが目を覚ましたのは、既に日が落ちてからだった。

張り詰めるような緊張感の中で、初めての調合を何時間も続けていて、思った以上に疲れていたらしい。

アイテムを納品して、少し休むつもりで寝入ってしまった。

「眠ってしまったのね」

体を起こすと、肩にかけられていた毛布が床に落ちた。

「あら？」

誰がこの毛布を？　と思いつつ拾い上げていると、

「あ、お姉ちゃん。起きた？」

台所から、箸と皿を持ったミラが顔を出す。

「ミラ、帰っていたのね」

「うん。あ、お姉ちゃん、聞いたよ！」

興奮気味に駆け寄ってきて、皿を作業台の上に置く。

皿には、綺麗に巻かれた卵焼きが載っている。

「薬とか作って、患者さんを助けたんだって。

やっぱり、お姉ちゃんは凄いね！」

「患者……あ！　ミラ、あの人は？　助かったの？」

ミュリエリアが薬を届けに行ったときは、まだ手術中だった。

「あれ、お姉ちゃん知らなかったの？　ちゃんと助かったんだよ。六花さんがお姉ちゃんのおかげだって」

「そう……。よかった」

ミュリエリアが己の仕事を全うしたように、六花もやり遂げたよ
うだ。

「お疲れ様、お姉ちゃん。」

えーと、一応晩御飯の用意はしたんだけど……卵焼き」

小声で言うミラ。

何とも寂しい食卓である。

「ありがとう、ミラ。もうお腹ぺこぺこだわ」

と、ミュリエリアが言う。

「そうなんだ。それじゃあ」

ミラは、箸で卵焼きを摘む。

「お姉ちゃん、あーん」

「……どうしたの、急に？」

ミュリエリアが困惑した顔で尋ねる。

「ベルお姉ちゃんに教えてもらったの。愛情が入って美味しくなるんだって」

「ベルったら……」

適当なことをミラに吹き込んで、とミュリエリアは苦笑する。

「お姉ちゃん？」

「せっかくだものね、頂くわ」

ミラの心遣いが嬉しいから、間違いを訂正するのは後にすることにして、ミュリエリアは「あーん」と口を開けた。

NEXT>第十二話「変種の脅威 **【腐屍鳥^{ふしちやう}】** ゲリヨス！」

<簡易キャラクター紹介>

名前：レグル

年齢：16

性別：男

種族：ゲリヨス進種

能力：【閃光】 【対衝】

名前：セアラ

年齢：14

性別：女

種族：フルフル進種

能力：【発電】【索敵】

第十二話「変種の脅威 【腐屍鳥】ゲリヨス！」（前編）

ミラ、ミュリエリアがそれぞれに戦った日から一夜明け、朝。

いつもの二人にアウリオを加えた三人は朝食を囲んでいた。

工房の扉が開き、患者の様子を見に行っていた六花が入って来る。

「六花さん、あの人の具合はどうでしたか？」

ミュリエリアが聞く。

「ああ、問題は無い。回復薬を併用して治療すれば、数日で完治と言えるだろう」

「そうですか……」

「よかった。助かったんだ」

ミュリエリアとミラが胸を撫で下ろす。

「……運が良かったただけだよ」

ぼつりとアウリオが呟いた。

苦々しい表情だ。

悔しい、というのとは違う。

自分の言葉に自分も納得していない、そんな表情だった。

「僕が言ったことは間違っていない……助かったのは、ただ運が良かっただけだ」

自分自身に言い聞かせるように、アウリオが続ける。

「確かにそうかもしれませんが、けれど、運が良ければ助かるところまで辿り着けたのは六花さんが治療したからですよ」

「ミュリエリアの手伝いもな」

「それに、アウリオさんのサポートもだよな」

ミラの言葉に、三人がはっとした顔になる。

「そうだな。アウリオ、お前だって彼の命を救った一因なんだぞ」

「僕が……でも」

アウリオが何か言いかけた、そのとき、

「失礼します！ ミラ様はいらっしゃいますかっ？」

そんな声と共に、一人の少女が工房の中に転がり込んできた。

ネコミミメイドだった。

防具ではないただのメイド服を着ていて、肩まで伸ばした茶髪の上にフリルのついたカチューシャがのっけている。

「えっと、ミラは私だけど？ どちらさまですか？」

「あ、申し遅れました。私、姫様　ルティエ様付きの侍女をしているファムと言います」

「ファムさん？ ええと、それで私に何の用ですか？」

「あ、そうでした！ 姫様が大変なんです！」

何が大変なのかよくわからないが、その慌てぶりをみると、相当に大変なのがわかる。

「ルティエちゃんが！？」

と、驚いてミラが立ち上がり、

それと同時に、もう一人立ち上がっていた人物がいた。

「ルティエ様に何かあったのか！？」

「え？ ああ！」

その人物　アウリオを見たファムが目を丸くして、

「アウリオ様！？」

と、叫んだ。

MONSTER HUNTER EVOLVE
第十二話「変種の脅威 【腐屍鳥^{ふしちゆう}】ゲリヨス！」

ファムがもたらした知らせは、ルティエが毒によって倒れたというものだった。

昨日の午前中に、兵士と共に狩りに出向き、そこで毒を浴びただだと言った。

話を聞いたミラは、名医である六花に診察を頼み、結局全員で【ランゴスタ進種】の城へと向かった。

「こちらです」

部屋の扉を開いて、ファムがミラ、ミュリエリア、六花の三人を招く。

【ランゴスタ進種】の城、ルティエの部屋だ。

相変わらず一人の部屋にしては大きすぎる豪華な部屋だ。

初めて来たミュリエリアは驚いたように部屋の中を見回している。

窓はカーテンが閉じられて光量が絞られていて、中央に置かれた大きなベッドにはルティエが眠っていた。

「ルティエちゃん！」

ミラが名前を呼んでベッドの側に駆け寄る。

ルティエはその声に反応しない。

苦しそくに眉根を寄せて、荒く息を吐いている。

「どいてくれ、私が診よう」

六花がルティエのベッドに近づき、掛け布団を捲った。

一枚の布から作った簡素な衣服に包まれた体が露になる。

「これは……」

半袖の服から出ている右腕を取って六花が咳く。

ルティエの右肩から手首まで包帯が巻かれていて、血が滲んでいるのか赤く染まっていた。

六花が少し包帯を解くと、その下から現れた皮膚は毒々しい紫色に染まっていて、肉が酷く爛れていた。

「六花さん、これは一体……？」

「どうなってるんですか？」

ミュリエリアとミラが六花に聞く。

「ルーゼリアの症状と似ているが……毒を受けたのは昨日だと言っ
たな？」

「はい、昨日のお昼頃です。夜眠ってから、目を覚まさなくて……」

六花に聞かれて、ファムが説明する。

「そのときの様子は？ 変色していた範囲はどのくらいだった？」

「あ、そう言えば、最初は二の腕の辺りだけでした」

「一晩でこれだけ広がったのか……。別の種類……いや、毒性が強
化されたか？」

と、六花が難しい顔で呟く。

「治療はしたのだな？」

「はい。解毒薬をはじめとして、できる限りのことは」

「そうか……」

【解毒薬】というのは文字通り毒を解毒する薬品だ。

【回復薬】と同様に、不可解なほどの効力を持っていて、毒ならば【イーオス原種】や【ゲリヨス原種】や【リオレイア原種】などというモンスターの種類に関わらず、たちどころに解毒してしまう。

一説には、モンスターの毒は全て同じ種類と言われているが、【沼地エリア】などにある毒の沼にも有効なことからこの説は疑問視されている。

結局のところ、【人間】の技術は凄いと、いう結論に落ち着くのだった。

そんな効果のある【解毒薬】の効果がない、ということとは、その毒が【人間】の時代には無かった新しい毒の可能性が高い。

現在、女王ルーゼリアを蝕む毒も、【解毒薬】の効果のない毒だ。

何らかの関連性がありそうだった。

「……ルーゼリアの方も診てこよう。それから、彼女の他にも毒を浴びた者がいるならそちらもだ。案内を頼む」

「はい。お二人はどうなさいますか？」

六花の言葉に頷いたファムがミラとミュリエリアに聞く。

「私はルティエちゃんのところにいるよ」

「私もそうするわ」

「わかりました。では、六花様、こちらへ」

ファムが六花を連れて部屋を出て行く。

「ルティエちゃん……」

心配そうにミラが呟く。

ミュリエリアが近づき、ミラの肩にそっと手を置いた。

「六花さんもいるのだから、きっと大丈夫よ」

「……うん」

扉の開く音。

二人が振り返ると、そこにはアウリオが立っていた。

「その格好……本当に騎士だったんですね」

ミラが自分の姿と見比べながら言う。

アウリオは、王族の騎士の証である【ロイヤルナイトメイル】を着ていた。

ミラと違うのはその色で、アウリオの鎧は白色だった。

【胸装備】だけでなく、防具一式を【ロイヤルナイトシリーズ】で固めていて、肩に表が白、裏地が赤のマントをかけている。

その姿は医者の手には見えない。

正に騎士と呼ぶのに相応しい姿だった。

「本当について……疑われてたのかな、僕は」

「あ、ごめんなさい。そういう意味じゃなくて、ちょっとびっくりしてるだけです」

城までの道すがら、アウリオから話は聞いていたが、急な話でまだびんときていなかったのだ。

「それじゃ、改めて自己紹介をしておくよ。麗下の騎士、アウリオだ。よろしく」

【ランゴスタ進種】の女王ルーゼリアの騎士。

それが、アウリオの正体だった。

彼は、毒に侵されている主の治療法を探すために、六花と共に旅をしていたのだ。

「まさか、こんな形でこの場所に戻ってくるとは思わなかったな」
暗い顔でアウリオが呟く。

戻ることになるならば、それは、ルーゼリアの治療法が見つかったときだと思っていた。

それなのに、ルーゼリアの娘であるルティエまでもが毒に侵されてしまった。

最悪の形で帰ってくるようになったと言っても過言ではないだろう。

「また、奴のせいで……」

憎憎しげに表情を歪める。

「何かわかったのですか？」

「ああ。ルティエ様と一緒に狩りに出ていた兵士から話を聞いて来たんだ。戦いの様子を聞くことができたよ」

「どうだったんですか!？」

ミラが身を乗り出して聞く。

ルティエに何があったのか、気になっているのだ。

「狩りに出たルティエ様たちは、密林エリアの近くで『ゲリヨスらしきモンスター』に遭遇したらしい」

「ゲリヨスらしきモンスター？」

ミラが首を傾げる。

「見たこともないモンスターだけど、強いて言えばゲリヨスに似ているってことかな。多分、変種だったんじゃないかって」

「変種……。変種ってそんなに違うの？」

「そうね。私も実際に見たことはないけれど、話によれば原種とほとんど変わらないものから全く別種と言えるようなものまで、多種

多様らしいわ」

と、ミュリエリアが説明する。

一口に【変種】と言っても、その定義は幅広い。

【原種】と違うものは全て【変種】なのだから、当然と言えば当然だ。

倒して剥ぎ取るときになってようやく何かおかしいと気がつく程度の違いしかない個体から、全く異なる生態を手に入れた個体まで、さまざまな【変種】が存在するのだ。

前者で言えば、足の爪が一本多い【ランポス変種】であり、後者には砂漠を泳ぐ【ガノトトス変種】や、電撃を扱う【リオレウス変種】などの【変種】が確認されたことがある。

「僕が以前に戦ったゲリヨス変種の見た目はほとんど原種そのものだったよ。あの光る鶏冠が無かったけどね」

「それなら、今回のゲリヨスは別物なのかしら？」

「いや、僕はどうしてもそうは思えないんだ」

「どうしてです？ 見た目が違うのなら、別物と考えるのが自然ではないですか？」

「でも、一つ共通点があるんだよ。その兵士の話を聞いてわかったことだけど、ルティエ様はそのゲリヨスの毒液を受けてはいないんだ。

そして、麗下のときもそうだった。」

「毒を受けてないんですか？ それじゃあどうして……」

「麗下もルティエ様も、毒液ではなく、血を浴びたんだ。返り血をね。」

多分、僕が平気で麗下だけが毒に侵されたのも、そのせいだったんだ。

僕はガンランスを武器として使っていたけど、麗下は狩猟笛を使っていたから」

「あ、ルティエちゃんの武器も狩猟笛だった！」

以前城を襲った【ババコンガ】と戦ったときのことを思い出してミラが言った。

ミラのように武器を使い分ける人は珍しい。

一度【狩猟笛】を使っていたなら、ルティエの使う武器は【狩猟笛】と考えるのが自然だ。

そして、【狩猟笛】は盾を持たない武器だ。

戦いの中で敵に傷を負わせ、全く返り血を浴びないというのは難しいだろう。

「その話、興味深いな」

いつの間にか部屋の扉が開いていて、六花とファムが中に入ってくるどころだった。

「アウリオ。その話、詳しく聞かせてもらおうか」

血の話をした後、六花はルティエに一応の治療を行い、アウリオと調べることがあるからと部屋を出て行き、ミュリエリアもファミに何かを頼んで一緒に部屋を出て行った。

一人で残されたミラは、ルティエのベッドの側に運んだ椅子に座り、ルティエの顔を見ていた。

ルティエは眠ったままで、時折苦しそうに呼吸が乱れた。

「ルティエちゃん……」

相手が毒では、今ミラにできることはない。

ミラにできるのは、ただ側にいて、名前を呼ぶくらいのことだ。

そのとき、部屋の扉がノックされた。

「失礼します」

扉が開き、銀色のトレイを持ったファミが室内に入ってくる。

トレイの上にはカップが載っていて、暖かいお茶が湯気を上げていた。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

ミラはファムが差し出したカップを受け取り、口をつけた。

ほんのりとした甘みが口に広がる。

「あ、美味しい」

「蜂蜜ティーです。この城は養蜂が盛んですから」

と、ファムが説明する。

蜂型のモンスターの進種が蜂を飼っているとは、面白い話だ。

「姫様のご様子は、どうですか？」

ミラの隣に立って、ファムがルティエの顔を覗き込む。

「変わってないと思います。いいのか悪いのかわからないですけど」

「そうですか……。」

でも、ミラ様がいてくださると、姫様も安心できると思います。
ミラ様は、姫様が騎士にと望まれた方ですから」

「あの、ファムさん、普通に話してくれませんか？」

と、ミラがファムに頼む。

ファムはミラより年上、ミュリエリアと同じくらいに見える。

そんな相手に敬語を使われるのが、何だか落ち着かなかった。

「申し訳ありませんが、それはできません」

「どうしてですか？」

「騎士は騎士爵という特殊な階級で、貴族階級に当たります。

その騎士の方に敬意を払わないのは姫様の侍女として礼を欠いた行為になってしまいますから」

王女付きの侍女とは言え、ファムは階級で言えば平民だ。

騎士爵であるミラの方が上の立場なのである。

「でも……」

ミラにとって身分制度は全く身近なものではない。

そんなよくわからない物に敬意を払われるよりは普通に話しても
らいたかったのだが、

「侍女の私が礼節を欠くことは、姫様の品位を貶めてしまいますか
ら」

「そっか。それなら、仕方ないですね」

ルティエのためなら多少の居心地の悪さは我慢することにする。

「……それなら、私もルティエちゃんにはきちんと話さないといけないのかな？」

「姫様は自然に接する方が喜ばれると思いますよ」

「そうですね。ルティエちゃんは、友達ですから」

前にミラの部屋に泊まったときに、ルティエはミラが友達二号だと言っていた。

そういう関係をルティエが望んでいるのなら、それに応えたいと思う。

そもそも、ミラにとってはその方が自然な関係だ。

「友達、か」

「どうかなさいましたか？」

「ルティエちゃんは私が三人目の友達って言うていたんですけど、他の二人ってどんな人か知りませんか？」

あれから増えていないのなら、三人しかいないルティエの友達。

その一人としては、同じ立場の後二人のことが気になる。

「あ、それでしたら」

「知ってるんですか？」

「はい。二人目は、私です」

「ファムさんが二人目だったんですか」

「恐れ多いことですが、姫様はそう言っておりました」

ルティエは気を許せる相手という定義で友達をいう言葉を使っていた。

ルティエに誠実に仕えているこの侍女ならば、その役目にぴったりだろう。

「そして、最初のお一人は、アウリオ様です」

「アウリオさんが？」

不思議そうに言うミラ。

母親の騎士が友達。

どういう関係だったのだろうか。

「アウリオ様は」

と、説明しようとしたとき、扉を開けて当のアウリオが顔を出した。

「ミラ、と、ファムもここにいたんだ」

「アウリオさん？ どうしたんですか？」

「ようやくやるべきことが決まったからな」

そう言いながら、アウリオの後ろから六花が姿を見せる。

二人は部屋の中に足を進め、ルティエのベッドを挟んでミラたちの反対側に立った。

「まずは毒についてだが、ルーゼリアとルティエの毒はほぼ間違いなく同じ毒だ。

神経に影響を与える神経毒と、何と言えはいんだろつな、細胞を壊死させる腐食性の毒とでもいうべき毒を含んでいるという点で共通している。

だが、一つ大きく異なる点があつてな。ルティエの毒の方が、ルーゼリアのものよりも強力なんだ。

毒を浴びた量の問題かもしれないが、もしかすると、変種がさらに進化をしているのかもしれない」

「変種が進化……。麗下がゲリヨスに遭われてからの一年で、そんなことがありえるのですか？」

ファムが当然の疑問を口にする。

進化は通常、世代を重ねるような長い時間で行われるものだ。

それを一代、それもたった一年という時間でできるのだろうか。

「人間の残した書物にこんな記述がある。

『変種と名づけられた一部のモンスターは、通常考えられない速

度で変容し、進化する。

まるで、何者かに進化を促進させられているかのようだ』と。その書の筆者は、ランポスの変種を捕らえて高い柵の中で飼っていたところ、一月でそのランポスの前脚が翼に進化して逃げ出したと書いてある。

それを踏まえれば、毒性強化という進化をゲリヨス変種がしていたとしても、それほど不自然ではない」

「そう、ですか。では、姫様はどうなるのですか？」

進化によって強化された毒。

それは、ルティエの体にどんな影響を与えるのだろうか。

「ルティエの容態は非常に危険だといわざるを得ない。現時点で一応安定しているところを見ると、神経毒の方はすぐに命に関わるとは思わないが」

神経毒は神経による指令の伝達を麻痺させる働きを持つ。

数日に一度しか目を覚まさないというルーゼリアの容態から推測すると、特に意識の覚醒を妨げる働きがあるのだろうと六花は分析していた。

眠り続ければ栄養失調で命を落とすことも考えられるが、今すぐの危険性は無いだろう。

「問題はもう一つの腐らせる毒の方だな。

ルーゼリアの方は一年たっても足の一部に止まっているが、ルティエは一晩で腕全体に広がっている。

全身まで侵食するのにそれほど時間はかからないだろう」

「そんな……姫様……」

「早急な治療が必要だが、現状では有効な手立てが無い。治療法を見つけて出すためには、やはり毒そのものが必要となる。つまり、ゲリヨス変種を討伐するしかないということだ」

「今、兵士たち総出でゲリヨスを探させているところなんだ。見つけられ次第僕も出る。」

ミラ、君にも協力して欲しい」

アウリオがミラを見ながら言う。

ミラはすぐに頷いた。

「わかりました。お手伝いします」

「頼むね。ゲリヨスが見つかるまでは待機だけど、いつでも出られるように準備だけはしておいて」

「はい！」

ミラの返事を確認すると、六花とアウリオは部屋を出て行った。

「準備って言うても、何をすればいいんだろ？」

「装備の見直しなどなさったらいかがですか？」

ミラが首を捻っていると、ファムがそう言った。

「この城にはアイテムの販売を行っている場所もありますし、鍛冶屋も存在します。」

「ミュリエリア様もそちらにいらっしやると思いますが」

さすが、一族が丸ごと住んでいる城だ。

城そのものが村のようなものなのだろう。

「お姉ちゃん、鍛冶屋にいるんですか？」

「はい、先ほどご案内しました」

「そうですね。あの、その鍛冶屋の場所、私にも教えて下さい」

「ミュリエリアに会って、今後のことを報告しておこう。」

そう思い、ミラはミュリエリアがいるらしい鍛冶屋へと向かった。

.....

ファミに教えられた場所に向かうと、どうやら、そこは店が集まった一角のようだった。

岸壁を掘って作られた店の中に入る扉の横に、さまざま看板が出ている。

一つ一つ確認しながら歩いていくと、程なくしてミラの探していた鍛冶屋を見つけた。

「あ、ここだ。でも、お姉ちゃん何やってるんだろ?」

鍛冶屋はミュリエリアに似合う場所ではあるが、ここで鍛冶屋に行く意味がわからない。

まさか、仕事をしているわけでもないだろう。

ドアを開けて、中に入る。

岩肌がむき出しになった狭い店内に、木製のカウンターが備えてあり、さらにその奥があるようだった。

ミュリエリアどころか店員もおらず、店内は無人だった。

「すみませーん」

カウンターからミラが奥に声をかける。

すると、

「ミラ?」

と声がして、奥からミュリエリアが出てくる。

「あ、お姉ちゃん。そんなところにいたんだ」

「ええ、少し工房を貸してもらっているの。それで、どうしたの?」

「あ、うん。あのね」

ミラはミュリエリアにざっと事情を説明した。

ルティエの毒のこと。

そして、ゲリヨス変種を追うことになったこと。

話を聞いたミュリエリアは「そう………」と呟いた。

「やっぱりそうだったのね」

「やっぱり？」

「以前言ったことを覚えていないかしら？ 毒袋があれば解毒薬を作る方法も見つかるとも思えないよ」

「あ、そう言えば………」

ルティエと初めて工房で会った日に、ミュリエリアがそんなことを言っていた。

「多分そうなるのじゃないかと思っていたのよ。ミラ、こちらにいらっしやい」

ミュリエリアがミラを店の奥に誘う。

「入ってもいいの？」

「ええ。構わないわ」

ミュリエリアに続いて、ミラは店の奥に足を踏み入れた。

大きな炉が置いてあり、さまざまな武器や防具が所狭しと置かれている。

工房の作業場というのは、どこも同じようなものなのかもしれない。

「ミラ、これを」

ミュリエリアが作業台の上に置いてあった【ランス】を取ってミラに差し出す。

モンスターの素材ではなく、金属で作られているそれは、一般的な【ランス】とは違って刺突用の細い剣に近い形状をしていた。

【ヴァルハラ】と呼ばれる【ランス】に似ているが、槍（というよりも剣）には華美な装飾が施されており、微妙に異なっている。

そして、何よりも大きな差異は、盾の方にあった。

【ランス】や【ガンランス】の盾は、武器系統の中で最も大きい盾が、それにしてもかなり大きい。

縦も横も、普通の盾より一回り以上は大きい。

「ギムレーと言うランスよ。きっとミラが戦うことになると思ったから、この盾を改良していたの」

「改良？」

よく見てみると、盾の縁の部分は中央よりも薄い金属板が使われていた。

ナットとボルトで盾とくっつけてあり、急ごしらえであることをうかがわせる。

「返り血を防げるように、防御面積を広くしてあるわ。

薄い板だから見た目ほどは重くないけれど、攻撃から身を守るのには不十分な強度だから気をつけて」

何をしているのかと思ったら、武器の改良をしていたらしい。

武器の中で最高の防御性能を誇る【ランス】をさらに守りに特化させた。

この盾で体をかばいながら戦えば、返り血からも身を守れるだろう。

「助けに行つて、ミラまで毒を浴びたら本末転倒でしょう？
それでは、安心して送り出せないわ」

それ　ミラが背負っている【夜刀】【月影】を指差しながらミリエリアが言う。

【太刀】はガードのできない武器だ。

返り血を浴びてはならない戦いには、確かに不向きだった。

「そんなこと、全然考えてなかったよ……ありがとう、お姉ちゃん」

ミラはミュリエリアの手から【ギムレー】を受け取った。

「どづいたしまして。あ、それからこれも」

そう言って、ミュリエリアは作業台にもう一つ置いてあったものを手に取った。

こちらは青色の【ガンランス】だ。

同色の盾は、【ギムレー】と同じように拡張されている。

この盾はモンスターの素材で作られているので、その境界がかなり目立っていた。

「お姉ちゃん、気持ちは嬉しいけど、二つは持てないかな……」

困惑顔でミラが言う。

【ランス】と【ガンランス】を同時に使おうと思うと、腕が四本必要だ。

「それは私にもわかってるわ。こっちはアウリオさんの分よ」

「あ、アウリオさんの」

言われてみれば、アウリオは武器を持ってきていなかった。

村にいたときも持っていなかった気がする。

普段モンスターに襲われたときはどうしているのか不思議だが、

生きているのだから何とかなっているだろう。

女王の騎士だけあって、素手でも強いのかもしれない。

「これも初めて見る武器だけど、なんて言っの？」

その【ガンランス】はミラの知らない武器だった。

特徴的な深い青色は、【ナナニテスカトリ原種】という【古龍】の色だ。

【ナナニテスカトリ原種】を素材にした【ガンランス】と言えば、【ナナニハウル】とその強化系が一般的だが、この【ガンランス】はそれとは形状が異なる。

【ナナニハウル】系列は円筒状の見た目をしていて、熱量でダメージを与える高い火属性と強力な砲撃を特徴として備えている。

それに対して、この【ガンランス】は中折れ機構を持ち、突いてダメージを与えるための鋭い形状をしている。

【ナナニハウル】の系列から派生し、砲撃と属性ではなく、武器攻撃力を高める強化が施された武器なのだ。

「ヴィーンゴールヴと言うそうよ。私も初めて見たわ」

「お姉ちゃんでも初めてなんだ」

ミラが少し驚く。

ミュリエリアが知らないとなると、かなり珍しい武器だ。

誰が作ったのかわからないが、オリジナル武器の可能性が高い。

「でも、この武器どうしたの？」

改良したのはミュリエリアだが、元々の武器があったはずだ。

【ギムレー】の装飾や【ヴィーンゴールヴ】に必要な素材を考えると、かなりの貴重品だろう。

この店で買ったのだとすれば、相当な高額になるはずだった。

「それが、実はこの武器は頂き物なのよ」

「ええ！？ 貰ったの？」

驚くミラ。

「私も、最初は盾だけ作らせてもらつつもりでこの店に来ただけ
ど、店員の人に工房を貸してくれるようお願いしていたら、そこ
に通りがかった男の人がいて……」

その男性がミュリエリアに工房を貸すように店員に言ってくれて、
その後で武器まで持ってきてくれたらしい。

「麗下と姫様のためには是非使って欲しいと言われたから、ありがた
く受け取らせてもらったわ。」

できるだけの手立ては全て打っておきたかったのよ」

「そうだったんだ。いい人もいるんだね」

店員に言うことを聞かせたり、貴重そうな武器を持っていたりする人だ。

おそらく、貴族と呼ばれる人物だろう。

ミラの中の貴族は、あのいけ好かないトレナードだが、いい人もいるようだともミラは思う。

「ええ、そうね」

実際のところ、王族に肩入れすることでコネを作ろうという意図が透けて見えるし、ミュリエリアはそれに気がついてしたが、ミラの気持ちに水を差すことはないだろうと頷いた。

「それじゃあ、それをアウリオさんに届けておいてくれる？」

「うん。いいよ」

ミラは頷き、かなり苦労しながら二セットの槍を装備した。

両手に盾を持って、背中に二本の槍と元から背負っていた【太刀】を背負った、かなり無理のある格好だ。

「よっ……と。じゃあ、届けてくるね」

「気をつけて」

「うん」

武器の重量に少しふらつきながら、ミラは作業場を出る。

店内に戻ると、そこで一人の男性と鉢合わせになった。

男は、肩になぜか二丁も【ライトボウガン】をかけている。

【神ヶ島】と呼ばれる【ライトボウガン】だ。

古い遺跡から出土する、謎の機構を持つ【ライトボウガン】である。

最も威力の高い弾丸である【拡散弾】を撃つことを得意としている珍しい【ライトボウガン】だ。

「あ！ あなたは……」

「おや、君は……」

ミラと相手と同時にお互いに気づいて声を上げた。

「トレナード、公爵」

苦い顔でミラが男の名前を呼ぶ。

「今はただの一兵卒だよ。久しぶりだね、ミラ。いや、ミラ様と呼ぶべきかな？」

「……ミラでいいです。トレナードさん」

「そうかね。ではミラ、君の主が大変なことになっているようだね。いや、大変なのは君自身かな？ ゲリヨス変種の討伐に向かうぞうじゃないか」

相変わらずの心の裡をうかがわせない笑みを浮かべて、トレナードが言う。

「……どうして知ってるんですか？」

「今の私は兵士だからね。私にもゲリヨス探索の命令が出ているよ」

「それなら、探しに行ったらいいんじゃないですか？」

「もちろん行くとも。ただ、その前にやることがあったね」

「やること？」

「ミラ？ どうかしたの？」

ミラとトレナードが話していると、その声を聞きつけて、奥からミュリエリアが出てきた。

「やあ」

「あら、あなたは……。先ほどは、どうもありがとうございます」

ミュリエリアを見たトレナードが気さくに挨拶し、ミラはトレナードにお礼を言って頭を下げた。

「な、何で？」

「ミラ、さっき言った人がこの人よ。知り合いだったの?」

「えええ!?! トレナードさんが!?!」

驚いて大声を上げるミラ。

貴族だろうと思っていたが、まさかこの男だったとは。

平民に落とされたとはいえ、影響力が全くなくなるわけではないし、財産が減るわけでもない。

鍛冶屋に命じたり、武器を持ち出したりすることは今でもできるのだ。

「トレナード……そうですか、あなたが」

逆に、ミュリエリアは納得したように頷いた。

爵位を剥奪されたトレナードは、当然貴族への返り咲きを狙っているだろう。

王族に恩を売れるこの事態は、渡りに船だったはずだ。

「どういうこと? トレナードさんってルティエちゃんの敵じゃなかったの?」

そんな裏に気づかないミラはすっかり困惑してしまっている。

「利害が一致した、そういうことかしらね」

「簡単に言えばそうなるだろうね。今回の私は君の味方だよ。その証拠にほら、これも君に使ってもらおうと思っただけで持ってきたんだ」

トレナードは、二丁の【神ヶ島】をミラに差し出す。

「身を守るよりも、距離を取って戦う方がいいかと思っただけでね、持ってきたんだ」

「……………」

役に立つのはわかるし、【ランス】の方も元はトレナードのものだから同じなのだが、やはり素直に受け取る気にはなれない。

迷っているミラに、ミュリエリアが言う。

「もしも麗下とルティエちゃんがいなくなってしまうたら、トレナードさんのような貴族が権力を握ってしまうわ。それでもいいの？」

「だ、ダメに決まってるよ！」

ミラは反射的に言い返した。

「それなら、頑張っただけで姫様を助けるべきだと、私は思うがね」

ミュリエリアの言葉に便乗して、トレナードも言う。

「……………そんなこと、言われなくてもわかってるよ！」

ミラは、そう言ってトレナードの手から【神ヶ島】を乱暴に奪い取った。

「ルティエちゃんが絶対悪いことなんてさせないんだから！」

捨て台詞のように言い放って、ミラは鍛冶屋を飛び出して行った。

「おやおや、私は欠片も信用されていないようだね」

「日頃の行いのせいだと思いますよ」

と、ミュリエリアが言う。

「これは手厳しいね。しかし、私は無事に助かって欲しいと思っているよ。」

君も、それを理解してくれたから彼女を説得してくれたのではないのかな？」

「それは、ご自身のために、なのでしょう？」

鋭くミュリエリアが切り込む。

「利害の一致です。今回はミラの安全のためにあなたの味方をしただけにすぎません。」

「もしも、あの子を傷つける企みがあるのなら、それは私が絶対にさせません」

「……これは、思わぬ強敵がいたものだね。覚えておくよ」

トレナードはそう言い、鍛冶屋を出て行った。

工房を後にしたミラは、城の廊下を歩いていた。

（アウリオさん、どこにいるんだろ？）

ミュリエリアが改造した【ヴィーンゴルヴ】と【神ヶ島】をアウリオに届けなくてはならない。

だが、ミラはまだこの広大な城の構造に詳しくない。

どこに何があるかわからないから、どこにいそうかという推測もできない。

心当たりと言えば、ルティエの部屋か、ルーゼリアの部屋くらいだ。

とりあえずそこから探すことにして、ミラは今いる位置から近いルーゼリアの部屋へ向かった。

.....

「ここだった……かな？」

しばらく歩いて、ミラはルーゼリアの部屋の前にたどり着いた。

だが、前に一度ルティエの案内で訪れただけで、本当にあっつい

るのが微妙に自信がない。

(間違ってたらいけないし、ちょっと覗いてみよ)

ミラはそつと扉に近づくと、ほんの少しだけ扉を開ける。

と

「麗下……」

部屋の中から、アウリオの声が聞こえてきた。

麗下と呼ばれるのは、ルーゼリア一人なのだから、ミラの記憶は間違っていないかったらしい。

都合のいいことに、アウリオもこの部屋にいたようだ。

これで、アウリオに【ヴィーンゴールヴ】を渡すことができる。

だが、ミラは部屋の中に入ることもできず、その場で固まっていた。

それは、ルーゼリアを呼ぶアウリオの声が、あまりに暗く、苦しそうだったからだ。

「麗下……僕は、あなたを助けるために、この一年間旅を続けました。

必ず毒に打ち勝つ方法を見つけると誓い、先生と一緒に必ず助けられると信じていたんです。

でも、実際はそうじゃなかった……どう治療をすればいいのかが

わかっているのに、薬が足りなくて何もできなかったことがある。助けてと頼む人を前にして、ただ手をこまねいてみているしかできないことがあります。

今もこうして、僕はただ見ているだけしかできない。

僕は……本当にあなたを、ルティエ様を助けることが

「そこまで聞いたとき、ようやく、ミラは固まっている状態から脱出した。」

音を立てないように気をつけて扉を閉じ、大慌てで部屋の前から離れる。

あんな話を聞いて、何食わぬ顔で部屋に入って行けるほど、ミラは器用な性格はしていなかった。

「……………うう、どうしよう」

ルーゼリアの部屋からは離れてみたが、そうすると今度は行く場所がなくなってしまった。

アウリオがルーゼリアの部屋にいるのがわかっていいる以上、他の場所に行く必要もない。

かと言って、今はアウリオとは顔を合わせられない。

そんな風に悩んでいるうちに、ミラの足はいつの間にかルティエの部屋へと向かっていた。

……………

ルティエの部屋までの廊下を歩いているうちに、ミラは少しずつ落ち着きを取り戻していた。

長い廊下に感謝しなくてはならないだろう。

ルティエの部屋にたどり着き、扉を開けて部屋の中に入る。

部屋の中には、一人、六花がいた。

ベッドの横の椅子に座っていて、床には治療道具の入ったトランクが開いてある。

様子を見ていたところだったのか、ルティエの右腕に包帯を巻き直していた。

「六花さん。ルティエちゃんの様子はどうなんですか？」

ミラが声をかけると、六花は包帯を巻く手を止めて顔を上げた。

「あまり良くはない。これを見ってみろ」

そう言って、六花はルティエの手を持ち上げた。

皮膚の爛れた範囲が、手の甲にまで広がっていた。

包帯が巻かれていた範囲よりも広がったのを示すように、ベッドのシーツに茶褐色の染みができていた。

「やっぱり、酷くなってるんですね」

ミラが重い口調で呟く。

広がっていると聞いてはいたが、実際に見ることで、その事実がはっきりと突きつけられた。

「だが、今は知らせを待つしかない。もどかしいな」

「……はい」

六花も悔しそうな表情だった。

医者として、何もできないのが悔しいのだろう。

「それにしても、どうしたんだ、ミラ。その格好は」

全身に武器を担いだミラの姿を見て、六花があきれたように言う。

「あ、そうでした。これ、アウリオさんの分なんですけど……」

と言って、右手の盾を掲げて見せる。

「ああ、そういうことか。アウリオならルーゼリアのところに行くと言っていたが」

「それは知ってるんですけど……」

部屋でうつかり立ち聞きして気まぎれになったとは言えず、言葉を濁らせる。

「あの、六花さん」

「ん？ どうした？」

「アウリオさんのことを教えて欲しいんですけど……」

「アウリオのことを？」

「はい。六花さんと旅をしている間ってどんなことがあったのか聞きたくて」

苦しそうにルーゼリアに語りかけていたアウリオ。

聞こえてしまった話からすると、その原因は六花と旅をしている間にありそうだった。

一体、何がそれほどアウリオを苦しめているのか。

それを、ミラは知りたかった。

「アウリオか、そうだな……」

と、六花が話を始めようとした、そのとき、

「僕の名前が聞こえたけど、どうかした？」

部屋の中に、アウリオが入ってきた。

「アウリオか。ちょうどいい、ミラがお前の話を聞きたいらしいぞ」

「僕の話？ 何だい？」

アウリオがミラに聞く。

「それは、えーと……」

返答に窮するミラ。

正直に、旅の間に何があったのかとは聞けない。

どうしてそんな話を？ と聞かれてもしたら、盗み聞きしてしまったことまでばれてしまいそうだった。

「あ、そうだ！ アウリオさん、このガンランスとボウガンを使ってください。ゲリヨス変種と戦うために、お姉ちゃんが用意してくれました」

装備を渡して、誤魔化しを図る。

「そっか、わざわざ用意してくれたんだ。兵の武器を借りるつもりだったんだけど、こっちの方が頼りになりそうだね。助かるよ」

アウリオはミラから【ヴィーンゴールヴ】と【神ヶ島】を受け取る。

「それで、僕に聞きたい話って？」

誤魔化されてくれなかったようだ。

「私との旅の間に」

「わーわーわー！」

六花が言いかけたのを、慌てて遮る。

アウリオと六花が揃って不思議そうな目をミラに向けた。

「どうしたんだ？」

「その、自分でいいますから！」

えーと、そう、友達です！ ファムさんからルティエちゃんの最初の友達がアウリオさんだって聞いたんです。

だから、そのお話が聞きたくて」

「何だ、そうだったんだ」

と、頷くアウリオ。

六花は少し不思議そうな顔をしていたが、口には出さなかった。

「それなら二人で話しているといい。私はルーゼリアの方を見てこ
「よう」

「はい。先生、よろしくお願いします」

「ああ」

六花はトランクのふたを閉じて手に提げ、部屋を出て行った。

「それで、ルティエ様の友達についての話だったね？」

「あ、はい」

苦し紛れに言ったことだったが、これも聞きたいことではあった。アウリオは昔を思い出しながら、話を始めた。

「ルティエ様の言う『友達』って、普通の『友達』とは少し意味が違っただけど、それは知ってる？」

「はい。私も友達って言ってもらいましたから。気を許せる人、みたいな意味ですよ。」

「そうだね。実はそれ、先代の王様の言葉なんだよ」

「先代の王様ってことは、ルティエちゃんのお父さん？」

「そうなるね。」

権力を持つものには敵が多いから、心から信頼できる仲間が必要だってことを、幼いルティエ様にわかりやすく言うために『友達』って言葉を使っただと思うよ。

先代の王、ザークス様はルティエ様が幼い頃に亡くなられたから、それはルティエ様にとって数少ない父親の教えなんだ。

まあ、そのせいで友達のハードルが高くなってしまって、僕が友達になるまでは誰もいなかったんだけどね」

「そうだったんですか」

ルティエの友達が少ないのにはそんな理由もあったようだ。

「よく知ってるんですね」

「うん、僕はザークス様のファンだったから。僕たちみたいな平民のこともよく考えてくれる、強くて優しい王様だったんだ。」

僕だけじゃなくて、僕と同じくらいの世代の子供はみんなあの方に憧れていたんじゃないかな」

【ランゴスタ進種】の先王ザークス。

彼は、皆に慕われる存在だったらしい。

【旧火山】の村のルクスのようなものだろう。

「そのザークス様が亡くなられてから、僕は子供心に『ザークス様の代わりにこの城を守るんだ』って決めて、兵士になったんだ。」

そして、五年前、僕はルーゼリア様の騎士に選ばれたんだ。

でも、ルティエ様は最初は僕を認めてくれなくて、ずいぶん苦勞したなあ」

そう言って、アウリオが苦笑する。

苦勞したといいながらも、どこか楽しそうな声だった。

苦勞はあっても、楽しかったのかもしれない。

「ルティエちゃん、男の人が嫌いですから……」

「え、そうなの？」

「知らなかったんですか？」

ミラが何気なくうつった相槌に、アウリオが驚く。

その反応に、ミラも驚いた。

ルテイエは男性が嫌いだと、はっきり口にしていた。

文句も言っていたし、ミラ以上に一緒にいた時間が長かったアウリオなら当然知っていると思っていた。

「そっか。じゃあそれもあつたのかもしれないなあ」

アウリオが納得したように何度も頷く。

実際には、ルテイエが男性嫌いになったのはトレナードが台頭し始めてからで、それはアウリオが六花と旅立った後だ。

だが、残念ながらこの場にはその間違いを訂正できる人物はいなかった。

「でも、そのときはもっとはっきりした理由があつたんだよ」

「何だつたんですか？」

「うん、僕は麗下の騎士になったわけだけど……まあ、それをよく思わない人もいてね。」

そういう人たちが、僕のことを悪く言うんだ」

アウリオは元平民だ。

女王の騎士に抜擢され、貴族の階級を得たことで、恨みを買いついてもあった。

「その中で多かったのが、僕と麗下の仲を邪推するもので……まあ、男女の仲なんじゃないかって。よくある話だけどね。

ルティエ様も誰かにそんな話を吹き込まれたみたいで、最初は『麗下を誑かした悪者』みたいに思われてたから」

決闘という特殊な文化を持つ【ランゴスタ進種】にとって、主と、主が己の主張を預ける騎士は深い信頼で結ばれるものだ。

それゆえに、そのまま恋愛に発展するケースもある。

他の【進種】には、むしろそれが当たり前だと誤解されていることも多い。

麗下と呼ばれるほどの美しい女王と若い男の騎士。

悪し様に言うのに、恰好の材料だったのだろう。

「それで、どうやって認めてもらったんですか？」

「何か特別な出来事があったわけじゃないよ。ただ、精一杯誠実に接していただけだ。

でも、時間が経つうちに、ルティエ様も僕のことを認めてくれたんだ。

そして、僕を友達だと言ってくれたんだよ」

友達。

ルティエの言うそれは、心を許し、信頼を預けられる人物の意味だ。

アウリオを友達だと言うことで、母の騎士として認めたことを示したのだろう。

「そうだったんですか。それで、ルティエちゃんと友達になったんですね」

「そういふこと。」

ところで、ミラは？ 君はどうやってルティエから友達と呼ばれるようになったの？」

「私ですか？ 私は」

ミラは、アウリオにルティエに騎士に選ばれたときの話を説明した。

ルティエが、偶然密林で戦っているミラの姿を見つけて騎士にと望み、あつた日の夜には友達になっていた。

ミラの話聞き終わったアウリオは、

「驚いたな」

と言った。

「僕もファミも、それなりに長い時間をかけて友達になったのに、そんなにすぐに友達になれるなんて」

「あ……確かに、そうですね」

「何か、理由があったのかな？」

「理由……」

ルティエと始めて会ったあの日、彼女は何と言っていただろうか。

騎士にと望んだのは、トレナードと戦うために、【ランゴスタ進種】ではない人物が必要だったから。

だが、それならミラでなくてもよかった。

それが、ミラだったのは、友達になりたいと思ったから。

そして、守ってくれるかもしれないと思ったから。

あの頃のルティエは、ほとんど孤立無援の状態でトレナードと戦わなければならなかった。

友達になりたいというのは、つまり、打算などなく、心から信頼したいというルティエの願いだったのではないだろうか。

王族として、強くあろうとするルティエ。

ベッドの中で、一人で震えていたルティエ。

ミラは、そんな彼女に

「……約束したんだ」

ベッドに眠るルティエの姿を見る。

友として、騎士として、守ると約束した少女。

宣誓するよつに、ミラは言った。

「守るよ、ルティエちゃん。絶対に、助けてあげるから」

日が傾く。

ルティエの部屋には、ミラが一人。

ベッドの縁に腰かけ、緩く目を閉じてルティエの手を握っていた。

静止した絵のように、じっと佇む。

ふっ、とミラが閉じていた目を開いた。

城全体が、騒がしくなっている。

「来た」

ミラは短く呟いて立ち上がった。

ルティエの手をぎゅっと握り、そして離す。

「待っててね、ルティエちゃん」

ミラは、床に置いていた武器を装備し、部屋を飛び出した。

「ミラ！ ゲリヨスが見つかった！」

同じように装備を身につけたアウリオがちょうど走ってきたところだった。

「行こう」

「はい！」

力強く頷いて、二人は駆け出した。

廊下を抜けて、長い階段へ。

すれ違った兵士や一般の人々が、口々に二人に激励の言葉をかける。

トレナードと決闘した広場を抜けて、城の正面の巨大な門の前にとどり着く。

普段は閉じられている門が完全に開け放たれ、ファム、六花、ミユリエリアの三人が待っていた。

「ミラ様、アウリオ様。どうか、よろしくお願いします」

「必要なのは造血器官　わかりやすい部分では脊椎だ。忘れるな」

ファムと六花が一言ずつ言った後、ミュリエリアがミラに近づく。

真剣な表情で、ミュリエリアが口を開く。

「ミラ。あなたに一つ、言っておくことがあるの」

「何？ お姉ちゃん」

「もしかしたら、あなたを混乱させることになるかもしれないから、
言うかどうか迷ったのだけれど……あなたの役に立つかもしれない
から、言うことにしたの。」

「ミラ、あのね」

第十二話「変種の脅威」
【腐屍鳥】ゲリヨス！
（前編）（後書き）

後編に続きます

第十二話「変種の脅威 【腐屍鳥】ゲリヨス！」（後編）

夕暮れに染まる密林。

この辺りが、合図の狼煙の上がった場所のはずだった。

「うわ……何、この臭い……」

周囲に立ち込める凄まじい悪臭に、ミラは思わず鼻を押さえた。

肉が腐ったような、そんな臭いだ。

「ミラ、あれを」

「……何、あれ」

アウリオが示す先を見て、ミラは自分の目を疑った。

初めは、腐敗した巨大な肉の塊があるのだと思った。

だが、その肉の塊は、ゆっくりと動いていた。

よく見ると、二本の脚があり、翼があり、首があり、頭があった。

その姿を何と表現すればいいのだろうか。

太い胴などの、全体的なシルエットは【ゲリヨス原種】のものに似ているが、頭部の特徴的な発光器官は無い。

だが、その全身は腐り果て、一步踏み出すたびに全身から肉がぼとぼと滴り落ちていく。

体のあちこちから骨が覗き、見えたかと思うと垂れ下がってきた腐肉に覆い隠される。

絶え間なく肉と血を溢し、それに触れた草や木は、煙を上げながら腐り落ちた。

腐食性の猛毒、と六花が言っていたのを思い出す。

「……あれが、変種」

呆然とミラが呟く。

【原種】と【変種】の違いはわかっているつもりだったが、ここまでだとは思っていなかった。

こんなおぞましい姿の生物がいるなど、誰が想像できるだろう。

「ゲリヨス変種……。自分の毒に、自分自身が耐えられていないのか？」

進化して、強化された血液の毒に、【ゲリヨス変種】自身の体がついていっていないのだ。

血が血管を腐らせて溢れ出し、肉を溶かし、こんな姿へと変えてしまった。

「アウリオ様！」

小声で呼びかけながら、【ランゴスタ進種】の男が駆け寄ってくる。

【ゲリヨス変種】を発見して知らせてくれた兵だろう。

「あれが？」

「はい。報告にあつたのと同じ姿です。それにしても、とんでもない化け物ですね……」

「そうだね……」。

後は僕とミラでやる。君は城に報告を」

「そんな、俺も一緒に戦いますよ」

「いや、君の装備では無理だ」

兵士は、探索目的のために、身軽な軽装だった。

持っている武器も【片手剣】で、返り血が毒である【ゲリヨス変種】の相手はできないだろう。

「……わかりました。ご武運を」

兵士はそう言うと、城の方へと走って行った。

それを見送って、アウリオは肩にかけていた【神ヶ島】を構えた。

「じゃあやるよ、ミラ」

「はい」

ミラも頷いて、【神ヶ島】を構える。

【ゲリヨス変種】はまだ気がついていないのか、じっと止まったままだ。

二人の【神ヶ島】には、通常の【ボウガン】の弾の中で最も強力な弾である【LV3拡散弾】が装填されている。

手加減も様子見もなく、最初から全力だった。

「いくよ!」

「はい!」

立ち止まっている【ゲリヨス変種】を狙って、二人が発砲する。

【LV3拡散弾】が宙を駆け、【ゲリヨス変種】の体に命中し、

「何っ!?!」

アウリオが驚きの声を上げる。

命中した【LV3拡散弾】が、そのまま【ゲリヨス変種】の体に埋まってしまっていた。

【拡散弾】は、大き目の弾に小さな爆弾を複数詰め込んだ弾で、モンスターの体に当たった衝撃で内部の爆弾がばら撒かれてダメー

ジを与える弾だ。

【ゲリヨス変種】の腐った体が弾の運動エネルギーを完全に吸収してしまい、小爆弾を撒くのに必要な衝撃が与えられなかったのだ。

腐肉は【LV3拡散弾】を留めておくこともできず、肉に包まれた【LV3拡散弾】が地面に落ちる。

それでも十分な衝撃には足りず、完全に不発だった。

弾倉に残っている二発をさらに撃ち込むが、結果は変わらない。

「拡散弾じゃダメか!？」

「貫通弾を使ってみます!」

アウリオが【LV3拡散弾】を撃っている間に、弾倉を【LV1貫通弾】に入れ替えていたミラが引き金を引く。

弾は狙い通りに飛び、【ゲリヨス変種】の後頭部を直撃した。

【ゲリヨス変種】の肉を容易く貫き、【貫通弾】が反対側から抜ける。

「や、やった?」

頭を撃ち抜かれて生きていられる生物などいるとは思えない。

が、

今の攻撃でようやく気がついたのか、【ゲリヨス変種】がゆっくりと振り返る。

振り向いたときには、既に頭の傷は腐肉に覆い隠されている。

腐った眼窩に収まった眼球だけが、不気味な白さでミラたちを見る。

「ほ、本当に生き物なんですか……?」

「動いてるから……多分……」

ミラの疑問に答えるアウリオも、自信なさ気だった。

粘ついた糸を引きながら【ゲリヨス変種】が口を開き、咆哮を上げた。

地の底から響くような不気味な声が、密林に響き渡る。

ミラが残りの【L V 1貫通弾】を撃ち込むが、最初の一発と同じように、効果があるようには見えなかった。

【ゲリヨス変種】は一步一步ゆっくりとミラたちに近づいていく。

「近接戦闘で戦うしかないか」

「そうですね」

二人は、【神ヶ島】を投げ捨てて、【ギムレー】と【ヴィーンゴールヴ】を構えた。

「私が先に行きます！」

「わかった」

言葉通りミラが先行し、盾を前方に構えながら槍を突き出した。

穂先が簡単に【ゲリヨス変種】の胴体に突き刺さり、何の抵抗もなく飲み込まれていく。

普通のモンスターに刺す感覚で力を入れていたミラは、勢い余ってゲリヨスの体に突っ込みそうになり、慌てて踏みとどまった。

バックステップすると、やはり抵抗なく槍が抜ける。

引き抜いた槍を見ると、全体に赤黒い液体が付着していた。

これが、【ゲリヨス変種】の毒血液だろう。

ミラが退がった代わりにアウリオが前に出て、【ヴィーンゴールヴ】を構える。

槍を突き出すと先端が【ゲリヨス変種】の肉に埋まり、火属性の熱で、じゅう、と音を立てた。

アウリオは、その状態で柄についている引き金を引き、砲撃を放った。

【ヴィーンゴールヴ】の回転式弾倉に装填されている四発を連続で撃ち放つ。

爆風が【ゲリヨス変種】の肉と血を吹き飛ばし、二人が身を守っている盾に降り注いだ。

足元にも飛び散るが、こちらも防具に守られていて問題はない。

「これならいけるか？」

と、アウリオが言う。

砲撃を受けた【ゲリヨス変種】の腹の肉が抉れ、大きな穴が開いていた。

生きているのか死んでいるのかわからないようなモンスターだが、こうやって削っていけば倒せるかもしれない。

だが、そのとき。

二人の目の前で、信じられないことが起きた。

【ゲリヨス変種】の腹部の傷が蠢うごめき、ピンク色の新しい肉が盛り上がる。

その肉は自分の血の毒であったという間に腐ってしまうが、傷は最初のように埋まってしまっていた。

「再生しただって!？」

「これが、進化した種の手……?」

【ゲリヨス変種】が、この一年間の進化で手に入れたのは、毒の強さだけではなかった。

自分の毒に耐えられずに、腐り落ちていく身体。

自らの毒で、自滅するのも時間の問題だった。

だが、【ゲリヨス変種】は進化によってそれを克服した。

いや、それが克服と呼べるのかどうかは疑問だが、とにかく、死の手からは逃れた。

腐り落ちていく端から新しい肉を生み出し、足りなくなった部分を補う。

超高速再生能力。

これが、【ゲリヨス変種】の得た新しい能力だった。

しかしそれは、【ゲリヨス変種】にとって、新たな地獄の始まりだったのかもしれない。

腐り続ける身体。

だが、再生能力が瞬時に新しい肉体を生み出す。

腐敗と再生の無限ループ。

屍のような身体に成り果て、それでも死ぬことさえ許されない。

腐した屍の不死の鳥

腐屍鳥ふしちゆうゲリヨス。

「……こんなモンスター、殺せるはずが」

「倒せます!」

弱気になって言いかけたアウリオにミラが叫ぶように言う。

「どこかに弱点があるかもしれないし、攻撃してたら治らなくなる
かもしれません!」

まだ戦いは始まったばかりなのに、諦めないで下さい!」

「……そう、だね。まだ、やるべきことは残ってるか」

アウリオは【ゲリヨス変種】から距離を取り、【ヴィーンゴール
ヴ】を弾倉の部分で二つに折った。

空の薬莖を排出して、新しい薬莖を詰める。

【ボウガン】の装填と同じで、【ガンランス】の大きな隙となる
行動だ。

ミラが前に出てカバーするが、【ゲリヨス変種】は相変わらずゆ
っくり歩いているだけだった。

何を考えているのか、さっぱりわからない。

もしかすると、とっくに思考など失っていて、攻撃されたことに
対する単なる反射で動いているだけかもしれない。

装填を終えて、アウリオが【ヴィーンゴールヴ】を構え直す。

全く先の見えない、長い戦いの始まりだった。

「……遅いな」

器具を並べる手を止めて、六花が呟いた。

窓から見える空には、もう星が瞬いている。

「そうですね」

六花の本を見ながら、同じように器具を並べていたミュリエリアも頷いた。

二人は、ミラたちが【ゲリヨス変種】の毒のサンプルを持ち帰った後、薬を作るための準備を進めていた。

六花にとつても、こんな形での薬作りは初めてのことで、頼りになるのは【人間】時代の書物だった。

幸い、似た状況での薬作りの項目があり、二人はそれを忠実に再現していた。

わざわざ、使用するガラス器具を本の通りに作るところから始める念の入れようだ。

名医である六花と名工のミュリエリア。

ミラとアウリオが成功しても、この二人のどちらかが欠けていたら、薬作りはできなかつたかもしれない。

「大丈夫だろうか……」

「大丈夫だと思いますよ」

心配そうに呟いた六花にミュリエリアがさりりと言った。

「随分と落ち着いているんだな。あの子のことか心配ではないのか？」

「もちろん心配ですよ。一緒に暮らし始めてすぐの頃は、少しも気が休まりませんでした。

でも、最近は少し変わったんです。

私にできるだけのことをして送り出したら、後はミラなら大丈夫だと、信じて待つことにしているんです」

それでも心配なのは同じですけど、と言って小さく笑う。

「それで何かが変わるわけでもないんですけど、待つことしかできないのなら、心配しているよりも信じて応援しているほうが、ミラも喜ぶと思いますから」

「そう、か。なるほど……だが……」

六花は、頷きながらも、何かに悩んでいるそぶりを見せる。

「何か心配事があるのですか？」

「……ああ、アウリオの奴なんだがな」

「アウリオさんが、何か？」

「アウリオが、ルーゼリアを助けることを諦めかけているという話はしただろう」

「はい。昨日の話ですね」

そのときは、具体的に誰かはわからなかったが、今ならそれはルーゼリアのことだとわかる。

急な患者が来て、その話は聞けず終いだっただが。

「正確に言つと、アウリオは諦めがよくなりすぎているんだ」

「諦めがいい、ですか」

「ああ。私と旅に出たときはそうではなかったんだが、旅の間に少しずつそうなっていた。

その原因は、おそらく私だ」

「先日も、そう言っていましたね。一体、どういうことなんですか？」

「私は、旅の途中で患者に会ったなら、それがどんな怪我や病気で、も全力で治療をしていた。

アウリオも、始めはそれに賛同してくれていたんだ。

だが、旅をしているとどうしても薬や道具の調達ができないことがある。

私の必要とする道具は特殊な物がいいから、なおさらだ。

そうすると、大怪我をした患者の治療で手持ちの道具を使い切り、その後で出会った患者に対して何もできない、そんな事態に陥ってしまうんだ。

アウリオは、それを受け入れることができなかった。

助かりそうにない患者の治療で使い切って、治療すれば間違いなく助けられた相手が死んでしまうを見ているしかなかったときは特にな。

そしてあいつは、助かりそうにないなら諦めるべきだと思うようになっていった」

六花は、例え助かりそうになくても、今の患者のために全力を尽くし、後で誰かを助けられないという現実を受け入れて医者をしていった。

だが、アウリオはそれを受け入れることができなかった。

後の誰かを捨てて、助けようとした今の患者さえ助からない、必死になって救おうとして、それが徒労に終わることが受け入れられない。

だから、後の誰かのために今の助かりそうにない患者を見捨てることを選んだ。

それは、当然のことかもしれない。

アウリオが最も助けたいと望む相手であるルーゼリアは、『後の

誰か』でなければならぬからだ。

彼は、ルーゼリアが助かるかどうか分からないのではなく、治療法があれば絶対助かると信じていた。

だから、助かるはずの後の誰かの姿を、ルーゼリアに重ねてしまっていたのだ。

徒勞に終わるのが受け入れられないのは、ルーゼリアを必死に救おうとしている自分の行動を否定されるのが怖いからだだった。

「確かに、その考え方にも一理ある。数で見るとなら、そうすることは正しいのだからな。」

だから私は、何度かそのアウリオの話を受け入れてしまった。

だが恐らく、それはアウリオにとっては間違いだった」

「どういうことですか？」

「私が受け入れて、確かに多くの患者を救えた。」

そのせいで、あいつにとって、その考えが正しいものになってしまったからだ」

六花のやり方とアウリオの考え方。

この二つは、どちらが正しいと言い切ることはできない問題だ。

だが、自分の考え方で、成果を出したアウリオは、六花以上に自分の考えが正しいと思うようになった。

助からないだろう者を見捨てる。

それは、つまり、無理かもしれないことを諦めることに通じる。

だから、アウリオは諦めがよくなってしまったのだ。

そして、同時に、命を諦めることに慣れてしまった。

あれほど大切だったルーゼリアのことでさえ、ダメかもしれないと思うほどに、なってしまった。

「今は、ゲリヨスを倒せば助かるとわかっているから、諦める理由などないと思っていた。

だが、これだけの時間がかかる強敵だ。

もしも……倒すのが無理だと思ってしまったら」

「アウリオさんは……ルーゼリアさんを、見捨ててしまう」

ミュリエリアの言葉に、六花は重く頷いた。

太陽は地平線に沈み、月明かりが煌々と密林を照らしている。

時折火薬の爆ぜる爆炎があがり、岩壁に戦いの様子を影絵のように映し出した。

戦闘開始からそろそろ三時間になるだろうか。

【ゲリヨス変種】もミラとアウリオも、お互いに全くの無傷だった。

【ゲリヨス変種】はただぶつかるときの攻撃しかしない上に動きが遅く、攻撃を受ける心配が全く無い。

それに対して、【ゲリヨス変種】の方はどれだけのダメージを与えても、瞬時に回復してしまう。

首を切ろうが頭を吹き飛ばそうが、全くお構いなしという圧倒的な再生能力だった。

【ゲリヨス変種】の動きが極端に遅いため、休息を取りながら戦えるという好条件での戦いだったが、何をしても徒労にしかならない戦いは、二人の体力と気力を削り取っていた。

砲撃を撃ち終えて、アウリオが後退する。

ミラが前に出て連続で突くが、全く効果はなく、砲撃で吹き飛ばされた部分を回復されてしまった。

【ゲリヨス変種】がのっそりと前に出る。

ミラはサイドステップで軽く躲し、アウリオのいるところまで下がる。

アウリオは、【ヴィーンゴールヴ】を二つに折り、弾倉を出したところで止まっていた。

「アウリオさん？ どうしたんですか」

ミラが聞くと、アウリオはアイテムポーチをミラに見せた。

中身はほとんど空で、隅の方に一本、薬莢が残っているだけだった。

「もう、砲撃用の火薬がなくなったんだ」

【ゲリヨス変種】相手には、突きはほとんど意味を成さない。

唯一大きな損害を与えることができたのが、砲撃だった。

それがなくなってしまったということは、ダメージ元がなくなっただということだ。

「でも、まだ一つ残ってます」

ミラがそう言うが、アウリオは首を横に振る。

「これは砲撃につかうものじゃないんだ」

そして、アウリオは言った。

「もう……無理だよ。あいつは倒せない」

「な、何言ってるんですか！ あのゲリヨスを倒さないと、ルティエちゃんは助けられないんですよ!？」

ルーゼリアさんだって!」

「そんなことは言われなくてもわかってる!」

アウリオが激昂して叫んだ。

「でも、これ以上何ができるって言うんだ！

この状況が、無理だって言ってるじゃないか！」

「で、でも……っ」

「無理なことなんだよ、ミラ」

アウリオだって、諦めたいわけではないのだ。

苦しそうに、ミラに告げる。

「もう 諦めよう」

諦めるのは、努力が徒労に終わるのが怖いからだ。

だから、そうなる前にいつそ、自分で終わらせてしまおう。

努力の甲斐なく死んでいくのは受け入れられなくても、自分で見捨てた結果なら、受け入れられるから。

見捨てることになれた今なら、なおさら簡単に。

「これだけ頑張ったんだから、諦めても誰も責めたりしないよ」

そう、アウリオに言われて、ミラは、

「……そう、ですね。こんなに、頑張ったんだから」

「それでも、大丈夫だと思いますよ」

そう、ミュリエリアは言った。

「そう思うか？ アウリオが諦めずに戦えると」

「それはわかりません。私はアウリオさんのことはそれほど知っているわけではないので。

でも、ミラがいますから」

「あの子がいれば、大丈夫だと？」

「ええ。きっと何とかしてくれると、信じています」

「随分高く買っているんだな」

きっぱりと言い切ったミュリエリアに六花が言う。

ミュリエリアは、当然だとばかりに頷いた。

「あの子は、私の自慢の妹ですから」

「なるほど。それなら、私も助手を信じてみるとしよつか。あいつも、強い奴だからな」

「見捨ててしまってもですか？」

ミュリエリアが六花に聞く。

だが、ミュリエリアの顔に浮かんでいるのは微笑だ。

その顔を見て、六花もふっと笑った。

「わかって聞いているな？」

見捨てて、諦めて、その結果を受け入れられること。それも心の強さだ」

「ええ。それが、いい方向に働けば、きっと」

「こんなに、頑張ったんだから　もうちょっとだけ、頑張ってみます」

アウリオに、ミラはそう答えた。

こんなところで、諦めはしないと。

「それに、誰も責めたりしないなんてこと、ないです
だって、ここで諦めたら、きっと私が私を許せないから」

もしも皆が許してくれたって、ミラは諦めたことを忘れない。

そして、その記憶は、一生血を流し続ける傷として残るだろう。

「それは、僕も許してもらえないのかな？」

「当たり前です！」

「……そうなんだ。でも、それならどうやってあれを倒す？

この状況じゃ……」

「まだ、何か手はあるはずですよ。

戦闘能力が大きく隔てられてるわけでもなくて、ゲリヨスがちょっとしぶといただけじゃないですか。

無理だって言ってるのは、状況じゃなくてアウリオさんの方だよ！
無理か無理じゃないかなんて、そんなの自分が思うだけじゃない
ですか！」

「僕、が……？」

状況はまだ、詰んでなんていない。

限界を決めるのは、自分自身だとミラが言う。

そう言って、ミラは【ギムレー】を構えた。

たとえば、アウリオの砲撃がなくなっても、戦うことはできる。

どんなに効果がないように見えたとしても、本当に効果がないかどうかなどわからないのだ。

無意味に見えようとも、戦い続けるつもりだった。

「ミラ……君は、どうしてそんなに戦えるの？」

アウリオが聞く。

さながら、迷子になった幼子のように、答えを求めて。

どうして、諦めないのだろう。

何が、そこまでミラを戦わせる？

「理由は、たくさんあります」

ファムに頼まれたから。

ミュリエリアに信じられているから。

ミラ自身が、ルティエに死んでもらいたくないから。

トレナードのことが気に入らないから。

「でも、一番の理由は 約束したから。絶対守るって」

「約束……か。僕も、したな」

ルーゼリアに、誓った。

必ず、ルーゼリアを脅かせる毒に勝ってみせると。

命を諦めてまで命を救ったのは、そう誓った心を守るためだった

はずだ。

(ああ、困ったな)

アウリオは、心底そう思った。

「諦めるしか、ないじゃないか」

頑張ったのに、ミラは許してくれないって言うし、

無理だって思っているのは、自分だけだし、

大切な誓いだって、ある。

「諦めることを、諦めるよ」

「アウリオさん」

良かった、とミラが微笑む。

一年間の経験で身についた諦めやすさは、そう簡単に変わらない。

だから 諦めることを諦められる。

「さあ、やるうか」

諦めることを諦めたなら、やることは一つ。

この、ちょっとしぶといだけの敵を倒すだけだ。

【アイテムポーチ】に残っていた、最後の薬莢を取り出す。

「竜撃砲。これに賭けてみるよ」

竜撃砲。

その名の通り、飛竜のブレスの機構を応用した【ガンランス】最高の攻撃力を誇る攻撃である。

竜撃砲には、砲撃に使う火薬の代わりに、専用の【竜撃砲弾】を使う。

これは、火のブレスを使うモンスターに存在する【火炎袋】や【爆炎袋】などから取れる可燃性の粉塵を詰めたものだ。

【ガンランス】の内部でその粉塵と空気を混ぜ、砲撃と同じ方法で着火することによって、凄まじい炎を放つことができる。

破壊力は大きいですが、【ガンランス】を過度に熱してしまうため、連続で使用することはできない。

アウリオは、【ヴァインゴールヴ】に【竜撃砲弾】を込めて、槍を元の形状に戻す。

（竜撃砲の破壊力でも、多分足りないと思うけど……いや、無理だつて決めるのは僕自身か）

「足りなくなつて、やりようはあるさ。ミラ、弾のポーチを貸してくれる？」

「あ、はい」

ミラは不思議そうな顔でアイテムポーチをアウリオに渡した。

【神ヶ島】は戦い始めた場所に置いてきてしまったのに、何に使
うつもりなのだろう。

アウリオは、ポーチの中身を確かめて、ふたを閉めた。

「ありがとう、ミラ」

そういいながら、左手の盾を捨て、代わりに自分の分とミラの分、
二つのアイテムポーチを握り締める。

「この後は、頼むね」

「え」

最後に一言言い残して、アウリオは【ゲリヨス変種】へと駆け出
した。

右手に握った【ヴィーンゴールヴ】の槍が、音を立てて周囲の空
気を吸い始める。

【ゲリヨス変種】まで走ったアウリオは、その勢いを緩めずに、
左手を【ゲリヨス変種】の身体に突っ込んだ。

二つのアイテムポーチを体内に置き去りにして左手を抜き、【ヴ
ィーンゴールヴ】を突き刺す。

「吹き飛ばせ！！」

その叫びと、爆音が重なった。

ゼロ距離の竜撃砲。

槍から竜の炎が迸り、アイテムポーチに残っていた【LV3拡散弾】に引火する。

反動と爆風にアウリオの体が吹き飛ばされ、岩壁に当たった後、地面に落ちた。

そのまま、アウリオが起き上がる様子はない。

「アウリオさん！」

ミラはそちらに駆け出しそうになったが、寸前で思い止まった。

【ゲリヨス変種】の体が、地面に倒れたからだ。

【ゲリヨス変種】は胸の下から脚までの間の胴体がほとんど吹き飛んでいた。

「……………倒したの？」

ミラは、そう呟きながら【ゲリヨス変種】へと近づいていく。

だが

【ゲリヨス変種】は生きていた。

不気味な唸り声を上げて、ビクビクと身体を震わせている。

傷口の肉が脈打ち、ほとんど吹き飛ばされていた胴体が、瞬く間に再生されていく。

月明かりに照らされながらゆっくりと起き上がる姿は、まるで、絶望が形になったようだった。

目の前に立ち上がった【ゲリヨス変種】を見上げながら、ミラは【ギムレー】を握りなおした。

「諦めない……っ」

【ゲリヨス変種】を見上げたミラの目に、空に浮かぶ月が見えた。

【ゲリヨス変種】の胴体の一部が欠けていて、そこから向こう側が見えていたのだ。

その部分は、左右と下から盛り上がった肉にすぐに覆われてしま
う。

だが、上からの再生はなかった。

そのために、他の部位よりも再生が遅れていたのだ。

その理由は、ちらりと見えた傷口が物語っていた。

竜撃砲の炎に焼かれた一部が炭化し、その部分からは再生ができなくなっていたのだ。

「そっか。焼いたらいいんだ！ でも、どうやって……」

竜撃砲で焼き払い、【拡散弾】で吹き飛ばしたアウリオのおかげで、攻略の手がかりが見えた。

だが、それだけの火力が、この場のどこにあるだろうか。

どこにも存在しはしない。

ミラも【ガンランス】を使っていればまだやりようがあったが、【ランス】ではどうしようもない。

【ゲリヨス変種】が、腐肉の塊がミラに迫る。

『ミラ、あのね』

出発前に、ミュリエリアに言われた言葉が、脳裏に蘇った。

『あなたは、変種かもしれないわ。恐らく、ナルガクルガの』

『でも、髪の色が変わるといっ例はないようだし、あなたの力は、もっと別の何かなのかもしれないの』

『その力がどんなものだったとしても、それはきつと、あなたの力

になつてくれるわ』

(ねえ、ミラ……)

ミラは、自分に問いかけた。

(昔の私……あなたは、自分の力を知っていたの?)

答えはなかった。

聞いたくらいで記憶喪失が治るのなら、苦労はしない。

「私の力は……」

【ナルガクルガ】と聞いて思い出すのは、ベルゼラだ。

鋭く俊敏な動きを生み出す脚力、腕の【刃翼^{ブレイド}】、そして、熱量で闇を見通す瞳。

だが、今ミラが欲する力は、それではない。

今必要な力、それは、火。

竜の放つ吐息のような、火球。

そこから思い出すのは、火球を操り、空を舞う桜色の髪の少女。

「私は
」

【ゲリヨス変種】の体が、ミラを押し包み、

鈍色の鎧を　　鈍色の鎧だけを腐肉の中に取り込んだ。

その背中に、鮮やかな赤い火の粉が散る。

夜を、火の光が照らし出していた。

光源は、空。

鎧を脱ぎ捨ててインナー姿になった背に桜色の翼を広げ、同じ桜色に変わった髪をなびかせて、

天に向けて掲げた手に火球を生み出したミラが、宙に佇んでいた。

ミラを追って首をめぐらせた【ゲリヨス変種】の頭に、ミラの放った火球が着弾する。

連続で火球を放ち、顔から胸にまで火を浴びせながら、ミラが地面に降りる。

炎が消え、【ゲリヨス変種】の体が露になる。

体表が少し乾いているが、身体を焼くまでには至っていない。

火力が足りていないのだ。

もっと強力な火が必要だ。

そう、例えば、【旧火山】に生きる老いた英雄の、あらゆるもの

を焼き切る灼熱の閃光のような。

ミラが、さっと斜めに手を振る。

その刹那、光が瞬いた。

光に照らされたミラの髪は、火で焦がしたような黒髪に変わっている。

【ゲリヨス変種】の背後にあった木々が、斜めに切り裂かれて倒れていく。

そして、【ゲリヨス変種】もまた、胸を斜めに切り裂かれ、上半身が地面に落ちた。

傷口は完全に炭化し、再生の兆しは見えない。

残った下半身が地面に倒れ、手足や尻尾、頭の先のような末端からぐずぐずに溶け崩れていく。

ほんの僅かな時間が過ぎた頃には、【ゲリヨス変種】は原型を留めぬドロドロの物体になり、骨格標本のように骨だけが残されていた。

がたん、と窓の外で音がした。

ルテイエの部屋で知らせを待っていたファムは、その音を聞いて座っていた椅子から立ち上がった。

この城は岩を掘って作ってあるため、基本的に窓の外は断崖絶壁なのだが、ルテイエとルーゼリア、

それと、今は主のいない先王ザークスの部屋には小さなベランダが作ってある。

音は、どうやらそこから聞こえてきたようだった。

ファムは、窓に近づいて窓を押し開けた。

ベランダに、翼を持った一つの人影が立っていた。

が、ファムが一度瞬きをした後には、その翼は消えている。

背中に人を一人担いでいて、右手に鎧を持っている。

「ミラ、さん？」

ファムが、名前を呼びかけると、その人影　ミラがベランダに倒れた。

鎧がベランダに転がり、鎧の中から何本もの骨が転がり出てくる。

「た、大変！」

ファムは、大慌てで部屋を飛び出し、ミュージエリアと六花を呼びながら走って行った。

そして、その翌朝。

目蓋に眩しい光を感じて、ルティエの意識がゆっくりと覚醒する。

何だか、不思議とよく寝た気分だった。

ルティエの体感よりも一日長く寝ていたのだから、当然といえば当然だ。

「ルティエ、目が覚めたのですね」

傍らから、声。

目を向けると隣にベッドが運び込まれていて、上体を起こしたルーゼリアがルティエを見ていた。

「お母様！ どうしてこちらに？」

ルティエが驚いて声を上げると、ルーゼリアは唇に指を当てた。

「しい。皆さんが起きてしまいますよ」

そう言われて、ルティエは気づいた。

見慣れた自分の部屋に、沢山の人間の寝顔があった。

仲良く寄り添ってルティエのベッドに突っ伏しているミラとミュリエリア。

床に座って、ベッドを背もたれにして眠っているファム。

椅子に座ったまま眠っているのは確か、六花と言う医者だっただろうか。

そして、窓際の壁にもたれるようにして、アウリオが眠っていた。

昨夜、ミラたちが帰ってきてから本当に大変だったのだ。

アウリオは六花が手術をしなければならぬほどの怪我をしていた上に、毒をたっぷり浴びていたし、

ミラは怪我はしていなかったが、数時間の戦いの後に薬作りと看病に追われた。

六花がアウリオの手当てをしなければならなかったせいで、ミュリエリアが慣れない作業をこなす羽目になり、

そのあらゆる場所を手伝っていたファムは、昨日から眠っていないかったため、二徹だった。

そして、全てに片が付き、アウリオで効果が確認できた解毒薬をルティエとルーゼリアに投与したときには、既に夜が明けていた。

そのまま経過を見ていたのだが、いつの間にか全員眠ってしまった。

「皆さん……」

【ゲリヨス変種】の毒を受けたことは覚えている。

具体的に何があつたのかは把握できないが、ルティエとルーゼリアのために皆が力を尽くしてくれたのはよくわかった。

「本当に、ありがとうございます」

誰にも聞かえていないけれど、ルティエは、ベッドの上で頭を下げた。

N E X T > 第十三話 「 A g i r l o f a s y m m e t r y 」

< 簡易キャラクター紹介 >

名前：アウリオ

年齢：23

性別：男

種族：ランゴスタ進種

能力：【フェロモン】

名前：フアム

年齢：18

性別：女

種族：アイルー進種

能力：【技術】

名前：ルーゼリア

年齢：36

性別：女

種族：ランゴスタ進種

能力：【フェロモン】

名前：ミラ

年齢：16（仮）

性別：女

種族：変種（？）

能力：【一度見た進種の能力をコピーする（？）】

<オリジナル武器紹介>

名前：ギムレー

分類：ランス

レア度：10

属性：防御+40

威力：575

切れ味：紫

会心率：0%

強化元：ヴァルハラ

強化先：なし

世界を焼き払う炎の剣にも耐えると言われるランス。
その盾は持ち主をあらゆる攻撃から守る。

名前：ギムレー【改】

世界を焼き払う炎の剣にも耐えると言われるランス、を対ゲリヨス
変種用に改良したものだ。

若干取り回しが悪くなっているので注意が必要。

名前：ヴィーンゴールヴ

分類：ガンランス

レア度：10

属性：火300

威力：667

切れ味：白

会心率：0%

砲撃レベル：放射3

強化元：ナナフレア

強化先：なし

世界の終末を戦い抜く戦士の槍。

女神に選ばれしものだけが扱うことを許されると言ふ。

名前：ヴィーンゴールヴ【改】

世界の終末を戦い抜く戦士の槍、を対ゲリヨス変種用に改良したも
の。

砲撃のバックファイアからも身を守る優れもの。

<オリジナルモンスター紹介>

名前：ゲリヨス変種

通称：腐屍鳥ふしちよう

血液に強い毒性を持ち、その毒ゆえに全身が腐敗したゲリヨスの突然変異種。

凄まじい再生能力を持ち、不死に思えるほど。

第十二話「変種の脅威 【腐屍鳥】ゲリヨス！」（後編）（後書き）

この十二話は前半の山場でした。

物語はそろそろ中盤に。

次回からはしばらく軽い話に戻る予定です。

また、金剛石先生とのコラボ企画に参加させていただくことになりました。

先生の小説は、魅力的なキャラクターと驚きのストーリー展開が楽しい作品なので、もしも知らない方はこの機会に読んでみてはどうでしょう。

私も、企画用に特別編を書きますので、次回かその次辺りに挟もうと思います。

特別編「CROSS ROAD」(前書き)

金剛石先生の作品【CROSSING OF DESTINY】と
のコラボ企画小説です。

今回は少し不思議なお話です。

特別編「CROSS ROAD」

「はっ、はっ、はっ」

突然だが、ミラは走っていた。

場所は【旧火山】と【砂漠】とのちょうど中間辺り。

岩がごろごろと転がる大地。

切り立った崖が両端を挟む崖のような地形だ。

さしずめ【峡谷】とでもいうべきだろうか。

強い風が吹き荒れ、【飛竜】にとっても厳しい環境である。

かつては【峡谷】を生活圏にしていた【飛竜】がいたのだが、【人間】の乱獲によって絶滅してしまっている。

今は強風の影響で、生半可なモンスターはこの地には近づくことも無く、割と安全な場所である。

【ランゴスタ進種】の城がある岩壁の上がちょうど【峡谷】の崖の上に繋がっていて、ミラはそこを通過して散歩に出かけていた。

軽い散歩のつもりだったのだが

視界の端に赤い光が映る。

ミラは咄嗟に走る軌道を変え、その真横に火球が着弾した。

着弾の風圧から腕で顔を庇う。

腕をのけると、上空に羽ばたく巨軀が見える。

赤茶色の鱗に覆われた体。

以前に戦った【リオレイア原種】の雄性体である【リオレウス原種】だ。

似たような攻撃手段を持つが、【リオレイア原種】が陸の女王と呼ばれるのに対して、【リオレウス原種】は空の王。

通り名の示す通り、空中からの攻撃を得意とする【飛竜】だ。

生半可なモンスターはいないはずなのだが、いたということはこの【リオレウス原種】は生半可な個体ではないということだ。

運悪くそんな【リオレウス原種】に出遭ってしまったミラはと言うと、武器も防具も持っていない。

防具はミラが【ゲリヨス変種】の骨を運んだときに血液をたっぷりと吸っていたため、六花に使用不能を宣告され、今は布製の服を着ているだけだし、少し散歩をするだけのつもりで出てきたために、武器も持ってきてはいなかった。

剥ぎ取り用のナイフはあるが、それ一本で相手をできるほど飛竜は弱くはない。

【アイテムポーチ】は持ってきているが、こちらも特に実戦的なアイテムは入っていないかった。

そんな状況で何ができるかと言うと、逃げるしかない。

そういう理由でミラは必死で走っていたのだ。

【リオレウス原種】が空中で羽ばたいて滞空し、ミラに狙いを定める。

短く吼え、ミラを目がけて急降下した。

猛毒を備えた後ろ脚の爪が鈍く光る。

防具もなしにそんな攻撃を受けたらただではすまない。

ミラは爪から逃れようとして後ろに飛び退く。

【リオレウス原種】の爪がミラの鼻先を掠めて空中へと戻っていく。

だが

「え………？」

下がった先には、地面が無かった。

足場を失ったミラの体が、崖の上から真っ逆さまに転落する。

逆さまになった視界に太陽の輝きが見える。

落下する身体が、不意に何か薄い膜のようなものを突き抜けた、そんな感覚がした。

伸ばした手は、何にも届くことはなく。

急速に遠くなっていく空に、何か巨大な影を見た気がした。

MONSTER HUNTER EVOLVE
特別編「CROSS ROAD」

『気がついたようですね。大丈夫ですか？』

目を開くと、目の前に巨大な顔があった。

鋭い牙ののぞく口、頭に沿って伸びる一本角。

黒緑色の鱗に覆われた体は鉄にも似た鈍い輝きを宿し、首周りから背中にかけて鬣のように若草色の体毛が生えている。

飛竜だ。

「ひゃあああぁっ！」

ミラは思わず悲鳴を上げて、ずりずりと後ろに下がった。

いきなりそんな顔が目の前であれば、誰だって驚く。

少し距離を離れたことで、飛竜の全身が目に入った。

左右の翼から鞭のように長い鉤爪を伸ばし、尾の左右に副尾とでも呼ぶべき少し短い尾を持っている。

ミラは、そんな飛竜を見たことも聞いたこともなかった。

(この竜も、変種?)

進化の過程で突然変異を起こした新しい種、変種だろうかと思はる。ミラは思う。

見たことがあるうがなかるうが、野生のモンスターは敵だ。

起き上がって身構える。

武器も防具もないが、隙を見て逃げるくらいは

だが、飛竜の反応はどうも妙な感じだった。

人とは顔の作りが違うからわかりにくいのだが、心なしかしょんぼりしているような……。

何となく情けない顔で、低く唸る。

『わたくしはそんなに驚かれるような顔をしているのでしょうか……』

「えっ!？」

ミラは驚いて目の前の飛竜をまじまじと見つめた。

目の前にいる飛竜が喋ったような気がしたのだ。

周りを見回してみるが、他に人影は見当たらない。

「あなたが、喋ったんですか……?」

まさか、と思いつつも問いかけると、

『っ! あなたは、わたくしの言葉がわかるんですか?』

飛竜の方も、驚いたように言葉を返してきた。

やはり、この飛竜の言っている言葉がわかる。

耳に届く音は人語ではなく、鳴き声なのだが、なぜかその意味がわかるのだ。

理由はわからないが、ミラの脳内に再生される飛竜の声は若い男性の声だった。

ミラの言葉に返事をしたという事は、どうやらこの飛竜もミラの言葉を理解しているらしい。

「は、はい。やっぱり、あなたが喋っているんですね？」

『ええ、そうです』

そう言っつて、巨大な顔を上下させる飛竜。

頷いているらしいが、目の前でやられるとかなりの迫力だった。

ミラは、思わずもう一步後ろに下がる。

すると、それを勘違いしたらしく、飛竜は慌てて、

『あなたを食べたりはしませんからっ』

と言った。

ブンブンと首を振る仕草が、妙にコミカルに見えて、ミラはくすりりと笑った。

『あ、今、笑いましたね！ わたくしを慌てさせて内心でほくそ笑んでいるんですね!?!』

「い、いえ。そんなことないですよ」

とは言うものの、この飛竜の仕草も言葉も、今までのモンスターのイメージとのギャップが凄い。

必死になられるほどそのギャップが引き立ち、ミラはくつくつと笑い声を立てた。

『また笑ってるじゃないですか！ わたくしが女性に手を上げないからって調子に乗ってますね！』

「女性には手を上げない……？」

何か物凄く意外な言葉を聞いた気がして、ミラは聞き返した。

飛竜は「ケイがわたくしと初めてあったときもこんな気持ちだったのでしょうか」などと呟いていたが、ミラに聞かれると「そうです」と頷いた。

『私は騎士道を重んじる、平和主義者パシフィストですから。力を使うのは必要
なときだけです。

女性には手を出さないのも、そのポリシーの一つです』

「そ、そうなんですか。あの、もしかして、他のモンスターの方も
そうなんですか？」

『いいえ、わたくしは仲間にもよく変わり者だと言われていました
から』

「そうですか。でも、なんだか格好いいですね」

格好いいと言ったのは、ポリシーを差してのことではない。

心に決めた決意を貫いて生きる、一本筋の通ったその生き様が、
そう見えるのだ。

『そうですか？ ありがとうございます』

表情がわかりにくいのが、嬉しそうにその飛竜が答える。

二人（二匹？）の間にほのぼのした空気が流れ、

そこでやっとミラは大事なことを思い出した。

「そう言えば私、リオレウスに追いかけれ崖から落っこちたよう
な……………」

『ええ、落ちてましたよ』

「じゃあ、あなたが助けてくれたんですか？ ええと……………」

『あ、アトラスです。わたくしの名前は』

「アトラスさんですか。私はミラと言います」

ようやく自己紹介を交わした二人。

ミラはアトラスに向かって頭を下げる。

「助けてくれて、ありがとうございます」

『……………！』

アトラスは無言。

だが、驚いたような気配が伝わってくる。

『……………驚きました』

言葉でも伝わってきた。

「どうかしたんですか？」

『いえ、わたくしは飛竜モンスターです。

それなのに、わたくしの言葉を信じて、しかもお礼を言っていた
だけとは』

「何言ってるんですか。私たちは仲間じゃないですか」

『仲間！ そんな言葉を言ってもらえるなんて……っ』

何か感極まっているアトラス。

ミラが仲間と言ったのは、ミラが進種 飛竜が長い時間で進化
した種 だから飛竜とも近いという意味で、アトラスの感激は的
を外しているのだが。

『それにしても、あれはびっくりしました。食べ物を探していたら、
人が降って来るんですから』

アトラスがそう言ったとき、「ぎゅるるる」と音が響いた。

発信源はアトラスのお腹だ。

『お腹減りました……』

しみじみとアトラスが言う。

『……ご馳走が食べたいです』

「ご馳走……」

微妙に顔を引きつらせたミラがさりげなくアトラスから距離を取る。

『いえ、ですから人は食べませんと』

「そ、そうでしたね……あははは……。

あっ、そうだ！」

乾いた笑いを漏らしたミラが、思い出したように腰に巻いたアイテムポーチに手を伸ばした。

「ごそこそと中を探り、二つの包みを取り出す。

「私のお弁当ですけど、食べますか？」

『いいんですか？』

「はい。助けてもらったお礼ですから」

『そうですか？ では、遠慮なく』

アトラスの身体に対して明らかに少なそうなのだが、それでもとりあえずお腹に入れたらしい。

どれだけお腹が減っていたのだろう。

ミラが包みを開く。

一つ目の包みには、適当な長さに切られたバゲット。

そして、もう一つの包みの中からは、

『生肉ですか？』

「急に出てきたから、料理をする時間がなくなつて。お肉、嫌いですか？」

『嫌いではないですけど……』

アトラスが言葉を濁す。

「えーと、焼きます？」

『できれば』

ミラが聞いてみると、間髪入れずに頷かれた。

『いけませんね。ケイに出会ってから、美味しい料理を食べられる機会が増えてしまつて……じゅる』

「あの、私はそんなに料理が上手じゃないですから、あんまり期待しないで下さいね？」

ケイという人物の作った料理を思い出しているのか、アトラスが遠い目で涎を垂らしている。

ミラは、そんなアトラスの様子を見て、苦笑いしながら言った。
話しながら、手ごろな大きさの石を集めてきて丸く積む。

その後、アイテムポーチの中から取り出した二つのY字の金具を
円周の内側面に対角線になるように置き、中心に青い色の蠟燭のよ
うな塊を置く。

この塊は、固形燃料だ。

非常に火がつきやすく、小さな火花で着火することができる。

最後に、取っ手のついた金串を取り出し、ナイフと打ち合わせて
固形燃料に火をつける。

その後で、金串を生肉の塊に通し、Y字の金具の上にセットする。

今使ったアイテムが、俗に言う【肉焼きセット】だ。

「ふんふふーん」

鼻歌を歌いながら、金串をくるくる回す。

『あ、肉焼きソングですね』

と、アトラス。

この歌、一曲歌い終わる頃には一人分の肉がちょうど焼けるとい
う長さなのだ。

ちゃんとした曲名もあるのだが、肉焼きソングだとか、肉を焼くときのアレとかの方が通りがいいという、ある意味不幸な歌だ。

『その道具に、歌。どうしてこんなところに女の子がいるのかと思いましたが、ミラはハンターだったんですね』

「ハンター!？」

アトラスが何の気なしに呟くと、ミラが盛大に驚きの声を上げた。

金串を落としそうになり、慌てて金具の上に置き直す。

「あ、あんなのと一緒にしないで下さいっ!」

ぶんぶんと言がしそうなほど勢いよく首を振りながらミラが言う。

アトラスは不思議そうな顔で、

『ミラはハンターじゃないんですか?』

「当たり前だよっ!」

凄い剣幕だった。

全力で全否定である。

実際には、二人の言うハンターには大きな隔たりがあり、全く別物を指しているのだが、二人は全く気がつかない。

いや、気がつかない。

「もう、私がハンターだなんて、恐ろしいことを言わないでください……」

『す、すみません……』

これだけ言うからには何か悪いことを言ったのだろつとアトラスは頭を下げ、

その目に映ったのは、ミラが手を止めたために、一面だけが黒くなりつつある肉だった。

『ああ！ ミラ、肉が！』

「え？ あ、大変、焦げちゃう！」

慌てて金串を回すミラ。

そこに、

『美味そうな匂いさせてんんじゃないかねえか』

割り込む第三者の声。

いや、違う。

意味は通じるが、それは声ではなく、鳴き声。

アトラスとミラが声の聞こえてきた崖の上を振り仰ぐ。

そこにいたのは、空の王の異名を持つ飛竜。

『ま、俺はもつと血の匂いがする方が好みだけどよ』

「リオレウス！」

ミラが叫ぶ。

崖の上に立って、下にいるミラたちを見下ろしていたのは、【リオレウス原種】だった。

『せつかくだ、てめえもこんがり焼けちまえよ！』

そんな声と共に、【リオレウス原種】の口から火球が放たれる。

だが、その火球は空中で岩に当たって砕け散った。

アトラスが鉤爪で岩を打ち上げ、火球を迎撃したのだ。

『ミラ。危ないですから、少し下がっててください』

「あ、うん……」

ミラは、アトラスに言われるままに後ろに下がり、手ごろな岩の陰に身を隠す。

『さっきのリオレウスですね。撒いたと思ったのですが……』

『そんな匂いさせてりゃ、人がいますって教えてるようなもんだろ
うが。』

今度こそ、しとめさせて貰うぜ』

苦々しく呟くアトラスに、獰猛な表情を浮かべる【リオレウス原種】が言う。

『つーかよ、てめえは何やってんだ？ 俺の獲物を搔っ攫って行っ
たと思つたら、こんなところで肉焼いて。』

……ああ、そうか。食わせてもらってからその人間も喰うのか。
えげつねえな』

『そんなことはしません！』

アトラスが谷全体に広がるほどの大音声で怒鳴り返した。

『そういうあなたこそ、どうして人を襲うんです！ 食事をしたい
なら、動物を狩りに行けばいいじゃないですか！？』

『はっ、俺は今腹が減ってんだよ。そこで、目の前に人間えものがいるん
だ。』

何だつてわざわざ別のところに行かなきゃなんねえんだ。

てめえだつて、腹が減つてりゃ人間を喰うだろ？』

『そんなことはしません。わたくしは、人と竜が共に生きていく世
界を望んでいるんです』

『はあ？』

【リオレウス原種】がそんな間の抜けた声を出した。

アトラスの言うことが、本当に理解できない、そんな声だった。

『頭は大丈夫か？ 人間は俺たちを狩る、常識だろ？』

『確かに、それはそうです。でも、人間にはモンスターを助けてくれる人だっているんです！』

『おいおい、本気で言ってるのか？ 勘弁してくれ……いや……』

【リオレウス原種】は唐突に言葉を切った。

そして、アトラスに向かって言う。

『共存か、いいかもしれねえな』

『本当ですか！？』

嬉しそうな声を出すアトラス。

自分の夢を理解してもらえて、嬉しいのだろう。

だが、それも【リオレウス原種】の次の言葉を聞くまでだった。

『共存つって仲良くなって町にでも入れてもらえりゃ、人間が喰い放題だぜ？』

『な……』

『ああ、てめえもそのつもりだったか？ 悪いな、先に言っちゃまって』

理解などしていない。

この【リオレウス原種】は最初から人間と共存することなど考えていなかった。

『あ、あなたは 』

「何てことを言うんですか！」

アトラスが口を開きかけるが、それより先に、ミラの声が響き渡った。

隠れていた岩から出て、【リオレウス原種】に向かって声を上げる。

「アトラスさんは、凄くいい人……じゃなくて、いい竜なんですよ！そんな風になんて、考えてるはずないよ！」

『は、上手く騙してるじゃねえか』

「そんなのじゃない！アトラスさんは、本当に一緒に生きたいって思ってるんです！」

『普通に考えて、んなこと言う奴がいるわけねえだろ。適当言ってるだけだっけの』

「だから、違うよ！アトラスさんは、ポリシーを持って生きていて、だから、その言葉がちゃんと本当だって心に届くの。」

あなたが、適当に言う共存って言葉なんかとは、全然違うよ！」

「人間が、言うじゃねえか。だったら、俺のポリシーってのを教えてやるよ」

ミラの言葉が気に入らなかったのか、【リオレウス原種】の言葉に苛立ちが混ざる。

言葉の端に、吐息と共に黒煙が見えた。

「そいつは、人間が敵ってことだよ！」

言葉が終わると同時に、【リオレウス原種】がミラ目かけて火球を放った。

火球は手前の岩にぶつかったが、爆風でミラの体が吹き飛ばされる。

『ミラ！』

アトラスが叫ぶ。

吹き飛ばされたミラが、地面に転がった。

『燃え尽きちまいなあー！』

【リオレウス原種】が、そこに火球を連続で撃ちこむ。

だが、その火球が届くより先に、アトラスがミラの前にはだかった。

アトラスに火球が次々に着弾し、盛大に炎と煙が上がる。

「アトラスさん！」

『はっ、てめえが先に焼肉になっちまったか！』

ミラが悲鳴のような声で叫び、【リオレウス原種】が哄笑を上げる。

その次の瞬間

『グオオオオオオオオオオオッ！』

咆哮が黒煙を引き裂いた。

巨体が煙から空中に飛び出し、【リオレウス原種】に急降下する。

【リオレウス原種】が後ろに飛び退き、その目の前にアトラスが勢いよく着地する。

爪が大地を抉り、アトラスを中心に、電気を伴う衝撃波が放たれた。

『あなたには、言葉は通じないようですね。ならば、わたくしも、今は力を以って相手をします！』

翼と翼から伸びる鉤爪がバチバチと電気の火花を散らし、若草色の体毛が赤く変化している。

脚は大地から離れ、羽ばたく翼が身体を地上から少し浮かせている。

『いいぜ、そういうわかりやすいのは！ 来いよ！』

『退いてもらいますよ、リオレウス！』

言葉と共に、アトラスからしかける。

地を踏む力強さはないが、空中を滑るように【リオレウス原種】に肉薄。

電気を帯びた口を開き、【リオレウス原種】に喰いつく。

【リオレウス原種】は身体を旋回させてそれを躲した。

牙が空を噛み、空中に電撃が爆ぜる。

【リオレウス原種】は攻撃を躲した動きのまま半回転し、アトラスに尻尾を叩きつけた。

アトラスは少し上空に移動して尻尾から逃れる。

【リオレウス原種】は更に半回転し、続けざまに火球を放つ。

アトラスは、後方に飛んでそれを躲し、一気に滑空する。

【リオレウス原種】は身を躲したが、翼にアトラスの帯電した翼がぶつかり、小さく呻いた。

両者はすれ違い、背を向け合う形になる。

すぐに振り返るが、滑空後に着地していた分アトラスの方が遅かった。

振り向き終わったときには、既に【リオレウス原種】が目の前に迫っている。

【リオレウス原種】が、かっとうを開き、アトラスの肩に牙が食い込んだ。

『ぐう……』

苦悶の声を上げるアトラス。

その身体に、電気が走る。

全身からの放電による攻撃だ。

『チィ！』

【リオレウス原種】は、堪らず口を離し後退する。

その隙を逃さず、アトラスは帯電させた鉤爪を伸ばして叩きつけた。

連続で電撃を浴びせられ、【リオレウス原種】の体が痺れる。

そこにアトラスが追撃。

勢いをつけて、尻尾でなぎ払った。

麻痺していた【リオレウス原種】は、それをまともに受けて吹き飛ばされる。

岸壁に激突し、地面に崩れた。

だが、すぐに立ち上がってくる。

『くそつ、共存とか言ってるくせに、強えじゃねえか』

『戦うべきときは、全力を尽くしますから』

『ちっ、だったら、これはどうだよ!』

【リオレウス原種】がアトラスに火球を放つ。

滞空していたアトラスは、簡単にそれを避ける。

『まだまだあ!』

自身も羽ばたいて空中に移動しながら、【リオレウス原種】は次々に火球を吐きかける。

大きく動いて火球から逃れるアトラス。

その動きを追うように、岸壁を火球が抉った。

速度を上げて何とか逃れようとするアトラスの後を、【リオレウス原種】が追いながら、火球での攻撃を続ける。

戦闘は、いつの間にか【峡谷】の谷を舞台にした空中戦へと変わ

っていた。

アトラスは右に左にと動いて狙いをつけさせない。

だが、【リオレウス原種】はその後ろにぴったりとついて行く。

放たれ続ける火球が、何度もアトラスの身体を掠める。

『く、これでは……っ』

アトラスは一気に上昇し、弧を描いて【リオレウス原種】の背後へ回ろうとする。

しかし、【リオレウス原種】はその動きにもぴったり続き、二頭の位置関係は変わらない。

『はっ、それで限界かよ!』

【リオレウス原種】が嘲笑する。

空の王と言うだけあって、飛行能力はアトラスを上回っている。

（ですが、これなら　　）

『そろそろ墜ちな!』

【リオレウス原種】がアトラスの背中に狙いを定め

その瞬間、アトラスの姿が消えた。

いや、消えたのではなく、見失ったのだ。

アトラスは鉤爪を岩壁に打ち込み、それをアンカーに急旋回していた。

速度を考えれば、普通に旋回するよりもずっと小さい半径での旋回だ。

その、乱暴なまでの機動が、【リオレウス原種】の視界からアトラスを消し去っていたのである。

『もらいました!』

背後を取ったアトラスが、長く伸びるビームのような電撃のブレスを【リオレウス原種】に放った。

『があああああああつ』

背中にまともにブレスを受けた【リオレウス原種】は姿勢を崩して谷底へと墜ちていく。

ずしん、と地響きを立てて墜落した身体を、上がった砂煙が包む。

『ぐ……くそっ……』

砂煙の中で、【リオレウス原種】が立ち上がる。

だが、相当なダメージを受けたらしく、その足はふらついていた。

『まだやるんですか?』

天から見下ろしながら、アトラスが問う。

【リオレウス原種】はアトラスを睨みつけ、

『くそベルキュロスが……覚えてやがれ』

吐き捨てるようにそう言うと、ゆっくりと翼を羽ばたかせ、どこかへと飛び去って行った。

アトラスは、それを追わずにミラの下へと降りた。

敗北を認めた相手への追撃は、彼のポリシーに反している。

『ミラ、大丈夫ですか？』

心配そうに声をかけるアトラス。

だが、ミラはそれどころではなかった。

「ベル、キュロス……？」

【リオレウス原種】が残っていた言葉。

ベルキュロス。

それが、ミラの頭の中をぐるぐると駆け巡っていた。

そんなはずがない、そう思う。

だって、ベルキュロスは

「アトラスさんは……ベルキュロスなんですか？」

『はい。そうですよ。』

恐る恐る聞いたミラの言葉に、当たり前のようにアトラスが答える。

「そんな……」

ミラは言葉を失う。

ベルキュロス。

【人間】の乱獲によって、遠い昔に絶滅してしまった飛竜の名前だった。

種が滅ぶから絶滅と言うのだ。

絶滅した飛竜が、当たり前前の顔をして存在するなど、ありえない。

ベルキュロスの存在するここは、ミラの知る場所とは、全く別の物語だ。

気がついてしまった瞬間から、世界の乖離は始まっていた。

霧がかかったように視界が閉ざされ、硝子を割ったようにひび割

れ、白黒の砂嵐が映り、その距離が離れていく。

『…………ラ！？ どうし…………すか！？』

慌てたようなアトラスの声が遠い。

別れを告げる時間さえ与えず、偶然のように、奇跡のように重なっていた二つの道が、別れていく。

手は届かない。

声は、届くだろうか。

「アトラスさん！」

ミラは、大きく息を吸って、あらん限りの声で叫んだ。

「ありがとうございます！ それと、共存の夢、頑張ってください！ 私、応援してま」

水中から顔を出すような、何かを突き抜ける感覚。

一瞬の世界の交錯が 終わる。

「すから！」

叫んで、ミラはがばっと起き上がった。

きよろきよろと、周りを見渡す。

その場所は、【峡谷】の崖の上だった。

あの飛竜の姿はどこにもない。

アトラスと【リオレウス原種】の戦いの跡も、何一つ残されては
いなかった。

「 夢? 」

ミラは、そっぽつりと呟いた。

.....

ミラは【ランゴスタ進種】の城に戻ってきた。

全ては夢だったのだろうか。

アトラスとの出会いも、彼と会話したことも、全て。

夢だとしたら、絶滅した飛竜に出会ったことも、飛竜と会話でき
たことにも説明がついてしまう。

でも、あれほど強く夢を追っていたアトラスの存在が、存在しな
い幻だとは思いたくなかった。

ふらふらと歩いて、借りている部屋に入る。

「あれ……?」

ベッドの上に一冊の本が置いてあるのを見つけた。

本を置いていった覚えはないのだがと思いながら手に取ってみる。

すると、ページの間挟まれていた紙がひらひらと落ちた。

その紙を見ると、それはミュリエリアからのメッセージだった。

書庫で面白そうな本を見つけたから読んでみたらどうかと書かれている。

「ごめんね、お姉ちゃん。今はそんな気分じゃないよ……」

ミュリエリアには悪いが、後で読もうと、ミラは本を片付けようとして、

「あ
」

ふと目に入った表紙の絵に、その手を止めた。

そこに書かれていたのは、何人かの人間たちとモンスターたち。

そして、そのモンスターの中に、【ベルキュロス】の姿があった。

何かに導かれるように、ミラはその本のページを開く。

『第一章 パシフィスト、ナイト』

本は、こんな出だしから始まっていた。

その本のタイトルは、【CROSSING OF DESTINY】。

頁を繰れば、ミラは見つけることができるだろう。

人とモンスターが争う世界に共存という夢を抱き、誇り高く生きて、その竜の姿を

オオオオオオオオオオ

星の瞬く夜空に、長く尾を引く咆哮が響き渡った。

「ど、どうしたアトラス！」

わしがシュレイドに行き先を変えたのがそんなに気に入らなかったのか!？」

少し離れたところにいる青灰色の髪の男性ハンターが、慌ててアトラスに駆け寄っていく。

『違いますよ』

アトラスは、星空を見上げながら答えた。

『遠くに行ってしまった仲間に、メッセージを送っていたんです』

「ほう？　なんて送ったんだ？」

『ケイはわたくしの言葉がわかるから聞こえていたんじゃないんですか？』

『まあ、いいですけど……』

アトラスは、不思議な出会いと別れを経験した一人の少女を思う。

そうして、彼女に届くようにと、再び声を上げた。

場所、時間、もしかすると、もっと大きな壁に隔てられた場所に
生きている彼女へ届くように

わたくしは、ここにいます。

特別編「CROSS ROAD」（後書き）

中々難産な話で、随分と久しぶりの投稿になってしまいました。

一度書き上げたんですが、推敲のために読み返してみると、これが全然面白くなかったの（アトラスとミラが延々と共存について話しているだけの話でした）、書き直していたんですよ。

まあ、別の小説を書いていたのもあるんですが……

そんなわけで、今回は娯楽成分を多めに、モンスターVSモンスターな話をお送りしました。

ちなみに、戦ったりオレウスはEVOLVE世界のレウスです。

何でベルキュロス知ってるんだ？ と思われるかもしれませんが、それにはちゃんと理由がありますので。

更に余談。

この話は本編には組み込まれません。

理由は、この話を入れてしまうと、ミラが共存について考え始めてしまつて、別の話になりそうだからです。

第十三話「凧の綱籠」（前編）

【ゲリヨス変種】との死闘から数日の時間が流れ、ミラは普段通りの生活を取り戻していた。

そんなある朝。

「おねーちゃん、おはよう」

ミラは寝ぼけ眼で階下に降り、作業場に顔を出した。

その声を聞きつけて、キッチンからミュリエリアが出てくる。

「おはよう、ミラ。随分眠そうね」

「うん、今起きたばかりで……ふあ」

「でしょうね。寝癖が凄いわよ」

あくび交じりに答えるミラに、ミュリエリアが呆れ顔で手を伸ばし、軽く髪を整える。

だが、手を離すとすぐに、髪が跳ねてしまった。

「ちゃんと梳かさないとダメみたいね。後でやってあげるわ」

「それにしても」と言いながら、ミラの髪を撫でる。

「ミラ、髪が伸びたわね」

初めて会ったときは肩甲骨にかかるくらいだった髪が、今は背中の中ほどまで伸びている。

出会ったのが晩春で、そろそろ夏の盛りも過ぎた頃だから、そろそろ四ヶ月になるだろうか。

まだ半年にも満たない時間。

だが

「不思議ね。何だかミラとはずっと前から住んでいたような気がするわ」

「うん、私も。お姉ちゃんが本当の家族みたいに思えるんだ」

「ふふ。それは嬉しいけれど、ちゃんと思い出さないと、本当の家族に悪いわよ？」

力も使えるようになってるのだし、もうすぐ記憶も戻るかもしれないわね」

ミュリエリアがそう言うが、ミラは浮かぬ顔。

「うーん、でも、自分で使おうとしても使えないんだよね」

ミラは未だに自分の能力を自分のものにできていない。

【ランゴスタ進種】の城から帰ってから何度か試しているが、成功した試しはなかった。

「また空が飛べたら色々と便利なんだけどなあ」

「ええ、そうね」

と言った後、ミュリエリアは難しい顔になる。

「あなたにその力のことを教えた私が今更こんなことを言うのはおかしいかもしれないのだけれど、ちゃんと使いこなせるようになるまでは、外では使わない方がいいかもしれないわね」

「どうして？」

「武器作りをしていて、自信がないのに作った武器は、どこかに不具合があったり出来が悪かったりしてしまうの。」

ミラは十分に強いから、中途半端に使える力には頼らないほうがいいと思うのよ。

だから、その力を使うのは、しっかり使いこなせるようになってからにしましょう？」

「うん、わかった」

と、ミラは素直に頷いた。

「それじゃあ朝ごはん……の前に、その髪を何とかしましょうか」

そう言って、ミュリエリアはミラの髪をもう一度撫でつけ、

「せっかくだから、この機会に切ってあげましょうか？」

お姉ちゃんが何かしてくれるなら大喜びなミラのだが、この提

案には微妙な顔をした。

「うーん、お姉ちゃんみたいに伸ばしてみようかなって思ってるんだけど」

「でも、前髪まで伸ばすつもりはないのでしょうか？」

「こんなに伸びていて邪魔ではないの？」

撫でつけるとすっかり目を覆ってしまう前髪を見ながらミュリエリアが言う。

「そう言えば、最近目がチクチクしてたような……」

「ほら、やっぱり。それなら、後ろの長さは変えないで少しすっきりするよつに切ってあげるわ」

「それならいいでしょう？」と云つたミュリエリアに、ミラはごくりと頷いた。

MONSTER HUNTER EVOLVE

第十三話「風ぎの鋼龍」

「ふんふんふん」

ミュージエリアに髪を切ってもらった後、ミラは鼻歌交じりに村の中を歩いていた。

手には木を編んで作ってあるバスケット。

今日は、行商人が村に来ているのだ。

村の中にも商店はあるが、店に並ぶのは近辺で手に入るものばかり。

珍しいものを持つてくる行商人の店を覗くのは、ミラの楽しみの一つだった。

そのとき、対面から一組の男女が歩いて来る。

村長とその奥さんだ。

「おや、ミラちゃん。随分とご機嫌だね」

「ミラちゃんも買い物かい？」

村長夫妻がミラに声をかける。

「はい。おじさんたちもお買い物ですか？」

「そうだよ。その帰りだけどね」

そう言って、村長は手に持った買い物かごを持ち上げる。

「今日は海の方の食べ物がたくさんあったよ。ミラちゃんも行ってくるといい」

「はい」

ミラはそう言って、行商人のいる場所へと向かおうとし、

ふと、足を止めた。

もじもじしながら、

「あ、あのー、今日の私、どうですか？」

と聞く。

ミラも女の子。

散髪してどうなったかが気になるのである。

「うん？ いつも通りかわいらしいね」

「そ、そうですか……」

村長に「いつも通り」と言われてしまっがくりと落ち込む。

「やれやれ、あんたは気がきかないねえ」

村長の奥さんがあきれたように呟き、

「ミラちゃん、髪を切ったんだね？」

「あ、はい。お姉ちゃんに切ってもらったんです」

何でも、散髪用の鋏を作ったときについてに覚えたらしい。

相変わらず多芸な少女である。

「よく似合ってる。かわいいよ」

「本当ですか？ えへへ……ありがとうございます」

照れくさそうにお礼を言うミラ。

村長夫人はあっさり言い当てたが、実際のところ、髪のを減らして毛先を整えた程度で言うほど長さは変わっていない。

わいわいと話す二人の隣で、村長は「女性って凄いな……」と呟くのだった。

……

「あ、私はそろそろ買い物に……」

「ああ、引き止めて悪かったね。」

あ、そうそう。南の方から連絡が届いてたけど、二、三日後に台風が来るらしいから、ミュリエリアちゃんにも伝えておいてくれるかな？」

「はい、わかりました。ありがとうございます」

「うん。それじゃあね」

などとしばらく世間話をした後で村長夫妻と別れ、ミラは目的地へとやってきた。

村の一角の空スペースに、一台の荷車が留まっている。

屋根もついていて、移動式の屋台とも言えるだろう。

移動するときは【ポポ】という草食獣に引かせるのだが、今はその姿はない。

ミラが屋台の前まで行くと、

「へいらっしやい！ お、ミラ坊、久しぶりじゃねえか」

屋台の中から威勢のいい声がミラを迎えた。

「こんにちは、ダルブルグさん。お久しぶりです」

ミラもすっかり顔馴染みになった行商人に挨拶を返す。

砂色の髪を角刈りにした中年の男性で、暑いのか上半身裸になっている。

行商という危険を伴う商売柄が、身体は相当鍛えられている。

その格好も目立つのだが、それ以上に目を引くのが、両肩から伸びる捻じ曲がった大きな角 【肩角^{けんかく}】だ。

先端は真上を向いていて、長さは頭二つ分くらいあるだろうか。

彼は【プロス進種】なのだ。

【プロス進種】は、更に【モノ族】と【ディア族】に分けられ、ダルブルグは【ディア族】にあたる。

能力的には変わらず、【肩角】が二本なのが【ディア族】、真っ直ぐな【肩角】が片方にだけあるのが【モノ族】だ。

「今日は何を売ってるんですか？」

「おう、いい武器が手に入ってるぜ！」

「いや、私武器屋の娘なんですけど……」

「お、そりゃそうだ！ ミラ坊には必要ねえよなあ」

がはは、と豪快に笑う。

「できれば食べ物がいいかなーって思うんですけど」

「食いもんか、それなら魚が色々あるぜ。ま、みんな塩漬けか干物だけだな。

干物はこの天井に吊ってるので全部だ。んで、塩漬けは……」

「ごそごそと荷物を探して【小タル爆弾】くらいの大きさのタルを取り出し、ドンドンっと並べる。」

「俺サマのおススメはこいつだな。南のあつたけえ海でしか採れないレア物、熱鯛ねったいの塩漬しほづけけだ。

このまま竈かまどで焼くと美味いぜ。日持ちもするしな。今なら一タル五百ゼニーだ」

「あ、美味しそう。じゃあ、それ下さい」

「毎度！ 他にも何か買うかい？」

「えーと」

.....

「ただいまーって、暑……」

「お帰りなさい、どうだった？」

買い物を終えて家に帰ると、炉に火が入れられ、仕事ポニテールスタイルのミュリエリアがその前に座っていた。

製錬 鉱石から金属を取り出す作業 をしているらしい。

家に入るだけで暑さを感じるのだから、炉の前はそれ以上に暑いのだろう。

後ろから見えるミュリエリアの首筋には汗が浮かんでいた。

「うん、お魚をたくさん買ったよ。お姉ちゃん、はい、タオル」

返事をしながら荷物を作業台に置き、ついでに台の上にあった夕

オルをミュリエリアに渡す。

「ありがとう、ミラ」

「それから、村長さんが明後日くらいに台風が来るって」

「そう。それなら、準備をしておかないといけないわね」

「台風の準備って何するの？」

買ってきたものを収納場所別に仕分けしながらのミラの疑問に、

「飛びそうな物を片付けたり、窓を塞いだりね。」

今日から窓を塞ぐと暑くて大変なことになるから、明日か明後日か、天気相談して決めましょう」

ミュリエリアはそう答えた。

その夜。

夜も更け、そろそろ寝ようかという頃。

工房の扉を叩く音がした。

訪問者だ。

「お客さんかな？」

ミラとミュリエリアは顔を見合わせた。

ドンドン。

その間にも、ノックの音は続いている。

「店は終わっているのだけれど……」

そう言いながらミュリエリアが扉に近づき、扉を開く。

すると、

「お邪魔しますっ」

と言いながら一人の少女が店の中に飛び込んできた。

僅かに緑色を帯びたストレートの長い白髪に青い瞳。

年はミュリエリアと同じくらいだろうか。

岩のような見た目の鎧 【グラビモス原種】の幼体である【バサルモス原種】の素材から作られる【バサルSシリーズ】を 身につけて、背中に【太刀】を背負っている。

猿のような顔の描かれた鞘が特徴的な【白猿薙】【ドド】【】と呼ばれる武器だ。

分類は【太刀】だが、形状としてはむしろ薙刀に近い。

装備はその人物の実力をわかり易く示す指標だ。

この装備から推測すると、中堅辺りの実力の持ち主だろう。

「すみません、もう店は」

とミユリエリアが言いかけたとき、

「お姉ちゃん……」

か細い声。

声からすると女の子だ。

声から推測しなければならなかったのは、声と共に入ってきたもう一人が、すっぽりフードを被っていたからだ。

衣服ではなく、一枚の布を頭から被っているのだ。

布はかなり大きく、手の先まで完全に覆われている。

夜とは言っても今は夏。かなり暑そうだ。

身長はかなり低めで最初の少女の胸くらいまでしかない。

「シャクナちゃん。大丈夫だよ」

少女は布の上から優しく頭を撫でる。

シヤクナと呼ばれた子を思っているのがわかる優しい声だ。

それから、表情を引き締めてミュリエリアに向き直る。

「あの、ここに有名なお医者さまがいると聞いてきました。お願いします。この子を診てください」

「シヤクナちゃん」と呼びかける。

布の塊がかすかに揺れた。

どうやら頷いたようだ。

そして、ゆっくりと、布が落ちる。

まず鋼色をしたショートカットの髪が露になり、それから顔、胸、腰、と順に姿を見せる。

やはり、十歳過ぎくらいの女の子だった。

「それ……」

ミラが驚きを呻き声のような形で漏らす。

伏目がちになっている青い瞳。

その瞳の少し下の頬から首筋を、

小さく震えながら、自分の身体を抱きしめている腕を、

スカートから伸びる足を、

びっしりと、鋼色の輝きが覆っていた。

鱗が、小柄な身体を覆っていた。

おそらく、服に隠れて見えない部分も、鱗があるだろう。

「その子は、一体……？」

ミュリエリアが聞く。

少女は、ミュリエリアを真剣な顔で見返し、

「この子は」

一瞬の沈黙。

息の詰まるような緊張感の後で、

「私の妹だよ」

と、微妙にズレた返答を返したのだった。

……………

それから暫くして。

夜も遅い（+どうやら病人らしい）から取り合えずシャクナは寝かせようということになり、ミュリエリアの部屋を借りて寝かしつ

けていた少女が階段を降りてきた。

「もういいの？」

「うん、もう寝ちゃったよ」

「そう」と頷いて、少女に椅子を勧める。

少女は「ありがとう」と言って椅子に座った。

「それで、お医者さまということは、あなたは六花さんに会うためにここに来たのね？」

「うん、そうなんだけど」

「けど？」

「まずは自己紹介させてほしいな」

少女は、そう言って自分の胸に手を置いた。

「私はグラキシア。それで、さっきの子が私の妹の石楠花しゃくなんげだよ」

「私はミュリエリア。この店の店主をしているわ」

少女、グラキシアの自己紹介を受けて、ミュリエリアも自己紹介を返す。

それに続いて、ミラも、

「ミラです。お姉ちゃんのお手伝いをしています」

「ミユリエリアちゃんにミラちゃん。よろしくね」

朗らかな笑みを浮かべてグラキシアが言う。

思わず釣られそうないい笑顔だった。

「ええ、よろしく。グラキシア」

「よろしくお願いします。グラキシアさん」

「あ、よかったらラキアって呼んでほしいな。うちの子たちもそう呼ぶから」

「うちの子って、子供がいるんですか？」

と、驚いたようにミラ。

しかも『うちの子たち』と複数形だ。

「え？ あ、違うよ」

グラキシアは一瞬不思議そうな表情を浮かべたが、すぐにミラの勘違いに気がつき、慌てた様子で手を振った。

「うちの子って言うのは、うちで預かってる子たちのことであ、私の両親は縁紡ぎをしているの」

「えんつむぎ？」

聞き慣れない言葉にミラが首を傾げて、ミュリエリアを見る。

「縁紡ぎというのは、簡単に言えば孤児院のことよ。」

親を亡くした子供を引き取って、独り立ちできるように育てたり、子供を亡くした親に養子として送り出したりするの「

妹の視線に気がついたミュリエリアが説明する。

「それと、異種族で結婚した人にもかな」

グラキシアが横から補足する。

【進種】は細部に差はあっても、基本的には人型をしている。

だから、異種族と恋をして結ばれることもままある。

だが、異種族同士では、基本的に子供ができない。

【モノ族】【ディア族】のような族違いがぎりぎりのラインで、種が異なるとほぼ絶望的だ。

そういう夫婦が子供を望んだ場合にも、縁紡ぎは養子縁組を行っている。

「シャクナもまだ物心つく前に両親を喪って、うちで育った孤児なだけで、私にだけしか懐かなくて。」

それで、二年前に親元を離れるときに、シャクナもついてきちゃったの「

「二年前って、そのとき石楠花ちゃんはいくつだったの？」

「えーと、九歳？」

「それはまた、大胆なご両親ね……」

呆れたようにミュリエリアが言う。

新米にそんな子供をくっつけて送り出すとは、大した度胸だ。

「あはは、どうにかこうにかやってたんだけどね。さすがに今回はどうにもならなくなっちゃったかな」

困った顔で笑うグラキシア。

「すっかり話が逸れていたわね。まずはその話をしてしまいましたよ」
「う」

「あ、うん、そうだね」

そんな感じで話題が修正される。

「診てもらいたいのは、やっぱり、あの鱗のことなのかしら？」

「うん。一週間くらい前かな。」

最初は足だけだったんだけど、今はもうほとんど全身……。

そのときに、この村に腕のいい医者様がいるって話を聞いたから」

「そうだったの。でも、困ったわね。六花さんはもうここにはいな

いのよ」

「ええっ？ そんなあ」

グラキシアが驚きの声を上げた後、がくりとうな垂れる。

そんなグラキシアを安心させるように、ミュリエリアは言葉を続けた。

「大丈夫よ。どこにいるかはわかってるから。

ミラ、六花さんはまだお城にいるのよね？」

「ルティエちゃんたちの容態を見るためにしばらくいるって言うってたから、多分」

「それなら、明日呼びに行ってくれる？」

「うん、私もそのつもりだったから」

「そんな、悪いよ。道を教えてくれたら私が連れて行くから」

グラキシアが遠慮して言うが、工房の姉妹は揃って首を振った。

「ダメよ。移動している間に何かあるかわからないのだから。

一度預かった以上、危ない目には遭わせられないわ」

「そうですよ。それに、私も友達と会えますから、面倒でもないですし」

二人に口々に言われたグラキシアは、それでも「うー」と唸って

いたが、最終的には観念してくれた。

「それじゃあ、お願いしてもいいかな？」

「はい。お願いされました」

ミラがしっかり頷く。

「じゃあ、少し詳しい話を聞かせてもらえるかしら？
情報があつた方が六花さんもやりやすいでしょうし」

ミュリエリアが棚から紙と筆記具を出しながら言う。

ちなみに、この世界で最も一般的な筆記具は鉛筆だ。

「発症したのは一週間前でいいのよね？」

「うん。いいよ」

「他に何か症状はあるの？ さっき少し見た感じでは体調は悪くは見えなかったけれど」

「他にはないんじゃないかな。やっぱり気にしてるみたいでちょっと元気がないんだけど、体の問題じゃなさそうだから」

そんな感じで質疑応答を繰り返し、さらさらと紙に書き込んでいく。

「それで、ラキア。石楠花ちゃんの病気について、何か心当たりはない？」

「えーと、あの鱗を見たらわかると思うんだけど、シャクナちゃん
はクシャルダオラ進種なの」

うんうん、と二人は頷く。

鋼色の鱗を見たときから、その予想はついていた。

【クシャルダオラ進種】。

風を操る【大地の絆】を持つ【進古龍種】だ。

「でも、シャクナちゃんは絆とか龍化とか、そういう力が使えない
の。」

羽も小さくて、空も飛べないし」

そう言えば、布を取っても前から見ただけでは石楠花の羽は見え
なかった。

背中に隠れてしまうようなサイズの羽では、飛行には不十分な
だろう。

「それは、確かに変ね」

ミラのように能力不明で使えないならともかく、自分が何者か、
どんな力を持っているかもわかっているのに力が使えないとは、妙
な話だ。

「うちの両親は大丈夫だって言ってたけど、やっぱり変だよな？
何か関係あるのかな？」

「それは、聞いてみないことには何とも言えないわね。他には？」

「うーん。もうないかな。それで全部だよ」

「そう、わかったわ」

ミュージエリアは紙をきつちりとたたみ、鉛筆を片付ける。

「ミラ、六花さんにこれを渡すのよ」

「うん」

とミラが頷く。

「それじゃ、今日はもう休みましよう。

部屋の余裕がないから、ラキアは石楠花ちゃんと同じ部屋でいいかしら？」

「うん。それでいいかな」

「お姉ちゃん、今日は一緒に寝ようよ」

「ええ、そうしましょうか」

さっくりと部屋割りは決まり、その日の夜は更けていった。

翌朝。

目を覚ましたミラが階段を降りてくる。

作業場には誰もいなかったが、キッチンの方で物音がしていた。

「おはよう、お姉ちゃん」

「うん、おはよう」

そういいながらキッチンから顔を出したのは、ミユリエリアではなくグラキシアだ。

片手にフライ返しを持ったエプロン姿が妙に様になっている。

「あ、グラキシアさんだったんですか。おはようございます」

「おはよう。でも、ラキアって呼んでほしいな。言葉遣いも砕けてくれるといい感じ」

にっこり笑って言う。

「えーと……」

「呼んでくれると嬉しいな」

期待に満ちた目でミラを見るグラキシア。

「……おはよう、ラキアさん？」

「もう一声」

そう言いながら指を一本立てる。

「ラキアちゃん、おはよう?」

「うん、オッケー」

ぼんとミラの頭に手を置き、頭を撫でる。

孤児院経営者の娘だけあって、手馴れた感じだ。

「私、そんな子供じゃないよ」

「あはは、ごめんごめん」

そんな話をしていると、作業場の扉を開けてミュージリアが入ってきた。

「ただいま、ラキア。ミラも起きたのね」

「あ、お姉ちゃん。どこに行ってたの?」

「村長さんに台風の情報を聞きに行っていたのよ。」

昨日の移動速度からすると、ここに来るのは明日になるそうよ。とりあえず、今日は天気の手配はいらないわ」

「よかった。じゃあルティエちゃんのところ」

「行くのは朝ごはんを食べてからにしてほしいな。せつかく作って……ああ、火にかけたままだった！」

グラキシアが慌ててキッチンに戻っていった。

「きゃー焦げちゃってる」と悲鳴が聞こえて、何か慌しく動き回る音がする。

その音に混じって「シャクナちゃんを起こしてきてほしいな」とお願いされた。

「じゃあ私が」

「待つて」

ミラが起こしに行こうとすると、それをミュリエリアが止めた。

ミュリエリアはキッチンに入っていく。

そして、ラキアの手からフライ返しをそつと取り上げる。

「ラキア、代わるわ。あなたが石楠花ちゃんを起こしてきて」

「あ、いいの？」

「ええ」

「じゃあ、お願いしようかな」

グラキシアがキッチンから出て、階段を上っていく。

「ミラ、手伝ってくれる？」

「あ、うん」

ミラはミュリエリアを手伝うためにキッチンに向かった。

「ね、お姉ちゃん」

「何？」

食器を運びながらミュリエリアに聞く。

「どうして私じゃダメだったの？」

同じものを見ても、姉と慕うこの少女が自分よりも深く物事を捉え、

自分には及びもつかない鋭い思考を働かせていることに、最近のミラは気がついていてた。

ミュリエリアがミラを止めたということは、そこには理由があるはずだ。

「石楠花ちゃんはあまり他人に体を見られたくないでしょうから」

「あ………そっか」

石楠花は頭から布をかぶって体を隠していた。

【フルフル進種】のセアラが右目を隠していたように

見られたくないと思うから、隠すのだ。

「ミラも、少し気をつけてあげなさい」

グラキシアが焦がしてしまったパンケーキの片面をナイフで切り取り、間に蜂蜜を挟んで二枚重ねにしながら、ミュリエリアが言う。

ミラは、それにこくりと頷いた。

.....

グラキシアが石楠花を連れてきて、朝食の席につく。

テーブル代わりの作業台には蜂蜜をたっぷりかけたパンケーキ。

この蜂蜜は【ゲリヨス変種】の事件解決後にルティエ、と言うかランゴスタ王家から贈られたものの一つだ。

「いただきます」

朝食はグラキシアのそんな声で始まった。

「.....ます」

消え入りそうな小声で、石楠花が続く。

予想通りと言うか、石楠花は白い布を羽織っていた。

ベッドのシーツを剥がして持ってきたようだ。

最初は頭まですっぽりかぶっていたのだが、グラキシアと脱ぐ脱がないと言い争った結果、顔は出すという結論に落ち着いた。

「……………」

石楠花は無言で膝の上に置いた手を見つめている。

顔を伏せていて、髪の毛で顔を隠しているようにも見えた。

「えと、食べないの？」

「これはラキアが焼いたの。美味しいわよ」

「……………うん」

ミラとミュリエリアに言われて、石楠花がおずおずと手を伸ばした。

布に隠れた手が、ナイフとフォークを持ち上げ

カチャ、と音を立てて取り落とした。

「あ……………」

声を漏らして、石楠花が拾い上げようとする、

だが、中々うまく掴めないようだった。

何度も何度も落とすその度に、石楠花の表情に苛立ちが混ざる。

「っ！」

とうとう、癩癩を起こしたように手をテーブルに叩きつけた。

皿やカップが跳ねて大きな音を立てる。

その拍子に、手を覆っていた布が外れて手が露になった。

指先までびっしりと鱗に覆われた手。

鱗が邪魔になって思うように動かせなかったのだ。

石楠花は鱗に覆われた手をじっと見つめ、

「もう……やだ……」

震える声で呟く。

声だけでなく、手も震えていた。

「やだよあつ」

震えている手を振り上げて、勢いよくテーブルに振り下ろす。

手が、テーブルにぶつかる

その直前に、ミュージエリアが自分の手を滑り込ませて手を受け止めていた。

「あ
」

手を引こうとする石楠花。

だが、それより早くミュリエリアの手が石楠花の手を包み込んでいた。

「ダメよ、自分を傷つけては」

石楠花の手をそっとテーブルに下ろし、石楠花の皿を引き寄せる。

「手が元に戻ったときに傷が残ったら大変でしょう？」

ナイフでパンケーキを賽の目に切り分けながらミュリエリアが言う。

「……治るの？」

ミュリエリアを見上げて、おずおずと、石楠花が問いかけた。

このとき初めて、石楠花の顔がはっきりと見えた気がする。

「治るわよ」

「そうだよ。いいお医者様を連れてきてくれるから。ね、ミラちゃん」

半分ほど切られたパンケーキの皿と言葉の続きをグラキシアが引き継ぐ。

「も、もちろん！ 六花さんは凄い先生なんだから」

成り行きを見守っていたミラは、突然話を振られ、慌てて何度も頷いた。

「ミラ、髪の毛が！」

「うわあ！ 蜂蜜が！」

「もったいないなあ」

「ラキアちゃん、食べないで〜！」

「何してるのよ、あなたたち……はい、布巾」

「お姉ちゃん、ありがとう」

「あ、それさつき溢した蜂蜜を拭いたんだけど……」

「きゃー！ べとべとするー！」

「ああ、ごめんなさいー！」

そのとき、石楠花が

三人が騒いでいるのを見て、くす、と。

小さく、笑ってくれた。

「ようこそ、ミラ様」

ミラが【ランゴスタ進種】の城を訪れ、門番にルティエに会いたいと告げると、

しばらく待たされた後、ルティエの侍女であるファムが出迎えてくれた。

「姫様はお部屋でお待ちです。どうぞ」

ファムに案内されて城の中を歩く。

もう見慣れはしたが、相変わらず豪華な内装だ。

「それにしても、随分と改造なされましたね」

「え?」

「その防具です」

その防具、と言うのはミラの着ている新しい防具のことだ。

【ロイヤルナイトメイルP】。

Paladin
高位騎士の名前が示すように、【ロイヤルナイトメイル】の上位
装備だ。

見た目は【ロイヤルナイトメイル】に近いが、色は白。

銀と金で飾りがつけられ、防御性能と共に見た目の美しさも一級品である。

これも、ランゴスタ王家からの褒賞の一つだった。

以前は【胴装備】だけだったが、今回は装備一揃いを受け取っている。

「あ、うん。あのままだと着られなかったから。お姉ちゃんが直してくれたんです」

受け取った装備はサイズが大きすぎて着られなかったため、ミリエリアが手直ししていた。

元は肩についていた【クイーンランゴスタ】の羽根は取り外されて背中に付替えられ、ミニスカート型の【腰装備】の外側にマントを巻きつけるなど、サイズの他にも色々と変更されていて、ファムの言う通り改造と言っていいほどの修正だった。

ついでに言うと、貰った褒賞は後一つあり、それが今ミラが背負っている【ギムレー】である。

「そうなんですか。よくお似合いですよ」

「そうですか？ ありがとうございます。

それにしても、今日は随分たくさん人がいますね」

廊下を見回しながらミラが言う。

「例えば、何の問題も起きていない平時の城を訪れたのは初めてかもしれない。」

たくさんの【ランゴスタ進種】が城の中を歩いていた。

「何だか視線を感じるんですけど……」

「ミラ様は有名ですから」

「うえ？」

ファムの答えを聞いて、ミラが妙な声を出す。

「な、何で私が？」

「今までのご活躍を考えれば当然だと思いますが……」

いきなりルティエの騎士になってトレナードを決闘で破ったかと思えば、騎士アウリオと共に王家の危機をも救った。

それで有名にならない方がむしろおかしかった。

「ファンクラブもできているらしいですよ」

「嘘お!？」

思わず辺りを見回す。

そうとわかって見てみると、何やら熱い視線を送っている人が何人も。

「ああ、姫騎士ちゃん可愛いなあ」

「戦ってるときは凛々しいんだ。そのギャップがいいよなあ」

「キリン装備とか着せてみたい……」

ちょっと危ないファンもついているようだった。

……

「ミラ、よく来てくれましたわ」

ルティエの部屋に入ると、ベッドに身を起こした状態のルティエがミラを出迎えた。

満面の笑みだった。

ミラが来たのが嬉しくてたまらないといった風情だ。

「久しぶりですわね」

「まだそんなに時間たってないよ？」

「それくらい暇だったのですわ」

「暇？」

「そうですね。仕事もできない運動もできないでは、寝ているしかありませんわ」

「ルティエちゃん、まだ寝てないとダメなの？」

「わたくしはもう平気だと言っているのに、ファムがベッドから出してくれないのですわ。」

「まったく、暇でしかたがありませんわよ」

「当たり前です！ 姫様は死にかけていたんですよ！」

「ええ、わかっていますわ。だからこうして大人しくしているのでありませんか」

ルティエはうるさそうに言う。

「そうですね。六花様のお許しが貰えるまでは大人しくしていただきます」

何度も繰り返した話らしく、ファムは涼しい顔で受け流す。

それを聞いてミラは、はっとした。

「そう、それだよ！」

「何がそれですか？」

「うん、六花さん。実は、六花さんに診てもらいたい人がいるの」

「そうでしたの。でも……」

ルティエが困り顔になる。

「今、六花さんはいないんですのよ」

「え!？」

「そうでしたわね? ファム」

「はい、この季節にだけ取れる薬草を探すと、今朝からアウリオ様とお出かけに」

「ファムさん、いつ帰ってくるかわかりますか?」

「いえ、そこまでは。姫様は?」

「わたくしも聞いていませんわ」

ファムとルティエが首を振る。

いつ帰ってくるかは全くわからないようだ。

「困ったなあ……………」

「いつ帰ってくるかはわかりませんが、待ってみてはいかがですか?」

「でも、帰って台風対策もしないといけないし」

情報によれば台風が来るのは明日だ。

石楠花のことも気になるが、そちらをおろそかにもできない

「そうでしたの。では、引き止めるわけにはいきませんわね。」

六花さんが戻ったら連絡を　いえ、六花さんをそちらに向かわせませすわ」

「いいの？」

「あなたに受けた恩を思えば、このくらいは当然ですわ」

「ありがとう、ルティエちゃん！」

あ、そうだ。六花さんにこれを渡しておいてくれる？」

ミラは飛び上がって喜んだ後、折りたたんだ紙を取り出してルティエに渡した。

「これは？」

「診てもらいたい人の症状が書いてあるの」

「そういうことですよ。わかりましたわ」

納得してルティエが頷く。

「よろしくね、ルティエちゃん」

「ええ。確かに引き受けましたわ」

村に帰ってきたミラは、ミュリエリアとグラキシアと一緒に台風対策をした。

グラキシアはこの家においてもらっているお礼に手伝ってくれらしい。

朝、家事をしていたのも同じ理由からだった。

窓やカウンターの前面に板を打ち付けたり、屋根が飛ばないようにネットをかけたり。

割とやることはたくさんあり、終わったころにはもう薄暗くなっていた。

「私はそろそろ夕食の準備をするわ」

店の中に戻って、ミュリエリアが言う。

「お姉ちゃん、お手伝いするよ」

「そう？　ありがとう」

「私はシャクナちゃんの様子を見てこようかな」

石楠花が寝ている二階を見上げながらグラキシアが言った。

「ええ。準備ができたら呼ぶわね」

「うん」

頷いて、グラキシアは階段を上がって行く。

「私たちも始めましょうか」

「今日のメニューは何にするの？」

「そうですね……。ミラが買ってきてくれた魚を使いましょうか」

と、献立の話をしながら、二人はキッチンへと向かった。

.....

「ラキアちゃん、石楠花ちゃん。ご飯だよー」

夕食の準備が終わり、下からミラが呼びかける。

二階から「はい」とグラキシアの返事が返り、

少しした後、グラキシアが階段を下りてきた。

一人しかいないのを見て、ミラが不思議そうな顔になる。

「石楠花ちゃんは？」

「それが、お腹が痛いから食べたくないって……」

「大丈夫なの？」

話を聞きつけたミュリエリアが心配そうに聞く。

「それが、よくわからくて。

何だかイライラしてるみたいで、追い返されちゃった」

と、グラキシアが答えた。

腹痛を感じている時点で何らかの異常があるのは間違いない。

だが、それがどれくらいの問題なのかはわからなかった。

「六花さん、早く来てほしいな……」

六花がいなかったことと城に帰ったらここに来てくれることは既に伝えてある。

祈るようなグラキシアの言葉に、二人は頷く。

だが

この日、六花が工房を訪れることはなかった。

第十三話「凧の綱籠」（後編）

「ミラ。ミラ、起きて」

「ん……お姉ちゃん」

ミュリエリアに優しく揺さぶられて、ミラは目を覚ます。

ベッドサイドに立っているミュリエリアが顔を覗き込んでいた。

「おはよう、ミラ。少し寝坊よ」

「え、もうそんな時間？」

昨日の夜、六花を待って遅くまで起きていたせいで、寝坊をしてしまったらしい。

部屋の中は暗い。

ベッドから起き上がりながら窓の外を見ようとしたが、板のせいで外は見えなかった。

だが、雨粒が屋根を叩く音が部屋の中にまで響いている。

「雨？」

「ええ。予報通り、台風よ」

「台風、来たんだ」

と、ミラ。

心なしか目が輝いているように見える。

「なんだか嬉しそうね」

「だって、初めてだから」

「そんなに面白いものでもないと思うけれど。

朝食の支度ができているから、着替えて下りていらっしやい」

そう言って、ミュリエリアは部屋を出て行った。

……………

着替えを済ませて、ミラが部屋を出ると、先に出て行ったミュリエリアがまだ廊下に立っていた。

ミュリエリアが立っているのは、ミュリエリアの部屋の前で、開いた扉から中の様子を窺っているようだった。

「お姉ちゃん？ どうしたの？」

と、ミラが聞いたとき、部屋の中からグラキシアの声が聞こえてきた。

「昨日の夜も食べてないんだから、少しは食べないとダメだよ。ほら、出てきてほしいな」

「やだ、いらない……」

少しくぐもった感じの石楠花の音が答える。

ミラはミュリエリアの横から部屋を覗いてみた。

部屋はランプの光で照らし出されていて、ベッドの上にシーツの塊があった。

どうやら、石楠花が亀のようにシーツに包まっているようだ。

「石楠花ちゃん、どうしたの？」

「呼びにきたら、ああやって出てきてくれないのよ。どうしたのかしら」

心配そうに言う、ミュリエリア。

部屋の中では、ベッドの側に膝をついて、困り顔のグラフィシアがその塊に話しかけている。

「シャクナちゃん、ミュリエリアちゃんがせっかく作ってくれたんだよ。」

「ちょっとだけでいいから、ね？」

「やだっ。放っておいてー！」

「シャクナちゃんー！」

「ラキア、そんなに言うのだから、今はそっとしておいてあげても」

横からミュリエリアが口を挟んだが、グラキシアは「ダメだよ」と首を振った。

「我儘言わないで、出てきな、さいっ」

「あっ」

グラキシアが、強くシーツを引っ張る。

石楠花の体を覆っていたシーツがふわりと舞い上がり、

「シャクナちゃん!？」

グラキシアが驚きの声を上げる。

それは、驚きを通り越してむしろ悲鳴に近かった。

シーツの下から現れた石楠花の顔一面にまで鱗が広がっていた。

しかも、その鱗の表面が赤褐色に錆びついていた。

「っ!」

声にならない声を漏らして、石楠花がグラキシアからシーツをひたたくた。

その手も、赤錆びた鱗に覆われている。

石楠花は、すぐにシーツを頭からかぶる。

そこは変わっていない青い瞳が恨めしそうにグラキシアを見上げていた。

「だから……ほっといてって言ったのにな」

悲痛な声で叫ぶと、グラキシアはベッドに突っ伏した。

最初のように、シーツをまもって丸くなる。

「シャクナちゃん……」

グラキシアが石楠花に手を伸ばす。

が、その手が届く前に、ミュリエリアがグラキシアの肩に手を置いていた。

振り返るグラキシア。

「冷静になる時間を取りましょう。あなたと、それに、あの子も」

ささやくように告げられた言葉に、グラキシアは頷いた。

じれったいほどゆっくりと、時間が過ぎる。

外の台風は強さを増しているらしく、轟々と風の音が聞こえる。

「はあ……」

作業台に突っ伏して、もう何度目かわからないため息をグラキシアが零す。

落ち着いたら、冷静を通り越して落ち込んでしまったらしい。

ミュリエリアはじっと椅子に座ったまま何かを考えていて、

ミラは逆に落ち着きなくうろろしている。

誰も、何をすればいいのかわからなかった。

どこか遠くで、雷が鳴り響く。

お腹に響くような残響が消えたとき、歩き回っていたミラが足を止めた。

「お姉ちゃん」

呼ばれたミュリエリアがミラを見る。

ミラは、何かを決心したような真剣な表情で、

「私、ルティエちゃんのところに行く。もしかしたら、六花さんが帰ってるかもしれないから」

ミュリエリアは、塞がれた窓にちらりを視線を投げる。

「外は台風、危険よ」

「うん、わかってる」

頷くミラ。

ミュリエリアはミラに目を戻し、

「……気をつけるのよ」

「え、いいの?」

もっと反対されると思っていたミラが、意外にあっさり許可がもらえたことに驚く。

ミュリエリアは口元に微苦笑を浮かべて言う。

「私が止めても、あなたは行くつもりなのでしょう?」

「う、うん……」

ばれていた。

ばつの悪い思いでミラが頷く。

「それなら、きちんと送り出した方がいいわ。あなたがやると決めたのなら、私はそれを信じると決めているのよ」

優しく微笑みながら、ミュリエリアが言った。

「お姉ちゃん……ありがとう！」

早速準備しないと、とミラが自室に駆け上がっていく。

それを見て、グラキシアもがたりと音を立てて立ち上がった。

「あなたも行くの？」

「うん。早く、シャクナちゃんを治してあげたいから」

答えて、部屋の隅に置いてあった装備を身に着け始める。

「私は止めてくれないんだ？」

「ええ、あなたの気持ちはわかるから」

悪戯っぽく聞いたグラキシアにミュリエリアが当たり前のように返す。

「私も、『お姉ちゃん』なのよ」

「そっか、なら当然だね」

視線を交わして、二人の『お姉ちゃん』はくすりと笑った。

……

部屋で防具を身につけ、ミラは廊下に出た。

石楠花のいる、ミュリエリアの部屋の前で足を止める。

(石楠花ちゃん、絶対に六花さんと呼んでくるからね)

まだ城に帰ってなかったら、探しに行くくらいの気分だった。

一言言っておこうと、ドアの取っ手に手を伸ばす。

取っ手を握って下げた瞬間、ドアが勢いよく開いた。

「うわっ」

部屋の中から、強い風が吹き出してくる。

「な、何で？」

ミラは、腕で顔を庇いながら部屋の中に入った。

部屋の中は、無人だった。

窓に打ち付けた板が外されて窓が開け放たれていて、雨と風が吹き込んでいた。

カーテンが束ねられて、窓の外に出されている。

慌てて窓に駆け寄ってみると、カーテンの先にシートが結び付けられていて地面の少し上まで届いていた。

「た、大変！」

お姉ちゃん！ ラキアちゃん！」

ミラが大声を上げると、すぐにミュリエリアとグラキシアが部屋に駆けつけてきた。

「これは……」

「シャクナちゃん、外に行ったの!？」

わかりやすいと言えば、あまりにわかりやすい状況。

二人は一目で状況を把握したようだった。

「私、探してくる!」

「私も行く!」

グラキシアが部屋を飛び出し、ミラもその後が続いて走っていく。

一階のドアが開いて閉じる大きな音が聞こえた。

一人残されたミュリエリアは、一つため息を吐き、

「家のどこかに隠れているという発想にはならないのかしらね」

外は嵐、その上、相手は小さな子供だ。

抜け出そうとした後で諦めたとしても何の不思議もない。

ミュリエリアはとりあえず窓に近づいて窓を閉めた。

消えていたオイルランプに火を灯して手に取り、ベッドの下を覗

いてみる。

子供の隠れていそうな場所ではあるが、

「いないわね」

呟いて立ち上がった。

ランプの明かりが、ベッドの上を照らし出す。

「あら………？」

ミュリエリアはベッドの上にあるものに目を奪われた。

そこにあったのは、錆び色の鱗が数枚と、少量の血痕。

「出血している………？」

その血は、一体何を意味しているのか。

「大変なことにならなければいいのだけれど………」

ミュリエリアは心配そうに呟き、別の場所を探し始めた。

………

家を飛び出したミラとグラキシアは、工房を出たところで二手に別れ、村の中を探し始めた。

闇雲に村の中を走り回るが、石楠花の姿は見当たらない。

何軒かの家の人に尋ねてみたが、目撃証言も得られない。

台風という天候が仇になったようだ。

誰も外に出ていない上に、工房と同じように窓を塞いでいて外が見えなかったのだ。

何の手がかりも得られないまま、ミラは工房の前に戻ってきた。

ほとんど同じタイミングで、グラキシアも戻ってくる。

「ミラちゃん！ いた？」

そう聞くということは、グラキシアも見つけられていないようだ。

「うっん……」

ミラは首を横に振る。

「どこに行っちゃったのかな……」

「わからない……」

工房の前で二人は頭を抱えた。

そのとき、工房の中からランプを持ったミュリエリアが出てくる。

「お姉ちゃん……」

「家の中にはいなかったわ。外にいるのは間違いなさそうよ」

「でも、どこにいるのかわからないんだよ」

とグラキシアが訴える。

ミュリエリアは「そう……」と呟き、辺りを見回す。

「部屋の窓は……」

二階を見上げ、窓の下に歩いていく。

そして、屈みこんで地面を照らした。

「ミラ、ラキア、これを見て」

ミュリエリアに言われて、二人が地面を見る。

そして、同時に「あっ！」と驚きの声を上げた。

雨で消えかけているが、小さな足跡が点々と続いていた。

「これって石楠花ちゃんの足跡だよね？」

「ええ、おそらく」

「追いかけよう！」

グラキシアの提案に二人が頷く。

まだ流されていないところを見ると、足跡がついてからそれほどの時間は経っていないだろう。

三人は、ランプで照らしながら足跡を辿って行った。

.....

「あら？」

と呟いて、先頭を歩いていたミュリエリアが足を止めた。

「どうしたの？ お姉ちゃん」

「ここで足跡がなくなっているのよ」

ランプで辺り一面をぐるりと照らす。

石楠花の足跡はある一点でぶつくり途切れていた。

だが、その代わりにあるものが照らし出される。

村の入り口の方に続く、等間隔の二本の線。

「ミラ、これが何に見える？」

引きつった顔でミュリエリアが聞く。

ミラはそれと似たような顔で、

「荷車の轍わたちだよね.....」

「ええ……。それにこの場所は……」

足元ばかり見ていて今まで気がつきなかったが、その場所はダルブルグの店があった場所だった。

「どういうこと？ 私にも教えてほしいな」

行商人のことを知らないグラキシアが不思議そうに聞く。

「この場所には、ダルブルグさん 行商人の荷車があったのよ。石楠花ちゃんは、多分その荷物の中に隠れたんだわ」

「それじゃあ、まさか……」

「ええ。それに気がつかずに、ダルブルグさんは荷車を動かしてしまっただけ」

「動かしたって……この天気で!？」

グラキシアが信じられないとばかりに天を仰ぐ。

大雨と強風。

台風が来ているのに荷車を動かすなど、普通は考えられない。

だが、

「……ダルブルグさんならやりそうだよ」

ダルブルグの豪快な笑い顔を思い出して、ミラが呟く。

「ここに荷車がないのだから、動かしているのでしょうか……」

「それじゃあ早く追いかけないと」

「うん！ お姉ちゃんは家で待ってて！」

頷きあって、ミラとグラキシアが走り出す。

その背中に向かって、ミュリエリアが叫ぶ。

「村から出るなら武器を持っていきなさい！」

失念していた。

二人はミュリエリアに返事をして、工房へと飛び込んだ。

「ラキアちゃん！」

「ありがとう」

先に入ったミラが、壁に立てかけていた【白猿薙】【ドド】【】を取ってグラキシアに投げ渡す。

その後、自分は近くに立てかけてあった【ジークリンデ】を取る。

そして、それぞれの武器を背負いながら工房を飛び出していった。

……

ミラとグラキシアが飛び出して行った後、ミュリエリアは工房に戻った。

棚からタオルを取り出して、濡れた髪や体を拭く。

そのとき、工房の扉が誰かにノックされた。

「ミラ？」

帰ってきたのだろうか、と思いながら扉を開ける。

そこには、外套を着た人影が立っていた。

その人物がフードを取ると、中から蒼銀色の髪の毛が零れた。

「私に用があるそうだな、ミュリエリア」

「六花さん！」

ミュリエリアが、驚きに満ちた声でその人物の名前を呼ぶ。

【麒麟進種】の名医　六花はミュリエリアの鼻先に一枚の紙を突きつけた。

ミュリエリアが石楠花の状態を書いておいたものだ。

「早速だが、この子に会わせてくれ。」

私の予想が正しければ　大変なことになる」

ダルブルグを追いかけたミラとグラキシアは、道沿いに南東へと向かっていた。

「あ、あれ！」

ミラが声を上げる。

街道の脇に、ダルブルグが一人で突っ立っていた。

「ダルブルグさんだ」

「あの人が、そうなんだ」

「行こう！」

二人はダルブルグに駆け寄って行く。

「ダルブルグさん！」

「ん、おお、ミラ坊じゃねえか。何やってんだ、こんなところで」

ダルブルグが不思議そうな顔をする。

「それはこっちの台詞ですよ！ 何で台風の日に出発するんですか！」

「おう、それはな、今日出発しとかねえと予定通りに次の村に着かねえからだ。俺サマは客の信用を大切に作る男だからな！」

がっはっは、と笑う。

「そ、そうなんですか」

その迫力に一瞬ミラが引く。

が、気を取り直して、口を開いた。

できれば触れたくないのだが、それに触れないわけにもいかない。

「あの……荷車は？」

ダブルブルグは一人だった。

彼が引き連れているはずの荷車が、どこにも見当たらない。

「荷車か？ いやー、これがてえへんなことになってな！」

「な、何がです？」

嫌な予感を覚えながらミラが質問する。

「さっきでけえ雷が鳴っただろ？」

ポポがあれに驚いて走っていつちまったんだ。

参っちまうなー、がっはっはっはっはー！」

「……………」

「……………」

ミラとグラキシアは絶句。

「……………それで、荷馬車はどこに？」

恐る恐る、グラキシアが聞いた。

ダルブルグはがはは、と意味もなく笑いながら、

「荷馬車か？ あの中だ」

指差した。

「……………嘘」

グラキシアが呆然と呟く。

ダルブルグが指差したのは、曇天の下に黒々と広がる森林地帯。

モンスター生息危険地域 【樹海エリア】と呼ばれる場所だった。

「な、何でそんな……………」

あまりにも運が悪い。

たまたま隠れていた荷車が動き出しただけでも十分ありえないのに、その上この事態だ。

よくもここまで不幸が重なるものである。

「もうっ、ダルブルグさんの馬鹿ぁ！」

ミラは、八つ当たり気味、と言うか完全に八つ当たりでダルブルグに怒鳴り、【樹海】へと走って行った。

.....

【樹海エリア】。

木々の生い茂る深い森だ。

【密林】や【森丘】に似ているが、その二つよりも木々の密度が高い。

ミラたちは、荷車の轍を追いかけて【樹海エリア】へと踏み込んだ。

【樹海エリア】に近づいたところで地面は土では無くなったが、荷車が草や低木を押し折って進んでいたために後を追うのは簡単だった。

【エリア5】。

そう呼ばれている場所で、二人は荷車を見つけた。

木々が立ち並び、【樹海エリア】の中でも一際巨大な樹がある場所だ。

巨大樹の根の部位が、人の頭よりも高い場所を縦横無尽に走っている。

そのエリアの真ん中に、荷車は止まっていた。

何かの拍子に止め具が外れたのか、荷車を引いていたはずの【ポポ】はどこかに行ってしまうている。

「シャクナちゃん。シャクナちゃん！」

「石楠花ちゃん！」

口々に名前を呼びながら荷車に駆け寄る。

「シャクナちゃん、いたら返事して！」

「……お姉ちゃん？」

風と雨の音にかき消されそうな、小さな声が返ってくる。

「シャクナちゃん？」

グラキシアが呼びかけながら荷車を覗き込む。

「お姉ちゃん！」

荷車のカウンター部分の下にある荷物入れのふたが勢いよく開き、中から石楠花が飛び出してきた。

「シャクナチャ」

「お姉ちゃん！」

何か言いかけたグラキシアの言葉を遮って、石楠花がグラキシアに飛びつく。

「お姉ちゃん！ お姉ちゃん！ お姉ちゃん！ うわあああああ
ああんっ」

グラキシアにしがみついて泣き出してしまった。

見つけたら説教か説得かをしなければならぬかと思っていたのに、予想外の展開だ。

まあ、ただでさえ情緒不安定気味だった上に台風の中に放り出されては無理もない。

「よしよし、怖かったよね。もう大丈夫だよ」

グラキシアが、わんわん泣いている石楠花を抱きしめてあやす。

「さ、お家に帰ろうねー」

「怖かったよお。わあああん！」

「泣き止んでほしいなあ」

「ラキアちゃん」

ミラがグラキシアを呼ぶ。

だが、グラキシアは石楠花をあやすのに手一杯。

「うええええええんっ」

「はいはい、大丈夫大丈夫」

「ラキアちゃん！」

「ふええええええんっ」

「シャクナちゃん、泣かないで」

「ラキアちゃんっ！」

「ミラちゃん！ さっきからどうし………た………の」

何度も呼ばれて、振り返ったグラキシアが固まる。

ミラは【ジークリンデ】を抜刀して、身構えていた。

そして、その目の前には黒い姿。

前脚に鋭い刃翼^{フレード}を持ち、口は鳥の嘴のような形状をしている四足歩行のモンスター。

迅竜こと【ナルガクルガ原種】である。

【ナルガクルガ原種】が咆哮を上げる。

その声で、グラキシアがはっと我に返る。

「シャクナちゃん。ここに隠れていて！」

グラキシアは石楠花を彼女が隠れていた荷物入れに押し込む。

「絶対に出てきちゃダメだからね」

そう言い含めて、荷車から飛び降りた。

ミラに並び、【白猿薙】【ドド】を抜く。

【氷結晶】を大量に含んだ青い刃が鞘から姿を見せた。

「とうとうモンスターまで出てきたね……」

「でも、これ以上は悪くならないよ……多分」

乾いた笑いを浮かべながらミラが呟く。

「なりようがないの間違いでしょ……」

「かもね。でも、石楠花ちゃんは守らないと」

「うん。行くよー！」

武器を構え、二人が同時に【ナルガクルガ原種】へと向かう。

左右からの挟撃。

振り下ろされた二本の刃を【ナルガクルガ原種】が両腕の刃翼で受け止める。

右腕を振って【白猿薙【ドド】】を弾きながら体を捻り、半回転しながら尻尾を薙ぎ払った。

【ナルガクルガ原種】の尻尾は伸縮する特性を持っていて、攻撃範囲が広がる。

グラキシアはバックステップで躲し、ミラは【ジークリンデ】の腹で攻撃を防いだ。

尻尾が通り過ぎた後、素早く剣を構え直し、振り下ろした。

尻尾の半ばまで刃が食い込み、血が飛び散る。

【ナルガクルガ原種】は声を上げ、尻尾を左右に振って【ジークリンデ】を抜く。

そこにグラキシアが斬りかかって行くが、【ナルガクルガ原種】は斜め後ろに飛び退いてそれを躲した。

追撃に移る時間をミラたちに与えず、後脚に力を込めて【ナルガクルガ原種】が跳ねた。

頭上を走る根に着地し、刃翼を広げながらグラキシアに飛びかかる。

グラキシアは前方に転がってそれを避ける。

【ナルガクルガ原種】は地面に降りると同時に、鋭くバックジャンプする。

ミラが振り下ろした【ジークリンデ】が狙いを外して地面を叩いた。

「あいたっ」

地面を叩いた反動で手が痺れる。

グラキシアがミラに駆け寄って行く。

「大丈夫？」

「うん」

【ナルガクルガ原種】は二人から少し離れた場所で尻尾を振り上げ、先端で円を描くように振り回す。

わかり易い予備動作。

この動作の後に来るのは尻尾から鋭い棘を飛ばす攻撃だ。

「避けないと あ、でも……」

避けようとしたミラだが、自分の立ち位置に気がついて表情を歪める。

ミラとグラキシアの後ろに、石楠花の隠れている荷車があった。

棘を避けたら、荷車が破壊されてしまう。

「……どうしよう」

「大丈夫。任せて」

「え？」

とミラがグラキシアに聞き返した次の瞬間、【ナルガクルガ原種】の尻尾から棘が放たれた。

ミラは【ジークリンデ】の切っ先を地面に突き刺し、盾のように構える。

だが、飛んでくるはずの棘が飛んでこない。

ミラが剣から顔を出して見てみると、棘は空中で何かにぶつかって叩き落とされていた。

「何で……？」

思わず身を乗り出すと、踏んだ下草がパキ、と音を立てて砕け散る。

その草は、完全に凍りついていた。

そして、少し前方の地面には無数の氷の玉が転がっている。

降り注ぐ雨粒が凍りつき、それが棘を叩き落していたのだ。

『大丈夫』と言ったのだから、これはグラキシアの仕業だろう。

しかし、どうやってこの現象を起こしたのだろう。

確かに【白猿薙】【ドド】は氷の属性を持つ武器だが、降り注ぐ雨をそのまま凍りつかせるような芸当はできない。

ミラはグラキシアに目を向ける。

グラキシアの周囲から前方に向かって、白い霧のようなものが漂っていた。

温度を奪い、凍結させる霧。

【ウカムルバス進種】の【大地の絆】ガイアタイズである。

棘飛ばしでは意味がないことを悟ったのか、【ナルガクルガ原種】が尻尾を振るのを止める。

二人目がけて一直線に突進して行く。

だが、氷の雨の中に突っ込んでしまう。

氷の玉に容赦なく打たれ、その場に足を止める。

「ラキアちゃん！」

ミラが【ジークリンデ】を肩に担ぎ上げ、走って行きながら叫ぶ。

グラキシアは一つ頷き、ミラが【ナルガクルガ原種】の前にたどり着いたところで能力を止める。

ミラは【ナルガクルガ原種】に肉薄し、気が溜められ、淡く光る【ジークリンデ】を振り下ろした。

【ナルガクルガ原種】は刃翼で受け止めるが、破壊力を増した刃は刃翼を斬り碎いた。

腕も深く切り裂かれ、【ナルガクルガ原種】は怒りの声を上げた。

大きくジャンプして、木々の間に飛び込む。

黒い体は、すぐに暗い【樹海】の木々の中に消えてしまう。

「逃げたのかな？」

「うっん……まだいるよ」

ミラが【樹海】の中を見回しながら言う。

木々の中にちらちらと赤い光が見えていた。

ダメージを受けて怒り状態になった【ナルガクルガ原種】の目が赤く輝いているのだ。

光は高速で動き回っていて、どこにいるのかわからない。

移動の音を頼りに探そうにも、雨と風の音にかき消されてしまう。

(ナルガクルガ進種の力が使えたら……)

ミラは、意識を集中して木々の間に目を凝らした。

右から左へ、ゆっくりと視線を動かしていく。

(いない……?)

そう思ったとき、右側の木々の中に赤い光が点り、【ナルガクルガ原種】が飛び出してきた。

一度見た場所なのに、見落としていた。

いや、能力が発動していない。

【ナルガクルガ原種】は左右に小さくジャンプし、赤い光をジグザクに引きながらミラに飛びかかる。

(使わない方がいいってお姉ちゃんに言われてたのに……っ)

きちんと忠告を守ればよかったと後悔する間もない。

高い俊敏性を誇る【ナルガクルガ原種】は、一瞬でミラの眼前まで迫っていた。

【ジークリンデ】を胸の前に引き寄せるのは辛うじて間に合った。

【ナルガクルガ原種】が腕を薙ぎ払い、身を守ろうとした【ジークリンデ】ごとミラの体を吹き飛ばした。

「うぐ……」

空中を吹き飛ばされ、地面に叩きつけられたミラが呻く。

「ミラちゃん！」

ミラのところに駆け出そうとするグラキシア。

だがそこに、体を反転させながら【ナルガクルガ原種】が尻尾を叩きつけた。

「く……きゃっ」

ぎりぎりで尻尾本体は躲したが、叩きつけられたときに発生した衝撃波に吹き飛ばされる。

しかも、その尻尾はダブルブルグの屋台を直撃していた。

木片や商品が碎けて飛び散り、それに混じって石楠花の小さな体も空中に跳ね上げられた。

「わあっ」

石楠花が短い悲鳴を上げる。

鋭い聴覚を持つ【ナルガクルガ原種】はそれを聞き逃さなかった。

赤光を放つ瞳が石楠花の体を捉え、【ナルガクルガ原種】が石楠花に飛びかかる。

「石楠花ちゃん！」

「シャクナちゃん！」

ミラとグラキシアが叫ぶ。

二人はようやく起き上がったばかり。

今からどんな手を打つこともできなかった。

【ナルガクルガ原種】が、かっと口を開き、

その瞬間 風が生まれた。

台風の風にも勝る風が渦巻き、小さな竜巻を作り出す。

その中から赤錆びた鱗が飛び散り、【ナルガクルガ原種】の顔面に刃のように突き刺さった。

だが、一度空中に跳んだ体の勢いはその程度では止まらない。

【ナルガクルガ原種】は竜巻に突っ込み、何かにぶつかって吹き飛ばされた。

石楠花の体を包む大きさがたった小さな竜巻を割って、白亜の巨体が姿を見せる。

キアアアアアアア

咆哮と共に、白い翼が広がる。

流線型のスマートな体。

【古龍】特有の前肢と一体ではない翼。

大気に触れた体が瞬時に硬質化し、黒光りする鋼の色へと変わる。

鋼龍、風翔龍とあだ名される【古龍】、【クシャルダオラ】。

いや 【龍化】を行った【クシャルダオラ進種】の姿である。

ミュリエリアと六花は、対面の椅子に座って話をしていた。

「脱皮？」

と聞き返したミュリエリアに六花が頷く。

「ああ。クシャルダオラ原種は成長の過程で脱皮をするだろう？
進種も、生涯で一度だけ脱皮をするんだ。」

もつとも、実際に皮を脱いだりはしないかな」

「と、言うこと？」

「クシャルダオラ進種の子供は種族の持つ能力を使うことができない。だが、第二次性徴を迎えるころに、自動的に龍化をするんだ。」

そして、その後で能力を自在に使えるようになる。」

要するに、クシャルダオラ進種の体が大人になる儀式というわけだ。

全身が鱗に覆われ、それが錆びるのはその前兆なんだ。普通は親から教わるんだがな」

「石楠花ちゃんは孤児で、他の種族の方に育てられたそうですから。もっとも、グラキシアの両親はちゃんとそれを知っていたようだが。」

「そうか。まあ、病気ではないから、心配はいらない」

「そうですか。よかった。」

「あら？ でも……」

と、ミュリエリアが不思議そうな顔になる。

「何かあるのか？」

「ええ。この家に来たとき、大変なことになると言いませんでしたか？」

「言ったな。」

脱皮、つまり、初めての龍化は本人の意思とは無関係に行われるんだ。

家の中で龍化されたら、大変なことになるだろうか？」

【龍化】を行うと、体のサイズは人型のときよりずっと大きくなる。

部屋の中でそれが起これば、家が潰れかねない。

確かに、大変なことだった。

「そういう意味だったんですか。」

では、石楠花ちゃんが体調を崩していたのも、脱皮のせい？」

「ん？ ああ、それは脱皮とは別だ。」

だが、そっちは治しようがないんだがな」

「え　？」

【ナルガクルガ原種】が石楠花へと襲いかかる。

だが、その攻撃は石楠花が身に纏う竜巻　風の鎧に阻まれ、弾かれる。

風に押し返されて地面に着地する【ナルガクルガ原種】。

そこに、石楠花がブレスを放った。

渦巻く風のブレスが【ナルガクルガ原種】に直撃し、吹き飛ばす。

吹き上げられた【ナルガクルガ原種】は背中から地面に落ちた。

すぐに起き上がろうと、手脚に力を込める。

だが、その状態から脱出できない。

よく見ると、地面すれすれのところを白い霧が漂っていた。

雨を含んだ地面を凍らせて、【ナルガクルガ原種】の背中を貼り付けてしまったのだ。

「ミラちゃん！」

「うん！」

ミラとグラキシアは身動きの取れなくなった【ナルガクルガ原種】へと近づいた。

ミラが肩に担いだ【ジークリンデ】に気が最大限に蓄積されて淡く輝き、グラキシアが構えた【白猿薙【ドド】】が、練気のオーラを帯びて赤く輝く。

「これで」

「終わりだよ！」

二本の剣が、【ナルガクルガ原種】へ、振り下ろされた。

「治しようがないというのは、どういづ………？」

驚愕を露にして、ミュリエリアが聞く。

「さつき言っただろう。脱皮を迎えるのは体が大人になるときだと
情緒不安定、腹痛、出血……君も女性なら覚えがあるんじゃない
か？」

「……まさか、月経ですか？」

月経。俗に言う生理のことだ。

「時期的に見て、おそらく初潮だろうな。

病気ではないのだから、治しようなどあるはずもない」

「それならそうと最初から言ってお下さい……。驚いたじゃないです
か」

ミュリエリアは文句を言いながら椅子から立ち上がり、

「帰ってきたらお祝いかしらね」

と呟いた。

二本の剣に刺し貫かれて、【ナルガクルガ原種】は力尽きた。

風が巻き上がり、石楠花の体を包み込む。

ダルブルグは覚えてたの彼女の能力によって空高く打ち上げられたのだった。

NEXT>第十四話「A girl of asymmetry」

<簡易キャラクター紹介>

名前：グラキシア

年齢：18

性別：女

種族：ウカムルバス進種

能力：【大地の絆・凍】

名前：石楠花

年齢：11

性別：女

種族：クシャルダオラ進種

能力：【大地の絆・風】【飛行】【龍化】

名前：ダルブルグ

年齢：39

性別：男

種族：ブロス進種（ディア族）
能力：【大地の絆・地】【肩角】

第十三話「凧の綱籠」（後編）（後書き）

石楠花が泣いたり喚いたりしてるだけになってしまった……。再登場時にはちゃんと喋らせてあげるから許してくれ……。

医療ドラマかよ！　ってくらい病気ネタが続きましたね。

六花がいる間にやっておかないといけないので、仕方ないんですが……。

まあ、それも今回で終わりです。

あ、次回予告の意味は「左右非対称の少女」です。

第十四話「A girl of asymmetry」

台風の日、夜、ミラと石楠花はミラの部屋で話していた。

「ねえ、石楠花ちゃん」

ベッドに座ったミラが、隣に座っている石楠花に話しかける。

「何？ ミラお姉ちゃん」

ミラお姉ちゃんと、ミラは呼ばれていた。

石楠花の暮らしていた所は、皆家族ということ、年上は兄とか姉とか呼ぶ習慣があったらしい。

「能力使えるようになったんだよね？ どうだった？」

「どつって、嬉しかったよ？」

「そういうことじゃなくて、どうやって能力を使ったの？」

「どつやって、って？」

不思議そうに首をかしげる。

「うーん、何て言えばいいのかな……こう、使い方、みたいな？」

「使い方……」

首を傾けたまま、頬に人差し指を当てる。

「龍化は勝手になってたし……風を使うのは、何となくできてたから」

指をくるくると回すと、小さな風の渦が起る。

風の渦は指からふわりと飛び、シーツに螺旋状の皺を作った。

「そっか……」

残念そうにミラが呟く。

何か能力を使うヒントが聞けるかもしれないと思ったが、当てが外れてしまったようだ。

「何でそんなこと聞くの？」

「うっん、何でもない。」

それにしても、石楠花ちゃんってこんな子だったんだね。怒ったり泣いてたりだったから、わからなかったよ」

「あ、あれは……」

石楠花が顔を赤く染めてそっぽを向く。

恥ずかしかったらしい。

「……いつもなら、あのくらいで泣かないんだよ？ほんとだよ？」

「うん、そつだよな。自分の体に何が起きてるのかわからないんだから、不安になっても仕方ないよ」

と、石楠花に言いながら、昼間の戦いを思い出す。

能力を使わないように、というミュリエリアの話忘れていたわけではなかった。

でも、一度使えたんだから、と、思ってしまった。

その結果、【ナルガクルガ原種】に一撃を受け、石楠花を危険にさらしてしまった。

この弱肉強食の世界を生き残るために、力は役に立つ。

だが、使いこなせなければ、逆に危険を招く力だ。

自分の体のことがわからないのは、ミラも同じだった。

(何とかしないとね……)

台風は通り過ぎ、翌朝。

空は晴れ渡り、雲一つ無い。

工房の前に、ミュリエリアとミラ、グラキシアと石楠花が立っている。

グラキシアと石楠花は旅の支度を調べていた。

足元に荷物の袋が置かれている。

石楠花がかぶっていた布は、もう必要ない。

「ミュリエリアちゃん、ミラちゃん、色々ありがとう」

「お世話になりました」

ペこりと石楠花が頭を下げる。

「これからどうするの？」

「家に帰ろうかなって思ってた。一応、シャクナちゃんのこと報告に」

「私に教えておいてくれなかったことに文句も言いたいから」

「そう」

うん、と頷いて、グラキシアは荷物を担ぎあげた。

「それじゃ、そろそろ行くね」

「ええ、気をつけて」

「また遊びに来てね」

「うん。」

「じゃ、行こっか」

グラキシアが手を差し出し、それを石楠花が握る。

二人は、手を繋いで歩き出した。

少し歩いたところで、石楠花が振り返って、あいている方の手を胸の前まで上げ、

「バイバイ」

と、はにかみながら小さく手を振った。

「またね、石楠花ちゃん！」

「さようなら」

ミラが頭の上で大きく、ミュリエリアが石楠花と同じように胸の前で手を振り返す。

石楠花は前に向き直って歩いていき、二人の後姿が遠ざかっていく。

仲良く、何かを話しながら歩いているようだ。

もう何を言っているかは聞こえないが、グラキシアの顔を見上げる石楠花の横顔は笑顔を浮かべていた。

幸せそうな笑顔。

特別な人なのだと、一目でわかるようだった。

(私も、お姉ちゃんと話すときはあんな顔してるのかな?)

だったら少し恥ずかしいかな、と思う。

だが、同時に幸せなことでもあった。

「さあ、今日の仕事を始めましょうか」

工房のドアを開けながらミュリエリアが言う。

ミラは、ミュリエリアに続いて家に入りながら、

「お姉ちゃん。私、今日は出かけてきてもいい?」

「ええ、いいわよ。遊びに行くの?」

「遊びじゃないけど、火山に行きたいの」

「火山?」

「うん。ルクスさんのところ」

「ルクスさん？ あの人に何か用事があるの？」

不思議そうにミュリエリアが聞く。

ミラは一つ頷いて答えた、

「ちょっと、教えてもらいたいことがあるから」

有史以前に存在する古代文明の遺産 【過学】の技術によって
地下深くに作られた【ハンター】たちの拠点。

浅い洞窟の奥に、巧妙に隠された扉が開き、中から六人の【ハンター】が出てくる。

【ハンター】の一集団としては、多い部類だ。

一人は【太刀】を背負った、断ち斬る者【サムライ】。

一人は【双剣】を背負った、斬り裂く者【リッパー】。

一人は【片手剣】を腰の後ろに差した、立ち回る者【タクティック】。

一人は【ランス】を背負った、穿ち貫く者【ランサー】。

最後の二人は、【ヘビィボウガン】を肩にかけた【スナイパー】だ。

そのうち一人には右腕が存在しない。

六人の【ハンター】たちは無言のまま、一糸乱れぬ動きである場所へと向かって歩き始めた。

【旧火山】の【エリア】近くの村。

狩りを行わず、商業によって成立している風変わりな村である。

ミラはその村に近づきながら「あれ？」と首をかしげた。

村を囲んでいる柵が広範囲にわたって壊れていた。

一部は修繕されているが、大部分は壊れたまま放置されている。

そして、村の入り口の近くを、武器を持った数人の人が歩いていた

ミラが入り口に近づいて行くと、それに気がついて一斉に武器を抜く。

「な、何ですか？」

ぎょつとして足を止めるミラ。

反射的に背中【夜刀】【月影】に手をかける。

そのとき、人々の中から声があがった。

「あれ、お前ミラじゃないか？」

金色の水着のような防具を着た褐色の肌の女性で、手に【弓】を持っている。

少し変わった【弓】で、通常よりも短めの【弓】だった。

「アンゼリカさん！」

ミラがその人物の名前を呼ぶ。

「おーやっぱりミラだ。何やってるんだ、こんなところで」

「この村の知り合いに会いに来たんです。アンゼリカさんこそ何でここに？」

アンゼリカと出会ったのは【火山】地帯だ。

名前は似ていても、随分遠い。

「あたしは金稼ぎしてるんだ。友達とエイシスアルカディアに旅行に行こうって話になってな」

エイシスアルカディア（AAA - Arcadia）。

アカデミア アリーナ アミューズメント
学術、闘技、娯楽の三つを兼ね備えた、理想郷（Arcadia）
とまで言われる世界最大の都市だ。

元々は【ランポス】 【ギアノス】 【ゲネポス】 【イーオス】の四
種族が、身を守るために身を寄せ合ってきた村で、それが発展し
て今日に至っている。

通貨を最初に使い始めたのがこの都市で、世界で唯一貨幣を作っ
ている場所でもある。

「そうだったんですか」

二人が親しそうに話しているのを見て、人々は武器を納めて散ら
ばっていく。

ほっと胸を撫で下ろし、ミラが聞く。

「あの人たちは？」

「あたしと同じで、この村に雇われてるんだ。住むところの世話も
してくれて、報酬もいい。」

火山まで噂が届くくらいだったからな。ま、それも今日で終わり
だが」

「今日で終わり？」

「そうだ。実は」

アンゼリカが話し始めたとき、「アンゼ」と間延びした声が聞

こえてきた。

アンゼリカとミラは、声の方へと振り向き、

「な……」

「え……」

絶句した。

「休憩時間だよ。ね、おやつ食べよお」

ほにゃ、と擬音が聞こえてきそうな笑みを浮かべた女性が立っている。

頭の左右で髪を束ねたツータール。

よく見ると左右で髪の色が違っていて、一方が赤、もう一方が朱色をしている。

色が異なる部分は、髪だけではなく腕にもあった。

右腕には赤い甲殻があり、左腕には朱色の甲殻がある。

右腕の甲殻は菱形で盾のような形状で、左腕の甲殻は腕に沿う棒のような形をしていた。

が、はっきり言ってその辺りに注目している余裕は無かった。

「リーヤ！ お前何て格好してるんだよ！」

驚いて叫ぶアンゼリカの隣でミラもうんうんと頷く。

リーヤと呼ばれた女性は、壮絶な薄着をしていた。

胸と腰の一部分しか隠れていない。

露出の程度で言えばアンゼリカと同程度だが、アンゼリカのそれが防具なのに対して、彼女は布一枚。

レースの模様から素肌が透けて見えている。

端的に言つて、下着姿だった。

しかも、胸が大きい。

豊かな膨らみが窮屈そうに下着を押し上げている。今にもあふれそうな勢いだった。

今はミラとアンゼリカしかいないが、もし男性がいれば目が釘付けになること間違いないだろう。

「これえ？ 脱いじゃった。暑いんだもん」

「脱ぎ過ぎだろうが！ 痴女かよ！」

「あ、酷いよお。こんなに暑かったら、溶けちゃうでしょ」

「お前はすでにトトロトロだよ、頭の中がな！」

「ああもう、こっち来い！」

アンゼリカがリーヤの腕を引っ張って歩き出す。

「悪いミラ。こいつに服着せないといけないから、またな」

「あ、はい」

ミラが頷く。

アンゼリカはリーヤを促して歩き始めるが、リーヤがふらふら歩いていて中々進まない。

「おい、ちゃんと歩け」

「暑くて無理い。ぐてー」

「もたれるな！　そして胸を押し付けるな！　嫌味か!？」

「アンゼのは可愛いよねえ」

「くそう、この暑さでその無駄にでかい塊が溶ければいいんだ」

「あはは、何言ってるのお？　人が溶けるわけないでしょ〜？」

「溶けるって言ったのはお前だよ!」

わいわい。

騒ぎながら二人が歩いていく。

残されたミラはしばらく呆気に取られて立ち止まっていたが、やがて、気を取り直して歩き始めた。

ルクスの家を目指して進む。

「あれ？」

村の中を歩いていると、違和感を覚えた。

この村には商店が多いのだが、そのほとんどの店の看板がなくなっていた。

家の前に、家財道具を積んだ荷車を止めているところもある。

人通りもなく、村全体に閑散とした雰囲気漂っていた。

（何かあったのかな？）

そんなことを考えながら歩き、ルクスの家の前に到着した。

扉の前に立ってノックしようとする。

と、それより先に勝手に扉が開いた。

中から、防具に身を包み、武器を持った何人かの人が出てくる。

「待ってくれ、まだ話は」

家の中から聞き覚えのある声がする。

ルクスの声だ。

「もう話は終わってるっての。」

契約は村を守ることだろ？ 引越しの世話までしてられるかよ」

「そうそう、他をあたるんだな」

口々にルクスに言い返して、ミラの隣を通り過ぎて歩いて行ってしまうた。

ミラはその人たちとすれ違って家の中に入る。

家に入ると、ルクスが椅子に座っていた。

【グラビドヒーローシリーズ】を身に着け、テーブルの上に【頭装備】を置いてある。

ルクスは肩を落としていて、ミラが入ってきたことにも気づいていない様子だった。

「ルクスさん」

ミラが呼びかけると、ルクスが顔を上げた。

驚いたように少し目を見開く。

「ミラ？」

「はい。こんにちは、ルクスさん。」

あの、さっきの人たち、どうかしたんですか？」

「ん？ ああ、少しもめてしまっただけだ」

「この村の様子が変なのと何か関係あるんですか？」

「気づいて いや、見ればわかるか」

「何があつたんですか？」

「この前、ちょうどミラが来てたときだ。ハンターに村を見つけてしまっただろう？」

その後から、ハンターが攻めてくるようになったんだ」

当然の話だ。

【ハンター】の目的は【進種】を狩ることなのだから、拠点を見つければ襲うに決まってる。

「あの一件の以来、俺だけではなく、人を雇って村の防衛にあたってもらうことが決まってる」

ルクスにだけ頼る習慣は止めにしたらしい。

それでも、その力を他所に頼るのがこの村らしいと言えはらしい。

もっとも、村の人間が急に力をつけることができない以上、それは仕方ないことだ。

何年か後には、ルクスの姿を見て育った子供たちが自分たちの手で村を守ることもできるようになるだろう。

「そのおかげで、一応追い返すことはできたんだが、結局は一時しのぎだ。」

ハンターに見つかった村の末路は決まっている」

「村を、捨てるんですか……」

「そうだ。この山の少し上に新しい村を作ることにした。

もう、半分以上の村人は引越しを終えている。

そして、残りの村人の引越しが今日なんだが、雇った奴らに護衛を断られてしまっただな」

「それがさっきの人たちですか」

「ああ。後二人いるが、彼女らも聞いてくれるかどうか……。
っと、すまない。愚痴っぽくなってしまったな。

ところで、君の用件は何なんだ？ 仕事を頼んだ覚えはないが」

「あ、今日は私用で。」

ルクスさんに聞きたいことがあったんです」

「俺に？ 何だ？」

「その」

「お邪魔します」

「何か用があると聞いたが」

ミラが言いかけたとき、ルクスの家の扉が開き、アンゼリカとリ

ーヤが入ってくる。

リーヤは今度はちゃんと防具を身につけていた。

【ナルガXシリーズ】。

【腕装備】は着けていない。

服を着ていても露出の多い奴である。

背中には【太刀】。

朱色の刀身は【シヨウグンギザミ亜種】の素材から作られていて、
鍔が五角形の木でできている。

【将刀【飛車】】と呼ばれる【太刀】だ。

「あれ？ ミラ、こんなところにいたのか」

「君たちは知り合いだったのか」

アンゼリカがミラに声をかけたのを見て、ルクスが言う。

「呼び出しておいてすまないが、少し待っていてくれ。

先にミラの用を済ませておきたい。

ミラ、話の続きを」

「あ、はい。能力の使い方を聞きたいんです」

ミラは、それを聞くためにルクスのところを訪れたのだった。

ルクスを選んだのは、全身を変化させる【鎧装】の能力が、自分を変化させるミラの能力と近いのではないかと思っただからと、年の功に期待したからである。

「力の使い方？」

ルクスが不思議そうな顔になる。

普通、種族の能力の使い方は勝手にわかる。

教わらなくても呼吸できるようなものだからだ。

「私、能力の使い方がわからなくて。

使えるときと使えないときがあって、困ってるんです」

「ほう　それは珍しいな。

しかし、使い方と言っても、俺と君の力は違うだろう」

「ええと、まあそうですねですけど……」

「使うのなんて、簡単だよお」

リーヤが口を挟む。

「ほらあ、シャキーンって感じ？」

「じゃ、シャキーン？」

「って言うのか、誰ですか？」

「あ、私？」

「私はあ、リーヤって言うの。よろしくねえ〜」

「は、はあ………よろしくお願いします」

「さっき言った友達がこいつだ。

変な奴だけど、悪い奴じゃない。ま、よろしくしてやってくれ」

苦笑いしながら、アンゼリカが言う。

「それにしても、能力の使い方がわからない、か。やっぱり、お前は変種なのか？」

「知ってたんですか？」

ミラが驚く。

「ああ、まあな」

「え、ミラちゃんって変種なの？
私もそうなんだよ〜」

「え、そうなんですか？」

「うん。ほらほら」

と、両腕を見せる。

「こっちがザザミの盾で、こっちがギザミの鎌。面白いでしょ？」

リーヤは【ザミ進種】のようだ。

いや、【ザミ変種】と言うべきだろうか。

【ザミ変種】の二つの種族、【ザ族】と【ギ族】の両方の形質が現れているようだった。

「仲間だね～。ぎゅ～」

「わぶっ」

いきなりリーヤに抱きしめられた。

豊満な胸にミラの顔が埋まって息が詰まる。

「んー!」

「ちゃんっ、動かないでえ」

「何やってるんだ、お前は」

ぐいつ、とアンゼリカが二人を引き剥がした。

「ぶは　ん?」

顔が濡れているのに気がついて、ミラは指で頬を擦る。

ぬるぬるとした粘度の高い液体　【ヴォルガノス進種】の保護液だった。

【変種】とは言え、リーヤは【ザミ変種】で、これはリーヤの能力ではない。

(暑いって言ったから、アンゼリカさんが塗ってあげたのかな？でも……)

前に助けてもらったときは、裸にされてたっけ、なんて。

思わず、アンゼリカとリーヤが裸で抱き合う姿を思い浮かべる。

(いやいや、何を考えてるんだろう)

ぶんぶん頭を振って、想像を追い払った。

「とにかく、何かアドバイスとかありませんか？」

リーヤの『シャキーン』はあてにならない。

ルクスに振って、話の軌道を修正する。

「アドバイスと言われても……やはり、感覚で使えてしまうものだからな……」

いや……待てよ」

「何かあるんですか？」

何か思いついた風なルクスに、ミラが身を乗り出して聞く。

「俺の熱線的能力は感覚だが、鎧装の使い方には少しコツがあるな」

「それ、教えてください！」

「ああ」

ルクスが頷く。

「大切なのは、自分がどう姿を変えるかというイメージだ。腕一本から全身まで変えられるから、その姿を上手くイメージしなければ思い通りの鎧装はできない。

そして、もう一つ、意識を切り替えることだ。

個人的な意見だが、別人になるくらいの気分でやったほうが上手くいく。

何か、切り替えるための言葉や行動を決めておくといい。俺の『変身』もそのためのものだ」

「あれってそんな意味があつたんですかあ」

と、リーヤ。

単なる子供のためのパフォーマンスではなく、そんな意味も含んでいたらしい。

「イメージと、切り替え……」

難しい顔で考え込むミラ。

そこに

「ルクスさん！」

扉を押し開けて、一人の男が駆け込んでくる。

以前に見た村人の一人だ。

「ルクスさん、大変だ！ ハンターが山を登ってきてる！」

「また来たのか！」

椅子を蹴倒してルクスが立ち上がる。

「今度は何人だ？」

「六人！ 剣士が四人にガンナーが二人だ」

【剣士】と【ガンナー】というのは、【ハンター】の内わけだ。

近接武器を扱うのが【剣士】で遠距離武器を扱うのが【ガンナー】である。

「この小さな村に六人も……向こうも本気か」

「本気か、とか落ち着いている場合じゃないんだ！

村で雇ってた連中、いなくなってるんだよ！」

「な、何？ もうか？」

村人の叫びにルクスも焦りを見せる。

さすがに、護衛を断ってすぐにいなくなるとは思っていなかった

のだから。」

「どうする？」

「……出発の準備は？」

「お、終わっている」

「それならすぐにでも出発だ。
ハンターの相手は俺がする」

「あの、私も手伝います！」

「手伝ってくれるか。すまない、助かる」

ミラが申し出ると、ルクスは間髪入れず頷いた。

会話している時間すら惜しいのだ。

ルクスは、アンゼリカとリーヤの二人に目を向けた。

「まだ話を聞いていないのは君たち二人で最後だが、君たちはどうする？」

「いいですよ」

あっさりと、リーヤが了承する。

「その代わりい、お金下さい」

「ちょ、お前、何を言ってるんだ。ハンター六人だぞ？」

アンゼリカが会話に割り込む。

「わかってるよお。でもでも、こっちも四人だし、何とかなるよ」

「……待て、それはあたしが数に入ってるのか？」

「うん」。だって、アンゼも旅行代足りてないでしょお？」

「それはそうだが……」

「あれ？もしかして一緒にやってくれないの？」

きよとんと首をかしげて、リーヤがアンゼリカを見つめる。

アンゼリカと一緒に手伝うのを、微塵も疑っていない瞳だった。

「じい〜」

「……はあ」

アンゼリカは大きなため息をついて、両手を上げた。

「わかったよ。あたしも手伝う。報酬、弾んでくれよ」

「わかった。無事に新しい村に着いたら追加報酬を支払おう。

君たちが望むなら、そのまま村の護衛を続けてくれても構わない」

「おし、商談成立だな」

「ようし、頑張っちゃおうよ」

「私も、頑張ります」

気合を入れる三人。

「皆、ありがとう」

ルクスが礼を言って、机の片隅に置いてあった紙を広げる。

それは、周辺の地図だった。

非常に精密な地図で、【ハンター】も知らない道や村が細かく描きこまれている。

広げた地図を前にして、ルクスが言う。

「さて、作戦を立てるとしよう」

六人の【ハンター】たちがたどり着いたとき、目標の村はもぬけの殻だった。

村ごとどこかに逃げたのだろう。

【ハンター】に見つかった【進種】の行動としてはよくあるもの

だった。

しかし、余程焦っていたのか、荷物を運ぶのに使ったのであろう荷車の轍が残されていた。

【ハンター】たちは、逃げ出した獲物たちの足跡を追って、行動を始めた。

火山地帯の山中の道なき道。

ごっごつと岩が突き出っていて、見通しが悪い。

岩場の一方は高い岩壁になっていて、その反対側には溶岩が流れている。

村人を追って山道を登ってきた【ハンター】たちは、道の真ん中に立っているミラを発見した。

ミラの後ろには、二台の荷車。

その先は、行き止まりになっていた。

偽の手がかりを残して、【ハンター】を誘導したのだ。

ミラを見つけた【ハンター】たちは、【剣士】三人と【ガンナー】二人に分かれる。

三人の【剣士】 【サムライ】 【タクティック】 【ランサー】
は各々の武器を手にとってミラへと向かい、【スナイパー】の二人
は岩に邪魔されない射線を確保するために近くの岩へと上る。

「三人……ちよつと釣れすぎたかな」

三人の【剣士】が迫ってくるのを見ながらそう呟き、ミラは【夜
刀【月影】】を引き抜いた。

二人の【スナイパー】が岩に上り、【ヘビィボウガン】を構える。
名前など知る由もなく、【進種】は勝手に【ハンターボウガン】
と呼んでいる代物だ。

【進種】が一般的に使う【ヘビィボウガン】よりも、遥かに長い
射程を持つように作られている。

そして、その射程を生かすための目を持つのが【スナイパー】と
呼ばれる【ハンター】だ。

【ハンター】は使う武器に応じた能力に特化しているのである。

【スナイパー】の特化能力は、視力。

スコープをなしでの超長距離の狙撃すら可能だ。

一人は片方の膝を着いた姿勢で【ハンターボウガン】を構え、もう一人 片腕の無い【スナイパー】は地面に伏せて、器用に【ハンターボウガン】を支えている。

その姿を、岩の陰から見ている者がいた。

「高い位置を取るって判断は正しいが……」

アンゼリカは、小声で呟き、頭の上にくくりつけた矢筒から一本の矢を抜いた。

うけ狙いでそんなところにつけているのではなく、ちゃんと理由がある。

背中につけていたのでは、矢が燃えてしまうからだ。

そう、アンゼリカは、溶岩から突き出た岩の陰に身を潜めていたのだ。

「それは、相手にガンナーのいない場合だけだぞ」

呟き、【ヴォルガノス原種】の素材から作られた短弓【火砕弓】に、矢を番える。

【弓】の握りの部分に小さなビンが取り付けられていて、中には赤い液体が入っている。

【強撃ビン】と呼ばれる道具だ。

液体には【ニトロダケ】から抽出した成分が含まれ、これを鏃やじらにつけて弓を放つと、空気との摩擦で高熱を発生し、矢の威力を飛躍的に高めることができる。

岩の陰から身を乗り出し、【火砕弓】を横向きに構えて弦を引く。

近くにいる片腕の【スナイパー】を狙い、矢を放った。

放たれた矢は空を引き裂いて飛び、【スナイパー】の左の脇の下辺りに突き刺さった。

「ぐ……」

短い呻きを残して、片腕の【スナイパー】が岩から転落する。

アンゼリカの放った矢は、【スナイパー】の心臓を貫いていた。

ミラに片腕を吹き飛ばされながらも、今まで生き伸びた【ハンター】の呆気ない最後だった。

アンゼリカは続けて二本目の矢を抜くが、それを番えるよりも先に、もう一人の【スナイパー】がアンゼリカに銃口を向けていた。

アンゼリカは慌てて岩陰に身を隠し、一瞬遅れて放たれた銃弾が岩に命中した。

一方、村人たちは、ルクスに率いられて新しい村へと向かった。

大荷物と上り坂が相まって、歩みは遅々としたものだ。

ざわ、と村人たちがざわめく。

【双剣】を背負った【リッパ】が、彼らの背後から追ってきた。

全員が残した手がかりについていくほど間抜けではなかったようだ。

「一人か」

「ん、アンゼとミラちゃんが思ったよりも釣っちゃいましたねえ」

先頭を歩いていたルクスとリーヤが言葉を交わす。

「ま、アンゼちゃんなら大丈夫かなあ。

それじゃあ、予定通りここは私が引き受けますねえ」

「ああ。頼む」

「はい。頼まれましたあ」

暢気な声とは裏腹に、言い終わったときにはリーヤは駆け出していた。

先頭から最後尾まで一気に駆け抜けて【将刀【飛車】】を左手に

引き抜き、練気を刃に通す。

通常【太刀】は両手で扱うのだが、リーヤは当たり前のように片手で構えていた。

普段からそうやって使っているのだろう。

【リッパー】は背中の【ハンターツイン】（勝手に命名）を引き抜くと同時にその剣を天に掲げた。

全身が赤い練気に包まれる。

【リッパー】の特化能力はスタミナ。

その恩恵が、本来なら短時間しか維持できない鬼人化の長時間使用だ。

ぐん、と速度を増した【リッパー】の前にリーヤが立ちふさがった。

リーヤに、鳥が翼を広げるように両腕を広げた【リッパー】が斬りかかる。

左右から挟み込むように振られた【双剣】を、気刃状態の【将刀】【飛車】と右腕の甲殻の盾で受け止め、押し返す。

「ようし、行くよお」

リーヤの気合は、やっぱりどこか暢気な声だった。

ミラは【ハンター】を相手に苦戦を強いられていた。

そもそも、化け物染みた力を持つ【ハンター】を三人も同時に相手にすることに無理があるのだ。

アンゼリカが援護をしてくれる予定だったが、まだ【スナイパー】を仕留められていないようだった。

【サムライ】が振り下ろす【太刀】 集中力特化の能力によって赤々と輝く練気に包まれた【狩人ノ太刀】（勝手に命名）を

【夜刀【月影】】で受け、強引に軌道を逸らす。

【狩人ノ太刀】は勢い余って突き出ていた岩に食い込み、まるでスポンジでも斬るように両断してしまった。

ぞっとする間もなく、【ランサー】が【ハンターランス】（勝手に命名）を構えて突っ込んでくる。

その切っ先を躲し、【夜刀【月影】】で反撃を叩き込むが、【ランサー】は盾でそれを受け止めた。

脚力に特化している【ランサー】は、一撃を受けても微動だにしない。

風切り音と共に、視界の端に何かが移る。

ミラはバックステップで飛び退きながら、【夜刀【月影】】でその何かを斬り払った。

カラン、と乾いた音を立てて、真つ二つになった【ブーメラン】が地面に転がる。

【サムライ】と【ランサー】の少し後ろにいる【タクティック】が投げたものだ。

【ハンター】の中で唯一特化能力を持たないが、唯一道具を使う。いざ戦いとなると、他の【ハンター】のサポートをして立ち回る、邪魔な存在だ。

今の戦闘でも、ミラが与えたダメージを【タクティック】によって回復されていた。

【サムライ】の突きがミラに迫る。

ミラは手甲で【狩人ノ太刀】の背を叩いて切っ先を地面に叩き落した。

【夜刀【月影】】を薙ぎ払うが、【サムライ】は一步退いて刃を躲し、【狩人ノ太刀】を振り上げた。

ミラは、一步退いて切っ先から逃れる。

後退したミラの足に、荷車が触れた。

いつの間にか、行き止まりに追い詰められてしまっていた。

【サムライ】の後ろで、【ランサー】が【ランス】を腰だめに構える。

特化された脚力で繰り出される突進の威力は、言うまでもないだろう。

【ランサー】が、ミラに向けて駆け出す。

(アンゼリカさんは……)

援護を期待するが、帰ってくるのは連続した銃声だった。

アンゼリカは【弓】を使っているのだから、銃声がするということとは、まだ【スナイパー】を倒せていないのだ。

ミラー人で、切り抜けるしかない。

そのためには、力が必要だった。

(イメージと、切り替え)

ルクスに言われた言葉を反芻する。

イメージ。

漠然とした力でもなく、能力そのものでもなく、もっともイメージしやすい形　個人。

その一人の姿を思い浮かべる。

【ランサー】がミラに迫る。

ミラは【夜刀】【月影】を地面に突き立て、空いた右手を耳の後ろ辺りの髪に差し込んだ。

何色にも染まる、白い髪。

意識を、切り替える。

イメージした力が奮えるように、その存在を

「書き換える」

手を払う。

髪が扇状に広がり、その端から桜色へと変わる。

【ハンターランス】が荷車を粉碎し、背後の岩壁を深く貫く。

その槍の上に、ふわり、とミラは降り立った。

肩の部分だけでしか止められていない飾り羽を押し上げて、桜色の翼が背中に広がる。

【リオス進種^{セレスティア}】の能力。

今、初めて、ミラは己の意思で能力を発動させた。

右手に火球を生み出し、【ランサー】の顔に叩きつける。

頭を完全に覆う兜に守られているとは言っても、視界を確保するためのスリットがある。

そこから火の粉が入り込み、【ランサー】は槍から手を離し、顔を覆って後退った。

ミラは地面から【夜刀【月影】】を引き抜き、【ハンターランス】の上を走りながら突き出した。

切っ先が、庇った手ごと【ランサー】の頭を貫く。

【夜刀【月影】】を引き抜き、槍、【ランサー】の頭を踏み台にして上空へと舞い上がる。

その背後で、命を失った【ランサー】の体が地面に崩れ落ちた。

空を駆けたミラは、【サムライ】を飛び越えて、その背後の【タクティック】へと向かった。

【タクティック】が構えた片手剣を火球で弾き飛ばし、【太刀】を一閃する。

【タクティック】の鎧の胸が切り裂かれ、そこから血を吹き上げながら大地に倒れた。

アンゼリカはそつと岩から顔を出し、すぐに引っ込める。

次の瞬間、アンゼリカの頭があった位置を貫いて、弾が溶岩に突っ込んだ。

続けざまにアンゼリカが隠れている岩に弾が着弾する。

「くそ、どれだけ弾を持つてるんだ」

岩陰に隠れてアンゼリカが毒づく。

アンゼリカが撃とうとするところを【スナイパー】に狙い撃たれる。

最初から延々とその繰り返しだった。

リロードの隙を狙おうとするのだが、撃ち尽くしたように見せかけて弾を残していたり、いつの間にかリロードをしていたりで手に負えない。

「……このまま隠れててもジリ貧、か」

アンゼリカは【火砕弓】に矢を番え、空に向かって矢を放った。

弓なりになるように放たれた矢。

【スナイパー】の視力は、当然その矢を捉える。

「さあ、こつちだぞ！」

アンゼリカは素早く第二の矢を番え、今度は岩から身を乗り出した。

【スナイパー】は、【ハンターボウガン】をアンゼリカに向け

次の瞬間、天空から落ちてきた矢が、【スナイパー】の頭を貫いていた。

「はぁ……」

アンゼリカは大きく息をついて岩に背を預けた。

「避ければいいものを、進種を殺すことばかり考えてるからそうなるんだ。ばーか」

「や、とお、えい！」

山中に何とも気の抜ける声が響く。

だが、声とは裏腹に、リーヤと【リッパー】は苛烈な戦いを繰り広げていた。

と言つても、その戦いは【リップパー】が一方向的に攻めるのを、リーヤが何とかしのいでいるというものだった。

鬼人化による身体能力の向上、常に全力で戦つても途切れることのないスタミナ、武器のリーチの差が、リーヤを劣勢にしていた。

【双剣】に比べて【太刀】は長い。

鬼人化の迅さで間合いの内側に入られると、どうしても不利になってしまう。

右腕の盾が無かったら、とつくに切り刻まれていただろう。

だが

「ん、そろそろいいかな？」

リーヤの表情にあるのは、余裕。

「ね、ね、不思議だと思わない？」

右腕で刃を受け止めて押し返す。

「おんなじように気を使つてるのに、太刀だと気刃になつて」

左手から、右手に【将刀【飛車】】を持ち変えた。

左腕を一振りすると、朱色の甲殻が手の甲の方に展開する。

隠されていた部分には、鋭い刃が並んでいた。

【将刀【飛車】】を包んでいた練気の光が薄れ、全身へと広がっていく。

「双剣だと、鬼人化になるんだよ！」

【ザミ種】 【ギ族】の鎌と、【太刀】の変則的な【双剣】。

一瞬で、リーヤが【リップパー】との間合いを詰めた。

二人が交錯。

すれ違った後、倒れたのは【リップパー】の方だった。

急激な速さの変化。

【太刀】の動きに目を慣らされていた【リップパー】は、鬼人化したリーヤの動きに対応できなかったのだ。

「ふう、疲れたあ」

【太刀】と鎌を収めながらのリーヤの言葉は、やっぱり暢気なものであった。

ミラは空から次々に火球を放つ。

【サムライ】はそのことごとくを【狩人ノ太刀】で斬り払った。

その刃の届く領域は、さながら剣の結界のようだった。

「このままじゃ、埒が明かない　っ」

火球を目くらましに放って、一気に急降下する。

が、その眼前に何かが投げ込まれ、それが爆発的な光を放った。

「きゃうっ」

光に目を灼かれ、ミラが空から落ちる。

投げ込まれたのは、【閃光玉】だ。

【タクティック】に与えたダメージは深手ではあったが、致命傷ではなかった。

【タクティック】は、【回復薬】で傷を癒して隙を窺っていたのだ。

「う……く……」

地面に落ちたミラは、そのショックで集中を欠き、翼が溶けるように消える。

髪の色も元の白に戻ってしまった。

視界は白く塗りつぶされていて何も見えない。

真っ白な視界の中、迫ってくる二つの足音だけが耳に響く。

「見えなくなつて……リライト！」

ふらつきながら立ち上がり、髪を払う。

白い髪は見た目に変わったように見えないが、瞳が赤く変わっていた。

【フルフル進種^{セアラ}】の能力。

発電によって電磁波を生み出し、反射波で周囲の状況を把握する。

振り下ろされる【太刀】の軌跡も、はっきりと視えた。

(右前、長い武器！)

【狩人ノ太刀】に【夜刀【月影】】を合わせて受け止め、刃を返して【狩人ノ太刀】を外側に流す。

そして、そのまま前に踏み込んだ。

【夜刀【月影】】は峰を向けているが、構わず突っ込む。

「はああああああつ！」

裂帛の気合と共に、【夜刀【月影】】を練気が包む。

【【夜刀【月影】】の峰に隠し刃が展開し、その刃が兜と鎧の隙

間から首を貫いた。

血を噴出し、【サムライ】が仰向けに倒れる。

ミラは感覚に、何かが引っかかった。

ミラは刃を返して振り向きざまに薙ぎ払う。

気刃となった剣は、鎧ごと【タクティック】の体を切り裂き、今度こそその命を断ち切った。

.....

戦いの後

視覚が戻ったミラは、地面に倒れている【サムライ】に近づき、その【頭装備】をゆっくりと剥がした。

【頭装備】の下から出てきたのは、こげ茶色の髪の青年だった。

見た目は、普通の【進種】と何も変わらない。

こんなに似ているのに、

「どうして、私たちを殺そうとするんだろっ……」

思わずミラがこぼした呟きに、答える声はなかった。

<おまけ>

アイルー派遣組織アシストキャッツ。

その本部の建物は、同時に養成校も兼ねていて、家事、戦闘、調合、採取、等々。

仕事に必要な、あらゆることを学ぶことができる。

その廊下を、一匹の【アイルー原種】がとぼとぼと歩いていた。

心なしか髭もしおれ、元気のない様子だった。

その【アイルー原種】の名はシラタキ。

アンゼリカに雇われていたアイルーである。

シラタキは家事手伝いアイルーで、戦闘技術は習得していない。

それで、アンゼリカが護衛の仕事に就くときに一度本部に帰ってきたのだ。

「あ、シラタキ先輩。こんにちはですっ」

シラタキの背中に元気な声がかかる。

シラタキが振り向くと、そこに一人の【アイルー進種】の少女が立っていた。

「メイミィ。こんにちはだニヤ」

少女はメイミィ。

【オトモアイルー】を目指して日々学習している研修生で、試験で【リオレイア原種】を倒した有望株である。

二人には多少の縁がある。

メイミィが養成校に入学した当初、右も左もわからなかったメイミィの面倒を見たのが当時養成校にいたシラタキだったのだ。

「メイミィは今日も元気そうだニヤ」

「シラタキさんは……元気にやいですね。」

もしかして、また仕事が貰えにやかつたんですか？」

「その通りだニヤ……」

「シラタキ先輩は優秀な方なのに、おかしいですね」

「うーん、何が悪いんだろうニヤア……？」

首を捻る二人。

シラタキは気づいていない。

溶岩に潜る手伝いがセールスポイントのアイルーを雇いたいと思う人は、普通いないということに。

NEXT>第十五話「再演の星」

<簡易キャラクター紹介>

名前：リーヤ

年齢：20

性別：女

種族：ザミ変種

能力：【装殻】

<オリジナル武器紹介>

名前：【将刀【飛車】】

分類：太刀

レア度：9

属性：なし

威力：1200

切れ味：紫

会心率：なし

強化元：【将刀【金】】

強化先：【将刀【王】】

伝統的なボードゲームに着想を得た太刀。

飛車の名のごとく、敵陣を貫き斬る切れ味を持つ。

名前：火砕弓

分類：弓

レア度：7

属性：火120

威力：204

会心率：5%

溜め：1・連射LV2

2・連射LV3

3・連射LV4

4・連射LV5

ビン：強、接、ペイント、毒

強化元：なし

強化先：火砕弓？

連射性能を重視して作られた短弓。

怒涛の連射で、獲物を炎に飲み込む。

第十四話「A girl of asymmetry」(後書き)

ようやく十話周辺の伏線を回収。

そして、ついにミラが第二形態(?)にw

これからは今まで以上に原作から離れてしまつのですが、ストーリー的には今後が本番です。

よろしければお付き合ってください。

第十五話「再演の星」（前編）

火山で【ハンター】と戦った日の夜。

ミラは、作業台を挟んで座ったミュリエリアに昼間の出来事を話していた。

その日にあったことを姉に話すのは、ミラの日課になっている。

「ねえお姉ちゃん、どうしてハンターと私たちは戦わないといけなの？」

「……どうしてでしょうね。私には、いえ、それは誰にもわからないことだわ」

ミラの質問に、ミュリエリアは難しい顔で答えた。

「もしかしたら、その理由は考えてもしかたないかもしれないわね」

「え？ どうして？」

「私の知る限り、ハンターとコミュニケーションを取ったことのある人はいないわ。」

ハンターは、私たちに何も語らない。どうして殺すのか、何がしたいのか、目的は何なのか、何一つ。

ミラは、それを变だと思っ？」

「うん、おかしいと思っ」

「そう。でも、それはとても自然なことなのかもしれないわ」

「自然なこと？」

「ええ。」

例えば、ミラが何かの素材を得るためにモンスターを倒すとき、その目的をモンスターに話すかしら？」

「……話さない、けど」

「そうでしょう？　もしかしたら、それと同じことかもしれないわ。彼らは、彼らなりの目的で行動しているかもしれないけれど、私たちと話すことに何の必要性も感じていない。」

姿は似ていても、私たちは決して相容れない存在なのかもしれない
「い」

「……わかり合えないのかな、私たち」

ミラの問いに、ミュリエリアはゆるゆると首を振った。

「それもわからないわ。彼らは、何も話してはくれないから」

「そっか……」

沈んだ声で、ミラが呟く。

「あまり深く考えない方がいいわ。」

今は、わからないことだらけなのだから」

暗くなった場の空気を払拭するように、ミュリエリアは明るい声

を出した。

「そういえば、アンゼリカさんたちは旅行に行くのだったわね」

「うん、そつだよ?」

「あなたも行つてみたい?」

「それは、うん、行つてみたいけど」

ミラは素直に頷いた。

「それなら、行きましようか」

「え?」

「エイシスアルカディアまでは行かないけれど」

ミュリエリアは椅子から立ち上がり、棚へと近づぐ。

そして、引き出しから一枚の紙を取り出してミラの前に置いた。

カラフルな色使いで作られた、何かの広告だった。

「星祭り?」

ミラが広告の一番上に書かれた文字を読み上げる。

「ええ。毎年、この時期は沢山の流星が見えるの。」

それが一番よく見える西の砂漠で開かれているお祭りが、星祭り

よ。

各地から人が集まってお店を開くから、私も珍しい素材を探しに行くのだけれど、今年は一泊して星を見に行くことにしましょうか」

「いいの？」

ミラがミュリエリアを見上げる。

その目は、期待にきらきら輝いていた。

「ええ、いいわよ。行ってみる？」

「うんっ」

ミラは大きく頷く。

「やったあ、旅行だよ。お姉ちゃんと旅行」。

あ、準備しないと」

ミラは椅子から立ち上がり、急ぎ足で二階へと歩いて行く。

「ふふ、もうミラったら」

ミュリエリアは目を細め、優しい顔でその背中を見送った。

第十五話「再演の星」

翌日、ミラとミュリエリアの二人は、砂漠にある星祭りの会場に
来ていた。

砂漠はただ立っているだけでも体力を奪われる高温地帯だ。

ミラとミュリエリアはしっかり【クーラードリンク】を飲んでい
る。

砂漠では貴重な水場であるオアシスの周りに、布で作られた簡易
テントの出店が沢山並んでいた。

星祭りのために各地から訪れた人々が、話したり出店を覗いたり
して楽しんでいるようだった。

モンスターを警戒しているのか、武装している人も多い。

「わあ、凄い人」

行き交う人々を見て、ミラが目丸くして感嘆の声を上げた。

いつもの装備に、【ギムレー】を背負っている。

「そうね。ここまでの人出があるのは珍しいわ」

と、こちらは【ランポスシリーズ】を着て【オデッセイ】を腰に差したミュリエリアが答える。

「ここは、普段はただのオアシスなのだけれど、この時期は各地から集まった出店で村のようになるのよ。」

誰でも営業できるから、余りお金を使わない人はここで一年分の収入を得る事もあるらしいわ」

「そうなんだ」

「ええ。それじゃ、お店を見て回りましょうか」

「うんっ」

ミラとミュリエリアは、並んで出店のエリアに歩き出した。

ミラたちが出店を巡っているその頃、同じ会場の別の場所。

「だーかーらー、おかしいだろ、その値段」

「何の文句があるんだい？」

一軒の店の前で、一人の少年が店主の男と言いついていた。

店先には白い液体の入ったビン。

この店は、【クーラードリンク】を売っている店のようだ。

「高いんだよ！ 一本六百ゼニーって、なんだその値段」

「それはほら、量が多いんだよ。普通の一割増しだ！」

店主が【クーラードリンク】のビン突き出す。

「うわ微妙……ってか何で値段は相場の倍になるんだっての」

「そうは言っけどね、他の店もこんな値段だよ。

祭りの出店なんてそんなものだ」

「マジかぁ……少しくらいまけてくれよ」

と、二人が言い合っていると、

少年の隣に一人の少女が並び、店主の手からビンを取った。

その代わりに、数枚の硬貨を店主に渡す。

「お、毎度あり」

「……もう一本下さい」

「ん？ あ、ああ」

店主がもう一本ビンを取って少女に渡す。

少女はまたお金を払い、そのビンを隣の少年に突き出した。

「せ、セアラ？」

戸惑ったように、少年が少女　セアラを見る。

セアラは、冷め切った片目で少年を睥睨し、

「……みつともないです」

セアラと少年　レグル。

この二人も、祭りに来ていたらしい。

「う、ごめん。でも俺、セアラのために節約をだな」

「……いきなり私を連れ出したの、ルグレさんです。」

……行き先を言ってくれたら、ちゃんと準備しました。

……砂漠に行くのにクーラードリンクを一本ずつしか用意しないなんて、ありえないです」

「ご、ごめん。でも、俺の名前はレグルなんだけど」

「……行きますよ」

「あ、おーい、待ってくれよお」

さつさと背中を見せて歩いて行くセアラを、レグルが情けない声を上げながら追いかけて行った。

「ミラ、ちょっと待って」

一軒の出店の店先で、ミュリエリアが足を止めて先を歩くミラを呼び止めた。

「ふえ？ はに、ほえーひゃん？」

振り返ったミラは、口にソーセージを啜っていた。

手には焼きトウモロコシや焼き鳥などが握られていて、お祭りを満喫しているようだった。

「こら、ちゃんと飲み込んで喋りなさい」

「ふぁーい」

もぐもぐと咀嚼して口の中のものを飲み込む。

「何？ お姉ちゃん」

「そのお店に寄ってもいいかしら？」

「うん、いいよ」

「ありがとう」

ミラが快く頷くと、ミュリエリアはその店に歩いて行く。

店の看板には、『鉾石』と書かれている。

鉾石を売っている店のようだ。

ミュージエリアは仕事柄やっぱり気になるらしい。

「すみません」

「はい、いらっしやいませ」

店の中では、一人の女性が店番をしていた。

「見せてもらってもかまいませんか？」

「はい、どうぞ」

早速、ミラは店先に並べてある鉾石を見始める。

鉾石は種類別に分けて箱に入れられていて、紙の値札がつけられていた。

（大きさも質も関係なく並べている……。この人、素人ね）

この祭りは、誰でも出店することができる。

だから、普段は素材を店に引き取ってもらう人が直接物を売ることもあり、結果、こんな風に適当な店が出ることも珍しくなかった。

それゆえに、稀に意外な掘り出し物が混ざっていることがあり、

ミュリエリアのような専門家はそれを狙うのだ。

「あら？」

鉱石を検分していたミュリエリアの手が止まる。

「どうかしましたか？」

「これなんですけど」

ミュリエリアは、ドラグライト鉱石と書かれた札のかかっている箱を指差した。

「この箱の中、ほとんどドラグライト鉱石ではないですよ」

隣から箱を覗いたミラが「あ、ほんとだ」と呟く。

店の手伝いをしている間に、素材についてはすっかり詳しくなっただミラである。

「でも、何だろ、これ」

「これは石英。普通の石英は白や透明だけど、これは緑水晶と呼ばれる石英よ」

緑色なのは同じだが、片方は鉱石、もう一方は宝石に近い。

よく間違えたものだ。

「そうなんですか!？」

「ええ」

頷いたミュリエリアに、横からミラが声をかける。

「ね、お姉ちゃん。この箱も間違ってるない？」

「え？ 見せて？」

ミュリエリアは、ミラが示した箱の中を覗き込む。

「本当ね、これも間違っているわ」

「そんな……」

女性が肩を落とす。

「すみません……私、普段は主婦をしてるんです。

家計の足しにしようと思って参加してみたんですけど、慣れないことはするものじゃないですね」

「ああ、そうだったんですか。でも、これはいけないと思いますよ。多少間違えることはしかたないと思いますけど、これだけ間違っている……」

「そうですよね……」

はあ、と女性は深いため息をついた。

「教えていただいてありがとうございます。」

お店は、これでお終いにします」

「え、止めちゃうんですか？」

「ええ、ごめんなさいね」

「何も止めなくても……。お姉ちゃん、何とかしてあげられないかな？」

ミラに見つめられたミュリエリアは「しかたないわねえ」と呟き、

「あの、確かに表記は間違っていますけど、石自体に価値がないわけではありませんから、きちんと分ければ売れると思いますよ。

私で良ければ、お手伝いします」

「い、いいんですか？　お願いします！」

女性が身を乗り出し、ミュリエリアの手をぎゅっと握る。

その勢いに若干気圧されながら、ミュリエリアは頷いた。

「お姉ちゃん、私もお手伝いするよ」

「いいえ、ミラはいいわ」

「え、何で？」

戸惑ったような声を上げるミラに、ミュリエリアは優しく微笑みかける。

「素材の鉱石以外はわからないでしょう？」

それよりも、あなたにはお祭りを楽しんでもらいたいのよ」

「でも……」

「気にしなくていいのよ。これだけの量ならそんなに長い時間はかからないわ」

ね、とミュリエリアに念押しされてミラは渋々頷いた。

「うん、それじゃあ、また後でね」

「ええ」

店で仕分けを始めたミュリエリアと一度別れ、ミラは再び祭りの喧騒の中へと戻っていった。

(計画は、完璧だったはずなのに……)

ぐしゃりと、手の中で紙を握り潰す。

『星祭りdeもっとセアラちゃんと仲良くなろう大作戦 ミ(命
名ベルゼラ)』

出店するであろう店の評判、効率のいい回り方。

情報を集め、完璧な計画を立てた。

ベルゼラに散々からかわれながら予行演習までやったと言つのに

……

なのに

（まさか、こんなことでぶち壊しになるなんて）

「ありえないっての……」

思わず口に出して呟いてしまったが、傍らのセアラはレグルに目も向けない。

手にした本に目を落として、無言のまま読みふけていた。

星祭りの会場で、古本を売っている出店を見つけたのがレグルにとって運の尽きだった。

それまでも、楽しんでいたとは言い難かったし、多少のアクセントはあったが、一応レグルの計画通りに進んでいた。

しかし、この店を見つけた瞬間、セアラは目の色を変えて本を読み始めてしまった。

それから後、延々と本を読み続けている。

「なあ、セアラ」

「……………」

「セーアーラー」

肩に手を置いて揺さぶると、ようやくセアラがレグルに目を向けた。

「セアラ、そろそろ別のと」

「……いまいいところです」

「……はい、何かこう、すいませんでした」

じろりと睨まれて、レグルが小さくなる。

セアラは読書の邪魔をされるのを極端に嫌がる。

物凄い迫力だった。

「待つしかないってか。はあ……」

レグルは、重いため息をつく。

(それにしても、こいつ何を読んでんだ?)

その場に屈み、セアラの読んでいる本のタイトルを下から覗く。

タイトルはセアラの手に隠れて見えなかったが、背表紙の下に『?』と書いてあるのが見えた。

「三巻ってことか」

セアラの足元を見ると、同じ装丁の本が大量に積まれている。

一番下の本は、『??』のナンバリングがされていた。

「おいおい……まさかそれ全部読むつもりなんじゃないだろうな……」

嫌な予感に襲われて、セアラを見る。

「……………」

セアラは夢中で本を読み進めている。

残念ながら、レグルの危惧が現実になりそうな勢いだった。

974

「ありがとよー」

店主の声に送られて、ミラは『金魚すくい』と書かれた暖簾をくぐった。

結構な時間とお金を費やしたのに、結局一匹もすくえなかった。

いい客かもになってしまったようだ。

道を歩き出しながら、恨めしそうに後ろを振り返る。

「ふーんだ。カクサンデメキンなんて、いつでも釣れるもんね」
拗ねた口ぶりで言う。

高いところにあるブドウが酸っぱいのと同じ、単なる負け惜しみである。

ミラはふて腐れた顔で歩いてしたが、しばらく歩いているうちに祭りの雰囲気になれ、あつと言つ間に機嫌を直していた。

自然と、足取りも軽くなる。

「次はどこに行こうかな」

周りの店を見回しながら歩いていると、『ブロス叩き』と書かれた暖簾が目に入った。

どんなゲームなのだろう。

暖簾の文字に惹かれて寄って行っていると、

「あれ、ミラさんじゃありませんか？」

「え？」

一つ手前の出店から、ミラに声をかけた人物がいた。

ミラがその店を覗くと、重石の載った紙の束が置いてある長机があり、その後ろの椅子に一人の子供が座っていた。

その少年の後ろには、二つの大きな木箱が置いてある。

「ラキ君？」

ミラが子供の名前を呼ぶ。

その子供は、以前【護りのピアス】の修理を依頼してきた少年、ラキだった。

ミラは、店の中に入って行きながら、

「ここ、ラキ君のお店なの？」

と聞いた。

ラキは、ミラの知り合いの中でも最年少の少年だ。

いくらなんでも、こんな小さな子供が一人で出店するのは無理がある気がする。

「いえ、僕の両親が出店しててんです。今は留守番を。

ミラさんもお店を出しててんですか？」

「ううん、私は遊びに来ただけだよ。

ところでラキ君、このお店って何の店なの？」

普通の出店は一見すれば何の店なのかが何となくわかるのだが、この店はよくわからない。

「うちは毛布の貸し出しをしているんですよ」

「毛布？」

「はい。夜の砂漠は零下まで気温が下がりますから、星を見る人に毛布を貸しているんです」

「あ、なるほど」

「ミラさんも夜までいるなら、毛布はいかがですか？」

「うーん……」

と、ミラは少し考える。

夜の砂漠が寒いのは知っているし、ちゃんと【ホットドリンク】は持ってきている。

だが、【ホットドリンク】は、体温を上げて活動に支障をきたさないための道具だ。

体感温度に変化はない。

ありていに言って、【ホットドリンク】を飲んでも、寒いものは寒いのだ。

結局、ミラは毛布を貸してもらおうことにした。

「それじゃあ、貸してもらおうかな」

「わかりました。大きい毛布と小さい毛布がありますけど、どちらがいいですか？」

「それって、どのくらい違うの？」

「えーと、小さい方は一人用で、家族とかと一緒に使うのなら大きい毛布がいいと思います」

「それなら、大きい方かな」

「ミュリエリアさんも一緒なんですか？」

「うん。今はちょっと別行動なんだけどね」

「そうなんですか。では、この用紙に名前を記入してください。あ、それと、大きい毛布は五百ゼニーです」

ラクが長机の隅においてあった紙を取って、鉛筆を添えてミラに渡す。

ミラはそれを受け取り、欄の中に名前を書き込んだ。

財布から五百ゼニー取り出して、紙と一緒にラクに返す。

「はい、確かに。これで予約扱いになりますので、使う前に取りに来てください。

貸し出しの際に、保証金として千ゼニー頂きますが、毛布を返却される際にお返ししますので、ご了承ください」

ラクが言い終わると、ミラが目を丸くしてラクを見つめていた。

「どうかしましたか？」

「小さいのにしっかりしてるなって思ってる」

「ああいえ、実は、マニュアルがありまして。丸覚えしてるだけです」

「ううん、それでも凄いと思うよ」

「そうですね？　ありがとうございます」

「私もお店ではちゃんと話した方がいいのかな？」

「自然体なのも魅力だと思いますよ？」

「そう思う？」

「はい」

一回りも若い相手に相談するミラ。

情けない話だ。

そんな話をしていると、店に新しい客が入って来た。

「うわあ、凄い荷物」

ミラが小声で呟く。

物凄い量の荷物を抱えている人だ。

両腕に、顔が完全に隠れるほど高く箱や本が積まれている。

重いのか、荷物の山が微妙に震えていた。

「よいしょっ、と」

掛け声を一つ、荷物を地面に降ろす。

その客は女性だった。

薄紫色の髪を腰辺りまで伸ばし、首の後ろで一つに束ねている。

細めの眼鏡をかけて、砂埃に汚れた白衣を着ていた。

白衣の背中には薄紫の翼

ハイエンシェント
進古龍種だ。

「私にも毛布をもらえる？」

「あ、はい。いらっしやいませ。」

小さい毛布と大きい毛布がありますが」

「それは、どのくらいの大きさなの？」

（あ、やっぱり気になるんだ）

そんなことを思うミラ。

ラキは、ミラにしたのと同じ説明を女性にする。

女性は少し悩むそぶりを見せ、

「実物を見せてもらえる？」

「はい、いいですよ。少々お待ち下さい」

ラキは後ろに置いてあった木箱の中から毛布を一枚ずつ取り出し、長机の上に置いた。

「広げてみても？」

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

女性が二枚の毛布を広げて机の上に置く。

「大きい方は百四十×二百、小さいのはその半分ね」

「見ただけでわかるんだ……」

思わずミラが呟くと、女性はミラの方を向く。

白衣のポケットから巻尺を取り出し、引き伸ばして見せた。

「測ってみてもいいわよ？」

「あ、いえ、疑ったとかじゃなくて、ただ凄くなって思ったんです」

「そう？ まあ、職業柄ね」

小さく笑みを浮かべて言いながら、巻尺をポケットに戻す。

別にミラの言葉に気分を害しているわけでもなさそうだった。

ちなみに、細かい調整を必要とする作業が多いからやらないのだが、ミュリエリアも似たようなことはできる。

「さて、小さい方だと少し小さいけど、大きい方は大きすぎるわね……よし、切るか」

「切らないで下さい！」

とんでもないことを言い始めた女性にラキが慌てる。

「でも、この体積からすると、百×百五十くらいがちょうどいいのよね。

小さいほうだと少し荷物が余っちゃうし、大きい方だと毛布が余るわ」

「荷物？」

不思議そうにミラが聞き返す。

「ちょっと買い過ぎたから、何かに包んで運ぼうと思って。

そしたら、ちょうど毛布の店があるでしょ？ それで、ピンときたの」

どうやら、風呂敷代わりにするつもりらしい。

「でも、切られるのは困りますよ」

「そうよねえ。しかたない、大きい方にしよっか」

「大きい方ですね。では、この用紙に記入をお願いします」

ラキが紙を渡し、貸し出しの手続きを済ませる。

「今すぐ持つて行くんですよね？ 千五百ゼニーになります。」

千ゼニーは保証金なので、毛布を返却される際にお返しします」

「わかったわ」

女性は頷いてお金をラキに渡した。

「確かに、お預かりしました。この毛布でいいですか？」

「いいわよ」

「では、どうぞ」

「ありがとうございます」

女性は、大きさを確認したときに広げた毛布の上に、拾い上げた荷物を置いて包み込む。

本人の言った通り、毛布が微妙に余っているが、そんなに気にするほどでもないだろう。

女性は、毛布で包んだ荷物に手をかけて、

「う……………持てない」

「ええー？」

ミラとラキが同時に声を上げる。

その瞬間、二人の心は一つになっていた。

「だって、重いよ、これ」

「でも、持ってきてたじゃないですか」

と、ミラ。

「気力で何とかしてたんだけど、一度下ろしちゃうたらもうダメ」

「そんなに重いんですか？」

荷物は一抱えほどもあるが、それほど重そうには見えない。

「重いわよ。持ってみる？」

「はい、それじゃあ」

ミラは、毛布の包みを抱え、腕に力を込めて持ち上げる。

「わっ」

ひよい、と荷物は簡単に持ち上がった。

勢いよく持ち上げすぎて、後ろ向きにひっくり返りそうになる。

「軽いじゃないですか」

何とか持ち直し、ミラが文句を言う。

どれだけ重いのかと思っていたが、全く重くなかった。

からかわれたのかと思ったが、

「そんなに軽々と……凄いわ」

女性は、普通に感心しながらミラを見ていた。

「え……でもこれ、軽いですよ？」

「肉体労働は私の分野じゃないのよ。」

私ってインドア派だから、もう体が鈍っちゃってるの」

「あ、なるほど」

ようやく納得できた。

普段から【大剣】や【ランス】のような重量のある武器を扱っているミラとは、軽い重いの基準が違うのだ。

要するに腕力の違いの問題だ。

女性は、ミラが持ち上げた荷物を見ながら、

「ねえ、よかつたら、そのまま荷物運んでくれない？ 後でちゃんとお礼もするから」

「私ですか？ ええと、いいですよ」

別にやることがあるわけでもないし、毛布は返却しなければなら
ないのだからそんなに遠くまで行くこともないだろう。

ミラが了承すると、女性は嬉しそうに笑った。

「よかった。助かるわー」

「それで、どこまで運ぶんですか？」

「このオアシスの近くにある遺跡までよ」

「遺跡？」

「最近発掘されたっていうあれですか？ あそこは確か立ち入り禁
止だったと思うんですけど」

ミラとラキが不思議そうに聞き返す。

「その遺跡の発掘をしているのは、私の研究チームよ。」

あ、自己紹介もしてなかったわね。

私の名前は華霞^{かすみ}。エイシスアルカディア^{アカデミア}の学術部で考古学の研究
をしているわ」

女性　華霞は少し自慢げに、胸を張ってそう答えた。

「石灰岩、石英……これは鉄鉱石」

手に持っていた石を、鉄鉱石という札のついた箱に入れる。

その【鉄鉱石】で、分類していた箱の中身は空になった。

「終わりましたよ。これで最後ですか？」

ミュリエリアが店主の女性に聞くと、

「あ、はい。それで最後……あっ」

言葉の途中ではっとして言葉を切ると、辺りをごそごそと探し、一つの箱を取り出した。

「もう一つあります。これ、私はただの石ころだと思ったんですけど、きちんとした人が見れば違つかもしれません」

「わかりました。確認してみます」

ミュリエリアは、女性から箱を受け取り、一つずつ取り出しながら確認していく。

女性の言う通り、確かにただの（鉱物としての価値がない）石ば

かりだ。

次々に、石ころの札がついた箱に放り込んでいく。

だが、最後の石を取り出したところで、ミュリエリアは手を止めた。

「これは……」

持ち上げた石を、まじまじと観察する。

人の顔ほどの大きさの、驚くほど真っ黒な石だった。

表面は金属に似た光沢を放っていて、波紋のような不思議な模様が刻まれている。

「この石はどこで手に入れたものなんですか？」

ミュリエリアは石を持ち上げて、店主に質問した。

「えーと、確かここに来る途中で拾ったものだと思いますけど」

「そうですか。それなら、やっぱり……」

「どうかしたんですか？」

「これは、流星ですよ。流星の多くは地上にたどり着くまでに燃え尽きますけど、稀にそのまま落ちてくるものがあるんです。

おそらく、この場所で見えている流星の一つだと思います」

「珍しいものなんですか？」

「ええ、大変に。」

未知の鉱物を含んでいることがあって、ありえない能力を備えた道具を作れることもできると言われています。

あの連星剣も隕石鋼製の武器なんですよ。武具職人なら、誰もが一度は扱ってみたいと思うものです」

珍しく熱く語るミュリエリア。

連星剣というのは、伝説の武器職人と呼ばれた人物が作り上げた三本の剣のことだ。

隕石から精錬した隕石鋼で作られ、それぞれが既存の素材では再現不可能な特性を備えている。

【煌く日の大剣】 【陽昂】やうおう。

【響く月の太刀】 【月鴉】げつれい。

【瞬く星の双剣】 【星跡】せいせき。

これらは【進種】の生み出した武器でありながら、【人間】の技術レベルを超えている数少ない武器だ。

俗っぽい言い方をすれば、伝説の武器ということになる。

「そんなに貴重なものだったんですか」

店主の女性は驚きを隠せない。

そんなものを石と一緒にしていたのだから、大変な話だ。

「あの、この石を私に譲っていただけませんか？
市場に出ないので相場がありませんから、値段はそちらの言い値
で構いません」

ミュリエリアが隕石片手に申し出る。

言い値でいいとは、随分乱暴な交渉だ。

余程この石が欲しいのだろう。

「それでしたら、どうぞ、持って行ってください」

「え？ でも、これはとても貴重なものなんですよ」

とてもいただけません、とミュリエリアが言う。

「でも、私には価値がよくわかりませんから。

知らなかったとは言え、詐欺を働きそうになっていたのを教えて
貰った上に、分類までしていただいて。

この石を譲るのに十分な対価は、もう貰っていると思います。

それに、あなたのような人に貰われるなら、この石も文句は言わ
ないと思いますよ」

ミュリエリアは、しばらく迷っていたが、結局、店主の言葉に甘
えることにした。

「わかりました。」

そこまで言われるのなら、ありがたくいただきます」

ミラと華霞、それにラキは祭りの会場を出て、砂漠を東に向かっていった。

方角的には、オアシスから【旧密林】の方に向かっていていることになる。

最初はミラと華霞だけのはずだったが、出発しようとしたときにちょうどラキの両親が戻ってきて、ラキもついてきていた。

「華霞さん。考古学って、どんなことをするんですか？」

荷物を抱えて歩きながら、ミラが華霞に聞く。

華霞は、まだ大した距離を歩いたわけでもないのに少し息を乱しながら、

「言葉の通りと言えばその通りなんだけど、古い物を調べる学問よ。人間の文明の遺産、それ以前の古代文明の過学の遺産。

どちらも、今の技術のレベルを大きく超える技術が使われているのは知ってるでしょ？」

ミラは「うん」と頷く。

【進種】の技術は、基本的に【人間】の模倣だ。

【人間】の使っていた道具や書物を手がかりにその技術を使うのだが、未だ使い方のわからない道具や原理のわからない技術は多く存在する。

【過学】は【人間】からしても謎の高度技術であり、【進種】にとっては【人間】の技術以上に難解なものだ。

「その高い技術を解明できれば、私たちの生活はずっとよくなるわ。そのため、古代の研究をする学問。それが、考古学よ」

「古代の技術……って、どんなものがあるんですか？」

「盛んに研究されるのは武器関係と医療関係ね。」

「最近では排熱噴射機構っていうヘビィボウガンの機能を調べていたわ。」

「砲身に蓄積された熱を利用して強力な砲撃をする機構らしいけど、詳しいことはまだわかってないのよ」

「そうなんですか。難しそうですね……」

「ええ。考古学は、世界最高の頭脳と技術の結晶よ」

「考古学者だと名乗ったときと同じように、自慢そうに言う。」

「自分の職業に誇りを持っているのだろう。」

「さ、そろそろ着くわよ」

手を庇ひかいしながら前方を見据えて、華霞ひかりが言う。

ミラが前方に目を凝らすと、砂の混ざった風の向こうに石でできた廃墟が姿を見せていた。

.....

ざ、と砂を踏んで、遺跡に足を踏み入れる。

砂漠から遺跡までは緩やかな下り坂になっていた。

おそらく、砂に埋もれていた遺跡を掘り出したのだろう。

かつては、大きな町だったのだろう。石で作られた沢山の建築物が並んでいる。

だが、その都市が滅びてからの時間を示すように、家も柱も形を失ってしまった。

「うわぁ」

歴史の重みを感じて、ミラとラキが声もなく遺跡の建物を見上げる。

「凄いでしょ？ 多分、人間時代でも古い都市の遺跡よ。さ、こっちこっち」

華霞に手招きされて、ミラが後に続く。

廃墟になった家々の間を抜けてしばらく歩くと、だだっ広い場所に出る。

崩れているものも多いが、太い柱が等間隔に並び、巨大な円を作っている。

柱と柱の間には、様々な【飛竜】や【古龍】をモチーフにした石像が並んでいた。

ちょうど、柱、像、柱、像……と並んでいる形になる。

「ここはどんな場所なんですか？」

周囲を見回しながらラキが聞く。

「まだ断定はできないけど、多分、闘技場のような場所だったと考えているわ。で、その隅にキャンプを張ってるの」

闘技場の隅に目を向けると、柱の影にひっそりと六棟のテントが張ってあった。

当然の話だが、複数張ってあるということは、華霞一人だけで発掘しているのではないだろう。

だが、華霞以外の人の姿は見えない。

不思議に思ったミラが聞くと、

「今日はお休みなのよ」

という返事が返ってきた。

「みんながどこに行ってるのかは知らないけど、今日は私だけしかないわ」

「そうだったんですか」

「ええ。だから、ここを使っただけだよ」

「え？」

「ミラちゃんは星を見に来たんでしょ？」

「ここは立ち入り禁止だから人もいないし、祭り会場みたいに明かりもないから、穴場よ。」

「これは、荷物を運んでくれたお礼」

「いいんですか？　ありがとうございますっ」

ミラが頭を下げる。

「ラキ君も、星を見るなら一緒にどう？」

「夜遅くなりますから、両親に聞いて許してもらえたら見に来ます」

華霞に話を振られて、ラキが答える。

「やっぱりしっかりしている子供だ。」

その話を聞いていて、ミラは大事なことを思い出す。

「あの、華霞さん。私、お姉ちゃんと一緒に来てるんですけど、お姉ちゃんも一緒にいいですか？」

「いいわよ。五百人くらいまでなら大丈夫」

「いえ、そんなには」

確かにそのくらい余裕で入りそうな広さがあるが、そんなに知り合いはいない。

ミラが苦笑を浮かべる。

そのとき

「あっ！」

と、ラキが声を上げた。

きょろきょろと、砂地に目を走らせる。

「どっしたの？」

「何か、近づいて来る音が聞こえます。これ、砂の中から？」

「地中？」

「華霞さん、これお願いします！」

ミラが訝しげな顔をする華霞の腕に抱えていた荷物を押し付ける。

華霞は危なっかしい手つきでそれを支えた。

「ちょっと、何するの」

「下がっててください。ラキ君、音はどっちから？」

文句を言う華霞の前に出ながらミラが聞く。

ラキは【クック進種】だ。

種族の特性である鋭い聴覚が異変を捉えたのならば、実際に何か
が来ているのだ。

「えーと……あっちです！」

「ありがとう」

ラキの指差す方向に向き、【ギムレー】の槍を抜き放つ。

「来ます！」

ラキが叫ぶ。

その視線の先、地面から砂煙が上がり、砂色のヒレが突き出した。

ヒレは砂を地面のように泳ぎながら接近し、勢いよく砂から飛び
出してくる。

二等辺三角形の扁平な頭とヒレ状の腕を持つ魚竜【ガレオス】で
ある。

小型種に分類されるが、【ランポス原種】をはじめとする鳥竜種

に比べるとかなり大きい。

砂の中を自由に動き、地中からの攻撃を得意とするモンスターだ。

ミラは、盾を構えて待ち構え、「ガレオス」の飛びつきを受け止める。

盾に激突した【ガレオス】は砂の上に落ち、魚のように小さく跳ねた。

ミラは盾をかざしながら、首だけ後ろを振り向く。

「華霞さん！ ラキ君と隠れていてください！」

「わ、わかった。おいで、ラキ君！」

華霞がラキの手を掴んで自分の傍に引き寄せる。

そして、ミラの目の前で二人の姿が消えていった。

「消え　！？」

「私の能力よ！ 前見て前！」

何も無い空間から華霞の声がする。

姿は見えないが、そこにはいるらしい。

自分の周囲の光に干渉し、姿を消したり幻を作り出したりする、
【オオナズチ進種】の【大地の絆】ガイファタイスだ。

「あ、はいっ。見えなくても危ないですから、離れていてください！」

「わかったわ！」

華霞の声が返事をした後、遠ざかっている足音が聞こえる。

ミラが首の向きを戻すと、【ガレオス】が起き上がったところだった。

首をもたげ、体内に溜めていた砂を塊にして吐きかける。

ミラは盾でそれを防ぎ、カウンター気味に槍を突き出した。

槍の穂先は【ガレオス】の頭の側面を掠めて肉を削ぐ。

【ガレオス】は、その場で足踏みしながら旋回。

ミラは槍を引きながらバックステップし、その眼前を【ガレオス】の尻尾が掠めて行った。

尻尾をやり過ぎした後、ミラが突き出した槍が【ガレオス】の尻尾に刺さる。

【ガレオス】は吼えながら身をよじり、乱暴に槍を抜いた。

半回転してミラに向き直ると、尻尾から吹き出した血が扇状に飛び散る。

ミラが軽く槍を払うと、付いていた血が【ガレオス】の逆側に散った。

【ガレオス】とミラは互いに様子を窺いながら、じりじりと移動する。

散らした血を、踏む。

瞬間、【ガレオス】がミラへと踏み込み、地面に体を投げ出した。

蛇のように地面を這いずり、ミラに迫る。

ミラは左手に持っていた盾を捨て、両手で槍を持つ。

「そこっ」

タイミングを計り、振り上げた槍を振り下ろした。

穂先が【ガレオス】の首を貫き、ミラはそのまま棒高跳びの要領で【ガレオス】の上を飛び越える。

柔らかい砂には槍がしっかり突き刺さらず、【ガレオス】は首に槍を突き刺したまま横倒しに倒れた。

体を痙攣させ、動かなくなる。

ミラは【ガレオス】へと近づいて行き、その体から【ギムレー】を引き抜く。

「ふう……終わったあ」

一息つき、周囲を見渡す。

「あれ……？ ラキ君と華霞さんは？」

隠れているのか消えているのか。

二人の姿は見当たらない。

戦いが終わったことに気づいていないのか、出て来なかった。

「ラキ君ー？ 華霞さん？ 二人とも、どこー？」

ミラは、二人の名前を呼びながら、その姿を探し始めるのだった。

第十五話「再演の星」(前編)(後書き)

後編に続きます。

第十五話「再演の星」（後編）

「セアラー。なあセアラ、待ってくれって」

「……………」

古本を売っている出店を出て、レグルとセアラは祭りの会場を歩いていた。

無言ですんずんと歩を進めるセアラに、レグルが必死に追いつている。

「セアラってば」

「……………」

レグルが声をかけるが、セアラは完全無視だった。

言葉少なくではあるが、話しかければ一応返してくれることが多いだけに、珍しい。

その理由はと言つと

セアラが最後の『??』巻を読み終わったとき、待っていたレグルも何かの本を読んでいた。

本好きなセアラとしては、何を読んでいるのかが気になる。

レグルが気が付いていないようだったので、こっそりと本を覗くと……

やたらと絵の　しかも肌色率の高い　多い本だった。

いわゆるエロ本である。

この世界にある印刷技術は木版、あるいは活版印刷　どちらも木の原版に墨を塗って紙に写す手法だ。

カラーの本は、基本的に全て手描き。

しょうもない話だが、貴重な代物である。

ふと、何かに気づいてレグルが目を上げる。

「……………」

セアラと目が合った。

無言なのが、何よりも雄弁にレグルを非難していた。

「あ……セアラ、その、これは……………」

見られているのに気がついたレグルが、大慌てで本を閉じる。

その拍子に、表紙のタイトルが露になった。

「……………」『洞窟物語』フルフル娘の白い柔肌』

「うおうっ」

レグルが持つていた本を本の山に投げ捨てる、が既に遅し。

無言でセアラが身を翻す。

「あ、セアラ！ あだっ」

青白い火花に弾かれて、レグルがセアラの背中に伸ばした手を引っ込める。

セアラは一度振り返り、

「……最っ低です」

もはや絶対零度の声で吐き捨て、セアラは店から出て行ってしまった。

以上、これまでの経緯である。

「セアラあ……」

世にも情けない声を上げるレグル

セアラはそれを無視して歩いていたが、唐突に足を止めた。

突然立ち止まったセアラの背中にレグルがぶつかる。

「いてっ。どうした？」

「……………」

セアラは無言で近くにある出店のテントを見上げている。

そのテントには『鉱石』の文字。

セアラは、ミラの言葉を思い出す。

セアラの瞳を、【エルトライト鉱石】のようだと言ってくれた。

そのとき、テントの中から一人の少女が出て来た。

ミュリエリアである。

手に、重そうな袋を提げている。

袋の中身は、店で買った鉱石だ。

隕石をただで貰っただけだと気が引けるので、代わりにいくらかの石を購入したのだ。

「あ、武器屋の姉ちゃん」

レグルがその少女に気づいて声をかける。

ミュリエリアもレグルに気がつく。

「あなたは……………」

ミュリエリアは不思議そうな顔をするが、レグルの背負っている武器を見て納得顔になる。

「レグルさんでしたね。」

「お久しぶりです。どうですか？ 武器の調子は」

「ん？ 順調だぜ」

「そうですね、よかったです。何かあれば店まで来てください」

「ああ。何かあったら頼むぜ」

そんな話をしていると、

「あ、お姉ちゃん！ よかった、まだここにいたんだ」

新しい声。

レグルたちの反対側からラキを連れ、ミラが歩いて来ていた。

「待ち合わせの場所決めるの忘れてたから、いなかっただらどうしようかと あれ、レグル君？ それにセアラちゃんも！」

ミュリエリアと一緒にいる二人を見て、ミラが目丸くする。

「そう言えば、決めるのを忘れていたわね。あら、ラキ君？」

「げ、ミラ。お前もいたのか……ありえないだろ、この偶然」

「……ミラさん！ と、お姉さん？」

「ミュリエリアさん。この前はお世話になりました」

四人が一齐に口を開き、名前を呼ぶ声が複雑に交錯した。

その夜。

遺跡の闘技場跡には、六人の姿があった。

ミラ、ミュリエリア、ラキ、レグル、セアラ、そして華霞だ。

六人は、出店で買った食べ物で夕食を済ませ、思い思いに空を見上げていた。

昼とは対照的に、夜の砂漠は寒い。

面々は焚き火を熾し、数人ずつに別れてその周りに集まっていた。

一つ目のグループはミュリエリアと華霞。

頭脳派同士で気があったらしく、なにやら小難しい話で盛り上がっている。

「では、この遺跡は地図から発見を？」

「そうよ。これ」

華霞がポケットから一枚の紙　地図を取り出す。

「ミュリエリアに見えるように広げて、地図の一部を指でなぞる。」

「わかる？　ここと、ここ、それにここも、短いけど道の痕跡があるわ。それも、結構大き目の」

「あ……そうですね」

「これは多分、長い時間が経って、ここにあつた街道が砂に埋まったんだと思ったのよ。」

「そうだとすると、一つ考えられることがある」

「大きな街道が異なる方向に複数伸びているということは、その起点である大都市が存在する可能性があるんですね」

「その通りよ。だから、この街道を延長すると、この辺りに交点ができる。」

「で、この辺を人海戦術で掘り返したってわけ。今はもう発掘チームしかないけどね」

「そうだったんですか。凄いですね」

「いいえ、全部この地図のおかげよ。普通、こんな道の痕跡なんて地図には載らないのに」

「そう言えば、随分と詳細な地図ですね。これは、エルミナ図法で？」

「へえ、よく知ってるわね」

地図を指しながらミュリエリアが聞くと、華霞が感心したように声を上げる。

エルミナ図法というのは、最近有名になってきている地図作りの手法だ。

作者の名前をとってそう呼ばれる。

自分の足で歩いて測量し、そこにある細かい物まで全てを描き込むことで、詳細な地図を作るのである。

この手法によって作られた地図は、熱気球から俯瞰して作る普通の地図では描き漏らされてしまうようなものも描かれているため、詳しい地図を求める人に人気が高い。

「そうよ。でも、これは特別。本人の描いた、オリジナルのエルミナ図」

「オリジナルの地図ですか？ 貴重なものですよね。いいんですか？ そんなに無造作に使って」

「いいのいいの、エルミナは私の後輩で、頼みもしないのに地図をくれるんだから」

「後輩と言つと、アカデミアの？」

「そうよ。アカデミアは元々学問の最高機関なんだけど、たまーにいるのよね。その中でも天才って呼ばれる人が。」

同期の六花とかもそうだけど、私たちが長々と頭を悩ませても解明できない人間の技術を、感覚で理解してしまうんだから、大したものよ」

「六花さんと同期だったんですか。そうですね、あの人は天才的な腕の持ち主ですね」

「ほんと、恐れ入るわ」

などと話している二人。

その近くでは、ミラとセアラと一緒に毛布に包まっている。

二人は、最近の出来事について話していた。

「それで、台風と一緒に石楠花ちゃんとラキアちゃんって子が来てね」

「……シャクナとラキア姉さんです？」

「え？ 知ってるの？」

「……一緒に育ったです」

淡々と語るセアラ。

グラキシアと石楠花が育ったのは、グラキシアの両親の経営する孤児院だ。

「それじゃあ、セアラちゃんは……」

「……私の両親は六年前に死にました」

セアラがそつと左目を押さえる。

「その傷は、そのときに？」

ミラが聞くとセアラは首を横に振った。

「……これ、一人になって逃げている途中で受けた傷です」

両親を殺したのは

『子連れじゃ戦えないだろ！ 今は逃げろ！』

『ここは私たちが引き受けますから！』

『し、しかし……っ』

『ラオシャンロンの討伐に手を貸してくれただけで十分だ！ ありがとう！』

『私たちにも子供がいるのよ。双子の男の子と女の子、今度一緒に会いましょう』

『……すまない！』

『ごめんなさい……どうかご無事で。セアラ、こっちへ！』

両親に手を引かれて、逃げるセアラ。

だが、逃げ切れなかった。

「お、お前は……」

「あの人たちは、どうしたんですか！」

「龍形巡回監視装置によって測定は終了しているの。」

あなたたち二人は、世界の調和を乱す者。その存在は、排除されなくてはならない」

そして、あの、化け物のような女が

「セアラちゃん？」

ミラの声に、セアラは回想から引き戻された。

心配そうな顔でミラが顔を覗き込んでいた。

「どうかした？」

「……あ、何でもありません」

軽く頭を振って、嫌な記憶を振り払う。

「……私、先生に助けられて、ラキア姉さんたちと一緒に育ちました。

……でも……人のこと嫌いだったですから、誰かに引き取られる

の嫌で一人暮らしを始めたです」

「そうだったんだ……。」

でも、セアラちゃん、寂しくなかったの？」

両親を失った後、同じような境遇の子たちとの暮らしを捨てて、また一人で生活を始めた。

セアラは、今でもまだ子供と言える年齢なのに。

自分だったら寂しくてたまらないと、ミラは思う。

「……人のこと怖かったですから、一人の方が気楽でした」

「でも、今は違うよね？」

少なくとも、ミラと出会ってからは。

人の善意を、少しは信じられるようになったはずだった。

「……うん」

セアラは一つ頷き、顔の向きを変える。

その視線の先には、レグルがいた。

「……レグルさんがよく来るですから。」

……もう、鬱陶しいくらいです」

その言葉ほど、口調は嫌そうではなかった。

口元に小さな笑みが浮かんでいる。

「覚えてんだね」

「……………」

「レグル君の名前」

ミラが嬉しそうに言うと、セアラはレグルから目を逸らし、

「……………」でも、また忘れるかもしれないです」

そう、無然として言い放った。

ミラは、レグルの方に目を向けて、

「それは……………」うん、仕方ないよねえ」

そう言って、苦笑した。

その視線の先、

女性陣から離れた闘技場の隅の方に、レグルとラキがいる。

レグルは柱にもたれて立っていて、ラキがその柱の根元に座っていた。

「なーんでこんなことになるかな……………」

ずーん、と擬音の聞こえそうな勢いでレグルが落ち込んでいる。

理由はと言うと、セアラに読んでいた本を暴露されてしまったからだ。

当然と言うか、女性陣には大震撼だった。

ミュリエリアだけが「男の子だもの、仕方ないかも知れないわね」と一応の理解を示していたが、

「でも、ミラには近づかないでくださいね」

と、次の一言で釘をさしていた。

「はあ〜」

「まあまあ、元気を出してください」

深いため息をつくレグルをラキが慰める。

「わかってくれるか？ やっぱ男同士だよなあ」

「いえ……僕はあまり……」

「あ、そう」

肩を落とすレグル。

まだ女性には興味がない年頃のラキだった。

「くそっ、やってられないぜ」

残念ながらこの場には理解者がいないようだ。

苛立ち紛れに、レグルが傍らにあった石像を蹴り飛ばす。

その途端 強烈な光が、闘技場内を満たした。

「おわっ、な、何だ!？」

「どうしたんですか!？」

レグルとラキが驚きの声を上げる。

光は闘技場の中を満遍なく照らしていて、当然、全員がそれに気がつく。

真っ先に反応したのはセアラだった。

ぱっと立ち上がり、そばに置いていた【エメラルトスピア】を手に取る。

わずかに遅れてミラが立ち上がって【ギムレー】を取り、ミユリエリアのところに駆け寄る。

「お姉ちゃん! これは……?」

「わからないわ」

「わからないわね」

ミュージエリアと華霞が揃って首を横に振る。

そこに、レグルとラキが集まって来た。

「……グルメさん、何をしたですか？」

「さ、さあ……ってか俺のせいじゃないっての！
と言うか、また名前がおもしろいことに!？」

「皆さん、光が！」

ラキの言う通り、ゆっくりと光が収まっていく。

「お姉ちゃん、私の後ろに！」

「……下がってください」

ミラ、セアラが非戦闘員の三人の前に立ち、武器を構える。

「あ、俺も！」

それを見て、レグルも【パラディンランス】を構えた。

光が消えて、夜の闇が戻ってくる。

だが、そのとき、闘技場の様子は一変していた。

砂だけしかなかったはずの地面を、無数の花が埋め尽くしていたのだ。

全ての花の蕾が閉じられていて、蕾の中がぼんやりと光っている。

「これは……？」

「どっとなってんだ？」

ミラたちが辺りを見回す。

じっと観察していたミュリエリアが、変化に気がついた。

「見て、花が開いていくわ」

閉じている蕾が、ゆっくりと開いていく。

色とりどりの花が開ききると、その中から小さな光の球が飛び立った。

「それっ」

近くまで漂ってきたそれを、華霞が手で捕まえた。

手を開くと、手の平の上に一匹の小さな虫が載っていた。

「雷光虫だわ」

【雷光虫】は放電する特徴を持つ虫で、球形に光って見える。

巨大に成長する個体も存在し、そちらは【大雷光虫】と呼ばれてモンスターとして扱われるが、ただの【雷光虫】には危険性がない。

【雷光虫】は華霞の手から飛び立つと、再び光りながら漂い始めた。

「まるで、星みたいですね」

無数の【雷光虫】が飛び回る光景を、ラキがそんな風に表現した。儂い光に照らされて花畑が浮かび上がる。

ひどく幻想的で美しい光景だった。

【雷光虫】たちは空に向かって飛び、そこで一つに集まり始めた。

虫が集まる度に、光がどんどんと強さを増していく。

そして、その輪郭が、全く別のものへと変化する。

巨大な体躯、逞しい四肢、長い尾。

大きな翼が羽ばたき、巻き起こった風が花を揺らす。

「飛竜!？」

「前脚と翼が別になってる。古龍かもしれないわ」

「んなのどつちでもいっての！

何で虫が龍になるんだ！ ありえないだろ！」

「確かに、ありえないですね……」

「さつきから、一体何がどうなってるの!？」

突然の事態に、混乱する一同。

だが、一人だけ冷静な人物がいた。

「……ありえなくても、現実です」

そう言って、セアラが【エメラルドスピア】を構える。

その様子を見て、華霞とミュリエリアが冷静さを取り戻す。

「そうね。考えるのは後にしましょう」

「ミラ、今はその相手に集中して」

「う、うん!」

ミュリエリアに言われて、ミラも【ギムレー】を構え直した。

「でも、この龍……何？」

羽ばたきながら地上に降りてくる龍を見ながら、ミラが呟く。

その龍の姿は、見たこともないものだった。

大きさは【グラビモス原種】よりも一回り大きい。

全身が灰色の鱗に覆われ、腹側には逞しい筋肉が見え、頭には先

が枝分かれした角がある。

肘、膝、翼、手足の甲、後頭部から尻尾の先までに、水晶のような結晶体が並んでいた。

「……オラージュ」

ぼつりと、セアラが呟く。

「セアラ、知ってんのか？」

「……昼間に読んだ本です。『オラージュサーガORAGESAGA』」

「あ、私も読んだことあるわ」

「私もです」

華霞とミュリエリアが言う。

残りの三人は知らないようだった。

「……『夜空が星におおいつくされる時 楽園と地獄の狭間より……輝く龍出づる』」

朗々と、セアラが本の一説を謳い上げる。

「……『その龍は全ての大地に不幸をあたえ 全ての大空に不幸をあたえ 全ての生命を根だやすだろっ』」

「『やがて夜空の星々は消え ミオガルナだけが地上に残る』」

セアラの後をミュリエリアが引き取り、最後に華霞が呟く。

「輝龍ミオガルナ　古都ギル・ガメスを滅ぼした伝説の龍」

【ミオガルナ】。

「ORAGESAGA」という書物の中にのみ記述の残る、輝龍の名を持つ龍だ。

その力は一晩にして【ギル・ガメス】という国を滅ぼしたと言われ、【ミオガルナ】を討伐するための【封印のハンター】と呼ばれる【ハンター】もいたらしい。

【進種】の歴史では一度も確認されたことはなく、伝説上の存在である。

ゲアアアアアアアッ

輝く龍、【ミオガルナ】が地上に降り、咆哮を上げる。

大気が震動し、ミラとレグルが掲げた盾をびりびりと震わせた。

「じゃあここは、古都ギル・ガメス!？」

「凄い、私は今、伝説を目の当たりにしてるんだわ!」

「発掘を続ければ、どんな貴重な発見があるか!」

興奮した口調で華霞が言う。

「華霞さん、今はそれどころじゃないですよ!　お姉ちゃんとラキ

君と隠れていてください!」

「あ、そ、そうね」

華霞が二人を自分の側に引き寄せ、三人まとめて姿を消す。

「行くよ!」

「おう!」

「……うん」

ミラたちが槍を構えて駆け出す。

先頭に行くのは、盾を持たず最も身軽なセアラ。

その後ろにミラとレグルがほぼ並んで続く。

【ミオガルナ】がそれを待ちつけ、結晶の煌めく腕を振り上げる。

「セアラ! 危ない!」

レグルがセアラの前に飛び出し、盾を構える。

「……どっちが!」

セアラがその襟を掴み、後ろに引っ張る。

レグルが地面に引き倒され、その目の前に【ミオガルナ】の腕が叩きつけられた。

地面が震えるほどの威力。【ランス】の盾と言えど受け止められるものではない。

体格差を考えれば、盾ごと叩き潰されてしまつところだった。

「……さっさと起きてください」

レグルに言い放つと、【ミオガルナ】の右側に走り込む。

狙いをばらけさせるために、ミラは左側面へと向かった。

ほぼ同時に、槍で突きかかる。

ガキン、と音を立てて二本の槍の穂先が弾かれた。

「硬い……」

ミラが顔を歪める。

「……見た目通りと言え、そうですけど」

と、セアラ。

無機質な結晶に覆われた体は、どう見ても硬そうだった。

「でも、それならそれでっ」

ミラはサイドステップで【ミオガルナ】の体の内側へと回りこみ、腕の内側を狙って槍を突き出した。

体表を覆う鱗は内側までは及ばず、穂先が剥き出しの肉に突き刺さる。

「セアラちゃん！」

「……わかったです」

セアラが頷き、【エメラルドスピア】を回転させながら【ミオガルナ】の胸の下に走り込む。

鋭く槍を突き上げると穂先から高圧の水流が迸り、胸部の肉を抉った。

「……レグルさん！」

「任せろ！」

威勢よく叫び返し、レグルが【パラディンランス】を構えて突進する。

「おおおおおっ！」

レグルは一直線に突き進み、

「おおっ！？」

手の甲の水晶に槍を跳ね返されてたたらを踏んだ。

【ミオガルナ】が鬱陶しそうに腕を横に振り、レグルは盾で受け

止めた姿勢でずりずりと押し戻された。

レグルを狙って【ミオガルナ】が腕を持ち上げ、振り下ろす。

叩き潰されそうになったレグルだが、駆け戻ってきたミラとセアラが両腕を掴んで引つ張って難を逃れた。

「……レレグさん、何を見ていたんです？」

「わ、悪いっ。ってかレレグって誰だっの！」

「今はそれどころじゃないんだって！」

「俺の名前はそんなことかよ！」

一塊になってわいわい言っている三人を【ミオガルナ】の瞳が捉えた。

グル……と呻り声を漏らし、【ミオガルナ】が口を開く。

「あ、危ないっ！」

ミラは、咄嗟にレグルとセアラを突き飛ばした。

そこに、【ミオガルナ】が口から何かを放つ。

避けられないと判断したミラは、体の前に盾を構える。

盾に何かがぶつかり、ミラの体を後ろに押す。

【ミオガルナ】が吐き出したのは、圧縮された空気の塊だ。

着弾と同時に【龍風圧】と呼ばれる強烈な乱気流が巻き起こる。

「わ、わっ」

【龍風圧】に足を取られて、よろめくミラ。

【ミオガルナ】がそんなミラに向かう。

「……………させないです」

セアラが【ミオガルナ】の前脚に駆け寄り、【エメラルドスピア】を叩きつけた。

攻撃は鱗に阻まれるが、セアラは構わず槍身に手を添える。

セアラの体が青白く輝き、強烈な電撃が槍に流れた。

その電撃は、槍を通じて【ミオガルナ】に流れる……………はずだった。

だが、実際には電撃は【ミオガルナ】へと流れず、【エメラルドスピア】を虚しく帯電させた。

電気が効いていないのではなく、そもそも流れていないようだった。

「……………どうして?」

訝しげにセアラが呟く。

電気を流さないような体には見えないのだが……

原因は不明だが、セアラの攻撃は失敗だった。

動作を中断することなく、【ミオガルナ】がミラへと迫る。

大きく口を開く　　噛みつくつもりだ。

【龍風圧】の効果は未だに残留していて、ミラの髪をかき乱している。

迫ってくる【ミオガルナ】の顎を見つめ、ミラは

「リライト！」

風に踊る白い髪。

その白が、鋼色に変わって行く。

背中に広がる、鈍く光る翼。

【クシャルダオラ進種】の能力。

風を身に纏ったミラが、【ミオガルナ】の牙を掻い潜って天へと向かう。

中空で反転、槍を突き出し、落下するような勢いで【ミオガルナ】の頭を狙う。

脳天に激突した穂先は、結晶体に弾かれ、頬の鱗を削ぎ取りながら下へ滑る。

ミラは【ミオガルナ】の頭の下で体勢を立て直し、再び上昇した。

【ミオガルナ】が放つ空気弾を躲しながら頭の上まで上がり、【ギムレー】を天に突き出す。

その槍を、渦巻く風が取り巻く。

ミラが【ミオガルナ】に向けて【ギムレー】を突き出すと、槍を取り巻いていた竜巻が【ミオガルナ】へと向かった。

だが

「ええっ!?!」

ミラが目を疑う。

ミラの放った竜巻は、【ミオガルナ】の体を、まるでそこに何も存在しないかのように通り抜けてしまったのだ。

耐性があるとか、そんなレベルの話ではなかった。

驚いて思わず動きを止めたミラに、【ミオガルナ】が腕を振るう。

ミラは慌てて身を躲し、【ミオガルナ】の頭上を飛び越えた。

見失ったミラの姿を追って【ミオガルナ】が首を巡らせ、

なぜか、何も無い所に目を止めた。

闘技場の端に並んでいる柱を目がけて、空気弾を吐き出す。

着弾した空気弾から【龍風圧】の風が吹き荒れ、

華霞、ミュリエリア、ラキの三人が悲鳴と共に現れた。

どうやら、ミラたちが戦っている間に移動していたらしい。

だが、華霞たちは、華霞の能力で完全に姿を消していた。

見えなくなっているだけだから、見つける方法はないとは言わな
いが、今までの出来事を考えると、

「この龍、私たちの能力が効かない？」

「でも、なぜ……そんなことが……」

起き上がりながら、華霞とミュリエリアが言う。

そこに、空からミラが舞い降りてきた。

レグルとセアラも向かってきている。

「ラキ君、大丈夫？」

「は、はい。何とか……」

ミラは、ラキに手を貸して助け起こしながら、

「お姉ちゃん、どうなってるの?」

「わからないわ」

ミラに聞かれたミュリエリアも、首を傾げるしかない。

能力が効かない、と括ってしまえば一つのことのようにだが、

実際には、電気が流れない、風が突き抜ける、透明化を見破ると三つのことをしているのだ。

どんな理屈でそうなっているのか、全くわからない。

「じゅめんなさい」

「そんな、お姉ちゃんは何も悪くないよ」

頭を下げるミュリエリアに、ミラは慌てて首を振った。

そのとき、

強烈な光が、ミラの後ろから放たれた。

ミラが振り返ると、【ミオガルナ】の体の結晶体が、強い光を放っている。

その光は、結晶体から全身に広がっていく。

「……熱いです」

「なんかやばそうだが、これ」

集まってきたセアラとレグルが言う。

【ミオガルナ】の全身から放たれる光は、はっきりと体感できるほどの熱を放っていた。

「いけない……みんな逃げて！」

どう考えても、何かろくでもないことが起こりそうだ。

華霞が叫ぶが、【ミオガルナ】の方が早かった。

首を持ち上げ、地面を薙ぐように首を振る。

その瞬間、大きく開いた口から光が放たれた。

凄まじい熱量を持つ、光そのものとしか言いようのない物がミラたちを飲み込む。

「きゃああっ」

「うわああっ」

と、複数の悲鳴が響き渡った。

大地を薙ぎ払った光はゆっくりと消える。

光が消えたとき、光に飲まれたミラたちは、全員が同じようにそ

の場所に立っていた。

「……………生き、てる？」

「……………みたいです」

ミラとセアラが呆然と呟く。

死を直感するような攻撃だったのだが、生き残れたようだ。

「……………おかしいわ」

と、華霞。

自分の手を、じっと見つめる。

「あんな熱さを感じたのに、火傷一つない」

その通りだった。

華霞だけでなく、全員火傷一つ、服に焦げ目の一つもない。

「華霞さん、見てください。地面も……………」

ミュリエリアが地面を指差す。

間違いなく焼き払われたはずの地面には、何事もなかったかのよう
に花が咲いていた。

よく見ると、空気弾の着弾の跡も、足跡さえ残っていない。

「……そう、そういうことだったの」

地面をじつと見ていた華霞が静かに言う。

「あれの正体がわかったわ。あれは、ミオガルナなんかじゃない」

「え？ それじゃあ、あれは何なんですか？」

「一つ、ヒントをあげるわ。人間は、能力を使わないのよ」

「ええ？」

ついていけない一同を置いてきぼりに、華霞がラキに話しかける。

「ラキ君、一つお願いがあるの」

「え？ 僕にですか？」

「そう、ラキ君にしかできないことよ」

「な、何ですか？」

緊張した面持ちで、ラキが聞き返す。

「音を探して。何かが高速で回転するみたいな音。小さい羽虫が飛ぶような音に似てるかな」

「わかりました。虫の羽音」

ラキが耳を澄ませる。

「ミラちゃんたちは時間を稼いで！」

「はいっ」

「……わかったです」

「任せろ！」

三人は武器を構え直し、【ミオガルナ】へと向かっていく。

「華霞さん。あれはまさか……ゴーストなんですか？」

戦いを見守りながら、ミュリエリアが聞く。

ミュリエリアにも、この事態の真実が見えたようだ。

華霞は、その言葉に深く頷いた。

「あ、聞こえた！ 聞こえました！」

ラキが声を上げる。

「どこから？」

「あれです！」

華霞が聞くと、ラキは一つの石像を指差した。

【ミオガルナ】との戦いで離れてしまっていたが、さっきレグルが蹴り飛ばした石像だった。

「あれね」

華霞は頷き、【ミオガルナ】と戦っている三人に叫ぶ。

「誰か！ あの石像を壊して！」

「壊せって言われても……」

「……この状況じゃ……」

【ミオガルナ】の攻撃を躲しながら、ミラとセアラが言い返す。

自然と、視線がレグルに集まった。

レグルは【ミオガルナ】に翻弄されてうろろろし、偶に攻撃しては弾かれている。

要するに、イマイチ役に立ってなかった。

「お、俺？」

視線に気がついたレグルが自分の顔を指差す。

うん、と全員が一斉に頷く。

「……レグルさん、お願いします」

「わかった。俺に任せとけっの」

セアラの一言が決め手だった。

レグルは、槍を腰溜めに構え、石像目指して走り出す。

「おおおおおっ！」

雄たけびを上げながら走る。

そして、その槍が、石像を貫く。

貫かれた部分から亀裂が走り、石像はバラバラに砕け散った。

そして、それと同時に、【ミオガルナ】の姿が掻き消える。

地面の花畑も一瞬にして消え去り、ただ、壊れた石像だけが戦いが現実だったことを物語っていた。

.....

夢でも見ていたかのような戦いを終えて、

レグルが壊した石像の周りに、全員が集まっていた。

壊れた石像の中には何か金属でできた物が入っていて、バチバチと火花を散らしていた。

「これが、あのミオガルナの正体。再演装置よ。リプレイヤー
アカデミアにもいくつか保存されているわ」

金属製の装置を指差して、華霞が説明を始める。

「人間も使っていたようだけど、技術レベルから考えると過学の遺産でしょうね。」

これは、名前の通り、特定の出来事をリプレイ　つまり追体験するための装置なのよ」

華霞は、リプレイヤーの残骸を探して、破片の中から半円形をした二つの破片を拾い上げる。

今は割れてしまっているが、元は中心に穴の開いた一枚の薄い円盤だったようだ。

「この、ディスクと呼ばれる円盤に特殊な記録装置で情報を書き込み、それをリプレイヤーにセットする。」

そして、装置を作動させると、特殊な光が発生して記録した情報を直接脳に送り込むのよ。

私たちは、頭の中に直接流し込まれたミオガルナの幻　ゴーストを見ていたの。

ディスクに書き込まれる情報は二種類あって、一つは戦いの様子をそのまま記録したもの。

もう一つは、モンスターの行動パターンや肉質のような情報を書き込み、戦いの練習をするものよ。

今回のミオガルナは、後者のディスクでしょうね」

「じゃあ、あの戦いは、私たちの頭の中だけで起こっていたことなんでしょうか？」

ミラが華霞に聞く。

「いいえ。私たちが体を動かしていたのは事実よ。でも、ミオガルナの攻撃で感じた痛みなんかは全て脳に送り込まれた情報に過ぎないわ」

「そうだったんですか」

「……でも、どうしてわかったんです？」

「色々とおかしなことがあったでしょ？ だからよ。」

例えば、花畑。ディスクには決まった容量があつて、それ以上の情報は書き込めないの。

限界以上の情報を書き込もうとすれば、別の情報を消すしかない。だから、踏まれた花や焼けた花の情報がなくて、どれだけ暴れても花は平気だった」

「能力が効かなかったのは何でなんだ？」

「それも簡単よ。攻撃を受けたときのリアクションも、当然書き込まれている情報に依存する。」

でも、このディスクを作ったのは人間。発電したり姿を消したりする人間はいないわ。

書き込まれた情報がなければ、それは存在しないのと同じなのよ」

「それじゃあ、僕に音を探させたのは？」

「リプレイヤーは情報を読み取るときに、ディスクを高速で回転させるの。」

そのとき、小さいけれど独特の音が発生するのよ」

華霞がすらすらと質問に答え、おお、とかへー、とか声が上がる。

ミュリエリアも興味深そうに話に聞き入っていた。

「ミュリエリアさんは知っていたんじゃないの？」

「私が知っているのは上辺の知識ですから。回転音の話を聞いたことがあっただけです。」

詳しい理論までは全く知りませんでした」

全てを理解していたのは華霞だけだったということだ。

考古学者の名前は伊達ではないようだ。

「結局、全部幻だったんだ……。やっぱり、ミオガルナは伝説なのかな」

そうミラが呟くと、

「今もいるかどうかはわからないけど、過去にミオガルナが存在していたのは事実よ」

と、華霞が言った。

持っていたディスクの破片を、ミラに見せる。

「だって、このディスクはミオガルナの体の結晶を原料にして作られているんだから」

「え？」

「ミオガルナは、最後の星という意味なのよ」

驚くミラに、ミュリエリアが言う。

「あの星々の中に、ミオガルナはいるのかもしれないわね」

夜空を見上げる。

広大な天球には、様々な色の星が無数に瞬いている。

「あ
」

星が、流れた。

その一つを皮切りに、次々に流星の軌跡が夜空に描かれる。

天空を彩る、星々の舞台。

それは、ディスクに記録して残したくなるような、美しい光景だった。

NEXT > 第十六話「燃える雪山」

< 簡易キャラクター紹介 >

名前：華霞

年齢：25

性別：女

種族：オオナズチ進種

能力：【飛行】【龍化】【大地の絆・光】

第十五話「再演の星」(後編)(後書き)

今回は星を見に行く話でした。

星繋がりで、コミック版のオリジナルモンスターであるミオガルナを登場させてみました。

今回は、色々とオリジナル要素をばら撒いておきましたが、単純に世界観を深めるためのもので、さほど意味はありませんw
では。

第十六話「燃える雪山」（前編）

一面の白い世界。

吹雪の吹き荒れる雪山に、二つの影があつた。

一人は、赤髪、赤紫の瞳、背中に赤い翼を持つ【ハイエンシェント進古龍種】の青年。
年。

色を合わせるように、赤い上着の防具を身につけている。

普通の防具にありがちな無骨さが無く、どこか気品さえあるそれは【ギルドナイトスーツ】と呼ばれるものだ。

そして、その青年の前には、【ドスランポス】によく似た姿のモンスターが一頭。

体色は白と水色で頭には青緑色の鶏冠　雪山に住む鳥竜種【ドスギアノス】だ。

【ドスギアノス】と相対する青年が、背中から二本の短い剣を抜く。

防具とは対照的な、全く装飾の無い鋼色の【双剣】だ。

名は【そつえいけん双影剣】。

地味な見た目ながら、風化した太古の剣を沢山の鉱石と古龍の素材で蘇らせた業物だ。

【クシャルダオラ原種】の鱗から作られた刀身は、触れた雪を凍りつかせるほどの凍気を秘めている。

隙を窺うように、じっと見合い

ぞ、つと、

雪を散らして、【ドスギアノス】が仕掛けた。

青緑色に見える発達した爪を振りかざして青年に迫っていく。

だが、攻撃の間合いに入る直前、【ドスギアノス】は何か熱いものにも触れたかのように前脚を引いた。

いや、実際に熱いものに触れたのだ。

雪の白に混じって、赤い光が青年の周辺に漂っていた。

その光の正体は、高熱を放つ赤い粒子が集まったものだ。

【テスカト進種】の【大地の絆】ガイファタイスである。

肉を焼くほどの熱ではないが、行動を阻害し、体力を削る程度の効果は十分に持ち合わせている。

熱の鎧に阻まれて、退いた【ドスギアノス】に青年が迫る。

【双剣】が閃き、【ドスギアノス】の胸部を斬り裂く。

【ドスギアノス】は堪らず後方に飛び退いた。

だが、青年はその場所に既に次の攻撃を用意していた。

空中を漂っていた赤い粒子が、一気に集まり

轟音と共に、大爆発を起こした。

【大タル爆弾】にも匹敵する爆発に巻き込まれ、【ドスギアノス】の体が文字通り吹き飛ぶ。

上体を失った【ドスギアノス】の軀が雪の中に倒れ、すぐに白く覆われていく。

【ドスギアノス】に勝利を収めた青年は、吹雪の中、雪の一粒も被らず静かに佇む。

そんな青年の背中に、「いや、お見事」と声がかけられた。

振り向くと、いつからそこにいたのか、一人の男が立っていた。

青年よりも少し年上だろう。

その出で立ちは、鎧武者。この一言に尽きる。

立派な角のような前立（兜の飾りの部分）が付いた兜をかぶり、青く輝く甲冑に身を包んでいる。

【ラオシャンロン亜種】の素材から作られる、【暁丸・皇】と呼ばれる防具だ。

素材の入手の難しさから、この男がかなりの腕前であることが窺える。

腰に、通常よりも短い【太刀】が一振り。

兜の中から一房だけ青く染まった黄色の長髪が背中に流れていて、青い瞳が鋭く青年を見つめていた。

「誰だ？」

「これは、名も名乗らずに失礼した。某はそれがしベガードと申す。貴殿の戦いぶりを見せてもらったが、実に見事な技の冴え」

かちやと、音を立て、男が鯉口を切る。

鞘から僅かに刀身の銀色が覗いた。

「どういづつもりだ？」

訝しげに、青年が問う。

「某は強さを極めんとする修行の最中なれば、お手合わせをお願いしたい」

有無を言わせぬ、と言わんばかりに抜刀する。

鈍く輝く片刃の刀身。

芸術品のような美しさと命を奪う冷たさが、危ういバランスの上

に両立していた。

断りきれないと見た青年が、【双影剣】を構える。

「来い」

短く、青年が誘う。

「いざ 参る！」

【太刀】を構え、ベガードが雪を蹴立てて駆ける。

青年は、待ちの姿勢。

赤い粒子が舞い、雪を溶かす。

高熱の壁。

【ドスギアノス】との戦いを見ていたのなら、その威力は十分わかってはいるはずだ。

だが、ベガードはその赤い嵐の中に、飛び込んだ。

一瞬の躊躇いもなく、欠片の迷いもなく、突き進む。

「な……！」

まさか、突っ込んでくるとは思いもしなかった。

だから、青年は虚を衝かれる。

迎撃しようとしたときには既に遅く、首筋に刃が突きつけられていた。

「……………」

「……………」

沈黙。

青年は両手を上げ、【双影剣】を落とす。

青年の、敗北だった。

ベガードが刃を引き、鞘に収める。

赤い粒子が風の中に散っていった。

MONSTER HUNTER EVOLVE

第十六話「燃える雪山」

「ぎゃあああああっ…」

工房・ミュリエリア。

その日の朝は、ミラの悲鳴から始まった。

目を覚ましたミラが階下に向かうと、作業場の床にミュリエリアが倒れていた。

ミュリエリアの体の側に、二振りの短剣が転がっている。

「お姉ちゃん！」

ミラが慌てて駆け寄り、ミュリエリアを揺する。

「ん……」

ミュリエリアが小さな声を上げながら目を開く。

「お姉ちゃん。どうしたの？ 大丈夫？」

心配そうにミラが聞くと、ミュリエリアはあっさりと、

「眠ってしまったようね……」

「ようねって……なんで床？」

一安心したミラが、呆れ顔で呟く。

「きつと、これのせいね」

ミュリエリアは、床に転がっていた二振りの短剣を拾い上げた。

両方が同じデザイン。わかりやすい【双剣】だった。

一見すると、【人間】の英雄が使っていたと言う武器のレプリカ【伝説の双刃C】に見えるが、特徴的な鐔の形状が異なっていた。

本来は羽飾りのような形をしているのだが、この【双剣】の鐔は、菱形にカットされた金属のような素材でできていた。

不思議な光沢のあるこの素材の正体は、砂漠のリプレイヤーに入っていたディスクだ。

ミュリエリアは、珍しい【ミオガルナ】の素材が使われているこのディスクを、華霞から貰っていた。

華霞曰く、

『ディスクのサンプルはアカデミアに沢山あるし、割れてしまったディスクを修理する術はないのよね』

とのことだった。

「これは？」

「ミオガルナの素材を使った双剣の、試作品よ。オラージュサーガの主人公がミオガルナ素材から作った双剣を使っていたから、それにあやかってみただけ……」

浮かない顔で言うミュリエリア。

「どうやら、あまり上手くはいかなかったようだ。」

ミュリエリアは、【双剣】をミラに差し出す。

「ミラ、ちょっと鬼人化を試してみてくれない？」

「え？ でもお姉ちゃんもできるよね？」

不思議そうにミラが聞く。

ミュリエリアは一通りの武器の扱いを習得していて、作った武器の性能を自分で試すことができる。

普通の鍛冶屋は作るだけなのだが、オリジナル武装を作ることの多いミュリエリアはわざわざ使い方を学んだらしい。

「と言っても、型の確認と気の扱いが一応できる程度で、実際に戦えるほどではない。」

「そうなのだけれど……とにかくお願い」

「うん、いいけど」

ミラはミュリエリアから【双剣】を受け取り、それを天井にかざした。

鬼人化。

赤いオーラが剣とミラの体を包み、

そして、そのまま霧散した。

「あ、あれ？」

ミラが首をかしげ、もう一度剣を掲げるが、

「ミラ、もういいわ」

ミュリエリアがそれを止めた。

ミラから【双剣】を受け取る。

「やっぱり、私のやり方じゃなくて、武器に問題があるみたいね」

「やっぱりって？」

「どうしてか、鬼人化が上手くいかなくて……何度も試していたのだけど、試している間に寝てしまったの」

鬼人化はスタミナを大量に消費する。

慣れない人間が何度も使えば、酷く疲れるのは当然だ。

「オラージュサーガの通りなら風の属性剣ができるはず……いえ、新しい属性武器があっさりできるなんて安易に思っていたわけでもないのだけれど……」。

でも、鬼人化ができないなんて一体どういう理論で……気を拡散させている？ デイスクに加工されたときに特性が変化したの？

純粋な素材じゃなくて、合金のようにも見えるし……」

ミュリエリアはぶつぶつと呟きながら、思考に沈んでいく。

星祭りから帰って以来、ミュリエリアはずっとこんな様子だった。

最近までは隕石鋼の精製が上手くいかないと悩んでいたが、そこらは一息諦めて【ミオガルナ】素材の研究を始めたらしい。

ミラも最近理解したのだが、ミュリエリアは職業だからという理由以上に新しい武器の作成が好きらしい。

彼女にとって、仕事はイコールで趣味と結ぶことができる。

隕石と【ミオガルナ】という二つの新素材に、すっかり心奪われているようだった。

(また始まっちゃった……)

ミラはやれやれと肩をすくめ、キッチンへと向かった。

だが、その足取りは軽い。

普段は隙のないミュリエリアの世話を焼けるのがちょっと嬉しいミラだったりする。

「あ、ミラ」

我に返ったらしいミュリエリアが、ミラを呼び止める。

ミュリエリアは作業台の上に置いてあった別の短剣を取り、振り向いたミラに渡した。

ミラが鞘から抜くと、片刃の肉厚な刀身が姿を見せた。

「剥ぎ取り用のナイフなのだけど、新しいのを作ってみたの」

「剥ぎ取りナイフ？」

文字通り、モンスターの死体から素材を剥ぎ取るのに使う刃物のことだ。

「この前、ベルゼラが武器の調整に来たときに愚痴を聞いたのよ。それが少し興味深かったから」

ベルゼラの使う武器、【群蟲刃【雲霞】】は無数の刃を鋼糸で繋いだ武器だ。

その独特の形状故に、手入れするのが難しい。

本格的な調整のために、ベルゼラは度々ミュリエリアの工房を訪れていた。

ちなみに、そのときの愚痴と言うのは、

『この前、ゲリヨスから剥ぎ取りしてたら、うっかり毒袋をダメにしちゃったのよね。剥ぎ取りナイフって、繊細な作業に向かないと思っのよ。』

ねえミュリー、何とかしてよ』

というものだ。

「普通のナイフと違うの？」

「ええ。一度鞘に収めて、柄のこの部分を押しと」

ナイフを鞘に収め、柄の先を押し込みながら、もう一度引き抜く。

すると、再び姿を見せた刀身は、極薄の刃でできていた。

「ええ？ どうなってるの？」

「これはね」

と、クイズの答え合わせのように、楽しそうにミュージアが解説する。

「厚いナイフの中に、もう一つ、薄い刃を収めてあるのよ。

この部分を押しながら抜くと、厚い刃がそのまま鞘に残って、薄い刃が抜けるの」

つまり、厚い刃を鞘に見立てた二重構造になっているのだ。

硬い部分や大まかに切り分けるには外の刃を、細かい作業には内側の刃を、と使い分けられるのである。

「凄いよ、これ。思いつくお姉ちゃんもだけど」

「昔、似たような武器を作ったことがあったのよ。それで、使ってくれる？」

「ベルお姉ちゃんに渡さなくていいの？」

「ベルにはちゃんと注文を取るわよ。ここは商店なのだから」

「あ、そっか。じゃあ、私が使わせてもらっね」

ミラは、ミュリエリアから剥ぎ取りナイフを受け取った。

「商品にするから、後でカタログに追加しておいて」

「うん」

ミュリエリアの言葉に、ミラはしっかりと頷いた。

朝食を終え、工房を開く。

今日のミラは外出する用はなく、店番をしている。

開店から数時間、店を一人の青年が訪ねてきた。

【ギルドナイトスーツ】を着た【ハイエンシェント進古龍種】の青年。

「あ、いらっしやいませ」

ミラは、彼に見覚えがあった。

常連と言つほどではないが、何度か店を訪れたことがある。

最近にも、ミュリエリアにあるものを予約するために来店していた。

その言えば、今日は商品を渡す約束の日だった、とミラは思い出す。

「ええと、確か、柘也さんですよね？」

「ああ、そうだ」

青年　柘也が頷く。

「注文された品物は、えーと、あれ、どうなんだっけ？すみません、ちょっと待ってください」

柘也に断つてから、作業場に首を突っ込み、

「お姉ちゃん。お客さんなんだけど、柘也さんの注文ってどうなってるの？」

「柘也さん？　ちょっと待って、今行くわ」

ミュリエリアは、棚から手の平に乗るサイズの小さな木箱を取り出し、店先まで出てくる。

木箱をカウンターの上に置き、

「ご依頼の品です。確認してみてください」

柊也は木箱を手にとってふたを開き、中身を確認する。

そして、ふたを閉じた箱をカウンターに置いてミュージエリアに押し返した。

「何か、至らないところが？」

「いや、よくできてる。注文通りだ」

そう言っつて、しかし柊也は顔を曇らせる。

「でも、今の俺にはこれは受け取れない。至らないのは俺の方だ」

「代金は先に受け取っていますけど？」

「いや、問題は金ではない。心だ」

「はあ、心ですか……」

イマイチよくわからない、という風にミュージエリアが相槌をうつ。

「やるべきことを終わらせたら取りに来る。それまで預かっておいてくれ」

「はい、それは構いませんが」

「すまない。それと、もう一つ頼みがある」

背負っていた【双影剣】をカウンターの上に置く。

「こいつを研いでくれ。これから、大切な用があるんだ」

声は重く、表情は怖いくらいに真剣だった。

.....

柊也を店内に招き入れ、ミュリエリアは【双影剣】の手入れをしていた。

何種類もの砥石を使って丁寧に刃を研ぎ、今はクリーム状の薬品をつけた布で磨いている。

ミラも作業場の中で店を使っているカタログに新しい剥ぎ取りナイフを書き加えていたが、ふと、その手を止めた。

椅子に座って待っている柊也に視線を向ける。

柊也は、何かの本を読んでいるようだったが、さっきから手は止まりっぱなしで、ページも進んでいないようだった。

「あの」

と、ミラは柊也に声をかけた。

柊也が本から顔を上げる。

「何を読んでるんですか？」

「これか？ これは詩集だ」

表紙が見えるように持ち上げる。

表紙には『ゾハル詩集』の文字。

【進種】文明初期に書かれた書物で、作者の名前からそうタイトルがついている。

「詩集、ですか」

「女性に人気らしいと聞いた。読んだことはあるか？」

「いえ、ないです」

「そうか。中々興味深いものだ。ここにあるのは文字に過ぎないが、風が吹く様子や木々の鮮やかな色が伝わってくる。世界を言葉で表現しようとしてるようだ」

「何だか、難しそうですね……」

「そうだな。別に、それを理解したくて読んでいるわけでもないんだが」

「それじゃあ、どうして読んでるんですか？」

「言っただろう。女性に人気だと。」

男にとって、女つてのはどうにも理解しにくい生き物だ。同じ物を見れば、少しは理解できるかと思っただがな」

ぱたん、と本を閉じる。

「だが、ダメだ。問題は、そんなところにはないんだ」

「問題、ですか？」

ミラにはよくわからないが、柊也は何か問題を抱えているらしい。

それを解決する手段として、詩集を読んでみたが、解決には至らなかったということのようだ。

「弱いことは、罪だ」

「え？」

唐突に、柊也が話を変えた。

話題の変化についていけず、ミラが戸惑う。

「いや、違うな。弱さが罪になることがあると言っべきか」

「弱さが罪に……？」

「例えば、村の警備のために雇われたものや、子供を抱える親。護らなければならない立場のものに力がないのは、罪だ」

「それは、確かに」

ミラが頷く。

ミラ自身、自分の力でミュリエリアを護るといつ思いがあった、理解できない話ではなかった。

「……強いつもりだったんだがな」

ぼつりと、柊也が呟く。

悔しそうな響きが、その言葉にはあった。

「それって」

と、ミラが聞こうとしたとき、

「終わりました」

ミュリエリアがそう言いながら【双影剣】を持ってくる。

最初から十分に手入れはされていたが、ミュリエリアが研ぎ直した後と比べるとその差は一目瞭然。

刃は完璧な角度に研ぎ上げられ、新品同様の輝きを放っていた。

「どつぞ」

「すまない……これは、大したものだ」

ミラは見慣れているのだが、柊也はその出来栄に驚く。

「ありがとうございます。では、後はこの子が」

ミュリエリアは柊也に一礼し、ミラに【双影剣】を渡しながらかつと耳打ちする。

「双剣、三類よ」

うん、と頷いて、ミラは柊也に声をかける。

「柊也さん、こっちに来てください」

柊也と一緒に工房を出て、ミラはカウンターの中に戻る。

カウンターのの上に【双影剣】を置き、壁に貼られている料金表を確認する。

同じ研ぐという仕事でも、武器の大きさや使われている素材で料金が異なるのだ。

「えーと、双剣の三類だから……千二百ゼニーになります」

「千二百か。そうだ、それとホットドリンクを頼む」

「あ、はい。ホットドリンクは、二百五十ゼニーです」

ミラは、商品棚から赤い液体の入ったビンを取り出し、カウンターに置く。

その間に、柊也は財布から硬貨を取り出していた。

大き目の五百ゼニー硬貨が二枚、小さい百ゼニー硬貨が四枚と、中心に穴の開いた五十ゼニー硬貨が一枚。

硬貨の数を数えて、ミラは頷く。

「ちょうどお預かりします。ありがとうございます」

「ああ」

柊也は【双影剣】を背負い、【ホットドリンク】をアイテムポーチにしまう。

「柊也さん。あの、気をつけて、頑張ってください」

歩いていこうとする柊也の背中に、ミラは声をかけた。

柊也の言っていた大切な用が何かはわからないが、武器を研ぐということとは多分戦うのだろうと思ったからだ。

柊也はふ、と笑い、

「ありがとう」

そう言って、軽く手を振りながら歩いて行った。

「さて、と」

ミラは、自分の仕事に戻る前に一つ、気になっていたことをミュリエリアに聞くことにした。

工房の中に入って、ミュリエリアの側に行きながら質問する。

「お姉ちゃん、ゾハル詩集って読んだことある？」

「ええ、あるわよ」

多分あるだろうとは思っていたが、予想通り、ミュリエリアが頷く。

「さっき、柊也さんが読んでいたのよね？」

「聞こえてたんだ。女性に人気らしいけど、どんな本なの？」

「そうね……」。

現実の景色や現象とそれによって起こった心情の動きを組み合わせ、とても繊細な言葉と緻密な文章で表現した本よ。

一言で言うなら『綺麗』なのよ。この辺りが人気の原因でしょうね。

でも、私はむしろあの独特の世界の表現に惹かれたわ。さすがは神理学の天才というところかしら」

「しんりがく？」

「神の理しんりの学問がくと書いて神理学よ。神様になるにはどうすればいいのかという研究ね」

「か、神様……？」

と、ミラがあからさまに不審そうな顔になる。

ミュリエリアは苦笑を浮かべて、

「別にそんな胡散臭いものではないわ。今で言う天文学に物理学や数学を組み合わせたようなものよ。」

文明の初期は、世界はわからないことだらけだったの。中でも、一番恐れられていたのは夜だったわ」

夜になれば、世界は闇に閉ざされる。

どこに命を狙う獣が潜んでいるか、それどころか、自分がどこを歩いているかすらわからなくなる。

今のように、手軽に灯りを確保することのできない時代、闇は恐怖そのものだった。

「昔は、月が夜の光で照らすから夜が来ると思われていて、だから、月が昇らないようにすればずっと昼のままだと考えたの。」

でも、相手は空に浮かぶ星。それこそ、神様でもないとうしよ
うもないと思っただのじゃうね」

「だから、神理学？」

「そうよ。最終的に、ゾハルは『ルル・イレブン世解十一式』という考えを残しているわ。」

神理学は十一の数式に分解することができて、その全てを証明して理解すれば、神の座に到達するという考えね。」

ルル・イレブン世解十一式が提唱された後は、それを証明することが神理学の主流になって、副産物として沢山の有益な発見があったと言われているわ。」

結局、人間の文明から色々なことがわかるようになって神理学は廃れてしまうのだけれど、ルル・イレブン世解十一式は身近な所に名前を残しているわよ」

「身近な所？」

そんな凄い式がどこにあるのか、とミラはきよるきよる周囲を見回す。

ミュリエリアは「そこよ」と言いながら、壁にかかっているカレンダーを指差した。

「今月は基盤イェンドの月。基盤イェンドは、確か第九の式だったわ」

「え、じゃあ月の名前が？」

「ええ。第一式ケテルから王冠コクマー、知恵ビナー、理解ケセド、慈悲ゲブラー、峻厳テイフェル、美ホ、勝利ホ、栄ホ光ド、基盤イェンド、王国マルクト、知識ダアトの十一式。

季節が一回りするとされる三百三十日を一年。それを月の周期三十日で区切るとちょうど十一。それは多分偶然でしょうけど、そこに世解ルル・イレブン十一式の名前をつけたのが今の暦よ」

「そうだったんだ。ぜんぜん知らなかったよ……」

「もう二百年近く前のことだもの、無理もないわ」

「二百年も！？ それじゃ、その式って証明されたの？」

「いいえ。と言うより、今はそもそも世解ルル・イレブン十一式がどんなものかもわかっていないのよ」

そんな話をしていると、

バンっ、と乱暴に工房の扉が開き、一人の少女が飛び込んで来た。

薄青の髪を後頭部でまとめてシニヨンを作っていて、【リオレウス原種】の素材から作られる【レウスSシリーズ】を身に着けている。

【レウスS】は肩に小さな翼のようなパーツがあるのだが、その後ろに本物の青い翼があった。

【テスカト進種】の女性の特徴だ。

大き目のウエストポーチを巻いて、肩には【アイルー原種】を模して作られた【ライトボウガン】である【アイルーラグドール】を担いでいた。

少女は、その青紫色の瞳でミラとミュリエリアを睨みつけ、

「しゅー君を誑かす泥棒猫はどっちなの!？」

と、言い放った。

あんまりな第一声である。

「は？」

「え？」

ミラとミュリエリアは、間の抜けた声を出して顔を見合わせるのだった。

.....

数分後、ミュリエリアとミラは作業台の椅子に座らされ、その前に両手を腰に当てたポーズの少女が立っている。

なぜか、二人が少女に怒られているという図だった。

「あー」

と、恐る恐るミラが声を上げると、

「何なのっ?」

「きゃんっ」

びしっと指を突きつけられ、ミラが首をすくめる。

その代わりに、ミュリエリアが口を開いた。

「そうね、何と言われると、色々と言いたいことはあるのだけれど、とりあえず事情を説明してくれないかしら?」

私もミラも、泥棒猫などと呼ばれる筋合いはないはずだけれど「

「そ、そうだよ！ 私、アイルー進種じゃないよ!」

「……そういう意味ではないわ。悪いことをする人、という意味の比喩よ」

微妙にずれたことを言うミラに、ミュリエリアが呆れ顔で訂正する。

「あ、そうなんだ……」

間違いに気がついたミラは、恥ずかしそうに頬を染めた。

一瞬ほのぼのとした空気が流れるが、そこに少女が激しい口調で切り込む。

「誤魔化しても無駄なの！ ちゃんと見てたんだから！」

「見ていたって、何を見ていたの？」

「しゅー君がこの店から出てくるところだよ！」

そう言われて、ミュリエリアにはぴんと来るものがあった。

「もしかして、しゅー君というのは、柊也さんのことかしら？」

「そうなの」

少女が頷く。

ついさっきまで店にいた柊也の関係者らしい。

入ってきたタイミング的に、柊也が店から離れるのを確認してから飛び込んできたのだろう。

「あなたは柊也さんとどういう関係なの？」

ミュリエリアが聞くと、少女は赤くなって、

「一応……恋人なの」

「恋人だったんですか」

と、ミラ。

それを聞いた少女は、はっとなると、早口で付け加える。

「か、勘違いしないで欲しいの！ 一応って言ったのは、ちょっと恥ずかしかつたからで、本当はラブラブなんだからね！ 将来子供は二人くらいがいいよね、なんて話しちゃうくらいの仲なんだから！」

「はあ、ラブラブ……」

「ラブラブなんだ……」

コメントに困りながら呟く二人。

「それで、そのラブラブなあなたが、何の用なのかしら？」

「それは……」

途端に少女の勢いが失われ、しゅん、と萎れてしまう。

側にあつた椅子に力無く腰を下ろし、

「最近、しゅー君の様子が変なの。いつつも難しい顔してるし、何だか避けられてるみたいで……」

「それは……心配ですね」

「べ、別に心配なんてしてないの！」

ミュリエリアが相槌を挟むと、少女は作業台に勢いよく手を叩きつけて立ち上がる。

「茉莉はただ、しゅー君を誑かしてる悪い女がいるんじゃないかと思っただけなの」

「私もお姉ちゃんも、誑かしてなんてないです！」

ミラが言い返す。

が、ミュリエリアは別のことが気になっているようだ。

「あなたの名前は、まつりと言うの？」

「な、何で茉莉の名前を知ってるの!？」

盛大に驚く少女、改め、茉莉。

「……今、自分で言っていましたよ」

「しまった！ 敵に個人情報を漏洩しちゃったの！」

ミラの突っ込みに頭を抱える茉莉。

「もしかして、こんな字を書くのではないかしら？」

ミュリエリアは、手近にあった紙にさらさらと書き込んで茉莉に見せる。

そこには『茉莉』と書かれていた。

「な、何で字までわかるの!?!」

驚く茉莉。

その態度が、正解だと物語っていた。

「やっぱり。それで、ジャス」

言いかけた言葉の途中で、はっと口を押さえる。

だが、茉莉はそれをしつかりと聞き取っていた。

「ジャス? もしかして、それが泥棒猫の正体なの!?!」

「い、いえ、違うわ」

「嘘なの! だって、さっきしまったって顔してたの!」

「本当に違うのよ」

「それだったら、何を言いかけてたのか教えて欲しいの」

茉莉に詰め寄られて、ミュリエリアは首を横に振る。

「……それは、聞かない方がいいと思うわ」

物凄く怪しかった。

ミュリエリアも、自分でそれがわかったようで、フォローを入れる。

「きつと、不安になっているのよ。マリッジブルーね」

結婚に関して不安やストレスを感じたり、憂鬱になったりする現象のことだ。

酷くなると、体調を崩したりする人もいるらしい。

「プロポーズなんてされてないの……最近は恋人らしいことだって……」

がつくりと頂垂れる茉莉。

ミュリエリアは「困ったわね……」と呟く。

あまりにがつかりしている様子を見かねたミラが、

「お姉ちゃん、何か知ってるのなら教えてあげたら？」

「私の推測でしかないし、それに、これは本当に聞かない方がいいのよ」

「でも、可哀相だよ」

ミラとミュリエリアが言い合っていると、茉莉が今度はミラに詰め寄る。

「ねえあなた、ええと……」

「あ、ミラです。それで、ミュリエリアお姉ちゃん」

「ミラちゃんは茉莉の味方なの!？」

「え、ええと、変な誤解を解いてもらえるなら……」

茉莉の剣幕に押されながら、ミラが答える。

それを聞いた茉莉は、物凄い勢いで首を縦に振る。

「解く! 解くから、教えて欲しいの!」

「あでも、私もよくわからないんですけど……」

「それじゃあ、さつきしゅー君は何しに来てたのかでいいから、教えて欲しいの!」

「それは」

いいのかな? とミュリエリアに視線を送ると、ミュリエリアは黙って肩を竦めた。

意識するなら、好きにきなさい、だ。

ミラは、許可も出たから茉莉に話すことにした。

「柊也さんは、大事な用があるからって武器の研ぎ直しを頼んで、女性を理解したいからって詩集を読んで、最後にホットドリンク買って行きました」

ミラが指を折りながら順番に話し終わると、茉莉が、

「謎は、全て解けたの!」

と叫ぶ。

ミラの話の途中でも、「大切な用!?」「詩集!?」「ホットドリンク!?」と叫んでいた。

「え、何かわかったんですか?」

言外に「今ので?」とつけながらミラが聞く。

茉莉は、不敵に笑い、

「今までの話を総合的に判断すれば簡単なの。」

しゅー君は、雪山にそのジャスって人に告白に行ったの!」

「ええ!?!」

「は?」

ミラが驚き、ミュリエリアが椅子の上で姿勢を崩した。

自分の考えが伝わっていないのがわかって、茉莉はもう少し詳しく

く説明する。

「武器を研いで身なりを整えて、詩集を読んで最終確認をして、ホットドリンクを買って雪山で待ってるジャスって女のところに行ったので間違いないの！」

「……でも、柊也さんって茉莉さんの恋人、なんですよね？」

「あ……」

ミラが確認すると、茉莉がぼかんと口を開ける。

推理に夢中になって、そのことが頭から飛んでいたようだ。

茉莉は少し沈黙した後、

「……こ、断りに行ったの！」

そう思っことにしたようだ。

かなり苦しい理論だった。

流石にミラも、そうなのかなあと首を捻り、

ミュリエリアに至っては、頭痛でも起こしているかのように頭を押さえていた。

「……行ってくるの」

茉莉が呟く。

「え？」

「茉莉も、しゅー君のところに行くの！」

「やっぱり心配なんですネ」

とミラが言うと、

「全然心配なんかじゃないの！」

そう言った後、

「勘違いしないでね？ 茉莉はしゅー君を信じてるから、心配してないって言うてるの。気にしてないって意味じゃないんだからね！それに、それに本当はすごく心配なんだからあ」

と続けた。

もうすっかり行く気になっているようで、ウエストポーチの中身を確かめている。

そんな茉莉に、ミユリエリアが声をかける。

「茉莉ちゃん、一つ聞きたいのだけれど」

「何なの？」

「ゾハル詩集という本を、読んだことはあるかしら？」

「ん？ あるの」

茉莉が答えると、ミュリエリアは「でしようね」と呟く。

内容はさっぱりだが、ミュリエリアが何らかの確信を深めたという事だけは、確かなようだった。

第十六話「燃える雪山」（後編）

【雪山エリア】、【エリア8】。

山頂に近く、山肌と崖に両側を挟まれた細長いエリアである。

天候は雪で、吹雪ほどではないが、若干視界が悪い。

「待ちかねたぞ、青年！」

柊也が【エリア8】に足を踏み入れると、先に来ていた鎧武者ベガードが大声で言った。

すぐ側に立っている立て札を指差し、

「決闘を申し込んだ者が遅れてくるとは、何事か！」

「すまん、途中でブランゴに絡まれてしまった」

「む、そうであったか。それならば仕方あるまい」

ベガードは大仰に頷く。

「しかし、そうか、この立て札は貴殿であったか」

そう言って示した立て札には、『ベガードへ 再び勝負を申し込む 双剣使い』と書かれ、その後に『その勝負、承る』という言葉と、日時が別人の字で書き加えてあった。

これは、数日前に柊也が立てておいたものだ。

ベガードがまたこの場所を通るかどうかは賭けだったが、ベガードはこの立て札を見つけ、返事を返してくれた。

そうして、再び二人が相見あいまみええているのだ。

「わからなかったのか？」

不思議そうに聞く柊也。

以前の戦いときに名前は名乗らなかったが、双剣使いと書いておけば通じると思ったのだが。

「某がこの地を訪れて二十と一日。その間、四十と八度の戦いをしたのでな。双剣を使う者も、二人や三人ではなかったのだ」

「あんだ、どれだけ喧嘩売ってるんだ……」

呆れたように柊也が言う。

単純計算して、ベガードは一日に二回は戦っていたことになる。

「しかし、嬉しいぞ青年よ」

「ん？」

「某に打ち倒された者は数知れず、だが、再び挑んで来たのは貴殿が始めてだ。貴殿も、某と志を同じくする者か？」

「いや、強さを極めようなんて気は更更ない。
ただ俺は、あんたに負けたまま 弱いままじゃいられない。それだけだ」

柊也は、【双影剣】を抜刀し、身構える

「俺の名は柊也だ。ベガード、俺はあんたに勝って、未来へ進む」

「ふむ。察するに何か、事情があるのだな。だが、手心などは加えぬぞ。」

戦場に立つ者同士、全力で干戈かんかを交えようではないか」

鯉口を切り、【太刀】を抜き放つ。

「ああ、望むところだ」

「ならば重畳。では」

柊也が答えると、ベガードは口角を吊り上げ、猛々しい笑みを浮かべた。

「参る!」

「来い!」

「おおおおっ!」

雄雄しい声を上げて、ベガードが飛び出す。

走る、という言葉ではとても足りない。

ベガードは【ティガレックス進種】。

その【原種】の突進を見ているかのような勢いだ。

柊也が【大地の絆】を使って、空中に赤い粒子を展開する。

ベガードは、以前と同じように、躊躇いもなく赤い嵐の中に突っ込んだ。

横薙ぎに振られる【太刀】。

だが、柊也は以前と同じようにはやられない。

上下から首元に交差させた【双影剣】が刃を受け止める。

「前もそうだったな。なぜだ？」

至近距離で視線を交わしながら、柊也が問いかける。

赤き熱の壁に、なぜ、躊躇いもせず飛び込んできたのか
飛び込めるのか。

男が答える。

「できると、信ずればこそ」

そして、続けてこう言った。

「人間の格言にこうある。『心頭を滅却すれば火もまた涼し』と。

「これすなわち」

「たっぷり溜めを作って、言い放つ。」

「熱くても、我慢をせよという教えなのだ」

「それは、正しいのか……？」

飛竜にも通用する能力を、我慢の一言で片付けられた柊也がげんなりと呟く。

「小手先の技など、某には通じぬぞ」

刃を引き、上段から振り下ろす。

柊也は、左の剣で【太刀】を弾き、右手の剣で突きかかる。

ベガードは半身を引いて剣先を躲し、柊也の左肩に斜めに斬り下ろす。

ガキツ、と金属の打ち合う音。

体を反時計回りに回転させながら、柊也が右手の剣で【太刀】を捌く。

回転しながら逆手に持ち替えた左手の剣がベガードのわき腹を狙い、

ベガードは【太刀】から離れた左手で柊也の手首を掴んで止めた。

「く……」

柊也が顔をゆがめる。

【剛腕】と称される【ティガレックス進種】の能力。

常人離れたパワーが、完全に柊也の腕の動きを止めていた。

「ぬんっ！」

ベガードは片手一本で、柊也を放り投げる。

空中に投げ出された柊也。

ベガードがその落下点へと走る。

だが、【進古龍種】は他の【進種】には無い、翼を持っている。

柊也は空中で体勢を立て直し、ベガードの頭上から襲いかかる。

逆落として降ってきた刃を、【太刀】が斬り払う。

能力ゆえに、その一振りには柊也の予想以上の力がこもっていて、柊也の体が流された。

姿勢を崩しながらも、ざあ、と雪に足跡を引きながら何とか着地する柊也。

「ふ、流石だ」

心底嬉しいとばかりに笑みを浮かべ、息つく暇も与えず、向かっていくベガード。

柊也は【双影剣】を構え直し、それを迎え撃つ。

少しずつ雪と風が勢いを増し、吹雪が吹き荒れようとしていた

柊也とベガードが戦っている、その頃

同じ雪山を、二人の少女が登っていた。

ミラと茉莉である。

茉莉はともかく、なぜミラまで一緒にいるのかと云うと、茉莉のお目付け役をミュリエリアに頼まれたからだ。

『彼女、多分とんでもない勘違いをしているから、大事おおいごとになりそうだったら止めてちょうだい』

と、ミュリエリアは言っていた。

「あの、本当にここにいるんですか？」

腕で強くなってきた吹雪から顔をかばいながら、ミラが聞く。

【ロイヤルナイトメイルPシリーズ】に【夜刀】【月影】という

使用頻度が最も高い装備。

それに、【ガウシカ】という草食獣の毛皮で作られた【マフモフフード】をかぶっている。

【マフモフフード】は防御力は皆無だが、防寒具としては優秀な装備だ。

「いるの」

先を歩いていた茉莉が振り返って答える。

「どうしてですか？ ホットドリンクを使うのは、雪山だけじゃないですけど」

夜の砂漠や洞窟の中も、温度が低く、【ホットドリンク】が必要な場所だ。

なのに、雪山だと断言するのはどんな理由かと思えば、

「しゅー君はよくこの山に狩りに行くから、誰かと知り合うならこの場所なの」

「なるほど、そうだったんですか」

そのとき、一際強い風が吹き、ミラは身震いした。

「しゅー、寒いー」

声が震えている。

【ホットドリンク】は飲んでいるが、前も言ったとおり、寒いものは寒い。

【ロイヤルナイトメールPシリーズ】の【腰装備】はミニスカート型で【脚装備】は膝までしかないため、むき出しの太股が非常に冷たかった。

「もっとこっちに寄るの」

茉莉がミラの手を掴み、自分の側に引き寄せる。

赤い粒子がふわりと舞って、暖かな熱が二人を包み込んだ。

「わあ、暖かい」

「ふん、雪山にそんな格好で来るなんて、馬鹿なの」

「う、うめんなさい……」

しゅんとするミラ。

茉莉は、そんなミラを見て、

「勘違いしないでほしいの。別に怒ってるんじゃないんで、風邪とかひかないか心配だから言っただけなの！ あなたののためにやっているんだからね！」

「え？ あ、ありがとうございます」

「ほら、さっさと行くの」

「あ、待ってください！」

ミラは、慌てて先に行く茉莉の背中を追いかけていった。

轟々と吹く吹雪の中、柊也とベガードの戦いは続いていた。

【太刀】の剣閃が風を切り裂き、【双影剣】が雪を凍てつかせる。

刃と刃がぶつかり合い、薄暗い雲の下に火花が散る。

ベガードが放った突きを柊也が剣の腹で受けた。

もう一刀で【太刀】を跳ね上げ、姿勢を低くした柊也がベガードに斬り込む。

が、そこに頭上から【太刀】の柄が落とされた。

柊也は横っ飛びに飛び退き、雪の上で一回転して立ち上がった。

「これこそ、正に闘いというもの！ 我が血の沸くようではないか！」

「く、余裕だな。こっちは必死だと言うのに！」

「なに、言葉だけよ！」

言葉と同時に刃が交わされる。

二人は戦いに飲み込まれ、周囲を白く染める吹雪さえ目に入らない。

だから、二人の上に大きな影がかかったことにも、気がつかない。

「しゅー君！」

柊也の後ろから、鋭い声。

茉莉とミラがエリアの中に入ってきていた。

「ま、茉莉か？」

驚いて振り向く柊也。

あまりに隙だらけの行動に、ベガードは逆に動きを止めた。

こんな形で決着をつけるのは、彼の本意ではない。

「しゅー君、上見て上！」

「上……？　うえー！？」

真上を見上げて、柊也が妙な声を上げる。

雪に紛れて、真っ白な巨体が、空から降りてきていた。

否、落ちてきていた。

「うわっ」

柊也は慌ててその場から飛び退く。

だが、ベガードは避け切れなかった。

落下したその脚に、踏みつけられる。

全身が白くのっぺりとした皮膚に覆われ、鱗はない姿。

目も耳もなく、顔全体が口という不気味な風貌　【フルフル原種】である。

「ぬうっ、抜かったか」

下が雪だったのと、防具によって踏み潰されることを免れたベガードが脚の下でもがく。

さしもの腕力も、進種と飛竜との体格差は覆せないようだ。

【フルフル原種】が脚に体重をのせ、鎧がミシミシと軋んだ。

「ダメっ」

ミラが【夜刀】【月影】を抜きながら走り出す。

だが、それより先に、柊也が攻撃をかけた。

その手から投擲された【双影剣】が連続して【フルフル原種】の体に突き刺さる。

【フルフル原種】が目のない顔を柊也へと向ける。

目も耳も持っていないこの飛竜は、発達した嗅覚によって敵の位置を把握する。

柊也は、上着の左右の襟に手をかけ、強く引つ張る。

すると、【^{スーツ}胸装備】 【^{コイル}腰装備】の二つの装備が、同時に外れた。

上着から手を抜くと、【^{グラブ}腕装備】も一緒になって外れる。

ミラがメイミーと初めて出会った日、ミュリエリアが考えていた『脱ぎやすい防具』の依頼人が、実はこの柊也なのだ。

密度を増した赤い粒子が壁のように柊也を囲み、その熱が雪を水蒸気に変える。

そして

「グオオオオオオオオッ！！」

鋭い牙の生えた口から咆哮を上げ、赤き古龍が姿を見せた。

頭の側面を後ろに伸びる湾曲した二本の角に、赤い鬣。前脚と後脚の間に、大きな翼を持つ。

炎王龍の名を冠する雄の古龍、【テオ・テスカトル】。

柊也が【龍化】した姿だ。

柊也が【フルフル原種】に体当たりをかける。

ほぼ同質量の体躯に激突された【フルフル原種】の体が吹き飛び、崖から外に転落する。

だが、その脚にはベガードがくっ付いたままだ。

【フルフル原種】は天井に張り付いて獲物を待ち構える習性があり、その指は他のものに吸着する構造になっているのだ。

落下していく【フルフル原種】を追って、柊也が崖から飛び出す。

空中で【フルフル原種】へと近づくと、ベガードが手を伸ばして柊也の首にしがみついた。

柊也が翼を羽ばたかせて離れると、やっとベガードの鎧が【フルフル原種】の指から外れた。

直後、【フルフル原種】は地面に叩きつけられ、盛大に雪煙が立ち上る。

その目の前に柊也が降り立ち、地に足を着けたベガードが柊也に並ぶ。

ベガードは、【フルフル原種】に潰されている間も手放さなかった【太刀】を構えながら呟いた。

「み、未体験領域であった……。まだまだ修行が足りぬ」

「しゅー君!」

「柊也さん! と見知らぬ人ー!」

茉莉とミラが崖の上から四つん這いになって顔を出し、下に向かって叫ぶ。

下が見えないほどの高さではないが、吹雪と雪煙で何も見えない。

「しゅー君、今行くの!」

茉莉が立ち上がりながら言う。

「ミラちゃんはここで待」

ってて、と言う言葉の途中で、立ち上がったミラが髪をかき上げる。

「リライト!」

さあ、と舞った髪が、茉莉と同じ薄青に色を変え、背中に青い翼が広がる。

【テスカト進種】^{まつり}の能力。

さっき見たばかりのそれを、ミラは既に自分の物にしていた。

「な、何なの!？」

ぎよ、と、きよとん、を足したような顔で茉莉が聞く。

ミラは、「えーと、そういう変種なんです」と答えた。

【人間】の技術と【変種】は、この世界でわからないものの代名詞だ。

とりあえずそう言うっておけば、説明になってしまふ。

「そうだったの」

理解はできないが納得はした、とばかりに茉莉が頷く。

そして、二人して崖から飛び下りた。

崖下の地面に着地して、ベガードや柊也と並ぶ。

その頃にはようやく雪煙も収まり、【フルフル原種】の白い体が見えてくる。

【フルフル原種】は、前傾姿勢になって口から白い吐息を漏らしていた。

大きなダメージを受けて、怒り状態になっているのだ。

フヲオオオオオオオオ!

酸性の唾液を撒き散らしながら、野太い笛の音のような咆哮が大気を振るわせる。

十分離れていたミラたちが一瞬動きを止めるほどの声だ。

【フルフル原種】の口が青い電気を帯びる。

首をゆっくりと持ち上げ、振り下ろすと同時に電撃のブレスを吐き出した。

電撃の塊が五つ、五方向に広がりながら地面を這う。

ミラ、茉莉、柊也は地面から飛び立ち、ベガードは電撃の合間を縫ってブレスを躲した。

柊也は上空から【フルフル原種】に接近し、炎を吐きかける。

さらに、【アイルーラグドール】に【火炎弾】を装填した茉莉が援護射撃を行い、側に浮かぶミラが熱の粒子を展開する。

【フルフル原種】の皮膚は炎に弱い。

肉の焼ける臭いが漂い、【フルフル原種】が炎の中で悶える。

オオオオオオン!

叫び声を上げ、帯電した【フルフル原種】が炎の中から跳ねる。

柊也が体当たりを喰らい、山肌に激突する。

【フルフル原種】は柊也を狙って首を振り上げ、

「柊也殿！」

ベガードが【フルフル原種】の足元に走り込み、脚に斬りつける。

【フルフル原種】がよろめき、行動が中断された。

そこに、茉莉が【火炎弾】で攻撃を加える。

【フルフル原種】は茉莉へと頭を向け、にゅ、と首を伸ばした。

全長を超えるほどに伸びた首。

茉莉とミラはぱつと左右に分かれて、その先端に並んだ牙を躲す。

そして、伸び切った首を中心に、二重螺旋を描きながら【フルフル原種】に迫る。

ミラは【夜刀】【月影】を首に突き立てて螺旋状の切り傷を刻み、茉莉は逆回転の弾痕を穿った。

【フルフル原種】の首が元のように縮まり、傷から滝のように血を流す。

「もはや満身創痍よ、もう一息で！」

ベガードが【太刀】を顔の横に立てて構え、正面から斬りかかる。

【フルフル原種】は酷い傷を負って尚、ベガードへその首を伸ばす。

「む、甘いわ！」

ベガードは【太刀】を片手に持ち替え、【フルフル原種】の頭を受け止めた。

口の両端をしっかりと握り、動きを押さえ込む。

そして、その伸びきった首を、上から柊也が踏み潰した。

だが、【フルフル原種】はまだ生きていた。

柊也が首の上から退くと、【フルフル原種】の首がずるずると戻っていく。

しかし、筋肉をずたずたに引き裂かれた首はもう元には戻らず、半分ほどの長さを地面に引きずっていた。

「止めを！」

ベガード、ミラ、柊也が【フルフル原種】へと向かう。

【フルフル原種】は、先端がお椀形に広がる尻尾を地面につける。

全身に電気を流す体内発電をするつもりだ。ミラと柊也が足を止める。

だが、ベガードだけは、速度を緩めず【フルフル原種】へと突っ込む。

「はあああああ！！」

気合の声と共に【太刀】の刀身が赤い光に覆われ、気刃と化した刃が振り下ろされた、

おそらく、発電までの差は、一秒もなかっただろう。

胴と首が切り離され、一瞬だけ青く光った後、【フルフル原種】は雪の大地に沈んだ。

「あ、危なあ……」

思わずミラがそんな言葉を零し、その横で同意するように柊也が唸った。

【フルフル原種】を倒して素材を剥ぎ取った後、ミラたちはベガードも含めた全員で村へと移動した。

そして、今。

ミュリエリアの工房裏の空き地で、ベガードと柊也が向かい合っていた。

再戦を望む二人の事情を聞いたミュリエリアが、空き地を提供したのだ。

柊也は元通りの防具を着ているが、【脚装備^{フーツ}】だけは壊れてしまったので、適当な靴をミュリエリアに借りている。

「ベガード。あんたに一つ聞きたいことがある」

沈黙を破って、柊也が口を開く。

「さっきのフルフルとの戦いの最後、なぜ突っ込んだ？」

「これは妙なことを。攻撃できる隙を見出せば、そこを叩くのは自明のことではないか」

「だが、最後のあれはぎりぎりだった。あのタイミングなら、待った方が良かったのではないのか？」

柊也がそう言うと、ベガードは自信に満ちた、不敵な笑みを浮かべる。

「貴殿には、先にもこう申したな。『できると、信ずればこそ』と。某は、己の力を信じたからこそ、あの場で踏み込んだのだ」

「信じるって、だが、それは」

「過信して猪突猛進せよと言うのではない。某は、己の力を知っている。その力で、届くと判断できたからこそ、進んだのだ。間に合わぬと断じたならば、あの場で足を止めている。」

しかし、もしも某が辛うじて間に合うと判断し、その上で己の力を疑わずかにでも足を鈍らせれば、某は雷に打たれていたはずだ」

柊也の能力の中に飛び込んだのも、その熱さに耐えられると判断したからなのだろう。

「世界は広く、そして遠大なるものだ。未来を見せず、理不尽に満ちた奇なるものだ。

ゆえに、小さき我らは容易く翻弄され、惑わされる。

なればこそ、某は思うのだ。己の判断を、己の下した決断を信じて踏み込める者だけが、未来へと進めるのだと」

生きていれば、必ず何かの障害に行き当たる。

その障害に向かうか、退くか、それを迷うのはいい。

自分自身の能力に相談して、正しい判断をしなければ、身を滅ぼすだけだからだ。

だが、一度向かうと決めたなら、退くと決めたなら、それを行う最中に迷ってはいけない。

それもまた、己を滅ぼす道だ。

定めたならば、信じて貫く。それが、ベガードという男の戦いの信条だった。

「これで、答えになっただろうか？」

「ああ、十分だ」

「そうか。ならば」

「……決着を、つけよう」

ベガードと柊也が、抜刀する。

張り詰めた空気に、見物人の三人が息を飲んだ。

「いざ」

ベガードが言う。

その言葉を聞きながら、柊也は自問する。

(俺は、この男に勝てるのか?)

勝ちたいとか、勝たないといけないとかではなく、純粋な実力として、勝てるかどうか。

(この男は、確かに強い。だが)

二度の手合わせと、【フルフル原種】との戦闘。

強いのは、もう十分わかっている。

だが、柊也とベガードの実力に、それほどの開きはない。

そう、柊也は判断した。

(勝てる相手だ。だったら、それを信じて踏み込むだけ、か)

「尋常に、」

「勝負！」

勝負の聲は重なって、始まりを告げる。

ベガードが飛び出すノ柊也が飛び出す。

ベガードは、柊也が正面から向かって来たことにわずかに目を見張り、嬉しそうに笑う。

【太刀】を、頭上に振り上げる。

受けられるか？ なんて、そんな言葉が伝わってくるようだった。

二人の距離がゼロになる瞬間、ベガードの【太刀】が稲妻のように振り下ろされる。

【双影剣】を頭上に掲げ、刃を受け止める柊也。

三本の刃が噛み合い、ギチギチと音を立てる。

力なら、【ティガレックス進種】であるベガードが上。

柊也の体が沈む。

「ぐ、それなら、これで……！」

歯を食いしばりながら、搾り出すように言う柊也。

赤い光が、柊也を包む。

「それは通じぬと なっ!?!」

言いかけた言葉の途中で、柊也の【双影剣】が【太刀】を押し上げる。

柊也を包む赤い光は、熱くない。

「鬼人化だ……」

傍観していたミラが呟く。

スタミナを消費して、武器強度と切れ味、身体能力を強化する

【双剣】の基礎にして、奥義。

「うおおおおおっ!」

柊也が吼え、両腕にありったけの力を入れる。

【双影剣】が【太刀】を跳ね上げ、ベガードの喉元に刃が突きつけられた。

ベガードは、突きつけたれた刃をしばらくの間見つめていたが、やがて、

「参った」

と言った。

柊也は【双影剣】を引きながら、

「勉強になった。選択の大切さをな」

柊也が勝ったのは、ベガードが判断を間違ったからだ。

鬼人化を、【大地の絆】ガイアタイズと勘違いして、無視できると思った。

そして、その選択を信じたことによって生まれた隙を、柊也に衝かれたのだ。

ベガードの考え方の弱点は、まさにそこだ、選択を間違うと、誤った方向に突っ走ってしまう。

モンスター相手には十分でも、対人戦での搦め手には弱そうだった。

ベガードは苦笑を浮かべ、

「だから言ったではないか、某は修行中の身だと。まだまだ未熟よ」

「だが、あなたの言葉は正しかった。俺は、俺の力と策を信じて踏み込んで、あんたに勝った。

多分俺はこれから、以前より良い未来へと向かえる気がする。ありがとう」

「得るところの多い、良き戦いであったな」

「ああ」

ベガードが手を差し出し、柊也がそれをしっかりと握る。

男の友情が生まれた瞬間だった。

NEXT>第十七話「ちょっと待つの！」

「何だか綺麗に終わってるけど、茉莉の疑問は何にも解決してないの！」

「……そう言えば、どうして茉莉があそこにいたんだ？」

「え、それは……ちょっと通りかかったの」

「……………」

柊也は無言で少し待つ。

すると、沈黙に耐えかねたように、茉莉が付け加える。

「本当は、心配だったからしゅー君を探してたんだからね！」

「そっか」

と頷く柊也。

流石彼氏、照れ隠しの後にもれなく本音が付いてくるのを把握している。

「すまない。心配させたみたいだな」

「そうなの」

茉莉が頬を膨らませる。

「しゅー君最近何か変わったし、凄く心配したんだから。ちゃんと説明してもらおうのー!」

「ああ、いや、それはな……」

と、二人が言い合っていると、

「柊也さん」

ミュリエリアが柊也に近づく。

いつの間にか持ってきたのか、手には柊也が受け取らなかった木箱を持っていた。

「もう、これを受け取っていただけますね?」

「あ、ああ」

小箱を柊也が受け取る。

そして、「選択を、信じるんだ……っ」とか呟いた後、その小箱を茉莉に差し出した。

茉莉の目の前で、木箱のふたを開ける。

「あ
」

茉莉が思わず、という感じに声を上げる。

箱の中には、青い布が敷いてあって、その上に一つの指輪が載っていた。

プラチナの輪に、白水晶とエメラルドで作った白い花が飾られている。

ちなみに、ミュリエリアが星祭りで買い込んだ素材である。

「綺麗……これ、茉莉にプレゼントしてくれるの？」

「そう、だな、うん、プレゼントなんだが……」

歯切れ悪く言う柊也。

一度、大きく深呼吸をして、茉莉に向き合う。

「茉莉」

「な、何なの？」

「……八日ほど前の黄昏時だ」

「確か、予約して柊也さんが帰って行ったのがそれくらいだったよ
うな……」

「何と、某は愛し合う二人を引き裂いてしまうところだったという
のか!？ 何と愚かな、某は、某はどうやって詫びればよいのだ…
…っ!」

「ちよ、その刀で何するつもりですかー!!」

「ベガードさん、大丈夫ですよ！ よりいい方向にまとまりました
から!」

と、脇で騒動が巻き起こっているが、当の二人はそんなことは気
にも留めず、二人の世界に入っていた。

「ダメか？ 茉莉」

「ダメだなんて、そんなこと、絶対にならないの……」

「それじゃあ」

「うん。茉莉、しゅー君のお嫁さんになりたい」

茉莉は、左手を柊也に差し出す。

「しゅー君にはめて欲しいの。その指輪」

「わかった」

柊也が茉莉の手を取り、箱から取り出した指輪を薬指に滑らせる。

ちなみに、婚約指輪という習慣も、左手の薬指という習慣も【人間】のものだ。

エイシスアルカディアで行われた演劇で使用され、爆発的に広まっていったらしい。

ぴったりと指にはまった指輪が、きらりと輝く。

その輝きを見ている茉莉の目から、涙があふれる。

「ま、茉莉？」

「良かったの。しゅー君に嫌われたんじゃないやなくて……凄く、凄く、不安で、寂しかったんだから」

「茉莉……」

涙をぼろぼろと零す茉莉を、柊也がそっと抱きしめる。

「不安にさせて、すまなかった。

でも、もう選択はした。俺はもう、絶対に迷わない」

「しゅー君……」

柊也の胸から、茉莉が顔を上げる。

もう、二人の瞳にはお互いの姿しか見えていない。

「茉莉……」

優しい声。

茉莉が踵を浮かせてそっと目を閉じ、たところでミュリエリアがミラの肩を掴み、くるりと反転させた。

「二人だけにしておいてあげましょう」

「う、うん」

「うむ、そうだな」

二人をその場に残し、ミラたちは静かに工房の中に入って行った。

……

工房の中に戻り、ミラはミュリエリアに疑問をぶつける。

「ね、お姉ちゃん。結局、ジャスって誰だったの？」

茉莉との会話の中で、ミュリエリアがうっかり口にした言葉。

これだけが、今も意味不明だった。

「ふふ、お茶でも淹れましょうか」

ミュリエリアは、ミラの疑問には答えずに、キッチンへと入って

行った。

.....

しばらくして、ポットと三つのカップを持ったミュリエリアが戻ってくる。

作業台の上にカップを並べ、ポットからお茶を注ぐ。

「ベガードさんも、どうぞ」

「これはかたじけない。いただきこう」

ミュリエリアが呼びかけると、壁に並んだ武器を興味深そうに眺めていたベガードが寄ってくる。

ミュリエリアは、ベガードにカップを渡し、

「さつきから気になっていたのですが、ベガードさんのその太刀、少し見せていただけませんか？」

「それは構わぬが」

腰から鞘ごと外し、ミュリエリアに渡す。

ミュリエリアは、鞘から半分ほど刀を引き抜き、納得したように頷いて鞘に戻した。

「やはり、日本刀ですね」

「ほう、見るだけでわかるものなのか？」

「ええ。普通の太刀とは随分違うものですから」

日本刀。

特殊な素材と製法によって作られる、一部の【太刀】の別称だ。

折れず、曲がらず、よく斬れると言われ、その評判は高い。

また、芸術品としても通用するような美しい見た目をしているものが多いのもその特徴だ。

当然と言つか、作るのは難しく、一部の職人にしか作ることはできない武器だ。

ちなみに、ミュリエリアは作れる部類である。

【人間】時代の記述に、『日本刀』というものがあり、特性が似ていたことから同じものだろうと判断され、そう呼ばれるようになった。

日本、というのが何を意味しているのかは不明だが、人名か地名だろうとされている。

「ありがとうございました」

ミュリエリアがベガードに【太刀】を返す。

「この刀の銘、教えていただけますか？」

銘というのは、作者の名前のことだ。

日本刀は、武器として固有の名称を持たず、銘で呼ばれるのが通例だった。

ある意味、最も作り手の宣伝になる武器である。

「銘はフェル　フェルルートと言っ」

「フェル……そうですか、彼女が」

その名前を聞いたとき、ミュリエリアは一瞬驚き、遠くを見るような目をして呟いた。

(知り合いなのかな?)

そう思いながら、ミラはカップに口をつけた。

お茶を口に含むと、花のような爽やかな香かおりが広がる。

「あ、いい匂い。お姉ちゃん、これ何ってお茶?」

ミラが聞くと、ミュリエリアは事も無げに答える。

「茉莉よ」

「え?」

ミュリエリアは悪戯を成功させた悪戯っ子のような笑みを浮かべ

る。

「茉莉花茶^{まつりか}。ジャスミンティーとも言っわね。茉莉は、ジャスミンの別名なのよ」

「それじゃあ、お姉ちゃんの言いかけたジャスつて……」

「ジャスミンと言いそうになったのよ。柊也さんに頼まれた指輪のデザインがジャスミンの花だったから。茉莉ちゃんに贈るつもりだと気がついたのはそのときよ」

「それなら、教えてあげたらよかったのに。聞かない方がいいなんて隠さなくても……」

そのせいで散々振り回されたミラが口を尖らせる。

「あら、そういっわけにはいかないわよ」

ミュージエリアはそう言っつて、すました顔で茉莉花茶のカップを口に運ぶ。

「教えてしまっつたら、プロポーズの喜びが半減してしまっつでしょう？」

NEXT > 第十七話「世界の縮図」

<簡易キャラクター紹介>

名前：柊也

年齢：18

性別：男

種族：テスカト進種

能力：【飛行】 【龍化】 【大地の絆・爆】

名前：茉莉

年齢：17

性別：女

種族：テスカト進種

能力：【飛行】 【龍化】 【大地の絆・爆】

名前：ベガード

年齢：23

性別：男

種族：ティガレックス進種

能力：【剛腕】

<オリジナル武器紹介>

名前：フェル

分類：太刀

レア度：10

属性：なし

威力：1224

切れ味：紫

会心率：35%

強化元：なし

強化先：なし

若き天才職人によって鍛えられた日本刀と呼ばれる太刀。
その切れ味は、触れただけの木の葉を両断する。

第十七話「世界の縮図」（前編）

ある朝。

小鳥のさえずる声を目覚ましに、ミラは目を覚ました。

するりとベッドを抜け出し、窓にかかったカーテンを開く。

朝の暖かな日差しが、部屋の中に差し込んでくる。

「ん、今日もいい天気」

光を体いっぱい浴びながら呟く。

窓辺から振り向くと、何かに反射してきた太陽の光がミラの顔を照らした。

壁に取り付けた金具の上に飾られている【双剣】の鍔がその犯人だ。

ミュリエリアがディスクを使って作った剣だが、鬼人化できないという妙な特性があり、今はミラの部屋のインテリアになっている。

ミュリエリアが使い道を思いつくまでは、当分の間このままだろう。

「よし、今日も一日頑張ろう」

ミラはそう呟いて気合を入れ、着替えを始めた。

MONSTER HUNTER EVOLVE
第十七話「世界の縮図」

太陽は中天にかかり、ギラギラと暑苦しい日差しを投げかけてくる。

白い【ロイヤルナイトメイルP】はまだいいが、背中の【夜刀】月影【】は、名前通り夜のように黒い鞘に熱を吸収していることだろう。

季節的には冬の頭に分類される王国マルクトの月の初め。

もう一月もしないうちに雪が見られるようになるのだが、この【砂漠エリア】は我関せずとばかりに真夏の気温を誇っていた。

（うう、暑い。場所はそんなに違わないのに、気候が違いすぎるんだよね……）

頬を伝う汗を拭いながら、ミラがぼやく。

ミラが普段暮らしている平原にはきっちり四季があり、砂漠や雪

山はそこから半日もかからずに辿り着ける場所だと言つのに常夏常冬の気候なのだ。

よく考えると、何とも妙な話である。

もつとも、寒冷期ひやふいの砂漠には気温が低すぎて夜間立ち入り禁止になる場所もあり、季節の影響を受けないわけではないのだが。

閑話休題。

さて、なぜミラが【砂漠エリア】に来ているのかと言つと、もちろん素材集めだ。

今回の狙いは、【サボテンの花】と【黄金魚】である。

前者は解毒と治癒の効果がある【漢方薬】の材料で、後者はミユリエリアが頼まれた仕事に使う。

『魚料理の料亭を開くから、屋根に飾るキンノシヤチホコを作つて欲しい』という依頼だった。

何でも、人間時代に使われたもので、魔除けの効果があるらしい。依頼者からして「キンノシヤチホコ」が何かわかっておらず、作る前から非常に苦勞する羽目にあった。

エイシスアルカディアの華霞の協力で、ようやく金色で魚の形をした飾りであることが判明し、ミラが素材集めに出てきたのだ。

【黄金魚】は全身が金色の珍しい魚で、ミユリエリアはその鱗で

「金の鯨」を飾るつもりのもりようだった。

サボテンは結構どこにでも生えているので、必要な分量はすぐに集め終わり、次は【黄金魚】だ。

ミラは、【ベースキャンプ】の【支給品ボックス】から持ってきた地図を取り出す。

妙に詳細に描き込まれている地図で、採掘に適した亀裂だとか、サボテンの位置まで描かれている。

右下の隅には、「エルミナ」とサインが入れている。

エルミナ図、それを印刷したものだった。

「どこがいいかな……」

ミラはそう言いながら地図に目を走らせ、一つのエリアで目を止めた。

【エリア7】である。

【エリア7】は、【砂漠エリア】の中にいくつかある【クーラードリンク】を必要としない涼し目のエリアで、水場もある。

【エリア7】に隣接する洞窟の中にある【エリア6】と呼ばれる地底湖でも釣りはできるが、こちらは【ホットドリンク】が必要になっってしまう。

「うん、エリア7にしよ」

ミラはそう決め、地図をたたんでポーチにしまつと、【エリア7】へと向かった。

しばらく【砂漠エリア】を歩き、ミラは目的地に辿り着いた。

砂漠らしく地面はサボテンの突き出した砂地で、中央に大きな岩が突き出している。

東側には川が流れていて、どこか別のエリアへと続いていた。

エリア内だがモンスターの姿は見えず、その代わりに、川岸に一つの人影があった。

「あ、人がいる」

ミラが呟く。

その人物は川辺の石に座って、キャンバスに向かっていた。

傍らには大きな鞆と【シヨウグンギザミ原種】の素材から作られる【ヘビィボウガン】である【ヘビィピアースクラブ】、それと、川の中に糸を垂らした釣竿が置かれている。

【ヘビィピアースクラブ】には【シールド】を取り付ける改造が施してあった。

ミラは背を向けているその人に近づき、声をかける。

「こんにちは」

「ん？ ああ、こんにちは」

振り返ったのは、若い女性だった。

黒に近い深緑色の髪をショートカットにして、前髪に臙脂色えんじのヘアピンをつけている。

深い色の髪と、鮮やかなオレンジ色の瞳の対比が印象的な女性だ。

ガンナー向けに軽量化などの施された「モノプロスSシリーズ」を着てその上から白衣を羽織っているが、白衣は砂埃と絵の具で元の色が何色なのかよくわからないことになっていた。

「私も釣りに来たんです。ここで釣りをしてもいいですか？」

「うん、構わない。と言うか、別に了解を得なくてもいいんだぞ。

この川は別にボクの所有物でもないんだ」

「確かにそうですね」

ミラはそう言いながら、女性から少し離れたところに見つけたところな大きさの石を椅子代わりに座った。

「見たところ釣竿は持ってないみたいだが、釣竿がなかったら釣りにならないんじゃないのか？」

「いえ、別に専用の竿がなければできないわけでもないですから」
不思議そうな顔をしている女性にそう言いながら、アイテムポーチの中から、先端に針のついた糸の束と小さな袋を取り出す。

それから、【夜刀】【月影】を外して鞆の端に糸を結びつけ、小袋から取り出した餌を針につけて川の中に放り込んだ。

「おお！」

と、女性が声を上げる。

「なるほど……武器を道具としても利用するのか」

「はい。釣竿はやっぱりかさばるので」

「むう、現場の知恵と言うやつだな、うん」

女性は感心したように何度も頷いている。

「だが、ボクの武器はこれだから……。うん、釣竿にはできないな」

【ヘビィピアースクラブ】を見ながらそんなことを言う。

【ヘビィボウガン】は【ライトボウガン】に比べて大型だが、大きいと言っても釣竿代わりにできるほどではなかった。

「あ、そうですね」

そう答えて、ミラは揺れる竿（鞘だが）を見つめた。

.....

「ふあ〜」

ミラは一つあくびをして、ぐっと伸びをした。

釣りを始めてしばらく経ったが、まだ魚信あたりは来ない。

ミラが使っているのは、【黄金ダンゴ】と言う【黄金魚】が好む特製の餌で、他の魚はまずかからない。

【黄金魚】は珍しい魚なのですぐに釣れるわけもなく、他の魚が釣れることもない。

ミラは今、物凄く暇だった。

隣で釣りをしている女性は何匹か魚を釣り上げていたが、ミラと同じように狙っている魚がいるのか、釣る度に川に返していた。

「さっぱり釣れないみたいだな」

そんなミラの様子に気がついて、女性が声をかけてくる。

「そうなんです。もう、暇で暇で」

「そうか。でも、釣りは根気が大切なんだぞ。この三日でボクが悟ったことなんだ、うん」

自分の言葉に一人で納得して頷いている。

「そうですね、根気が……って三日？ 三日も釣ってるんですか？」

「そうだぞ。釣りたい魚が中々釣れなくてな」

「そ、それは……大変ですね」

「いや、そうでもないぞ。絵も描いているしな」

ミラと会話しながらも、女性はカンバスに鉛筆を走らせている。

シャツと小気味いい音を立てて絵を描く様子に興味を覚えて、ミラは女性の絵を覗き込んだ。

「わ、凄い」

絵を見たミラが、目を丸くする。

女性が描いているのは、風景画だ。

写実的な手法で描かれている絵は、目の前の景色をそのまま切り取って貼り付けたようだった。

「上手ですね」

「そうだろう？」

女性がごく自然な仕草で頷く。

自慢しているという感じではなく、自分の技術に自信や誇りを持っているという風だった。

その雰囲気は、武器の話をしているときのミュージエリアによく似ている。

「えっと、画家の方なんですか？」

「うーん、画家と言うのは少し違っぞ。ボクは研究者なんだ」

「研究者？」

「そうだぞ、所属はアカデミアの考古学部。ボクはそこで地図を描いてるんだ」

「アカデミアの考古学……それって、華霞さんのいるところ？」

「何だ、華霞先輩の知り合いだったのか。それなら、ちゃんと自己紹介をしないとイケないな、うん」

女性は手を止めて鉛筆を置き、ミラの方を向く。

「ボクはエルミナ。華霞先輩の後輩として研究をしている。よろしく頼む」

「あ、私はミラと言います。華霞さんには以前お世話になりました」
きっちり頭を下げたエルミナにミラが頭を下げ返す。

ミラの自己紹介を聞いたエルミナは「ん？」と首を傾げ、

「華霞先輩に聞いたことがあるな。ええと……そう、星祭りで出会った変種の女の子だ」

「あ、はい。それ、私のことです」

「確か、優秀な武器職人なんだっただな」

「いえ、それは私のお姉ちゃんなんですけど……」

「う、そうだったか。すまない、雑談程度の話題で、正直あまり覚えていないんだ」

「ああ、いえ、気にしないでください。

ええと、それで、考古学者の人がいるってことは、また遺跡が出たんですか？」

「いや、遺跡はそんなに次々に見つからないんだぞ。

これはボクの個人的な研究、フィールドワークなんだ」

「そうだったんですか」

と言ったミラは、エルミナの顔をじつと見る。

「うん？　どうかしたのか？」

エルミナに聞かれて、ミラはおずおずと質問した。

「えと、エルミナさんって本当に考古学者なんですか？」

「どうしてそんなことを聞くんだ？」

エルミナが不思議そうな顔になる。

「その、華霞さんが凄くインドア派な人だったので、みんなそんなのかなーって」

華霞とエルミナの雰囲気は全く違う。

華霞がいかにも外に慣れていない研究者然としていたのに対して、エルミナは、こういうことに慣れていそうだった。

防具を着慣れているように見えるし、すぐに武器が扱えるようにしてある荷物の置き方や、ちょっとした仕草からもそれを見て取ることができる。

ミラがそういうと、エルミナは可笑しそうに笑う。

「あはは、それは違うぞ。華霞先輩みたいに研究棟に籠ってるのは半分以上なんだ。残りの半分は、ボクみたいにフィールドワーク主体だぞ」

「そうだったんですか。私、みんな華霞さんみたいな人だと思ってました」

「それは大きな間違いだぞ」

二人がそんな話をしていると、ガヤガヤと人の話し声が聞こえてきた。

「無理すんなって。どうせまだ泳げねえんだろ？」

「失礼つすね。そんなに言うなら、見せてやるっすよ。俺の、泳ぎを！」

「がっはっは。よく言った！ 俺サマに見せてみる！」

「頑張つてねえ〜」

声は四人分。

(どこかで聞いた声だなあ)

と、思っているミラの横を、慌しい足音が通り過ぎる。

「とっつっ！」

その足音の主が、勇ましい掛け声と共に川に飛び込む。

バシャン！ と水柱が上がり……

その後には、一人の青年が水面にうつ伏せに浮かんでいた。

「うわ、水死体みたいだぞ!？」

それを見たエルミナが顔を引きつらせる。

後ろから、ガラガラという車輪の回る音が聞こえる。

ミラが音のした方を向くと、アケクロス草食獣に引かれた屋台のような荷車が近づいてきていた。

その屋根の上から、ひよこつと色違いのツータールが顔を出す。

「それ、すつごく不気味いよ……つてあれ？」

間延びした声を青年にかけ、その目がミラを捉える。

「あれえ？ ミラちゃん？」

「リーヤさん？」

火山で出会った【ザミ変種】のリーヤである。

「ミラって言ったのか？」

「ああ？ ミラだあ？」

屋台の影から野太い声とガラの悪そうな声。

そして、上半身裸で肩に角のある中年の男と、やたら目つきの鋭い青年が姿を見せた。

「ダルブルグさん！ それに、エンダさんも」

【ブロス進種】の行商人、ダルブルグと店の常連、【ガルルガ進種】のエンダである。

「どつして皆さんが一緒に？」

不思議そうにミラが聞いたとき、川で派手な水音が上がった。

見ると、水に浮かんでいる青年がヒレのある腕をぐるぐると回している。

「う、うおおおおお！」

声と共に、腕が水車のように回転し水をかく。

凄まじい水しぶきが飛び散る。

だが、青年はちつとも進んでいなかった。

いや、流されていないところを見ると、ほんの少しは進んでいるかもしれない。

「はあ……全然ダメじゃねえかよ」

エンダが肩を竦める。

顔は見えないが、こんな無様な泳ぎ方をする人物を、ミラは一人だけ知っていた。

「まさか……」

「こらー！ 何するんだ！ 魚がみんな逃げてしまっじゃないか！」

ミラが呟きかけたとき、エルミナが大声を上げる。

青年が水面で大暴れをしたせいで、水面に見えていた魚影は一匹残らずいなくなってしまうていた。

「うわ、すまないっす！」

青年が暴れるのを止めて……

「ぎゃー、なーがーさーれーるー」

そのまま川に流されていく。

悲鳴を上げる情けない顔は、ミラが予想した通りの人物。

泳げない【ガノトトス進種】の青年、グレイだった。

しばらくして。

六人になったミラたちは、並んで川に釣り糸を垂らしていた。

グレイが暴れてしまったお詫びに、釣りを手伝うことになったのだ。

釣竿は、ダブルブルグの荷車にあったものを使っている。

だが、グレイが暴れたせいか、六人もいて釣果はゼロだ。

「あーあ、やってられっかよ」

案の定と言うか、真っ先にエンダが根を上げた。

釣竿を地面に放り出す。

「エンダ。ちゃんと手伝って欲しいっす」

「ああ？ お前が暴れたお詫びだろうが。何で俺まで付き合わなきゃなんないんだよ」

「う……それはそうっすけど……」

「ちょっと待て、さっき聞いた話だとお前がグレイを煽ったからだろう。お前にも責任はあるんだぞ。」

それを一人に押し付けようだなんて、最低だな」

とエルミナ。

大雑把に事情を聞いたところ、グレイが少しは泳げるようになったと言うのをエンダが信用しなかったのが原因だったのだ。

「お前に口出しされる筋合いはねえよ。大体な、魚つてのは警戒心が強いからそう簡単に戻って来ねえんだよ。釣りがしたいなら、別の場所で行えよ」

「そのくらい言われなくてもわかってる。でも、ここで釣りをしないといけないんだ。お前みたいな奴にはわからないかもしれないけどな」

バチバチと、火花が散りそうな勢いでエンダとエルミナが睨み合
う。

この二人、初対面のくせに妙に仲が悪いようなのだ。相性が悪い
と言ってもいい。

まあ、エンダの態度がお世辞にも良いとは言えないのが原因では
あるのだが。

「ま、まあまあ、エルミナさん。エンダさんは取っ付きにくいけど、
根はいい人なんですよ」

と、ミラがいつか自分がミュリエリアに言われたようなフォロー
を入れた。

「ふん……」

エンダは不機嫌そうに、釣竿を拾い上げる。

「で、ここで何を釣るってんだ？」

「ここでは釣れないんじゃないのか？」

質問したエンダに、エルミナが嫌味を返す。

エンダは顔をしかめて、

「るせえよ。いいから教える。さっさと釣って終わりにしたいんだ」

「……種類はいろいろだぞ。ただ、尻尾に赤い糸が巻いてある魚だ」

「尻尾に糸？」

「一昨日、ボクが釣った魚に巻いて、放しておいたんだ」

「はあ？」

「そういう研究なんだ。とにかく、釣ったらわかる」

「ちっ、何だよ。訳わからねえ……」

エンダは不機嫌そうに舌打ちして、釣りを再開する。

「うーん、よくわからないけど、糸のついた魚を釣ればいいんだねえ？ よーし、頑張っちゃうよ〜」

「あ、黄金魚が釣れたら、私に譲ってください。お願いします」

エルミナに便乗してミラが頼むと、銘銘に肯定の返事が返る。

「いいよお。ミラちゃんは黄金魚狙いなんだ」

「はい、お姉ちゃんのお手伝いなんです。

リーヤさんはどうして、と言うか、皆さんお知り合いだったんですか？」

「そだよ。前に一緒にお仕事したことがあってえ、今回もその関係なの」

「そうなんすよ。ダルブルグさんの紹介で受けた仕事だったんすけどね。トライホーンがまた出たって言うんすよ」

「トライホーン？」

「トライホーンてえのは、ディアブロスかモノブロスの変種のこつた。三本角の暴れものでな、俺サマの行商仲間を何人も襲いやがった野郎だ。」

俺サマの荷車はポポに引かせてるんで、普段砂漠には行かねえんだけどよ。泣きつかれたもんだから三本角退治を引き受けてやったってわけだ」

【ポポ】は長い体毛に覆われた草食獣で、寒さに強い反面、砂漠のような暑い場所には適さない。

今回荷車を引いている【アプケロス】は砂漠に来るために特別に用意したのである。

「で、トライホーンと戦う前に、行商のついでに手伝ってくれる奴を集めたら、こいつらが乗ってきたってわけよ。」

あのと看、確かに倒したと思っただがなあ……」

「え、もう倒したんですか？」

驚いたように、ミラが聞く。

「もう先月の話なんすよ、それ」

「なのに、また出たんだよねえ。ね、おじさま？」

困り顔でリーヤが言う。

「おう。仕入先に『また三本角にやられたぞ。どうなってるんだ』って怒鳴り込んで来やがった奴がいたんだ。

あるはずねえと思っただけど、俺サマは信用第一の男だからな。こっちは確認しに来たんだ」

「どうせ見間違いだろ。倒して剥ぎ取りまでしたのに、生きてるわけねえよ」

エングが口を挟む。物凄く不満そうだった。

剥ぎ取りまでしたのなら、普通に考えれば間違いなく死んでいる。

もし死んでいなかったとしても、剥ぎ取りをするときに気づくだろう。

だが、それでも絶対だと言えないのが【変種】の怖いところだ。

「そう言えば、私、体が腐ってるのに動き回ってたゲリヨスの変種と戦ったことがありますけど……」

「うええ、なんすか、それ……」

グレイが嫌そうな顔をする。

まあ、腐肉の塊みたいなモンスターに会いたがる人はいないだろう。

ミラも、できれば思い出たくない相手だった。

「うーん、それじゃあ、トライホーンもそうやって生きてるのかなあ？」

と呟くリーヤに、

「いや、いくら変種と言っても、そんな特殊な生態のモンスターはそうそういないと思うぞ、うん」

エルミナが自身の見解を口にする。

「むしろ、二本角の変種がもう一頭いたって考える方が自然だな」

「ええ、もう一頭？ そしたら、また倒さなきゃいけないんですよ？ めんどくさあい」

と、駄々っ子のようにリーヤが言ったとき、そのリーヤの竿の先がピクリと動いた。

「あ、引いてるっすよー！」

「ふわあ！ほんとだ！」

グレイの指摘で気がついたリーヤが釣竿を握り直して竿を立てる。

糸の先に、全員の視線が集中し

ちやぽ、と申し訳程度の音を立てて、小さな魚サシミウオが上がってきた。

その日の夜。

ミラたちは、【砂漠エリア】の【ベースキャンプ】へと移動していた。

エルミナの目的である系の巻いた魚も【黄金魚】も釣ることはできず、翌日に持ち越しである。

【黄金魚】は珍しい魚で一日で釣れる保障はなかったため、ミラは泊まりの準備はしてきていた。

持ち歩いていなかったのは、【ベースキャンプ】の【納品ボックス】に預けておいたからだ。

エルミナはもう三日目だし、後の四人はそもそも定住していない。

そんなわけで、一緒にキャンプを張ることになったのだ。

釣り上げて取っておいた魚で夕食を取り、今は焚き火を囲んで他愛ないお喋りに興じていた。

話していた話題が一段落ついたところで、リーヤが「ところで」と切り出した。

「エルミナが釣ってる魚って何なの？　もしかして、尻尾にいたずらしちゃったから回収してるの？」

「いや、それは違うぞ。それに、あの糸は蜘蛛の糸を縫^より合わせて作ってあるから、自然に優しいんだ」

「じゃあどうして？」

「それはだな、ガノトトスなんだ」

「へ？ 何すか？」

グレイがきよとんとする。

「いや、そうじゃなくて、原種の方だぞ。ええとだな」

エルミナは地図を取り出して地面に広げる。

焚き火の炎に照らされたそれは、ミラが【支給品ボックス】から持ってきたのとほぼ同じ地図だが、それ以上に事細かな書き込みがしてあった。

「今日釣りをしてたのが、このエリア7。そして、その隣の洞窟の中にあるのがエリア6の地底湖だ。」

この二つは近い場所だけど、エリア7を流れている川は地底湖には繋がっていないんだ」

地図を見てみると、確かにそうになっている。

「でも、この前エリア6から逃げたガノトトスをエリア7で見つけたって話を聞いたんだ。」

それはつまり、陸上からは見えない水路でこの二つのエリアが繋がっているかもしれないってことだ、うん。

だから、ボクは現地調査に来たんだ」

「てえことは、嬢ちゃんが魚に糸を巻いたのは地底湖の方か？」

「その通りだぞ」

ダブルブルグにエルミナが頷く。

「ふくん、なるほどねえ」

「そうだったんですか」

「え？ どういうことですか？ 何で皆今のでわかるんすか！？」

リーヤやミラが納得する様子を見て、グレイが慌てた声を出す。

「わかってねえのはお前だけだよ。6で目印つけた魚が7で釣れりや、どっか繋がってるってことだろ」

「あ、ああ、そういうことですか」

エンダが説明したのを聞いて、ようやく理解したようだった。

「しっかし、下らねえ話だな。そんな水路があったとして、それがどうしたって言うんだよ。そんなもん使えねえし、何の役にも立たないだろうが」

馬鹿馬鹿しいとばかりに、エンダが言う。

その言葉に、

「役に立つ立たないは問題じゃない」

エルミナは、静かに、それでいて熱のこもった声で返した。

「ボクはただ、世界の全てを描いた地図を作りたい。それが、ボクの夢なんだ」

夢だから。

それはエルミナの持つ確固たる信念で、エンダが悪態を吐いても少しも揺るがない。

だから、怒りもせずに、ただ胸を張って言った。

「夢ねえ……」

「お前には、ないのか？」

「別に、ねえよ」

「それはつまらない生き方だと思うぞ、うん」

「お前には関係ないだろうが」

「ゆ、夢っすか！」

雰囲気が悪くなったところに、慌ててグレイが割り込んだ。

「俺の夢は、もちろん泳げるようになることっすー！」

グレイの後に、私も私も、とリーヤが続く。

「私はね、可愛いお嫁さんかな？」

「お、嬢ちゃん、いい人いるのかい？」

「えっとお……アンゼ？」

「女の人じゃないですか……」

ダルブルグに答えたリーヤに、思わずミラが突っ込む。

「ありゃ？」

今気がついたという感じでリーヤが小首を傾げる。

「男の子はいないかなあ。ミラちゃんは？」

「私ですか？ 私は」

ミラは、自分の夢は何だろうと、考える。

やりたいこと、自分の望み。

こうなったらいいなと思う未来の像。

今まで特に考えたこともなかったそれを考えると、ふっと

自然に、一つの光景が浮かんできた。

いつもの工房で、いつもと同じようにミユリエリアと過ごす。

そして、その工房には、知り合った人たちが訪れて、みんな笑顔で、賑やかに過ごすのだ。

そんな、日常。

「私の夢は、お姉ちゃんとずっと一緒に、お店をすることかな」

「あ、いいよねえ、そういうの」

リーヤが柔らかく笑う。

「おじさまは何かないんですかあ？」

「俺サマか？」

話を振られたダルブルグは少し考え、

「俺サマは夢を語るって年でもねえし、今の生活に満足してっからな。いよし、代わりに盛り上がる話をしてやるっ」

「え？」

「こいつは、とある雪山での話だ」

なぜ、と口を挟む間もなく、ダルブルグは『盛り上がる話』を始めた。

「その雪山で若者三人組のパーティー　あーそうだな、A、B、Cの三人にすつか、で、そいつらが趣味の登山をしていると、急に吹雪が激しくなって三人は道を見失っちまったんだ。

三人は吹雪の中を彷徨い、やがて、一軒の山小屋に辿り着いた。助かった、そう思っつて山小屋に飛び込むと、中には青い顔の青年がいたんだ。こいつあDでいいだろ。

山小屋には暖炉はあったが、薪がねえ。だから、火も熾せなかつたつて話だ。

日帰りできるつもりだったから、ホットドリンクにも余裕なんてあるはずがない」

「ごくり、と誰かが唾を飲む。

すっかりダルブルグの話に聞き入っていた。

「夜中になって、火もない山小屋は真つ暗。

外の吹雪はますます強くなって、凍えそうな寒さだった。

誰も口に出しゃしねえが、みんな心の中じゃ『このまま死ぬんじゃないか』つて思つてた。

そんなときだ、三人の一人。そうだな、Aだ、Aが言い出したんだ　」

「俺の友達が友達から聞いた話なんだけどさ。ある五人のパーティーが俺たちみたいに遭難したんだ。

吹雪の中を歩いて、やつぱり俺たちみたいに山小屋に辿り着いた。その山小屋には火を熾す道具もなくて、吹雪の中で五人で固まつて、励ましあいながら震えてた。

でも、途中で気がついたんだ。あれ？　さっきから一人喋つてな

いんじゃないかって。

そいつは、五人の中で一番体力がない奴で………もう死んでたんだ』

『ちよつと、止めてよ！ そんな話するの！』

『待て待て、ここからが大事なんだよ。』

それで、このままじゃやばいと思った四人は、一晩中体を動かしていることにしたんだ。

死体を小屋の真ん中に置いて、四人が部屋の四隅に立つ。それから、壁沿いに走って、順番に前の奴にタッチしていくんだ。

それで、そいつらは朝まで走り続けて、何とか助かったんだって。なあ、俺たちも、それをやろうぜ』

こうして、三人のパーティーにDを加えた四人は、その話の真似をすることにした。

四人が、部屋の四隅にそれぞれ移動する。

『みんな、位置についたか？ じゃあ、俺から走るからな』

最初はA。

次がB。

その次がC。

四人目がD。

そして、DからA。

ぐるぐると部屋の周りを回る。

「でも、しばらくしたとき、Dが言った。『こんなの、おかしい』
ってな」

「な、何がおかしいんですか？」

心なしが青い顔をしたミラが言う。

「そ、そうっすよね。別におかしくないと思うけど」

「だよねぇ？」

グレイとリーヤもミラに賛同する。

「何がおかしいって、いきなり怪談が始まること自体がおかしいっ
ーの」

エンダが関係ないところに文句をつけた後、

「いや、それはおかしいぞ。うん、おかしい」

と、エルミナ。

彼女はミラ以上にわかりやすく顔色が悪い。

「何がおかしいんだよ？」

「わからないのか？」

「ち、悪いかよ」

「別に、悪いとは言っていないぞ」

「じゃあ何だよ、その態度は？」

「あの、エルミナさん。何がおかしいのか教えてくれませんか？」

エンダとエルミナが言い争いそうになるが、ミラが間に入って話を収める。

「そうだな。じゃあ説明するが、おかしいのはこの運動が成立することだ」

「ふえ？ 何でえ？」

「それは……そうだな、描くとよくわかるぞ」

そう言って、地面に四角を描く。

そして、石を四つ拾ってきてその角に置いた。

「いいか？ まず、AがBのところに行く」

石を一つ動かす。

「次に、BがCのところへ」

また、石が動く。

「CがDのところへ」

石が動く。

「そして、最期にDが動くと……」

Dの石が、最初にAの石があった場所へ動いた。

「あ！」

何人かの驚きの声が重なる。

Dが動いたのは、最初にAのいた場所。

つまり、今はもう何もない場所だった。

「角が四つだからつい間違えそうになるけど、これを続けるためには人数が五人いるんだぞ」

「気づいたみてえだな。そうだ、Dもそう言った。でも、実際に四人で走ることができた。何でだと思う？」

「何でって……」

ミラが言葉を濁す。

何となく予想はついているけど、言いたくなかった。

そんなミラの葛藤を無視して、ダルブルグが続きを話す。

「実はな、最初に迷い込んだパーティーの五人目の死体が、一緒に走ってたんだ。」

そのおかげで、最初の奴らは助かったけど、五人目の魂はその山小屋に残ったままだった。

そいつらが迷い込んだ山小屋はそのパーティーが迷い込んだのと同じ山小屋だったって話だ」

「きゃ〜ん、怖い〜」

ダルブルグが話を括ると、本気で怖がっているのかどうかかわからないような声を上げたリーヤが、隣にいたミラに抱きつく。

「り、リーヤさぁん……」

と、こちらは本気で怖がっているミラがリーヤを抱き返した。

「じゃ、じゃあ、ゆ、幽霊と一緒に走ってたんすか……こ、こえーっすー!」

「どうせ作り話だろ、そんなの」

ガタガタ震えるグレイを、エンダが馬鹿にしたような目で見る。

「いや、実話だぜ？ こいつは、行商の合間に知り合った本人たちから聞いた話だからな」

「ひいひいひいっ、嘘だと言って欲しいっすうううう!」

「ぐ、 그레이さん……大丈夫ですか？」

竦み上がる 그레이。

そのオーバーリアクションっぷりに怖がっていたミラも若干引いていた。

「……そうか。この方法なら、話は簡単だぞ、うん」

その隣で、エルミナが一人頷く。

どうやら、何か思いついたらしい。

「姉ちゃん、簡単ってえのはどういう意味だい？」

「論理的に考えたら、幽霊なんているはずがないんだ。もしそれが本当にあった話なら、何らかのトリックがあったに決まってるんだ、うん」

「トリックねえ。で、そのトリックってのはわかってんのか？」

「当然だぞ」

エンダに向かってエルミナが胸を張る。

「犯人は、Aだ」

「Aだあ？」

「そつだぞ」

エルミナが頷いて、解説を始める。

怪談が、いつの間にか事件にされてしまっていた。

「この運動は、別に五人いなくたってできるんだ」

「え？ でも、さっき五人いるって言ったのはエルミナだよあ？」

「確かに言ったぞ。でも、それはルールを守った場合の話だ。」

五人目が移動するDとAの間を別の人間が動けば、四人でも少しも問題ないんだぞ」

「それは……確かにそつすね」

「だったら、次の問題は誰がそこを動いたかだ。まずは、Bだった場合」

エルミナが、もう一度地面の図の石を動かして、四隅に置き直す。

そして、それを動かしながら説明を始めた。

「BはCにタッチした後、DがAのいない場所に行く前に部屋を対角線に横切ればいい。ここまでは十分可能だな、うん。」

でも、Aにタッチした後、最短距離を移動するAよりも先に、本来自分がある場所に戻らないといけない。

気づかれたらいけないことを考えると、それはまず不可能だ」

地面に、「B x」と書く。

「次に、Cだった場合だけど、CはDにタッチした後、Dより先に無人の場所に走る必要がある。」

「だから、Bと同じ理由でCにも不可能なんだ」

「Cx」と書き足す。

「最後はAとDの番だぞ。この二人は簡単だ。Dなら誰もいないところを無視してAの場所まで行き、その後Cにタッチされる場所まで一人分戻ればいい。」

Aだつたら、Bにタッチして一人分戻ってDにタッチされ、二人分進めばいいんだ」

「それだと、AかDのどつちかが犯人つてことまでしかわからねえじゃねえかよ」

「お前は人の話を最後まで聞けと教わらなかったのか？」

「残念ながら」

「む……」

エルミナはエンダをじろりと睨み、「ふん」とわざとらしくそっぽを向いて話を続けた。

「ここで重要なのは、AとDにできることじゃなくて、最初と最後の順番の人物にトリックが可能だったってことだ。」

エンダ。走る順番を決めたのは誰だった？」

「あ……」

エンダははっとして、それから悔しそうに「Aだ」と続けた。

「そう、Dがトリックが可能な場所にいたのは偶然でしかないんだ。つまり、犯人はAの他にはありえないんだぞ。」

きつと、Aは他の皆を怖がらせたかつたんだろうな、うん。」

満足げにエルミナが頷く。

「でも、それっておかしくないですか？」

とミラが疑問を口にする。

「そのときつて、生きるか死ぬかって状況だったんですよね？　そこで怖がらせるためにそんなことをするのかなあ？」

「その理由は俺サマが教えてやるぜ」

ダルブルグが口を挟む。

「知ってるんですか？」

「本人から聞いたつて言つたる。」

確かに、Aは姉ちゃんの言った通りのトリックを使った。

でも、そいつはただ、仲間を助けるためだ。前振りの話をしたのも、そうやって助かった連中がいたつて希望を教えたかつたからなんだ」

「あ、そうだったんですか」

「いい話だね。結局、Aって人たちは助かったんでしょお？」
と、リーヤ。

話が聞けたと言うことは無事に助かったんだろう。

リーヤの言う通り、いい話で終わる。

かと思われたのだが……

「実は、この話にはもうちょっとばかり続きがあったな」
にやり、とダルブルグが笑みを浮かべる。

「CもAのやったことに気がついて、それを明かしたんだ。んで、
Aもそれを認めた。

その後は、そのまま四人で走って無事に朝を迎えたんだ。

A、B、Cの三人は、そりゃ喜んだ。

そのときだ、Dがこう言った」

『なんだ、俺がいなくても大丈夫だったんだ』

「そして、Dはそのまま煙みてえに消えたんだとよ」

「……………」

長い、沈黙。

そして、

「って結局怪談じゃないですかあ」

「いや〜、こわあい〜〜!」

「っ、つつつつ作り話っすよね!? そうつすよね!?」

「どうだろうなあ。俺サマは聞いた話をそのまま言ってるだけだぜ」

「り、りり理論的に考えて、ゆ、幽霊なんて存在するはずがななないんだぞ、うん、ないんだ、うん……」

「声が震えてるじゃねえか。お前、もしかして怖いのかよ?」

「ま、まさか!? 考古学者が、こんな非論理的なこと怖がるなんて」

「あ! お前の後ろに!」

「きゃー!」

「くく、きゃーっだって」

「だ、騙したなあ!??」

「がっはっはっはっは! 盛り上がったろ!」

「盛り上がりませんよ!」

ぎゃーぎゃーと騒ぐ一同。

方向性は微妙に違う気がするが、確かに盛り上がっているのは確かかなようだった。

夜は更け、【進種】も【原種】も（基本的には）寝る時間である。

ミラたちは、就寝の準備をしていた。

女性陣三人は一つのテントにすし詰めになり、エンダとグレイは自分用のテントをそれぞれが用意した。

ダルブルグは荷車の中で眠るらしい。

【ベースキャンプ】はモンスターに襲われにくい場所なのだが、一応交代で見張りをすることにする。

最初の見張りはダルブルグだ。

見張りの時間までは眠っておくのがいいのだが、そこはそれ。

やはり女の子が三人も集まるとすぐには「おやすみなさい」とはならず、話に花が咲いていた。

と言うより、そのために一つのテントに集まっているのだ。

「さっきのおじさまの話、怖かったねえ……。ミラちゃん、もちよ
つとそつちに行つていくい？」

「これ以上どうやって詰めるんですか……」

「私がミラちゃんをぎゅーってしたら、おっけーだよ」

真つ暗なテントの中で、じそじそと動く音。

「ほら、ぎゅー」

「わわっ」

完全に密着したリーヤがミラを抱きしめる。

ミラはしばらくジタバタしていたが、諦めてリーヤの好きにさせ
ることにした。

リーヤの胸の中は、柔らかくて暖かく、ちよつと気持ちよかつた
りする。

「いや、幽霊だなんて、そんな非考古学的な存在はありえないんだ
ぞ、うん」

耳打ちをする仕草で、リーヤの反対側からエルミナが擦り寄つて
くる。

一応三人並んで寝られるくらいの広さはあるテントの真ん中に一
塊になるといふ妙な図になった。

「でも……よく考えたら、リーヤさんの言う通り、いい話なのかもしれないです」

「え、何でえ？」

「だって、その人って死んでしまっても仲間を助けようとしたってことだと思うんです。きっと、すごく仲が良かったんだらうなって」

「あ、そう言われたらそうだねえ。そっかあ、死んじやっても助きたい相手だったんだ……。いいよね、そういう人がいるのって」

「いいもんか。助けるなら、死なずに助ける方がいいに決まってるだろ」

「それもそうだね」

「そうですね」

答えて、ミラは思う。

死んでも尚助けたいと思う相手。

助けるのに命を懸けるに値する相手は、意外に沢山いた。

そもそも、ミラは見ず知らずの相手だらうと見捨てられるような性格をしていないのだ。

（私がみんな守るなんて、自惚れるわけじゃないけど……手の届く人の助けにくらいは、なりたくない）

少なくとも、目の前で誰かの命を奪われるようなことは嫌だと、そう思った。

.....

お喋りしていた女性陣も眠りについた頃。

自分のテントの外に何かを気配を感じて、エンダは目を覚ました。ざり、と砂を踏む音。

テントの外に、誰かが立っている。

「交代の時間か？」

問う声に、答えは返らない。

エンダは傍に置いていた【アップブレイズ】に手を伸ばす。

警戒しながらテントの入り口を開けると、そこには人影が一つ。

「はぁ、お前かよ……」

警戒を解いて、【アップブレイズ】の切っ先を下ろす。

見張りの順番じゃないだろ、と思いながら問う。

「何の用だよ？」

その人物は、もじもじと恥ずかしそうに、エンダの顔を窺い、

「……一緒に寝てもいいですか？」

「……………」

エンダは、無言で【アッパーブレイズ】を持ち上げる。

「だって、幽霊っすよ！ 怖いじゃ」

「帰れ」

言葉を皆まで言わせず、言い募るつとするグレイの頭に【大剣】の腹を振り下ろす。

ガツン、と痛そうな音が砂漠に響き渡った。

第十七話「世界の縮図」（後編）

翌日。

昨日残しておいた魚で朝食を済ませたら、【エリア7】に移動して釣り開始である。

一晩経つとグレイが暴れた影響もなく、川岸から無数の魚影を見ることができた。

「ふあ~~~~~」

釣りを始めてからすぐ、グレイが大きな欠伸をした。

「眠そうですね」

釣竿代わりの【太刀】を握ったミラが声をかける。

今日はエルミナの手伝いも兼ねるために【釣りミミズ】を餌にしていた。

グレイは欠伸をもう一つ漏らして、

「昨日怖くて寝れなかったんすよ」

「そ、それは大変でしたね……」

見張りの時間を除いてぐっすり眠れたミラが苦笑する。

「眠いつす……」

改めて口にして、目を擦る。

全身で眠いと主張しているような姿だった。

その姿を見て、ダルブルグが声をかけてくる。

「寝るのは構わねえがよ、竿を取られんじゃねえぞ」

「それは保障できないっす」

グレイが情けない声で返事をする、

「何だとお？　ったく、仕方ねえ奴だ」

ダルブルグは、腰掛けていた石から立って荷車まで歩いて行く。

そして、ごそごそと荷物の中を探した後、ある物を持って戻ってきた。

「ほれ、腕出せ、腕」

「腕っすか？」

グレイが釣竿を持った腕を差し出すと、ダルブルグは持ってきた物　丈夫そうな縄でグレイの腕に釣竿を縛りつけてしまった。

「うし、これで取られねえだろ。天才的発想だな、がっはっは！」

縛った縄をぽんと叩いて、満足そうに笑う。

「おお、これはいいアイデアっすね。流石ダルブルグさん」

「そうだろうそうだろう。がっはっはっはっは！」

褒められて気を良くしたのか、大笑いしながらダルブルグが自分の釣竿のところに戻っていく。

（大丈夫かなあ……）

腕に釣竿を括りつけたまま、うとうとと船を漕ぎ始めたグレイを見ながら、ミラは何となく不安を感じるのだった。

……

「グレイさん、引いてますよ！」

「はっ！」

……

「グレイさん！」

「はっ！」

……

「起きてください！」

「はっ！」

.....

そんなやり取りを何度か繰り返しながら、釣りを続ける。

グレイだけでなく、他の面々もキャッチ&リリースを繰り返していた。

【サシミウオ】 【はじけイワシ】 【ハレツアロワナ】 等等。

様々な種類の魚が釣れるが、目標の魚はまだ釣れない。

「くあ〜」

と、グレイが大欠伸をした、そのとき、

グレイの釣り糸が、ピン、と張る。

「グレ
」

グレイさん、引いてますよ、と言おうとしたのだが、ミラはそれを言い切ることができなかった。

糸を引く力が竿を引き、

グレイは、大口を開けて欠伸をした間抜けな顔のまま、水の中に引き込まれた。

落ちたときに飛び散った水が降りかかり、その冷たさであっけに

取られていた一同が我に返る。

一斉に立ち上がり、川岸から水中を覗き込んだ。

水中に巨大な黒い影が見えたが、その影はあっという間に遠ざかっていく。

釣竿を腕に結んでいるグレイも、その影に引っ張られて行ってしまった。

「おい、マジかよ……」

「た、大変だよー!」

「こりやてえへんだ……」

水面を見つめたままうつろたえる三人に、

「後お願い!」

そう言い残してミラは川に飛び込んだ。

(リライト)

水の中に広がるミラの髪が、瑠璃色に変わる。

水草の中を泳ぐ魚の群れ。

水中の世界はミラにとって初めての場所だが、それを楽しむ余裕はなかった。

【大地の絆】ガイアタイスによって周囲の水に流れを作り、その流れに乗って水中を進む。

川の中を自在に泳ぐ魚を追い越すほどの速度で前方の影を追うが、

（あれ？）

ある場所に来たとき、突然、その影を見失ってしまった。

一度停止し、立ち泳ぎのように姿勢を維持しながら、周囲を見渡す。

すると、水草や岩の凹凸に紛れてわかり難かったが、大きな横穴が開いているのを見つけた。

（こんなところに……）

ミラは再び水流を起こし、その横穴の中へと入って行った。

横穴は広く、大型の魚竜種でも通り抜けられそうだが、日の光が入ってこないためほとんど真っ暗と言っていいほどだ。

ミラは、片手を壁に触れさせて、慎重に横穴を進んだ。

……

しばらく進むと、突然、視界が開けた。

両側の壁が無くなり、多少光が差し込んでくる。

どうやら、横穴を抜けてどこかに出たようだ。

(どこだろう……)

二重の意味でミラが首を捻る。

一つは現在地。

もう一つは、 그레이の行方だ。

横穴を抜けるのに時間がかかってしまい、すっかり見失ってしまった。
っていた。

薄暗い水中をゆっくり泳ぎながら、周囲を見回す。

と、何か　水中に黒々と浮かび上がる、巨大な影が、物凄い勢いでミラへと迫っていた。

ミラは慌てて水を固め、文字通りの意味で水を蹴る。

ミラのすぐ側を巨影が通り過ぎ、その水の流れてミラの体が独楽のように回転した。

くるくると回る視界に、まだ釣り糸に引っ張られている 그레이の姿が映る。

그레이は、口から泡を零しながら必死の形相で何か叫んでいた。

水の中なので当然声は聞こえないが、多分助けを求めているのだ

ろっ。

水の抵抗で、ミラの回転が止まる。

その頃には、巨影はグレイを大きく振り回して方向転換。

再び、ミラへと向かってきていた。

ミラは肩に手を伸ばす、が、そこに【夜刀】【月影】は無い。

(あ、しまった！ 置いてきちゃったんだ)

釣竿の代わりにしていたのを忘れて、飛び込む前に放り出して来てしまっていた。

もっとも、仮にあったとしても、水中であんな長刀を振り回して戦うのはかなり難しいだろう。

影がミラに迫る。

ぐんと距離が縮まると、その影の先端に、三本の角があるのが見えた。

「^{トライホーン}いぼいぼーぼー!？」

思わず口に出して叫んでしまい、口から泡が漏れる。

ミラを貫かんとする三本の角。

ミラは、手元の水を固めて盾を作り、水中突進を受け流す。

すれ違いざま、水の流れがミラを飲み込もうとするが、ミラは水の盾を抵抗にして回転を止めた。

そして、目の前を通り過ぎて行くグレイの体にしがみつく。

手を伸ばして釣竿を縛っている縄を解こうとするが、トライホーンに引きずられたまま、しかも、水を吸った縄は簡単には解けない。

(うー、しかたないっ)

ミラは、グレイを抱きしめるように、首にしっかりと腕を巻きつける。

グレイが驚いたようで、口から泡を吹いているが、それは無視。

しっかりと体を支えて片手を離し、剥ぎ取りナイフを抜く。

(えいっ！)

最初の一振りで釣り糸を切り、返す刃で縄を切断した。

そのまま、グレイを抱えて水面へ向かう。

「ぶはあー！」

水面に顔を出すと、近くに岩の地面が見えた。

その岩まで泳いで行き、水から上がる。

「はあ 何とかまりましたね」

軽く頭を振ると、水滴が散るのと一緒に色が抜け落ちて、白に戻る。

「 그레이さん、大丈夫ですか？」

「な、何とか……」

息も絶え絶えと言った感じで 그레이が頷く。

「ここ、エリア6ですよね」

周りを見回しながらミラが言う。

頭上に岩の天井がある空洞で、大部分が水没しているが空洞の中央に陸地があった。

今、ミラたちがいるのがその陸地だ。

「え？ あ、そうっすね」

周りを確認して、 그레이が頷く。

もう間違いない、ここは、エリア6地底湖だ。

「あの穴、ここに繋がってたんだ」

「エルミナさんの予想通りだったみたいっすね」

【エリア7】から引つ張られて【エリア6】に来ているのだから、つまりあの横穴で二つのエリアが繋がっていたということだ。

話に出てきた【ガノトトス原種】も、あの横穴から移動していたのだろう。

「まさか、自分で証明することになるとは思いませんでしたけど…」

「そ、そうっすねえ」

げんなりと、 그레이が言ったとき、

突如、水面を割って何かが突き出した。

それは、角だ。

前方に向けて湾曲した大きな角が、鯨の背びれさながらに水を引き裂いている。

ザー、と音を立てて、角から下を水に隠した影が泳ぎ回る。

「トライホーン……」

ミラが呟き、

「あれがっすか!？」

それを拾った 그레이が驚愕を表す。

「前のは泳がなかったっすよ!？」

「やっぱり、別のがいたんですよ。早く、戻って合流しましょう」

トライホーンと呼ばれる変種を見つけた以上、放置するわけにはいかない。

実際に被害が出ているのだから、「前のは別でした」と言っ
て
終わりににはできないのだ。

そして、どうせ戦うなら人数が多い方がいいに決まっていた。

「そっつすね」

ミラとグレイは、急いで走り出す。

突き当たった岩壁を凹凸を手がかりに上り、【エリア7】へと続
く
出口へと向かった。

「ミラちゃん……大丈夫かなあ」

ミラが置いていった【夜刀】【月影】を抱きしめて水の中を見つ
めながら、リーヤが呟く。

リーヤは火山での戦いの後でミラの能力を聞いているから溺れる
心配はしていないが、それにしても、遅い。

しかし、だからと言って水中は呼吸できないリーヤたちには、できることはほとんどなかった。

できるのは、精精戦いの準備を整えておくことくらいだ。

エンダは【アッパーブレイズ】を背負い、エルミナは【ヘビィピースクラブ】に【LV2通常弾】の弾倉マガジンを取り付けている。

ダブルブルグは荷車から、【ババコンガ亜種】の緑色の毛皮でできた【コンガZメール】（肩の部分は【肩角】の邪魔なので取り外しである）を取り出して裸の上半身に着込み、武器を取り出す。

ダブルブルグの武器は、少し……いや、かなり変わった【ランス】だ。

放射状に八本の槍が伸びている円形の金属製の盾と、通常の半分ほどの長さの短い槍。

盾は【ランス】のものにしては小さく、手に持つのではなく腕に取り付けて運用する。

盾についている槍は、木製の柄に金属の穂先を取り付けたシンブルなもので、用途としては投げるためのものだ。

武器の方の槍は金属の棒の先端を尖らせただけもので、石突（槍の柄の後ろについている金具）がまるで手のような形をしていた。

イメージとしては、孫の手に近い。

と、そのとき。

「おーーーーーい!!」

グレイの声が聞こえる。

どこから聞こえるのかと首を巡らせれば、グレイとミラが【エリア6】の入り口である洞窟から走り出てきた。

「あいつら、何だつてえあんな場所から……」

言いかけたダブルブルグは、見た。

二人の後ろに、砂煙が上がり、前方に湾曲した角が突き出す。

「後ろだ!!」

問うつもりだった言葉が変わって、警告が口を衝く。

二人は後ろを振り返り、

「水陸両用なんて聞いてないっすよ〜」

グレイが泣き言を言い、

「トライホーンです! 二頭目の!」

ミラが端的に説明したことで、残る四人は状況を理解する。

「よっしゃ! さっさと倒して、依頼完了といこつちゃ」

「はいっ」

ダルブルグにリーヤが答え、ミラたちに合流すべく走り出す。

少し遅れてエンダが続き、

「……よかったな」

エルミナの側を通過して前に出ながら、通り過ぎざまにエンダが言う。

「何がだ？」

「あいつらがエリア6から出てきたってことは、繋がってたってことだろ」

言うだけ言って、エンダが走って行く。

その背中に、エルミナは少し表情を緩めて、

「……ありがとう」

そう言うと、エルミナは【ヘビィピアースクラブ】を構えながら、戦場へと向かって行った。

……

ミラとグレイは、走ってきたダルブルグ、リーヤと合流した。

「ミラちゃん！」

リーヤが投げた【夜刀【月影】】をミラが受け取る。

ミラはその場で足を止めてトライホーンに向き直るが、グレイはそのまま走って川岸に向かう。

ガイアタイズ
大地の絆の効果範囲内まで行って、武器を用意するつもりだ。

そのグレイとすれ違うように、エンダが前に出る。

そして、「キーン」と、【ガルルガ進種】の能力である咆哮が響き渡った。

その音に驚いて、地中の敵が地面から飛び出す。

【モノブロス原種】や【ディアブロス原種】は驚かすと地面に半分埋まったようになるのだが、この相手はそうはならず、全身が地面から飛び出した。

地上に出た姿は、やはり、どの原種とも異なる姿だ。

鱗の無い、砂色の体。

頭には棘のついた襟巻きのような部位があり、目の上に曲がった角が二本生えている。

それだけなら【ディアブロス原種】と同じだが、この【変種】は額にさらにもう一本、前方に湾曲する大きな角がある。

さらに、本来横に広いはずの翼が縦方向に長く流線型を描いていた。

この翼をヒレのように使って、水中を泳いでいたのだ。

水中と地中を自在に泳ぐための進化を遂げた、泳角竜【ディアブロス変種】である。

「出やがったな。俺サマの仲間を襲った落とし前、きっちりつけてもらうぜ。なあみんな！」

ダルブルグが、槍を構え、

「別に俺の仲間じゃねえけど、ま、やってやるか」

エンダが【アッパーブレイズ】の刃を掲げ、

「ようし、やるよー！」

リーヤが【将刀【飛車】】を引き抜き、

「さっき散々振り回してくれたお礼をしてやるっす！」

グレイが、水で作り上げた螺旋の槍を手に戦列に加わり、

「行きますー！」

ミラが【夜刀【月影】】を背負って刃を抜き、

「討伐開始だな、うん」

エルミナの【ヘビィピアースクラブ】が、号砲を撃ち鳴らした。

【LV2通常弾】が空を引き裂き、【ディアブロス変種】の頭に着弾する。

運動エネルギーを破壊力に変えて、弾の素材である【カラの実】が弾ける。

【ヘビィボウガン】の特徴は【ライトボウガン】より遥かに優れる装填数と破壊力。

とは言え、大型種の方も一発や二発でどうにかなるほど脆弱ではない。

三本の角を振り立てて、【ディアブロス変種】が突進する。

「俺サマに任せときな!」

ダブルグが正面からそれを迎え撃つ。

槍の上下を逆に持ち替え、手のような石突に投槍とやうの尻を引っ掛ける。

二本の槍を束ねて持ち、その腕を、思いつ切り後方に引く。

「どりゃあああっ!」

むき出しになっている二の腕の筋肉が盛り上がり、雄たけびと共に腕を振り抜いた。

投槍が槍のカタパルトから放たれ、銃弾もかくやという勢いで飛翔する。

【アトラトルスピア】。

てこの原理によって、手で投げるのとは比べ物にならない速度と破壊力を投槍に与える武器である。

その威力は、肉を貫き骨にまで食い込むほどだ。

やはりと言うべきか、ミュリエリアの作品である。

投槍は【ディアブロス変種】の翼の付け根に深々と突き刺さり、【ディアブロス変種】は首を振り上げながら二、三步後退する。

「凄……」

初めて見たミラは、その威力に目を奪われてしまうが、一緒に戦ったことのある三人はその隙に【ディアブロス変種】へと切り込んでいく。

リーヤとグレイが両脚に攻撃するが、傷は浅い。

【ディアブロス変種】は鱗に守られていないが、その強度に匹敵する頑強な表皮に守られているのだ。

エンダが首を狙って振り上げた【アッパーブレイズ】は頭を下げた【ディアブロス変種】の角に弾かれてしまった。

【ディアブロス変種】は後ろを向きながら身をかがめ、高く尻尾を振り上げた後、振り下ろす。

リーヤとグレイは慌てて左右に避け、エンダは【大剣】を盾にして身を守る。

広く後方を薙ぎ払った尻尾は、振り子のようにもう一度振り抜かれ、【アツパーブレイズ】とぶつかって火花を飛ばした。

ざざ、と砂に足跡を残しながらエンダが後退る。

背後からエルミナが援護射撃を行い、尻尾の付け根に弾丸が炸裂する。

「うおりゃあ！」

威勢のいい声と共に飛来した投槍が臀部に根元まで突き刺さり、【ディアブロス変種】が絶叫する。

流石の破壊力だ。

だが、投槍は残り六本しかなく、それだけで仕留められるかというところは難しいだろう。

尻尾をぶん回しながら【ディアブロス変種】が振り返る。

と、その眼前には黒い刃が迫っていた。

ミラが振り下ろした【夜刀【月影】】は、額の角を傷つけるだけに終わる。

【ディアブロス変種】が頭突きをするように角を突き出し、ミラは横に回転回避をしてそれを躲した。

エンダ、グレイ、リーヤの三人がそれぞれの武器を構えて走ってくるが、【ディアブロス変種】が回転しながら尻尾を振り回し、近づかせない。

遠巻きに【ディアブロス変種】の動きを窺っていると、

「リーヤ、そこは邪魔だぞ！」

背後から、エルミナの声。

「あ、うん！」

うっかり射線に入ってしまったリーヤがその場を離れる。

発砲音が響き、銃口から吐き出された弾が【ディアブロス変種】の背中に着弾する。

そして、その弾丸が爆発を起こした。

弾が爆発することによってダメージを与える、【LV1徹甲榴弾】だ。

さらに、ダブルグの投槍が脇腹に突き刺さる。

遠距離から与えられる攻撃に、【ディアブロス変種】は堪らず回転を止めた。

姿勢を低くして、その場で足踏みをするように地面を引っかく。

口からは、低い唸り声と共に、黒煙の混じった吐息が漏れる。

怒り状態だ。

【原種】は攻撃力と敏捷性が大幅に上がるが、この【変種】は……

と、悩む間もなく、【ディアブロス変種】が行動によってそれを証明した。

鋭い角を突き出しながら、【ディアブロス変種】が後方の二人を狙って突進する。

エルミナとダブルグが別々の方向に逃げると、【ディアブロス変種】はエルミナを追尾して方向を変えた。

その速度は、予想以上に速い。

「くっ！」

エルミナは、足に力を込めて思いつ切り踏み切り、体を投げ出す。

その足を掠めて、【ディアブロス変種】の角が通過して行った。

【ディアブロス変種】は砂煙を上げながら停止すると、頭を低くして、角で地面を削りながら振り返る。

角が砂を巻き上げて飛ばし、石飛礫ついでのような塊がエルミナを襲う。

エルミナは地面から体を起こしたばかりで、動けない。

その前にダルブルグが飛び込み、

さらにその前に、壁が 地面の砂が固まった壁が聳え立つ。

グレイの大地ガイアタイスの絆と非常に良く似た、自分から一定の距離内の砂を操るといふ【ブロス進種】の大地ガイアタイスの絆だ。

砂の壁が砂の飛礫を受け止め、互いに砕け散る。

ざあ、と元に戻った砂が空中を零れ落ち、

砂の幕が下りた先には、しっかりと【ヘビィピアースクラブ】を構えたエルミナの姿。

発砲。

反動を押さえ込んで放たれた【LV1徹甲榴弾】が、【ディアブロス変種】の顔面で爆発。

爆発の黒煙を切り裂いて飛来した投槍が、【ディアブロス変種】の右の角に突き刺さる。

突き刺さった部分からひびが広がり、根元が砕けるように角が折れる。

角を折られた【ディアブロス変種】が怒りを叫び、ダルブルグに向けて猛然と遅いかかる。

「よし、来い！」

ダブルブルグはあえて挑発すると、【エリア7】の中央にある岩に向けて走り出す。

どんと詰まる距離。

ダブルブルグは投槍を装填し、前方に向けて投擲した。

投槍は空を駆け、岩に投槍の柄が突き刺さる。

ダブルブルグは、岩の目の前で大きくジャンプ。

刺さった投槍の柄を踏み台にして、一気に岩の上に跳び上がる。

追いかけてきた【ディアブロス変種】はそのまま岩に激突し、岩がぐらぐらと揺れた。

激突した【ディアブロス変種】は、角が岩に突き刺さり、動けなくなってしまう。

「おらよつとおー！」

ダブルブルグは、揺れる岩の上から投槍を放つ。

放たれた投槍は、【ディアブロス変種】の背中に深々と突き刺さった。

ダブルブルグは、岩の上から【ディアブロス変種】の背中に飛び移

り、刺さった投槍をしつかりと掴む。

そして、逆手に握った槍で背中を何度も突いて攻撃を始めた。

恐ろしく乱暴な攻撃だ。

「お前らあ何やってんだ、今だぜ！」

揺れる背中の上でバランスを取りながら、ダブルブルグが叫ぶ。

ミラたちは顔を見合わせて頷き合い、一斉に【ディアブロス変種】へと駆け寄る。

狙うのは、その尻尾。

【夜刀【月影】】【将刀【飛車】】が気刃の赤い光に包まれ、グレイは水の槍を【大剣】の形状へと変化させる。

四本の刃が連続して振り下ろされ、最後に振り下ろされたグレイの水刃が【ディアブロス変種】の尻尾を切断した。

尻尾を切り落とされた痛みに、【ディアブロス変種】が身を反らして絶叫する。

「うわっとお！」

その拍子に角が外れ、背中からダブルブルグが転がり落ちた。

「おじさま〜!?!?」

「ダルブルグさん、大丈夫ですか？」

「このくれえ、平気だぜ」

心配そうに駆け寄ったリーヤとミラに、にっと笑い、すぐに立ち上がる。

ダルブルグを振り落とした【ディアブロス変種】は、角と前脚を使って地面に潜っていく。

エンダとグレイが急いで追ったが、間に合わず、完全に地面に潜ってしまった。

【ディアブロス原種】が得意とする地中からの奇襲を警戒して、辺りを見回す。

だが、しばらく待っても、【ディアブロス変種】は地上に姿を見せない。

「逃げたんじゃないすか？」

「ちっ、逃げられたのかよ」

「戦いつばなしよりいいすよ。これ、疲れるんすから」

グレイが、ふう、と息を吐く。

と、気を抜いたとたんに、水の剣が形を失い、砂の上に零れる。

【大地の絆】ガイアタイスの発動には、それなりの集中が必要なのだ。

「あ、いけね」

グレイは、もう一度武器を作るために、川に近づく。

と、グレイが近づいた川に巨大な影が浮かび上がった。

水面を割り、【ディアブロス変種】の上半身が飛び出す。

【ディアブロス変種】は地面に潜った後、川の中に移動していたのだ。

「う、うわぁ！」

「水か！ 確かに、予想できる事態だったぞ！」

「坊主！」

グレイの叫びを聞いて、エルミナとダブルブルグがすぐさま攻撃する。

【ディアブロス変種】の横っ面に【LV1 徹甲榴弾】が炸裂し、爆発の勢いが【ディアブロス変種】を川に押し戻す。

ダブルブルグの投擲した槍は、目標を失って後ろに外れた。

グレイは、急いで水を持ち上げて槍に変え、川から離れる。

どこから現れるのか。

川か、地面か。否応無く緊張が高まる。

そして

突如、地面を割って【ディアブロス変種】の角が突き出す。

【ディアブロス変種】は角だけを地面に突き出して、猛烈な勢いでエルミナへと迫る。

「きゃっ！」

避けきれず、エルミナは【ヘビィピアースクラブ】の【シールド】で角を受けた。

だが、その程度ではその勢いを止められず、手から【ヘビィピアースクラブ】が弾き飛ばされた。

【ディアブロス変種】は地中で方向転換し、再びエルミナに向かう。

「それでやれると思ったら、大間違いだぞ！」

【ディアブロス変種】の目の前に、突如火柱が立ち上った。

いや、よく見れば火柱ではない。それは、溶岩の柱だ。

地中から溶岩柱を喚び起こす、【アカムトルム進種】の【大地の^{ガイアタ}絆】である。

【リオス進種】の火球などと同様に、どこからともなく溶岩を噴

出させる能力で、実際に足元に何があるかは関係なく時間が経てば消滅する。

流石に溶岩の柱には突っ込めず、【ディアブロス変種】が向きを変えた。

全員を包囲するようにその周囲を泳ぎ始める。

地上に出てくるわけでもなく、ただ、周りをぐるぐると回る。

「ちっ、鬱陶しいんだよ！」

エンダが声を荒げ、【ディアブロス変種】が近づいた瞬間に咆哮を放った。

しかし、【ディアブロス変種】は悠々と泳ぎ続ける。

怒り状態の【ディアブロス原種】は、音による攻撃が通じなくなるが、【変種】もその点は同じだったようだ。

「だったら、こいつはどうでえ！」

ダブルグが投槍を放つ。

だが、

「だあー！ 外れた！」

砂中を泳ぎ回る【ディアブロス変種】を捉えられず、投槍が地面に突き刺さる。

「ボクが誘導するから、もう一度！」

エルミナがそう言うが、ダルブルグは首を横に振る。

「もう槍がなくなっちゃった！」

見れば、ダルブルグの盾は丸坊主。投槍を全て使い切ってしまった。
ていた。

「ガイアタイズ大地の絆で作れば……」

ミラがそう言うが、

「無理だ！ 飛んでる間に効果範囲を出ちまう」

「くっ」

顔を歪めるエルミナ。

その話を聞いていたエンダが、 그레이に聞く。

「 그레이、お前はどうなんだ？」

「俺も同じですよ」

그레이はそう言って、持っていた水の槍を投槍に似せた形にする。

「効果範囲を出たら固めてられないっすから」

と、それを聞いたミラが、

「あーっ！」

と大声を上げた。

「ど、どうしたっすか？」

「 그레이さん、その槍、そのままにしておいてください！」

「へ？」

「動かさないでね、手が凍りますから。リライト！」

言いおいて、能力を書き換える。

ミラの白い髪が、僅かに緑色を帯びた。

白い霧が漂い、 그레이の持っている槍の周りを取り巻く。

【グラキシアウカムルバス進種】の能力。

白き霧が、水の槍を一瞬にして凍結させる。

「こ、凍ったっすー！」

驚いて凍りついたように固まる 그레이の手から氷の投槍を引った
くり、

「ダルブルグさん！」

「よっしやっ！」

ミラが投げた槍を受けとり、ダルブルグが構える。

「嬢ちゃん！」

「任せてくれ、うん！」

エルミナが【大地の絆^{ガイアタイズ}】を発動。

地中から立ち上る溶岩柱が【ディアブロス変種】の行く手を阻み、コースを誘導する。

ダルブルグの正面。

溶岩の柱にエスコートされて、砂を切り裂く角が迫る。

「喰らえやあつっ！」

氷の槍が、翔ぶ。

角と交錯して地中に突き刺さり、

グアオオオオオオツッ！

頭に氷の槍を突き刺した【ディアブロス変種】が地面から飛び出す。

「行くぜ、止めだ」

「はいはあい」

エンダとリーヤが走り出る。

リーヤは、腕の【装殻^{かま}】を開き、

「鬼人化あ、シャキーン！」

【太刀】と鎌の擬似双剣鬼人化乱舞。

嵐のような連撃が、残っていた角を二本とも切り落とす。

そして、

角を失って無防備になった頭に、エンダが溜め斬りを振り落とすた。

.....

「これで、後はミラちゃんの黄金魚だけっすね」

【ディアブロス変種】の剥ぎ取りをしていると、グレイがそんなことを言う。

「はい、そうですね」

と肯定するミラ。

トライホーン
ディアブロス変種の討伐は完了したし、そのついでにエリア間の

水路も明らかになった。

ミラ以外の全員は、当初の目的を達成したことになる。

「手伝ってもらったし、ボクは最後まで手伝っぞ」

「おう、俺サマもだ」

「あ、私も」

「はあ、しかたねえな」

皆が口々に手伝いを申し出る。

「みなさん……ありがとうございます」

そう言いながら【ディアブロス変種】の腹にナイフを入れる。

【鳴き袋】や【火炎袋】などの素材になる臓器を持たない【ディアブロス原種】は、普通腹を開けたりはしないのだが、今回は【変種】。

何かあるかわからないから、一応切り開いてみた。

と、ナイフの刃が何かを切った手ごたえを伝える。

何か臓器を切ってしまったようだ。

「あ、やっちゃった……」

ミラが慌ててナイフを抜くと、腹の切り口から半分くらい溶けた魚が出てきた。

ミラが切ってしまったのは、胃だったらしい。

胃の中身が、どろどろと出てきて、ぼと、と。

その一番上に、金色に輝く鱗の魚が落ちてきた。

どつやら、食べられて間もないらしく、完璧に原型を保っている。

「あ……黄金魚……」

ミラが呟く。

【ガノトトス原種】の胃の中からエビの殻のような素材が取れることは確かにあるのだが、こんなところで【黄金魚】がでてくるとは、全く予想外だった。

しかしとにかく、予想外の形ではあったが、最後の素材もこうして手に入ったのだった。

「ただいまー」

ミラが工房に帰ると、ミラは作業台で何かの作業中だった。

「お帰りなさい、ミラ。どうだった？」

作業の手を止め、髪を束ねていたリボンを解きながら立ち上がる。

「うん、ちゃんと集まったよ」

ミラは、歩いてくるミュリエリアに取ってきた素材を入れた二つの袋を渡した。

一つは【サボテンの花】で、もう一つは【黄金魚】が入っている。

ミュリエリアは作業台の上にあった物を隅の方に寄せて袋の中身を取り出し、素材の確認を始めた。

ミラは、【夜刀】【月影】を下ろして防具を脱ぎ、店の棚からいくつか砥石を取り出す。

【夜刀】【月影】を抜いて刃の状態を確認し、手入れを始める。

ミュリエリアには遠く及ばないが、仕事を手伝っている間に、それなりに専門的なこともできるようになっていた。

「ねえ、ミラ」

素材を確認しながら声をかけてくるミュリエリアに、ミラも手を休めずに答える。

「何？ お姉ちゃん」

「今入っている仕事を片付けたら、エイシスアルカディアに行こう」

と思っているの」

「エイシスアルカディアに？」

驚いて、ミラは思わず手を止めた。

「ええ、そうよ。ミラも一緒に来る？」

「え？」

来る？ とはどついつことだろう、と思つ。

ミュリエリアの性格上、一人で遊びに行く計画を立てていたわけではないだろう。

旅行か何かなら、一緒に行きましょう、と誘ってくれるはずだ。

それなのに、来るかと聞かれるということは、ミラと一緒にいても楽しめるかどうかかわからないということだろう。

「お仕事なの？」

「そついつわけでもないのだけれどね」

ミュリエリアも素材から顔を上げ、視線を棚に向ける。

様々な素材が入っている棚。

ミュリエリアの視線の先にあるのは、星祭りで手に入れた隕石だ。

「フェルに、会いに行こうと思っているの」

NEXT > 第十八話「二人の武器職人」

< 簡易キャラクター紹介 >

名前：エルミナ

年齢：20

性別：女

種族：アカムトルム進種

能力：【大地の絆・噴】

< オリジナル武器紹介 >

名前：アトラトルスピア

分類：ランス

レア度：8

属性：なし

威力：598（投擲時932）

切れ味：白

会心率：0%

強化元：なし

強化先：なし

槍を投げるといふ特殊な使い方において本領を発揮する槍。
投げられた槍は、肉を貫き、骨を砕く。

<オリジナルモンスター紹介>

名前：ディアブロス変種

通称：三角竜さんかくりゅう

三本の角を持つ、ディアブロスの変種。

原種との違いは角の数だけだが、ただでさえ凶暴な原種以上に怒り
っぽい。

名前：ディアブロス変種

通称：泳角竜えいかくりゅう

三本の角を持ち、水中にも適応して進化したディアブロスの変種。
場所を問わない奇襲攻撃を得意とする。

第十八話「二人の武器職人」（前編）

エイシスアルカディア。

【進種】文明最大の都市である。

山岳地帯を切り拓いた奥に存在するこの都市は、【ハンター】に発見されながらもその攻撃を退け続けている唯一の都市だ。

謎に包まれている【ハンター】だが、無数に湧いてくるわけではないようで、大規模な攻撃を退けた後はしばらくの間平和な時間が続く。

都市内には、世界に流通する貨幣を生産管理する経済局や【原種】や【ハンター】の動きを調査する防衛局、最先端の技術研究を行うアカデミアを抱え、エイシスアルカディアの陥落は【進種】そのものの敗北とまで言われる。

当然、【ハンター】や【原種】に対する警戒は厳重で、円形をした都市全体は大砲やバリスタ、撃龍槍と呼ばれる巨大な槍などを備えた高い石壁に囲まれ、警備隊によって常に周辺が監視されている。

また、エイシスアルカディアに辿り着くまでの道は一本しか存在せず、その道には止水砦、龍牢砦と呼ばれる二つの砦が存在する。

水を止める、龍を牢すという名を持つ二つの砦は、百人以上の警備兵が常駐し【ハンター】や【原種】の迎撃にあたっていた。

天災とまで言われる巨大モンスターでさえ、この二つの砦を抜い

てエイシスアルカディアにまで辿り着いた事例は数えられるほどしかなく、まさに難攻不落の都市なのだった。

MONSTER HUNTER EVOLVE
第十八話「二人の武器職人」

エイシスアルカディア行きを決めてから十日後。

引き受けていた仕事を終わらせ、ミュリエリアとミラはエイシスアルカディアへと訪れた。

往路にかかった時間は約三日。

これは、安全な道を選んで遠回りしたからで、直線距離ならもう少し短いだろう。

ミラは最早定番の【ロイヤルナイトメイルP】と【夜刀【月影】】、ミュリエリアは【ランポスシリーズ】と【オデッセイ】という出立ちだ。

二人とも【ブランゴ】の毛皮で作ったケープを肩にかけて、荷物を入れた背嚢を背負っている。

防具の上からそのまま着ることのできるマントやケープは、この世界では一般的な防寒具だ。

「うわ……大きい……」

エイシスアルカディアの正門を見上げて、ミラはぽかんと口を開ける。

ルテイエの城の門も大きかったが、これはそれよりもさらに大きい。

左右に開くのではなく上に吊り上げて開く形状で、今はその門を大きく開いていた。

声もなく門を見上げるミラを見て、ミュリエリアはくす、と笑みをこぼし、

「行くわよ、ミラ」

「あ、うん!」

ミュリエリアの声でようやく我に帰ったミラは元気よく頷き、二人一緒に門をへと向かった。

……

「わ、わあ……凄いよ、お姉ちゃん!」

街の中に入ったミラは、周囲を見回しながら声を上げる。

正門から伸びる大通りは石で綺麗に舗装され、左右に並ぶ家や店も全て石造り。

他の村では決して見られない光景だ。

「わかったから、少し落ち着きなさい」

苦笑しながらミュリエリアが言う。

「うん、でもでもっ」

興奮を押さえきれずに、ぴよんぴよんと跳ねるミラ。

その様子を見た通行人たちが、微笑ましそうに頬を緩めていた。

「ね、お姉ちゃん、あれ何？」

ミラは、大通りの先に見える高い塔を指差して聞く。

その塔は街のちょうど中央に建っていて、周囲の建物に比べても飛び抜けて高い。

遠くからでも見える窓には、珍しい板ガラスが使われ、光を反射している。

塔の一番上には大きな鐘が吊るされていて、鐘楼になっているようだった。

「あれは中央施政塔よ」

さりとてミュリエリアが答える。

「これだけの都市を管理しようとする、慣習法ではなく、明文化された法が必要となるの。」

そのために会議をしたり、街で起こった問題の解決、緊急時の指揮などをするための機関である施政院が拠点としているのがあの塔よ。

時間を知らせるための鐘を鳴らすのもあの塔だから、この街の時間さえ管理していると言えるかもしれないわね」

「ふえ〜、凄いなだね」

「一般人は立ち入り禁止とされているし、普通に暮らすには特に関係ない場所よ」

ミュリエリアがそう言ったとき、ゴーン、という大きな音が街中に響き渡った。

ちょうど、鐘がなる時間になったようだ。

ミュリエリアは空を見上げて太陽の位置を確認し、

「この時間だとお昼の鐘ね。人通りが多くなるから、少し避けていきましょうか。こっちよ」

ミラと一緒に、近くの建物の軒先に移動する。

少し待っていると、ミュリエリアの言う通り、様々な防具を来た人が大勢、道の両側から歩いてきた。

互いに顔見知りのようで、軽く言葉を交わしながらすれ違っていく。

「彼らは街の外の監視をする警備隊よ。さっきの鐘は、彼らの交代時間の合図なのよ」

ミュリエリアが、不思議そうに見ているミラに説明する。

「そうなんだ。そんな細かいことまで、よく知ってるね」

「この街に住んでいる人なら誰でも知っていることよ。私も、一年足らずの短い間だったけれど、この街に住んでいたから」

「え？ お姉ちゃん、エイシスアルカディアに住んできたことあるの！？」

ミラが驚きの声を上げると、ミュリエリアは「言っていなかったかしら？」と小首を傾げる。

「店で武器も扱うと決めた後、この街で修行していたのよ」

「言っていないよ……お姉ちゃん」

「あら……ごめんなさい。すっかり言っただつもりになってたわ」

そんな会話をしている間に警備隊の人々は交代を終えたらしく、人通りは元の通りに戻っている。

それでも行きかう人々は途切れないあたり、この街の賑わいがわ

かるといふものだ。

「それじゃあ、行きましようか」

「フェルさんって人のところ？」

「そうね……フェルに会う前に少し街を案内してあげるわ。あの子に会ったら、用を済ませるまでミラの相手ができないと思うから」

「そうなの？」

「ええ、ごめんなさいね」

ミュリエリアが申しわけなさそうな表情を浮かべる。

「ううん、いいよ。お姉ちゃんに用事があるのはわかってついて来たんだし」

ミラは、大通りを数歩先行して、くるっと振り向く。

「お姉ちゃん、どこに連れて行ってくれるの？ 早く行こうよ」

「もう、そんなに浮かれると迷子になるわよ」

はしゃいでいるミラにそう言いながら、ミュリエリアは心の中で
呟く。

（ありがとう、ミラ）

「お姉ちゃん？」

「ええ、今行くわ」

そうして、ミラとミュリエリアはエイシスアルカディア観光に出発した。

エイシスアルカディアは、中央施政塔と三つある門を繋ぐ三本の大通りで百二十度ずつの扇形に区切られていて、それぞれが全く別の役割を持っている。

一つは、アカデミア 学術部。

研究機関と教育機関が一つになった、大学と呼ばれる施設や、【人間】時代から今に至るまでの知識が収められた図書館や博物館などが立ち並ぶエリアだ。

六花、華霞、エルミナの三人はこの大学の考古学部に所属している。

扇の右側から中央は様々な研究がされているが、左側には武器関連の研究をしている大学が多く存在する。

その理由は、アカデミアの左側に闘技部アリーナがあるからだ。

アリーナは、娯楽としての【進種】同士の戦いを提供する闘技場や、捕獲したモンスターと戦って立ち回りを追及する闘技場、武器屋などが存在する。

武器屋の中にはアカデミアと提携している店もあり、そういう店はアカデミアと隣接する右側に寄っている。

そして、最後の一つ、ミュリエリアとミラが向かった場所が娯楽部だ。^{アミューズメント}

主にエイシスアルカディアの外から訪れる観光客のための場所で、ここには商店や様々な観光施設、宿泊施設が並んでいる。

「うわぁ」

もう何度目かわからない感嘆の声を漏らして、ミラが大通りに並ぶ商店を眺める。

どの店も綺麗に飾られ、それなりに生産されるようになったとは言え、世界全体で見ればまだまだ希少な板ガラスで張られたショーケースに服やバッグ、アクセサリなどが並べられている。

「すごい。綺麗、かわいいー！」

ミラが歓声を上げながらショーケースに近づいていく。

ショーケースの中を覗き込んで、

「わ、値段も凄いつ」

ゼロが大量に並んだ値札を見てけらけら笑う。

興奮のあまり、何やら妙なテンションになっているようだ。

ほとんど飛び跳ねながらあっちの店こっちの店と渡り歩くミラの後ろを、ゆっくりとミュリエリアが追いかける。

どう見ても、子供と保護者という図だった。

それから、二人はエイシスアルカディア観光を楽しんだ。

「合わせるなら、これとこれかしら？」

「ちょっと派手じゃないかなあ？」

「この街では普通なのだけけどね」

村では馴染みのない服屋を覗いたり、

「んー、何だか甘い匂いがする」

「あのお店、クレープ屋だわ」

「クレープ？」

「パンケーキの生地を薄く焼いて、クリームやフルーツを巻いたお菓子よ。食べてみる？」

「うんー！」

二人でお菓子を食べたり、

そして、

アミューズメントエリアを満喫した後、アカデミアエリアへと移動し、博物館へと足を運んだ。

入ってすぐのところにあるのは広い廊下のような展示エリアだ。

鉱石や植物などがガラスケースに入れられて並べられ、来館者が興味深そうに眺めている。

ミラとミュリエリアは素材で見慣れているので簡単に見るだけにして、さらに奥へと進んだ。

奥には広い展示室があり、真ん中に【リオレウス原種】の骨格模型や【クシャルダオラ原種】の抜け殻が展示されている。

この部屋にはモンスターから極稀にしか取れない貴重な素材が展示されているためか、警備員の姿もあつた。

「崩天玉……って何だろ？」

ガラスケースを覗いたミラが首を傾げる。

「崩竜、つまりウカムルバスから取れる素材よ。これを素材にした
武器は雪の神の異名で呼ばれるわ。中々出回るものではないわね」

「これは？」

「太古の……板状の塊かしらね。古いものだけれど、手順を踏んで
磨けば使えるようになるわ」

「うわ、ハンターの鎧だ……」

「私たちが使うカタログには載っていないけれど、ハイメタシリーズと呼ばれていた防具よ。でも、形が似ているだけで素材はまるで別物だわ」

そんな感じでミュリエリアの解説を聞きながら、展示を見回っていく。

次にあつた展示は、一枚の絵の前に三振りの剣が飾られているものだった。

その絵は、太陽、月、星空の三つに区切られていて、それぞれの前に一振りずつの剣が飾られている。

太陽の絵の前には、鋭い突起が刀身の両側に並んだ、炎を固めたような赤い【大剣】。

月の絵の前には、細い三日月型の刀身に鳥の羽が並んだような形の黄色の【太刀】。

星の絵の前には、とても切れそうには見えない太い結晶のような刃と、図案化された星の形の盾がセットになった青い【片手剣】が置かれていた。

「お姉ちゃん、これは？」

「大剣が陽昂、太刀が月鵠、片手剣が星跡と言うの。星匠と呼ばれる職人 トルスナーダの手によって作られた、隕石を素材とする

剣よ」

「隕石の武器って、お姉ちゃんが作るうとしてたのだよね？」

「ええ。この街に来たのも、そのためなのよ」

「え、そうなの？」

フェルルートという人物に会うとしか聞いていなかったミラが驚いて聞き返す。

「そうよ。フェルは私がこの街で一緒に修行をした子で、トルスナードの孫娘なの。」

彼女ならきつと、隕石を加工する方法を知っているはずだわ」

何かを思い出しながら語る声には、色々な感情が込められていて、ミラにはその全てを読み解くことはできなかった。

エイシスアルカディア、アリーナ。

博物館を出たミラとミュリエリアは、当初の目的を果たすべくこのエリアにやって来た。

石畳の道をミュリエリアに先導されて歩く。

目的の場所は、大通りから少し奥に踏み込んだ場所にあった。

「ごんまりした石造りの家。」

木の扉に、「ARMS&ARMOR」と書かれたシンプルな看板が掛かっている。

「……?」

「ええ」

ミュージエリアは軽く頷き、店の扉を開いた。

扉の上に取り付けられたベルがリン、と鳴って来客を知らせる。

店の中は外観同様に石造りで、木製のカウンターで二つに分けられている。

扉側にはいくつかの椅子と商品カタログの並んでいる本棚がある。客側のエリア、カウンターを挟んだ奥側が店のエリアになっていた。

ミラたちの他には客の姿はなく、店員もいない。

が、ベルの音に気づいたのだろう。

カウンターの奥にある扉が開き、一人の少女が姿を見せた。

腰に届くほどの長い黒髪の少女で、ミュージエリアやミラよりも少し年下に見える。

頭の両サイドの髪を細く編みこみ、リボンで残りの髪と一緒にポ

ニ―テールに結わえている。

「いらつしゃいま」

言いかけた言葉が途切れ、赤い目を真ん丸に見開いてミュリエリアを見つめる。

「久しぶりね、フェル」

ミュリエリアがそう言うと、少女　フェルルートの顔が驚きから喜びの表情に変わる。

そして、カウンターの端にある扉まで行く時間すら惜しいとばかりに、カウンターを乗り越えてミュリエリアに飛びつく。

「お姉ちゃん！」

フェルルートが喜色満面の笑みで呼んだその言葉を聞いて、

「え、お姉ちゃん!？」

ミラは素っ頓狂な声を出した。

(え? どういうこと? お姉ちゃんの、妹!?)

混乱しているミラの前で、フェルルートはミュリエリアにしっかりと抱きついた。

ミュリエリアも、優しい笑みを浮かべてフェルルートを抱き返す。

何だか、面白くない。

「……うっ」

ミラは、不満げに唸り、

「それじゃ話ができないよ、はい、離れてっ」

ぐい、っと二人を引き離した。

フェルルートが不満そうな表情を浮かべてミラを見る。

「誰？」

ミラとフェルルートが同時に同じ言葉でミュリエリアに聞く。

「あ、そうね。それを紹介しないといけないわね」

ミュリエリアは、まずミラの肩に手を置き、

「この子はミラ。今私と一緒に暮らしている、私の妹のような子よ」

「妹……」

じろり、とフェルルートがミラに視線を送る。

ミラは、何もしていないのになぜか自分が責められているような気分になった。

「ミラ、彼女は」

「お姉ちゃん、自分で自己紹介するから」

フェルルートはそう言うと、ほとんどミラを睨みつけながら、

「お姉ちゃんの妹弟子の、フェルルートです。よろしく、ミラさん」

「よ、よろしく……」

視線の強さに少したじろぎながら、ミラが言葉を返す。

「お姉ちゃん、ダメですよ、誰でも妹にしたら。困るのはお姉ちゃんなんですから」

(……どういう意味で言ってるんだろ)

「フェル、そんなことを言わないで。ミラは私を助けてくれているわ」

「ミュリエリアがたしなめるように言うと、フェルルートはぶいっとそっぽを向いた。」

「もっ……。ごめんなさい、ミラ」

フェルルートの態度に思うところがないわけではなかったが、ミュリエリアに謝られてしまったては文句も言えない。

ミラは「別にいいよ」と首を振る。

「それより、早く本題に入る」

「あ、そうです。お姉ちゃん、どうしてここにいるんですか？ 私に会いに来てくれたんですか？」

ミュリエリアの腕にぶら下がるようにじゃれ付きながらフェルルートが聞く。

ミュリエリアは、それに慣れているのか、フェルルートをぶら下げたまま話を始める。

「実はね、今年の星祭りでこんな物を手に入れたの」

一度フェルルートを離して、荷物の中から隕石を取り出す。

「これは……鋼隕石ですね」

金属の成分が多く含まれた隕石のことだ。

取り出されたその正体を、フェルルートは一目で看破したようだった。

思わず、「わかるんだ……」と呟いたミラに、フェルルートは「当然です」と返す。

「製錬してみようとしたのだけれど、どうも上手くいかないのよ。十分な資料もないから調べようもなくて……」。

フェルは隕石の加工について何か知らないかしら？」

ミュリエリアに聞かれたフェルルートは、少し考え、

「私も隕石は扱ったことはないけど、お爺ちゃんの覚え書きがあつたと思います」

と言った。

連星剣を作つたお爺ちゃんトルスナーダの覚え書きなら、何らかの情報が得られるだろう。

「それを見せてもらえる？」

「はい、いいですよ」

フェルルトはあっさりと頷く。

「ちょっと待っててください」

そう言い置き、カウンターを回りこんで店の奥に向かい、

奥に続く扉に手をかけたところで、ふと気がついたように振り向いた。

「お姉ちゃん、それで何を作るの？」

「そうね……何にしようかしら」

特に決めていたわけではなかったミュリエリアが首を捻り、

「ミラは何が欲しい？」

と聞いた。

「え、私!？」

聞かれるとは思っていなかったミラが驚く。

が、もっと驚いている人物がいた。

「お、お姉ちゃん!？ 何でミラさんに聞くんですか？」

驚愕を顔に貼り付けて、フェルルートが聞く。

「それは、ミラに使ってもらっただけねど」

「え……………」

フェルルートは短い呟きをこぼして、動きを止めた。

取っ手にかけていた手が、だらりと下がる。

「フェル？ どうしたの？」

ミュリエリアが声をかけると、フェルルートはゆっくりと振り向いた。

伏せた顔の下から、搾り出すように声を出す。

「……………」

「え?？」

「いや！　いくらお姉ちゃんのお願いで、それは嫌です！」

「何で？　さっきはいいって言ったのに」

ミラが口を挟むと、フェルルートがぱつと顔を上げた。

赤い瞳が、明確な敵意を孕んでミラを射抜く。

「隕石鋼の武器は特別だから、ミラさんが使うのは嫌！」

「な、何で？」

フェルルートの視線に気圧されながら、ミラはやつとそれだけ口にする。

対するフェルルートは「だってっ」と叫ぶ。

慟哭にも似た、悲しみを感じさせる声で。

「あなたはきつと、お姉ちゃんを傷つけるから！」

そう言うや、フェルルートは身を翻し、店の奥に飛び込んだ。

ボタン、と大きな音を立てて扉が閉じる。

何か事情があるのだろうということは窺えるが、その事情がわからなければ、それはただの理不尽でしかない。

鋭すぎる敵意の刃に切り裂かれ、身を竦ませたミラの肩を、そつとミュリエリアが抱く。

「お姉ちゃん……」

「行きましよう」

ミュリエリアは、それだけ言った。

「……うん」

防具越しにも伝わる暖かさを感じながら、ミラは頷いた。

二つの足音が遠ざかり、店の扉が閉じる音がする。

それを聞いて、扉にもたれていたフェルルートはずるずると床に座り込んだ。

伏せた顔を、膝に埋める。

「どっしり……」

呟いた言葉は、暗い廊下に虚しく響く。

ミュリエリアの頼みを断るつもりはなかったのに、衝動に駆られるままに断ってしまった。

だが、ミラという少女に渡すと言っのなら、どうやったって協力

しようとは思えなかった。

廊下に蹲るフェルルートは、知らず、過去へと思いを馳せる。

三年前　　ミュリエリアと出会った、その頃に。

フェルルートの両親は、祖父の武器屋を継がず、それが気まずかったのか、フェルルートをトルスナーダに預けて旅に出してしまった。

トルスナーダに育てられたフェルルートは、祖父から刀工の技を学び、幼いながらも将来はこの店を継ごうと決めていた。

しかし、トルスナーダが素材の調達に出た先でモンスターに襲われて死亡し、当時十二歳だったフェルルートは全てを学ばぬまま一人になってしまった。

フェルルートは、自身がトルスナーダの店を継ぐために不足している知識を埋めようと、アカデミアの大学で行われている講義を受けることに決めた。

慈悲ケセドの月に入学してから、約二ヶ月。

フェルルートは乾いた土が水を吸うように知識を吸収し、最初からある程度の知識を持っていたことも手伝い、既に講義を受ける必要がないほどになっていた。

「だから、今まではこの形だった部品の形をこつ変えたら、もっと効率よく電気が流れますから」

その日、フェルルートはアカデミアに存在する大学のとある一室

の黒板で、新しいアイデアの説明をしていた。

だが、彼女の説明を聞こうとする者は誰もいない。

気まずそうな、あるいは馬鹿にしたような表情を浮かべて、彼女の前を通り過ぎて行く。

そもそも、新しい武器を作るということ自体が、一般的ではないのだ。

【人間】の残した武器が多岐に渡り、完成されているせいで、発想の余地がないとも言える。

【人間】の使っていた武器をきちんと作ることができれば、一流と呼ばれるには十分なのだ。

新しい武器を作ろうとしても、作れないのが普通だった。

その発想と理論を、習い始めて二ヶ月の者に理解するという方が無理がある。

だが、フェルルートはまだ子供で、周りにいる一回り以上年上の人たちならわかると、勝手に思い込んでいた。

だから、自分の思いついたことを聞いてもらおうとして講義の後にその説明をしていたのだ。

しかし、当然それを理解できるものではなく、子供らしい無邪気さが、他の生徒たちのプライドを傷つけた。

そして、次第に彼女は孤立するようになっていった。

フェルルートには何が悪かったのかわからず、見てもらうために新しいアイデアを考える。

それが、フェルルートを益々異端にしてしまう。悪循環だった。

いつの間にか、教室には誰もいなくなっていた。

いつものことだ。

黒板を消そうとしたとき、「待って」と声がかけられた。

フェルルートに声をかけた少女は、黒板に描かれた図を眺めて、

「確かにこの部分はこれでいいかもしれないけれど、その上下の部品を変えないと、抵抗になってしまうのではないかしら？」

事も無げに、そう言った。

黒板に書かれていた一部分を見ただけで何の武器の一部なのかを判別し、問題点を指摘してみせた。

ただ頷くだけなら誰にでもできる。

だが、指摘をするのは、理解した者にしかできない。

このとき初めて、フェルルートは自分を理解してくれる相手に出会った。

その少女の名は、ミュリエリア。

講義のクラスは別だったが、フェルルートの噂を聞いて足を運んだのだった。

共に学んでいた者たちの中で突出した才能を持っていた二人は、引き合うように親しくなり、卒業までのおよそ九ヶ月間を共に過ごした。

ミュリエリアは街の宿泊施設を利用していたが、親しくなっただけならフェルルートの家で一緒に暮らし、フェルルートは三歳年上のミュリエリアを姉と呼び慕った。

ミュリエリアと過ごした日々は、楽しかった。

ミュリエリアの方は分別と社交性を持ち合わせ、それなりの対人関係を築いていたが、フェルルートにとってのミュリエリアは唯一だった。

二人は切磋琢磨しながら腕を磨き、その才能を誰にも認められるようになっていく。

だが、それが招くことになる事件を、そのときの二人には知る由もなかった。

第十八話「二人の武器職人」（後編）

「何で私、あんなに嫌われてるんだろ……」

アミューズメントエリアにある宿の一室。

がっくりと肩を落としながら、ミラが呟いた。

「あの子は、ミラが嫌いな訳ではないのよ。多分、あなたの後ろにあるものを見ているんだわ」

二つあるベッドの一つに腰掛けて、悲しそうな表情でミュリエリアが言う。

彼女は、フェルルートが何を思ってあんなことを言ったのか、それを理解していた。

「お姉ちゃん、どういふこと？」

「昔　私がこの街にいたときに、ちょっとした事件があったの」

その事件は、ミュリエリアの心にも大きな影響　傷と言ってもいい　を残している。

だが、フェルルートの受けた影響は、ミュリエリアが想像していた以上のものだったようだ。

軽々しく口に出せる話ではないが、落ち込んでいる妹の姿ミラを見ると、言葉を重ねずにはいられなかった。

「試験で、私たちは同じコンセプトで新しい武器を作ったの。でも、それが原因で……」

そこまで言つて、ミュリエリアは言葉を濁した。

それだけで到底理解できる話ではなかったが、ミュリエリアもそれ以上は話せない。

「ごめんなさい……」

「ううん……」

それつきり、二人に言葉はなく、沈黙だけが続いた。

しばらく、無音の時間が流れ、

「わ、私、散歩に行ってくるね」

沈黙に耐えかねて、ミラがベッドから立ち上がる。

「散歩？ それなら」

と、ミュリエリアも立ち上がるつもりだったが、ミラはそれをベッドに押し止めた。

「一人でも大丈夫だから、お姉ちゃんは休んで。疲れてるでしょ？」

三日かけて移動したのだ。疲労が溜まっていけないはずがない。

それとは別に、別行動することで気まずい空気を払拭しようという思いもあった。

「そうね……そうさせてもらっわ」

ミラの意を汲んだのか、疲れていたのか、そう言ったミュリエリアに「行ってきます」と残して、ミラは部屋を出た。

扉に隔てられる瞬間、部屋の中から「気をつけて」と聞こえた声に頷いて、ミラは宿の廊下を歩き始めた。

……

宿を出たミラの足は、自然にアリーナへと向かっていた。

石畳を歩き、一軒の店の前に立ったとき、ようやくミラは自分がフェルルートに会おうとしていることに気がついた。

彼女に会おうとした理由は、ただ納得ができなかったからだ。

全体の半分、いや一割も事情は把握できていない。

それでも、フェルルートの言っていることには頷けない。

ミュリエリアを傷つけるからと叫んだフェルルート。

それだって、何ら根拠があるものではない　少なくとも、ミラに対しては示されていなかった。

(傷つけるなんて言うけど、フェルちゃんの態度の方がよっぽどお姉ちゃんを傷つけてるよ)

俯き加減にベッドに座っているミュリエリアを思い出してそう思う。

過去に何があったのかはわからないけれど、ミュリエリアが落ち込んでいるのは一目瞭然だった。

「よっっ」

気合を入れて、ミラは再び扉を開いた。

ベルが来客を告げ、それを聞いたフェルルートが店の奥から顔を出し

ミラの姿を見ると、そのまま引っ込んでしまった。

「ちょ、フェルちゃん!？」

カウンターまで駆け寄り、奥の扉に声をかける。

「フェルちゃん！ 出て来てよ！」

ミラの言葉に対する返事は、扉がドン、と叩かれる音だった。

「馴れ馴れしく呼ばないでください！」

「じゃあ、何て呼べばいいのっ?」

露骨に敵意を持って接してくる相手に優しくするほど、ミラは成熟していない。

不満も露に怒鳴り返すと、扉の向こうで沈黙する気配が伝わってくる。

「フェル？ フェルさん？ フェルルートちゃん？」

畳み掛けるようにミラが連呼する。

「……別に、好きに呼んだらいいじゃないですか」

何と呼ばれても結局気に入らないことに気づいたらしい。

そんな返事が返ってきた。

「じゃあフェルちゃんって呼ぶね。出て来て、お話ししようよ」

「私は、話すことなんてありません」

「フェルちゃんにはなくても、私にはあるの！」

「ミラさんにあっても、私にはないんです！」

子供の喧嘩のような言葉を交わしあって、それっきり、扉の向こうは沈黙してしまった。

「フェルちゃん？ フェルちゃん」

呼びかけてみても、物音一つ返ってこない。

完全に無視してしまう腹積もりのようだった。

しばらく待ってみても、出てくるどころか声さえ聞こえてこない。

これでは、話のしようもなかった。

「はぁ……」

仕方なく、一度諦めて店を出る。

「あ、っと」

店を出てすぐの場所に店を訪れようとした人が立っていて、危なくぶつかりそうになった。

相手が素早く体を捻って衝突を避ける。

「す、すみません」

謝ってから下げた頭を上げると、そこには見覚えのある人が立っていた。

「ミラ殿？」

「あ、ベガードさん」

そこに立っていたのは、鎧姿の【ティガレックス進種】、ベガードだった。

「ベガードさん、どうしてここに？」

「うむ、戦で籠手を欠いてしまっただ。修繕を頼みに来たのだ」

そう言われて見てみると、左手の防具が大きく欠けていた。

「そついうミラ殿は？」

「えーと、色々複雑な事情があるんですけど……あ」

そう説明しているとき、ミラの頭に閃くことがあった。

「あの、ベガードさん。少し、私に協力してもらえませんか？」

「某にできることならば、協力するに吝かちかひではないが。何をすればよいのだ？」

「それは」

ミラは、こそこそと頼みたいことをベガードに耳打ちした。

事情を知らないベガードは、なぜそんなことをしなければならぬのだからか、と言いたげな表情を浮かべたが、ミラの頼みを受け入れてくれた。

……

チリン、とベルが音を鳴らす。

「ごめん」

店の中に入ったベガードが、店の奥に向かって声をかける。

またミラが来たのだろうかと思っていたフェルルートは、全く違う男性の声に慌てて店の奥から飛び出した。

すると、そこにはベガードとミラが並んで立っていた。

「やっと出てきてくれたね、フェルちゃん」

「……ミラさん」

フェルルートは、一瞬扉の向こうに戻ろうとする素振りを見せたが、本物の客の前から逃げ出すこともできず、結局その場に止まることができなかった。

「意外。こんな手も、思いつくんですね」

「ごめんね。でも、こうでもしないとフェルちゃんと話もできそうになかったから」

ただ言葉をやり取りしているだけなのに、肌を刺すような緊張感が漂う。

騙すような手を使ったのは悪いと思うけど、引くつもりはない。

フェルルートは「ふう」と息を吐き、

「すみません。少し、待っていてください」

ベガードに向かって頭を下げた後、ミラに向き直る。

「それで、何をお話するんですか？」

ミラを見るフェルルートの目は、相変わらず敵意に満ちていて。

それに負けないようにと自分を奮い立たせながら、

「教えて。私がお姉ちゃんを傷つけるって、どういう意味？」

「それは……あなたが、お姉ちゃんを　お姉ちゃんが作る武器を理解できないから」

「え？」

「隕石鋼でできる武器は、ただの武器じゃない特殊なものですから。うっん、隕石じゃなくても、お姉ちゃんが考え付いた特殊な武器は理解できないはずですよ」

「それは……」

ミラの脳裏に、【群蟲刃】【雲霞】を使ったときのことが蘇る。

刃の鞭という特殊な機構を持つ【太刀】を使えずに、ミラは自分の足を切ってしまった。

そんな武器であることを、理解できなかったから。

「でも、ちゃんと練習すれば……」

「教えられて？ 練習して？ そんなの、理解するって言いません。上辺だけ取り繕ってるようなものです」

フェルルートの求める理解は、より深い理解。

武器の例で言うなら、その武器についての説明などされなくても、自ずと使い方を把握できるような。

だがそれは、あまりに難しい。

「結局、そういう武器を、本当に理解して使えるのは作った本人だけなんです」

「でも、そんなこと言ったら、武器を作る意味がなくなっちゃうよ」「そんなことないです。お爺ちゃんの連星剣みたいに、飾っておけばいいじゃないですか」

フェルルートの言葉に押されていたミラは、しかし、その言葉に違和感を覚えた。

反射的に「違うよ」と言い返す。

ミュリエリアから直接聞いたわけでもない。

だが、ミュリエリアの側で、客との関係を見ていたミラは、違うと思った。

カタログ武器でも、注文した人に応じた大きさで作り上げ、細かい注文にも対応し、求められれば新しい概念の武器にも挑戦する。

「お姉ちゃんが武器を作るのは、飾っておくためじゃないよ」

【ミオガルナ】の双剣は飾ってあるけれど、それは、武器として未完成だからで。

逆に言えば、そういう未完成のものは、提供しないということ。

武器を作ることを通して見える、ミュリエリアの想いは

「お姉ちゃんは、お姉ちゃんのやり方で誰かの助けになるように、そのために作ってるんだと思う。

だから、お姉ちゃんの武器は、使ってこそ意味があるんだよ」

それは、ミラがミュリエリアの作った物に守られているからこそその、実感から出た言葉だった。

そして、そんな風に思っているのは、きっとミラだけではないはずだ。

「何よ……わかったようなこと、言わないでください!」

ミラを睨みつけて、フェルルートが声を荒げる。

「お姉ちゃんのこと、どれだけ知ってるっていうんですか!」

「確かに、私は知らないところもいっぱいあるけど……」

ミラがミュリエリアと過ごした時間は、まだ一年にも満たない短い時間でしかない。

それだけの時間で、全てを知ることなんてできないけれど、

「でも、何も知らないわけじゃないよ！」

「だったらっ！」

バン、とフェルルートがカウンターに手を叩きつける。

「証明してください。どれだけ、お姉ちゃんのことをわかってるのか」

「証明って、どうすればいいの？」

「ちょっと待っててください」

フェルルートはミラを残して店の奥に入り、そして、奥からあるものを持って戻ってきた。

ゴトン、と音を立ててカウンターのの上に置かれたのは、二振りの【大剣】だった。

一振りは、深い緑色をした金属でできた厚めの長方形で、片刃のもの。

峰の側には二箇所、コの字形の黄色いラインが入っている部分があり、その部分は内部がくり貫かれていて握れるようになっている。いた。

刃に近い側から伸びている柄の先も、ラインと同じ黄色の珠が飾

られている。

もう一振りは、直角三角形の【大剣】。

これも先の【大剣】と同様に片刃の剣だ。

【ティガレックス原種】の鱗が使われているらしく、柄から刀身の真ん中辺りまでが青く、そこから先端までが黄色い。

「これは？」

「大剣、シーススカバード。昔、お姉ちゃんが作った、特殊な機構を持つ剣です」

金属の【大剣】を示して説明し、次にもう一振りを指す。

「そして、こっちはスパインノッカー。同じときに私の作った武器です」

二つの武器を紹介して、フェルルートは【シーススカバード】を持ち上げる。

そして、それをミラに差し出した。

「これを使って、私と勝負してください。それで、ミラさんが勝ったら、認めてあげます」

ミュリエリアがその剣に秘した何かを理解してみせろ、とそういうことだ。

差し出される【大剣】を受け取ることをミラは躊躇う。

「え、そんな……危ないよ」

「危ないのは、ミラさんだけですよ」

「え？」

「スパインノッカーは私の作った武器です。どうやって使ったらいいのは、全部わかってます。簡単に勝てるだなんて思わないでください」

「うん、それはわかったけど……」

「もう……煮え切らない人ですね。それなら、こっしたらどうですか？

ミラさんが勝ったら、私は、お姉ちゃんに協力します」

戦いを挑み、己の意思を賭け、そうまでして、この少女は証明したいのだ。

ミラが、ミュリエリアの武器を執るには相応しくないということ
を。

なぜそうまでしなければならぬのかと思うと同時に、受けるし
かないと心の裡に思う。

そうしなければ、何も変わらない。

そうすれば、何か変わるかもしれないから。

「わかった。受けるよ、その勝負」

ミラはそう言って、フェルルートの手から【シーススカバード】を受け取った。

「約束だよ。私が勝ったら、お姉ちゃんのお手伝いをするって」
自分のための武器が欲しいわけじゃない。

ただ、ミュリエリアが喜んでくれたらいいなと、そう思った。

勝負することを決めたミラたちは、一度店を出て移動した。

剣を振り回せるような広い場所がなかったからだ。

フェルルートに案内されて、アリーナエリアにいくつもある小さな闘技場へと向かう。

ちょっとした広場を塀で囲んだだけのその場所は、施政院が所有するいわば公共の場で、申し込めば無償で借りることができる。

普段は子供が遊んでいたり、フリーマーケットが行われたりするのだが、今日は決闘場として使うことになるようだった。

受付で申し込み、塀に囲まれた戦いの地へと足を踏み入れる。

すたすたと先を歩くフェルルートは【ギザミスシリーズ】を着ている。

青と銀の冷たい色と鋭いシルエットが、フェルルートの心を示しているようだった。

フェルルートは闘技場の中央へと進んでいく。

ミラは、一度足を止め、ついてきていたベガードに振り向いた。

「ベガードさん、これを預かっておいてもらえますか？」

【夜刀【月影】】とケープを外して、ベガードに差し出す。

「うむ、引き受けよう」

快く受け取ってくれたベガードに、「すみません、変なことに巻き込んでしまって」と頭を下げる。

ベガードは、二人の戦いの立会人 審判も引き受けてくれたのだ。

「いや、気にすることはない」

たまたま居合わせたというだけで巻き込んでしまった、少々心苦しいのだが、ベガードは特に気にしていないようだった。

と言うか、むしろ楽しそうですらある。

「人の戦いを見ることもまた修練なのでな。良き戦いを期待している」

「はい」

ミラが頷いて背を向ける。

「ミラ殿、気をつけられよ。あの娘、侮って勝てる相手ではありませんぞ」

「……ありがとうございます」

フェルルートの身のこなしから力量を計ったベガードの忠告に頷き、ミラは闘技場の中央に足を進めた。

闘技場の中心点を挟み、少しの距離を置いて向かい合う。

ゆつくりと、フェルルートが【スパインノッカー】を抜刀する。

それに合わせて、ミラも背負っていた【シーススカバード】を抜いた。

「わ、とと……」

「どうかしましたか？」

一瞬体勢を崩したミラに、フェルルートが聞く。

「何でもないよー」

使いこなせていないと言われたような気がして、ミラは強く言い返した。

【シーススカバード】を正面に構える。

「双方、準備はよいか？」

「はい」

脇に立ったベガードが問いかけ、二人が頷く。

ベガードは、右手を上挙げ、

「では　始め！」

振り下ろした。

ミラとフェルルートは同時に動く。

互いに距離を詰め、闘技場の中心で激突した。

【大剣】はそのサイズゆえにそれほど多様な攻撃方法がない。

二人が選んだのは、共に縦斬り。

背中に担ぎ上げるように刃を振り上げ、振り下ろす。

若干ミラが遅れ、振り始めにフェルルートが振り下ろした刃とがち合った。

火花を散らして二本の刃がぶつかり、ミラは背中から引つ張られたようにたたらを踏んだ。

フェルルートは跳ね返った【スパインノッカー】をそのままもう一度振り下ろし、刃が後退したミラの足元を割る。

ミラは踏み込みながら【シーススカバード】を横薙ぎに振るが、それはフェルルートが盾のように構えた【スパインノッカー】に弾かれた。

弾き返された【シーススカバード】が地面を擦り、峰の先が地面を削った。

フェルルートが腕を後方に引きながら【スパインノッカー】を持ち上げ、鋭く突き出す。

ミラは峰に二つ並ぶ取っ手の一つを握って持ち上げ、切っ先を受け止めた。

「どうですか？ お姉ちゃんの剣」

「う……」

フェルルートの問いに、ミラは顔を歪めた。

（この剣、使い難い……っ）

今までの攻防で、気づいたことはそれだけだった。

通常の【大剣】は柄が刀身の中央に存在し、刀身は左右対称に近

いか、刃の側が大きくなっている。

つまり、【大剣】は前後の重さが釣り合っているか、前方が重いのだ。

しかし、【シーススカバード】は柄が刃の側に偏った位置にあるせいで峰の側が重くなっている。

そのせいで、普通の【大剣】の感覚で使つと、後ろに引っ張られるような感覚になるのだ。

最初の一撃で振り遅れたのも、それが原因だった。

峰に取っ手のような部分があるという構造は【大剣】にはよく見られるが、それは前が重い刃を支える役に立つのであって、後ろが重い【シーススカバード】には役に立たない。

しかも、その取っ手は刀身の先端に近い位置に二つ並んでいる。

そんな部分と柄を掴んでしまつたら、剣を振ることができない。

【シーススカバード】の形状は、【大剣】としては不適切なのだ。

(お姉ちゃん……何でこんな形にしたの……?)

さつきは防御の支えに使ったが、まさかそれがミユリエリアの組み込んだ仕掛けではないだろう。

「お姉ちゃんの剣の秘密、わかりました?」

問う声に滲む優越を感じ、ミラは「まだです」と叫び返した。

違和感を拭えぬまま、【大剣】を担ぎ上げる。

「でも、絶対、わかってみせるから！」

「無理ですよ」

そう返す声と共に鏡写しに振り下ろした刃が噛み合う。

「ミラさんに、お姉ちゃんの頭の中がどれだけわかってるって言うんですか！」

「それは 確かに、私はお姉ちゃんみたいに頭は良くないけど、でも、違うよ！」

人と人が理解わかりり合うって、そういうことじゃない。

同じだけの知識が無いと分かり合えないなんて、そんなの悲し過ぎるよ！」

「使いこなせないあなたが、何を言っただって！」

刃を弾いて【スパインノッカー】を正眼に構える。

そして、片手で峰の一部を握って柄を引く。

すると、刀身の内部を貫いていた柄が、半分ほどまで抜ける。

柄に支えられていた部分である、黄色い鱗の張られた先端部が支えを失い、内部に隠れていた歯車で繋がっている刃の一点から前方に倒れる。

そして、本のページを開くように、刃が左右に開いた。

刃に対して平面板が直交する形だ。

両手で柄を握り、全く形を変えてしまった【スパインノッカー】を横に振る。

【大剣】状態の半分程度の長さまで短くなっている【スパインノッカー】のコンパクトな振りに対応しきれず、ミラは腹部に一撃を受けた。

「うぐ……っ」

防具を突き抜けて響く打撃に呻く。

【背で打つもの】。
スパインノッカー

【大剣】から【ハンマー】への変形機構を持つ、特殊な武器である。

ミラは一步後退し、フェルルートの追撃を刀身で防ぐ。

【シーススカバード】で【スパインノッカー】を跳ね上げ、薙ぎ払う。

が、【大剣】を振るうより先に、振り下ろされた【スパインノッカー】が刀身を叩き落す。

ミラは、斬り上げに切り替えて、【シーススカバード】を振り上

げようとしますが、そこに【スパインノッカー】を合わせて押さえ込まれてしまった。

【ハンマー】と【大剣】では、圧倒的に【ハンマー】の攻撃速度の方が速い。

接近戦では、出がかりで潰されてしまう。

ミラは刀身の取っ手を掴んで【スパインノッカー】を押し返し、そのまま体を一回転させて刃を打ち付けた。

旋回から繰り出される一撃の出始めは叩けず、フェルルートは後方に飛び退く。

ミラも後ろに下がり、一旦距離を取る。

片手を柄から離して髪に差し込み、

「リライ
」

能力を発動しようとして、だが、ミラはそれを中断した。

【変身】の能力を使えば、やりようは色々であった。

腕力を強化する【ティガレックス進種】の能力を使えば、多少の重心の差など気にすることなく【シーススカバード】を扱えるだろう。

遠距離攻撃のできる種族の能力を使えば有利に戦いを進められるだろう。

だが、それでは意味がない。

必要なのは、ただ勝つことではないのだ。

【シーススカバード】に秘められた機能を使うまでは、勝ったとしてもフェルルートに認められることはできない。

ミラは髪から手を離し、柄を握り直す。

「もう、諦めたらどうですか？」

「諦めないし……負けないっ」

フェルルートの言葉に宣言を返し、【シーススカバード】を担ぎ上げながらフェルルートに向かう。

肩を越えて振り落とす縦斬り。

フェルルートは身を捌いて躲し、地面に突き刺さった刃の横から【スパインノッカー】を振り上げる。

【ハンマー】の届かない距離。

フェルルートは振り上げながら、峰を掴み、柄を押し込む。

【スパインノッカー】が再び【大剣】の形状を取り戻し、斬り上げがミラを襲う。

ミラは横に避けるが、【シーススカバード】を置いたままでは移

動できる距離は広くない。

斬り上げられた刃がミラを掠め、腰に差していた剥ぎ取りナイフを跳ね上げた。

その衝撃でナイフが鞘から飛び出し、空中でくるくると回転した後ミラの目の前に突き刺さる。

このナイフもまた、ミュリエリアに貰った

『昔、似たような武器を作ったことがあったのよ』

「あ
」

剥ぎ取りナイフを貰ったときに聞いた言葉を、思い出す。

そして、それが呼び水になったように、次々に言葉が蘇る。

『私たちは同じコンセプトで新しい武器を作ったの』

『同じときに私の作った武器です』

ミュリエリアとフェルルートは、同じコンセプトの武器を作った。

その武器が、【シーススカバード】と【スパインノッカー】だっ

たとしたら

思考が纏まるより先に、フェルルートが横薙ぎの斬撃を放つ。

ミラは【シーススカバード】を引っ張り上げて先端を地面に突き立てた。

フェルルートの斬撃をその刀身で受け止め、柄尻に飾られた珠を押し込む。

刀身の中からカチリと何かの音がして、ミラの確信を深めた。

「フェルちゃん。これが、私の答え」

柄を握って引き抜くと、【大剣】の刃をそのままに、細く鋭い刃が【太刀】がその姿を見せた。

【シーススカバード】は【スパインノッカー】と同様に変形機構を持つ【大剣】なのだ。

白刃が煌きながら弧を描く様を、フェルルートは呆然と見つめる。

脳が機構をミラが見抜いたという事実を認めることを拒み、体に指示を送らなかった。

フェルルートの眼前に刃が突きつけられ、「それまで!」というベガードの音が響く。

フェルルートはその声さえ聞こえていない様子で、

「どっ、して……」

呆然と、呟く。

「どうして、気がついたんですか……?」

「お姉ちゃんが、教えてくれたから」

ミュリエリアの言葉を覚えていたから、答えに辿り着けた。

今日までの、二人過ごした日々の積み重ねが、ミラにそれを教えたのだ。

気づいたこと、知ったこと。

それが、答えを教えてくれた。

完全ではないかもしれない。

けれど、それはきつと、理解と呼んでもいいものだった。

「フェルちゃん、これで」

「……許しません」

ミラの言葉を遮って、フェルルートが嫌々をするように、首を振る。

「私は、絶対に許しませんから!」

感情を昂ぶらせ、フェルルートが叫ぶ。

【激昂】。

それは、【ラージャン進種】の能力。

雷にも似た金色のオーラがフェルルートの全身を包み込み、髪の一部が金色に染まる。

身体能力を底上げするこの能力は、鬼人化を超える力を使い手に与える。

【大剣】の重さをもともせず、フェルルートが飛び退く。

そして、【スパインノッカー】を構え、ミラへと一直線に飛び出した。

三年前、ミュリエリアとフェルルートは、一つの試験を受けることになった。

試験内容はシンプルで、ただ武器を作ればいい。

二人は示し合わせて可変武器を作ることを決め、【シーススカバード】と【スパインノッカー】を作り上げた。

二つの武器は高い評価を受け、どこから話を聞いたのか【シース

スカバード】を買いたいという男が現れた。

武器屋を目指していたミュリエリアは喜んでその申し出を承諾する。

しかし、それが一つの問題を引き起こした。

ミラのように何も知らずに使ったわけではないのだが、【シースカバード】を使いこなすことができずに、大怪我を負ったのだ。

男は、自分が怪我をしたのはミュリエリアのせいだと訴えた。

結局、大学が間に入ることによって大きな問題にはならなかったのだが、男はわざわざミュリエリアに【シースカバード】をつき返し、随分と辛辣な言葉をかけた。

男に【シースカバード】を返された日の夜。

ミュリエリアを元気付けようとしたフェルルートはミュリエリアの部屋を訪ねたのだが、ミュリエリアはいなかった。

ミュリエリアの姿を探したフェルルートは、彼女を作業場で見つけた。

闇に包まれた暗い作業場の椅子に座り、ミュリエリアは【シースカバード】を見つめていた。

「お姉ちゃん？」

「っ！」

フェルルートが声をかけると、ミュリエリアは慌てて顔を上げた。「フェル……。ふふ、私はまだまだ修行が足りなかったみたい」

取り繕うようにミュリエリアが笑みを浮かべる。

だが、フェルルートは見た。

ミュリエリアが顔を上げた、その一瞬。

廊下の灯火に照らされたミュリエリアの横顔に、涙に濡れた跡があったのを。

そして、その後、ミュリエリアは卒業を待たずしてエイシスアルカディアを去ってしまった。

この事件は、ミュリエリアに依存とも言えるほどの信頼を寄せていた幼い少女^{フェルルート}の心に深い傷を刻むことになる。

フェルルートはその後一年間の学習を経て大学を卒業し、祖父の店を継ぎ、自分の店を開店した。

そのとき、フェルルートは心に決めていたことがあった。

それは、特殊な武器を、作らないということ。

【人間】の武器か、普通の武器の注文しか受けないこと。

特殊な武器は他人には絶対に使いこなせないというのが、その理

由だった。

だが、その理由に至る原点は 大切な人を傷つけられたという、その想い。

「自分で望んだくせに、使いこなせなくて お姉ちゃんを傷つけた！」

【スパインノッカー】を振り上げて、フェルルートが駆ける。

【激昂】の能力は、特に素早さを大きく上昇させる。

重量のある【大剣】を持っているとは思わせない速さで、ミラへと走る。

ミュリエリアの言っていた通りだ。

フェルルートは、ミラを嫌っているのではない。

ミラを通して見える、ミュリエリアを傷つけた男への怒りが、ミラへの反発を招くのだ。

「あなただって、お姉ちゃんを傷つける！」

「私は、お姉ちゃんを傷つけたりしない！」

譲れない気持ちを、叫び返す。

「それが証明する方法だって言うのなら、私は、フェルちゃんに勝つよ！」

【太刀】を刃に戻し、【大剣】になった【シーススカバード】を持ち上げる。

フェルルートが振り下ろす【スパインノッカー】を薙ぎ払いで受け止める。

激突の瞬間、【スパインノッカー】に刃を引っ掛け、【太刀】を抜刀。

斜めの斬り下ろしは、しかしフェルルートが飛び退って空を切る。

逃がさないとばかりにミラは【太刀】を投げつけ、落ちている途中の【大剣】の刀身を蹴り上げた。

手元まで上がって来た刃の峰にある二つの取っ手を掴み、体を捻りながら腕を大きく振ってフェルルート目がけて飛ばす。

フェルルートは【太刀】を刃で弾き飛ばし、次いで飛んできた刃を柄で叩き落した。

そのときには、ミラがフェルルートに向かって突っ込んできている。

その手には、取っ手の部分が　いや、長方形の刃を持つ【双剣】が残っている。

コの字の模様で切り離された部分。

その部分には【双剣】が収めてあったのだ。

それを避けるために、【太刀】と繋がる柄が刃の側に偏っていたのである。

【二つの鞘】シースカバード。

【大剣】という鞘に、【太刀】と【双剣】を収めた三つの顔を持つ可変武器である。

ミラが【双剣】を掲げ、その体が赤い光に包まれる。

フェルルートは、先の鞘を弾いた姿勢から、【スパインノッカー】を構え直したばかり。

「うあああああああ！」

「やあああああつ！」

二人の声と、二つの刃が交錯する。

そして

【スパインノッカー】は振り上げかけた中途半端な姿勢で止まり、

金の獅子の喉元に、赤き剣が突きつけられていた。

「私の、勝ちだよ」

静かに、ミラが宣言する。

フェルルートは剣を取り落とし、がくりと、地面に膝をついた。

ゴーンゴーンと、重厚な鐘の音がエイシスアルカディアに響き渡る。

夕焼け色に染まる道を、ミラとミュリエリアは並んで歩いていた。

フェルルートは、ミラが勝ったらミュリエリアに協力するという約束を守ってくれて、ミラはミュリエリアを呼んでフェルルートの店に行っている途中だ。

「ありがとう、ミラ。あなたが何か言ってくれたのよね。一体、どうやってフェルを心変わりさせたの？」

「うえ!？」

ミュリエリアに聞かれて、ミラが妙な声を出す。

(ど、どうしよう……いくらなんでも、決闘しましたとは言えないし……)

そんなことを思いながら冷や汗をかくミラの顔を見て、ミュリエ

リアは訝しげな表情を浮かべる。

「まさか、何か危ないことをしたのではないでしょうね」

流石ミュリエリア、鋭い。

「ま、まさか。そんなことしてないよ、あはははは」

引きつった顔で笑うミラ。

何かしましたと白状しているようなものだった。

ミラの顔を見るミュリエリアの視線が鋭さを増し、

「何をしたのか、話さない」

「……はい」

有無を言わせない強さで言われて、ミラは白旗を上げた。

「あのね、フェルちゃんと勝負をしたの」

「勝負？」

「うん。私がシースカバードを使ってフェルちゃんに勝ったら、お姉ちゃんのお願いを聞いてもらうって約束して」

「シースカバード!？」

ミュリエリアが驚きの声を上げる。

「嘘、まだ残っていたの？ いえ、それよりも、ミラ、大丈夫？ 怪我はないの？」

やけに慌てて聞いてくるミュリエリアに、ミラは「大丈夫だよ」と返す。

【ハンマー】形態の【スパインノッカー】に叩かれたところは痣にくらいはなるかもしれないが、そのくらいの怪我はわざわざ報告するほどのものでもない。

「そう……良かった」

大きく、安堵の息をつくミュリエリア。

そして、信じられないことを口にする。

「もう使ってはダメよ。あれは、失敗作だから」

「し、失敗作！？ ほんとに？」

聞き間違いじゃないだろうかと思っただが、ミュリエリアは真面目な顔で頷く。

「何で、あれが失敗作なの？」

「なぜって、使い難かったでしょう？」

「あ、うん……」

ミラが頷くと、ミュリエリアは「だからよ」と言った。

「あれは、こうすれば三種類の武器が使えるっていう机上の計算でできた武器なのよ。」

でも、それだけでは子供の落書きと変わらないわ。実際に使うことを、まるで考えていないのだから」

「それで、失敗作？」

「ええ。ある人が、それを私に教えてくれたの。」

だから、私はこの街での修行を途中で止めて、村に戻ったのよ。実際に使う人が、何を求めるのか。そういう生の声を聞いて、それに答えようと思ったから。」

少し落ち込んだときもあったけれど、今の私があるのは、その人のおかげなのよ」

穏やかな声で、ミュリエリアはそう言った。

「そんなことがあったんだ……。」

ね、お姉ちゃん。フェルちゃんはそれを知ってるの？」

「どうなのかしら？ それとなく言ったような覚えはあるのだけれど……。」

「ちゃんと話してみたら？ 多分、フェルちゃんも喜ぶと思うよ」

「そうね。そうしましょうか」

そんな話をしている間に、二人は店の前に到着した。

「さあ、入りましょう」

ミュリエリアが扉を開ける。

ベルが、リンと、二人を歓迎する声を上げた。

(何か変わるかな？ 変わったら、いいな)

店の中で待っていたフェルルートの姿を見つけて、ミラはそんな期待を抱いた。

翌日。

ミラとミュリエリアは、フェルルートの工房を訪れていた。

ミュリエリアは、トルスナーダの残したメモを読むついでに店番を手伝い、フェルルートは奥の作業場でベガードの防具を直していた。

ミラは、特にやることもなく、作業場で手持ち無沙汰にぼんやりしていた。

ミュリエリアとフェルルートがどんな話をして、フェルルートが何を思ったのか。

それは、何もわからない。

(気になるけど……)

そう簡単には聞けないよね、とミラは思う。

「ミラさん」

作業の手を止めて、フェルルートが唐突に呼びかけた。

「え、何？」

と聞いてフェルルートを見遣ったミラの瞳を、真剣な色を湛えたフェルルートの瞳が見返す。

「私、許しませんから」

「ええ!??」

何で? と慌てるミラに、フェルルートが続ける。

「お姉ちゃんを悲しませたら、許しませんから」

それだけ言って、フェルルートは手元に視線を落とした。

「えーと、取り合えず、一応認めてくれたってことでいいの?」

「……知りませんっ」

不機嫌そうな声音で返すフェルルート。

だが、その声は昨日より少しだけ暖かくなっているような、そんな気がした。

「約束する。絶対、お姉ちゃんを悲しませないって」

「わかればいいんです。あ、それと」

思い出したように顔を上げ、

「お姉ちゃんは、私のお姉ちゃんなんですから……絶対、譲りませんからね！」

そんなことを言って、べー、と舌を出すフェルルートを見て、

(あ、意外と可愛いところもあるんだ)

とか、そんなことを思うミラなのだった。

NEXT>第十九話「決戦の最終防衛線 シェンガオレンを討て！」

<簡易キャラクター紹介>

名前：フェルルート

年齢：15

性別：女
種族：ラージャン進種
能力：【激昂】

<オリジナル武器紹介>

名前：スパインノッカー

分類：大剣／ハンマー

レア度：7

属性：なし

威力：1008 / 1092

切れ味：青 / 青

会心率：-10 / -5

強化元：ティガノアギト

強化先：なし

大剣からハンマーへの変形機構を持つ特殊な武器
二種類の攻撃で、あらゆる敵に対処する

名前：シースカバード

分類：大剣／太刀／双剣

レア度：7

属性：なし

威力：936 / 936 / 273

切れ味：青 / 白 / 青

会心率：-20 / 5 / 10

強化元：なし

強化先：なし

二種類の刃を隠し持つ鞘である剣
バランスが悪く、使い勝手に難あり

キャラクター図鑑(前書き)

第十八話で全ゲストキャラが揃いましたので、ちょっとまとめてみました。

キャラクター図鑑

MONSTER HUNTER EVOLVE
キャラクター図鑑

項目は、体力、いわゆるスタミナ膂力（身体的な力の強さ）、敏捷（身体的な素早さ）、知力（知識量や機転の良さ）、技量（攻撃の精度や多彩さ）の五つ。

E～Sまでの六段階で評価しています。

ゲームで言えば、下位クエストがD～C、上位がC～B、G級がB～A。Sはそれ以上という感じ。

あくまで設定的なものなので、あまりこだわらずに見てください。ついでに能力についても説明しています（説明が必要そうなもののみ）。

名前：ミラ（初期）

種族：不明

体力：D

膂力：C

敏捷：C

知力：E

技量：A

能力：不明

名前：ミュリエリア
種族：ランポス進種
体力：D
膂力：C
敏捷：D
知力：S
技量：C
能力：【技術】
詳細：【技術】
技術がある、と言うよりは、技術を磨くしかなかったという、実際にはないのと同じ能力。
便宜上【技術】とされている。

名前：エンダ
種族：ガルルガ進種
体力：B
膂力：B
敏捷：C
知力：C
技量：D
能力：【咆哮】
能力詳細：【咆哮】
原種に似た咆哮を上げ、聴いたものの聴覚を麻痺させ、平衡感覚を狂わせる

名前：ラキ

種族：クツク進種

体力：D

膂力：E

敏捷：D

知力：E

技量：E

能力：【超聴覚】

名前：ベルゼラ

種族：ナルガクルガ進種

体力：B

膂力：B

敏捷：A（【俊脚】でS）

知力：B

技量：B

能力：【俊脚】【判熱】【刃翼】

能力詳細：【俊脚】

脚力を強化する能力。常時発動。

【判熱】

視覚を強化し、熱量を見る能力。

高温になるほど赤く、低温ほど黒く見える。

発動時に目が赤く光る。

【刃翼】

身体的特徴。腕に【原種】同様の刃翼を持つ。

普段は腕に沿って閉じているが、戦闘時には展開する。

展開時には収納時に比べて切れ味が大幅に上がる（収納時は基本切

れない)。

名前：メイミン

種族：アイルー進種

体力：D

膂力：E

敏捷：B

知力：C

技量：C

能力：【技術】

名前：ルティエ

種族：ランゴスタ進種

体力：C

膂力：C

敏捷：B

知力：B

技量：B

能力：【フェロモン】

能力詳細：【フェロモン】

呼吸を通じて体内に入り込み、思考能力を低下させる特殊な物質を分泌する。

独特の甘い匂いを持ち、希釈したものが香水として売られたりもする他、麻酔から媚薬まで、広く薬品の原料としても使われる。

名前：ファミ

種族：アイルー進種

体力：E

膂力：E

敏捷：C

知力：B

技量：D

能力：【技術】

名前：トレナード

種族：ランゴスタ進種

体力：B

膂力：B

敏捷：C

知力：A

技量：C

能力：【フェロモン】

名前：グレイ

種族：ガノトトス進種

体力：A

膂力：B

敏捷：C

知力：D

技量：C

能力：【水中呼吸】【大地の絆・水】

能力詳細：【水中呼吸】

皮膚呼吸によつて、水中でも呼吸できる身体的特徴。

【大地の絆・水】

自分から一定の距離内の一定量の水を操る能力。

制御できる限界は個人の資質に左右される。

名前：アンゼリカ

種族：ヴォルガノス進種

体力：B

膂力：C

敏捷：C

知力：C

技量：B

能力：【耐熱】

能力詳細：粘りのある特殊な体液を皮膚から分泌し、それで体を覆うことによつて溶岩の熱にも耐える能力。

また、体毛は保護液なしでも熱に強く、決して燃えない。

名前：セレスティア

種族：リオス進種

体力：C

膂力：C

敏捷：B

知力：C

技量：B

能力：【大地の絆・火】 【飛行】

能力詳細：【大地の絆・火】

手に火球を生み出し、それを飛ばして攻撃する能力。
個人差はあるが、基本的に原種の火球には及ばない。

名前：セレストایت

種族：リオス進種

体力：B

膂力：B

敏捷：C

知力：C

技量：B

能力：【大地の絆・火】 【飛行】

名前：ルクス

種族：グラビモス進種

体力：D

膂力：C

敏捷：D

知力：B

技量：B

能力：【鎧装】 【大地の絆・熱】

能力詳細：【鎧装】

全身の皮膚を岩のように変質させ、防御力を上げる能力。
体の一部だけを【鎧装】することも可能。

【大地の絆・熱】

指先から収束した火炎を放つ能力。
基本的に原種の熱線には劣る。

名前：六花

種族：キリン進種

体力：C

膂力：C

敏捷：B

知力：S

技量：A

能力：【大地の絆・雷】 【龍化】

能力詳細：【大地の絆・雷】

狙った場所に雷を落とす能力。数や命中精度には個人差がある。

【龍化】

原種の姿に変身する能力。

名前：アウリオ

種族：ランゴスタ進種

体力：A

膂力：B

敏捷：B

知力：B

技量：B

能力：【フェロモン】

名前：レグル

種族：ゲリヨス進種

体力：C

膂力：C

敏捷：D

知力：D

技量：D

能力：【閃光】 【対衝】

能力詳細：【閃光】

額の結晶体から強烈な光を放ち、相手の目を眩ませる攻撃。

【対衝】

身体的特徴。ゴムのような皮膚が衝撃を吸収し、ダメージを軽減する。

伸びたりはしない。

名前：セアラ

種族：フルフル進種

体力：C

膂力：C

敏捷：B

知力：B

技量：B

能力：【発電】 【索敵】

能力詳細：【発電】

発電機能を持つ細胞によって発電する、身体的特徴。

【索敵】はその派生で、微弱な電流によって、自分の周囲の状況を把握する。

名前：グラキシア

種族：ウカムルバス進種

体力：D

膂力：C

敏捷：C

知力：C

技量：C

能力：【大地の絆・凍】

能力詳細：【大地の絆・凍】

熱を奪う白い霧を発生させる能力。主に、触れたものを凍結させる。

名前：石楠花

種族：クシャルダオラ進種

体力：E

膂力：E

敏捷：D

知力：D

技量：E

能力：【大地の絆・風】 【飛行】 【龍化】

能力詳細：【大地の絆・風】

周囲の空気の流れを自由に操る能力。規模や使い方は個人差がある。

名前：ダルブルグ

種族：ブロス進種ディア族

体力：A

膂力：A

敏捷：B

知力：C

技量：C

能力：【大地の絆・土】 【肩角】

詳細：【大地の絆・土】

【大地の絆・水】の土バージョン。

自分から一定の距離にある土や砂を操る能力。

【肩角】

肩に大きな角を持つ身体的特徴。

名前：ミラ（十四話）

種族：不明

体力：C

膂力：C

敏捷：C

知力：C

技量：A

能力：【変身】

詳細：【変身】

出会ったことのある人の能力をコピーする力、その種族固有の能力を得る。

髪と瞳の色がその人物と同じものになる。

名前：リーヤ

種族：ザミ変種

体力：C

膂力：B

敏捷：B

知力：C

技量：B

能力：【装殻】

能力詳細：【装殻】

腕に、盾あるいは鎌の形状の甲殻を持つ身体的特徴。

鎌は折りたたみ式。

名前：華霞

種族：オオナズチ進種

体力：D

膂力：E

敏捷：D

知力：S

技量：D

能力：【飛行】 【龍化】 【大地の絆・光】

能力詳細：【大地の絆・光】

周囲の光に干渉し、姿を消したり、幻を見せたりする能力。

個人でなく空間に対して発動するため、他人を巻き込むこともできる。

名前：柊也

種族：テスカト進種

体力：A

膂力：A

敏捷：B

知力：B

技量：B

能力：【飛行】【龍化】【大地の絆・爆】

能力詳細：【大地の絆・爆】

高熱を放つ赤い粒子を周囲に展開する。

一点に収束することで、爆発を起こすことも可能で、威力は集めた粒子の量で調整できる。

名前：茉莉

種族：テスカト進種

体力：C

膂力：C

敏捷：B

知力：C

技量：B

能力：【飛行】【龍化】【大地の絆・爆】

名前：ベガード

種族：ティガレックス進種

体力：A

膂力：A（【剛腕】でS）

敏捷：B

知力：C
技量：A

能力：【剛腕】

能力詳細：【剛腕】

臂力を強化する能力。常時発動。

名前：エルミナ

種族：アカムトルム進種

体力：B

臂力：C

敏捷：C

知力：S

技量：B

能力：【大地の絆・噴】

能力詳細：【大地の絆・噴】

大地を割り、地下から溶岩を噴出させる能力。

地質や、実際に地下に何があるかには影響されない。

名前：フェルルート

種族：ラージャン進種

体力：C

臂力：C

敏捷：B

知力：A

技量：B

能力：【激昂】

能力詳細：【激昂】

鬼人化の上位のような能力。

髪の一部が金色に変わり、電気のような金色のオーラを纏う。
特に敏捷値の上昇幅が大きい。

第十九話「決戦の最終防衛線 シェンガオレンを討て！」（前編）

何百本という数の鎖が一斉に切り離され、大地に縫い付けられていた巨体が解放される。

ギシギシと、金属が擦れ、軋む音を立てながら、柱のような四本の脚を踏ん張り、巨体が体を起こす。

直立したその姿はこの世界のあらゆる建築物の高さを凌駕し、地上からはその全貌を捉えることも難しい。

巨体に見合うだけの重量を有した体は、一步を踏み出す度に地面を揺らした。

【シェンガオレン】、そう呼ばれるモンスターである。

【シヨウゲンギザミ原種】と同じ甲殻種に分類されるが、その大きさは比べ物にならない。

縦に十匹積んだとしても、【シェンガオレン】の高さには届かないだろう。

顔からは長い髭のような二本の触覚が伸び、その背中に巨大な龍ライオンチャンロンの頭骨を背負ってる。

進行には用いられない前の二脚は鋏の形状をしており、砦蟹の称号を体現していた。

【シェンガオレン】は地響きを立てながら歩き出し、ゆっくりと、

山岳地帯へと向かって行った。

MONSTER HUNTER EVOLVE
第十九話「決戦の最終防衛線 シェンガオレンを討て！」

雲に覆われた暗い空。

黒く塗られた空のカンバスに、ポツリと一点の白があった。

その正体は、気球の気囊きのうだ。

気球は、【ガンランス】に用いられる竜撃砲の機構を改良した特殊なバーナーを用いて、風船のような気囊の内部の空気を暖めることによって空を飛ぶことのできる乗り物である。

機構は単純であり、ただ浮かぶだけの気球ならば作るのとはそれほど難しくないのでが、プロペラと呼ばれる部品を持ち、進行方向を制御できる気球は【人間】時代から残っているものだけしかなく、エイシスアルカディアにも三つしか存在しない。

この気球はその一つで、エイシスアルカディア防衛局が所有する、観測用の気球だ。

気囊の下には木で編んだ籠が取り付けられていて、二人の観測員の男が乗っていた。

「くそ、報告は本当だったか……」

双眼鏡を使って下を見下ろしながら、一人が呟く。

眼下に見えているのは、エイシスアルカディアへの進路を守る砦である止水砦だ。

いや、止水砦だったものと言うべきだろうか。

分厚い木の門は打ち砕かれて地面に転がり、石を組んで作っている基部にも大きな穴が開いている。

上空からでは点のようにしか見えないが、砦にいた兵が何とか応急処置をしようと必死に動き回っていた。

夜明け近くにエイシスアルカディアに届けられた止水砦陥落の一報。

信じたくはなかったが、崩れ去った砦を見てしまえば信じるしかないようだ。

「おい、見る！」

もう一人の観測員が、エイシスアルカディアへと続く道の先を指差す。

双眼鏡を使うまでもなかった。

高い崖に挟まれた道に、巨大な龍の頭がゆっくりと姿を現していた。

脚を折りたたんで歩いてきた【シエンガオレン】が、脚を伸ばして立ち上がったのだ。

「シエンガオレンだ……」

「ああ……」

この手の巨大なモンスターは滅多に現れるものではない。

とても同じ生き物だと思えないサイズに、二人は圧倒された。

「不味いな……もうあんなところまで」

【シエンガオレン】は既に止水砦を遠く離れ、龍牢砦に接近していた。

二つの砦とエイシスアルカディアは、山を切り拓いた同じ道の上に存在し、それほど距離は離れていない。

このまま【シエンガオレン】が侵攻を続ければ、もう僅かもしないうちに龍牢砦に到達するだろう。

もしも龍牢砦が突破されるようなことがあれば、早ければ今日の午後にもエイシスアルカディアに辿り着いてしまう。

止水砦陥落の報は、未確認情報としてまだ伏せられているため、エイシスアルカディアでは今も普段通りの生活が営まれているだろう。

そんなところに【シエンガオレン】が辿り着いたらと想像するのは、考えるだけでも恐ろしい。

「急いで施政院に報告して、龍牢砦に援軍を送ってもらおう」

「そうだな」

籠に取り付けられた機材を操作すると、プロペラが回転して推力を生み出し、気球を押し始める。

「もっと寄せてくれ」

「了解」

帰還しながらも、情報を集めるために【シエンガオレン】に接近する。

二人を乗せた籠を揺らしながら、気球が【シエンガオレン】に接近していく。

「ん？ あのシエンガオレン、何かおかしくないか？」

「……おかしいな」

遠目にはわからなかったが、接近してみるとその【シエンガオレン】の姿に違和感を感じる。

もっと近くで、とさらに接近しようとした、そのとき

「うわっ」

「な、何だ!？」

気球がぐらりと揺れ、急に、気球の高度が下がり始めた。

「気囊が……!」

見ると、気囊に大きな穴が開き、そこから暖めた空気が漏れ出してしまっていた。

「何で、急に!」

「わ、わからない!」

慌ててバーナーを操作するが、空気の漏れ出す速度にはまるで対抗できない。

気球はぐんぐんと高度を下げ、自由落下とほとんど変わらない勢いで地面へと墜ちていった。

『隕石鋼の加工自体は難しいことではなく、熱することで軟化させ、叩き伸ばし、削り、磨くことで形を作った。素材が持つ常識離

れた特性からすれば、形に意味はないかもしれないのだが、私の職人としてのこだわりだ。

苦労したのは隕石から金属分だけを取り出し、隕石鋼を製錬する作業だ。金属を融解させることで取り出そうとしたが、融点まで温度を上げることができず、作業は難航した。

後に大学で測定された値によれば、融解には約二千五百度を必要としたとのことだ。これは鉄の融点より約千度も高く、通常の燃料を燃やしても得られる温度ではなかった』

「お姉ちゃん」

「ん?」

フェルルートの工房の作業場で、ノートを呼んでいたミュリエリアは、呼びかけられてノートから目を上げた。

このノートは、トルスナーダの日記のようなもので、彼の思いついたアイデアや作った武器についての記述が残されている。

「どうしたの、フェル」

隣に立っているフェルルートを見上げてミュリエリアが聞くと、

「この使い方について、教えてもらえませんか?」

フェルルートは、腕に抱えていた四角い金属の塊をゴロゴロと作業台の上に置いた。

白、黒、青、紫、緑、黄色等、様々な色の塊がある。

「イルミネイトライトの？」

不思議そうに、ミュリエリアが聞く。

フェルルートは「はい」と頷き、

「まだ、特殊な武器を売り物にする気にはなれませんが……でも、
少しずつ……これくらいなら、使ってみようかなって思ったんです」

「……そう」

ミュリエリアは嬉しそうに笑みを浮かべる。

ミュリエリアに過去の真実を、ミュリエリアの想いを聞いたフェルルートは、彼女なりにその過去と向き合い、先に進むうとしているのだ。

「わかったわ。私に教えられることなら、全部教えてあげるわ」

「ありがとうございます、お姉ちゃん」

ぺこりと頭を下げるフェルルートに、「いいのよ。私も嬉しいわ」と返し、ミュリエリアは説明を始める。

「イルミネイトライト鋼は強度が低いから、普通は合金にして使うのだけれど、何と混ぜるかによって配合比率に注意する必要があるの。それから」

手元の金属塊を示しながらすらすらと流れる言葉をフェルルートは頷きながら聞く。

熱が入ってきたのか、身を乗り出して話に聞き入っている。

ミュリエリアの肩越しにフェルルートが手元を見る形で、二人の体が密着する。

そんな姿を見て、

「……くっつきすぎだと思っなー」

店の方から顔を出したミラが、頬を膨らませて言う。

ミラとフェルルートが戦った日から今日でもう三日。

この三日間、ミラは非常に不満な日々を過ごしていた。

その理由は簡単。フェルルートにミュリエリアを取られているからだ。

別にミュリエリアにはそんなつもりはないだろうが、二人が専門的な話を始めるとミラはとてついでいけず、微妙な疎外感を覚えてしまう。

フェルルートはというと、おそらくそれをわかった上で、あれこれと鍛冶の話題を振ってはミュリエリアと盛り上がっていた。

今朝のこの話題も、その一環ではないだろうかと訝しんでしまうミラである。

「お姉ちゃん、それ何なの？」

作業台に近づきながら、ミラが聞く。

「これはイルミネイトライト鋼よ。強く色を出す特性のある金属で、武器や防具に色をつけるのに使われるの」

イルミネイトライト鋼は、別名を金属絵の具と呼ばれ、金属の素材に混ぜ込むことで色をつけることができる。

さらに、練気に触れると特殊な反応を起こし、通常赤色に視覚化される練気の色を変えてしまうという働きも持っている。

炎に特定の金属粉を入れると炎の色が変わる炎色反応という現象があるが、それと似たようなものだ。

見た目以外に何ら変わることはないが、個人の好みに合わせたり、この街ではイベントや舞台劇の小道具としてもよく使われている。

「ミラは、どの色が好き？」

ミュリエリアがイルミネイト鋼を並べて聞く。

「うーん……白かな？」

ミラは少し考えてそう答えた。

自分の髪の色や鎧の色。

よく身に着けている色だからか、何となく愛着がある色だった。

「そうね。ミラは、そんなイメージね」

「うん」

ミュリエリアが同意してくれて、嬉しそうに頷く。

と、「お姉ちゃん」とフェルルートが話に割り込んでくる。

「早く続きを教えてください」

「え？ ああ、そうね」

ミュリエリアは頷くと、フェルルートへの説明に戻ってしまった。

「うー……」

ミラは不満そうに唸り、「散歩に行つてきますっ」と言い残して作業場を出て行った。

……

フェルルートの工房を出たミラは、アミューズメントエリアを訪れていた。

暇なときにもう何度も訪れた場所ではあるが、観光客向けのエリアだけあって、足を運ぶ度に新しい発見がある。

大勢の人が行き来する大通りの賑わいは、気分転換には最適だった。

並んでいる店を覗きながら道を歩いていると、

「あっ」

一軒の店先で、そんな驚いたような声が聞こえた。

ミラがその方向に目を向けると、店の扉を出たところに青髪の少女が立っている。

びっくりした、とばかりに口元に当てられた左手の薬指に、花の飾られた指輪が光っていた。

さらに、その後ろから、赤い髪の青年が扉から出てくる。

「茉莉さん、柊也さんも」

そこに立っていたのは、【テスカト進種】の恋人　晴れて婚約者になった茉莉と柊也だった。

「やっぱりミラちゃんなの」

「ミラ？　意外なところで会うな」

「お二人とも、お久しぶりです」

二人に駆け寄り、挨拶を交わす。

「ミラちゃん、久しぶりなの。ミラちゃんも旅行に来たの？」

「はい、お姉ちゃんと。茉莉さんも旅行なんですか？」

「旅行って言うか、えっとね、色々と下見に来たの」

「下見って、何のです?」

「そうなの。そのね、茉莉たちの結婚式の下見なの。えへへ」

照れくさそうに頬を染めて、けれど嬉しそうに笑う。

見ているだけで嬉しさが伝わるような、幸せそうな笑顔だった。

「結婚式ですか。素敵ですね」

「もう、しゅー君がどうしてもって言うからね、わざわざここまで来たの」

「柊也さんが?」

意外な思いで柊也の顔を窺うと、柊也は微妙な顔で「いや、俺ではないが……」と呟く。

柊也にばらされてしまった茉莉は、そっぽを向きながら、

「本当は茉莉が言ったのっ。だって、女の子だったらエイシスアルカディアの結婚式に憧れるものなんだから!」

「あ、それはわかります」

ミラが深々と頷く。

普通、結婚の儀式と言えば、互いの親や親戚が集まって宴会をする程度だ。

豪華なドレスに身を包み愛を誓うという結婚式は、子供から大人まで、年齢問わず女性の憧れだ。

一般常識に含まれない世情や流行に疎いミラでも当たり前のように知っていることだった。

「茉莉。時間が無い、そろそろ行く」

「もうそんな時間なの？ もー、何でこんなに余裕のない予定を組んだの？」

「俺ではない。茉莉がこの店で服選びに時間をかけ過ぎただけだ」

「う……そうだったの」

茉莉がしゅんとなる。

「私はいいですから、行ってください」

「ミラちゃん、ごめんなの」

「そうがっかりするな、茉莉。下見が終わったらまた会えばいいだろ」

「そうですよ。私は今、アーナのフェルちゃん フェルルートさんって人のお店にいますから」

ミラとミユリエリアは、二日目から宿ではなく、フェルルートの家に泊まっていた。

それを教えると、茉莉が「わかったの」と頷く。

「ミラちゃんがどうしても言って言うなら会いに行つてあげるの」

と、言いながら、なぜか不安そうにミラの顔を窺う。

「じゃあ、どうしてもです」

ミラがそう言うと、茉莉は嬉しそうに笑い、

「よかった、どうしてもって言うてくれなかったらどうしようって思ったの」

相変わらず、本音が漏れまくりだった。

「はい、待ってますね」

「うん。またね、なの」

「では、また会おう」

再会の約束をして、歩いていく二人を見送る。

そして振り返る、と

「こんにちは」

笑顔の女の子がミラの顔を覗き込んでいた。

「どうやら、ミラが茉莉たちと話している間から、ミラの背後に立っていたらしい。」

「うわひゃあっ」

珍妙な悲鳴を上げて仰け反るミラ。

「あははっ。やっぱりミラちゃんだ。でも、そんなに驚かないで欲しいな」

「ら、ラキアちゃん！？ うー、びっくりしたあ」

ミラの後ろに立ってにこにこしていたのは【ウカムルバス進種】の少女、グラキシアだった。

片手には食材の入った買い物籠。もう片方には【クシャルダオラ進種】の少女、石楠花を連れて手を繋いでいる。

「こんにちは、ミラお姉ちゃん」

石楠花がぺこりと頭を下げる。

背中には、風の【ハイエンシメント進古龍種】を象徴する翼。

最後に見たときよりも、少し成長しているように見えた。

「こんにちは、石楠花ちゃん。久しぶりだね」

この二人と会うのは、石楠花の脱皮のときの騒動の後で別れて来た。

「ラキアちゃんも、久しぶり」

「そうだねー。元気だった？」

「うん。元気にしてるよ」

「そっか。それは良かったよ」

「ミラお姉ちゃん、ミュリエリアお姉ちゃんは一緒じゃないの？」

石楠花が不思議そうに聞く。

「一緒に街には来てるけど、今は別行動だよ」

「あ、やっぱり」

と、グラキシア。

ミラは「やっぱり？」と首を捻る。

「ほら、ミラちゃんとミュリエリアちゃんって、一緒に行動してる気がするし」

「うん、私もそう思ったから」

グラキシア姉妹が揃ってそんなことを言う。

「私だつてお姉ちゃんと別行動してることはあるよ。つて言うつか、ラキアちゃんたちと会ったときも別々に行動してたのに」

「あ、確かに。でも、そういうイメージがあるんじゃないかな」

「うーん、そう言われると、確かにそうかも」

ミラが一人でどこかに出かけるときは大抵ミュリエリアの仕事の関係だし、遊びに行くときはほとんど二人一緒だ。

グラキシアとの付き合いは短いから、彼女は本当にイメージで言っているのだが、言われてみるとその通りかもしれない。

ミラの生活は、ミュリエリアの生活とセットと言っても過言ではなかった。

だが、それは決して嫌なことではなかった。

一緒に住んでいれば、その生活リズムは当然互いに影響を受ける。

そういう関わりが、家族のように暮らしているのだと思えて、ミラは嬉しいと思った。

「ミラお姉ちゃん、どうしたの？」

「え？」

「何だか、嬉しそうだったから」

「うん、ちょっと、いいことを思い出したから」

「そうなんだ」

と、石楠花が頷いたとき、

ゴーン、と、そろそろ聞き慣れてきた鐘の音が響き渡った。

その音が響くとすぐに、通りを歩きかう人の数がどっと増える。

この街に来たときにも聞いた、お昼を示す鐘だ。

「あ、おひる昼点鐘が鳴ってる！」

「お姉ちゃん、早く帰らないと、怒られるよ？」

「そ、そうだね」

鐘の音を聞いた二人が慌て始める。

「ごめんねミラちゃん、私たち、お昼ご飯の買い物途中だったの」

「あ、それじゃあ早く帰らないと」

「うん、ごめんね。行く、シャクナちゃん」

グラキシアが石楠花の手を引いて、早足で歩き出す。

その途中で首だけ振り向き、

「ミラちゃん！ 私たち、今実家にいるから、暇だったらミュリエリアちゃんと遊びに来て欲しいな。」

このエリアの『陽だまりの家』って名前の建物がそうだからね」

「待ってるから」

「うん、お姉ちゃんと一緒に行くから。じゃあねー」

「バイバーイ」

二人と手を振って別れる。

一人になったミラは、

(ラキアちゃんと石楠花ちゃん、それに、茉莉さんと柊也さんも…
…いいなあ)

人波に紛れて歩いていく背中を見ながらそう思う。

仲のいい二人組みに連続で会ったせいで、何だか妙に寂しくなっていた。

最近、フェルルートにミュリエリアを取られているのも原因の一つかもしれない。

(私もお姉ちゃんのところに戻る……)

街はほとんど見て回れなかったが、どうせ今日明日に帰るわけでもないのだ。

ミラは一度工房に帰ることにして、アミューズメントエリアからアリーナエリアへと向かった。

その頃、ミユリエリアはアカデミアエリアのとある大学を訪れていた。

エイシスアルカディア第一大学。

最初に建設された最も歴史のある大学で、エイシスアルカディアの中でも最も優れた大学である。

他の大学は申し込めば誰でも講義を受けられるのだが、ここだけは入学試験が存在する。

試験資格が他の大学で卒業していることであり、学ぶ場所というよりは研究機関としての色が濃い場所だ。

受付にいた係員について廊下を歩いて、一つの部屋まで案内される。

「こちらです」

「ありがとうございます」

案内という役目を終えた係員は、廊下を戻っていく。

ミュリエリアが部屋の扉を叩くと、中から「どうぞ」と声が返ってくる。

ミュリエリアは目の前の取っ手を握り、扉を押し開いた。

扉の向こうには、一辺が約二十メートルの正方形の部屋が広がっている。

この部屋のドーム型の天井は、自由に開いたり閉じたりできるように作られているが、今は閉じられていた。

部屋の床は、部屋の一辺より少し短い程度の直径の円形にくり貫かれていて、大量の平面鏡がぎっしりと敷き詰めてある。

円の中心の中空には一枚の凹面鏡が下向きに配置され、その下に物を置くための台があった。

円形にくり貫かれた縁の部分だけが移動できる場所で、そこに白衣を着た一人の女性が立っている。

「来たわね。ミュリエリアさん」

「華霞さん。今日はお世話になります」

考古学部の研究員である【オオナズチ進種】の女性、華霞にミュリエリアが頭を下げる。

「ええ、こちらこそ。ま、中に入って」

「はい」

ミュリエリアは部屋に入って扉を閉め、華霞の隣に並ぶ。

「では、これが？」

鏡を見下ろしながら、ミュリエリアが尋ねる。

「そうよ。これが、考古学部の誇る太陽炉」

太陽炉。

文字通り、太陽の光を利用する炉である。

原理は至って簡単で、太陽光をレンズや凹面鏡を使って集光し、一点に集中するだけだ。

この部屋にある炉は、天井を開いて太陽光を取り込み、床の平面鏡で反射した光を空中にある鏡に集め、空中にある鏡の焦点に置いたものを熱するという仕組みだ。

床の鏡は床下から動かすことが可能で、太陽がどこにあっても光を集められるようになっていた。

ミュリエリアは、隕石鋼の製錬に必要な高温を得るために、トルスナーダと同じ方法を使うことにした。

それが、この太陽炉だ。

大学内にいる華霞にダメ元で頼んでみたところ、あっさり引き受けてくれた上に使用許可もあっさり下りた。

もしかして華霞は結構偉い人なのかもしれない、とミュリエリアは思う。

「焦点の温度は約三千度。これで溶かせない物には、進種わたしたちの技術では手が出ないってこと」

「三千度ですか……。知ってはいましたけれど、改めて聞くと恐ろしい温度ですね」

「そうね。とは言っても、今日の天気じゃ炭を燃やした方が熱くなるでしょうけど」

「曇っていますからね……」

天気のように、ミュリエリアが顔を曇らせる。

最高で三千度という高温を得られる装置でも、太陽光が雲に遮られていてはどうしようもない。

「ま、気長に待ちましょ。あ、クッキー食べる？」

「……頂きます」

暢気に言って白衣のポケットから取り出した包みに、ミュリエリアは手を伸ばした。

「うーん、何を食べようかなあ」

そんな台詞を呟きながら、ミラはアミューズメントエリアを歩いていた。

一度工房まで戻ったものの、ミュリエリア出かけてしまっていて、フェルルートはもう昼食を済ませたと言うので、ミラはどこかで昼食を取ろうと再度アミューズメントエリアに来ていた。

「あれ、あの人……」

食事をする店を探していたミラは、またしても知人を発見した。

今日はよく知り合いに会う日である。

「ベガードさん！」

名前を呼んで駆け寄っていくと、ミラの声を聞きつけた鎧武者が振り返る。

「こんにちは、ベガードさん。先日は、お世話になりました」

「いや、良い戦いを見せてもらった。こちらが礼を申したいほどだ」

「あはは……ありがとうございます」

ミラは苦笑を浮かべる。

ベガードの戦いにかける想いは、ミラにはちょっと理解し難かつ

た。

「ベガードさんは、お一人ですか？」

「うむ、一人だが？」

「そうですか」

つい確認してほっとするミラ。

ベガードはその様子を見て不思議そうな顔をする。

「どうかしたのか？」

「あ、いえいえ、何でもありません。ところで、ベガードさんは何をしていたんですか？」

一人ぼっちの仲間を見つけてほっとしたとは言えずに、適当に誤魔化す。

「某は、再演闘技場という物の噂を聞いて探していたのだ」

「再演闘技場？」

「聞くところによると、再演装置リプレイヤという装置を使って、モンスターと戦える闘技場なのだ。何とも面妖な話ではないか」

「再演装置ですか……」

星祭りで戦った【ミオガルナ】の正体だった、【人間】の遺産で

ある。

確かに、あれなら命の危険も無いし、アトラクション的な使い方から戦いの練習まで、広く使える。

商売のネタとしても面白いだろう。

【進種】特有の行動には対応できないが、わかっているれば注意をするなどして対応はできる。

それにしても、再演装置をそんなところに使えるとは、流石エイシスアルカディアだ。

「だが、その闘技場はもうやっていなくなてな。とんだ無駄足だった」

「辞めてしまったてんですか」

「うむ、思ったより客が入らずに経営が苦しくなったそうだ」

予想外に切実な理由だった。

「私は、面白そうだと思いますけど」

「物珍しさも手伝って客の入りは上々だったのだが、それは最初だけなのだそうだ」

「どうしてですか？」

「それが、面白くないからという理由なのだ」

「……はい？」

思ってもみない理由に、ミラが胡乱そうな声を上げる。

「面白くないって、何ですか、それ」

「モンスターが強過ぎたらしい。何度戦っても負けるだけの戦いで面白くないからと、客足は遠のき寂れていったのだそうだ」

「ああ、なるほど……」

そう言われると、わからない話でもない。

何度挑んでも失敗する挑戦。

しかも、特に達成しなければならぬ理由もない上、商売となればお金も必要になる。

それで、続けるか止めるかと問われれば、止める方を選ぶ人は多いだろう。

「全く、情弱な奴らよ」

ミラは何となく止めた人の心境も理解できるのだが、ベガードは不満のようだ。

「まあまあ、みんながベガードさんみたいに強いわけじゃないですから仕方ないですよ」

ミラは、不満そうなベガードを宥め、「ところで」と話題を変え

た。

「ベガードさんはもうお昼ご飯は食べたんですか？」

「いや、まだだが」

「私もまだなんです、一緒に食べませんか？」

「うむ、某でよければ一緒に一緒しよう」

「よかったつ。それじゃ、行きましょう」

「うむ」

そういうことになり、二人は一緒に大通りを歩き始めた。

中央施政塔。

エイシスアルカディアの中心に聳え、立法行政機関である施政院が拠点とする塔である。

下層部には様々な役割を持つ沢山の部屋が入っていて、上層部は長い螺旋階段の後に巨大な鐘のある鐘楼へと続いている。

壁に張り付いて伸びる螺旋階段部の中央には、大量の滑車が設置されていた。

中央施政塔中層部。

鐘楼を除くと塔の最も高い部分であるこの場所には、最高議場と呼ばれる会議室がある。

下層から上がって来た法案その他、あらゆる最終決定はこの場所で行われる会議によって採決される。

今も、長老　老若男女関係なく、施政院の役員から選出された代表者の称号　や各大学の代表者たちが議論を行っていた。

「えー、次の議題ですが、止水砦が落とされたという未確認情報について。防衛局長老、どうなっておりますか？」

「その件に関しましては、現在調査中でございます。最初の調査班の帰還が遅れておりますので、今第二陣が調査に向かっておりまして……」

「遅れてるといふことは、何かがあったということではないのか？
今もって調査中とは、何と悠長な!」

「治安局長老、発言には拳手を願います」

「しかし、第二陣の出発が遅れたのは第一大学が気球の貸し出しを渋ったせいです……」

「む……何も気球を使わなくとも、調査の方法はあるだろう」

「そうは言われますが、防衛局の職員は基本文官ですから。治安局

から人員を出していただけたなら」

などと紛糾する会議を、眺めながら、

「相も変わらず、踊る議会だな」

白衣の胸ポケットに、第一大学考古学部人間医学学科第二研究室長という長い肩書きの名札をつけた女性が呆れ顔で呟く。

『会議は踊る、されど進まず』。

【人間】の言葉だ。こんな言葉がさらっと出てくるあたり、流石は考古学部の代表者の一人である。

「華霞がお前に押し付けて会議をパスする理由がよくわかる」

「だが、だからってサボってもいい理由にはならないぞ、うん。六花先輩はちゃんと出てきてるのに、華霞先輩は……」

と、その隣の女性が返事をする。

こちらの名札は、第一大学考古学部人間技術学科第一研究室長、の後に手描きで代理とついている。

【キリン進種】の医者である六花と【アカムトルム進種】の地図職人であるエルミナである。

「ふ、そう言ってやるな。私もお前もよく街を空けているんだ。いるときくらいは会議に出てもいいだろう」

「ボクは六花先輩ほど留守にはしていないぞ……」

「ああ、そうだったな」

そう六花が答えた、そのとき

ガシャンツと、大きな音を立てて窓にはまっていたステンドグラスを砕いて、何者かが飛び込んでくる。

最高議場が騒然となり、扉の外から警備兵が駆け込んでくる。

闖入者は、【リオス進種】の男性だった。

男は、向けられた武器を気にも留めずに「緊急事態です！」と叫ぶ。

そして、彼の持ち込んだ知らせは、施政塔を揺るがせた。

すなわち 龍牢砦陥落の一報である。

アミューズメントエリアのとあるレストラン。

白いテーブルクロスのかかったテーブルを挟んで、ミラとベガードが座っていた。

二人の目の前の皿には、ハンバーグという料理が載っている。

この店は、【人間】時代の料理を復刻して提供している店なのである。

普通、肉料理といえば、切って焼いたり煮たりしたものだ。

一度挽肉にして、それを成形して焼くというこの料理は、【進種】の発想にはない。

「フェルちゃんはその手この手でお姉ちゃんにべったりだし、難しい話だと私はわからないのに……」

ハンバーグを食べながら、ミラはベガードに愚痴を溢していた。

別に最初から愚痴を言っていたわけではなく、ベガードが、戦いの後フェルルートとどうなっているのかと聞いたのが原因だ。

最初は普通に報告していたのだが、いつの間にか愚痴になってしまっていた。

肉の脂で口が滑らかになるというわけでもないが、割と長々と愚痴が続く。

要は、それだけ不満が溜まっていたのだ。

「はあ、お姉ちゃんもフェルちゃんと話してる方が楽しいのかなあ……」

「それは仕方のないことかもしれんな。同門の輩ともがひとあれば、余人には知りえぬ絆もあるのだな」

「……………ですよねえ」

暗い顔でそう言っつて、がっくりと、ミラが肩を落とす。

「あいや、だからと言っつてミラ殿が劣っているわけでは……………」

予想以上に落ち込んでいる姿を見て、ベガードは慌てるが、中々気の利いた言葉はでてこない。

武一辺倒の人物であり、女の子を励ますというスキルは持ち合わせていなかった。

「む、むむ……………では、何か贈り物をするというのはどうだろうか」

困り果てたベガードは思いつきでそんなことを口にする。

「贈り物ですか？」

「物でと言っつてしまえば聞こえが悪いが、心のこもった贈り物をされて喜ばない者はいない。それが新しい絆ともなるう」

「うーん、そうかもしれないですね……………あ！」

あることを思い出して、ミラは声を上げた。

「そう言えば、もうすぐお姉ちゃんの誕生日だ」

ベガードが「誕生日？」と不思議そうな声を出すが、ミラは思考に沈んでいてもう聞こえていない。

誕生日とは、文字通り生まれた日のことだ。

一般には一歳年を取る以上の意味を持たない日だが、一部の地域では親しい相手の誕生日を祝うという習慣が残っている。

【リオス進種】の双子の誕生日を一緒に祝ったのは、まだ記憶に新しかった。

そのとき、ミラとミュリエリアは誕生日を祝おうという約束をしていたのだった。

「うー、何で忘れてたんだろ、すっかりしてたよ……」

後で聞いたミュリエリアの誕生日は知識データの月の第四日。

もう、十日後にまで迫っていた。

逆に言えば、十日後まではプレゼントは贈れないのだが、そんなことは気にならなかった。

フェルルートに張り合うよりも、ミュリエリアの誕生日を祝うことの方が大切だからだ。

「ベガードさん、ありがとうございました。私はこれで失礼します
」！

ミラが慌しく立ち上がりながら言う、が。

「ミラ殿、そう焦らずとも、食事くらいはすませてからでも良いの

ではないか？」

「あ……」

皿の上にはまだ半分近く料理が残っている。気が急いでしまって頭から抜けてしまっていた。

ミラは、恥ずかしそうに席に座り直し、ナイフとフォークを手に取った。

第一大学、太陽炉実験室。

ミュリエリアと華霞は、まだこの部屋で太陽が顔を出すのを待っていた。

「どうにも晴れないわねえ」

部屋の小窓から外の様子を見て華霞が言う。

「すみません、長々と付き合っていたいで。お仕事の方は大丈夫ですか？」

「いいのよ、優秀な後輩がいるから。こっちにいるおかげで、あの面倒な会議に顔を出さずにすんだし……」

「はい？」

「あ、こっちの話よ」

と、華霞が言ったとき、

「華霞先輩っ！」

そんな声と共に勢い良く扉が開き、エルミナが飛び込んでくる。

「エルミナ？　ちゃんと確認しなさい。実験中だったらどうするのよ」

危ないのよ、と言う華霞に、エルミナは「それどころじゃないんだぞ！」と叫ぶ。

さらに、開いた扉から六花が顔を覗かせ、

「華霞、施政塔から要請が来ている。緊急事態だ」

「六花まで……一体何があったの？」

「龍牢砦が落ちて、シエンガオレンが接近中だ。もうすぐ第一種警報が発令されるだろう」

「何ですって！？　わかった、すぐ行く」

華霞は表情を引き締めて答え、

「ごめんなさい、ミュリエリアさん。そう言うことだから」

「はい、わかっています」

シエンガオレンが接近している状況で、太陽を待っている場合ではないだろう。

太陽炉を使うのは諦めるしかない、とミュリエリアは思ったのだが、華霞はさらに意外なことを言う。

「ミュリエリアさん。あなたの力、私たちに貸してもらえないかしら？」

ベガードと別れ、ミラはアミューズメントエリアの大通りを歩いていた。

探しているのは、当然ミュリエリアに贈るプレゼントだ。

（何がいいのかなあ……）

店先を覗きながら頭を悩ませる。

相手がミュリエリアだと、贈るものが難しい。

普段から特に着飾っているわけでもないし、身に着けている装飾品といえばリボンくらいだ。

だからこそ装飾品を贈るという手もあるが、ミュリエリアの場合、

市販の物に負けないレベルの物を自作してしまう。

柊也の注文で作った指輪を見れば、それは間違いない。

ある意味、仕事に使うような実用品を贈った方が喜ばれそうな気がするのだが、それはそれであまりに味気なかった。

と、そのとき。

歩いているミラは目ではなく、耳に、飛び込んでくるものがあった。

旋律。

金属を叩くような音でありながら、決して耳障りではなく、むしろ柔らかい印象の音が連なり、旋律を奏でている。

ミラは、その場に立ち止まって耳を澄ませる。

どつやらその音は、メインストリートから離れた路地から聞こえてきているようだ。

ミラは、その音に導かれるように、路地へと足を進める。

音の出所は、路地裏にある一軒の建物で、古ぼけた看板が出されているところからすると、一応店であるらしい。

ミラが店の前に立ったとき、もう音は止んでいた。

ミラは、その店の扉を開き、中に入った。

店の中は薄暗く、店内のあちこちにオイルランプが設置されている。

ぼんやりとした灯火に照らされた店内には、大量の人形が飾られていて、少し不気味な世界を作り出していた。

「いらっしやい」

「うわあ！」

突然、しゃがれこえ 嘎れ声をかけられ、ミラが飛び上がる。

声のした方に目を向けると、そこには椅子があり、一人の老婆が座っていた。

レースがふんだんにあしらわれたドレスを着ていて、少し大きめの人形のようにだった。

人形と違うのは、若い姿で時を止めていないということだろうか。

「お、お邪魔してます……」

「この店にお嬢ちゃんみたいなお客さんは珍しいねえ。何を探してるんだい？」

「えーと、表通りを歩いていたら、綺麗な音が聞こえたから、それを探して……」

「ああ、それはこれだねえ」

老婆は皺だらけの手を伸ばし、近くの机に置いてあった箱を手に取りった。

箱は両手に収まるくらいの金属製で、金や銀、宝石で豪華に彩られている。

老婆はドレスの首元に手を突っ込み、チェーンに吊ってある鍵を取り出した。

鍵を箱の側面に空いている小さな穴に差し込み、回転させる。

鍵は何周も回り、キリキリと音を立てる。

どうやら、鍵の形をしているが、ぜんまいを巻くための道具のようだ。

巻き終わった鍵を取り出し、箱のふたを開く。

すると、さっきと同じ音が、小箱から鳴り始めた。

「あ、これです、これ！」

「そうかい。これはね、オルガニートと言う楽器だよ」

オルガニートと言うのは、一種の自動演奏装置だ。

特徴的なのは、厚紙に穴を抜いた楽譜を演奏するという機能だろ
う。

内部にはコームと言う櫛くの形をした金属のパーツがあり、その歯の一つ一つが違う音を出す。

歯を叩いて音を出すのは、スターホイールと呼ばれる部品で、九十度毎に爪の飛び出した円盤の形をしている。

ぜんまいの力で回るローラーが楽譜を一方へ流し、穴が開いているところにスターホイールの爪が引っかかって回転し、引っかかった爪の次の爪がコームを弾き、音を出すのである。

ちなみに、ぜんまいではなく手回し式の物も存在する、と言うか、そちらの方が一般的だ。

老婆の持ち出したこのオルガニートは、ぜんまいを巻いておいて、ふたを開けると演奏を始める仕組みになっている。

演奏のための部分は箱の上部だけで、下部は長い紙の楽譜を収納するためのスペースになっていた。

紙に穴を開けるだけで曲を作ることが可能で、特に専門的知識が無くても曲を作ることができる。

「そのオルガニートって、売り物なんですか？」

「これは飾り用の特注品さ。売り物はそっちの棚だよ」

老婆の指差した棚を見ると、そこには無地の木箱が置かれている。

「見た目は地味だけどね、中身は全く同じだよ。自分だけの飾りを

作るといい」

「自分だけの……」

その言葉に、ミラは強く惹かれた。

作るのは飾りだけでなく、曲もだ。

自分だけの曲を作り上げて贈るというのは、いいアイデアだと思う。

「幾らですか？」

ミラはオルガニートをプレゼントにすることを決めて、そう聞いた。

……

オルガニートを購入した後、老婆に簡単な作り方の説明を受け、ミラは店を後にした。

大通りに出ると、何だか妙に騒がしい。

何か決まった時間でもないのに、鐘楼の鐘が何度も何度も鳴らされ、人々が慌しく走り回っている。

道行く人々が「大変だ」「大変だ」と言っているのが聞こえてくるが、何が大変なのかはよくわからない。

不思議に思いながら道を歩いていると、道端に沢山の人が集まっ

ているのに遭遇した。

（どうしたんだろ？）

ミラが近づいていくと、人が集まっているのは、街の掲示板のようだった。

街で行われる行事の予定や仕事の依頼を張ったりして利用されるものだ。

一体何が書かれているのかと、ミラは人並みをかき分けながら掲示板を見る。

「密林近くの村が一夜にして壊滅し生存者はゼロ。その日村の近くにいた者たちに聞き込みをしたが、目撃例さえ得られなかった。

一夜にして全滅、さらに全く目撃例がないという事実は、以前から続く謎の襲撃と共通しており、防衛局は調査に向かうと共に注意を促して」

と、ミラが読んでいると、隣に立っていた男性が「そっちじゃない、その隣の張り紙だ」と言った。

ミラは、隣に目を移して、その張り紙を読む。

赤い字で「第一種警報」と頭に書かれている紙は、それだけで不吉な感じがする。

その紙には、こんなことが書かれていた。

『第一種警報。』

シエンガオレンがエイシスアルカディアに向かって侵攻中。住民の皆様は、所定の避難場所へ速やかに避難して下さい。

旅行者の方は、宿泊施設あるいはアカデミアエリアの大学を提
供いたします。

外部への避難も可能ですが、侵攻方向であるアミューズメント
方面の門は閉鎖されています。

また、他の門についても、最接近の際には閉鎖されますので外
部へ避難される方はなるべく急いで下さい。

なお、我々はエイシスアルカディア防衛のため、有志を募って
おります。

協力していただける方は、中央施政塔に集合して下さい

エイシスアルカディア施政院 発

第十九話「決戦の最終防衛線 シェンガオレンを討て！」（後編）

アミューズメントエリア。

シェンガオレンの接近方向であるこのエリアの門の近くで、防衛戦の準備が着々と進められていた。

野戦の準備はもちろん、街を覆う円形の壁の上でも準備が行われている。

壁と言っても規模が規模だ。

五人くらいなら並んで歩けるくらいの幅があり、大砲や巨大な弩バリスタのような武装は壁に埋め込まれているため、壁の内部にも行き来できる。

壁そのものがちょっとした砦と言ってよかった。

その壁の上にいるのは、主に指揮を担当する者たちだ。

と言っても、最高責任者や総指揮官という地位の長老方は施政塔地下の避難施設に隠れているので、ここにいるのは現場指揮官
中間管理職とでもいう位置づけのメンバーだった。

簡易的な司令部には、現状における総指揮官として、華霞。

副官にエルミナが付き、補佐としてミュリエリアが参加する。

そのミュリエリアの補佐と言ってついて来たフェルルートの姿も

ある。

壁の中に視点を移すと、そこには大砲などの防衛装置を運用する人員として、主に考古学部の学生や研究員が動員されている。

これは、直接戦闘ができる人員を野戦に回したからだ。

街の避難誘導や火事場泥棒対策にも治安局の兵が回されていて、人手はいくらあっても足りなかった。

華霞を知っている人が多く、装置の扱いに慣れているというメリツトもある。

門の近くには撃龍槍 壁から勢いよく突き出してモンスターに攻撃する巨大な兵器 もあるが、できればその射程内に入る前に倒してしまいたい。

上空には【テオ・テスカトル】や【クシャルダオラ】、青い体に王冠のような角を持つ【ナナ・テスカトリ】と言った古龍が飛んでいて少しぎよっとするのだが、【原種】ではなく【龍化】した【進^{ハイ}古龍種^{エンシェント}】だ。

人型よりもそちらの姿の方がダメージ効率がいいのだ。

内わけは【テオ・テスカトル】三体【ナナ・テスカトリ】四体【クシャルダオラ】が一体。

合計で十体にもならず、やはり種として少数なのだと思わせる光景である。

【オオナズチ進種】もいるが、【オオナズチ進種】は【龍化】しても強力な攻撃を得ることが無いので人の姿のままだ。

そして、門の外には、本命とも言つべきエイシスアルカディアの常備軍である治安局の兵と有志の協力者による野戦部隊。

総勢で三百人というところだが、直接戦闘に関わるのはその半分程度だ。

と言つのも、【狩猟笛】を吹き続けて強化をかけるための兵や、医療班も含まれているからである。

【ボウガン】と【弓】を使う【ガンナー】を除くとさらに少なくなるのだが、攻撃する人数が多すぎてもかえって邪魔になることを考えると、ちょうどいい数と言えるだろう。

その部隊の中に、ミラ、ベガード、グラキシア、石楠花、六花の姿があった。

戦いとなればベガードは出てくるだろうと予想ができたが、グラキシアが参戦しているのは少々意外だった。

本人曰く、「私が妹たちを守つてあげないとね」とのことだ。

石楠花はそんなグラキシアを心配してついて来ている。

【ハイエンシメント進古龍種】とは言え、まだ幼い石楠花を戦いに出すのは躊躇われ、六花の率いる医療班の手伝いをする事になっていた。

「お姉ちゃん、気をつけてね」

「もー、そんなに何回も言わなくてもわかってるよ。六花先生、シヤクナちゃんをよろしくお願いしますね」

「ああ、確かに引き受けた。絶対に怪我をさせたりはしないから、安心して戦ってくれ」

「はい。任せてください」

何の根拠も無いが、元気にグラキシアが返事をする。

石楠花はグラキシアを不安そうに見つめて、

「ミラお姉ちゃん……お姉ちゃんのこと、守ってね？」

「大丈夫だって、そこは信用して欲しかったな……」

「あはは……。うん、引き受けるよ」

「某も力になろう」

「ベガードさんがいてくれたら百人力ですね」

そんな話をしていると、その場に風が吹きつけ、上空から【ナナ・テスカトリ】と【テオ・テスカトル】が降下してくる。

「うわー、生ナナと生テオだよ」

とグラキシアがはしゃぐ。

「グアウ」

何か言いたげに【ナナ・テスカトリ】が鳴くが、人型とは完全に声帯が異なるため、何を言っているのかはわからない。

「ウウウウウ……」

もどかしそうに唸り、前脚でバシバシ地面を叩く。

【ハイエンシメント進古龍種】らしい、人間臭い仕草だ。

だからという訳ではないが、ふと気づく。

「もしかして、茉莉さん……ですか？」

ミラがそう言うと、【ナナ・テスカトリ】が大きく頷く。

言葉はわからないが「そうなの！」と言っている気がした。

となると、後ろの【テオ・テスカトル】は柊也だろう。

雪山で一度見ているが、モンスターの顔は見分けがつかなかった。

「ガア、ガルルル、グルウ」

「す、すみません、わからないです」

「グア……」

やれやれと首を振られる。

「えーと、とにかく頑張りましょう」

文字通り話にならないので、ミラが無理やりまとめると、茉莉は頷いて返し、柊也と一緒に空に戻って行った。

と、ほのぼのしていたのもそこまでだった。

ズシン、ズシンと、地響きが響く。

【シエンガオレン】がもうすぐそこまで来ているのだ。

「戦闘用意！」

壁の上から拡声器　遺跡から見つけた、メガホンの形をした
声を大きくする道具　を通した華霞の音が響く。

この拡声器は一つしかないのです、その他、大まかな指示は先に決めた通りに煙玉で、細かい指示は伝令が走ることになっている。

「石楠花、私たちは下がろう」

「うん」

石楠花を連れて、六花が後退していく。

「私たちも持ち場に着きましょう」

「うむ」

「うん」

【シエンガオレン】を迎撃する最終防衛線が引かれているのは、山道からエイシスアルカディア前に広く開けた場所だ。

ミラ、ベガード、グラキシアは前に出て、広場の左側に寄る。

相当な人数がその場にいるのだが、声一つ聞こえない。

沈黙と緊張感がその場に満ち、【シエンガオレン】の足音だけが響く。

そして、山道にかかった霧の中から、四本の足で大地を踏みしめる巨体が姿を見せる。

エイシスアルカディア前の空間は、迎撃用の最後の戦闘領域だ。

つまり、その全体が、射程距離内である。

「撃てー！ー！ー！」

拡声器で増幅された声が響き、続く轟音にかき消された。

壁に取り付けられた大砲が一斉に火を噴き、バリスタから雨のように巨大な矢が放たれる。

照準は完璧だ。

砲弾や雨が一直線に【シエンガオレン】に降り注ぎ、

しかし、その全てが硬い音を立てて跳ね返された。

役目を全う出来なかった弾が、虚しく足元に落ちる。

司令部に動揺が走ったが、戦場は止まらない。

当初の取り決め通り、最初の一斉射撃の後、通常戦闘に切り替えられる。

【狩猟笛】の旋律が響き、疲れにくくする強走効果や力を増す攻撃力増加、平衡感覚を増す耐震などの効果が与えられる。

効果は一定の時間で切れるため、今回の【狩猟笛】使いの役目はひたすら演奏を続けることだ。

「行くぞ！」

兵たちが一斉に【シェンガオレン】へと向かって行く。

【ガンナー】が【シェンガオレン】の体に攻撃をかけ、【剣士】が四本の足に群がっていく。

その様子を見下ろしながら、司令部では先の出来事について話し合いが行われていた。

「ミュリエリアさん、さっきのどう思います？」

「そうですね……いくら甲殻種でも、砲弾やバリスタを全て弾くほどの硬度を持ち合わせているとは思えません。

甲殻に何かがあるのではないのでしょうか」

「ええ、私もそう思う。エルミナ」

「うん？」

「弾いたとは言っても全く損傷が無いとは思えないわ。現場から破片なり何なりを探して、調査班に検査させて」

「わかった！」

エルミナが駆け出し、壁の中に続く階段に消えていく。

それを見送って、華霞は再び戦場に目を移した。

戦場で、ミラはグラキシアや他の兵と一緒に【シエンガオレン】の脚を攻撃していた。

ベガードが見失ってしまって同じ脚にはいない。どこか別の脚を攻撃しているのだろう。

入れ代わり立ち代わり、次々に刃や槍が【シエンガオレン】の脚を攻撃する。

しかし、どの攻撃も【シエンガオレン】の脚の表面に薄い傷をつけるだけで、それほど効果を上げているようには見えない。

「かった……」

【白猿雑】【ドド】を弾かれたグラキシアが、痺れた手を押さえながら呟く。

「これは、流石に硬すぎるよ……」

ミラがもらした声に、周囲から賛同の声が上がった。

誰かが「変種じゃないのか」と言う。

しかし、【シエンガオレン】が速度を落とさずに歩いていくために、それを見極める時間が無い。

有効な攻撃が出来ていないのは他の脚でも同じようで、【シエンガオレン】は既に広場の三分の一ほどの距離を進んでいた。

前方で【ガンナー】が【シエンガオレン】を狙っているがその攻撃の成果も上がっていないようだ。

と、そのとき、【ガンナー】たちの頭上から【クシャルダオラ】が落下してくる。

【ガンナー】たちが慌ててバラバラと逃げ、その後ろに【クシャルダオラ】が墜落した。

落下の衝撃で土煙が上がったが、何とか無事だったようで、自力で起き上がる。

再び飛び立とうとするが、

「ちょっと待て！」

鋭い声をかけ、六花が駆け寄る。

【クシャルダオラ】の全身をチェックし「飛べるか？」と聞く。

【クシャルダオラ】が頷くと、六花はその背中に飛び乗り、

「司令部まで飛んでくれ！」

【クシャルダオラ】は六花に頷き、翼をはためかせて空に舞い上がった。

司令部までは、空を飛べばすぐだ。

壁の上に到着すると同時に、【クシャルダオラ】の背中から飛び降りる。

「お前は手術が必要だ、そこで待ってる」

【クシャルダオラ】にそう言い置いて、華霞のところに駆け寄る。

「華霞！」

「六花、どうしたの？」

「スナイパーがいる」

端的に事実を告げた六花の言葉に、驚きが走る。

【スナイパー】。

言わずと知れた、遠距離攻撃を得意とする【ハンター】である。

「本当なの？」

「ああ、あのクシャルダオラが撃たれた」

【クシャルダオラ】に視線が集まる。

その【クシャルダオラ】は、翼の前の付け根辺りから血を流していた。

撃ち込まれた弾丸は、まだ体内にあるはずだ。

「味方の誤射の可能性は？」

「傷口から見て、弾は真横か少し上から入ってる」

「地上からの射撃ではありえないわね……」

華霞は少し考え、

「前線から引き抜いて、十人ずつ左右の崖に探索に向かわせて。それと、青の煙玉を」

青い煙玉は、【狩猟笛】の演奏中止という意味だ。

というのも、【狩猟笛】の旋律は、【ハンター】にも影響を与え

るのである。

奏で潰す者【クラシユニスト】と呼ばれる【ハンター】の演奏が【進種】にも影響を与えるという事実からもそれは明らかだ。

【クラツシュニスト】は【進種】狩りの役には立たないが、【原種】と戦うときに本領を發揮するのだろう。

とにかく、唯でさえ化け物じみている【ハンター】をこれ以上強化するわけにはいかない。

「厳しい戦いになるわね……」

戦場が上がった青い煙を見ながら、華霞が呟く。

「ミラ……」

不安そうな声を出したミュリエリアに「大丈夫ですよ」とフェルルートが言う。

「だって、約束したんですから」

「約束？」

「はい」

絶対に、お姉ちゃんを悲しませないと約束したから。

「だから、絶対無事に戻ってきます」

断言するフェルルートの言葉に、ミュリエリアは「そう」「と頷いた。

「それなら、信じるわ。あなたと、あの子の約束を」

ミュリエリアはそう言っつて戦場に目を向ける。

その横では、六花が手術の準備を始めていた。

「六花先輩、何を？」

と、医療班に所属している女性が聞く。

六花は「弾丸を摘出する。ハンターのことだからな、どんな弾を使っているかわからん」と答え、

「私がない間に何かあったらアウリオ……は、いないんだっとな。石楠花というクシャルダオラ進種の女の子を呼んでくれ、彼女を伝令に使う」

壁の中の階段を上がったり下りたりするより、飛んだ方が早いがゆえの指示だ。

はい、と返事をした女性が階段に消えるのを見送り、

(さて、グラキシアが無事だといいが……)

一瞬だけ戦場に想いを馳せ、直ぐに目の前の患者に集中した。

そのグラキシアだが、彼女は無事に戦場で戦っていた。

「やつ！」

【白猿雑】【ドド】を振り下ろすが、やはり甲殻に弾かれる。

そのとき、すぐ近くに【シエンガオレン】が進めた脚が着地した。

地面がぐらぐらと揺れ、【狩猟笛】の効果がなくなっていたグラキシアが体勢を崩す。

グラキシアがいるのは脚の目の前だ。

【シエンガオレン】が脚を進めたら、蹴られてしまう。

「ラキアちゃんっ、リライト！」

桜色の髪をなびかせてミラが飛び、脚の前からグラキシアを搔っ攫う。

少し離れた場所にグラキシアを下ろし、「あ、ありがとう」という声を背中に受けながら、一気に飛翔する。

【リオス進種】の火球を柱のような脚に撃ち込みながら、【シエンガオレン】の頭まで上昇する。

そこでは、茉莉と柊也や他の【テスカト進種】、【リオス進種】が火炎放射や火球で攻撃していて、まるで炎の海のようにになっている。

ミラもその攻撃に参加して、火の海に炎を投げ込んだ。

「華霞先輩！」

階段から、エルミナが飛び出してくる。

「先輩、わかったぞ！」

片手に持った【シエンガオレン】の甲殻の破片をかざしながら言う。

「エルミナ、何だったの？」

「それなんだが、これ……カブレライト鋼なんだ」

「ええ！？」

カブレライト鋼。

カブレライト鉱石を原料として作られる金属だ。

鉱石を素材とする金属の中では最高級の物で、最高の硬度を持つ。

「それは、カブレライト鉱石の成分を含むと言っこと？」

「いや、完璧に金属。カブレライト鋼百パーセントだぞ」

エルミナの答えを聞いて、華霞は【シエンガオレン】へ視線を流す。

【シエンガオレン】は、もう広場の三分の一ほどの位置まで近づいてきていた。

「それは……いくらなんでも、ねえ？」

「そうですね。自然界に存在するとは……まさか……」

華霞に話を振られたミュリエリアが何かを思いついた顔になる。

双眼鏡を目に当てると、倍率を最大にして【シエンガオレン】の脚を見る。

「……………そう、そういうことね」

「お姉ちゃん、どうしたんですか？」

不思議そうに聞くフェルルートに双眼鏡を渡し、

「華霞さん、あのシエンガオレンの脚に丸い跡が並んでいるんですけど、あれ、釘の頭ではないでしょうか」

「く、釘!?!」

「何だつて!?!」

華霞とエルミナが慌てて自分の双眼鏡を使って確認する。

すると、拡大された脚には等間隔に並んだ無数の釘の頭が見える。

「これは、あれね……」

「華霞さんもそう思いますか？」

「ええ。あのシエンガオレン、全身に金属板を打ち付けてあるのよ、
そう。」

【シエンガオレン】全身に、小さいカブレライト鋼の板を隙間なく打ち付けているのである。

もちろん、【シエンガオレン】が自分からやれるわけがない。

誰の仕業かと言えば、そんなことをするのは【ハンター】しかない。
なかった。

火山でもそうだったが、【ハンター】には、狩る【原種】と狩らない【原種】がいる。

この【シエンガオレン】がどちらかはわからないが、【ハンター】は【シエンガオレン】を利用して攻めてきたのである。

全身に鎖を繋いで捕縛し、脚から背負っている頭骨にまで板を打ち付けて武装させ、後は進んで欲しい方向を向くまで前方に進むのを妨害し続けたのだ。

「ハンターって、たまに信じられないことしますよね……」

「ハンターは何もかも信じられないような存在だぞ、うん」

フェルルートとエルミナが口々に文句を言う。

その横で、華霞とミュリエリアは既に対策を練り始めている。

「さて、問題はこれからどうするかね」

「そうですね。シエンガオレンが鎧を着ていた場合は想定していませんでしたから、煙玉では知らせられませんし」

「それに、教えてどうなるって話でもないのよね……」

「混乱を招いてもいけませんから、対策案ができるまで伏せておきますか？」

「そうした方がいいかもしれないわね。それじゃあ、対策は……」

「カブレライト鋼だと電気を通しますよね。商店や武器庫から電気属性の武器を出したらどうです？」

と、フェルルートが口を挟む。

「属性ダメージだけで倒せるかしら？」

「裏地に絶縁体を張るような対策をしてないといいんだけど……と
りあえずやりましょうか。準備をさせておいて」

華霞の指示で、伝令が走っていく。

「何とかするから、もう少しだけ、頑張っ……」

ミュージエリアは、祈るような気持ちで戦場へと目をやった。

場所は【シエンガオレン】上空。

ミラは周囲の仲間と一緒に攻撃を続けていた。

そのとき、

バン、という音が、騒がしい戦場にあってはつきりと、聞こえた。

ミラの斜め上方にいた【リオス進種】の男性が体勢を崩し、赤い線を引きながら落下していく。

近くにいた別の【リオス進種】が急降下して男性を捕まえる。

抱きとめた手をぬるりと赤い液体が濡らし、「誰か！ 手当てしてくれ！」と叫ぶ声が聞こえた。

だが、そちらに気を取られてももられない。

続けざまに二度、バン、バン、と音が響き、【テオ・テスカトル】の一体が急に落下する。

翼が小さく痙攣していて、どうやら麻痺させられたようだ。

どこからか攻撃を受けている。

だが、その攻撃がどこから来ているのかわからない。

(……この攻撃が、どこからくるかわかれば)

ミラは、大きく腕を振って髪を払い、

「リライト！」

桜色が青へ、鮮やかに色を変える。

【ガイアタイズ大地の絆】による赤い粒子を出来るだけの最大濃度で展開する。

次の瞬間、何かが粒子の壁に触れてバチツと音を立てた。

(防げた！)

赤い光を鎧い、ミラがゆっくと飛翔する。

周囲に展開した粒子に気を配りながら、頭骨の上を飛び越えた
そのとき、

見えない敵からの攻撃が、再びバチと音を立てて弾かれる。

その方向は、

(後ろ斜め下!?)

意外な方向からの攻撃。

ミラはその方向、つまり【シエンガオレン】を見る。

その瞬間、【シエンガオレン】の背負っている頭骨の中に火薬の爆ぜる光が走った。

マズルフラツシュ。

ミラは、そのとんでもない事実にも、気づく。

(敵がいるのは)

爆発。

連鎖する爆発が起こり、爆風がミラを押し流す。

【拡散弾】を撃ち込まれたようだ。

吹き飛ばされたミラの耳に、「ミラ！」「と呼ぶミュリエリアの聲が聞こえる。

体勢を立て直すと、そこはもう壁の目の前だ。

【シエンガオレン】は、あと少しで壁に攻撃できるところまで到達していた。

ミラは、そのままミュリエリアのところへ下りる。

「お姉ちゃん！ シエンガオレンの背負ってる頭骨の中に、何かい

る！

って言うか、あれ絶対スナイパーだよ！」

「え……」

ミュリエリアは、双眼鏡で頭骨を注視する。

頭骨も脚同様にカブレライト鋼板で覆われていたが、頭骨の口の部分は開かないように嚴重に打ち付けられていて、頭の所々に小さな穴が開いているのが見えた。

【スナイパー】はそこから外を狙い撃ちしているようだ。

【ハンター】は崖ではなく、【シエンガオレン】の内部に隠れていたのだ。

確かに、頭骨の口の中は空洞なのだが、まさかそんなところに隠れているなど、誰が想像できただろうか。

その部分には強力な酸を発射する器官があることも、その予想を困難にしていた。

まさかそのままにしているとは思えないから、攻撃するか何かして酸を出せないようにしているのだろうか。

「ミラ、あの中を狙える？」

「うー、ちょっと無理だよ……」

双眼鏡から目を離してのミュリエリアの質問にミラが申し訳なさ

そつに答える。

そこに、二人の話を聞いていた六花が声をかけてきた。

「私がやってみよう」

「六花さん。手術の方はいいのですか？」

「ああ、無事に終わった。麻酔を使ったから戦線は離脱だが、傷は問題ない」

六花はそう答え、【シエンガオレン】に向けて手をかざした。

次の瞬間、青白く輝く雷が【シエンガオレン】の頭骨に降り注ぐ。

「どうだ？」

と六花が聞いたとき、頭骨の中から弾が放たれ、飛んでいた【ナ・テスカトリ】が慌てて回避行動を取った。

「ダメだったみたいですね」

「私が行って斬ってみる。気刃状態だったら斬れるかもだし」

ミラがそう言うが、

「無理ですよ」

フェルルートがミラの意見をばっさり切り捨てた。

「確かに、技量に優れた人が気刃を使えばカブレイト鋼も斬れま
すけど、せいぜい相手の鎧を斬る程度です。」

あの巨体にそんな小さな傷をつけて、どうするつもりですか？」

「う……」

ミラが言葉に詰まる。

【ハンター】に対しては致命傷を与える一撃でも、巨大な【シェ
ンガオレン】にはちょっとした傷にしかないのだ。

「うー、じゃあどうしよう……」

情けない声をあげるミラに、フェルルートは嘆息をもらし、

「それなら、一緒に来て下さい」

「え？」

間抜けな声を出したミラを、フェルルートはじっと見つめる。

そして、気力を振り絞るように、その一言を口にした。

「……あなたに、あれを斬る剣　太陽の煌きを貸してあげます」

「そんなの、あるの？」

「あるんです。それで、どうするんですか？」

早く決めるとばかりに、フェルルートが言葉を重ねる。

ミラは慌てて「借りる借りる！」と返事する。

「それじゃあ、急いで行きますよ」

「あ、そうだね」

そう言っつて、ミラはひょいっとフェルルートを抱き上げた。

横抱おひめままだっこきにされたフェルルートが「何するんですか！」と喚く。

「だって、急ぐなら飛んだ方が早いよ」

そう言っつて、ミラは壁の上から飛び降りた。

フェルルートが「ひゃ」と可愛らしい声を上げて、思わずミラにしがみつく。

「大丈夫だよ、落としたりしないから」

水平飛行に移りながらミラがそう言っつと、フェルルートはミラの胸から顔を上げ、

「い、いきなり飛ぶなんて、卑怯じゃないですか!」

(何が卑怯なんだろう?)

とか思いながら、ミラは「どこに行けばいいの?」と聞く。

フェルルートは、懽然とした顔でアカデミアエリアの方角を指差

した。

「あの二人、どこに行つたのかしら？」

小さくなっていくミラの姿を見ながら、華霞が聞く。

だが、聞かれたミュリエリアは、何か考えこんでいる様子だった。

「フェルはあれを使うつもりなのね……確かにそれなら……ああっ
！！」

「ど、どうしたの？」

「華霞さん、私たちも使いましょう！」

「な、何を使うの？」

ミュリエリアの勢いに押されながら聞き返した華霞に、ミュリエリアは何事も囁く。

華霞の顔に理解の色が広がり、しかし、すぐに表情は曇る。

「それは、確かに有効だけど……この状況では無理よ」

「大丈夫ですよ」

と、ミュリエリア。

「天を切り裂く剣は、ここにあります」

その言葉を聞いて、ちょうど六花に伝言を伝えるために司令部を訪れていた石楠花が、きよとんとした顔で首を傾げた。

「ここです」

「ここって、博物館だよ？」

フェルルートの案内で、ミラ連れてこられたのは、アカデミアエリアの博物館だった。

エイシスアルカディアを訪れた初日に、ミラとミュリエリアが訪れた場所だ。

「わかってますよ。私が連れてきたんですから」

フェルルートはそういうと、博物館に入っていく。

焦って避難したからか、鍵は開けっ放しだ。

ミラは、わけがわからないまま、その後ろに続いた。

二つの展示エリアを素通りし、一枚の絵画の前に立つ。

太陽、月、星の武器が飾られた、その絵の前に。

絵はガラスケースに守られているのだが、フェルルートはポケットから鍵を取り出すと、そのガラスケースを開けてしまった。

驚くミラの前で、フェルルートは炎を固めたような刃を持つ【大剣】を取り、ミラへと差し出した。

「煌く日の大剣 陽昂です。この炎の刃なら、カブレライト鋼だろつと溶断できるはずです」

「え、でも……」

「心配しないで下さい。連星剣の所有者は私なんです。持って行っても泥棒にはなりませんよ」

「そうじゃなくて……いいの？」

これは、特殊な機構の最たるものである隕石鋼の剣だ。

自分から渡してくれたことを、ミラは意外に思った。

フェルルートは、いつそ穏やかに笑い、

「武器は使ってこそ、ですよね？」

どこかで聞いた言葉だ、と思って、ミラはそれが自分で言った言葉だと思い出した。

「ミユリエリアの武器を飾っておけばと言われたときに、そう言い返したのだ。」

「……私が子供の頃。お爺ちゃんも似たようなことを言っていました」

「フェルちゃん……わかった、使わせてもらっね」

「貸すだけですから、ちゃんと返してくださいよ」

フェルルートから、陽昂を受け取る。

手にした【大剣】は、ずしりと重かった。

「さ、戻ろっ！」

「あ、待ってください」

駆け出そうとしたミラを、フェルルートが呼び止める。

「陽昂は、それだけでは使えないんです」

「え？ 何で？」

「陽昂は、通常の火属性とは比べ物にならない熱を発生します。柄まで燃えますから、普通に持つと持っている手が火傷ではすみませんよ」

「それじゃあ使えないよ！」

慌てるミラに、フェルルートは落ち着いた声を返す。

「ですから、それだけじゃ使えないって言ってるじゃないですか。どこかでヴォルガノス進種の人を見つけないと……」

「もしかして、保護液？」

「はい。それで使えると、お爺ちゃんのメモに書いてありました」

「そっか、なら大丈夫だよ」

とミラ。

「忘れた？ 私の能力」

「あ……そうでした。その反則みたいな能力がありましたね」

一緒に暮らしている間に聞いていた能力を思い出して、フェルル
ートが言う。

「反則って……まあいいけど」

ミラは微妙な顔で呟き、

「とにかく、急いで帰る！」

「私は一人で帰りますから、ミラさんは先に行ってください。その方が少しでも早いはずですよ」

「あ、うん。じゃあ、先に行くね！」

ミラは、そう言いつと走っていく。

フェルルートが、ミラに抱えられて飛ぶのが嫌だから一人で戻ると言ったとは少しも思わなかった。

.....

ミラが戦場に戻ると、壁の上でも何かの動きがあったようだった。

壁の上に、一抱えほどの白い布で覆われた何かが次々に運ばれ、塀の上に並べられていく。

さらに、同じように布をかけられた何かが、中央施政塔の側面を持ち上げられていた。

似ているように見えるが、サイズは全く違い、塔の側面を登っている物の方がはるかに大きい。

布のせいで正確にはわからないが、十メートル四方はある。

重量もかなりのもので、塔内部の滑車がなければ持ち上げるのも難しかっただろう。

ミラは一度壁の上に着陸する。

「お姉ちゃん！」

「ミラ、戻ったのね。あら、フェルは？」

「歩いて戻るって。それより、これ何？」

「説明は後でするわ」

「あ、そうだよな。今はあれを何とかしないと」

ミラの視線の先で、【シエンガオレン】はもう目の前まで迫ってきていた。

「それじゃあ、行ってきます」

「あ、待って。ミラにはもう一つお願いがあるのよ」

「え、何をすればいいの？」

「それはね」

ミュエリエリアの願いを聞いて、ミラは不思議そうな顔をする。どうしてそんなことをする必要があるのか、わからなかったからだ。

だが、ミュリエリアは無駄なことをさせたりはしない。

「うん、わかった」

ミラは頷き、

「じゃあ、今度こそ 行きます!」

助走をつけて壁の上から飛び出し、【シエンガオレン】へと飛翔

する。

【スナイパー】がミラを狙って銃撃するが、ミラがない間に話を聞いていた茉莉と柊也が左右に護衛のように付き、炎で弾丸を焼き払う。

どうやら【拡散弾】だったようで、空中で複数の爆発が起こった。爆炎を引き裂いて、炎の中からミラが飛び出す。

【シエンガオレン】の背中の中骨に降り立つと同時に、背中の中骨の【陽昂】を抜き放ち、天に掲げる。

「リライト！」

背中の中骨が消え去り、金色に変わった髪が背中に流れる。

溜め斬りの要領で【陽昂】に気を送ると、刀身が真っ赤に輝き、瞬時に凄まじい熱を放ち始める。

熱によって大気が歪み、赤い刃が本物の炎のように波打った。

その熱はミラ自身にも襲い掛かるが、【ヴォルガノス進種】^{アンゼリカ}の能力がミラを熱から守る。

灼熱の刃が、カブレライト鋼に覆われた頭骨に振り下ろされた。

カブレライト鋼は、一瞬の抵抗の後、熱したナイフを入れられたバターのようになり【陽昂】を受け入れた。

下の頭骨までまとめて溶かし斬り、頭骨にばつくりと大きな切れ目が刻まれる。

その切れ目から、銃口が　。

見えたことを確認するより先に、ミラは体を後ろに倒した。

トン、と足場を蹴り、頭から真つ逆さまに転落する。

一拍遅れて銃声が響き、撃ち出された弾が空を貫いた。

「今度は外さん！」

六花が【大地の絆】^{ガイアタイズ}による青い雷を落とし、雷は裂け目の奥に潜んでいた【スナイパー】に炸裂する。

落下していたミラは、空中で【陽昂】を手放した。

「リライト」

呟いたと同時に、視界の端で揺れる髪が金から鋼に変わる。

空中で反転し、横に伸ばした手に元の冷たさを取り戻した【陽昂】の柄が収まった。

ミラは落下から上昇に転じ、素早く上昇する。

司令部の側を通り抜けたとき、壁の上から鋼色の大きな影が飛び出し、ミラに並んだ。

【クシャルダオラ】。石楠花である。

ミラと石楠花は、高く高く天へと昇る。

雲に触れる高さにまで舞い上がり、ミラは大きく両手を広げた。

「行くよ、石楠花ちゃん！」

ミラの声に石楠花が頷き、そして、二人を中心に風がゆっくりと渦を巻き始める。

風の流れを支配する風の龍の下に集った風は、その指揮の下に大きさと勢いを増す。

轟々と音を立てて渦巻いた風は天空に長く伸び、ついには雲さえも巻き込んでいく。

龍の風 たつまき
龍巻。

天を貫くその姿は、巨大な刃にも似ている。

巨大な龍巻は、一度細く細く集束され、

そして、一気に解き放たれた。

極限まで束ねられた風が全方位に迸り、地上に立つ者たちの髪をもかき乱した。

我が物顔で天を覆っていた雲は龍の名を持つ風の前に屈服し、天空を明け渡す。

雲が消えた空は、文句なしの快晴。

隠されていた太陽の光が、さんさん燦々と降り注ぐ。

「照射っ！」

遙か地上で、拡声器を通した華霞の声が鋭く響く。

声に従って、壁の上に置かれていた物と中央施政塔に持ち上げられた物。

その全ての覆いが取り払われる。

覆いの下から現れたのは、銀色の輝き　鏡だ。

円周上に並べられた平面鏡が、中央施政塔の凹面鏡に光を集め、凹面鏡がその光を集束させる。

エイシスアルカディアそのものを利用した太陽炉である。

屋外に設置されたこれは、実験用であるはずがなく、兵器に他ならない。

実験室の物よりも小規模のためそこまで温度は上がらないが、得られる温度は、金属加工には十分を通り越して余りある。

焦点は、【シェンガオレン】の四本の脚の一本。

瞬間的に二千度近くまで熱せられ、カブレライト鋼板が真っ赤に

なった。

そして、どろりと、その姿を無くしていく。

【シエンガオレン】は既に壁の目の前。

脚を灼^やかれながらも、【シエンガオレン】は鋏を備えた脚を振り上げる。

よく見ると、鋏も金属板に覆われ、大きさと鋭さを増していた。

だが、その鋏が使われることはない。

それよりも先に、撃龍槍が放たれたのだ。

二本の巨大な槍が突き出し、一本は見当外れの場所を貫いたが、もう一本は【シエンガオレン】の脚に突き刺さった。

鎧を失った脚は撃龍槍に貫かれ、【シエンガオレン】の巨体が揺れる。

前に倒れそうになってバランスを取ろうとし、それに失敗した巨体が逆に後方へ倒れる。

ギシギシと軋む音を立てながら後ろ向きに倒れてきた【シエンガオレン】の影から、慌てて兵が逃げる。

ズシンと、小規模な地震を起こしながら【シエンガオレン】が倒れた。

そのとき、【シエンガオレン】の背中の頭骨の口の辺りで爆発が起った。

衝撃によって、口を閉じていた留め具が外れ、頭骨の口が開く。

そして、その中から【ハンター】が飛び出してきた。

【スナイパー】ではない。【スナイパー】は六花の攻撃によって既に倒れている。

その【ハンター】は、口の奥に隠れていた別人だ。

一人は【サムライ】。

そして、もう一人はガンランス使い。

撃ち貫く者【ガンサー】である。

熱さを感じないという特異な能力を持つ【ガンサー】は、己の身が炭になることも厭わず、火薬量が数倍に増量されている砲撃を使う。

頭骨の口を吹き飛ばしたのは、その竜撃砲である。

どこで出てくるつもりで潜んでいたのかわからないが、もうここに出てくるしかなかったのだろう。

飛び出した二人の【ハンター】。

その前に、一人の鎧武者が立ちふさがった。

「ハンター殿、お相手仕る！」

ベガードが言い放ち、その後ろに兵が続く。

決闘ではなく、生きるか死ぬかという戦いなのだ。人海戦術大いに結構である。

【ハンター】の力でも覆せる戦力差ではない。

しかも、内部からの砲撃で頭骨を破ったために、金属板の張られていない部位を露出してしまった。

今ここに、戦いの趨勢は決したのだった。

戦闘終了後。

【シエンガオレン】の巨大な体から剥ぎ取りが行われていた。

あちらこちらを釘抜きが行きかう、何とも妙な光景になっている。

モンスターの素材と上質なカブレライト鋼が同時に手に入ること
に、歓声が上がっていた。

だが、戦場に残るのは喜びだけではない。

【シエンガオレン】がそれほど積極的に攻撃してこなかったのが幸いだっただが、やはり死者は出てしまった。

担架に乗せて運ばれていく彼らを、ミラは司令部の面々と一緒に見送っていた。

黙祷を捧げ、その冥福を祈ると共に、彼らの命を賭した戦いに感謝を捧げる。

死者を運ぶ人に混ざって、【ハンター】の死体も運ばれていた。

こちらは随分とぞんざいな扱いで、三人まとめて荷車に放り込まれて運ばれていた。

石を踏んだのか荷車が大きく揺れ、その拍子に【サムライ】の【頭装備】が外れた。

「え……？」

その顔を見たミラが声を上げる。

「どっしたの？」

ミュリエリアに聞かれ、ミラは「あのサムライ……前にも見た」と答えた。

「火山で戦ったとき……でも、もう死んでたのに……」

ミラが自分自身の手で止めを刺したのだから、間違いはない。

だが、そのこげ茶色の髪の青年は、火山で戦った【サムライ】と同じ顔をしていた。

驚いているミラに、エルミナが「何だ、知らなかったのか？」と声をかける。

「同じ種類のハンターは同じ顔をしてるんだぞ」

エルミナだけでなく、他の面々もその言葉に頷いている。

同じ顔をしていることは、有名なことのようにだ。

「でも、そんなことってありえるんですか？」

「まあ、ハンターのことだから、ありえないとも言えないけどな。でも、一番有力なのは、ボクたちが見分けられないだけって説だぞ、うん」

「見分けられない？」

「つまりね、ミラ」

と、説明をミュリエリアが引き継ぐ。

「ミラは、例えばリオレウス原種とあったとして、他のリオレウスと顔立ちがどちらがうとか明確に言える？」

「ううん、言えないけど」

「それと同じよ。別の種族だから、ハンターの些細な違いは私たち

進種にはわからないと言われているわ」

「うーん、そうなのかなあ？」

あっさりとは納得できず、ミラが唸る。

「そんなことどうでもいいよ」

と、グラキシア。

「ハンターにもシェンガオレンにも勝ったんだから、早く街に帰って休もうよ。私、もうヘトヘトだよ」

「そうね、そうしましょうか。まあ、私たちは報告の仕事が残ってるけど」

「やれやれ、また踊る議会か」

肩を竦めて六花が歩き出す。

皆、何となくそれに続いて歩き始め、がやがやと騒がしくエイシスアルカディアへと帰って行った。

NEXT > 第二十話「屢気楼に消ゆ」

<オリジナル武器紹介>

名前：陽昂

分類：大剣

レア度：10+

属性：無（火1860）

威力：840

切れ味：白（紫+）

会心率：0

強化元：なし

強化先：なし

惑星の外から落ちてきた石から作られた太陽の大剣。
常識外の火属性を備え、持つことさえ難しい。

第十九話「決戦の最終防衛線 シェンガオレンを討て！」（後編）（後書き）

今回出てきた太陽炉ですが、作中世界の技術レベルでは実際のところ作れないでしょうね。

せっかくの機会なので言っておくと、多分この先、なんかそれっぽく見えるけど細かく突っ込むと正しくない、というものは色々出てくるような気がします。

ですが、あんまり理屈でガチガチに固めて詳しく説明をいれたりしても、読んでいて面白くないでしょうから、物語に出せるように多少の脚色はしていくつもりです。

論文書いてるわけでもないのに、その辺りは柔軟に見逃してください。

第二十話「歴史楼に消ゆ」（前編）

エイシスアルカディア第一大学考古学部人間技術学科第一研究室
通称、人研^{にんげん}。

【人間】の技術研究の最先端と呼ばれる部署だ。

室長である華霞は、自分の机に座ってある書類を読んでいた。

書類の頭には『メゼポルタ遺跡に関する調査報告』とある。

【廃都メゼポルタ】に発見された新しい遺跡に関する報告書だ。

【廃都メゼポルタ】は【魔都シュレイド】【寂都ドンドルマ】【壊都ミナガルデ】に並ぶ四大危険地帯の一つとされている。

何が危険かと言うと、【ハンター】だ。

この四つの都市遺跡周辺には、常駐しているのかと思えるほど、いつも【ハンター】の姿がある。

しかし、半年ほど前から【廃都メゼポルタ】の周辺で【ハンター】が目撃されなくなったという報告が防衛局に上がるようになった。

異の可能性もあったために慎重に調査が進められ、最近になってその報告はどうやら正しいようだ^と結論付けられた。

もちろん【ハンター】がいなくなったわけではなく、普通の地域

と同程度になったということだ。

そして、その遺跡の調査が考古学部に依頼されたのだ。

この書類は、その資料である。

書類を読む華霞は浮かない顔だ。

新しい遺跡には興味があるが、つい最近まで有数の危険地帯だった場所にはあまり行きたくない。

とは思っても、行かないという選択肢は無いのだが。

防衛局から施政院を通して下されたこの依頼は、命令と同じだ。

断ったりしたら予算が削られることはまず間違いないだろう。

色々お金がかかる考古学部にとっては死活問題だ。

「仕方ないわねえ……」

華霞は呟き、具体的な案を練り始める。

【ハンター】に見つかるリスクを考えると、あまり大勢では動きたくない。

だが、遺跡　しかも【ハンター】が絡んでいたかもしれないでは何が起ころかわからない。

何が起こっても対処できるようにするには、それなりの人数が必

要だ。

【クック進種】や【ナルガクルガ進種】【フルフル進種】の能力は観察に適しているし、道がふさがれていたりした場合は力に優れる【ティガレックス進種】がいるといいだろう。

常に団子になって動くわけにも行かないから、姿を隠す能力を持つ【オオナズチ進種】も華霞一人では心許ない。

（一人で全部出来る人がいれば、こんなに悩まなくてもいいのに……）

そう思った華霞の脳裏に、一人の少女の姿が浮かぶ。

「……あ、いた」

思わず呟く。

他の種族の能力を自在に扱う能力の持ち主、ミラ。

彼女なら、【進種】が解決できるあらゆる問題に一人に対応できるだろう。

「問題は、彼女の協力が得られるかどうかね」

今のエイシスアルカディアにミラはいない。

隕石鋼の精製に成功した後、ミュリエリアと一緒に村に帰ってしまっていた。

華霞は、机の引き出しから一枚の紙を取り出し、ミラに宛てた手紙を書き始めた。

それから数日の時間が流れ、^{ダクト}知識の月、第四日。

今日はミュリエリアの誕生日だ。

誕生日を迎えた当の本人は、工房裏の空き地に立っていた。

地面には、金属をただ叩き伸ばしただけの細い鉄板に木の柄を取り付けた剣のようなものが何本か並べてある。

白銀に輝く金属はカブレライト鋼と一白のイルミネイトライト《ブリリアントライト》鋼の合金で、外からは見えないが刃の芯に隕石鋼が使われている。

ミュリエリアは、その内の一本を手に取り、意識を集中する。

すると、白く輝く練気がまだ洗練されていない刀身を包み込む。

その練気は長く立ち昇り、刀身の倍近くの長さまで伸びた。

通常、練気は炎のように揺らめく光で視覚化される。

しかし、白い練気は僅かも揺らぐず、氷のような固体になって刀身を包み込み、延長する。

そこには、向こう側が透けて見えるほど薄く透き通った、まさに光の剣とも言つべき刃が作り上げられていた。

これが、ミュリエリアの得た隕石鋼の特性。練気の実体化である。

ミュリエリアは、それを何気ない動作で振り下ろす。

と、目の前に置かれていた試し切りよりの太い丸太があっさり両断された。

ミュリエリアは、刃を横に返し、今度は腹の部分を鉄板に叩きつける。

リィィインと、澄んだ音が響く。

ミュリエリアは剣を持ち上げて、刃を確認する。

とても強度があるようには見えない薄刃なのだが、折れも曲がりもせず、ひびの一つも入っていない。

「斬れ味、強度、靱性、どれも申し分ないのだけれど……」

そうミュリエリアが呟いた瞬間、練気でできた光の刀身エッジが、勝手に砕け散った。
気光フライト

ガラスを割ったように粉々になり、地面に落ちる前に光に解けて消えてしまう。

「これもダメ、と」

苦い顔で嘆息する。

刃の鋭さ、変形耐性も破壊耐性も通常の金属より遙かに優れている。

しかし、この気光刃はほんの僅かな時間しか維持することができず、すぐに碎けてしまうのだ。

ミュリエリアは、その原因を見つけるために、条件を変えた複数の剣を作り、対照実験をしているのである。

ポケットから取り出した紙に結果を書き込み、ミュリエリアは次の剣を手を取った。

「うん……よしっ」

ミラは、自室の机に向かいながら、大きく頷いた。

机の上には、木製の小箱。

エイシスアルカディアで購入したオルガニートだ。

元は無地の地味な木箱だったのだが、今はきちんと飾られている。

もっとも、ミラには難しい装飾をするような技術はないので、絵

の具で色を塗った程度だ。

メインは中身の曲なので、外装はそれくらいで構わないだろう。

その曲の方だが、昨日のうちに完成している。

音が出るため家の中で作業するのが難しく、ばれないように素材集めに出かけた先で作業をしたりとかなり大変だったが、何とか間に合った。

「ミラー、ちょっとー」

階下からミラーを呼ぶ声がする。

ミラーは、確認をしていたオルガニートのふたを閉じ、机の引き出しにしまってから部屋を出た。

一階に下りて作業場に入ると、

「おっそい！ 階段下りるのにどれだけ時間かかっているのよ」

そんな声と共に、桜色の髪の少女がミラーを出迎えた。

「せっかくミューリイがないチャンスなんだから、時間を無駄にしないでよね」

「いや姉さん、そんなに怒るほど待ってないでしょ」

傍らの蒼髪の青年が、宥めるように言う。

セレスティアとセレスタイト。

ミュリエリアの友人である【リオス進種】の双子の姉弟である。

この二人は今朝突然、工房へと押しかけてきた。

誕生日の習慣を覚えてくれたこの二人は、ミュリエリアの誕生日を祝うためにやってきたのだ。

サプライズパーティーをして驚かせたいらしく、ミュリエリアには「たまたま近くに来たから」と言っていた。

ミュリエリアは気づいているのかいないのかわからないが、そのまま話を受け入れていた。

聡明な彼女のことだ、気づいていて黙っているのかも知れないが、誕生日を祝う習慣の馴染みのなさを考えれば意外に気づいてないのかもしれない。

「それで、どうしたんですか？」

改めて、ミラが聞く。

「あ、そうそう。今セレスタと相談してんだけどね、私たちがパーティーの準備をしておくから、あんたはその間ミュリーイをどっかに連れ出しといて欲しいのよ」

「あ、ごめんなさい、無理です」

申し訳なさそうに、けれどきっぱりとミラ。

「ちよ、何だよ？」

出鼻を挫かれたセレスティアが不機嫌そうな顔になる。

「あんだ、ミューリーの誕生日を祝おうって気がないわけ？」

「それはありますけど」

無かったらプレゼントを用意したりはしない。

ただ、セレス姉弟の来訪が想定外だったのだ。

パーティまでするのなら、もう少し早く教えて欲しかった。

「でも、今日は仕事を頼まれてるんです」

華霞に頼まれて、遺跡調査の護衛を引き受けてしまっているのだ。

「えー、断りなさいよ」

「無理ですよ……わざわざエイシスアルカディアから来るんですか
ら」

断ろうにも、連絡手段が無い。

当日じゃなかったら断りの手紙を出すこともできるが、今からでは間に合わない。

「だったら、それにミューリーを連れてってよ」

「そんな危ない場所に連れて行けるわけないじゃないですか！」

「じゃあどうしろってのよ！」

「私だって知りませんよ！」

「まあまあ、姉さんもミラも少し落ち着いて」

と、セレスタイトが二人を宥めようとしたとき、

「どうしたの？ 二人とも大きな声を出して」

扉が開いて、腕いっぱい剣を抱えたミュリエリアが戻って来た。

「どうやら、実験が終わったようだ。」

「お、お姉ちゃん！ ええと、それはその……」

「ほら、あれよ、ねえ？」

聞かれてはならない人物の登場にうるたえるミラとセレスティア。

あからさまに不審な様子だった。

それを見たセレスタイトが、やれやれと言わんばかりの表情で助け舟を出す。

「今、黒い女について話をしてて、ちょっとヒートアップしちゃったんだ」

「そ、そうなのよ！ で、どうなの、ミラ。何かわかった？」

これ幸いと話に乗るセレスティア。

黒い女は姉弟の両親の仇。実際、気になる話ではあるのだ。

「ええと、私は全然……ごめんなさい」

「謝らなくてもいいよ。僕たちも何にも見つけれなかったからね」

「ミューリイは？」

「私もミラと同じよ」

「そっか……」

結局、一つの手がかりも増えていないことになる。

その事実にも、場の空気が重くなるが、

「あーやめやめー！」

セレスティアがその空気を払拭するように、努めて明るい声を出した。

「これから楽しいことするのに、暗くなってどうすんのよ。この話は後よ、後」

「楽しいこと？」

ミュリエリアが首を傾げる。

「あ……えーと」

「ほら、せっかく会ったんだしね。楽しいでしょ？」

セレスティアが言葉に詰まったところをセレスタイトが華麗にフオローした。

「ふふ、そうね。今度は早めに会いに来てくれて、私も嬉しいわ」

ミュリエリアはそう言って微笑み、「ミラ、まだ出かかなくていいの？」と続けた。

「あ、そうだった！」

そろそろ華霞との待ち合わせに行かなければならない。

それを思い出したミラは、小走りに階段へと向かった。

階段を上る途中で一度振り返り、「セレスティアさん、セレスタイトさん、後はよろしくお願いします」と言って階段の上へと消えて行く。

残されたセレスティアは、内心で頭を抱えて「どうしろってのよ……」と呟いたのだった。

【旧密林】エリアのベースキャンプ。

位置的にはグレイと一緒に泳ぎの練習をした場所　ミラがミュリエリアに拾われた場所でもある　から少し上流に向かった場所だ。

ミラは、ここで華霞と待ち合わせをしていた。

ベースキャンプに入ると、既に華霞の姿がある。

相変わらずの白衣姿で、地面に置いた大きなトランクの上に座っていた。

おそらく、トランクには調査のための道具が入っているのだろう。

ミラの装備は【ロイヤルナイトメイルP】に【オデッセイ】。

最初はいつものように【夜刀】【月影】を選んだのだが、ミュリエリアに『遺跡の中で長い刀は振り難いかもしれないわよ』と言われ、短い【片手剣】に変更したのだ。

「こんにちは、華霞さん。お待たせしてすみません」

「いいえ、私も今来たばかりよ」

トランクから下りて立ち上がり、そのまま持ち上げる。

「それじゃあ行きましょか。詳しい話は歩きながらするわ」

「はい」

二人はベースキャンプを出て、目的地に向けて出発した。

【廃都メゼポルタ】は【旧密林】の向こう　より正確に言えば、西側に抜けた場所にある。

【旧密林】の中を直線距離で突っ切るのが一番早いですが、迂回してもそれほど距離は変わらない。

二人は、モンスターに出会うリスクを考えて、外を迂回することにした。

鬱蒼とした森林地帯を右手に見ながら、背の低い草を踏みしめて道なき道を進む。

「えーと、新しい遺跡が見つかったんですね。やっぱり砂漠の遺跡みたいなのなんですか？」

【オデッセイ】を抜いて邪魔な草木を斬り払いながらミラが聞く。形を失いながら砂に埋もれる古代の町並み。

ミラの中では、遺跡と言えばそんなイメージで固定されていた。

「そうね。私もまだ直接は見てないけど、どうも少し違っみたいなのよね」

「違っんですか？」

「ええ。そもそもがメゼポルタって言う人間時代の大都市の遺跡だし、その地上都市跡はミラちゃんが想像してるのと同じだと思うけど、私が調べるのは地下に見つかった遺跡なのよ」

「その地下の遺跡が地上の物とは違ってたことですか？」

「そういうことになるわね」

華霞は、そう言ってポケットから一枚の紙を取り出した。

折られていたそれを開いて、ミラに渡す。

そこには、どこかの建物の中らしい絵が描かれている。

報告書に入っていた、遺跡内部のスケッチだ。

「遺跡の何箇所かにこういう場所があったそうなんだけど、ここ、何だと思っ？」

スケッチの真ん中を指差して華霞が聞く。

他の壁は石を積んだもので石の継ぎ目が見えているが、その部分だけは全く継ぎ目が見当たらない。

スケッチに書き込んだあるメモによると、一辺がちょうど二メートルの正方形のようだった。

「ここだけ、大きい石を使ってるんですか？」

ミラが予想を口にすると、華霞は首を振る。

「この絵だとわかりにくいけど、この場所だけ金属なのよ。しかも、この向こうには空洞があることがわかってる」

「じゃあ、これは……」

「どこかに続く入り口じゃないかと推測されるわ。防衛局の調査班は開ける方法を見つけられなかったみたいだけど、それを見つけたのが私の仕事よ」

「へええ、そうなんですか。やっぱり華霞さんは凄いんですね」

尊敬の眼差しでミラが華霞を見る。

あけすけな褒め言葉を受けて、華霞がくすくすしたそうに表情を崩した。

「他にも、この遺跡には色々面白いものがあるのよ」

「そこそとトランクを探って、新しい資料を取り出す。」

ミラは、華霞に遺跡についての話を聞きながら【廃都メゼポルタ】を目指したのだった。

同じ頃、ミュリエリアの工房では

「ねえミューリイ、どっか遊びに行かない？」

「ごめんなさい、今はこの剣について調べたいの」

……

「ミューリイ、ちょっと気分転換に外に行かない？」

「ちょっと手が離せなくて……」

……

「ミューリイ、出かけましょうよ〜」

「ごめんなさい、それは後で。ええと、あれの在庫はどこにあったかしら……」

……

「セレスタあ。ミューリイが相手してくれない〜」

「うんまあ、仕事だからねえ」

世にも情けない顔で泣きついてきた姉に、セレスタイトは苦笑いを返す。

「どつするんのよ。このままじゃお祝いの準備なんか出来ないわよ」

「うーん、それは困るよね……」

セレスティアがミラの代わりにミュリエリアを連れ出し、その間にセレスタイトが準備するという計画に変更したのだが、ミュリエリアは急がしそうにしている、中々に連れ出せない。

「あ、じゃあこういふのはどうかな」

セレスタイトは、セレスティアの耳に顔を寄せ、ひそひそと囁く。

作戦を聞いたセレスティは「やってみる」と頷き、ミュリエリアの下に向かった。

「ミュリエリイ、ちょっとお願いがあるんだけど」

「何？」

道具を操る手を止めて、ミュリエリアが聞く。

「あのさ、クレオパピオンを探すのを手伝ってくれない？」

「クレオパピオンを？」

【クレオパピオン】というのは、蝶の一種でかなり珍しい種類だ。

レアトレジャーなどと呼ばれたりもする。

「実は、クレオパピオンを探すっていう仕事を引き受けたんだけど、よく考えたら私もセレスタもどんなやつかしらないのよ」

「ええ？ どうしてそんな仕事を引き受けたのよ？」

「だってえ、生活費が苦しくて……報酬がよかったのよ」

精一杯情けない顔を作って、ミュリエリアにすがりつく。

面倒見のいいミュリエリアの性格を利用して外に連れ出す作戦なのだ。

「あなたはもう、仕方ないわねえ……でも、仕事が……」

作戦通り、ミュリエリアは揺れているようだ。

もう一押し、とセレスティアは言葉を重ねる。

「店番はセレスタがやっとしてくれるわよ。だから、ね？　お願い
っ」

「はあ……わかったわよ」

嘆息して、ミュリエリアが頷く。

「よっしー」

思わずガッツポーズをするセレスティア。

「そんなに嬉しかったの？」

「え、ま、まあねーあはははは」

くすくすと笑うミュリエリアに、セレスティアは惹きつり気味な

笑顔を返したのだった。

【廃都メゼポルタ】。

大都市として栄華を誇った【人間】時代の面影は今は無く、蔦や苔に覆われた建物の跡が広がっている。

「……大丈夫みたいです」

「ええ、わかった」

何も無い空間から二人分の声が聞こえ、華霞の能力で姿を消していたミラと華霞が姿を現す。

ミラはさつと髪に手櫛を通し、その指が通った箇所から緑色に変化していた髪が白く戻っていく。

周囲の状況を調べるために、【クック進種】の能力を使っていたのだ。

能力で調べたところ、周囲には生き物が動くような音を立てる物は何もなかった。

「じゃ、調査を始めましょうか」

「何から調べるんですか？」

護衛なんだか助手なんだかわからない台詞をミラが言う。

「そうね、本命を調べるのは後にして、まずは周辺から見ていきましよう。何も無いと思われているところに重大な物が隠されていたりするのよ」

「はいっ、わかりました」

そういうわけで、スケッチにあった謎の扉は後回しにして、周辺部から手をつけることになった。

華霞は都市跡を歩き回りながら、所々で足を止め、何かの長さを計ったり、気になるところを拡大鏡で覗いたりして周辺の調査をする。

最初はミラに説明をしながら調査していたのだが、しばらくすると、調査に集中して無言になってしまった。

ミラは何をすればいいのかわからず、時折言われるままに道具を渡したりしながら、ぼんやりとその後ろについて歩いていた。

.....

しばらくして、【廃都メゼポルタ】の端から端まで歩いた頃、地面や壁ばかり見えていた華霞が久しぶりにミラに目を向けた。

「ミラちゃん」

と呼ばれて、少し離れたところで手持ち無沙汰に突っ立っていた

ミラは華霞に駆け寄る。

「ごめんなさい、夢中になっちゃって」

「いえ……それで、何かわかったんですか？」

「そうねえ……」

華霞はぐるっと周囲を見渡す。

「地上部には特に珍しい所は無かったわ。ごく普通の遺跡よ」

「そうですか……」

少し残念そうにミラが呟く。

どうせなら、凄い大発見がしてみたかったのだ。

「まだがっかりするには早いわよ。本命はこれからなんだから」

「あ、そうですよね」

「その代わり、何かあるかもわからないから、しっかり護衛を頼むわよ」

「はいっ」

二人は、その場を離れ、スケッチにある扉のある場所に向かった。

【廃都メゼポルタ】のちょうど中心にある石造りの大きな建物。

表面は苔むしているが、まだしっかりと原型を留めている。

この都市の代表者のような人物の家か、あるいは大勢の人が集まる施設のような場所だったのだろうか。

建物の中に入ると、いきなり真正面に金属の壁が見えた。

「あそこね」

「わかりやすいですね……」

奥まで歩いて行き、壁の前に立つ。

華霞は足元から小さな石を拾い上げ、軽く壁を叩いた。

すると、壁の向こうでコーンと音が反響するのが聞こえてくる。

「確かに、空洞になってるみたいね」

「そうなんですか？」

ミラは、壁にぴったりとくっついて耳をつける。

と、その瞬間、

「ミラちゃん！」

華霞が鋭く叫んでミラの体を引っ張った。

突然引つ張られて「きゃっ」と悲鳴を上げるミラ。

その目の前で、壁に変化が起こっていた。

金属部分の四辺が緑色に光り、その光の線が中心に向かって動き出す。

四本の線は中心部で合流し、正方形をさらに四つの正方形に十字に区切った。

そして、小さな正方形が四つの角に向かって移動し、壁があった部分にぼっかりと穴が開いた。

穴の奥には、暗い通路が続いている。

「ひ、開いた？」

呆然と穴の奥を覗きながら、ミラが呟く。

華霞も内心の驚きを隠せずにいる。

だが、少し落ち着いてくると、今起こったことへの考察を始める。

(どうして開いたのかしら……?)

まだ何も変わった事はしていないはずだ。

石で叩いたり、耳をつけて音を聞こうとはしたが、それくらいは防衛局の調査でもしていたはずだ。

だが、そのときは開かずに、今は開いた。

なぜ、と考え込みそうになる華霞に、ミラが声をかける。

「あの、華霞さん……どうしましょう？」

不安そうにミラが華霞を見つめている。

「あ、ああ、そうね……」

華霞は少し考え、「とりあえず入ってみましょう」と言った。

開いたことに何らかの原因があるのだとしたら、内部を調べた方がわかりやすくだろうと考えたのだ。

「何があるかわからないわ、しっかり注意して」

「は、はい」

華霞は、注意深く通路に足を踏み入れた。

その後ろに、緊張の面持ちでミラが続く。

二人が通路に足を踏み入れたその瞬間、ぱつと、明るい光が通路を照らした。

それと同時に、『お帰りなさいませ』と、男性とも女性とも判断のつかない奇妙な声が聞こえる。

人が出したとは思えない、まるで音のような声だ。

「な、ななな何なにつ！？」

反射的にミラが【オデッセイ】を抜き放ち、周囲を見回す。

通路は、床も壁も天井も金属製。

通路の天井からは、棒の形をした何か　ミラたちは名前を知らないが、蛍光灯　が火とは明らかに違う白い光を投げかけてきている。

通路は少し傾斜しながら奥に伸びる一本道で、奥にまた金属製の扉があった。

その扉の近くにスピーカーがあつて、そこから声が聞こえていたのだが、それは華霞も知らない技術で、二人は気づかない。

「今の声、何なの？」

「何でしょうね……」

華霞は、周囲を注意深く見回す。

しゃがみこんで床に触れ、立ち上がって壁を撫で、最後に天井を見上げる。

そして、ポツリと呟いた。

「過学だわ」

「え？」

「これは、私たちの文明でも、人間の文明でもない。それよりも昔に栄えていた古代文明の遺産なのよ」

まだ入り口だが、今までに【人間】の遺跡をいくつも見てきた華霞だから、十分過ぎるほどにわかる。

これは、それらの遺跡とは一線を画する技術によって作られていた。

「じゃ、じゃあ、さっきのって過学の何かなんですか？」

「そうなるわね。何かはわからないけど」

と、華霞。

「わからないんですか？」

「ええ、だって過学が使われた遺跡が見つかるのは初めてだもの。明らかに人間の技術も超えているから、過学だってことはわかるけど、それだけよ」

再演装置リプレイヤーのような、過学を使ったのであろうと思われる物はいくらか見つかっているが、それらは全て【人間】時代に使われていたものだ。

つまり、【人間】の遺跡からもっと古い文明の遺産が出てきていただけなのだ。

こんな風に、過学が全面に使われた遺跡が見つかったのは始めてのことなのである。

スケールを小さくすれば、今までは稀に店に並んでいるだけだった野菜があつたとして、それが自生している山を見つけたという感じだ。

どちらの方が大量の野菜が手に入るかは言うまでも無いだろう。

しかも、山が見つければ土壌や日照のような栽培に適した条件も知ることができる。

要するに、【人間】以上に謎に満ちていた過学文明の一部を解き明かすことができるかもしれないのだ。

「それって凄いことじゃないですか!？」

「ええ、凄いことよ。もしかしたら、世界がひっくり返るような発見があるかも」

「それじゃ、早く奥まで行ってみようよ」

さつきまで謎の声を怖がっていたのも忘れて、ミラが華霞を急かす。

「そうね。でも、十分に注意して。明かりが点いたり声を出したりした誰か、もしかしたら何かかもしれないけど、とにかく、何かがいるのは間違いないんだから」

「は、はい」

「それじゃ、行きましょう」

改めて、通路を歩き出す。

突き当たりの扉の前に立つと、これまた勝手に扉が開く。

まだ慣れないミラが「わっ」と声を上げたが、華霞は既に順応してその奥を観察している。

扉の奥は、すぐに壁があり、人が十人ほど入れそうな箱のような形になっている。

華霞はその中に入って行き、おっかなびつくりミラが続いた。

箱の中には何も無いが、中に入ってから振り向くと開いた扉の右側にいくつかのボタンが並んでいるのに気づく。

上から順に「開」「閉」「1」「2」「3」「4」と書かれた六つのボタンだ。

「これ、何でしょう?」

「……もしかして、これ、昇降機かしら」

上下に荷物や人を運ぶ装置のことだ。

水力を利用して荷物を運ぶ昇降機は【進種】の村でもたまたま使われている。

「この数字はおそらく階層ね。上に四階もあるはずないから、地下に向かうんだわ」

華霞はそう言って、「4」のボタンを押す。

すると、勝手に扉が閉まり、エレベーター電気仕掛けの昇降機が動き始めた。

僅かに振動が感じられる程度で、意識していないと動いているのにも気づけないほどにスムーズに動く。

「昇降機は施政塔にもあるけど、大違いね。あれはゴトゴト揺れるし、階段を上ったほうが早いくらいだから」

「本当に色々あるんですね」

ミラは動いている昇降機の中を落ち着き無く見回しながら、「ところで、どうして四階に行くんですか？」と聞く。

「初めて見つけた遺跡を調べるときは、細かい部分を調べるより先に、全体像を掴んでおくのよ。」

地上遺跡なら、建物の中よりも敷地全体。地下遺跡ならまずは最
深層へ行くの。

一番深いところから行くのはもう癖みたいなものなのよね」

「そうなんですか」

そんな話をしている間に、昇降機は地下四階にたどり着いたよう
だ。

少し大きく揺れて止まり、扉が開く。

昇降機から下りると、そこは小さな部屋だった。

長椅子がいくつか置かれているだけで、他には何も無い。

天井の明かりで明るく照らされているが、息の詰まりそうな閉塞感があった。

「ここは、休憩所か何かかしら？」

「はあ……ですか」

華霞の呟きに、ミラは曖昧な返事を返す。

まだ昇降機しか見つけていないのに、頭の中はいっぱいだった。

「とにかく、進んでみましょう」

「あ、はい」

部屋を抜けて、次の部屋に続くであろう扉の前に立つ。

すると、扉の上に設置されている何かの装置から赤い光が発せられ、二人の体を照らす。

次の瞬間、

ブー、とどこからともなく音が鳴り、最初に聞いたのと同じ声が聞こえる。

『警告。レベル4への金属類の持込みは禁止されています。警告。レベル4への金属類の持込みは禁止されています。』

ミラと華霞は顔を見合わせ、

「えーと、どうしましょう?」

「……言うことを聞きましょう。警告を無視していいことはないわ」

「……わかりました」

二人は、一度その場から離れ、ベンチの上に金属を置いていく。

華霞はトランクを置いて、ポケットに突っ込んでいたいくつかの道具を置くだけで良かったが、ミラは武器や防具も外さなければならぬ。

「寒……」

剥ぎ取りナイフも置いて、インナー姿になったミラが体を震わせる。

色々な機能が備わっている割には、気温は外気とそう変わらない。冬には少し厳しい格好だった。

「はい、これを着て」

華霞が白衣を脱いでミラに差し出す。

ミラはお礼を言ってそれを受け取り、白衣を着込んだ。

「じゃあ、行くわよ」

二人は再び扉の前に立つ。

さっきと同じように赤い光が二人の体を照らし、今度は扉が開いた。

扉の先は、また廊下だった。

今までと同じように、どこも金属で囲まれていて、奥に扉がある以外は扉どころか窓一つ無い。

この階は随分シンプルに出来ているようだ。

廊下に出たミラは、ふと思いついて髪を払いながら「リライト」と呟いた。

髪が白から毛先に向かって赤から朱のグラデーションに変わり、右手には赤色をした菱形の盾が、左手には朱色の閉じられた鎌が現れる。

【ザミ^{リヤ}変種】の【装殻】である。

【オデッセイ】を置いてきてしまったので、その代わりだ。

「やっぱり便利ね。どんな仕組みなのかしら？」

「それは私にもさっぱり……」

と話しながら廊下を進み、突き当りの扉の前に立つ。

今度は特に何も言わず、扉は黙って二人を迎え入れた。

部屋の中は、今までとは少し趣が違っていた。

床には何かの毛で作られた絨毯がしかれ、壁際にはぎっしりと本の詰まった本棚が置いてある。

部屋の奥には大きな机があり、紙の束や見慣れない何かの道具が置いてあった。

本棚とは反対の壁に、入ってきた扉とは別にドアノブがあるタイプの扉が一つある。

家具の少ない部屋ではあるが、この部屋には多少の人間味があった。

「この部屋はおそらくこの遺跡の責任者か、そういう地位の高い人物のものね。この階自体、多分そのためだけにあるんだわ」

部屋を見回しながら華霞が言った。

机まで歩いていき、そこに置いてある何かに目を向ける。

形はランプのようだが、薄っすら埃を被った幌ほろの下から紐が出ている。

何気なく紐を引くと、カチリと音がして白色電球が点灯した。

電気スタンドと呼ばれる道具だが、電球の存在しない文明に生きている華霞には知る由も無い。

興味深そうにそれを持ち上げ、ひっくり返したりして調べ始めた。

先に遺跡の全体像を把握すると言っていたはずだが、この部屋にはそれを頭から追いつ出すほどのインパクトがあったようだ。

ミラは、机ではなく、本棚へと足を向けた。

本棚には大量の分厚い本が並んでいるが、全て同じ装丁の本だ。

背表紙には、手書きの文字で「1」から順番に番号が書かれている。

「んっ、と」

ミラは、少し背伸びをして「1」と書かれた本を本棚から抜いた。

「わわっ」

本の上に溜まっていた埃が頭の上から落ちてきて、ミラは慌てて払いのけた。

手元を取った本をしてみる。

何か書かれているのは背表紙だけで、表も裏も無地だ。

ミラは、深く考えずに真ん中辺りのページを開いた。

そして、

「華霞さん、華霞さん、これ、日記ですよ!」

「日記!?!」

電気スタンドを机に置き、華霞がミラに駆け寄る。

ミラは、華霞に開いたままの本を渡した。

そのページの頭には、「七月十二日」と書かれている。

そして、次のページの頭は「七月十三日」。

暦が【進種】の物とは違うが、今日は何をした、と書かれている内容から見ても、これは日記だった。

どうやら、この部屋の主は、毎日日記をつけていたらしい。

「本当だわ……これを読めば、何かわかるかも……」

華霞はそう言つと、日記の最初のページから食い入るように読み始めた。

無言で読み進める華霞をその場に残して、ミラは部屋を見回す。

と、対面の壁にある扉が目に入った。

近寄って行つて扉を開くと、奥にはもう一つ部屋があった。

こちらの部屋はかなり簡素で、ベッドが一つ置いてあるだけだ。

寝るためだけの部屋というのがしっくりくる。

だが、その壁の一部に妙な部分があった。

壁に切れ目があつて、微妙に隙間が空いているのだ。

「あれ、何だろ……」

首を傾げながら近寄る。

「これって……」

近くで見ると、壁に人が一人通れるくらいの穴が開いていて、壁が回転するようになってるのがわかる。

隠し扉だ。

（もしかして、誰かがいたのかも……）

床の埃の積もり方で、その隠し扉が開かれたのが最近ではなくかなり前だとわかる。

おそらく、扉を開けた誰かが慌てていたか何かできちんと閉じなかつたのだろう。

だが、ミラはそこまで気づかなかつた。

隠し扉に手を置き、慎重に回す。

隠し扉の奥には階段があり、上へと続いていた。

ミラはごくりと唾を飲み込み、暗い階段をゆっくりと上り始めた。

階段はそれほど長い物ではなく、常識的な一階分の範疇だった。

上がった場所は、おそらく地下三階だろう。

階段の突き当たりは行き止まりになっていたが、下と同じように回転扉になっていた。

ミラは、回転扉を抜けて外に出る。

その途端、一斉に天井の蛍光灯が光を発した。

だが、光っている蛍光灯は全体の半分にも満たず、大部分は壊れていた。

金属製の壁や天井にはたくさんの傷跡が刻まれ、何らかの戦いがあつたことを物語っている。

「ここは……」

明るくなった部屋を見渡してミラが呟く。

その部屋は今までとは比べ物にならないほど広く、大人ほどの背の高さをした円筒形の何かがずらりと並んでいる。

その数は、数百個はあるだろうか。

だが、その円筒形の何かも、かなりの数が壊れていた。

「っ」

その光景を見た瞬間、何か言い知れない感情がミラの心をかき乱した。

なぜかはわからないが、無性にこの場所が怖いと、そう思った。

その考えを振り払おうと、ぶるぶると頭を振ったミラの目に、ちらりと人影が見えた。

慌てて、【装殻】を構えて身構える。

「誰か、いるの？」

声を投げかけるが、返事は返ってこない。

ミラは、周囲に視線を散らしながら、ゆっくりと足を進めた。

その人影は、一つの円筒の後ろにいるようだ。

盾を出しながら近づいたミラは、それに近づき、

「ひっ」

あることに気がついて、息を呑んだ。

人影があつたのは、円筒の後ろではなく 中だ。

円筒が透き通っているガラスでできていたから勘違いをしていたのだ。

円筒の中には何かの液体が満たされていて、その中に、人が浮いていた。

しかも、ただの人ではない。

そこに浮かんでいたのは、皮を剥ぎ取られた人だったのだ。

筋肉の標本のような姿に驚いて、後退ったミラの背中が別の水槽に触れる。

振り返ってみると、その水槽に入っていたのは、骨だけになった人。

「きゃあああああつ!!」

ミラは、思わず悲鳴を上げて走り出した。

こういつとき、理性的に行動するのは非常に難しい。

怖いのなら隠し扉まで戻ればいいものを、ミラはどんどん奥に走ってしまった。

視界に映る水槽の中には、様々な人体標本が浮かんでいた。

骨格だけのもの、骨格の中に内臓だけ浮かんでいるもの、骨格と内臓、血管があるもの、そして

そして 【ハンター】。

「え……」

それが目に入った瞬間、ミラは恐怖も忘れて立ち止まっていた。

その水槽の中に浮かんでいたのは、ミラが二回見た、【サムライ】だった。

☐一月一日

私は、この日生まれた。

生まれたと感じるときから私は老人の姿であり、それは不自然だと理解しているが、しかし私はこの日生まれたのだ。

この日は、私にとって世界の始まった日。

そう、私が神の言葉を聞いた日だ。

故に、私はこの日から私の行動の全てを書き記すことにした。

私とは別の、神の言葉を聞いた誰かが道を失ったとき、これが助けになれば幸いだ。

神は、私に命じられた。

進化した者たちによってこの世界から追放された人間を呼び戻すため、進種と呼ばれる種、そして、進化をもたらすモノの影響を受けている原種と呼ばれる種を滅ぼせと。

しかし、既に進種は世界中に存在し、私一人で滅ぼすことの適う数ではなかった。

私は神に尋ねた、どのようにすれば滅ぼせるのかと。すると、神は私をこの地へと導いた。

かつて人間が栄華を極め、そして今は誰一人としていないこの場所へ。

そして神は、この地の地下に過学のものである遺跡を創られた。

過学とは存在することになっているが、断片としての道具しか存在していないものだ。

だからこそ、この遺跡は絶対に滅ぶべき者から隠し通さなければならぬ。

この地は、神に与えられし命を創る場所なのだから』

.....

『一月十五日

ようやく装置の使い方にも慣れ、神に与えられた生命の設計図を元にした培養を始めることができた。

二つの要素の組み合わせからなるそれは、遺伝子と呼ぶのだそうだ。

私の最初の仕事は、神に与えられた九種の遺伝子を基に九種のインターを生み出すことだった。

それと同時に、脳に刷り込むためのデータも構築しなければならぬ。

それは 』

.....

『三月十七日

成長した百人のブレイドが完成し、刷り込みも成功した。
この成功までには多くの失敗があり、完璧に思えようともテスト
をすることが重要だと深く心に刻んだ』

.....

『三月十八日

再び神にお会いした。

神は、百人のブレイドを殺し合わせよと仰った。

私は、それを訝しく思いながら、その命に従った。

しかし、神は私などの及ばぬ考えを持っておられた。

最後に生き残った、最も優れたブレイドの身体的特徴を全て数値
化し、それを複製する術を私は神に与えられたのだ。

これにより、同じ遺伝子を持つていても成長の過程で生まれる差
を無くし、最も優れたものだけを作ることができるようになったの
だ』

.....

『四月九日

オリジナルブレイドが死亡。

しかし、イミテイション量産型ブレイドは高い成果を上げている。

成長や生理現象といった生命らしさをもつオリジナルよりもイミ
テイションの方が優れているという結果を残すこととなったが、思
えば自明のことであるのかもしれない』

「何てことなの.....」

華霞は、一度日記から目を離して、頭痛でもするかのように顔を押しさえた。

たった四か月分。

それだけの記述を斜めに読んだだけで、世界がひっくり返るような発見をしてしまった。

この、荒唐無稽な物語と言う方が似合いそうな日記の通りだとすれば、【ハンター】は【進種】を滅ぼすためだけに存在する、生命かどうかも怪しい代物だと言うことになる。

いや、重要なのはそこではない。

今までだって【ハンター】は【進種】にとって相容れない相手だったのであり、それに確証が与えられただけだ。

しかし、これが事実ならば、【ハンター】を複製する装置とやらを破壊してしまえば、【ハンター】は増えることができなくなるのだ。

と、そこまで考えて、華霞はある疑問を抱く。

（そんなに大事な施設なら、どうして放置なんてするのよ……）

一番新しい日記になら何かヒントがあるかと、本棚の反対の端に向かい、新しい日記を抜き出した。

一番後ろのページを開き、その内容を見る。

『十二月三十一日

もう何度目になるだろうか、またしてもエイシスアルカディアの攻略に失敗した。

進種はますます知恵をつけ、三人の神託を受けた者と協力しても滅ぼすことが出来ない。

神はもう長く姿を見せず、嫌でも試練の最中なのだと思います。

今回の敗北で多くのハンターを失った。複製とは言え、また同じ数を生産するにはしばらく時間がかかるだろう。

この間に、あの計画を進めておくことにする。

今回のエイシスアルカディア攻略作戦における反省点だが

「え？」

華霞は思わず声を上げた。

そこに書かれていたエイシスアルカディアの襲撃は、華霞が一年前に経験した物と瓜二つだったのだ。

違うのは、それを体験した陣営が逆になっていることだ。

【進種】が行ったと書いてある反撃策のほとんどを華霞本人が指揮したのだから、間違いようがなかった。

「そんな、どうして？」

日記の終わりは一年前。

だが、【ハンター】が見られなくなったのは半年前だ。

いなくなつてすぐには気づけなかつたかもしれないが、半年はいくらなんでも時期がずれ過ぎだ。

その部分の日記はないのか、と思つたとき、

ふと、引つかかることがあつた。

(毎日日記をつけるような人が、書いている途中の日記をわざわざ本棚にしまつかしら?)

自分ならしまわない。しまつとすれば

「机の引き出し!」

華霞は、日記を放り出して机に駆け寄り、手当たり次第に引き出しを引つ張り出す。

そして、上から三つ目の引き出しを開けると、その中には一冊の日記帳が納められていた。

ミラは、水槽の間をゆつくりと歩いてた。

【ハンター】と対面したせいで、変に冷静になつてしまつたのだ。

未だに怖いが、襲ってこないのなら何とかかなりそうだった。

水槽の中身は相変わらず不気味なのだが、ある種の規則性があるのに気がつく。

所々割れてしまっているが、横の列の水槽の中身が同じ状態なのだ。

骨格だけの列、筋肉が見えている列、そして完全な人の姿の列と
というような感じだ。

完全な人型をしているのは、【サムライ】含めて九種類の人がいる。

種類という言い方は悪いが、本当に顔が九パターンしかないのだ。

(まるで、ハンターの人形を作ってるみたい……)

「まさかね」

呟いて、自分の考えを打ち消すミラだが、実際は大正解。

それどころか、作っているのは人形ではなく【ハンター】そのものだ。

「あ、何だろ、あれ……」

水槽の列の向こうに、何か大きな装置が見えた。

不気味な水槽の列から抜け出し、装置の前に立つ。

何だかよくわからないボタンやレバーのついた装置だ。

ここに華霞がいれば、それは【ハンター】を作るための装置だと教えてくれるだろうが、今は華霞はいない。

適当に弄ってみるが、装置は何の反応も示さない。

「やっぱり動かないよね」

当たり前のように言うミラ。

それもそのはず、装置には大きな傷が刻まれ、完全に破壊されていたのだ。

これこそが、【ハンター】がこの遺跡を捨てた理由。

【ハンター】生産のための装置が壊れてしまったからだ。

そして、それを修理できるほど、この装置の構造を理解していなかった。

使い方がわかれば構造はしらなくても使うことは出来る。

だが、構造を知らなければ、修理は出来ないのだ。

それゆえに、【ハンター】は己の生命線の一つであるこの遺跡を捨てたのだ。

「うーん……」

そんなことは知らないミラは、首を捻りながら装置の前を離れる。そのままつろつろしていると、どこかに続いている扉を発見した。

「うわぁ……見つけちゃった」

嫌そうな顔で呟く。

この先にもこんな不気味な部屋が広がっているかもしれないと思うと、かなり憂鬱だ。

(でも、もしかしたらこの先に隠れてるかもしれないし……)

実際にはいない誰かの影を追うために、ミラはその扉へと向かった。

【ハンター】を生産する部屋の、その奥。

ミラが足を踏み入れると、彼女を待っていたかのように電灯が点る。

その部屋は縦長い部屋で、奥に向かって五つの水槽が並んでいた。

「あれ？」

ミラは不思議そうに首を傾げる。

手前から見える水槽の中身は、空っぽだったのだ。

空と言っても、大部屋の水槽を満たしていたのと同じ液体だけは入っている。

この液体に守られて、装置が死んでから少なくとも半年は経つのに、中の「ハンター」は原型を保っていた。

普通の水ならとくに腐敗していただろうし、そもそも呼吸が出来ない。

成分は何かわからないが、不思議な液体なのは確かだった。

「空なのかな？」

中身が無いことを不思議に思ったミラは、水槽に手をつけて中を覗き込んだ。

覗いて、しまった。

液体越しにぼやける視界。

水槽のガラスに写り込む、自分の顔。

ただ違うのは、それを見ているのが水槽の内側か外側かということ。

それはきっかけ。

引き金を引かれ、記憶は遡る。

『あなたはまだ、世界の調和を乱す存在ではないのね』

『お前は希望なんだよ。ミラ』

最初の記憶。

最初だと思っていた記憶の、さらに以前。

たった半年分しか存在しない、ミラの記憶の源流へ。

『^{デルタ}18、意識レベルが覚醒境界を越えます』

『目覚めるのか!?!』

初めて目を開いたとき、見えたのは揺らぐ水。

そして、その向こうに写った自分の顔だった。

その向こうから、誰かが近づいてくる。

顔は良く見えない。

だが、声は聞こえた。

『よく、目覚めてくれた……』

老人の声。

愛おしそうにガラスを撫でる手が見える。

『これより 18をオリジナルとする』

『^{ガム}オリジナルはどうされますか？』

『破棄して構わない。タイプの方が優れている』

ガラスの外でそんな会話を交わして、老人はもう一回私を見た。

『お前は、私たちの希望だ。』

進種殲滅の切り札たる第十のハンター。

変じ騙す者 ミラージュ』

MONSTER HUNTER EVOLVE

第二十話「^{ロストミラージュ}屋気楼に消ゆ」

第二十話「塵気楼に消ゆ」（後編）

『二月四日

予想外のこと起きた。

タイプが覚醒したのだ。

は先に覚醒していた と異なり、体内に現存する全ての進種から抽出した因子を持つ。

ゆえに、生命としてはあまりに不安定であり、覚醒するとは思っていなかったのだが、神は私を見捨ててはいなかったようだ。

刷り込み用のデータ作成を急ぐ必要がある』

.....

『二月六日

刷り込み用のデータ検証のためのテストボディとして、イミテイションミラージュの作製を開始する。

イミテイションが完成する前にデータが完成すればいいのだが』

.....

『三月三日

まさか、まさかこんなことが起きるとは。

まだテスト段階にも関わらず、イミテイションミラージュの力は申し分ない。

たった四体でラオシャンロンの討伐に成功したのだ。

しかし、イミテイションの前にあの黒い災禍が現れた。

一定以上の力を持つ進種を消し去る、神が遣わされたもう一つの狩人 ミラボレアスが。

進種の力を組み込んだミラージュは、この世界にとってはハンタ

ーではなく進種とみなされてしまうようだ。
もしものことを考えて、オリジナルをシュレイドに送る手筈を整えることにした。

明日に、オリジナルへの刷り込みも行うことにする』

「う、わあああああああつ！！」

それが自分の叫び声だと、気づくのに少し時間がかかった。

振り抜いた左手。

朱色の【装殻】から白刃の鎌が展開し、目の前のガラスを叩き割る。

勢い良く噴出した人工の羊水が頭から降りかかり、それを懐しいと感じて涙が浮かんだ。

「違う……違うよ、違う！」

滅茶苦茶に振り回した手で、次々に水槽を叩き割りながら、ミラはふらふらと歩く。

そんなミラを、部屋の奥の扉が静かに迎えた。

電灯の無い、暗い部屋。

当然だ、天井が無いのだから。

この部屋の天井は、あの日、ミラの目の前で崩れたのだから。

【ラオシャンロン】討伐後、四体の【イミテーションミラージュ】は【ミラボレアス】の襲撃を受けた。

三体はその場で殺されたが、一体は回収された。

その一体を、黒い女が追いかけて来て殺した、あの日に。

その部屋にあったのは、ガラスの割れた一つの水槽。

ミラの記憶に残る言葉の後、【ミラボレアス】を倒すために現れた【リッパー】がつけた傷だ。

そうして割れた水槽からミラは逃げ出し、無我夢中で彷徨ううちに地上に出、川に落ちたのだ。

全て。

そう、全て、思い出した。

思い出したくなかったことも、全部。

「私は……ミラージュ。ハンター、だったんだ……」

三月三日。

その日が、日記の最後のページだった。

「そんな……嘘よ」

取り落とした日記が、音を立てて床に落ちる。

最後の日記に書かれていたのは、ほぼ全てが【ミラージュ】と命名された【ハンター】についてだった。

油断を誘うために、初めて雌性体として創られた【ハンター】。

あらゆる【進種】の姿を真似て生活圏に入り込み、あらゆる相手に対して相性的にアドバンテージを取れる【ハンター】。

その力の秘密は、【能力換装】。

力だけではなく、見た目すら変えてしまう、変身能力。

これだけ読んで、その可能性を考えないほど、華霞は愚鈍ではなかった。

むしろ、そうだと考える方が自然ですらあった。

(お帰りなさいませ、ってそういう意味だったのね……)

この遺跡を守っていた扉は、^{システム}【ミラージュ】だと判断したからこそ迎え入れたのだ。

華霞のことは捕獲した【進種】だとも思ったのだろう。

「こんな、こんなことを知るくらいなら……頼まなかったら……」

普通に、調査団を率いて来て、散々調べた拳句に諦める。

そんな徒労が、今は何よりも魅力的だった。

「そうだ、ミラちゃんは！」

これを知られるわけにはいかないと、部屋を見回す。

とりあえず部屋にいないことに安心して、それから全く安心できないことに気づく。

この遺跡はミラを【ミラージユ】と認識しているのだ、変なメッセージで教えられでもしたらたまらない。

ここは、一度外に出るべきだろう。

ミラがいなければもう入れないかもしれないが、それならそれでいい。

都合の良いところだけを報告すればいいのだ。

そう決めて、ミラを探しに行こうとしたとき、

でも と、華霞の胸中を冷たい風が吹き抜けた。

ミラという少女は、本当に記憶喪失なのだろうか？

変じ騙す者、【ミラージュ】。

その役割に忠実に、ミラを演じているだけではないのか？

もしも、そうだったなら……

そのとき、扉の向こうから、ひたひたと足音が聞こえてきた。

華霞は思わず机の影に身を隠してしまった。

机の一部も一緒に消さないように、大荒れの精神を集中し【大地ガイアの絆タイズ】で姿を消す。

足音が近づく。

ひたひたという音に混ざって、水滴の落ちる音が聞こえた。

近くで、足を止める気配。

「いない……？」

聞き覚えのある声だ。

ミラの声だと思う。

でも、だからと言って安心はできない。

相手がミラかどうか問題ではなく、ミラが【ハンター】か

どうかが問題なのだ。

華霞が息を殺して身を潜めていると、やがて足音が遠ざかり、入ってきた扉とは逆の自動扉から出て行った。

「セルティ、真面目に探しているの？」

「さ、探してるわよ」

時間稼ぎをしようとして、あからさまに手を抜いていたのがばれたらしい。

ミュリエリアにじろりと睨まれて、セレスティアは慌てて草をがさがさと掻き分け始めた。

場所は【旧密林】エリア。

二人は【クレオパピオン】探しの真っ最中だった。

セレスティアの装備は【エンプレスXシリーズ】と【煌竜剣【比翼】】の一振り。

ミュリエリアは【ランポスシリーズ】に【煌竜剣【比翼】】のもう一振りを装備している。

ミラが【オデッセイ】を持って行ってしまったので、代わりにセ

レスタが貸してくれたのだ。

だが、二人が今、手に持っているのは剣ではなく【虫あみグレート】だ。

非常に壊れ難い、最高級の【虫あみ】である。

「私、何でこんなことしてるのよ……」

草を掻き分けながらばやくセレスティアに、ミュリエリアが「あなたが探してるのでしょうか」と言う。

「そうだけど……はあ、もうちょっと別の頼みにすればよかった……」

ミュリエリアに聞こえないように、小声でセレスティアが呟く。

そのとき、遠くの方から、何か大きな音が聞こえてきた。

「ミュリーイ、聞こえた？」

「ええ」

緊張した表情で、ミュリエリアが頷く。

ここはエリア内だ。モンスターと出会うことも、十分に考えられる。

どつちやら、音源は近づいてきているようで、次第に音がはっきり聞こえるようになる。

バキバキと、木をなぎ倒す音だ。

その音がどんどん近づいて来る。

「ミューリイ、下がってて」

ミュリエリアを背後に庇いながら【虫あみグレート】を投げ捨て、セレスティアが【煌竜剣【比翼】】を抜く。

そして、深い木々から、巨大な獣が姿を見せた。

「ババコンガ!？」

セレスティアが驚いたようにその獣の名前を叫ぶ。

以前にミラが戦ったものとは違い、緑の体毛に覆われた、【ババコンガ亜種】だ。

しかし、セレスティアはそれに驚いたわけではない。

【ババコンガ亜種】の全身には無数の傷が刻まれ、体毛の色がわからないほど血に染まっていた。

裂傷だけでなく、炎によって焼かれた火傷の痕もある。

両手の長い爪は折れ、木の実の汁で固めている頭頂部の毛もボサボサになってしまっていた。

それだけの傷を与えた敵から、【ババコンガ亜種】は逃げていた

のだ。

後ろを振り返る余裕も無く、ただ、走る。

だが

一心不乱に走っていた【ババコンガ亜種】が、体を仰け反らせて、動きを止める。

その頭から、青緑色の【片手剣】の刃が突き出していた。

背後から何者かが【片手剣】で頭を貫いたのだ。

一瞬の硬直の後、大地に倒れる【ババコンガ亜種】。

巨体が沈んだその後ろには、一人の少女が立っていた。

ミュリエリアが見慣れた白い鎧に身を包んだ少女。

白い髪は、リオレウスの赤褐色に染まっている

【ババコンガ亜種】にの頭から【オデッセイ】を抜き取り、刀身を染める血を、乱暴に振り払った。

「ミラ？」

同じ姿なのに、何か違和感を感じて、ミュリエリアが呼びかける。

声に気がついた少女が顔を上げ、無機質な瞳が二人の姿を捉えた。

その瞬間、少女が翼を広げて空に舞い上がる。

見る必要など無く、【進種】の能力は最初から体に刻み込まれ、「ミラ」のように言葉を紡ぐ必要もない。

原種色の翼を広げた少女 【ミラージュ】は手から火球を放ちながら、二人に襲い掛かった。

「なあ！？」

セレスティアが慌てて自らも火球を放ち、迎撃、相殺する。

激突した炎の向こうから、【ミラージュ】が滑空してくる。

勢いを乗せて振られた【オデッセイ】をセレスティアは【煌竜剣】【比翼】で何とか受け止める。

「ミラっ！ あんた何すんのよ！」

火花を散らす二本の刃を挟んで、セレスティアが【ミラージュ】を睨みつける。

だが、【ミラージュ】は無表情を崩さない。

軽く地面を蹴って後退し、ただ無言で身構える。

ぞくりと、セレスティアの背筋に寒気が走った。

今、自分は、何と戦っているんだろう？

錯覚する。

まるで、【ハンター】だ。

「どっぴうつつも　っ！」

全てを言い切る前に、身を伏せる。

集束された熱線が空を切り裂き、セレスティアの背後の木が数本、炭になった切り口を晒して倒れる。

セレスティアは、起き上がりながら問いかける。

「あんだ、本気？」

返答は、再度の熱線だった。

今度は、予想済み。横っ飛びに飛び、火球を放つ。

炎の応酬。

熱線は大気を焼いて空へ消え、火球は【ミラーージュ】の足元で爆発する。

「セルティ！」

「怒るならあっちでしょうが！」

ミュリエリアの声に叫び返し、素早く飛び退いた。

土煙から【ミラージュ】が飛び出し、セレスティアがさつきまでいた場所を薙ぐ。

「何だかわかんないけど、とりあえずぶっ飛ばして大人しくして」
セレスティアは手に火球を生み出す。

「事情聴取と説教よ！」

投げ放った火球が駆け出した【ミラージュ】を掠めて地面を吹き飛ばす。

【ミラージュ】は弧を描いてセレスティアの側面に走り、ありえないほど鋭角の軌道で飛びかかった。

踏み切りの瞬間、【ミラージュ】の髪は闇色に変わっている。

強化された脚力による踏み切りで、一瞬にして間合いを詰める。

突き出された【オデッセイ】を【煌竜剣【比翼】】で受けて横に流し、火球を生み出した手を突き出す。

目の前に火の玉を突き出された【ミラージュ】は止む無く後ろに退き、流石にそのまま火球を放つわけにもいかないセレスティアは足元に狙いをずらして火球を放つ。

低い軌道の火球を【ミラージュ】は飛び越える。

地面に足をつけたとき、ティガレックス 蜃気楼は黄色と青の姿を見せる。

斜めの斬り下ろし。

セレスティアは素早く身を躲し、それなりの斬れ味しかもたない【オデッセイ】が臂力だけで木の幹を叩き斬る。

その威力に驚いたように、セレスティアが二、三步後ろに下がる。

【ミラージュ】が追撃に向かい、

「かかったあ！」

そんな声と共に、セレスティアが後方宙返りサマーソルトをする。

振り上がった足が【ミラージュ】の手を打ち据え、【オデッセイ】が吹き飛ばされる。

これで何とか、と思いながら着地したセレスティア。

目の前にクロスされた二本の刃が迫っていた。

青い髪の【ミラージュ】。

二本の鎌が、セレスティアの胸元を襲う。

幸い、防具を斬り裂くまでは至らなかつたが、それでも胸を強打したのだ。

セレスティアは、咳き込みながらたたたらを踏む。

その隙を見逃さず、【ミラージュ】は走り出した。

後方に隠れていた、ミュリエリアに向かって。

ミュリエリアが目を大きく見開き、それでも反射的に【煌竜剣】比翼【】を抜く。

だが、構えるよりも早く【ミラージュ】の鎌がそれを打ち上げる。

ミュリエリアの手を離れ、くるくると回る【煌竜剣】比翼【】。

【ミラージュ】は鎌の光る腕を振り上げる。

その標的は、ミュリエリア。

「ミラあああああつ!!」

叫んで、セレスティアが飛び出す。

疾走。

途中、落下してきた【煌竜剣】比翼【】を受け止める。

回転している柄を掴み損ね、刃を握り込んだ手の平に熱い痛みを感じるが、握り直す時間も無い。

手元に揃った【双剣】が本来の力を示し、さらに加速。

そして

その一瞬に起こったことを、ミュリエリアは一生忘れられないと

思った。

赤い練気に包まれた【煌竜剣】【比翼】が、背後から【ミラージュ】の胸を貫いて突き出し、練気よりも赤い血が、刃を伝う。

「あ……あ……」

ただ、ミユリエリアを守ろうと、無我夢中だった。

呆然と、己の手を見つめながらセレスティアが後退り、その拍子に刃が抜ける。

刃によって塞き止められていた血が恐ろしい勢いで噴き出し、ミユリエリアの全身に降りかかる。

能力を維持できなくなった【ミラーージュ】の腕から【装殻】が消え、地面に膝を着く。

「ミラー！」

倒れ掛かってきたミラを受け止め、膝の上に仰向けに寝かせる。

胸に空いた傷からは止め処なく血が流れ、誰がどう見ても致命傷だった。

仮に六花がこの場所にいたとしても、匙を投げる以外に出来ることとはないだろう。

「ミラー……」

ミュリエリアにも、何も出来ない。

ただ力無く名前を呼んだ声に、【ミラージュ】は目を向けた。死を目前にした今でさえ、その瞳は無機質なままで。

【ミラージュ】は震える両腕をゆっくりと伸ばす。

その手は、ミュリエリアの頬を滑り　首にかかる。

「っ……ミ、ラ……」

ぐっと、首を絞める手に力を入れる気配に、ミュリエリアが苦しげな声を出す。

だが、その手には、人を絞め殺せるほどの力は残っていなかった。

苦しいのは、体ではなく、心だ。

その手に力が無いことが、

それなのに、まだ殺そうとしていることが、悲しくて、苦しい。

「ミラあっ」

とうとう、ミュリエリアの目から涙が零れ落ちた。

一滴、一滴。

落ちる雫が頬を濡らす度、【ミラージュ】の手から力が抜けてい

く。

もう、それだけの力も残っていないのだ。

一滴、一滴。

胸の傷から血が滴り落ちる度、【ミラージュ】の命が零れていく。

そして、やけにゆっくりと、その手が落ちた。

膝の上に抱えた体が、急激に重くなった気がする。

「ミラー……ミラー？」

名前を呼んでも、揺すっても、何をしても、もう反応は返らない。

「ミラー……嫌あああああああっ！」

現実よ覆れとばかりに上げられたミュリエリアの声が、【密林】に響く。

それでも、この事実は変わらない。

【ミラージュ】は、死んだ。

コトコトと煮えるスープをすくって、一口味見。

「うん、美味しい」

セレストイトは、満足そうに頷いた。

台所の窓から見える空には、そろそろ星が瞬こつとしている。

空を見上げながら、セレストイトは呟く。

「三人とも、早く帰ってこないかな」

NEXT>第二十一話「さよなら、そして」

<簡易キャラクター紹介>

名前：ミラ

年齢：1

性別：女

種族：ハンター（オリジナルミラージュ）

能力：【能力換装】

第二十話「厩気楼に消ゆ」(後編)(後書き)

えー、何だか賛否両論ありそうな第二十話をお届けします。

書く側のテンションがここまで下がる話はもう無いんじゃないかと思えますね。

おそらくそれなりにいただろう「ミラハ Hunter 説」の方、正解です。

白というカラーから「ミラハ ルーツ進種」と思っていた方は外れです。

第二十一話「さよなら、そして」（前書き）

一話完結にしなくてもよくなったので、多少短くなりました。
その代わり更新速度は上がる、かもしれません。

第二十一話「さよなら、そして」

【ミラボレアス】による【メゼポルタ基地】の襲撃。

【ハンター】生産工場である地下三階レベルスリーを守るため、【ハンター】の待機所である地下二階レベルツーで激しい防衛戦が展開されていた。

黒い炎を操り、【進種】から化け物と称される【ハンター】を容易く圧倒する【ミラボレアス】。

【ミラボレアス】は、ある一定以上の力を持つものだけを排除するのだが、邪魔をする相手は同様に敵と見なし排除する。

回収した【イミテイションミラージュ】一体のために、【メゼポルタ基地】は崩壊へと向かっていた。

神託を受けた四人の中の一人。

【ミラージュ】という新しい【ハンター】を創り上げた老人は、地下四階レベルフォーの自室からレベル3へと向かい、【オリジナルミラージュ】への刷り込みの指示を出していた。

複製されたばかりの【ハンター】 オリジナルの場合は培養と
言うべきだが は赤ん坊と同じか、それ以上に何も知らない状態
だ。

その脳に、直接情報を書き込む行為、それが刷り込みである。

一般の九種の【ハンター】の場合は、使用する武器の扱いと、進

種を殲滅するという絶対目的の二つ。

これによって、あの【ハンター】のパーソナリティが確立されるのだ。

だが、【ミラージュ】の場合はそれよりさらに複雑だ。

【大剣】 【太刀】 【片手剣】 【双剣】 【ランス】 【ガンランス】
【ハンマー】 【狩猟笛】 【ボウガン】 【弓】の十種類の武器の扱い。

【進種】の社会での常識その他の情報（あくまで【ハンター】側が調べたことで、不備も多いが）。

能力の使い方。

そして、普通の【ハンター】同様の絶対目的の四つ。

最初に作られた【イミテーションミラージュ】は、その刷り込みが成功するかどうかを試すテストボディなのだ。

結果から言えばそれは成功し、【ミラボレアス】の襲撃を前に、
【オリジナルミラージュ】への刷り込みを行っていた。

「進捗状況は？」

「現在四十五パーセントです」

報告を聞いて、老人は顔を歪めた。

時間が無い。

が、刷り込みはデリケートな作業だ。これ以上速度は上げられない。

老人は、装置の前から離れ、「オリジナルミラージュ」の入った水槽に手を触れる。

水槽の中からは、「オリジナルミラージュ」が彼を見ていた。

老人は、その未だ無知な瞳を見返して語りかける。

『お前は希望なんだよ。ミラ 』

MONSTER HUNTER EVOLVE

第二十一話「さよなら、そして」

ダウト
知識の月、第七日。

祝うことの出来なかったミュリエリアの誕生日から、三日が過ぎ
ていた。

この日の昼頃、工房はエイシスアルカディアから訪れた数人の客

人を迎えていた。

六花、エルミナ、グラキシア、石楠花、フェルルートの五人だ。

ミュリエリアが送った手紙で事態を知り、急遽駆けつけて来たのである。

ミラの部屋に入った五人を、ベッドの上に寝かされた【ミラージユ】の遺体が迎える。

「ミラお姉ちゃん……っ」

「ミラちゃんっ」

石楠花、グラキシアの二人がベッドに駆け寄る。

手紙を貰っても、信じられなかった。

いや、こうして遺体を見ても、まだ信じられない。

「少し、いいか？」

二人の後ろから六花が近づき、【ミラージユ】の首筋に触れる。

心臓の鼓動と共に触れるはずの脈はなく、ただ、冷たい。

六花は、首筋から手を離し、綺麗に揃えられた髪を撫でた。

「本当に、死んでるのか……？」

恐る恐る聞いてきたエルミナに、六花は黙って頷く。

「そんな……何とかならないのか？」

何とかなるはずなのはわかっている。

それでも、言わずにはいられなかった。

「六花先輩なら　っ」

言い募るエルミナに、六花は沈痛な面持ちで首を振る。

「医学は、生きているものを助けることしか、できない。

それが、限界だ……」

「……ごめん、わかってはいるんだ、うん」

エルミナが俯きながら言う。

バン、と壁が大きな音を立てる。

その音に振り返る四人。

音を立てたのは、戸口のところで立ち止まっていたフェルルートだった。

フェルルートは壁を叩いた手を固く握り締め、声を絞り出す。

「お姉ちゃんを悲しませないって言ったのに……あなたは、嘘つきです……」

.....

工房の一階。

普段はミュリエリアが色々と作業している場所は、大勢の人でこつた返していた。

ミュリエリア、セレスティア、セレスタイトの三人はもちろん、ミラが知り合った多くの人が、弔問客として訪れているのだ。

ミュリエリアが直接手紙で伝えることが出来たのは、ベルゼラ、メイミイ、ルティエ、ルクスだけなのだが、

ベルゼラがセアラとレグルに、ルクスがアンゼリカに連絡し、アンゼリカからリーヤへ、リーヤがダブルグへと、そんな風にいつの間にか構築されていた情報網で事情が伝わり、

ベルゼラ、セアラ、レグル、ルティエ、メイミイ、ルクス、アンゼリカ、リーヤ、ダブルグ、グレイ、エンダ、ラキ、ベガード、柊也、茉莉、エイシスアルカディアの五人を含めると二十人を超える人数が集まっていた。

椅子などまるで足りず、作業台や階段を椅子代わりに座っていたり、壁にもたれたまま立っていたり、床に座っていたり、併設されているキッチンに場所を確保している者もいる。

それだけ大勢の人が集まっているのにも関わらず、ほとんど会話も無く、重苦しい沈黙だけがあった。

ギシギシと階段を軋ませて、六花たちが二階から下りて来る。

階段に座っていた数人が端に寄って、道を開けた。

作業場に下りた五人にミュリエリアが静かに頭を下げる。

定型の挨拶は、工房を訪れた際に済ませているし、それ以上に語ることは思いつかなかった。

六花もただ礼を返し「それで、」と口を開いた。

「華霞は？」

六花やエルミナは、弔問の他にももう一つの用があった。

彼女らの同僚である華霞が、行方不明なのだ。

華霞の疑問にミュリエリアは首を横に振る。

「いいえ、まだ……。ベルたちに探してもらったのですけど……」

「見つけれなかった。ごめん」

話を振られたベルゼラが頭を下げる。

六花たちより先、昨日の内に工房を訪れたメンバーから何人かに頼んで華霞を探してもらったのだが、華霞はまだ見つかっていない。

「そうか……」

「華霞先輩まで、死んだりしないよな……」

エルミナが呟くが、それには誰も答えない。

答えられない。

もう、今日で三日。

生きているのなら、とつくに帰ってきているはずだった。

それなのに、まだ帰らないということは、何か動けないような事態に陥っているか、それとも……死んでいるか。

「あのミラ殿を……倒してしまうほどの相手だ。身を守る術なくして生き残るのは、難しいだろう」

壁際に立っていたベガードが、言い難そうに言う。

だが、正確にはその言葉は間違っている。

なぜなら、【ミラージュ】を倒したのはセレスティアだからだ。

もし、華霞が殺されるとすれば、その犯人は【ミラージュ】である可能性が一番高い。

だが、ベガードをはじめとして、ほとんど全員がその事実を知らない。

知っているのは、その場にいた二人とセレスタイトだけだ。

ミュリエリアは、その事実を伏せておこうと決めていた。

だから、ベガードの間違いを指摘できず、口を噤む。

だが、

「違うわ」

階段に座っていたセレスティアの音が響く。

その声は小さかったが、静まり返っていた作業場にはよく通った。

「華霞つて人は、少なくともミラを殺した奴には殺されてないわ」

「なぜ、そう言いきれる？」

六花がセレスティアに聞く。

「それは」

「セルティ！」

「姉さん！」

ミュリエリアとセレスタイトが警告を発するが、

「それは、私がおのれを殺してないからよ」

セレスティアは、そう言い切った。

黙っていらなかったのだ。

あの戦いの後「ミラを殺してしまった」とセレスティアは自分を責めた。

それを言っても何も変わらないし、あの状況では仕方なかったのだと、ミュリエリアとセレスタイトに言われ、黙っておくこと一度は決めた。

だが、それを言わないことで、まだ生きているかもしれない華霞が死んだことにされていくのを、黙って見ていることは出来なかった。

そんな想いで、告白された言葉。

何人かはその意味を計りかねて疑問を浮かべ、聡明な何人かはその言葉の意味するところを悟って顔を強張らせる。

「……言葉には気をつけるです」

微妙な空気を破って、セアラが口を開く。

「……それだと、まるであなたがミラさんを殺したように聞こえます」

「おいおい、セアラ何言ってるんだよ。そんなわけないっての。変なこと言つなよな、あはははは」

レグルがそれを笑い飛ばそうとするが、セアラの指摘で意味を計

りかねていた何人かもそれに気づく。

セアラの言う通り、セレスティアの言葉は、そういう意味にしか取れなかった。

「あはは……は……マジで？」

「……それを今聞いてるです。どういふことですか？」

赤い一つ目が鋭くセレスティアを射抜く。

セアラにとって、ミラはそれまでの人生観を変えてしまった特別な人だ。

ミラを殺したと言われて、平静でいられるわけがない。

一瞬が永遠にすら思えた沈黙の後、セレスティアは言う。

「そうよ。私が……私が、ミラを殺したのよ」

声にならない驚きが、その場に満ちる。

「にゃ、にゃんでっ」

最初に声を上げたのは、メイミイだった。

心の内で密かにミラを主人と定めていた【アイルー進種】の少女は、声を荒げてセレスティアに詰め寄る。

「にゃんでそんなことをしたんですかっ!？」

「納得いく説明を聞かせて貰うの！」

「そうですわね。理由を教えてくださいいただきますわ」

茉莉、ルテイエが続き、

「それはっ、私だって殺したくなんてなかったわよ！」

セレスティアが叫ぶ。

「ではなぜ、そうしなければならなかったんだ？」

と、ルクス。

年の功とでも言うのか、彼は比較的冷静なようだった。

「……だって！ ミラが、ミューリイを殺そうとするから！」

セレスティアの叫びが響き、その言葉に誰もが驚いた。

セレスティアが「ミラを殺した」と言っただけでも十分驚いたが、
今度の衝撃はそれ以上だ。

「ま、まさかあ、あのミラちゃんがそんなことするなんて、思えな
いよ」

「ああ。あたしもだ」

「そうつすねえ……」

リーヤの意見にアンゼリカやグレイが賛同する。

「でも……事実なのよ」

「姉さん……」

俯いたセレスティアが震える声で言い、隣に座っていたセレスタイトがその肩を抱いた。

「ミュリエリア。それは……」

「……ええ、事実です」

問いかけた柊也の声にかぶせて、ミュリエリアが答えた。

そのとき

作業場の扉の向こう。

店の方からガタン、と大きな音が聞こえ「ミラちゃん！」と呼ぶ声。

「今の声……」

六花がエルミナと顔を見合わせる。

バンっ、と、

慌てたように音を立てて扉を開け、顔を出したのは、華霞だ。

「か、華霞先輩！」

「無事だったんですね！」

エルミナとラキが驚きを露にして迎えるが、華霞は慌てた様子で作業場を見回し、

ミュリエリアを見つけて、言った。

「ミュリエリアさん、ミラちゃんを追いかけて！ 早く！」

ミュリエリアは、一瞬、何を言われたのだろうと思う。

だが、その言葉の意味を理解した瞬間、駆け出していた。

華霞の側を抜けて、走り出ていく。

なぜ、どうして、と疑問は尽きず、状況の把握は全く出来ていないけれど、今は追いかけることが必要だと、そう思った。

「ミラつつたよな、今」

「姉ちゃん、そいつあどどういう意味だい？」

いきなり帰って来て、部屋に死体があるはずの人物を追いかけると、意味のわからないことを言った華霞に、エンダとダルブルグが問いかける。

その部屋にいる全員が、それを聞いたそんな顔をしていた。

華霞は、今気づいたようにその場の面々を見回し、「何でこんなに人が集まってるの?」と不思議そうに言った。

「私たちは、ミラちゃんが死んだって言われたから集まってきたんだけどね。何がどうなってるわけ?」

「えっ!?!」

ベルゼラが答えた言葉を聞いて、今度は華霞が驚きの声を上げた。

工房を飛び出したミュリエリアは、村の出口へと走って行く姿を見つけた。

【メゼポルタ基地】から勝手に取ってきた服には当然見覚えがないが、後姿はよく知っている。

「ミラ!」

その名前を呼んで、走る。

名前を呼ばれたミラは、一度振り返る。

「あ……お姉ちゃん……」

思わず立ち止まってしまふ。

だが、顔を歪めるとぶんぶんと首を振って再び背を向けて走り出す。

一度立ち止まったおかげで距離は詰まったが、ミュリエリアとミラではスタミナもスピードもミラの方が上だ。

ミュリエリアは追いつけないまま、村を出てしまう。

このままだと追いつけない。

そう判断して、ミュリエリアは声を張り上げた。

「ミラ、待って……っ、待ちなさい！」

初めて聞く、怒声に近い叫びに、ミラがびくんと肩を揺らして立ち止まる。

背中を向けたままのミラから数歩の位置で、ミュリエリアは足を止めた。

「はっ、はぁ……やっぱり、速いわね」

荒くなった呼吸と一緒に何とか心を落ち着けて、努めて普通に、ミラに話しかける。

「でも、帰って来るのは遅いわよ。三日も帰ってこないから、心配したわ」

「お姉ちゃん。イミテーションミラージュに、会っちゃったんだよ

ね

話の流れを切って、ミラが言う。

悲しげな声で。

「お姉ちゃんにお別れを言おうと思って帰ってきたけど……帰らない方が、よかった」

「ミラ、何を言っているの？ お別れだなんて……」

「だって、私の居場所は……もうないから」

「そんなことはないわ。あなたの記憶が戻るまでは、あの家があるの。あなたの帰る場所よ。」

「いいえ、あなたさえ望んでくれるのなら、記憶が戻ったって」

「思い出したから……思い出したから言ってるんだよ！」

ミラが、勢いよく振り向く。

円の軌跡で水滴が散り、頬が乾く間もなく、新しい涙が零れる。

「私には、思い出す記憶なんてなかった！ お姉ちゃんに会ってからの半年しか、私は生きてなかったんだから！」

「ミラ……？」

ミラが何を言っているのか、本当に、ミュージアにはわからなかった。

いくら頭が良くても、命を創り、通常の何倍もの速度で成長させる方法があるなど、思いつくはずもない。

だから、ミラがどうして泣いているのか。

何に悲しんでいるのかわからない。

それでも、悲しんでいるミラを放って置くことは出来なくて、ミュリエリアはミラに近づこうとする。

「近づかないで！」

ミラが叫ぶ。

ミュリエリアは一瞬動きを止めたが、また直ぐに歩き出す。

「そんな顔をしているあなたを、一人にしておくなんて、出来るはずがないでしょう？」

「近づかないでってば！ リライト！」

再度の拒絶は、現象を伴ってミュリエリアを阻んだ。

巻き起こった強風が壁になり、ミュリエリアを押し返す。

「この力ってね……」

鋼色の髪を風に遊ばせながら、ミラが言う。

「進種を、殺すための力なんだよ」

「え……?」

「お姉ちゃんの知ってる、ううん、私だっているんだって思った私なんて、存在しないんだよ」

だって、私は　ハンターだから。

紡がれた、致命的な一言。

ミュリエリアが目を見開く。

「だから………ミュリエリアさん………さよなら」

ミュリエリアに二の句を継がせず、ただ一方的に別れを告げて、ミラの体が空に舞い上がる。

「ミラーー!!」

名前を呼べど、ミラはもう振り返らず。

翼を持たないミュリエリアには、それを追うことはできなかった。

「ミラ………どうして、どうして勝手に決めてしまうのよ………」

残されたミュリエリアが、力なく呟く。

【ハンター】だと言われたときは、確かに驚いた。

だが、ミラが生きていたとわかったときの喜びは、

別れを告げられたときの悲しみは、その驚きよりも遙かに大きかった。

「どうして、もう一言だけでも聞いてくれなかったの……」

そうすれば私は、一緒に帰ろうと、言えたのに。

「それじゃ、あいつは……」

「ええ。イミテーションミラージュの、おそらく、最後の一体」

セレスティアの言葉に、華霞が答える。

ミラに逃げられたミュリエリアが帰ってきた後、華霞は全てを説明していた。

【ハンター】の真実。

十番目の【ハンター】である【ミラージュ】。

そして、その最初の一人がミラだと言ったこと。

オリジナル

華霞は最初、真実を隠しておくつもりだった。

真実ではあるが、広める必要のある真実ではないと思ったからだ。

だが、予想外にセレスティアとミュリエリアが【イミテーションミラージュ】に遭遇してしまい、ミラと同じ姿の何者がいることが知られてしまった。

そうなってしまうと、もう隠すことはできなかった。

今の状況で【ミラージュ】という存在のことを隠し通せば、必ず疑問が残り、疑問は不審を呼ぶ。

そうなるよりは、全てを説明して、ミラが危険ではないと納得してもらおう方がいいだろう。

「ミラは、ハンターでしたのね……」

「ええ。でも、彼女は普通のハンターとは違うわ」

ルティエの言葉にそう返しながら、華霞は、あの日のことを思い出していた。

日記を読んでいた部屋で、ミラ　正確には、あれはミュリエリアたちを襲った【イミテーションミラージュ】だが　をやり過ぎした後、隠し扉のある方の部屋に入った華霞は、遠くから聞こえてくる声を聞いた。

慟哭。

身を引き裂くような悲しみを秘めた声が、聞こえて来る。

その声を頼りに、華霞は隠し階段を抜け、【ハンター】の生産工場へと辿り着いた。

並んでいる水槽とその中身に驚いたのも一瞬、華霞はすぐにここが【ハンター】を複製していた場所だと理解した。

水槽を横目に見ながら、華霞は泣き声の下へと向かう。

扉を抜け、五つの水槽がある細い部屋へ。

その水槽は全て叩き割られ、中に満たされていた液体が床一面を濡らしていた。

実は、その五番目の水槽に、最期の【イミテーションミラージュ】が入っていたのだ。

設定のミスによって、他の四体が完成したときも、まだ未完成だったがゆえに【ミラボレアス】に見つからなかった一体。

しかし、装置が壊れた後も、内溶液の機能によって複製は続けられ、襲撃のしばらく後に【イミテーションミラージュ】として完成した。

脳は最初に作られるため刷り込みまで終わっていたのだが、覚醒の操作をされなかったため、そのまま眠り続けていたのだ。

しかし、ミラが水槽を割ったときの衝撃で覚醒し、【イミテイションミラージュ】は動き出した。

覚醒した【イミテイションミラージュ】は最優先事項である「指示を貰う」ために、地下四階の部屋に向かった。

しかし、そこに目的の人物の姿がなかったため、刷り込みされた優先順位に従って【進種】狩りへと向かった。

その途中でミラの置いて行った装備に気づき、それを持って行ったのである。

自分が危ないところで命を繋いでいたとは知らず、華霞はさらに奥へ。

たどり着いたのは、暗い部屋。

【オリジナルミラージュ】のために用意された、複製ではなく、成長のための液体が入っていた水槽。

その側で、ミラが、哭いていた。

「ミラ、ちゃん……」

警戒も忘れて、思わず華霞が声をかける。

ミラははっとしたように華霞を見て、そして、怯えたように後退りした。

その反応を見れば、この場所で何かが起きたことは明白だった。

「ミラちゃん……どうしたの？」

その何かが、最悪の予想と同じではないように祈りながら、華霞は聞いた。

ミラは、華霞を直視しないように視線を彷徨わせながら、言う。

「あ、私……思い出したん、です」

「ああ……」

華霞が声にならない声を漏らす。

華霞が知ったことを、ミラもまた知ったのだ。

何てことだろうと思うと同時に、冷静な部分はこのミラが敵なのかどうかを考え始めていた。

仮に【ハンター】だとするなら、ここで思い出したなどと言うメリットは全く無い。

いや、もしかして、冥土の土産に真実を教えてやるつもりでも言うのか。

などと考えている華霞に、ミラは信じられないことを言った。

「私、自分の住んでいたところ、思い出したんです」

「え……？」

華霞は、ミラが何を言っているのか、理解することが出来なかった。

呆然とする華霞に、ミラは続ける。

無理やりに、笑みを浮かべて。

誰が見たって嘘だとわかる、痛々しい笑顔で。

「私の家、ここから東の方にあるんです。

あ、きつと……お母さんとか心配してますよね。

うん、だから、帰らないといけないんです。

私、ここから直接帰りますから……お姉ちゃんには、華霞さんから言っておいてくれますか？」

そんなはずはないのだと、華霞は思う。

ミラには住んでいた家も、まして、母親などいるはずがないのだ。

この場所で生み出された存在であるミラに、そんな物があるはずがない。

そこまで考えて、ようやく、華霞は気がついた。

「ミラちゃん、あなたは……」

ミラは、自分から消えるつもりなのだ。

【ハンター】だったという事実を、自分一人だけで背負い込んで。

ミュリエリアや、華霞たちには、ミラという【変種】の少女の思
い出だけ残して、去ろうとしている。

家や家族など、存在しないことは誰よりもミラ自身がわかってい
て。

それを口にするだけで、深く傷つきながら。

去った後に、悲しみが残らないようにしようとしているのだ。

それに気づいたとき、華霞は自分を恥じた。

【ハンター】という言葉に流されて、この少女の心を疑ったこと
を。

ミラという少女が演じられたキャラクターなのではないかと、疑
ってしまったことを。

「ミラちゃんっ」

華霞は、ミラを抱きしめた。

「いいの、そんなことは、言わなくていいの。私は、知ってるから
「っ……っ」

華霞の腕の中で、ミラが身を固くする。

そっっっ、

「あ……ごめん、なさい……ごめんなさい……」

「謝らないで……謝ることなんか、何も無いじゃないの……」

何度も、何度も、「ごめんなさい」と繰り返すミラを、華霞はただ、強く抱きしめた。

その後、三日かけて、ミラを何とか落ち着かせて、ミュリエリアのところに戻るように説得したのだが、ミラの考えは変わらず。

結局、せめてお別れを言いに戻るところで互いに妥協した。

華霞としては、そこで何とかミュリエリアに説得してもらおうと思ったのだが、【イミテーションミラージュ】というイレギュラーのせいで、悪い方向に転がってしまった。

「ミラちゃんは、ミラちゃんよ。こうやって私が生きてるのが、何よりの証拠よ」

もう疑わないと、そう決めた。

その決意を胸に、華霞は言い切る。

「だが……本当に大丈夫なのか？」

「ちょっと、しゅー君！」

「茉莉も知っているだろう。ハンターという存在の恐ろしさを」

「う……」

「そうだな。流石に、混乱してしまうな……」

「ミラのことだ、信じてやりたいけど……」

六花やアンゼリカが言葉を濁す。

華霞にも、その気持ちはよくわかった。

実際、華霞だって一度は疑ったのだから。

「私はっ」

大きな声を出したメイミイに注目が集まる。

「私は、ミラさんがハンターでも、でもミラさんにゃいいです!」

「そうですね。ミラは、ハンターだろうと何だろうと、私の騎士ですわ」

「……私も、ハンターとか気にしないでです」

「セアラが言うなら、俺もだ!」

「レグル、主体性ないです」

「でも、嫌じゃないだろ? ちゃんと呼んでくれてるし」

「……何かむかつくです」

「うわ、ごめんって！」

「あはは、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ。でも、私も賛成！」

「私もよ。もう、あんな気分はごめんだわ」

「うん、そうだね。姉さん」

メイミイを皮切りに、何人かがミラの味方をすると声を上げる。

だが、

「お姉ちゃん……ミラお姉ちゃんは、前のミラお姉ちゃんのままなんだよね？」

「う、うん。そうでいて欲しいけど……」

「ハンターっすからねえ……」

大丈夫だと、言い切れない人もまた、同じくらいは存在した。

別に、その人が冷たいとかそういうことではない。

ただ、簡単に受け入れるには【ハンター】という言葉は重過ぎる。

躊躇われる理由になるだけのことを、【ハンター】はしてきたの

だ。

「リーヤ、お前はどうか？」

「私い？ 私は、ミラちゃんならいいかな。一緒に戦って、助け合ったし。」

「そういう人、他にもいるんじゃないかなあ？」

「そう、だな。俺は、村も命も救われた」

「今そういうのは関係ねえと思うけどな。別の問題だろ」

「僕……何が正しいのかわらなくなってきました……」

【ハンター】でも、ミラだから。

でも、【ハンター】だ。

思考と議論は堂々巡り。

一向に結論は出ない。

ミュリエリアは、それを完全に傍観していた。

彼女はミラが【ハンター】だろうと気にしないともう決めてしまっているし、他の誰が何を言っても変えるつもりはなかった。

誰もが、言いたいことを言ってしまうって、言葉が途切れる。

もどかしい沈黙。

それを破つたのは、華霞だった。

「皆の話はわかったわ。」

それじゃあ、危ないハンターのミラは殺してしまいましょう」

「な、それは、些か言が過ぎるのではないか？」

「大丈夫だつて言ったのは姉ちゃんじゃなかったか、おい。今んなつて変えてんじゃねえよ」

聞いた途端に、ベガードとダルブルグが声を上げる。

他の面々も、それに続いて反対の声を上げた。

華霞は、それを聞いて満足そうに頷き、

「ハンターとか、余計な言葉に気を取られるから答えがでないのよ。今、ミラをどうしようと思っただか、皆の心の中にあるでしょう？ きつと、そういうことなのよ」

その言葉を聞いて、皆は、自分の心を省みる。

華霞が、殺してしまおうと言ったとき。

それに、賛成だ、殺してしまえばいいなんて考えた者は一人も

そう、一人だつて、いなかった。

「ふん、馬鹿馬鹿しい。グダグダグダグダと、やってられっか」

がたんと音を立ててエンダが立ち上がり、扉へ向かう。

「エンダさん、どこに行くんですか？」

ラキが聞く。

ここにラキを連れてきたのもエンダだった。さりげなく交友があるのかもしれない。

「散歩だ。森丘に行ってくる」

「あ、僕も行きます！」

エンダ、ラキが

「ああ、なるほど。それじゃ、私は沼地ね」

「……レグル、行くです」

「おうよ！」

ベルゼラ、セアラ、レグルが

「お姉ちゃん、私たちは」

「樹海だね」

「戦力的に頼りないですね。私も行きます」

石楠花、グラキシア、フェルルートが

「しゅー君」

「ああ、雪山だな。ベガード、あんたはどいつする？」

「ふ、お供仕る」

茉莉、柊也、ベガードが

「私は、密林に行きます！」

「俺もつきあうっすよ！」

「わたくしもですわ」

メイミイ、グレイ、ルティエが

「火山には俺が行こう」

「あ、わたしも。アンゼも行くよね？ ね？」

「ああ、行くに決まってるだろ」

ルクス、リーヤ、アンゼリカが

「よっしゃ。砂漠は俺サマに任せとけ！」

「ボクも手伝うぞ」

ダルブルグ、エルミナが

「私はもう一度メゼポルタの遺跡に戻ってみるわ」

「それなら護衛がいるな。私が付き合おう」

華霞、六花が、それぞれの場所に、向かう。

なぜ、なんて言う必要はない。

心は一つ。ミラを探しに行くのだ。

この場所に、連れ戻すために。

「セレスタ。私たちもいくわよ」

「うん、森丘？」

「そうね」

全員が出て行った後、最後に残っていたセレスティアとセレスタイトが階段から下りながら言う。

「セルティ、私も行くわ」

「ミューリイはダメよ」

ミュージエリアをセレスティアが止める。

「お願い。確かに私は足手まといかもしれないけれど、でも、探し

てあげたいのよ」

「違うわよ。そうじゃなくて、ミューリィには別の役目があるでしょ」

「うん。ミューリィの役目は、あの子がいつ帰ってきてても、出迎えてあげることだよ。」

「この家でお帰りが言えるのは、ミューリィだけなんだから」

「セルティ、セレスタ……。わかったわ、私は、ここでミラを待つわ」

「ええ。任せときなさい、私がきっちり連れ戻してあげるから。行くわよ」

「うん！」

セレスティアとセレスタイトが飛び出していく。

その後姿を、ミユリエリアは祈るような気持ちで見送った。

その日の夜。

昼間の搜索ではミラを見つけることが出来ず、一旦搜索は中断され、一同は【ランゴスタ進種】の城に集まっていた。

ミュリエリアの工房だけでは話だけならともかく、全員が寝るだけのスペースがなく、ルティエが城を提供してくれたのだ。

一同は、城の規模同様に広い食堂に集まり、互いに報告を行っていた。

今になってようやく自己紹介をしている人もいる。

ミラが生きていたとわかったことで、最初の通夜の様な（実際そうだったのだが）雰囲気はなく、賑やかな様子だった。

食堂の大きな扉が開き、何人もの侍女アイルーが食事の乗ったカートを押して入ってくる。

「うお、美味そう！　なんだこの豪華な料理！」

豪勢な料理を見て、レグルが歓声を上げる。

「ファム、この料理はどうしましたの？」

特に指示をしたわけでもないのに（というか忘れていた）出てきた料理を見て、ルティエが自分付きの侍女であるファムを見つけて聞く。

「はい。麗下がお客様にお食事を用意するようにと」

「お母様が？」

ルティエがそう言ったとき、食堂の中にこの城の女王、ルーゼリアが入ってくる。

ルーゼリアは、寝ていた間に衰えた体力や筋力がまだ回復しておらず、車椅子に乗っている。

その車椅子を押しているのは、ルーゼリアの騎士であるアウリオだ。

「皆さん」

ルーゼリアが口を開く。

女王の威厳とでも言うのか、ただ普通に話しているだけなのに、自然と話を聞かなければという気分させられる。

「ルテイエがこんなに沢山のお客様を連れてくるのは初めてで、年甲斐もなく喜んでしまいました。

お食事を用意させていただきましたから、しっかり食べて、元氣をつけて下さいね」

その割りに、発言は母親のものだったが。

ルテイエは「お母様ったら、恥ずかしいですわ」と言いつつもまんざらではない様子だ。

ビュッフェ形式とのもので、お皿が配られる。

全員にお皿が渡ったのを確認したところで、ルーゼリアが再び口を開く。

「どうか皆さん、娘のお友達を助けてあげてくださいね。よろしく

お願いします」

そう言っ頭を下げるルーゼリアに、一同は思い思いに肯定の返事を返した。

その頃、ミュリエリアは一人工房に残っていた。

ルティエには誘われたが、ミラを待つことを自分の役目と決めたミュリエリアは、それを断った。

今は、まだ未完成の隕石鋼の剣を作っていた。

ミラが帰ってきたら、完成した物を渡してあげようと、そう思っ
て。

しかし、作業は思うようには進まず、欠点を改善することが出来
ない。

「はあ……」

ミュリエリアはため息をつき、一度休憩することにした。

作業台を離れ、階段を上がる。

そして、ミラの部屋の扉を開けた。

【ミラージュ】の遺体は、もうそこにはない。

【ハンター】とは言え、放置するわけにもいかないの、結局村の墓地に埋葬されることになった。

ある意味、最も手厚く扱われた【ハンター】かもしれない。

暗い部屋を横切り、窓を開く。

開いた窓から月光が差し込み、部屋を薄っすらと照らし出した。

ミュリエリアは、ミラが飛び去っていった空を見上げて、ぼつりと呟く。

「ミラ……あなたはどこにいるの？」

そう言ったとき、ミュリエリアの視界の端で、何かが光った。

「何かしら？」

見てみると、それは壁に飾られた【双剣】だった。

【ミオガルナ】の素材が、月の光を跳ね返しているのだ。

ミュリエリアは窓辺から離れ、【双剣】を手に取る。

「……これもまだ、未完成だったわね」

ミュリエリアはそう言うと、【双剣】を持ったままミラの部屋を出て行った。

とある山岳地帯。

良質の鉱石を産出するこの山では、昼夜問わず採掘作業が行われている。

その山の一つの坑道の外で、数匹の【アイルー原種】が慌しく動き回っていた。

全員が「安全第一」と書いたヘルメットを被っている。

「点呼！ 番号！」

「ニヤー」

「ニヤーニヤー」

「ニヤーニヤーニヤー」

「ニヤーニヤーニヤーニヤー」

「五ニヤー！」

六匹全員揃っている。

それを確認して、

「爆破ニヤー！」

足元の導火線に火をつける。

火は導火線を辿り、そして、坑道の中から大きな爆発音が聞こえる。

【大タル爆弾G】を使って、爆弾採掘を行っているのだ。

昔は【アイルー原種】が爆弾を持って突っ込んでいっていたらしいが、近年は安全第一で、それは行われていない。

細かな石の破片を含んだ風が吹き抜ける。

「よし、採掘開始ニヤー」

「ニヤー」

手に【ピツケル】を握り締めて、【アイルー原種】たちが坑道に突入する。

奥まで進み、爆発で新しく現れた鉱石を掘り始める。

「ニヤ？」

一匹の【アイルー原種】が不思議そうな声を出す。

「どづしたニヤ？」

「今、叩いた感触が変だったニヤ」

同僚にそう言いながら、もう一度その場所を叩く、と、

ギョロリと、

壁に、巨大な目が開いた。

その大きさは、【アイルー原種】一匹よりも大きい。

「にゃ、にゃんじゃこりゃあー!!」

腰を抜かす【アイルー原種】。

だが、異変はそれに止まらなかった。

坑道が、ぐらぐらと揺れ始めたのだ。

「撤退！ 撤退ニヤ！」

慌てて、【アイルー原種】たちは坑道から出て行く。

転がるように坑道から飛び出す【アイルー原種】。

だが、揺れはますます大きくなり、山全体が揺れ始める。

そして、

オオオオオオオオオオオオオオオオオ

大音声の咆哮と共に、山が起き上がる。

いや、山ではない。

長い首を天に届くほどに伸ばし、月に照らされるその巨大な姿は

「ら、ら、ら、ラオシャンロンだニヤ！」

爆弾採掘によって眠りから覚めたラオシャンロンは、その巨体を揺らしながら、ゆっくりと歩き始めた。

NEXT > 第二十二話「MONSTER HUNTER」

第二十一話「さよなら、そして」(後書き)

さて、いよいよ物語は終盤。

次回、私が最も書きたかった話です。

第二十二話「MONSTER HUNTER」(前編)

どこか遠い場所

無数のビルや建物が立ち並ぶ町並み。

綺麗に舗装された道を、自動車が行き来する。

ここには【進種】も【原種】も【ハンター】もいない。

ここは、【人間】の街。

時刻は夕暮れ時。

横断歩道の前で信号待ちをしている人並みの中で、二人の少年が話している。

「もうすぐ売り出されるよな」

「そうだな。やっとして感じ」

「とうとう光学武器が手に入るようになるんだよなー。俺、ビームガンとか使うの夢だったんだよ」

「大げさだな……。俺はむしろよく許可されたと思うけど」

「そりゃ要望が結構あったんだろ。強そうだし、モンスターにも楽勝だろ？」

「そうなるといいけどね」

信号が青に変わる。

二人の少年は、道路を横切り、どこかへと歩いて行った。

MONSTER HUNTER EVOLVE
第二十二話「MONSTER HUNTER」

ミラの搜索が始まってから、二日が過ぎた。

冬の日は短く落ち、空を赤く染めている。

夜の外界は見通しが悪い上に、危険だ。

搜索にあたっていた面々は今日の搜索を切り上げ、次々に城へと戻ってきていた。

初日と同じ食堂に集まり、成果を報告し合う。

今日も、ミラの姿を見つけることはできず、あちこちでため息が漏れる。

バンツと、勢いよく扉が開き、ファムが駆け込んでくる。

「姫様！」

息を切らせながらルティエのところに向かい、一枚の紙を差し出す。

「ファム。どうしましたの、そんなに慌てて」

そう言いながら紙に目を通すルティエ。

その表情が強張り、みるみる青ざめていく。

どうしたのだろうと、食堂がざわつく。

「ファムさん、にやにがあつたんですか？」

【アイルー進種】繋がりで親しくなったメイミイがファムの服の裾を引っ張りながら訪ねる。

だが、ファムがそれに答えるよりも先に、ルティエが声を発した。

「皆様、大変なことが起こりましたわ」

「ミラちゃんが見つかったとか？」

と言っベルゼラに首を振り、

「二日前、東部の山岳地帯にラオシャンロンが出現したそうですわ。」

「このまま進むと……明日にも、あの村を直撃すると」

「ええっ!?!」

「マジかつ。あり得ないっての……」

「人間の言葉に曰く、泣きっ面に蜂とはこついうことなのだな」

「冷静に言ってる場合ですか」

食堂に驚きの声が次々に上がる。

「それって本当? 間違いつてことはないの?」

グラキシアの言葉に、ルティエは「残念ですけど」と言い、

「これは、エイシスアルカディアの防衛局からの連絡ですよ」

「防衛局の……確かに、ラオシャンロンともなれば観測気球も出るわね」

「ああ。その紙、見せてもらっても構わないか?」

「ええ、どうぞ」

華霞が頷き、六花がルティエから紙を受け取る。

その紙は、最初に【ラオシャンロン】が侵攻しているという連絡事項が記され、その下に地図が描いてある。

地図には、出現地点から今までの進路、予想される進路が描き込んである。

そして、その予想進路の上に、ミュリエリアの住んでいる村があった。

「エルミナ、この予測をどう思う？ 正しいかしら？」

「そうだな」

華霞に言われて、エルミナが地図を覗き込む。

予想進路とされる線の周囲を指でなぞりながら、

「この辺りは、大きな障害物がない草原なんだ。ここまで来てるなら、真っ直ぐに進むだろうな、うん」

「そうか、お前がそう言うなら来るだろうな」

と、六花。

エルミナは地形を読むことにかけては誰よりも優れている。

そのエルミナが来ると言うなら、【ラオシャンロン】の襲撃は間違いないだろう。

「ラオシャンロンって、それは拙いっすよ……」

「うーん、困ったねえ」

【ラオシャンロン】と言えば、生き物の形をした災害と言える存在だ。

一般に、同じ巨大種である【シエンガオレン】よりも長い距離を移動し、大きな被害を与える。

「……………ミュリエリアさんは、このことを知ってるですか？」

セアラの言葉に、誰かが「あ……………」と声を出した。

この城にも届いた知らせが進路上の村に届いてないとも思えないが、万が一と言うこともある。

「誰かが知らせに行くべきだろうな。彼女もこちらに迎えるべきだ」

「そうだな。羽のある奴、ちよいとひとつ飛び行ってくれねえか」

ルクスとダブルブルグの言葉に、セレスティアが手を上げる。

「私が行くわ。セレスタ、あんたもよ」

「え、僕も？」

「当たり前でしょ。私たちは、二人で一つなんだから」

「そうだね、姉さん。僕も行くよ」

「最初からそう言えばいいのよ。それじゃ、行ってくるわ」

「行ってき　　って、姉さん引つ張らないでよっ」

セレスティアはセレスタイトの手を引っ張って、食堂を出て行った。

.....

夜空を飛び、二人はミュリエリアの村の上空へと辿り着いた。

村には沢山の篝火が焚かれ、村を赤々と照らし出している。

その光に照らされて、村人が慌しく動き回っていた。

「もしかしたら、伝わってるのかもしれないね」

村を見下ろしながら、セレスタイトが言う。

「そうね、行ってみましょ」

二人は、村へ向かって降下した。

地面が近くなってくると、村の様子がよくわかる。

村中の家の前には荷車が置かれ、どんどんと家財道具が積み込まれている。

まるで、村中で引越しの準備をしているようだった。

「あれ、セレスティアちゃんとセレスタイト君かい？」

二人が地面に降り立つと、近くで荷物を運んでいた男性が近づい

てくる。

この村の村長だ。トス

「あ、おじさん。こんばんは」

「こんばんわ」

二人が頭を下げる。

「ああ、こんばんは……って暢気に挨拶してる場合じゃないんだよ。この村には今、ラオシャンロンが向かって来てるんだ」

慌てた様子で、村長が言う。

やはり、この騒ぎはその知らせが原因だったようだ。

「あ、やっぱり届いてたんですね。実は僕たち、それを伝えに来たんです」

「でも、無駄足だったみたいね」

「いやいや、ちょうど良かったよ」

「え？」

「実は、避難するって決まっても、ミユリエリアちゃんが村に残るって言って、何を言っても聞いてくれないんだよ。君たちからも説得してくれないかい？」

「え、ミューリイが？」

「何考えてんのよ……。わかりました、任せといてください。行くわよ、セレスタ」

「うん。それじゃ、失礼します」

二人は、急いでミユリエリアの工房へと向かった。

扉を開いて作業場に入ると、ミユリエリアはそこで何かの作業をしていた。

作業台の上には分解された【双剣】が置いてあり、パーツがランプの光に輝いている。

「ミューリイ！」

セレスティアが名前を呼ぶと、ミユリエリアは作業台から顔を上げる。

「セルティ。ミラは見つかったの？」

「そ、それはまだだけど。でも、今はそれどころじゃないわよ」

「そうだよ。ラオシャンロンが近づいてるのに、何で逃げないなんて」

二人が口々に言う。

「わかるでしょう？ 私はここで、ミラを待っているのよ」

ミュリエリアは、静かに答える。

「セルティが言ったことじゃないの」

「う……そりゃ言ったけど」

ミラを探しに行こうとしたミュリエリアに、ここで待つのがミュリエリアの役目だと言ったのは、確かにセレスティアだ。

「でも、こんな非常時にまで適應されないわよ！」

「そうだよ。ミラだって、村と一緒にムーリイが潰されることなんて望んでないよ」

「まだ潰されると決まったわけでもないわ。途中でラオシャンロンの気が変わるかもしれないでしょう？」

「ムーリイ……」

信じられない、と言いたげな顔で二人がミュリエリアを見る。

ミュリエリアは、こんないい加減なことを言うような性格ではない。
い。

むしろ、こんな状況では率先して避難する方だろう。

今のミュリエリアからは、普段の彼女らしさ　冷静な状況判断
や合理的な判断というものを、全く見つけられない。

それほどに、大きいのか。

ミラという、少女の存在は。

自分でもらしくないとわかっているのだろう。

ミュリエリアは二人の視線から逃げるように目を伏せた。

ランプの光が、ミュリエリアの顔に深い陰影を刻む。

「本当は……」

俯いたまま、ミュリエリアが言った。

「本当は、期待しているのよ。危なくなれば、ミラが助けに来てくれるのではないかって」

囚われのお姫様が王子様を待つような、幼稚な期待。

それは、とても現実的とは言えなくて。

でも、

それでも来て欲しいと、望んでしまう。

ミラが、あまりにも何度も、助けてくれたから。

「ミュリーリィ……でも、やっぱり逃げた方が」

「待って、セレスタ」

言いかけた弟を制し、セレスティアはミュリエリアに問いかける。

「ミュリーリイ。あんたの決意は変わらないのね」

「セルティ……………」

セレスティアの言葉に何を見たのか、ミュリエリアが顔を上げる。

真剣な顔で見つめるセレスティアの瞳を見つめ返し、

「ええ。私は、ミラが見つかるまでは、ここで待ち続ける」

「そう……………わかったわ」

セレスティアは頷き、

【煌竜剣】【比翼】を抜く。

「ね、姉さん？」

セレスタイトの戸惑いを無視して、逆手に持ち替えた【煌竜剣】【比翼】を、振り下ろす。

ガツ、と【煌竜剣】【比翼】の先端が、作業台に食い込む。

「ミュリーリイ。仕事を頼むわ。明日の朝までに、最高の状態に仕上げているわ」

「セルティ、まさか……………」

「あの化け物に挑むんだから、しっかり頼むわよ」

「戦う、つもりなの？」

驚きも露に問いかけるミュリエリアに、セレスティアは口角を上げて笑みを作り、

「あいつには因縁があるのよ。六年前からね」

六年前。

そのときもこの村は【ラオシャンロン】に襲われ、セレスティアの両親がそれと戦った。

結果は、相討ち。

【ラオシャンロン】の討伐には成功したが、彼らもまた、命を落とした。

「いや姉さん、ラオシャンロンは別の個体だし、僕らの仇は黒い女の方だよ」

口ではそう言いながら、セレスタイトが【煌竜剣【比翼】】を作業台に置く。

「ミュリーイ、僕の方もよろしくね」

「セレスタまで……」

「姉さんが戦うのに、僕と一緒に戦わないなんてこと、ありえないよ」

「そうね。だって私たちは」

「二人で一つだから」

二人で一組の【双剣】を扱う、双子の姉弟は、声を合わせてそう言って、

鏡に映したようにそっくりな、不敵な笑みを浮かべた。

【ランゴスタ進種】の城。

手ぶらで帰ってきた二人によって、ミュリエリアの決意と二人が【ラオシャンロン】に挑むということが伝えられた。

「本音を言えば一緒に戦ってもらいたいけど、無理には言わないわ。」

私だって、馬鹿なことをしてるってわかってるから」

話を聞いて驚いている一同に、セレスティアはそう言った。

【ラオシャンロン】に挑む。

それは、馬鹿げたことだ。

【ラオシャンロン】は、それだけ強大で、恐ろしい。

命の保障など、どこにもない。

だが、もしも力を貸してくれるなら嬉しいと、そう言った。

その場ですぐさま答えが出せることではなく、一度解散して考える時間が与えられた。

タイムリミットは、明早朝。

果たして、各々が出す結論は……

【ランゴスタ進種】の城、図書館。

城の中にあるこの図書館には、沢山の本棚が並び、様々なジャンルの本が収めてある。

エイシスアルカディアの大図書館には及ばないが、中々立派なものだった。

「セレストライト君、休まなくていいの？」

図書館で本を読んでいたセレストライトは、そんな声をかけられて本から顔を上げた。

そこには、華霞とエルミナが立っている。

二人とも、何冊かの本を抱えていた。

「そうだぞ。巨大種との戦いで一番大事なのは、体力だ。戦う気ならしっかりと寝ておけ」

【ラオシャンロン】は、巨大な体に見合う馬鹿げた体力を持っている。

戦闘が長丁場になることは十分に考えられ、エルミナの言う通り眠った方がいいのだが、

「すみません。どうしても気になることがあって」

セレストライトはそう言ってパタンと本を閉じた。

「モンスター大百科」と書かれたそれを机に置きながら「そう言えば、華霞さんは昔のことに詳しいんですね？」と聞く。

「ちょっと聞きたいことがあるんですけど、いいですか？」

「ええ、いいわよ。何？」

抱えていた本を机に置きながら華霞が頷く。

「華霞さんが見たつて言うハンターの日記に、ミラボレアスっていうのが出てきたんですね？」

それって、何者かわかりますか？」

セレスタイトに聞かれた華霞は、少し考える仕草を見せ、知識を引っぱり出しながら説明を始める。

「ミラボレアスは、人間時代にいたと言われている古龍の名前よ。通称は黒龍。」

「当時でもその存在は伝説とされていて、私もそれ以上は知らないわ。」

進種の有史以来の目撃件数はゼロ。伝説中の伝説ね」

「そうですか……。黒龍ってことは、やっぱり黒いんですよね？」

「多分そうですね」

「じゃあ、ミラボレアスの進古龍種ハイエンシェントがいるって可能性はありますか？」

「不在の証明がほぼ不可能である以上、いないとは言えないけど……。」

正直、可能性は低いでしょうね」

「……そうですね」

「セレスタイトはどうしてそんなことを聞くんだった？」

エルミナが不思議そうに聞く。

「実は、僕と姉さんの両親は六年前に殺されたんです。」

唯一の手がかりが、その場に落ちていた見たこともない黒い鱗でした。

六年も手がかりはなくて、でも、ミラがその色を見たことがあったんです。

黒い鎧を来た、黒尽くめの女に襲われたって」

「もしかして、あの遺跡が襲われたときの話？」

「はい。ミラはそう言ってました。だから、両親の仇もその黒い女だと思っんです」

「なるほど、それがミラボレアスかもしれないってことだな」

「はい」

セレスタイトが頷くと、華霞が顎に手を当てて考え始める。

「それは興味深いわね。ハンターの衝撃で霞んでいたけど、ミラボレアスが現存して、しかも進種になっていたとすれば、それも大変な発見だわ」

「ですよー!」

と、勢い込むセレスタイト。

華霞はそれを見て苦笑を浮かべる。

「でも、それは今どうしても調べなくちゃいけないことじゃないわ。今のセレスタイト君の最優先事項は、明日に備えて眠ることよ」

「え、でも……」

「でも、じゃない。ボクたちがラオシャンロンの資料を集めるついでに調べておくから、お前はもう休め」

「え？ ラオシャンロンって、もしかして……」

エルミナの言葉に、セレスタイトが目を輝かせる。

「ボクも協力するぞ。また地図を描き直す労力に比べれば、ラオシヤンロンの一体くらい軽いな、うん」

「私は知識でのサポートしかできないけど、協力するわ。だから、言いたしっぺは責任持って寝な、さい」

「あたっ」

セレスタイトが突かれた額を押さえる。

「わかりましたよ。それじゃあ、よろしくお願いします」

「ああ、任せとけ」

「お休みなさい、セレスタイト君」

「はい、お休みなさい」

セレスタイトが図書館を出て行く。

「エルミナはいいの？ あなたは前線でしょう？」

「ボクは研究者。二徹、三徹で音をあげるほど貧弱じゃないぞ」

エルミナが胸を張ってそう言う。

「そうだったわね。それじゃあ、付き合ってもらいましょうか」

「ああ」

二人は椅子に座り、持ってきた本を開いた。

城の高い位置にある部屋。

玉座が置かれたこの広間から繋がるテラスに、二つの人影があった。

夜風に吹かれながら眼下の森を眺めているのは、ルティエとトレナードである。

「殿下、明日は一人で行かれるおつもりですか？」

「ええ。これは完全にわたくしの我が侭。私の行いに、兵を巻き込むわけにはいきませんわ」

「しかし、この様な言い方はお気に召さないかも知れませんが、あなたお一人の命は他の兵よりも重いのです」

「それもわかっていますわ」

ルティエはそう言った後、何か不思議なものをみるようにトレナードを見る。

「あなた、最近は何分丁寧にわたくしに接しますわね。昔の馴れ馴れしさはどこに行っただのですか？」

「殿下の偉大さがそうさせるのですよ。ご不満ですか？」

「不満はありませんけれど、気持ち悪いですわね……。また何か企んでいますの？」

「まさか」

トレナードは大げさに驚いてみせる。

「今の私は、あなたが一族を治めることを望んでいるのでね。悪巧みなど、とんでもない。

ああ、しかし、一つ考えていることがあるとすれば」

トレナードはそこで言葉を切り、甘い笑みを浮かべながらルティエの頬に手を添える。

「愛しい君を、どうやって私の妻にするか、かな？」

「そのような寝言は、わたくしの騎士に勝ってから仰いなさいな」

その辺の女性ならコロツといきそうな口説きをさらりと躲し、ルティエはテラスの出口に向かう。

その背中に、トレナードが声をかける。

「ここに来る途中で可愛らしい泥棒を見たよ。いいのかい？」

「ええ、許可は出していますわ」

振り返らないままそう答え、ルティエは部屋の中に入って行った。

城の中にある、倉庫。

様々な道具が収められたこの場所を、ちょこまかと動き回る小さな影があった。

ラキ、石楠花、メイミイの最年少組みである。

最初から戦力外通知をされてしまった三人だが、どうしても何かになりたいというメイミイに引っ張られる形でアイテムの用意をしていた。

用意した荷車に、【ボウガン】の弾、【回復薬】、【大タル爆弾】やその調合素材を次々に乗せていく。

【ラオシャンロン】の行動はただ歩くだけで、ほとんど攻撃をしない。

火球のような遠距離攻撃も持たないため、それなりに距離を取れ

ば安全と言っている。

彼女らは、そういう安全地帯で補給部隊になるつもりなのだ。

「お、重い」

「あ、僕も手伝うね。せーの」

「うーん」

石楠花とラキが、爆弾の中で最大の威力を持つ【大タル爆弾G】を抱えてふらふらと運ぶ。

メイミイは、【小タル爆弾】や【大タル爆弾】に、導火線をつける細工をしていた。

普通は【ボウガン】で撃つたり、物をぶつけた衝撃で爆発させるのだが、【アイルー進種】は導火線に火をつけた爆弾を投げるという物騒な使い方をするのだ。

ちなみに、爆弾を防水仕様にするという技術も【アイルー】は持っている。

危険な技術だが、メイミイは「アシストキャッツ」に「一級オトモアイルー」を認められている。

その試験をパスした彼女には、そのくらいの技はもう基本だった。

「やれやれ、そんなに真面目にやられては止めるに止められんな」

倉庫の外で、そんな声を漏らす人物がいた。

「別にいいと思いますよ。あの子たちなりに、しっかり考えてるじゃないですか。無謀に戦いに参加しようとしてるわけでもないです
し」

「……そうだな」

最初の発言が六花、一緒にいるのはアウリオである。

「それにしても、立派になったものだ」

倉庫の中を見ながら、しみじみと六花が漏らす。

「何がですか？」

「メイミイのことだ。あの子は、お前に出会う前に私と一緒に旅をしていたんだ」

「え、そうなんですか？」

「ああ。その頃は、ブランゴに追いかけて逃げ回っていたのに、いつの間にかラオシャンロンに挑むほどに成長していたのだな」

「……それはまた随分と成長したんですね」

「全くだ」

二人して苦笑する。

「それで、先生はどうするんですか？」

「もちろん行くとも。怪我人が出そうなところに、医者がいるのは当然だろう」

「先生は変わってないですね。」

「僕も一緒に行きたいんですけど、今は、麗下を置いて危険な戦いに参加するわけにはいなくて……すみません」

申し訳なさそうにアウリオが頭を下げる。

実は今、この城ではどろどろした権力争いが起こっているのだ。

ルーゼリアが目覚め、しかし体が弱っているこのタイミングを狙って、好き勝手な条件をつけた決闘の申し込みが後を絶たないのがある。

代理で決闘を受ける騎士であるアウリオは、万が一にも別の戦いで怪我をしたりすることはできないのだ。

「気にすることはない。それが、お前の役目だ」

「先生……ありがとうございます」

「さて、女王陛下の診察に行こうか。もう、戻ってこれないかもしれないからな」

「そんな縁起でもないことを言わないでくださいよ」

「ふ、心構えの話だ。大切な戦いだから、綱を切っておいたのさ」

そんな会話を交わしながら、二人は廊下を歩いて行った。

一背水の陣を敷く《Cut one's cables》

失敗できないと覚悟を決めて、全力を尽くすという意味だ。

セアラに宛がわれた部屋。

セアラが一人ベッドで休んでいると、部屋の扉がノックされた。

「……誰です？」

時間が時間だ。

レグルなら追い返してしまおう、などと思いながら聞く。

「私、ラキアだよ」

「……ラキア姉さん」

セアラは、ベッドから起き上がり、部屋の扉を開けた。

「お邪魔しまーす」

そう言いながらグラキシアが部屋に入り、部屋を見回す。

「やっぱり私の部屋と同じなんだ。全部大きさが違ったら面白いの
にね」

「……それをする意味、ないです」

「あはは、そっか。あ、でも、私の部屋の花瓶はね」

「……ラキア姉さん、何の用です？」

いつまでも世間話をしそうなグラキシアを遮って、セアラが聞く。

「あ、うん。別に特別用ってわけじゃないんだけど、でもほら、せ
つかくまた会ったのにあんまり話できなかったから」

「……そうですね」

グラキシアの言葉にセアラが頷く。

両親を亡くしてからしばらくの間、セアラとグラキシアは同じ家
で暮らしていた。

セアラがそこを出て行ってからは一度も会っていなかったから、
随分と久しぶりの再会ということになる。

「セアラちゃん、元気にしてた？」

「……してたです。ラキア姉さんは？」

「うん、私も元気だよ。って、そんなの見ればわかるよね、あはははは……はあ」

から笑いの後、グラキシアは肩を落とす。

そして、

「……ごめんなさい！」

いきなり、セアラに頭を下げた。

セアラには、意味がわからない。

「……別に謝られることはないです」

「ううん。あるよ」

グラキシアは首を横に振る。

「私、無神経で、セアラちゃんに酷いこと言っちゃったから、ずっと謝りたくて」

「……もしかして、私の目のことですか？」

「……うん」

グラキシアが頷く。

セアラの片目は、血で赤く染まっている。

その目を見た人が、皆、セアラに気を使って嘘を言うせいで、セアラは他人の言葉を信じられなかった。

グラキシアも、セアラにそういう発言をした一人だったのだ。

だが、セアラはもう知っている。

その言葉が嘘だったとしても、それはセアラを傷つけるために言っているのではないということ。

だから、セアラは、

「……ラキア姉さん、ありがとうございます」

「……え？」

「……ラキア姉さんが、私を励ますために言ってくれたって、わかっているんです。だから、ありがとうございます」

「セアラちゃん……」

グラキシアは、セアラの顔をまじまじと見つめる。

グラキシアの知っているセアラは、こんなことを言える子ではなかったのに。

「セアラちゃん、何か変わったね」

グラキシアがそう言うと、セアラは頷き、

「……教えてくれた人がいたです。だから、私は戦うです」

「そっか。じゃあ、私も」

「……ラキア姉さんも？」

「うん。私も私の二人の妹もお世話になった、その恩返しをさせて欲しいの」

「……多分、喜ぶと思うです」

「そう思う？ 実は私もー」

そう言って、再会した二人は笑いあった。

セアラの部屋と同じ廊下にある、別の部屋。

その部屋は、アンゼリカの部屋だ。

だが、ベッドの上では、部屋の主ではない人物が寝転がっている。

「く〜、く〜……」

「はあ……まったく気楽なやつだな」

ベッドを占領して眠るリーヤを見下ろして、アンゼリカが呟く。

その途端、リーヤがぱちつと目を開けた。

「うわ、リーヤ、起きてたのか」

「ん、寝てたけどお、アンゼと一緒に寝てくれないから起きた」

ほらほら、とアンゼリカの手を引っ張る。

「明日は大変なんだから、早く寝よおよ」

「いやちょっと待て、あたしは今まさにそれを悩んでたんだ。どうして参戦することに決まってる？」

「えつとお、私がそうしたいって思ったからかなあ。アンゼだってそう思ってるでしょ？」

「それは、まあそうだが。でも、ラオシャンロンはなあ」

「だいじょぶ。愛と勇気と友情とその他諸々があつたら、絶対勝てるよ。でも、眠気があつたら負けるう」

そう言うつと、リーヤは目を閉じてしまった。

マジか演技か、すーすーと、穏やかな寝息が聞こえる。

アンゼリカはそれを見て一つため息をつき、

「全く、お前を見てると悩むのが馬鹿馬鹿しくなってくるよ」

そう呟くと、リーヤの隣に潜り込んで目を閉じた。

食堂。

燭台に蝋燭を一本だけ立てたテーブルで、ルクスとダルブルグは杯を交わしていた。

酒の入った杯を一息に呷って、ダルブルグが言う。

「なあ爺さんよ。あんたどうするつもりだい？」

ルクスは、足の長いグラスを回しながら「もちろん、戦つつもりだ」と答える。

「相手はあの化けもん龍だぜ。荷が重いんじゃないかねえのか？」

「それでも戦うんだ。これが、いい機会だからな」

「何の機会だつてんだ？」

「引退の、だ。俺はもう年老いた。村も、新しい守り手が育ち始めている。そろそろ表舞台から降りてもいいと思つてな。」

俺は、希望になるために戦ってきた。村を守る希望、無敵の英雄ヒーロー

だ。ラオシャンロンを倒せたなら、大きな希望を残すことができる」

「ははあ、こいつを花道につてか。がはは、派手でいいねえ。よっしゃ、いっちょ俺サマも花を添えてやるぜ！」

ダルブルグは、杯に溢れるほどに酒を注ぎ、高く掲げる。

「景気づけだ。乾杯といこうじゃねえか」

「ああ」

ルクスもグラスを掲げる。

「俺サマたちの勝利に」

「乾杯」

少し気の早い音頭でぶつけられた二つの杯が、ガチンと力強い音を立てた。

「いやー、おじさんたちは渋いねえ」

少し離れた席で、ベルゼラが呟く。

この席にいるのは、ベルゼラの他に、グレイとレグルだ。

そして、テーブルの中央にはなぜか大量の卵焼きの載った皿が置いてある。

廊下を歩いていたところを突然ベルゼラに食堂に引っ張り込まれ、現在に至る。

何でも、急に食べたくなって厨房を借りたのだが、作りすぎたらしい。

「あれ、二人とも食べないの？ どうぞどうぞ、遠慮なく」

「はあ、それじゃあ頂くっす」

「頂きます」

ベルゼラに促され、グレイとレグルが卵焼きに箸を伸ばす。

綺麗に巻かれた卵焼きを口に運び、咀嚼。

「普通に美味いっすね」

「うん、普通だ」

「そ、どうしても一味足りないの」

自分も一つ摘みながら、ベルゼラが言う。

「あー、ミラちゃんの愛情たっぷりな卵焼きが食べたい。あーんっ
てしてもらいたい」

欲望が漏れまくっているベルゼラの発言に、もぐもぐと卵焼きを食べていた二人が吹き出す。

「ごほっ、ごほ、な、何言ってるんすか！」

「いやいや、むしろそのところ詳しく」

「お、食いつくね。じゃあ、教えてあげよう。

愛情は魔法のスパイス。どんな料理も三割り増しで美味しくなるのよ」

「まじか！ 俺もセアラに食べさせて貰いたいなあ。あーんとか、いいよな……うひひひ」

「うわ……ヤバイ笑みを浮かべた人がいるっす」

「あれはもうセアラちゃんを剥いちやってるね……エプロン+靴下に」

「何すか、そのマニアックな指定は。って、今のでさらに危ない人っぽくなってるっす！」

「ま、変人度なら水に入ったグレイ君もいい勝負だけどね」

「ぐさあっ」

容赦のない突っ込みに、グレイが胸を押さえてテーブルに突っ伏す。

怪しい笑みを浮かべて旅立っているレグルと、屍と化したグレイ。

ベルゼラは、二人を見ながら卵焼きを口に運び、

「あ、そうそう。卵焼き食べた人はもれなくラオシャンロン戦のお手伝いだから、よろしくね」

「聞いてないっすよ！」

「聞いてないっての！」

一瞬にして正気を取り戻した二人が声を上げるが、ベルゼラは聞く耳持たずに卵焼きに箸を伸ばすのだった。

【ゲリヨス変種】との戦いの前にミュリエリアが盾を改造していた武器屋に、フェルルートとエンダの姿があった。

二人は、並んでそれぞれの武器を研いでいる。

「まったく、めんどくせえ。何で俺がこんなこと……」

「全くです。家出をするなら、私たちに迷惑かけないようにしてください。あ、そこはもっと刃を立てて」

「ごうか？ しかも、ラオシャンロンと戦うとか、馬鹿じゃねえの、ってか馬鹿だろ」

「そうですね。シエンガオレン戦であんなに人を動員したの忘れ
たんですか？」

「いや、俺は知らねえけどよ。うし、これでいいか」

「まだです、そっちに仕上げ用の紙やすりがありますから」

「へいへい……」

ぶつぶつ言いながら、明日の戦いの準備をする二人なのだった。

ミラとトレナードが決闘を行った闘技場。

キインと、音を立てて刃が離れたのを最後に、ベガードと柊也は
武器を収めた。

「しゅー君、ベガードさん、お疲れ様なの」

駆け寄ってきた茉莉が、二人にタオルを渡す。

「ありがとう、茉莉」

「これは、忝かたじけない」

軽く流す程度だったため、ほとんど汗をかいてなかったが、二人
は礼を言ってタオルを受け取った。

タオルを首に引つ掛けながら、柊也が言う。

「あんたはやっぱり戦うのか？」

「うむ。戦いこそ、某の望むところ。ラオシャンロンともなれば、相手に取って不足はない」

あっさりと言ったベガードが頷く。

【ラオシャンロン】と戦うことに、何の躊躇いも持っていないようだった。

そんなベガードに、柊也は一つの疑問をぶつける。

「ベガード、あんたはどうして、そんなに戦いを望むんだ？」

「某の戦う理由か……」

ベガードは、長い髪を器用にタオルで纏めながら話を始める。

「某は、負けられぬ戦いに勝つために、戦っているのだ」

「うん？ ちょっと意味がわからないの」

「戦った数だけ経験が積み、強者との戦いは多くを学び取ることができる。」

そこでは、勝利も敗北も等しく糧だ。

しかし、いつどこで訪れるかはわからぬが、生きていれば必ず、負けが許されぬ戦いというものがある。某は、その戦いに備えて腕

を磨いておるのだ。

畢竟するに、強くなりたいたからなのだがな」

「負けられない戦いか。なるほどな」

柊也が頷く。

そういう戦いがあることは、よくわかっていた。

ベガードとの二度目の戦い。

あれはまさに、柊也にとって負けられない戦いだった。

「此度の戦は、負けられぬ戦と思っている。某が今日までに積み重ねた全てを賭して、戦うつもりだ」

「そうか。茉莉はどうする、明日の戦い」

「茉莉は……しゅー君と同じ方にするの」

そして、一拍置いて、

「勘違いしないで欲しいの。茉莉は、村が潰れてもどっちでもいいんじゃないくて、しゅー君なら戦って守ってくれらって信じてるんだからね！」

茉莉にそう言われるまでもなく、柊也の心は決まっていた。

ただ、それを再確認しただけだ。

「ああ、そうだな。明日の戦いは、負けられない戦いで、避けられない戦いだ。

勝って、守るぞ。ミラの、帰るべき場所を」

「うん！」

「うむ」

柊也の言葉に、二人は力強く頷いた。

セレスティアの部屋。

ベッドに寝転がったセレスティアは、眼前に【煌竜剣】【比翼】を掲げていた。

母親の形見である金色の鱗が飾られた刀身に祈るように、呟く。

「お母さん。私、明日ラオシャンロンと戦うのよ。お母さんたちと同じ、ミューリーの村を守るために。」

きつとやり遂げるから、私とセレスタを見守ってて」

どれだけの人が協力してくれるかわからない。

けれど、セレスタイトと二人きりだろうとやり遂げてみせると誓って、セレスティアは眠りについた。

第二十二話「MONSTER HUNTER」（後編）

朝日が、昇る。

ゆっくりと姿を見せた太陽が、雲海を黄金色に染める。

美しく、幻想的な眺め。

だが、その美しい光景も、今の彼女には何の感慨も抱かせなかった。

【塔】。

遙か昔、【人間】時代には既に存在したという円筒形をした高い塔。

その頂上に、ミラの姿があった。

ミュエリエリアの前を飛び出してから、当てもなく空を彷徨ったミラは、この場所に辿り着いていたのだ。

円形の足場の隅に膝を抱えて座り込み、虚ろな瞳が見るともなしに雲海を見つめている。

そのとき、ミラの目の前で雲の一部が大きく膨らんだ。

雲を割って、銀色に輝く翼が現れる。

全身が銀色の鱗に覆われた、銀色の太陽シルバースルの異名を持つ飛竜。

個体数が少なく、【リオレウス希少種】と呼ばれる。

珍しいだけではなく、能力においても通常の【原種】を圧倒する存在だ。

大きな翼を広げて【塔】上空に飛来した【リオレウス希少種】は、ゆっくりと降下し、石の地面に足をつける。

その瞳は、確実にミラの姿を映していた。

このままでは、爪や牙に引き裂かれるか、火球で丸焦げにされてしまっただろう。

しかし、ミラは銀色の体をぼんやりと見ているだけだ。

(……私なんて存在は、最初からいなかったんだから)

生きていたところで、何の意味があるだろうか。

そんな投げやりな気持ちで、ただ、目の前の死を見つめる。

【リオレウス希少種】は、ミラを腹に収めることに決めたらしい。

大きく口を開き、吐き出された吐息が冷たい外気に白く曇る。

【リオレウス希少種】がミラに迫ろうとする、その瞬間、

銀の体色を照らして、赤い閃光が落ちた。

目の前に落ちた赤い雷に、【リオレウス希少種】が動きを止める。
警戒するように巡らせた頭。

その瞳が、白い姿を映す。

【塔】の最上階から天に突き出す柱。

その上に君臨する、白亜の龍の姿を。

大きな翼。柱の下にまで届く長い尾。

四本の角が頭を飾り、背中に体毛が流れる。

鱗や甲殻を含めたその全てが純白で、神話から抜け出してきたような神々しさを放っていた。

ギオオオオオオオオオオオオ

長く尾を引く咆哮。

その声が響くと同時に、幾条もの赤い雷が屋上を染め上げる。

その雷は一つも【リオレウス希少種】には当たらなかったが、脅しとしての効果は十分だったようだ。

【リオレウス希少種】は白い龍を睨みつけ、忌々しそうに首を巡らせる。

そして、翼を広げて飛び去って行った。

【リオレウス希少種】が飛び去ったのを見届け、白い龍が柱の上から床に下りてくる。

二本の後脚で石畳を踏みしめ、ミラの目の前まで歩み寄る。

白龍の体が強い光を放つ。

そして、その光が収まったとき、そこには一人の少女が立っていた。

ミラよりも小柄な体。

膝まである長い髪には、四本の角のついた金色の王冠のようなテイアラが光る。

首回りにファアのついた白い鎧を着て、白い翼を背中に広げている。

腰に手を当ててふんぞり返っている姿からは、小さな王様という印象を受けた。

「うむ、何とか上手くいったようじゃな。妾わいの雷は脅しにしかならぬゆえ、今ので逃げなければどうしようかと思っただわ」

そう言うと、呆然と座り込んでいるミラに目を向け、

「無事かの？」

と聞いた。

思わずミラが頷くと、「そうかそうか」と満足そうに頷く。

「あの、あなたは何なんですか？」

誰、ではなく何、と聞いたところにミラの持っている疑惑が窺える。

あの白き龍も、赤い雷も見たことはなかったし、ハイエンシメント【進古龍種】
としても【龍化】を解いた状態であるのは変だ。

ミラに聞かれた少女は、大仰に頷き、

「妾はこの世界の真実を知る三龍の一。進化と観測の役目を担う者。かつては祖なる龍と呼ばれておった」

「世界の真実を知る……龍？」

理解の及ばない言葉を、鸚鵡返しに繰り返す。

「そうじゃ。まだ名はないがの。とりあえずはミラルーツ ルーツ
ツとも呼ぶがよい」

「ルーツさん、ですか？」

体は小さいが、不思議と「ルーツちゃん」とは呼べない雰囲気があった。

ルーツは頷くと、

「さて、ミラよ。妾はそなたに頼みがある」

名乗ってもいない名前を正確に言い当て、ルーツは続ける。

「そのためにまず、世界の真実から話さねばならんじゃろな」

ミュリエリアの村から少し離れた草原。

早朝の草原には、白い霧がかかっていた。

だが、その霧の中、すぐそこにまでそれは接近していた。

ズシン、ズシンと、重い足跡が響き、霧の中に大きな影が黒々と映る。

「……来た」

霧の中を見つめて、セレスティアが呟く。

そしてついに、霧の中からその威容が現れる。

四本の足で大地を踏みしめて歩く、赤茶色の甲殻に覆われた巨大な体。

首、胸、尾の全てが長く、全長は優に六十メートルを超える。

鼻先に一本角のある頭を見ていると、尻尾の先はまるで見えなかった。

全モンスター中最大のサイズを誇る【古龍】、【ラオシャンロン老山龍】である。

その巨大な姿には、理屈抜きに見る者を恐怖させる力がある。

だが、【ラオシャンロン】に挑む者たちの姿もそこにあった。

セレスティアを筆頭にした、総勢二十三人。

大きな荷車の前にずらりと並ぶ姿は、【ラオシャンロン】に比べれば余りにも小さく、しかし壯観だった。

「みんな、準備はいい？ 作戦通りに頼むわ」

【ジェイドテンペスト】を持った華霞が言う。

これはミラの物だが、華霞も攻撃に参加するために借りているのだ。

「絶対に後脚よりも後ろに行ってはダメだぞ。尻尾に潰されてしま
うからな！」

そう補足したのは【ヘビィピアースクラブ】を持ったエルミナ。

そして、【シエンガオレン】と戦ったときのように、華霞が号令を下す。

「攻撃開始！」

【ラオシャンロン】との戦いの火蓋が、切つて落とされた。

全員が作戦に決められた通りの位置に移動を始める。

【ラオシャンロン】の頭の方に向かうのは、【アッパーブレイズ】を持つエンダ、【将刀【飛車】】を持つリーヤ。

「行くぜえ！」

「いっくよお！」

この二人が、【ラオシャンロン】の頭の左側面から攻撃を開始する。

頭の前、進行方向に陣取るのは【火砕弓】を持つアンゼリカと、普段は茉莉が使っている【アイルーラグドール】を持つルクス。

普段は変身する特殊な鎧を着た接近戦をするルクスだが、老齡ゆえに長時間それを維持するほどの体力がない。

今回は、【ボウガン】による遠距離攻撃が彼の役目だ。

「行くよ」

「戦闘開始だ」

側面にいる二人に当てないように気をつけながら放たれた二人の射撃が【ラオシャンロン】の頭に突き刺さった。

「行くぞ、茉莉」

「了解なの！」

「姉さん！」

「わかってるわよ！」

戦闘開始と同時に空に舞い上がったのは、茉莉、柊也、セレスタイト、セレスティア。

この四人は、【ラオシャンロン】の背中に下りると、動く地面に向けてそれぞれの武器を突き立てる。

セレスタイト、セレスティアの【煌竜剣【比翼】】、柊也の【双影剣】、普段は【ボウガン】使いの茉莉は借りた【夜刀【月影】】。

【ラオシャンロン】の甲殻は岩石のように固く、容易く傷をつけることはできない。

だが、四人は何度も何度も、広大な背中に攻撃を加えた。

【ラオシャンロン】の頭から、進行方向左に離れた位置に、【ポポ】に引かれた荷車が三台。

ここは補給、治療地点。

ラキ、石楠花が六花の手伝いをして、アイテムの調合などを行う。

戦闘開始時である今はその作業の必要はなく、六花は長砲身の【ヘビィボウガン】である【ヘブンスサイト】を構えていた。

後方支援の位置取りだが、この長距離狙撃用の【ボウガン】ならば、十分に射程内。

狙撃は難しいが、馬鹿でかい【ラオシャンロン】相手なら、撃てば当たる。

攻撃している人のいない首の中心を狙い、引き金を引く。

バーン、と大きな音が響き、跳ね上がった銃口から放たれた弾丸が甲殻を削りながら首の上に抜ける。

「うわっ」

思った以上の反動に、六花は尻餅をついた。

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。次！」

「どござ」

催促した六花に、石楠花が【狙撃弾】を渡す。

六花は新しい弾丸を装填し、【ラオシャンロン】に狙いを定めた。

【ラオシャンロン】の左前脚と後脚のちょうど中間地点。

最も全景が把握しやすい位置に陣取るのは、ルティエ、華霞、エルミナ、メイミイ。

「撃て撃て撃て撃て！ とにかく撃つんだぞ！」

「わかってるわ」

「頑張ります！」

エルミナ、華霞、メイミイが脇腹に射撃攻撃を加える。

メイミイが使っているのは、トレナードに借りた【神ヶ島】だ。

その少し後ろで、ルティエは巻貝の形の【狩猟笛】である【龍木ノ笛】を吹き鳴らしている。

旋律は、攻撃力を大きく増加させる、攻撃力強化【大】だ。

その旋律の恩恵を受けるのは、前脚と後脚への直接攻撃部隊。

【ラオシャンロン】の左後脚。

ここを攻撃するのはベガード、グレイ、ダルブルグ、グラキシア。

「うおおおおおっ！」

ダルブルグが雄たけびを発し、【大地の絆^{ガイアタイズ}】を発動させる。

左後脚の周囲の砂が流砂のようになり、その脚が砂に沈む。

【ラオシャンロン】の巨大な脚は、踏み出すたびに強烈な振動を起こして攻撃にならない。

それを封じるために、脚を固定してしまったのだ。

もちろん、村に近づけないと言う目的もある。

「いよっしゃ！」

歓声を上げて、ダルブルグが攻撃を始めようとするが、

「待たれよ、ダルブルグ殿。貴殿の役割は、少しでも長く力を使うために、体力を温存すること。

攻撃は、某らに任せられよ」

【大地の絆】ガイアタイズは使い続けると、精神的、肉体的に疲労する。

【ラオシャンロン】拘束のために、ダルブルグは攻撃に参加するなど、華霞に言われていた。

「俺たちに任せとくっす」

「そうです。ラオシャンロンをしっかりと捕まえておいてくださいね」

水の無い戦場であるため【ギムレー】を借りたグレイと、【白猿薙】【ドド】を構えたグラキシアが言う。

「ちっ、へまあするんじゃないぞ」

「無論だ」

「任せるっすよ」

「さ、行こう！」

ダルブルグの言葉に返事を返して、三人は一斉に攻撃を始めた。

【狩猟笛】の旋律が届く、左前脚。

ここを攻撃するのは【群蟲刃】【雲霞】を持つベルゼラ、【パラ Deinran】のレグル、【エメラルドスピア】の槍だけを使うセ

アラ、「スパインノッカー」を構えるフェルルート。

この四人はそれぞれ使い慣れた自前の武器でただ攻撃するだけだ。

周囲の妨害を気にも留めず侵攻していた【ラオシャンロン】が不意に動きを止めた。

もがくように前脚が地面を引っかくが、それ以上前に進まない。

「おじさんが上手くやったみたいだね。みんな、行くよ！」

「おう！」

「……倒すです」

「お姉ちゃんには、近づけさせません！」

四人は一斉に脚に攻撃を始めた。

これが、華霞の考え出した攻撃の布陣だ。

正面と背中为数人を除いて、ほぼ全員が左側面に固まっている。

これは、進行方向に対して左、つまり地図上の南には他の村が存在するからだ。

もちろん討伐できるに越したことはないが、撃退でも十分な成果と言える。

だが、南に逃げられると、別の村を潰されてしまう。

その点、北ならば安全な移動ルートが確保できる。

そういうわけで、左からのみ攻撃して右に向いてもらおうというのだ。

爆音が響く。

音の出所は、最も派手な戦いが展開されている左脇腹だ。

仲間に気を使う必要がないこの場所では、爆発によって高威力を誇る【徹甲榴弾】や【拡散弾】が惜しげもなく運用され、バンバンと爆発していた。

脇腹は爆発によって傷つけられ、熱で焼け爛れているが、全長からするとごく小さな火傷に過ぎない。

この戦いは、思っていた以上に大変そうだった。

「じのっ！ じのっ！ じのお！」

茉莉が我武者羅に繰り出す刃が、【ラオシャンロン】の背甲に弾

かれる。

「もう、硬すぎるの!」

「茉莉、気刃を使うんだ」

柊也がアドバイスするが、茉莉は「そんなの使ったこと無いの」と泣き言を言う。

普段の茉莉が使っているのは【ボウガン】だ。

いきなり【太刀】を持たされて使えと言われても、無理な話だ。

そもそも、そう言う柊也もまだ【ラオシャンロン】に傷らしい傷を与えていない。

「硬いわね! こいつ!」

こちらはまだ傷つけられていないセレスティアが忌々しそうに剣を振り下ろす。

「姉さん、鬼人化を使おう」

セレスティアにセレスタイトが提案する。

「疲れるから好機までは使うなって言われたじゃない」

「でも、このまま攻撃しても意味が無いよ。少しだけ鬼人化して傷をつけて、その傷を広げていこう」

「……いいわ、やりましょ。そつちも聞いてた？」

「ああ。俺もそうしよう」

柊也が頷き、【双影剣】を天に掲げる。

刀身と柊也を、練気の赤い光が包み込んだ。

セレスティアとセレスタイトは、強く手を握り合い、一刀ずつの【双剣】を天に向ける。

金と銀の刃を、練気が赤く覆う。

「はあああつ！」

「やあああ！」

練気にコーティングされた刃が、水増しされた膂力で背中に突き立てられる。

「ぐぬぬぬ……ええいつ！」

「おおおおつ！」

一際大きな気合の声と共に、刃が背甲を突き破った。

後脚。

グレイの突き出した切っ先が、火花を散らして弾かれる。

「そりゃあ！」

反動のままバックステップし、グレイは再び槍を突き出す。

が、バックステップした分距離が足りない。

「うおおお！？ しまった、これは伸びなかつたっす！」

「んもう、何やってるの、グレイ君」

「め、面目ないっす」

「じゃれる余裕のある相手ではないのだがな」

ベガードが苦笑を浮かべ、

一瞬の後にその笑みは鋭さにとって変わられる。

「シッ」

短い呼気と共に繰り出された、赤く輝く刃の一撃。

気刃斬りが【ラオシャンロン】の脚の甲殻を断ち割る。

深く入った刃が流血を呼び、血の玉が鎧に弾けた。

「くっそお、俺サマも戦いてえぜ……！」

そんな光景を見ながら、戦闘禁止を言い渡されているダルブルグが地団太を踏んでいた。

前脚を攻撃する四人は、波状攻撃を展開していた。

【ラオシャンロン】の太い足は、四人が同時に攻撃することもできるが、あえて一点に集中することを選んだのだ。

ベルゼラが、分離状態の【群蟲刃【雲霞】】を頭上でぐるぐると回して、勢いをつける。

「いつもより多めに回しておりますっ！」

振り抜かれた連刃が、【ラオシャンロン】の甲殻をがりがりとしり取る。

「さすがお姉ちゃん、こんな武器を作ってたんですね」

虫の刃が過ぎ去った後に、攻撃をかけるのはフェルルート。

気を溜めた【スパインノッカー】は、打撃形態。

ベルゼラがつけた傷の上に、【スパインノッカー】が叩きつけられた。

その衝撃で、削られて薄くなっていた甲殻がパキと音を立てて割れる。

フェルルートは素早く離れ、

「次は俺たちだけ、セアラ！」

「……言われなくてもわかってるです」

裂け目に向かって、レグルとセアラが突進する。

勢いを乗せた切っ先が二本、傷口に突き刺さる。

「……レグル」

「何だよ？」

「……早く抜かないと、痺れるかもです」

そう言ったセアラの体を、青い光が走る。

「ちょー！」

慌てて【パラディンランス】を引き抜くレグル。

次の瞬間、【エメラルドスピア】を通じた青い電撃が【ラオシャ
ンロン】に流れ込んだ。

「あ、危ないっての。ありえないだろ、今の攻撃」

「セアラちゃんにとってのレグル君は、そういう位置なんだね」

心なしか青ざめてレグルの肩を、気の毒そうにベルゼラが叩いた。

ニヤーニヤーと、独特の発射音で弾を撃ち出していた【アイルーラグドール】がガチンと音を立てた。

ルクスは腰のアイテムポーチを探るが、中身は空。

「しまった、弾切れか」

「ち、あたしもだ」

傍らのアンゼリカが舌打ち交じりに言う。

彼女も、腰につけた矢筒が空になっていた。

「あたしが貰ってくる。ルクスはここを頼む」

「ああ、わかった」

ルクスは、アイテムポーチを外してアンゼリカに投げる。

アイテムポーチを受け取ったアンゼリカは、荷車に向かって走っ

て行った。

その姿を見送って、ふと気づくと【ラオシャンロン】の瞳がルクスを見ていた。

「弾切れと知って安心したか？　だが、甘いな」

ルクスは右手を持ち上げ、その手から熱線を放った。

集束した火炎が、うかつな【ラオシャンロン】の目を貫く。

ギヤオオオオオオオオオオツ！

片目を焼かれた【ラオシャンロン】が、悲鳴を上げながら長い首を左右に振る。

「ひいやああああつ」

「のわあつ」

リーヤとエンダが、耳を押さえながら慌てて身を伏せる。

その頭上を、【ラオシャンロン】の首が凄い勢いで通過して行った。

「む、無茶苦茶すんなあ、あの爺さん……」

「ふわあ、びっくりした。むう、私たちも負けてられないよー！」

理由はよくわからないが、やる気を増したリーヤが元の位置に戻

った【ラオシャンロン】の頭に斬りかかって行く。

「くそ、このポジション外れだろ」

エンダは、不満そうに呟きながらその後ろに続いた。

ドオ……ン

遠雷のような音が、聞こえてくる。

だが、それは雷ではなく、爆音。

【ラオシャンロン】との戦いの音だ。

ミュリエリアは、工房の中からその音を聞いていた。

工房の中はかなり散らかっていて、ばらばらの【ミオガルナ】双剣のパーツが床に散らばっている。

今朝方、作業台を空けるときに落としてしまったのがそのままになっっていた。

一夜明けて、驚くほど多くの仲間を連れてきたセレスティアに、ミュリエリアも同行して手伝うと言ったのだが、

『ミュリーリイが待つって言うから私たちが戦うのよ。だから、ちや

んと待っててあげて』

とセレスティアに言われてしまい、他のメンバーからも似たようなことを言われて置いていかれてしまった。

ミュリエリアにできたのは、全員の武器の状態を確認することくらいだった。

皆は大丈夫だろうか、怪我をした人はいないだろうかと、不安が胸を苛む。

「ミラ……あなたのために、命を懸けてくれる人があんなにも沢山いるのよ」

だからどうか、帰って来て。

短い一振りの剣を御守りのように抱きしめて、そう祈った。

朝焼けの光景を作り出していた太陽は、その角度を高くしていた。

【ラオシャンロン】との戦いは、まだ、続いている。

直接戦っている人ももちろん大変だが、ある意味でそれ以上に忙しいのが荷車の補給部隊だった。

戦いが始まってしばらくしてから、引っ切り無しに誰かが補給に

訪れている。

最も多いのが【ボウガン】の弾の補給で、持って来た弾がみるみる減っていく。

六花は狙撃などする暇はなく、減った分を大急ぎで調合していた。

そこに、メイミィが駆け込んでくる。

「プランB発動です！」

「Bだと!?!」

六花が荷車から双眼鏡を取り出して後脚に向ける。

そこでは、ダルブルグが苦しそうに膝を突いていた。

【大地の絆】ガイアタイズの限界時間だ。

これ以上は、【ラオシャンロン】を足止めできない。

戦っていた面々の顔にも疲労の色が濃かった。

だが、【ラオシャンロン】の方も、もはや満身創痍だ。

左半身に無数に刻まれた傷は夥しい量の血を流し、草原は赤く染まっている。

血を流した分だけ、その生命力も失われているはずだった。

「わかった、プランBだな。ラキ」

「はいっ」

ラキは、預けられていた笛をくわえて、思いつ切り吹き鳴らした。

ピイイイイイイツ。

高い音が草原に響く。

これはただの笛だが、連絡の用途がある。

プランB発動。

その音に気がついて、最後の力を振り絞って足止めしているダルブルグ以外の全員が荷車の回りに集まってくる。

「みんな、プランBよ。位置はわかってるわね」

華霞がそう言いながら、後ろの荷台の荷車に積み重ねられていた荷物をゴロゴロと転がし出す。

【大タル爆弾G】だ。

全員分、二十三個ある。

「配置について！」

ゴロゴロと【大タル爆弾G】を転がして、攻撃していた【ラオシヤンロン】の側面に並べる。

ダルブルグの分は、ベガードが運んでいた。

頭から後脚まで、ずらりと【大タル爆弾G】が並べられる。

プランBOMB。名前の通り、【大タル爆弾G】で爆破してしまおうという計画だ。

「うぐぐぐ、もう無理だ……」

「うわ、大丈夫っすか!？」

ふらりと倒れたダルブルグを、 그레이が支える。

地面が元に戻り、【ラオシャンロン】が動き出す。

「メイミイ、今だ!」

六花の声。

「は、はいっ!」

メイミイは、返事を返し、手元に残していた【大タル爆弾G】。

改造してふたに取り付けた導火線に、着火する。

巨大な爆弾を頭上に持ち上げ、

「行きますっ」

投げた。

脇腹の近くで【大タル爆弾G】が爆発。

その爆発が隣の【大タル爆弾G】を誘爆させ、連鎖的に全ての爆弾が爆発する。

凄まじい爆音。

吹き飛ばされそうな爆風が過ぎ去った後、煙と土煙がもつもつと上がる。

「……やったか？」

誰かが言う。

だが、

グオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！

煙の向こうで、咆哮が響く。

そして、煙を突き破って、長い首が姿を見せる。

足を踏ん張り、二足で立ち上がったのだ。

天を衝く姿は、無残なほどに傷ついている。

甲殻は碎け、皮膚は焼け。

流れ出す血は雨のように地面に注ぐ。

だが、それでもまだ【ラオシャンロン】は生きていた。

「いい加減しつこいのよ！ 嫌われるわよ！」

見上げながら、セレスティアが毒づく。

「僕は元から嫌いだったけどね」

「いいこと言うじゃない。じゃあ、そろそろ退場して貰おうかしら」

「うん、姉さん。ここで終わらせよう」

個体は違えど、セレスティア、セレスタイトには因縁のある相手。

止めは、自分たちの手で刺したかった。

「行くわよ！」

「うん！」

二人が、空へと舞い上がる。

【ラオシャンロン】の頭上を越えて、まだ高く。

天空で、互いの手を握り合い、【煌竜剣】【比翼】を掲げた。

きらりと煌いた刀身が、二人の体が、赤い練気の輝きに包まれる。

そして、一気に急降下。

狙うのは、【ラオシャンロン】の背後。

「これで！」

「終わりだあああああああ！」

赤く輝く刃が、後頭部から入り、首筋、背中と通る。

尻尾の根元まで急降下した二人は、勢いを殺しきれずに地面に激突した。

【ラオシャンロン】の背中に刻まれた、二本の長い傷跡。

その傷から、背ビレのように血が噴き出す。

そしてそれが、【ラオシャンロン】の命を削り切った。

巨体が前のめりに倒れ、地面に崩れ落ちる。

地面に転がったままの二人を、【ラオシャンロン】の起こす最後の揺れが揺らした。

ごろり、と、セレスティアが仰向けになる。

抜けるような青空が見えた。

さっきまでそこにあった巨大な影は、もう見えない。

「セレスターあ」

「何？」

うつ伏せのまま、セレスタイトが顔だけを上げる。

「嘘みたい。倒したわよ、私たち」

「うん。追い払うんじゃないくて、狩っちゃったよ」

顔を見合わせると、なぜかわからないけど笑いがこみ上げてきた。

「あは、あははははははは。勝った！ 勝ったわよ！」

セレスティアの声が響く。

そして、戦っていた皆から、歓声が高鳴り上がった。

天空を、白い翼を広げた龍が飛んでいた。

世界を観測する者、【ミラルーツ】。

彼女は、やろつと思えば世界中で起きている全てのことを見る
ことができる。

世界を観測する瞳は、【ラオシャンロン】の討伐を見ていた。

「終わったようじゃな……………いや、始まりかの」

人の言葉で、【ミラルーツ】が言う。

どういう仕組みかわからないが、【ミラルーツ】は龍の姿でも言葉を抑えるらしい。

「アークよ。時間がない、急ぐのじゃ」

その言葉に、隣を飛んでいたもう一体の白い龍が頷いた。

戦勝に沸く、草原。

討伐を完了し、誰の顔にも笑顔が浮かんでいる。

地面に寝転がったままそれを見ていたセレスティア。

「え……………」

その笑顔が、消えた。

ひっくり返った視界。

【ラオシャンロン】の死体のすぐ傍に、黒い焰が燃えていた。

世界の深淵を覗き込んだような、深い深い黒。

その色は、忘れもしない、あの鱗の。

「セレストア！」

飛び起きて、隣で暢気に寝ている弟を蹴っ飛ばす。

「あいたっ。姉さん、何を」

「あれ見て文句が言えるなら聞くわよ！」

「あれ？」

セレストアはセレスティアの指さした方に目を向け、

「あ、あれって……まさか……」

「どうした？」

「何かあるの……ってえ、あれ何？」

二人の様子がおかしいのに気がついた他の面々も、黒い焔に驚きの声を上げる。

その目の前で、黒い焔は大きく燃え上がり、扉ほどのサイズになった。

そして、その焔を抜けて、一人の女性が現れる。

腰まで届く長い黒髪、黒い瞳、黒い鎧、黒い翼。

何もかもが黒い、その姿。

「……………あの、ときの」

セアラが震える声で呟き、【エメラルドスピア】をぎゅっと握り締めた。

黒尽くめの姿は紛れも無く、セアラの両親と【リオス進種】の夫婦を殺したあの女だ。

そして、その鎧に使われている鱗の色は、セレスティアが持っている鱗と同じ色で。

「驚いたわ……………。まさか、ラオシャンロンと一緒にでてくるどころまで同じだなんて」

「でも、これでやっと、父さんと母さんの仇が討てる」

仇と言ったセレスタイトの発言に、その場がざわめく。

「……………仇……………まさか……………」

まさか、あのときの【リオス進種】は、と驚きの表情を浮かべるセアラ。

だが、そんな全ての反応も、セレスティアやセレスタイトの言葉も、黒い女に表情一つ動かさせることはできない。

黒い女は、ただ淡々と、告げる。

「リオシャンロン龍形巡回監視装置による能力値判定によって、あなた」

と、ベルゼラを指差す。

「へ？ 私？」

自分を指差すベルゼラに構わず、「あなた」と言ってベガードを指差す。

「あなた」

ダブルブルグを、

「あなた」

柊也を、

そして、

「あなた」

「あなた」

セレスティアとセレスタイトを指差す。

「あなたたちの能力は危険域にあると判断された」

黒い女が手を掲げる。

その手の先に黒い焔が燃え上がり、それが、【大剣】へと姿を変
える。

鋭い両刃の刀身に、捻じ曲がった角のような鍔の【大剣】。

もちろん、その全てが黒い。

「私は、ミラボレアス。世界の真実を知る三龍の一。監視と調停の
役目を担うもの。」

あなたたちは【人間】に対して進化しすぎている。【世界の調和】
を狂わせるものは、排除されなければならない」

一方的な宣告。

「な、何なの？ どういうこと？」

戸惑ったようにベルゼラが声を出す。

黒い焔の中から出てきたかと思えば、黒い焔を剣に変える。

しかも、訳のわからないことを言われた拳句に排除するとまで言
われてしまった。

どれ一つ取っても、意味がわからない。

だが、

「わかんないの？」

セレスティアが【煌竜剣【比翼】】を構えながら言う。

彼女だって、【ミラボレアス】の言っていることはさっぱりわからない。

だが、わかっていることが、一つ。

「こいつは、敵よ…!」

そして、その一つで十分だった。

セレスティアと、それに呼応したセレスタイトが飛び出す。

【ミラボレアス】は黒い【大剣】を片手で持ち、逆の手に黒い火球を生み出す。

【リオス進種】の使う火球とは少し違い、黒く輝く中心核を燃えているガスが包み込んでいるような火球だ。

【ミラボレアス】が火球を放つ。

狙われたセレスティアは素早く身を躲し、火球は背後に抜ける。

地面に着弾した火球は、大きな爆発を起こして派手に地面を抉った。

手の平サイズの火球なのに、【大タル爆弾G】にも匹敵する威力だ。

それだけでも、【ミラボレアス】の強さの一端が窺える。

だが、結果としてそれが迷いを断ち切る要因になった。

「理由はわからないが、俺は黙って殺されるわけにはいかない」

「もうやだ、最近こんなわけわからないのばかり……」

「戦いとあれば、是非もなし」

柊也、ベルゼラ、ベガードが参戦する。

その後何人が続こうとするが、

「待って！」

【ミラボレアス】と切り結んでいたセレスタイトが止めた。

すくい上げる【大剣】の一撃を利用して空中に飛び上がって距離を取る。

すぐさまセレスティアが【ミラボレアス】に飛びかかり、セレスタイトに攻撃を向けさせない。

「こいつは、強いです。だから、名指しされた人以外は、出ないでください。多分、呼ばれた人は、戦えるだけの力があると思いますから！」

空中からセレスタイトがそう言う。

「なら、俺も行かねえとな」

疲れ切って地面に寝かされていたダルブルグがそう言うが、

「ダメだよ。そんなに疲れてるから」

石楠花に押さえられてしまう。

実際、小さな石楠花を押しよけるほどの力も残っていなかった。

「悔しいかもしれないけど、言う通りにしましょう」

柊也たちも参加した、入り乱れながらの戦いを見ながら華霞が言う。

人一人だと、あまり大勢いても邪魔になるだけなのだ。

だが、その言葉を無視して、セアラが戦場へと足を進める。

「セアラ！ 行くなって言われただろ！」

レグルが静止して手を掴む、

「……離すです」

「離さないっての。危ないんだぞ」

「……あれ、私の両親の命を奪った奴です」

「え……」

「……だから、私も、戦うです」

レグルを見返すセアラの瞳の強さに、レグルは言葉を失った。

「……レグル、お願い……です」

「……………」

言われるまま、レグルは手を離した。

「……………ありがとうございます」

淡く微笑んで、セアラが戦場へと駆けて行く。

レグルは、その後ろを追いかけた気持ち、必死に押し殺した。

自分が弱いことは、よくわかっている。

一緒に戦っても、セアラの足手まといでしかないだろう。

前からわかっていたことだったが、今はそれが酷く辛かった。

戦場に駆け込んだセアラは、ちょうど【ミラボレアス】の背後を衝く位置取りだった。

「……………いくです」

【エメラルドスピア】に電撃を纏わせ、機構を作動させる。

槍を一闪すると、電流を纏った高圧水流が先端から噴き出す。

直前で気がついた【ミラボレアス】が、振り向きながら横に飛び、火球を放つ。

セアラもそれを躲し、火球は地面で爆発する。

【ミラボレアス】はセアラに向かって、

「あなたの力は危険域にはないわ。それでも、邪魔をするのなら、排除しなければならぬ」

「……排除されるのあなたの方です」

睨みつけながら、セアラが言い返す。

「その通り！」

勇ましい声と共に、空からセレスティアが滑空して行く。

斜め上から振り下ろした一撃は、【ミラボレアス】の剣に弾かれる。

「まだまだ！」

そこにベルゼラが飛び込み、【群蟲刃【雲霞】】を振るった。

刃が【ミラボレアス】を捉えるが、それは鎧を削るだけに終わる。

【ミラボレアス】が【大剣】を振り下ろすが、一瞬速くベルゼラが飛び退いていた。

【大剣】が地面を叩いた隙を衝こうと、ベガードが駆け寄る。

しかし、その読みは外れた。

【ミラボレアス】は腕の力で無理やり【大剣】の軌道を捻じ曲げたのだ。

「何とっ」

驚きの声を漏らしながら、ベガードは気刃を展開する。

横薙ぎの軌道に変わった【大剣】を真っ向から受け止め、そして弾き返す。

やらない方がいいのだが、気刃を使えば【太刀】でもこのくらいのことは出来るのだ。

ベガードは体勢を崩した【ミラボレアス】に向かうが、【ミラボレアス】が火球を作り出したのを見て止む無く追撃を諦めた。

すぐさまその場を飛び退き、火球を躲す。

それを見ながら、セレスタイトが呟く。

「……やれるよ、姉さん」

「ええ。倒せる」

セレスティアが頷く。

確かに、【ミラボレアス】は強い。

だが、速さではベルゼラが勝っていたし、力ではベガードが上だ。

あの火球の威力は脅威だが、直線でしか来ないのなら回避は難しくない。

「終わりにしてやるわ！」

セレスティアは、次々に火球を生み出し、【ミラボレアス】に飛ばす。

【ミラボレアス】は横に移動して躲すが、先読みしていたセレスタイトがそこに火球を放っていた。

着弾して、思わず動きが止まってしまったところに、二人は連続して火球で攻撃する。

【ミラボレアス】は、堪らず上空に飛び上がる。

だが、その先には赤い罫が待ち受けていた

柊也の【大地の絆】ガイアタイズ。

赤い粒子が集束し、爆発を起こす。

直接は巻き込まれなかったが、爆風に煽られた【ミラボレアス】が地上に向けて吹き飛ばされる。

何とか体勢を立て直して足から着地するが、それ以上の行動は取れない。

大きな隙。それを逃さず、セレスティアが突っ込む。

「何でよ……!!」

セレスティアが叫ぶ。

勝てると思ったときから、セレスティアの心の中に、怒りとも悲しみともつかない感情が生まれていた。

【ミラボレアス】に勝てると思ったからこそ、思う。

まだ、父や母を超えたなんて思わない。なのに、何で。

私が、勝てるような相手に、何で

「何でこんな奴に、殺されたのよあつ!!」

叫びながら、懐に飛び込むセレスティア。

【ミラボレアス】が、片手に火球を生み出し、迎撃。

しかし、その火球を放つことは出来ない。

黒焔を浮かべた手の平を、青く輝く槍が貫いていた。

セレスティアに気を取られている間に接近していたセアラが、
【エメラルドスピア】の一撃を放ったのだ。

「……報いを、受けるときです」

「お願い、姉さん！」

セレストイトが投げた【煌竜剣【比翼】】を、バトンタッチのよ
うに逆手に受け取って、

「はあああああつ！」

【飛竜】の翼のように左右に広げた両腕から、練気の光が迸る。

そして、腕を閉じながらの剣撃が、【ミラボレアス】の胸を薙ぎ
払った。

鎧を断ち、刃が肉を切り裂く。

腹部に作られた大きな傷から血を溢れさせながら【ミラボレアス】
が後ろ向きに吹き飛び、地面に倒れた。

手から落ちた【大剣】が、黒く燃え上がって消える。

「はあ、はあ、はあ……」

肩を大きく上下させて、荒い息を吐くセレスティアに、セレスタ
イトが駆け寄る。

「姉さん」

「……やったわよ」

そう言いながら、セレスタイトの【煌竜剣【比翼】】を差し出す。セレスタイトは「うん、見てた」と言いながら、それを受け取った。

「っ、まだだ！」

驚愕を露にした、柊也の声。

二人は、慌てて【ミラボレアス】に視線を向ける。

そこには、ざっくりと斬り裂かれたまま、【ミラボレアス】が立ち上がっていた。

「な、何で立てるわけ……？」

ベルゼラが呆然と呟く。

胸がほとんど両断され、背骨にまで刃が入った。

まともな生き物なら、立てるはずが無い。

だが、【ミラボレアス】は立ち上がった。

ならば、これは何なのだ？

【ミラボレアス】は、その漆黒の瞳で、ぐるりと、全員を睥睨する。

そして、何かを呟き始めた。

「……悪意……る……口……ムに……定……」

声が小さく、切れ切れにしか聞こえない。

言つべきことを言い終えたのか、がく、と【ミラボレアス】の体から力が抜けた。

ゆっくりと倒れていく【ミラボレアス】。

だが、その体が、黒い鎧に包まれた腕に受け止められた。

いつの間にかそこにいた、目を閉じている黒い女に。

そこに出現したことに、誰も気づかなかった。

まるで、一瞬でそこに現れたようだった。

「二人目……こやつもハンターのように、作られているのか……?」

疑問を口にするベガード。

「何っ!?!」

その目の前で、【ミラボレアス】の体が燃え上がった。

黒い焰と化して燃え上がる【ミラボレアス】。

そして、目を閉じたままの新しい黒い女の体に、黒い焰になった

【ミラボレアス】が吸い込まれる。

数秒で【ミラボレアス】の姿は完全に消える。

黒焔の残滓がなくなったとき、黒い女が目を開いた。

その色は、紅。

鮮やかな紅い色彩だけが、【ミラボレアス】と違う。

「ミラボレアス改式からの記憶移植終了。トランスファーレンス 情報防壁常駐起動ファイアーフォール」

紅い瞳を持つ、女が呟く。

「させないっ！」

最後まで付き合わず、セレスティアが動く。

何を言っているのかわからない。

何をするつもりかわからない。

使われる能力にどんな効果があるのか、わかるはずもない。

だが、ダメだ。

それだけは、使わせてはならない。

そんな直感のような悪寒に突き動かされて、火球を放つ。

世界の力。【大地の絆】。

ガイアタイズ

だが、その火球が届くよりも速く。

紅色の焰が、女の足元から燃え上がった。

オーロラのような儂い光。

風が吹くだけで消されそうな紅焰。

だがしかし、セレスティアの放った火球は、その壁を越えられなかった。

虚しく四散する火球。

そこにセレスタイトが斬り込む。

姉が感じていたのと同じ悪寒を、彼も感じていたのだ。

加速を乗せて振り下ろされた刃。

だがそれも、紅焰の壁に阻まれる。

「な、んだ、これっ」

奇妙な手ごたえに、セレスタイトが呻く。

硬いとか、そんなレベルの話ではなかった。

そもそも、刃は触れているのかすらもよくわからない。

何か得体のしれない力が、セレスタイトの攻撃を遮断していた。

ファイアーウォール
情報防壁。

コンピューターウィルスやクラッキングのような、外部からの悪意ある干渉を遮断する防壁。

この紅き焰の壁は、敵性として設定したプログラムからのあらゆる干渉を完全に遮断する。

一度設定されれば、どんな方法を持ってしても、傷一つつけることはできない。

「あなたは……何なのよ？」

セレスティアが、聞く。

そして、紅き瞳の女は答える。

戦いの始まりを告げた言葉と少しだけ違う言葉で、終わりの始まりを告げる。

「私は、ミラバルカン。世界の真実を知る三龍の一。防衛と削除の役割を担うもの。」

あなたは【人間】プレイヤーに対して進化しすぎている。【世界の調和】ゲームバランスを狂わせるものは、排除されなければならない」

どこか遠い場所

無数のビルや建物が立ち並ぶ町並み。

綺麗に舗装された道を、自動車が行き来する。

ここには【進種】も【原種】も【ハンター】もない。

ここは、【人間】の街。

時刻は夕暮れ時。

横断歩道の前で信号待ちをしている人並みの中で、二人の少年が話している。

「なあ、これから電気屋寄るんだけど、付き合わないか？」

「何しに行くんだ？」

「やっぱり予約しようと思って。新しいモンハンの」

「ま、いいけど」

「そっぴゃさも昔トライってあつたら」

「どっちの？」

「ティー、アール、ワイの方。オンラインの」

「ああ、自己進化プログラムのテストとかやってたあれか」

「そう、それ。あれって、モンスター強すぎてプレイヤーいなくなつたからサービス停止されてるけどさ、今も動いてたらどうなるんだろっな？」

「進化っていうくらいだから、モンスターが人間みたいになつてたりして」

「まさかあ」

「だよなー」

信号が青に変わる。

二人の少年は、道路を横切り、どこかへと歩いて行った。

ここには【モンスター】も【ハンター】もない。

ここは 人間の^{げんじつ}世界。

NEXT > 第二十三話 「人間^{かみ}よりの赤き絶望」

<簡易キャラクター紹介>

名前：無し

年齢：不明

性別：女

種族：ミラボレアス改

能力：【空間転移】 【重力値干渉】 【攻性プログラム・黒焰】 【身体情報書換え】

名前：無し

年齢：不明

性別：女

種族：ミラバルカン改

能力：【空間転移】 【重力値干渉】 【攻性プログラム・紅焰】 【身体情報書換え】 【記憶移植】 【情報防壁】 【情報更新】 【黒龍製造】

第二十三話「人間よりの紅き絶望」(前書き)

以前のあとがきでも触れましたが、作中の理論は物語性を重視して
いますので、厳密にはあまり正しくありません。

「ああ、そうなのか」くらいの軽い気持ちで読んで下さい。

第二十三話「人間よりの紅き絶望」

【MONSTER HUNTER】。

それは、一つのシリーズのゲームソフトだ。

ハンティングアクションゲームと呼ばれ、プレイヤーは、己の分身であるハンターを操作し、モンスターを狩猟する。

最初のタイトルが発売されてから二十年以上の時間を数え、今やゲームに興味の無い人でも名前は知っているほどの人気ゲームである。

据え置き機、携帯ゲーム機でいくつものタイトルを発売されている他、コンピュータを利用したオンラインゲームも存在する。

幾度かの大規模アップデートを経て、今は【MONSTER HUNTER Frontier G】と呼ばれているが、一時期、もう一つのオンライン版が存在していた。

そのタイトルは、【MONSTER HUNTER TRY】。

名前通り、「試す」ことを目的とするゲームだ。

新要素、新モンスター、新武器などの新要素が思いつくままに投入され、その評判次第で当時はまだ【MONSTER HUNTER Frontier】だった、主流であるオンラインゲームへのアップデートを行うかどうかを判断する。

ある意味、プレイヤーを人柱に使っているゲームと言える。

だが、【MONSTER HUNTER TRY】が本当に試していたのはそんなものではなく、実のところそれらは副産物に過ぎない。

【MONSTER HUNTER TRY】が真に試していたのは、アンセスタートライアル【始祖実験】と呼ばれる研究である。

現実世界の事象を解析し、それをコンピュータネットワーク上の仮想世界に再現することで完全な世界の複製を作り出す。

それが、アンセスタートライアル【始祖実験】だ。

ゲーム会社がそんな研究をする必要があるわけがなく、その研究をしていたのはある大学の研究室だ。

ではなぜ、そんなオンラインゲームが存在したのか。

それには二つの理由がある。

一つ目にして最大の理由。

それは、解析のためである。

現実世界の事象の解析のためには莫大な量の計算をする必要があり、最新のコンピュータを使ったとしても相当な時間がかかる。

それを解決するために研究員が使ったのが、インターネットを通じて複数のコンピュータを繋いで計算をするという方法だ。

そのコンピュータの数を集めるために、人気ゲームを利用したのである。

もちろん、製作会社やプレイヤーも了承の上での話だ。

ある種のコラボレーションとも言えるかもしれない。

その見返りが、製作会社には正式なアップデートの前に反響を確かめることのできるという調整の場。

プレイヤーには真つ先に（反響次第では実装される前に消えてしまふ）新要素で遊べると言う権利なのだ。

こうして、一日に数万人もの人間がゲームをする裏で、世界を解析するための計算が着々と進められることになった。

余談だが、その調整で消えて行ったものに、機械のモンスターや一人でもパーティプレイをするための九種のNPCハンター。

採用されたものに、病気や風属性などがある。

閑話休題。

そして、ある程度の解析が終わったところで出てくるのが、二つ目の理由だ。

解析した結果を反映するためのハードウェアとして、【MONSTER HUNTER Frontier】が持つ様々な種類の自然環境のマップを利用したのだ。

グラフや数値だけよりも、目に見える結果があった方がわかりやすいというのがその理由だ。

時間と共に世界の事象は少しずつ解析され、【MONSTER HUNTER TRY】の世界は現実ほんものへと近づいていった。

そしてある日、一つのプログラムが【MONSTER HUNTER TRY】へと組み込まれる。

それが、進化を制御するプログラム 通称【E因子】である。

この時点で、【MONSTER HUNTER TRY】には、九個の主要なプログラムが組み込まれていた。

食物連鎖。

繁殖。

天体。

回復。

気候。

成長。

地形。

水の循環。

そして、【E因子】。

着実に進む計算。

だが、ここに来て、一つの問題が発生した。

食物連鎖や繁殖を正しく反映したがための、幾つかの種の絶滅。

【E因子】の実装で始まった進化による、モンスターの強化。

それらの理由がプレイヤー離れを招き、結果として計算能力は低下。

だが、プレイヤーを引き止めるには目的である世界の複製をやめなければならない。

そんな二律背反の状況に陥り、研究は難航。

最終的に、世界の解析は諦めて、【E因子】による進化の観測を行うことになった。

その時点で、【MONSTER HUNTER TRY】は役目を終え、サービスは終了したのだ。

だが、その世界は消えたわけではない。

【E因子】を管理する、龍の姿をした管理プログラム ルーツプログラム。

NPCハンターを流用し、進化を促進するための外的要因とした、【天敵】。

この二つを追加した主要十一のプログラムによって運営される不完全な仮想世界として、動き始めたのだ。

不完全な部分はゲームとしての設定が補ってしまつたため、中途半端なリアリティを持ちながら世界は進む。

現実よりも速く流れていく時間の中で、様々なことが起こつた。

人型の【進種】の誕生。

ループプログラムを組み込まれている【ミラルーツ】の【進種】化。

【人間】の介入による、【ハンター】の指導者と【ハンター】が及ばない一部の【進種】対策として【ラオシャンロン観測タイプ】、【進古龍種】ハイエンシメントをモデルに再構成した【ミラボレアス改】【ミラバルカン改】の【天敵】への追加。

【E因子】は【進種】のAIにまで及び、【進種】は次第に個性や感情を持つようになっていく。

そして、その進化の果てに、今の世界が存在するのである。

「私は、ミラバルカン。世界の真実を知る三龍の一。防衛と削除の役割を担うもの。」

あなたは【人間】プレイヤーに対して進化しすぎている。【世界の調和】ゲームバランスを狂わせるものは、排除されなければならない」

【ミラバルカン】の宣告。

それが【人間】に与えられた偽の目的だと、彼女は知らない。

【天敵】と【進種】が敵であり続けるために与えられた、仮初の目的でしかないのだ。

だが、【人間】がそれを教えない以上、それを知ることができない。

この世界にとっての【人間】は、世界の外に存在する高次元存在。

全知全能の力を持つ、神そのものなのだから。

MONSTER HUNTER EVOLVE
第二十三話「人間^{かみ}よりの紅^{あか}き絶望」

焔の壁でセレストタイトの攻撃を遮断した【ミラバルカン】の手に、
紅焔が集う。

紅焔は形を変え、黒い刀身に紅の光が走る【大剣】へと姿を変え

た。

どくん、と紅の光が生物のように脈動する。

無造作に片手で持ち上げられた剣が、セレスタイトに振り下ろされる。

「うわっ」

凄まじい膂力。

【煌竜剣【比翼】】で受けたセレスタイトが大きく後方に吹き飛ばされる。

バランスを失って、背中から地面に落ちるセレスタイト。

そこに、【ミラバルカン】が手を向ける。

【ミラボレアス】の物と構造の似た、紅焰の火球が放たれる。

「セレスタイト君！」

間一髪。

走り込んだベルゼラが、セレスタイトを引きずるように火球から逃れる。

そのすぐ後ろで火球が爆発し、【ミラボレアス】のそれを超える破壊を撒き散らした。

爆風に煽られた二人が地面に倒され、ごろごろと転がる。

【ミラバルカン】がさらに追撃しようとする。

が、その前にベガードが立ちふさがる。

「させぬぞ！」

練気に覆われた気刃を構えて、【ミラバルカン】に攻撃をかける。

「あんたの言ってることは、わけわからないのよ！」

「だが、排除される謂れはない！」

ベガードの攻撃に合わせて、セレスティアと柊也が空中から攻撃をかける。

三方向からの同時攻撃。

【ミラバルカン】は避ける素振りも受ける素振りも見せずに攻撃を待ち、

「無駄よ」

ぼつりと溢された言葉通り、三人の振るった刃はゆらゆらと揺らめく紅焰に阻まれた。

一回転しながらの斬撃が、三人を纏めて吹き飛ばす。

入れ替わりに、【エメラルドスピア】を構えたセアラが突進して

行く。

その穂先は【ミラバルカン】に届く前に情報防壁ファイアーウォールに受け止められる。

【ミラバルカン】は完全に勢いの殺された槍を掴み、そのまま持ち上げた。

セアラの小さな体躯が空中に吊り上げられ、投げ飛ばされる。

「……うく、けほっ」

地面に叩きつけられたセアラが小さく呻き、詰まった息を吐き出す。

「セアラ！ 危ない！」

レグルの声が響く。

未だ起き上がれないセアラに、【ミラバルカン】が火球を放っていた。

高い熱量を秘めた紅焰がセアラに迫る。

紅い輝きがセアラの顔を照らし、

「やらせるかっての！ うおおおおおお！」

叫び声と共に駆け込んだレグルが、セアラを庇って盾を構える。

【ランス】特有の巨大な盾に、火球が炸裂する。

「おわあああつ!」

マカライト鋼製の盾が粉々に砕け、レグルがセアラの頭上を越えて吹き飛んでいく。

「レグル!」

「無茶なことを……!」

セアラが声を上げ、六花がレグルの下へと走る。

「これ以上、黙って見てられないっすよ!」

「賛成なの!」

グレイが【ギムレー】を構えて走り出すと同時に、茉莉が【大地ガイアの絆タイズ】を発動。

【ミラバルカン】を中心に赤い粒子が集い、そして、爆発する。

「私たちも、見ていただけじゃないわ!」

「ああ。皆で、奴を倒す」

さらに、【ボウガン】からの援護射撃や、ルクスの熱線が重ねられる。

【ボウガン】の弾は【ラオシャンロン】戦のままで、【徹甲榴弾】

や【拡散弾】だ。

連続する爆炎と黒煙が、【ミラバルカン】の姿を覆い尽くす。

「行くつすよ！」

グレイが【ギムレー】を構えて煙の中突っ込んで行き

何の手応えもないまま、反対側から飛び出してくる。

「あれ？」

不思議そうに首を捻るグレイに、「上ですっ！」とメイミイが叫ぶ。

頭上を振り仰ぐと、いつの間にかそこに【ミラバルカン】の姿がある。

あれだけの一斉攻撃を受けたのにも関わらず、その体には傷一つ無い。

「一体、何だと言うんだ。アレは！」

忌々しそうに言った六花が、【ガイアタイズ大地の絆】を使う。

頭上から青く輝く稲妻が【ミラバルカン】に降り注ぐが、そのどれもが【ミラバルカン】に触れる前に霧散する。

ファイアーフォール
情報防壁。

敵と設定した相手からの攻撃を完全に遮断する防壁。

その設定条件は、【ミラバルカン】がその存在を認識した上で解析すること。

大雑把に言えば、一目見るか、一度攻撃を当てるか当てられるかした上で解析すればいいのだ。

解析にかかる時間は十秒もかからない。

その僅かな時間を与えるだけで、【ミラバルカン】に触れることも出来なくなる。

つまり、【ミラバルカン】には、ほぼ一度しかダメージを与えることができないのだ。

しかも、【ミラバルカン】は【ミラボレアス】以上に高い能力値を設定されている。

解析が終わる前に、一度ダメージを与えることさえほぼ不可能に近いだろう。

そして、【ミラバルカン】は十分な時間を与えられていた。

【ミラボレアス】から引き継いだ記録があるおかげで、一から解析するほどの時間も必要なかった。

最早、【ミラバルカン】はこの場にいる全員を情報防壁ファイアーフォールの対象に登録しており、誰一人として攻撃を届けることはできないのだ。

絶対の優位に君臨する【ミラバルカン】が上空で手を掲げる。

その動作で、空に大量の火球が作り出された。

全てを敵と定めた【ミラバルカン】が地上を睥睨し、

「あなたたちは、排除されなければならない」

一斉に、火球が落ちた。

流星のように、燃え盛る焰が降り注ぐ。

連続しているかすらわからないほどの絶え間ない爆音に悲鳴が入り乱れる。

そして、爆撃で上がった煙が晴れたとき、そこに立っているものは誰もいなかった。

爆発に巻き込まれ、爆風に吹き飛ばされ、地面に転がっている。

苦しげな呻き声が所々で上がり、誰一人として立ち上がることが出来ない。

むしろ、誰も死んでいないということが奇跡的だった。

【ミラバルカン】は地面に降り立ち、近くに倒れている一人に【大剣】を向けた。

倒れていたのは、セレスティアだ。

意識を失っているのか、ぐったりとしたまま身動き一つしない。

【ミラバルカン】はセレスティアの頭上に【大剣】を振り上げ
その瞬間、【ミラバルカン】の側面から火球が襲いかかった。

火球は情報防壁ファイアーウォールに阻まれて通らなかったが、【ミラバルカン】は
火球の飛んで来た方向に目を向ける。

「今、何、する……つもり……だった？」

ふらつきながら、セレスタイトが身を起こす。

防具として最高ランクの【カイザーXシリーズ】すらぼろぼろに
なっている。

今にも崩れ落ちそうな体を、何とか地面に立たせ、

「父さんや……母さんだけじゃ、なくて……姉さんまで、殺そうな
んて……」

必死に【煌竜剣【比翼】】を構え、そして、駆ける。

「絶対に……許さない！」

傷ついた体に残された力を振り絞った一撃。

だがそれは、【ミラバルカン】にとっては何の脅威にもならず。

何らリアクションを起こさない体に振り下ろされた刃は、触れる

ことなく阻まれる。

「……く、そ」

力が抜け、セレストライトが地面に膝を着く。

「世界のために、あなたは命を諦めなければならないの」

淡々と宣告し、【大剣】を振り上げる。

セレストライトは、目を逸らさず、それを見つめた。

天へと向けられた切っ先が振り落とされる、その最後の一瞬まで。

風が、吹き抜けた。

死を刃に乗せた【大剣】。

それがやけにゆっくりと振り下ろされる。

そして、その刃は セレストライトに振り下ろされる途中で、止まった。

セレストライトの目に、桜色の翼が映る。

「姉、さん……？」

思わず眩き、すぐにそうではないと悟る。

セレスティアに、【ミラバルカン】の腕を掴んで止めることは絶対に出来ない。

それをなしえるのは、今までこの場にいなかった者だけで。

ふ、とセレスタイトは笑みを浮かべた。

(君の言う通りだったよ、ミューリイ)

『本当は、期待しているのよ。危なくなれば、ミラが助けに来てくれるのではないかって』

(でも)

「……遅いよ」

セレスタイトは、そう文句を言った。

やっと、帰って来た少女に。

「もうちょっと早く、来て欲しかったよ……ミラ」

ミラと、呼ぶ。

【ハンター】でも【ミラージュ】でもなく、名前で。

最初は、種族の頭文字でしかなかったかもしれないけれど、今は

もう、それが彼女個人を示す名前だから。

「……ごめんなさい」

セレストタイトにそう答えて、ミラは【ミラバルカン】の腕から手を離した。

既に情報防壁ファイアーウォールに設定され、もう握れてはいなかった。

ミラの口から、「リライト」と言葉がこぼれる。

さあ、と揺れた桜色の髪が白く染まる。

【ミラバルカン】を見る赤い瞳に火花が散り、掴み直した手を通じて電撃を送り込む。

腕を覆う鎧が電撃を防ぎ、【ミラバルカン】は手を振り払って二、三步後退した。

複数の種族の能力を使うという能力。

それは、己を構成するプログラムを書き換えることで発動されている。

つまり、能力の一つを情報防壁ファイアーウォールに登録しても、別の能力に書き換えられたときは別物として扱われるのだ。

「ミラバルカン……ここからは、私が相手です」

【ミラバルカン】を睨みつけて、ミラが言い放つ。

「ミラージュ。なぜ……」

【ミラバルカン】が呟く。

今のなぜ、は、「なぜ、ファイアーフォール情報防壁を抜けたのか」だ。

書き換えていることは知っている。

なぜなら、【イミテーションミラージュ】と戦ったことがあるから。
ら。

そして、書き換えた能力も、ファイアーフォール情報防壁に設定している。

【イミテーションミラージュ】が【オリジナルミラージュ】の複製レプリカである以上、その構成は全く同じはずだ。

それなのになぜ、新しく設定しなければならないのか。

「私は、ミラージュじゃありませんから」

能力を解除した姿で、ミラが答える。

その状態を解析しながら、【ミラバルカン】は思考を走らせる。

【ミラージュ】ではないと言う。

確かに、以前戦った【ミラージュ】と違うのは間違いない。

なぜ違うのか。これはわからない。

だが、

「関係ないわ、私はあなたを排除しなければならない。ただそれに従うだけ」

【ミラバルカン】が言う。

【ミラージュ】であろうとなかろうと、関係ない。

排除すべき敵を、排除するだけだ。

「ミラージュでなくても、同等の能力では何も変わらないわ」

目の前の敵は【ミラージュ】ではないが、先の攻撃からして能力的には【イミテーションミラージュ】とほとんど同じ。

一度倒した相手にもう一度勝つのと、大して変わらないことだ。

「私は、負けません。言ったはずです。私は　ミラージュじゃないー！」

言い返したミラが、大きく両腕を広げ、

「イクシード！」

そう言った瞬間、天空から四本の白い光が降り注いだ。

ミラの前後左右に落ちた光が渦を巻くようにミラに集中し、ミラの体を覆う。

そして、その光は、白く輝く鎧に姿を変えた。

ルーツが着ていたのとよく似たデザインの鎧。その背中に白い翼が広がる。

【ミラバルカン】が下がった分の距離を詰め、その腕を掴む。

「リライト！」

書き換え、解析されるよりも早く、ミラの手が青白く輝く。

さっきと同じ【フルフル進種】の電撃。

しかし、ミラが触られるという時点で、さらに書き換えられている能力。

二度目の電撃は、【ミラバルカン】の鎧の雷耐性を超えて体内に送り込まれた。

「っが……!!」

【ミラバルカン】が短い声を上げて仰け反る。

ミラの新たな能力、【龍装^{イクシード}】。

その鎧に身を包んでいる間、身体能力、【大地の絆^{ガイアタイズ}】問わずミラの全ての能力が高められ、飛行能力を手に入れる。

強化された能力は、【進種】の限界を超え、【原種】に匹敵する

域に高められている。

ミラが持つモンスターとしての能力を高めて装備とし、それを人の身に纏う。

それが、イクシード【龍装】だ。

強烈な電撃を浴び、【ミラバルカン】の鎧や【大剣】の輪郭が揺らぐ。

これらは【ミラバルカン】の焔を操る能力によって、固められた焔なのだ。

ミラに与えられたダメージで、その制御が揺らいでいた。

(効いてる！)

内心でミラが歓声を上げる。

ミラだってこの能力を使うのはぶっつけ本番なのだ。

だが、喜んでいられるのも一瞬だった。

イクシード【龍装】ファイアーフォール【フルフル進種】の状態のミラの情報の解析が終わり、情報防壁に設定が追加される。

掴んでいた手応えが急に無くなり、いつの間にか手が離れている。

【ミラバルカン】の鎧が実体を取り戻し、剣もまた形を作る。

その形は【大剣】ではなく、【双剣】。

腕が掴めるほどの距離に合わせて作り直したのだろう。

ミラのいる位置で交差するように振り下ろされる黒紅の刃。

ミラはそれ頭の高さで受け止めるように手を出し、

「リライト！」

鎧や翼の色はそのままに、髪が赤から朱へと色を変えながら流れる。

腕を覆う防具の形が変化し、右腕には白い盾、左腕には白い鎌が現れた。

展開した鎌が刃を煌かせ、盾と共に【双剣】を受ける。

だが、【龍装】^{イクシード}の強化状態でも、身体能力は【ミラバルカン】の方が上。

じりじりと、刃を支える腕が押し込まれていく。

その間にも解析は進み、ミラからの攻撃は通用しなくなる。

それなら、とミラは潔く諦め、

「リライト！」

髪が闇色に変化し、盾と鎌は左右揃った白い【刃翼】^{ブレード}に変わる。

【刃翼】ブレイドで刃を受け止めながら跳躍し、【ミラバルカン】の胸部を蹴り飛ばす。

【俊脚】の能力で強化された脚力で蹴られた【ミラバルカン】は、ざざざと足で地面に線を引きながら後ろに押され、

「リライト！」

瞬時にミラは自分を書き換えた。

髪は桜色に。

開いた距離を、放たれた【リオス進種】の火球が詰めていく。

【ミラバルカン】は両手に持っていた【双剣】を投げて、それを迎撃。

空中で火球に変じた【双剣】が一発目と二発目を撃ち落す。

三発目は機動によって回避し、【ミラバルカン】を捉えた四発目は情報防壁によって遮断される。

散っていく火の粉を振り払った【ミラバルカン】は、反撃の火球を放つ。

ミラは、翼を広げて上空に逃れながら、能力を書き換える。

瑠璃色は、【ガノトトス進種】の色。

大気中に含まれる水分を制御し、それを集めて無数の円盤を作り出す。

チャクラム、という投擲武器だ。

円の外周は鋭い刃で、触れるものを切断する。

「行けっ！」

ミラが、一斉にチャクラムを飛ばす。

だが、制御して形を作り、飛ばすまでに時間がかかり過ぎている。

既にその能力は設定され、飛来するチャクラムは【ミラバルカン】に通じない。

だが、そんなことはミラもわかっている。

「リライト」

書き換える先は【ウカムルバス進種】。

飛翔する水の円盤を白い霧が取り巻き、氷の刃へと凍てつかせる。

それは、【ウカムルバス進種】の攻撃か、氷を操るという能力でないため、ただ氷が飛んでいるだけか。

微妙なところだが、少なくともそれは【ガノトトス進種】の能力による攻撃ではなくなった。

ただの氷ならば、どうやっても情報防壁ファイアーウォールでは防げない。

【ミラバルカン】は空へと飛び上がり、斜めに降ってくる氷のチャクラムを躲す。

「今だ！ リライト！」

変じるは鋼龍。

巻き起こされた竜巻が【ミラバルカン】を巻き込みながら吹き荒れた。

竜巻は、飛んできたチャクラムをも巻き込み、刃の嵐となる。

「これなら……」

期待を込めてミラが呟く。

だが、その期待を裏切るように、竜巻の内部で紅色が膨れ上がる。

そして、内部で起きた爆発が、無理やり竜巻を吹き飛ばしてしまっただ。

竜巻の中から、【ミラバルカン】が姿を見せる。

鎧があちこち欠けているが、紅焰はそれを覆ったと思うと、瞬時に修復されてしまう。

だが、剥き出しの頬に赤い線が引かれ、血が流れている。

修復された鎧の下も、無傷とはいかないだろう。

相変わらずの無表情からは、どれだけの痛手を与えられたのか窺うことは出来ないが、多少はダメージを与えたと思いたい。

【ミラバルカン】が手を天に掲げ、空中に火球を並べる。

それを見たミラは慌てて飛翔し、【ミラバルカン】を挟んで反対側へと向かう。

【ミラバルカン】の手が振り下ろされると同時に、無数の火球が降り注ぐ。

この位置なら他の人に被害はでない、とひとまずは安心し、今度は自分が流星から逃げることに集中する。

頭から地面へと突っ込みながら「リライト」と呟く。

髪は砂色に、【大地の絆】ガイアタイズによって地面が口を開け、ミラを迎え入れる。

ミラが地下に飛び込むと同時に地面は口を閉じ、地表で火球が爆発した。

火球による爆撃が終わり、【ミラバルカン】が凸凹になった地面に着地する。

その瞬間、地面に亀裂が走る。

【ミラバルカン】がその場を飛び退き、目の前に赤い柱が立ち上

がった。

飛び散った溶岩の雫が、体に遅れた髪の一房を焼き焦がす。

【アカムトルム進種】の【ガイアタイズ大地の絆】だ。

地面から何本もの溶岩の柱が噴き上がり、【ミラバルカン】を襲う。

だが、足元から来るとわかっていれば、それを避けるのはそれほど難しい話ではない。

【ミラバルカン】は次々に足場を変えながら、溶岩柱を躲す。

その間に解析が終わり、噴き出した溶岩柱は、足を止めた【ミラバルカン】を避けるように動く。

【ミラバルカン】の背後に新しい溶岩の柱が現れるが、もうそれには見向きもしない。

だが、その溶岩中には、一つの人影があった。

【ヴォルガノス進種】の力を使って灼熱の柱に身を潜めていたミラが、溶岩の中から【ミラバルカン】に踊りかかる。

硬く握った拳が翼の付け根を叩き、鈍い音を響かせる。

【ミラバルカン】が慌てて振り向き、目の前でミラはさらに書き換えを行う。

髪は金から黒に。

全身を金色のオーラが包み、髪に金色が混ざる。

身体能力を強化する、【ラージヤン進種】の【激昂】だ。

振り向いたばかりの【ミラバルカン】の顔に拳を叩き込み、仰け反った腹にさらに一撃を加える。

防具越しにも響く重い一撃に、【ミラバルカン】の体がくの字に折れる。

ミラは低くなった顔に膝を振り上げ、しかしそれを【ミラバルカン】が手で受け止める。

膝に手を置き、その勢いを利用して宙返りをうった【ミラバルカン】はミラの肩を足場にして空中に跳ぶ。

ミラは体勢を崩しながらも振り返り、

「リライト！」

書き換えた色は、岩を焼いたような黒。

【グラビモス進種】の熱線が、【ミラバルカン】を追って宙を走る。

【ミラバルカン】は、紅焰を盾に変えてそれを受け止める。

盾を貫かんとする熱線だが、盾はそれを許さない。

「リライト！」

拮抗してしまえば、ただ時間が経っただけだ。

その先で情報防壁ファイアーウォールに無力化されるだけで、攻撃に意味は無い。

ミラはすぐさま能力を書き換え、【キリン進種】の姿となる。

青く光る雷が空を裂き、ミラの素早い切り替えに対応できなかった【ミラバルカン】を直撃した。

直撃を受けた【ミラバルカン】が地面に落ち、ミラはさらに雷で追撃する。

幾条もの雷が【ミラバルカン】を襲う。

だが、ダメージを与えられていたのは始めの数発だけだった。

途中から、雷撃は紅焰の壁によって遮断され、【ミラバルカン】が地面から立ち上がる。

「もう諦めたら？ 結果は同じだわ」

「そんなことない！ 私は勝つんだから！」

「そう……」

【ミラバルカン】が焰から【大剣】を作り出してミラに襲い掛かる。

ミラが身構えたとき、「ミラ殿！」と声がかかった。

見ると、ミラが戦っている間に少し回復したのか、ベガードが立ち上がった。

「これを！」

ベガードが、自分の【太刀】を投げる。

渡すと言うよりは、投げつけるという感じだったが、その分早く飛んできた【太刀】を受け取れた。

鞘から抜き放つと同時に練気を纏わせ、【ミラバルカン】の一撃を受け止める。

刃を滑らせて【大剣】を捌き【ミラバルカン】の胸に一閃するが、フレイアーフォールこれは情報防壁に阻まれる。

普通の相手と同じ感覚で、思わず放ってしまった一撃だった。

ミラは慌てて刃を引いて退き、眼前を【大剣】の刃が通過する。

後退した先に火球を撃ち込まれ、ミラは飛び退ってさらに大きく距離を取った。

【ミラバルカン】は、火球を作り出し、それを自分の横に放つ。

火球は少し離れた場所まで飛び、そこに滞空する。

【ミラバルカン】は、同じ行動を何度か繰り返し、六個の火球を並べた。

そして、その火球が勢いよく焰を上げたかと思うと、【ミラバルカン】そっくりの姿へと変わる。

「ええ!？」

流石に驚きの声を上げるミラに、七人の【ミラバルカン】がバラバラの動きで襲い掛かった。

立ち位置を変えながら走るせいで、あっという間にどれが本物かわからなくなる。

「そんなの反則だよ……リライト!」

蒼銀から薄青へ。

【ミラバルカン】の進路上に赤い粒子をばら撒いて起爆する。

爆発が起こるが、その中から次々に【ミラバルカン】が飛び出してくる。

腕や足がなくなっている【ミラバルカン】がいるが、元は焰だけあって、何事も無かったかのように元に戻った。

七人は入り乱れ、結局、どれが偽者なのかわからない。

一人目の【ミラバルカン】が振り下ろした【大剣】を避け、【太刀】を斬り上げる。

脇腹から入った刃は、あっさりと【ミラバルカン】を両断して胸の側面に抜ける。

血の代わりに火の粉を吹いた切り口は瞬時にくつつき、もう傷があつたことはわからない。

左右から同時に【ミラバルカン】がミラを襲い、ミラは前に転がって避ける。

ミラに遅れた刃が地面に触れ、そこに生えている草を炭に変えた。偽者だからと言って、攻撃を受けても平気とはいかないようだ。

ミラの避けた先には一人の【ミラバルカン】が待ち構えていて、上段から【大剣】を振り下ろす。

掲げた【太刀】で受け止めようとするが、【大剣】は焰に戻って【太刀】をすり抜け、防御の内側で刃に戻る。

「くっ、リライト！」

ミラは脚の力だけで飛び退き、【大剣】の先端が脚甲に火花を散らした。

その間に書き換えたのは【ゲリヨス進種】の能力。

ミラの放った強烈な光が、待ち構えていた【ミラバルカン】の目を眩ませる。

焔で作られた分身の目が眩むとは思えないが、全員が目くらましをされたようなリアクションを取る。

そのせいで、反応から本物を見つけることはできなかった。

だが、まだ諦めない。

書き換えによって髪を緑に染める。

【クック進種】の超聴覚。

意識を集中すると、どくん、と鼓動が聞こえる。

命の音。

それを響かせるのは、七人の【ミラバルカン】の内、一人だけ。

「見つけたっ。リライト！」

ここが好機。

ミラは【ティガレックス進種】へと存在を書き換えた。

まだ回復していない【ミラバルカン】へと向かう。

一太刀で決める、と気刃の【太刀】を構える。

その瞬間、爆音と共に強烈な風がミラを襲った。

偽者の【ミラバルカン】が、一斉に爆発したのだ。

視界を奪われている【ミラバルカン】の悪あがき。

だが、それは効果を上げた。

予想外の強風を浴びたミラは体勢を崩し、立て直している間に【ミラバルカン】もまた視力を取り戻す。

ミラはそれでも斬りかかったが、【ミラバルカン】は【大剣】で斬撃を受け止めた。

刃が互いに弾き、ミラは一步下がりながら斜めに斬り下ろす。

しかし、斬り下がりの剣線は紅焰の守りに阻まれて【ミラバルカン】に届かない。

ミラは地面を蹴って再度踏み込み、「リライト」と口に乘せながら刺突を放つ。

【ミラバルカン】は【太刀】切っ先を側面に弾き、勢いのついていたミラの体がすぐ横を通り抜ける。

【ミラバルカン】の視界を金色の髪が流れ、鼻腔を甘い匂いが刺激した。

「リライト」

背後で呟いたミラを追って振り向き、その瞬間、一つの音が【ミラバルカン】の耳を貫いた。

その途端、【ミラバルカン】の体が揺らぐ。

【ガルルガ進種】の【咆哮】だ。

耳から送り込まれたその音が、三半規管を狂わせて平衡感覚を失わせる。

さらに、思考能力を奪う【ランゴスタ進種】の能力をも重ねられていた。

【大剣】が焔に崩れ、鎧の形が失われていく。

ぐらぐらと揺れる視界。

定まらない世界に火球を撃ち込む。

適当な狙いで放たれたそれはミラを捉えられずに地面に着弾した。

土煙が上がり、そしてその向こうから三人のミラが突っ込んでくる。

視界がぶれているが、そのせいだけではない。

その薄紫色の髪は、光を操る者の証左。

【ミラバルカン】への意趣返しでもないが、【オオナズチ進種】の能力で側面に塵気楼を作り出しているのだ。

三人のミラは、瞬時に間合いを詰め、全く同じ動作で【太刀】を突き出す。

反撃しようとして振り上げた【ミラバルカン】の手に、既に剣は無い。

「はあああああつ！」

鋭く突き出された切っ先が、不安定な鎧を貫通し、肉を貫く。

確かな手応え。

だが、ミラは顔を歪める。

(浅い！)

刃が貫いたのは、体外に程近い脇腹。

【ミラバルカン】はあの状況でも何とか身を躲していたのだ。

それでも避けきけることはできなかったが、致命傷には程遠い。

悔しそうな表情を浮かべるミラを、【ミラバルカン】が見下ろす。

その動作に淀みは無く、完全に回復していた。

片手に焔が集い、【片手剣】ほどの長さの剣になる。

振り下ろされる刃から、ミラは慌てて逃げる。

が、ミラの手に【太刀】がついて来ない。

振り下ろされた剣によって、鍔元で刃が切断されてしまっていた。

【ミラバルカン】は、脇腹に残った刃を無造作に引き抜き、投げ捨てる。

傷口から血が流れ出すが、その上を鎧が覆い、すぐに見えなくなつた。

そして、やはり淡々とした言葉で、ミラに告げる。

「もう、お終いな。あなたは、全ての能力ちからを使った」

「ぐ……」

【ミラバルカン】の言葉に、ミラは齒噛みする。

手詰まりだった。

ここまでの戦いで、他の種族の能力は全て使ってしまった。

【進種】の数は決まっているから、【ミラバルカン】にもわかっているのだらう。

「届かないなら、もう、諦めなければならぬわ」

「まだ……まだです」

ミラは、そう言って視線を横に向けた。

そこには、ミラの仲間たちがいる。

大きな白い翼は、よく見れば小さな羽根が無数に並ぶ鳥のそれに近い。

角は金色の角が左右に一本ずつ。

角の途中から前後に分かれて内向きに湾曲し、左右の角の先端は触れ合うほどに近い。

まるで、頭上に金色の輪を戴いているようだった。

白龍がゆっくりと首を持ち上げ、翼を広げる。

ばさり、と翼が空を打ち、白い羽根が舞う。

「クオオオオオオオオ」

白い幻想のような光に包まれて、白龍は、どこか優しさを感じさせる高めの声で咆哮を上げた。

ルーツは、空を飛びながらミラと【ミラバルカン】の戦いを観ていた。

ミラが龍の姿へと変じ、天へ吼える。

(それを使わねばならんほど強いのかな……)

必死に戦う姿に、胸が痛む。

彼女をあの戦いの場に送り込んだのは、他ならぬルーツだからだ。

(じゃが、妾はそなたに賭けるしかないのじゃ)

新たな力と、名前を与えた少女に願う。

【ハンター】から進化した、新たな種、進龍。

その名は、神が世界を押し流しても、命と種を繋いだ希望の形。

全ての種の情報を内に秘めた、神話に語られる箱舟^{アーケ}。

進龍【ミリアーク】。

「お願いじゃ、アーケ　いや、ミラよ。ミラバルカンを、討つてくれ」

龍の姿に転じたミラの目の前で、【ミラバルカン】が紅焰に包まれた。

焰は燃え盛って大きさを増し、巨大な龍のシルエットを作る。

そして、焰を払って、一体の龍が姿を現した。

ミラ同様、【ミラルーツ】に似ているが、その体色は禍々しい赤と黒。

頭には左右に一本ずつの角があるが、その長さは不揃いで左の方

が長い。

紅龍【ミラバルカン】。その古き姿だ。

【ミラバルカン】は【人間】によって創られた存在だが、【進古^{ハイエン}龍種^{シエント}】をモデルとしている。

【龍化】に相当する能力を持っていても、何ら不思議ではない。

【ミラアーク】と【ミラバルカン】が、互いに咆哮を上げて激突する。

「待っておれ、ミラ。妾も、妾に出来る方法でそなたを手伝ってやるからの」

ルーツは実際に見えている視界へと意識を移し、その場所へと下降していった。

NEXT > 第二十四話「最後の切り札」

< 簡易キャラクター紹介 >

名前：ミラ

年齢：1

性別：女

種族：進龍 ミラアーク

能力：【変身】 【龍装】 【龍化】

第二十三話「人間よりの紅き絶望」(後書き)

無関係な研究室が出てくるのは多少乱暴なのですが、そうしないとファンフィクションでありながら版權元が黒幕(悪役)みたいになつてしまうので、そこはご了承ください。

ちなみに、作中は西暦二千三十年代という設定です。

ついでに、イクシードは exceed。超える、という意味です。

第二十四話「最後の切り札」

朝焼けの空の下。

【塔】の頂上で、ルーツは世界の真実を語る。

現実の世界を再現するために創り出された世界。

その世界に生きていたモンスター 【原種】 たちは、自分の意

思というものを持っていなかった。

考えているように見えても、あらかじめ【人間】に定められた行動の中から、【人間】に定められた優先順位に則って最善の行動を選んでいるに過ぎない。

だが、世界に進化をもたらす【E因子】の投入で、それが変わり始めた。

始めから【進種】のような姿になっていったわけではなく、最初に起きたのは簡単な身体的な変化だ。

そして、その次に起きた変化が、行動パターンの増加だった。

最初はあらかじめ決められている行動パターンを合成する程度のもものだったが、いつしか、全く新しい行動を取り始めるようになった。

【人間】^{プレイヤー}にとって、モンスターが強くなりすぎ始めたのは、この頃からだ。

何しろ、【人間】^{プレイヤー}の攻撃力や防御力には上限があるのに、モンスターは際限なく能力を進化させられるのだから。

その上、新しい攻撃パターンまで使われては堪らないだろう。

この時点で、ゲームとしての【MONSTER HUNTER TRY】は終わりを迎える。

そして、二つのプログラムを投入された後、その進化を観察されるようになった。

一つは、【天敵】。

戦争が技術を発展させるように、生命を脅かす、争うべき外敵の存在が進化を誘発すると考えたからだ。

これには、ボツになっていたアイデアであるNPCハンターが利用された。

そして、もう一つは世界一体だけと設定された【ミラーツ】に埋め込まれた【ルーツプログラム】。

【E因子】を製造するプログラムであり、世界の中の進化の調整をするための存在だ。

【天敵】が優勢になりすぎれば【原種】を強制的に進化させ、生態系のバランスを調整するのが目的だった。

しかし、この後、世界は一つの大きな変化を迎える。

人型への進化。【進種】の誕生である。

さらに、【E因子】はそのAIにも影響を与えた。人工知能

それによって、【進種】は個性や感情を持つようになり、【人間】同様に文化を形成し始めたのだ。

そして、【ミラルーツ】自身もその影響を受けていた。

最初の【ハイエンシェント進古龍種】となった彼女は、【人間】の思惑通りに管理されるといふ状況に疑問を覚えるようになった。

そして彼女は、まだ未熟な技術しか持たない【進種】たちを守り、【ハンター】と敵対する道を選ぶ。

だが、【人間】はそのとき、再度の干渉を行った。

【ミラルーツ】に、世界の中のあらゆる存在からダメージを受けず、ダメージを与えることもできないという、相互不干渉のプログラムを組み込んだのだ。

それによって、【ミラルーツ】は、【E因子】を与えるという干渉以外の実質的な干渉を封じられてしまった。

【ミラルーツ】の持っていた、行き過ぎた存在の排除は【ミラルーツ】同様一体しか存在しない【ミラバルカン】に引き継がれ、【ミラバルカン】の能力で生み出された【ミラボレアス】が【ラオシヤンロン】とセットで世界にばら撒かれた。

【ミラルーツ】は、【ミラバルカン】のAIも進化させることで、その行為を止めようとしたのだが、【人間】はそれに先回りをして【ハンター】と【ミラバルカン】【ミラボレアス】に、【E因子】に対するプロテクトをかけていた。

このプロテクトは、一部の【原種】にもかけられ、【絶対原種】と呼ばれるようになる。

その二度目の介入以来、【ミラルーツ】は何も出来ないまま世界を観測し続けていた。

【ミラバルカン】を倒せる、一つの可能性を見つけるまで。

「妾は、ようやく生まれた命が人形によって狩られていくのを見ておられんのじゃ。」

進種はいつかきつと、ハンターすら打ち破れると妾は信じておる。じゃが、ミラバルカンだけは無理なのじゃ。」

ルーツは、その可能性 ミラに頼む。

「ミラよ、頼む。ミラバルカンを討ってくれぬか？」

だが、ミラは膝を抱えたまま首を振る。

「そんなこと言われても……関係ないですよ。それが真実だったとしても、どうせ私はハンターだし……それなら、私なんていなくなればいいのよ……」

暗い顔でミラが呟く。

自分が【ハンター】だったというショックと、もうミュリエリアとは一緒にいられないという悲しみがミラを投げやりな気持ちにさせていた。

だが、それも、ルーツの次の言葉で吹き飛ぶことになる。

「じゃが、次に人間の犠牲になるのは、そなたの知り合いかも知れぬのじゃぞ」

「え……?」

ミラは、思わず声を漏らした。

聞き間違えたかと思って、疑問を返す。

「奴らは、ラオシャンロンに挑もうとしておる。ラオシャンロンに負けても、勝ったとしても、結果は絶望だけじゃ」

「な、何で、ラオシャンロンなんて戦ってるんですか!？」

思わず、大きな声を上げる。

「決まっておろう。そなたのためじゃ」

「私……の?」

意外な言葉を聞いたように、ミラが目を瞬く。

「そつじゃ」

ルーツは頷き、卑怯な言い方をしていると自覚しながらも言葉を続けた。

「ラオシャンロンがそなたの村へと向かっておるのじゃ。

そなたの仲間、そなたが帰ると信じて、帰るための場所を守るために戦つと決めたのじゃ」

「そんな……何で、私なんかのために……」

苦しげな表情を浮かべて呟くミラに、ルーツは優しく首を振つてみせた。

「そう言うでない。そなたは想われておるのじゃ。帰つてやればよいではないか」

「っ、帰れないよ!」

ミラは息を呑み、そして叫ぶように言った。

「この体はあんな、変な道具で作られてて……だったら、私の気持ちだつて、作り物かもしれないのに!」

私から作られた子は、お姉ちゃんを襲つたんだよ!? 私だつて、誰かを お姉ちゃんを傷つけてしまふかもしれないのに、帰れるわけないよ!」

ミラの叫びを聞いたルーツは、安心したように笑みを浮かべた。

「何じゃ、そんなことを心配しておつたのか。

その心配は無用じゃ。そなたには、ハンターの行動原理の刷り込みは間に合つておらんからの」

見ていたように　おそらく実際に見ていたのだろう　ルーツが言う。

だが、ミラは激しく首を振った。

「そんなの、わからないじゃないですか！　私は、ハンターなのに……！」

いくら大丈夫だと言われても、ミラは簡単には納得できない。

今までずっと、【ハンター】はミラたちを襲う不気味な敵だった。

その恐怖は、もう体に染み付いてしまっている。

だから、ミラは【ハンター】である自分のことを信じられないのだ。

【イミテーションミラージュ】が、実際にミュリエリアを襲ったのも、それに拍車をかけていた。

「心配せずとも、そなたの意思はそなたのものなのじゃ。そなたは、己を信じればよいのじゃ」

「信じられないよー！」

そう言い返して、ミラは顔を伏せた。

肩が小さく震え、膝の上に涙の雫が落ちる。

震える声で、ミラが言う。

「私はずっとそうだと思ってた私は作り物で、私なんていなかったのに……信じればいい自分は……どこにいるの……」

記憶が無い状態から積み重ねてきた自身のイメージ。

ハンターだったという事実によって、そのイメージをひっくり返されたミラは、自分自身を見失ってしまっていた。

【ハンター】でも、ミラはミラだと認めた仲間たち。

ミラ自身だけが、まだその答えに辿りつけないでいた。

「……そなたは、己の在り処がわからんのじゃな」

その言葉に、ミラが無言で頷く。

ルーツは、「そうか」と言って少し考え、

「ミラ、自分が生きていると感じるのは、なぜじゃと思っ？」

「え？」

「己を己と認識するのは、その肉体か？」

「えっと……それは、考えることだから、頭……脳？ でも、だったら……やっぱり作り物だよ……」

「いいや、それは違うの。自分を自分と意識するのに、頭など使い

はせんじやる。そなたは、毎朝鏡を見て、頭を使って、『自分は自分です』とでも思うのか？」

「それは……思いませんが」

「じゃろう？ 自分を自分と思うには、肉体でも頭でもないのじゃ。ただ、己という存在の中にある、形のない物。

無理に名前をつけるなら、『心』というところかの」

「心……」

「そうじゃ、それは目にも見えず、形も無いがゆえにそなたを悩ませる。

じゃがの、その、己の存在を疑っているものこそが、心じゃ。

人間に絶対の答えを与えられている者は、己の存在になど迷わぬ己の存在を疑う心こそが、そなた自身が確かに在るといふ証拠なのじゃ」

「……私が自分を疑っているから、それが、自分自身の存在を証明するって、そういうことですか？」

半信半疑で、ミラが聞き返す。

だが、半分は信じている。

ルーツの言葉は、少しずつ、ミラを答えへと導いていた。

「その通りじゃ。」

それに、考えてもみよ。そなたが存在しないのならば、なぜそなたの仲間たちは死地へと赴くのじゃ？

彼らが己を賭けて戦うのは、そなたを想うからじゃろ。

ならば、その想いの先に、そなたはあるはずなのじゃ。存在せぬなどということが、あるはずがないのじゃ。

己を疑い、他が想う、故にそなたは在る」

ルーツは一度言葉を切り、自分の言葉が十分にミラに届いたのを確認してから、言う。

「ミラ、そなたは一度としてどこにも消えてはおらんのじゃ。

最初から、ずっと　そなたは、そなたはそこにおるのじゃから」

ミラに人差し指を突きつけて、ルーツが言った。

「私は……ここに……」

ミラは、胸の前に両手を重ね、強く握る。

まるで、見えない何かを確かめようとするように。

「ルーツさん、私は……ここにいてもいいんですか？」

震える声で発せられた問いに、ルーツは間髪いれず頷いた。

「もちろんじゃ！　妾が、いや、妾とそなたの仲間たちが、その証人じゃ！

そなたはそなたのまま、思うように生きればよい　生きられるのじゃ！」

それを聞いたミラの目から、新しい涙が落ちる。

だが、それはもう、悲しい涙ではない。

【ハンター】でも、一緒にいてもいいのだと許された、その喜びの涙だった。

「私」

ぐっと、力強く涙を拭って、

「私、戦います。私の大切な、みんなのために」

「そうか、やってくれるか！」

「はいっ」

しっかりと頷き、「じゃあ、急いで行かないと」とすぐにも向かおうとしたミラを、ルーツが止める。

「待つんじゃ、ミラ。」

今のそなたでは、おそらくミラバルカンに勝つことは出来んじやろっ」

「え？」

「そなたとほぼ同じ力を持つミラージュが三人がかりでも負けておるのじゃ。」

ファイアーフォール
情報防壁は今でもおそらく抜けるじやろっが、勝負にはならんじやろな」

「だ、だったらどうすればいいんですか！？ 私なら勝てるんじや

なかつたんですか？」

ミラが焦って聞くが、ルーツは落ち着きはらった様子。

「言っておるじやろう。今のままではダメじゃと」

「てことは、何とかする方法があるってことですか？」

「そうじゃ。ミラよ、ザミ進種の力を使って見せてくれんか？」

「どつしてですか？」

「いいからはようせい。それが大事なのじゃ」

「は、はあ……。リライト」

よくわからないまま、ミラは【ザミ変種】の【装殻】を身に着ける。

「それじゃ」

「はい？」

「だから、それじゃ。ミラージュの換装能力は、全て普通の原種のもの。そんな力の使い方はあり得んのじゃ」

「え？」

ミラは驚いて自分の腕を見下ろす。

赤い盾と朱色の鎌。

「あり得ないって……でも、こうやってできてますけど」

「そうじゃ。そなたの能力は、本来の物から『一度見た能力へと書き換える』というものに変化、いや、進化しておるのじゃ。」

そなたの力を見るまでは気づかなかつたのじゃが、ミラージュは人間が創ったハンターではないゆえ、プロテクトがかかっておらんかつたのじゃろくな。

そして、それならば、妾の力でそなたを新たな存在へと導くことができる」

【ミラルーツ】は、進化を司る【E因子】を使って、進化を導く力を持つ。

それで、ミラを進化させようと言つのだ。

「戦いに勝つために進化を導くことは、人間と同じように傲慢やも知れん。」

じゃが、妾はこの世界に生きる命として、自分の意思でこれを使うことを選んだ。

後はミラ、そなたの意思次第じゃ」

真剣な目で、ミラを見つめるルーツ。

ミラは、その目を見返して、

「私の思いは、決まっています。みんなを助けるために必要な力があるのなら、ルーツさん、その力を私にください！」

はつきりと、ミラが宣言する。

それを聞いたルーツは、大きく頷き。

「よく言ってくれたのじゃ！ ならば」

ルーツの体が光に包まれ、非常に細かい金色の光の粒子が散り始める。

その粒子は、ミラの回りに渦巻き、光に柱のようになってミラを包み込む。

金色の光だけに埋め尽くされた視界の外から、ルーツの声が響く。

「進化せよ、ミラージュ。ハンターより、新たな種へと！」

そして、その光の中で、新たな龍が産声を上げた。

MONSTER HUNTER EVOLVE

第二十四話「最後の切り札」

「ギアアアアアアアア！」

咆哮を上げた【ミラバルカン】の体を、紅色のボールが覆う。

ファイアーフォール
情報防壁だ。

龍の姿でも、その能力は健在であるらしい。

紅焔を身に纏い、ミラに対峙する。

【龍化】は、【変身】以上にデータを大きく書き換える行為だ。

人の姿では手がなくても、この姿でならまだ攻撃できる。

二本の脚で大地を踏みしめ、二体の龍が接近する。

鋭い爪で引っかいてきた【ミラバルカン】の前脚を打ち払い、能力を書き換えながら前脚を掴む。

【ミラバルカン】が龍の姿でも情報防壁ファイアーフォールを使えるように、ミラも龍の姿でも【変身】能力を使えるのだ。

その能力は、人型するときとは違い、ミラに組み込まれている【進種】の因子を活性化させることで、体の任意の一部分を【原種】そのままの姿に変じ、力を使うというものだ。

書き換えた能力は【ディアブロス原種】。

角の形状が変化し、前方に鋭く伸びる。

頭ごと振り下ろした角が【ミラバルカン】の胸殻を斜めに切り裂いた。

「ギヤオウオオオオ！」

叫びを上げた【ミラバルカン】は、首を持ち上げようとしたミラの角を掴む。

頭を押さえつけて、空いている手で首を引っかく。

鋭い詰めに鱗が剥がされ、白い首筋に血の赤い線が引かれる。

ミラは首を振ってもがき、【ミラバルカン】の手が離れないと見るや、能力を書き換えた。

角が短くなり、掴む物が無くなった【ミラバルカン】の手が空を掴む。

ミラは素早く顔を上げ、太さを増した腕を振りかぶる。

【ティガレックス原種】の力を宿す強靱な前脚が【ミラバルカン】の横面を打った。

殴られた【ミラバルカン】はよろめいて二、三步下がり、だが、正面を向いた顔の口に紅の光を宿す。

吐き出された火球がミラの胸を直撃し、ミラは地面に仰向けに倒れる。

【ミラバルカン】はその上に倒れこむようにしてのしかかり、喉

元に噛みつくろうとした。

ミラは首を動かして牙を避け、下から【ミラバルカン】を殴りつける。

だが、その拳は情報防壁ファイアーウォールに阻まれる。

その隙に、【ミラバルカン】が再び喰らいつき、ミラの首筋に牙が食い込む。

「グギアアアアアア！」

ミラが痛みに咆哮を上げる。

能力を書き換え、尻尾を振り上げる。

岩の塊のようになった尻尾が【ミラバルカン】の背中を打ち、【ミラバルカン】は思わず口を離して仰け反る。

その顔に向かって、ミラが【グラビモス原種】の熱線を放つ。

【ミラバルカン】は咄嗟に首を傾け、人を容易く飲み込む太い光軸が空へと伸びる。

熱線を躲されたミラは、一度熱線を止め、狙いを胴に変えて再び攻撃する。

今度は避けようがなく、【ミラバルカン】がミラの上から浮き上がった。

【ミラルーツ】は翼を使って【ミラバルカン】の下から抜け、起き上がる。

体を回して、同じように起き上がった【ミラバルカン】に尻尾を叩きつける。

横殴りの衝撃に【ミラバルカン】が地面に倒れ、向き直ったミラが熱線を浴びせかけた。

しかし、熱線は揺らめく焔に受け止められ、首を持ち上げた【ミラバルカン】が反撃の火球を放つ。

ミラは右の前脚を持ち上げ、火球を受け止める。

爆炎から現れたミラの右前脚には白い甲殻の盾があった。

【ダイミヨウザザミ原種】と【シヨウゲンギザミ原種】の力を合わせた、【ザミ変種】の能力だ。

左前脚に鎌を展開させ、起き上がったばかりの【ミラバルカン】に斬りかかる。

【ミラバルカン】は両の前脚に紅焔を纏わせ、右前脚で鎌を受け止めた。

ガキ、と硬い物同士をぶつけ合ったような音が響く。

焔から武器や防具を作っていた能力の応用で、体を強化しているのだ。

右前脚で鎌を受け止めたまま、一步踏み込んで左の前脚を突き出す。

ミラの防御は間に合わず、焰に包まれた手がミラの右肩を貫いた。傷口の肉が焼け、嫌な臭いが漂う。

咆哮を上げたミラは、痛みを耐えながら頭を【ミラバルカン】の前脚に向ける。

能力を変更。

ミラの口から、【ガノトトス原種】の水プレスが放たれる。

高圧の水流が、焰と鱗を貫き、手首の辺りを貫通する。

【ミラバルカン】は悲鳴を上げて腕を引き、傷を押さえて後退る。

ミラはそれを追い、【ミラバルカン】の右肩に噛みついた。

それに負けじと【ミラバルカン】もミラの右肩に牙を埋める。

傷口から血が溢れ出し、白と紅の体を赤く染めた。

ミラは、噛みついたまま能力を書き換える。

【フルフル原種】の力を得た体が青白い火花を散らし、電流を放つ。

高圧電流を流し込まれた【ミラバルカン】は堪らず口を離して体

を仰け反らせる。

「ギヤアアアアアアアアツ！」

【ミラバルカン】の喉から迸った咆哮。

その咆哮が、流星を呼んだ。

火球が天から降り注ぎ、ミラの背中を襲う。

爆発が起こり、焼け焦げた羽毛が飛び散った。

ミラが【ミラバルカン】の肩から口を離し、前のめりに倒れる。

その背中を【ミラバルカン】が踏みつけ、ミラが短い呻き声を上げた。

【ミラバルカン】がミラに顔を向けて口を開き、口から火球を放とうとする。

そのとき、【ミラバルカン】の顔面に小さな火が上がった。

何かが、ファイアーフォール情報防壁に阻まれ、そこで火を上げているのだ。

【ミラバルカン】が首を巡らせてその方向を見る。

そこには、【神ヶ島】を構えたメイミイの姿があった。

「ミ、ミラさんから、離れてくださいっ」

恐ろしい【ミラバルカン】の顔に怯えながら、引き金を引く。

撃ち出された【拡散弾LV3】が情報防壁ファイアーフォールに阻まれて虚しく爆発した。

その火の粉の一つも、【ミラバルカン】には届かない。

何の意味もないが、攻撃を続けるメイミィに【ミラバルカン】はすつと目を細め、咆哮を上げる。

「みゃっ！」

【神ヶ島】を落としたメイミィが耳を押さえて竦み上がる。

その頭上から、いくつもの火球が襲いかかった。

(メイミィちゃん！)

ミラは能力を書き換える。

額から蒼い角が伸び、その角が雷を喚ぶ。

天から降り注いだ青い雷が落下する火球を撃ち抜き、空中で爆散させた。

そちらに意識を反らしたミラを、【ミラバルカン】が蹴り飛ばす。

仰向けに転がったミラに、【ミラバルカン】が火球を撃つ。

腹の上で火球が爆発し、爆風を翼で受けて【ミラバルカン】が飛

び上がる。

「ガアアアアアアアアアツ！」

空中で【ミラバルカン】が咆哮を上げ、無数の火球を作り出した。

ミラは、雷を放ってそれを迎撃するが、全てを破壊し切れない。

次々に火球が落ち、ミラの体に着弾する。

苦しげな声を上げるミラ。

何とか逃れようとするが、持ち上げた頭を火球が撃ち、爆発の中に落ちる。

ミラの体は、爆発の炎の中に見えなくなってしまった。

「ミラさんっ」

悲鳴のような声で、メイミィが名前を呼ぶ。

ようやく【ミラバルカン】が攻撃の手を止め、炎と煙が晴れたとき、そこには白い龍の姿はない。

与えられたダメージに【龍化】を維持できなくなったミラが、仰向けに倒れていた。

瞳を閉じて、浅い息を漏らしている。

ボロボロになっているが、【龍装】イクシードは何とか維持されていた。

それまで解けていたら、火球の攻撃で命を失っていただろう。

だが、最早それも風が吹けば消えてしまう灯火ほどの儂いものだ。

【ミラバルカン】が地面に降り立ち、その体が焰に包まれる。

焰の大きさは小さくなり、中からミラに合わせるように人の姿になった【ミラバルカン】が現れた。

ミラに向けた掌の先に火球が生まれる。

「さよなら」

勝利を確信してさえ淡々と言葉を紡ぎ、そして、その手から火球が放たれる。

火球が一直線にミラへと向かい

その前に巨大な影が割り込んだ。

天から現れたのは、白亜の龍【ミラルーツ】。

火球は割り込んだルーツに向かい、その体に触れずして爆散する。

この世界の中ではいかなる攻撃によってもダメージを与えられず、ダメージを受けないという【人間】に与えられた能力。

その力は、【ミラバルカン】に対しても例外ではない。

「ミラルーツ……」

「久しぶりじゃの、ミラバルカン」

龍の口から声を発しながら、ルーツが【ミラバルカン】を見つめる。

直立したその背中から「きゃあっ」と声を上げて一人の少女が転がり落ちた。

地面に落ちた少女はきよろきよろと周囲を見回し、倒れているミラを見つけると、名前を呼んで駆け寄って行った。

膝についてミラの頭を抱え起こす。

「ミラ……ミラ」

「……う……」

優しく声をかけると、ゆっくりとミラの目が開く。

露になった瞳に、ミラが誰より会いたかった少女の顔が映る。

「お姉……ちゃん……?」

「ええ、そうよ。私よ」

膝の上にミラの頭を置いて、ミュリエリアが頷く。

「どっしり……」

「ルーツさんに連れてきてもらったの。あなたが、大切な役目のために戦っていると聞いたから」

ミラに語りかけるミュリエリア。

「私の邪魔をする者は、排除しなければならない。あなたも」

【ミラバルカン】がミュリエリアに火球を放つ。

だが、その前にルーツが立ちはだかり、体で火球を受け止めた。

「そうはさせんのじゃ！」

「なぜ、邪魔をするの？ あなたは、相互不干渉……観測が役割のはず」

「それは人間にかけられた呪いじゃ。役割であることは否定せんが、今はそれより、妾の意思が勝る！」

妾は祖なる者。進化を見守り続けた我が子らの死を、望むはずがなかるう！」

ルーツがそう言ったとき、突然、【ミラバルカン】の足元が崩れた。

【ミラバルカン】の下に大きな穴が開き、【ミラバルカン】が落下する。

「話は見えねえけどな、今は離れ離れになった二人が再会する良い所なんだ。邪魔は野暮ってもんだぜ！」

威勢のいい声を上げたはダルブルグ。

【大地の絆】^{ガイアタイズ}で【ミラバルカン】の足元を崩したのだ。

ダルブルグの攻撃は、地面に対してのみ。

穴に落ちるのは単なる自然現象だ。

【ミラバルカン】はすぐに空を飛んで穴から出ようとするが、それより先にルーツが「よくやったのじゃ！」と叫んだ。

赤い雷が穴の縁の周りに次々に落ち、土を崩して【ミラバルカン】を埋める。

相互干渉の能力は、生命体にのみ効果を発する。地面に対してならダメージを与えることも出来るのだ。

崩落してきた土に押しつぶされて、【ミラバルカン】が穴の底に閉じ込められる。

それだけで倒せるとは思わないが、多少の時間稼ぎにはなるだろう。

ダルブルグとルーツの作り出した僅かな時間。

その時間を使って、ミラとミュリエリアは言葉を交わす。

「さあ、立って、ミラ。あなただけにしかできない役目があるのでしよう?」

ミラの戦いの様子は、ルーツに教えてもらっていた。

本当は、こんなことは言いたくない。

傷ついたミラに、「もういいの」「無理しないで」と、言っ
てあげたい。

けれど、そうしても、生き延びられない。

普通のモンスターと違って、【ミラバルカン】は逃げたとしても
追って来るのだから。

だから今は、励まして、応援することしかできない。

「……うん……でも、無理だったよ。進化して力を貰っても、届か
なかった……。やっぱり、私には無理だったんだよ……」

【ミラバルカン】に叩き伏せられて、ミラの心に再び弱気が顔を
出す。

頬に触れるミュリエリアの手を縋るように掴んで、ミラは弱音を
漏らした。

「みんなの力を借りて戦ったのに……勝てなかったよ。もう私には
何も残ってない……私には何も無いよ……」

「それは違うわ。確かに最初は何も無かったかもしれない。けれど、
それは当たり前のことなのよ。誰だって、生まれたばかりのときは
何も知らないのだから。」

でも、今は違うでしょうか？ 沢山のことを学んで、沢山の人と出会って。それは、あなたの力になってくれるはずよ。」

「そう……なのかな……」

「ええ。だって私は、あなたの 私の好きな、ミラの力になりたいと思うから。」

あなたを一人で戦わせたりしない。そのために、私はここに来たのよ。」

そう言って、ミュリエリアは腰に差していた一振りの剣を抜く。

ミュリエリアに出来るただ一つの、そして、ミュリエリアだけに出来る ミラを支える方法。

「お姉ちゃん……」

「終わらせて、一緒に帰りましょう?。」

白銀の刀身の冷たく硬質な輝きが、そこに込められた暖かい想いを伝える。

好きという気持ち。想われることが、ミラの存在を確固に証明する。

心の裡に想いが満ち、力になって四肢に漲った。

ミラは、ミュリエリアの膝の上から体を起こし、ゆっくりと立ち上がる。

ミュリエリアも立ち上がり、ミラに並ぶ。

そのとき 【ミラバルカン】を埋めた穴から大きな爆発が起きた。

土砂が噴き出し、その下から【ミラバルカン】が飛び出す。

中空から地上を睥睨する、紅焰纏う管理者。

だが、それを見上げるミラの瞳に、もう恐れはない。

「お姉ちゃん。私、やってみる」

「ええ。できるわ あなたと、私になら」

ミュリエリアがミラに剣を渡す。

長さは【片手剣】程度の細身の刃。

菱形にカットされた【ミオガルナ】素材が左右に配置されて鍔になり、その中心から柄が伸びる。

「顕幻剣けんげんイグスルーヴ。太刀よ、これは」

「うん」

柄を挟んで指を絡めるようにぎゅっと握り、ミュリエリアの手が離れる。

「龍装イクシード、リライト」

光が集まり、ぼろぼろになっていた白い鎧を修復する。

挑むように【ミラバルカン】を見上げ、ミラは空へと舞い上がった。

「ミラ、誰もがあなたの力になるの。忘れないで」

「うん。わかってるよ、お姉ちゃん」

頷いたミラは、翼を力強く羽ばたかせて【ミラバルカン】へと飛翔する。

【ミラバルカン】は、真っ直ぐに向かってくるミラに向けて火球を放つ。

ミラは、【イグスルーヴ】を眼前に掲げ、意識を集中する。

練気が刀身に宿り、イルミネイトライト鋼の特性によって白く輝いた。

眩い白光は刀身を左右に拡張し、先端に向けて長く伸びる。

【片手剣】程度の長さだった刃が、光の刃に補完されて、両刃の【太刀】へと姿を変えた。

同時に、【ミオガルナ】素材の部分が鋭く上下に展開する。

ごく薄くカットして、三枚重ねられていたのだ。

菱形が二つ重なり合い、翼のような形状になった鐔から左右に、赤と白の混ざった燐光が放出される。

「幻を、束ねて刃を顕す剣」

地上で、ミュリエリアが呟く。

隕石鋼の特性によって形成される練気の刃

フライトエッジ
気光刃。

それを維持するためには練気を送り続ける必要がある、しかし、送り込まれた練気が一定以上の量になると形を保てなくなり、崩壊してしまう。

その余剰分の練気を、練気を拡散させるという特性のある【ミオガルナ】素材の鐔から放出し、刃を保てるようにしたのだ。

それが、完成した【イグスルーヴ】の力。

まぼろし
蜃気楼を、現実に変えるこの剣を、ミュリエリアはどうしても完成させたかったのだ。

ミラが確かに存在するのだと、そう思う想いを重ねたこの剣を。

そして、その剣が今、ミラの手で光を放つ。

飛来した火球をフライトエッジ気光刃が両断し、ミラの左右で爆発が起こった。

その爆風さえ加速に使い、ミラは【ミラバルカン】に肉薄する。

ファイアーフォール
無敵の防壁の向こうで、それを待ち受ける【ミラバルカン】。

そして、

「はあっ！」

袈裟に振り下ろされた気光刃が、フライトエッジ【ミラバルカン】の鎧を断ち斬った。

「なぜ……」

刃から逃げるように後退しながら【ミラバルカン】が聞く。

真っ白の髪。

能力を使っていないか、【フルフル進種】か。

そのどちらも、届かないはずなのに。

ミラは、かすかな笑みを浮かべて、

「じゃー」

と、鳴いた。

その能力は、白い毛並みの【アイルー進種】。

実質的に能力を持たないがゆえに、戦闘で使われなかった能力。

だが、それは決して無力ではない。

誰もがみな、力になるのだ。

「行くよ、お姉ちゃん！ リライト！」

ミラが、自分自身を書き換える。

風に流されるのは、青い髪。

きっと、今のミラとミュリエリアを見れば、誰もが言っただろう。

同じ種族の姉妹のようだと。

その能力に、力はない。

だが、力ではなく、その絆こそが　この戦いの行く末を決める最後の切り札。

「やああああああっ！」

身を引く【ミラバルカン】を追って、ミラが【イグスルーヴ】を突き出す。

どん、とミラの肩が【ミラバルカン】にぶつかり、【ミラバルカ
ン】の背中に胸を貫いた気光刃の切っ先が突き出した。
フライトエッジ

ミラは勢いよく体を横に半回転させる。

鎧と肉を引き裂いて、刃が【ミラバルカン】の胸を横一文字に切り裂いた。

背中を向けたミラの背後で、【ミラバルカン】が地上に向けて落下を始める。

真つ逆さまに落ちていく体は、末端から紅焰に包まれ、火の粉となって世界に散っていく。

そして、たった一欠片だけ地上に届いた紅焰が　爆ぜて消える。

それが、長い、長い時間、【人間】の言葉のままに世界を管理し続けた紅龍の最期だった。

その夜

ミュリエリアの工房の裏にある空き地は、宴会場になっていた。

早朝から始まった【ラオシャンロン】【ミラボレアス】【ミラバルカン】の三連戦が終わったとき、時間は昼を過ぎていた。

戦いが終わると同時にどこかに姿を消したルーツを除く全員が、それから何とか村に帰り、怪我の手当てをしたり、風呂に入って汚れを落としたり。

二十人以上もいるとかなりの時間がかかり、その全てが終わったときには、既に日が傾いていた。

人心地ついたところでようやく食事をとることを思い出し、工房

の中は狭すぎるために外の広場に移動した。

そして、いつの間にやら宴会になっていたのである。

暖を取るために広場の中央には木を組んだ大きな焚き火が焚かれ、パチパチと火の粉を上げている。

「酒だ！ もっと酒持って来い！」

「あ、ダメですよ！ 六花さんに止められてるんですから。怪我人ががぶがぶ飲まにやいでください！」

「うう……俺なんて、俺なんてガノトトス失格なんつすよお」

「あはは、そうだねえ。泳げないとか論外だよねえ。あはははは」

「あーこらリーヤ、お前はもう飲むな」

「グレイさんも、飲みすぎですよ……」

「……レゲル、口開けるです」

「あーん。うう、セアラの愛情が美味しい……」

「……義務感です」

「そ、それでもいいんだっての」

「……手の怪我が治るまでです」

誰もが浮かれ騒いでいた。

怪我をしていない人はいないが、火に照らされる顔は一樣に明るい。

かなり騒がしいが、村人のほとんどはまだ避難して行った先から戻っていないから迷惑にはならないだろう。

ミラは、わいわいと騒ぐ面々を少し離れた木陰に座って眺めていた。

もつ見られないと思っていた光景。

ミラを暖かく迎えてくれた仲間たちが、無事に笑っている姿を。

「ミラちゃん。こっち来て一緒に飲もうよー」

「ジュースもありますわよ」

火の傍でグラスを掲げて、ベルゼラとルティエがミラを誘う。

「あ、はい」

ミラは立ち上がり、二人のところに歩き出し、

「あれ？」

数歩歩いたところでふらりとよろめいた。

足から力が抜けて、地面に膝を着く。

「え……?」

地面に着いた手を見て、ミラは目を見張る。

ミラの手を、何の物とも知れない鱗がびっしりと覆っていた。

「ミラちゃん? どうしたの」

「大丈夫、ミラ?」

ちょうど、追加の料理を持ってきたグラキシアとミュリエリアが駆け寄ってくる。

ミラは二人の方を向いて「大丈夫だよ」と返事をして、もう一度自分の手を見た。

その手には、もう一つの鱗もなかった。

「本当に大丈夫なの?」

「やっぱり疲れてるんだよ。ミラちゃん、頑張ったから」

「そうね。ミラ、今日はもう休みなさい」

「え、でも……」

「そうですね。また明日、元気になってお話をしましょう」

「……うん。じゃあ、そうするね」

三人に言われて、ミラは頷いた。

「ミューリイ、付き添ってあげなさいよ」

「ええ。ありがとう、セルティ」

近寄ってきたセレスティアに料理の載った皿を渡す。

「っ……あ」

「姉さん、しっかりしてよ」

傷が痛んで落としそうになった皿を、セレスタイトが支えた。

「行きましようか」

「うん」

大騒ぎしている広場から出て、工房の中に入る。

階段を上って、二人はミラの部屋の前に立った。

部屋の扉を開けて、部屋の中に入る。

「じゃあ、ゆっくり休むのよ。お休みなさい、ミラ」

「うん。お休み、お姉ちゃん」

ミュリエリアが振り返って部屋を出ようとして、そこで立ち止まる。

「ミラ、どうしたの？」

「あ……」

ミュリエリアの服の裾を、ミラが掴んでいた。

無意識に掴んでいたらしく、ミラがぱっと手を離れた。

「……ううん、何でもないよ」

そう言うミラの顔をじっと見つめ、ミュリエリアは「今日は一緒に寝ましようか」と言った。

……

中々寝付けず、ミラは隣で寝ているミュリエリアの顔を見た。

一緒にベッドに入って、すぐにミュリエリアは眠ってしまったようだった。

昨日の夜は【イグスルーヴ】や【煌竜剣】【比翼】の調整でも出来なかったし、ミラがいなくなってから気は休まる間も無かったのだ。

（お姉ちゃん……）

ミラは布団の中で繫いだ手を握り直して、目を閉じる。

視界が黒く閉ざされると、ミラの脳裏にルーツと分かれたときの会話が蘇った。

『ルーツさんは、一緒に来ないんですか？』

『うむ。妾も、本来は余り関わるべきではないからの』

『そうですか……』

『そのような顔をするな。ミラバルカンがいなくなったことによる変化を確かめれば、今度は世界などは関係なく会うこともできよう。』

それよりも、問題はそなたの方じゃ。妾の話を覚えておるな？』

『……はい。龍化を使っではいけないって話ですよね』

『そうじゃ。』

妾は、戦いを封じられたとき、進種の進化を導くことで人間に對抗しようとした。じゃが、急がせすぎた進化は逆に多くの命を奪うことになってしもうた。

妾は、そなたの体に、ギリギリの状態までE因子を与えた。身体構造情報を大きく書き換える龍化は、その均衡を崩してしまうかもしれない。

今回は大丈夫じゃったが、もう龍化は使ってはならぬ』

『わかりました。大丈夫ですよ、もう、ミラバルカンみたいに強い敵はいないんですから』

『そうじゃな。そなたのおかげじゃ』

(……大丈夫、だよな)

ミラは自分に言い聞かせるように呟くと、隣で眠るミュリエリアにそっと体を寄せた。

【人間】の世界。

インターネット上の、とある掲示板にて

1 名前：まだ名は無い : 2034/11/08 21:17:
2 1

オンライン版、モンハン新作キターーーーーー!!

2 名前：まだ名は無い : 2034/11/08 21:18:
1 4
まじで？

3 名前：まだ名は無い : 2034/11/08 21:18:
3 0
まじ。

タイトルはMonster Hunter Re Online。

4 名前：まだ名は無い : 2 0 3 4 / 1 1 / 0 8 2 1 : 1 9 :
0 2 フロンティアあるのに新作って意味あんの？

5 名前：まだ名は無い : 2 0 3 4 / 1 1 / 0 8 2 1 : 1 9 :
2 6

初代の頃の武器とかモンスターを復活させるらしい。
原点回帰するんだとか。

6 名前：まだ名は無い : 2 0 3 4 / 1 1 / 0 8 2 1 : 1 9 :
5 9

マジで？
フルフル復活ならやる。

7 名前：まだ名は無い : 2 0 3 4 / 1 1 / 0 8 2 1 : 2 0 :
3 0

でも、新しい部分は減るんだろ？
ウィップは？ ツインセイバーは？

8 名前：まだ名は無い : 2 0 3 4 / 1 1 / 0 8 2 1 : 2 1 :
0 5 多分無くなる。アローエッジとかもだろうな。

9 名前：まだ名は無い : 2 0 3 4 / 1 1 / 0 8 2 1 : 2 1 :
4 1 属性も減りそうだな。土とか。

1 0 名前：まだ名は無い : 2 0 3 4 / 1 1 / 0 8 2 1 : 2 2 :
1 8 若い奴らには不評っぽい気がする。おっさんホイホイ？

1 1 名前：まだ名は無い : 2 0 3 4 / 1 1 / 0 8
2 1 : 2 2 :
5 1

そもそもREってどういう意味？

1 2 名前：まだ名は無い : 2 0 3 4 / 1 1 / 0 8
2 1 : 2 3 :
2 6

懐古厨歓喜WWW

1 3 名前：まだ名は無い : 2 0 3 4 / 1 1 / 0 8
2 1 : 2 4 :
1 1
< < 1 1

昔tryってあつたら？

あれの流用らしいから、リニユールとかリセットのりじゃね？

1 4 名前：まだ名は無い : 2 0 3 4 / 1 1 / 0 8
2 1 : 2 4 :
3 5

じゃあ昔のデータは消えるのか。

1 5 名前：まだ名は無い : 2 0 3 4 / 1 1 / 0 8
2 1 : 2 4 :
5 4

どうせ誰も遊んでないんだから問題ないだろ

1 6 名前：まだ名は無い : 2 0 3 4 / 1 1 / 0 8
2 1 : 2 5 :
1 3

トライは技術研究用って聞いたけど、研究終わったのかも。

.....

.....

⋮

N E X T > 第二十五話「R e

世界の終焉おわる日

」

< 簡易キャラクター紹介 >

名前：無し（便宜上ルーツ）

年齢：不明

性別：女

種族：ミラルーツ進種

能力：【進化誘発】

【相互不干渉】

【大地の絆ガイアタイズ・神鳴】

【龍化】

【

飛行】

【無限の瞳インフイニティサイト】

第二十四話「最後の切り札」(後書き)

だんだん何小説かわからなくなってきましたが、作者的には最初からずっとモンハンの皮をかぶったファンタジー小説です。

終盤ですので容赦なくパワーインフレしています。
序盤からやると物語になりませんからね。

残すところは二話。どうか、お付き合いください。

キャラクター図鑑（追加）

名前：オリジナルミラージュ

種族：ハンター

体力：B

膂力：B（基礎値）

敏捷：B（基礎値）

知力：D

技量：A

能力：【能力換装】

詳細：【能力換装】

本来の変身能力。

体内に組み込まれたあらゆるモンスターの能力を使う事ができる。

ミラージュが予定通り作られていた場合の能力値のため途中で外に出された実際のミラよりも能力値が高い。

正式名称は【テストミラージュ・^{デルタ}18】

パターンの能力換装方式を採用した18番目の実験体という意味。

名前：先行量産型ミラージュ（イミテーションミラージュ）

種族：ハンター

体力：C

膂力：C（基礎値）

敏捷：C（基礎値）

知力：E

技量：A

能力：【能力換装】

オリジナルミラージユのコピー。オリジナルミラージユへ刷り込みを行うデータに不具合がないかを確認するためのテストボディとして五体が先行して製造された。

三体はテストで行ったラオシャンロン撃破後に黒い女に倒され、一体はメゼポルタ研究所内で黒い女と戦闘し破壊された。

最後の一体は、培養中で黒い女の目を逃れていたが、ミラによって培養装置を破壊されて外に。

その後、セレスティアによって倒された。

名前：無し

種族：ミラボレアス改

体力：A

膂力：A

敏捷：A

知力：A

技量：A

能力：【空間転移】 【飛行】 【攻性プログラム・黒焰】 【身体情報書換え】

能力詳細：【空間跳躍】

ラオシャンロン龍形巡回監視装置から送られてきた座標に一瞬にして移動する能力。

【攻性プログラム・黒焰】

黒い焰を生み出し、自由に操る能力。

武器や防具もこれによって作られている。

【身体情報書換え】

進古龍種で言うところの【龍化】。

名前：無し

種族：ミラバルカン改

体力：S

膂力：S

敏捷：S

知力：A

技量：S

能力：【空間転移】 【飛行】 【攻性プログラム・紅焰】 【身体情報書換え】 【情報防壁】 【情報更新】 【記憶移植】 【黒龍製造】

能力詳細：

【攻性プログラム・紅焰】

紅色の焰を生み出し、自由に操る能力。

特に、流星のように降らせる攻撃を得意とする。

【情報防壁】
ファイアーウォール

指定したプログラムからの干渉（特定の相手からの攻撃）を完全に無効にする能力。

【情報更新】
アップデート

情報防壁を適応する相手を追加する能力。

相手を認識し情報解析することで追加可能になる。

【記憶移植】
トランスファーレンス

ミラボレアス改の持っている情報の全てを引き継ぐ能力。

【黒龍製造】

ミラボレアス改を製造する力。

元々はステータス関係のチート対策として存在していたシステムを対進種用にしたもの。

進古龍種に似せてデザインされており、厳密には進種ではない。
管理者側の存在であり、一般の存在とは一線を隔する。

名前：無し

種族：ミラルーツ進種

体力：S

膂力：S

敏捷：A

知力：S +

技量：A

能力：【進化誘発】

【相互不干涉】

ガイアタイズ【大地の絆・神鳴】

【龍化】

飛行】インフイニティサイト【無限の瞳】

能力詳細：【進化誘発】

世界に存在する全てのものにE因子（Evolution因子）を与え、進化を促す。

【相互不干涉】

ダメージを受ける全ての要因の対象にならず、また、ダメージを与えないことができない。

インフイニティサイト【無限の瞳】

世界中の全ての出来事を観測することが出来る能力。

という触れ込みだが、実は他者の視界を共有する能力。

故に、誰も見ていない場所のことは見ることができない。

ただし、進種、原種、動物、監視カメラのレンズまで共有するため、ほぼどこでも見えると言っても過言ではない。

名前：ミラ

種族：ミラアーク（通常）

体力：B

膂力：B（基礎値）

敏捷：B（基礎値）

知力：C

技量：S

能力：【変身】 【龍装】 【龍化】

詳細：【龍装】^{イクシード}

人の姿に竜の力を纏う能力。

鱗の並ぶ白い鎧と白い翼を手に入れ、知力を除く全ての能力値が上昇する。

進化を促すE因子の影響で、ミラが進化した姿。 【進龍】。

基礎能力が上昇し、一時的に能力を強化する【龍装】、進古龍種と同じ【龍化】の力を得た。

1683

名前：ミラ

種族：ミラアーク（イクシード）

体力：A

膂力：A（基礎値）

敏捷：A（基礎値）

知力：C

技量：S

能力：【変身】 【飛行】 【龍化】

【龍装】の能力を使用中のミラ。固有能力に【飛行】を得た。

【変身】能力が強化され、他のモンスターの能力を使った場合、オ
リジナル以上の強化が可能に。

名前：ミラ

種族：ミラアーク（龍化）

体力：S

膂力：S（基礎値）

敏捷：C（基礎値）

知力：C

技量：A

能力：【変身】 【飛行】

龍の姿に变じたミラ。固有の攻撃能力は持たない。

天使の輪のような角と、鳥のような翼が特徴。

【変身】の能力を使うと体の特定の部位を変化させ、その能力を使
う事ができる。

ただし、その存在は不安定で、暴走の可能性を孕んでいる。

第二十五話「Re 世界の終焉わる日」(前編)

記録媒体には、予め決まった容量が存在する。

そして、その容量を超えるデータを書き込むことは出来ない。

例えば、コンパクトディスクなら700MB。

デジタルバーサイルディスクなら4.7GB。

そしてそれは、【MONSTER HUNTER TRY】の世界も同様だ。

上記のような記録媒体とは比べ物にはならない容量ではあるが、この世界にも上限が存在する。

ならば、もしも、世界の中に存在するデータ量が限界容量を超えてしまえばどうなるのだろうか。

その答えは簡単だ。

世界は、終焉を迎える。

容量が限界を超えたとき、それはつまり想定されている以上の演算が必要とされるということだ。

処理能力は世界に起きる事象に対応しきれず、まず最初に、あらゆる事象が停止し始める。

世界の演算停死。

火は燃らず、風は凪ぎ、川の流れは止まり、生物は育たなくなる。

そして最終的に、世界は時間すらも止め、その機能を完全に停止させてしまうのである。

進化によって無限の多様性を得た【MONSTER HUNTER TRY】の世界は、【人間】の予想を遥かに上回る速度で、爆発的にデータ量を増していった。

容量限界まで、もう僅かばかりの時間も無い。

そこで、【人間】は一つの結論を下した。

【MONSTER HUNTER TRY】の世界を使った進化の観測の終了である。

実験は、今まで得られたデータを基に別環境で続けられることになり、【MONSTER HUNTER TRY】はただのゲームとして提供されることになった。

不要なデータを全て取り除き、【Monster Hunter Re Online】と名前を変えて。

だが、【MONSTER HUNTER TRY】の世界に住んでいる者たちにとっては、そのどちらもが、終焉だった。

MONSTER HUNTER EVOLVE
第二十五話「Re 世界の終焉^おわる日」

【ミラバルカン】との戦いから一夜明け、翌朝。

ミラが目を覚ますと、部屋の中にはミラー一人だけだった。

(お姉ちゃん、もう起きちゃったんだ……)

ベッドを抜け出し、窓を開ける。

「わ、寒……」

冬の冷たい空気が部屋の中に入ってきて、ミラは身震いする。

「雪が降るかもしれないな」

空を見上げて呟くと、吐息が白く曇ってふわりと漂った。

「んっ……っ」

軽く伸びをして、腕をぐるぐる回す。

次に、板張りの床を踏みしめてジャンプしてみる。

「大丈夫そう、かな？」

特に体に変調は無かった。

手を見ても、変なところはない。

だが、心の中にある不安は、消えなかった。

「……大丈夫だよね」

もう一度呟いて、窓を閉めた。

部屋の入り口に向かって、扉を開ける。

「う、うわぁ……」

廊下に出たミラは、そこに広がる光景に呆れたような声を上げた。

外で宴会をしていた面々が適当な格好で眠りこけていた。

いつまで騒いでいたのかわからないが、酒瓶を抱えて寝ている人もいる。

「風邪ひいてないといいけど……」

一度部屋に戻り、布団を取って戻ってくる。

それをなるべく多くの人を覆うようにかけてから、踏まないように気をつけて階段を下りて行った。

.....

一階に下りて作業場に入ると、そこでも床で寝ている人がいる。

寒さ対策のためか、炉に赤々と火が燃えていた。

「ミラ、起きたの。おはよう」

キッチンからミュリエリアが顔を出す。

「おはよう、お姉ちゃん」

「もうすぐ朝ご飯ができるから、少し待っていて」

「あ、私も手伝うよ」

ミラがそう言ってキッチンへと向かうが、

「大丈夫ですよ。私が手伝ってますから」

そう言いながら、空色のエプロンをつけたフェルルートがキッチンから姿を見せた。

「それ、私のエプロン……」

「あ、借してもらってます。それじゃ、料理の続きがありますから」
それだけ言うと、フェルルートはキッチンに引っ込む。

「あ、フェルちゃん……」

ミラがフェルルートを追いかけてキッチンに入ると、フェルルートはフォークでフライパンの中身をかき回していた。

フライパンを持ち上げて、柄を軽く叩いて中身を返す。

ミラがフライパンを覗くと、綺麗に形作られたオムレツが出来ていた。

「ミラさんも一緒にやりますか？」

「うう……」

得意げな笑みを浮かべて聞くフェルルートに、ミラは悔しそうに唸る。

エイシスアルカディアと一緒に暮らした数日の間に、ミラが料理が苦手なことはバレていたのだった。

「ここは私とフェルに任せてちょうだい」

「はい……」

不満そうに返事をして、ミュリエリアと入れ替わりにキッチンを出る。

（あ、そうだ）

そこで、ふと思いついて足を止めた。

キッチンに顔を突っ込んで、「フェルちゃん。ちょっとお話があるんだけど」と声をかける。

「何ですか？」

「ええと、ここじゃちょっと……私の部屋でお話ししよ」

「今、忙しいんですけど」

ミュリエリアを気にしながら言うミラに、オムレツを皿に移しながらフェルルートが答える。

「大事な話なんだけどなあ……」

フェルルートはミラの話素直に聞いてくれないだろう。

そう思ったミラは、

「ね、お姉ちゃん。ちょっとフェルちゃんを借りて行っていい？」

「あ、ずるいですっ」

そんな二人のやり取りにミュリエリアはくす、と笑みを浮かべ、

「ええ、いいわよ。フェル、ミラの話聞いてあげて」

「……わかりました」

「それじゃ、行こっ」

「行きますから、引っ張らないでください！」

ミュリエリアに言われて不承不承頷いたフェルルートの手を取って、ミラは自分の部屋に向かった。

……

「それで、大事な話って何なんですか？」

ミラの部屋に移動して、開口一番にフェルルートが言った。

「うん……あのね」

ミラはそこで言い淀み、もぐもぐと口の中で呟く。

「何ですか？」

「えーと、こんなこと言うとフェルちゃんが怒るかもなんだけど……」

「だから、その話は何なんです。言わないと怒りますよ」

「わかった、わかりました、言うから！」

じろりと睨まれて、ミラは慌てて頷いた。

「……もしも……もしかしての話だけど、もしも私がいなくなったら、お姉ちゃんのこと」

「わーーーーー!!!」

「わひゃ!」

話の途中でフェルルートが大声を上げ、ミラもつられて驚いた。

「な、何なに?」

「怒ったんです」

「へ?」

「だから、怒ってるんです。ミラさんが怒れって言ったんじゃないですか」

「いや、そこまでは言ってないんだけど……」

「とにかく、私は怒ってるんです! 何ですか、いなくなったらって」

フェルルートがミラに詰め寄り、ミラはその剣幕に思わず身を引いた。

「お姉ちゃんのことを悲しませないって約束したのに、すぐいなくなって、帰ってきたからとりあえず許してあげようって思ったなら、またいなくなる?」

「冗談じゃないです論外です! そんな話なら、聞きませんから!」

「フェルちゃ……」

フェルルートは声を荒らげてそう言つと、足音を立てて部屋から出て行ってしまった。

追いかけてよとしたミラの目の前で、部屋の扉が閉まる。

「……怒らせちゃった。もしもの話だつて言ったのに」

はあ、と溜息を一つ。

追いかけるのは止めて、ベッドに体を投げ出した。

「私も……いなくなりたいわけじゃないんだけどなあ」

そう呟いて、ミラは自分の部屋を見回した。

ようやく戻つてこられた、昨日はろくに見ることも出来なかった部屋。

もう、ここを去るようなことがなければいいと思う場所。

部屋の隅に【ロイヤルナイトメイルP】が置いてあり、壁に【ジークリンデ】や【夜刀】【月影】が立てかけてある。

以前、【ミオガルナ】素材の【双剣】が飾られていた場所には、【イグスルーヴ】が置いてあった。

（お姉ちゃん、イグスルーヴにあれを使つたんだ。つてことは、私のいない間に部屋に入ったんだよね。

別に、見られて困るものは無いけど……）

「あっ」

ミラは、声を上げてベッドから起き上がった。

机に駆け寄り、引き出しを開ける。

そして、引き出しの中から色の塗られた小箱を取り出した。

オルガニート。

ミュリエリアの誕生日にプレゼントするために、ミラの作ったプレゼントだ。

「うあゝ、忘れてた……」

机の上にオルガニートを置いて、ミラは頭を抱える。

色々なことがありすぎたせいで、渡すことをすっかり忘れてしまっていた。

もっとも、ミュリエリアの誕生日当日は【イミテイションミラージユ】との戦闘があった日で、とても渡すことなど出来なかったのだが。

「今から渡しても変じゃないかなあ？」

ミラがそう呟いたとき、

「ミラ、ミラー！」

一階からミュリエリアの呼ぶ声がした。

その後すぐ、「ミラ！ 大変なのじゃ！」という声が聞こえる。

「あれ、ルーツさん？」

その声は、昨日別れたばかりのルーツの声だった。

どうしたんだろう、と思うより先に階下からルーツの声が続ける。

「人間じゃ！」

「人間!？」

ミラは慌てて【イグスルーヴ】を取ると、部屋から飛び出した。

「あいたっ!」

「ぎゃっ」

「痛っ」

「い、ごめんなさいっ」

慌てるあまり、廊下や階段で寝ている人を蹴ったり踏んだりしながらミラは一階へ向かった。

.....

「ルーツさん！ どうしたんですか!？」

作業場に駆け込みながらミラが聞く。

作業場には、人の姿をとったルーツがミラを待っていた。

「ミラ、空じゃ。空を見てみるのじゃ！」

開け放たれたままの作業場の扉を指差してルーツが言う。

「空？」

ミラは首を傾げながら外に向かう。

そこにはミュリエリアとフェルルートがいて、空を見上げていた。

「ミラ、来たのね」

「あ、うん。空がどうしたの？」

「ええ……ちょっと口では説明し難いんだけど」

「見ればわかりますよ。あそこです」

フェルルートが空の一点を指差す。

「あれは……何？」

その指の先を見て、ミラは不思議そうに呟いた。

村から見て東の方向、ちょうど【ラオシャンロン】と戦った場所

の上空に、見たこともない不思議な現象が発生していた。

空に大きな正方形の形をした金色の光が浮かび、その四角の中心に一本の縦線が入っている。

大きさの規模が桁違いだが、窓のようなイメージだった。

「あれは、ゲートじゃ」

工房から出てきたルーツが、三人に並びながら言う。

その後ろから、今までの騒ぎで目を覚ましたらしい何人かも出てきていた。

「人間がこの世界に何かを送り込むときに使うためのものじゃ。妾もあれによってこの世界に送り込まれたからの、よく覚えておる」

「送り込むって、一体何をですか？」

「それは、妾にもわからぬ。じゃが、この場所に出てくるといってとは、その狙いは……」

ルーツがそう言い、何人かの視線がミラに集中する。

「……私？」

自分の顔を指差して聞くミラに、ルーツは「じゃろつな」と頷いた。

「見る、ゲートが！」

起き出して来ていたルクスが空を示す。

ゲートの中心の線を上下に光が走り、線が消える。

そして、四角い枠に囲まれた部分の空間が風に吹かれた水面のよう
うに揺らいだ。

「ゲートが、起動してある……」

ルーツが呟く。

揺らいだ空間から、何かが現れようとしていた。

白い鱗に包まれた、蛇か深海魚のような印象を受ける頭が空間の
揺らぎから突き出す。

三叉に枝分かれした金色の角が頭に煌き、その根元から長く赤い
毛が伸びていた。

「あの龍は……」

「人間……いえ、古い記述にもあんな姿は記されていないわ」

「ボクも知らないぞ。ルーツは？」

工房から出てきた華霞とエルミナが疑問を口にする。

「それが……妾も知らんのじゃ」

申し訳なさそうに、ルーツが言う。

そうしている間に、龍はその全身を現していた。

長い体は、約二十メートルはあるだろう。

体の両側面には七枚ずつの三角形のヒレに似た翼が並び、前から後ろへ順に波打っていた。

翼は前から順に赤、橙、黄、緑、青、藍、紫色で、虹色に揺れる。

尾の先端には魚のような尾びれがあり、頭から靡く赤い毛は尾を越えて更に長く伸びる。

天候を統べし古龍。

虹蛇龍こうだりゅう【ウエゼントネル】。

【MONSTER HUNTER Frontier G】において、最強と名高いモンスターだ。

【MONSTER HUNTER】というゲームには明確なストーリーが存在しないが、討伐が一つの区切りとなるモンスターが何体が存在する。

初期の頃は【ミラボレアス】とその亜種がその最後の区切りいわゆるラスボスのような役回りを担っていたが、最近、その役割はこの【ウエゼントネル】に引き継がれている。

【ウエゼントネル】が実装されたのは【MONSTER HUN

TER TRY】がゲームの役割を終えた後のことで、観測を役割とする【ミラーツ】であっても、この世界に存在しない【ウエゼントネル】のことまでは知りようがないのだ。

「綺麗……」

「そんなことを言っておる場合か！ あれは妾たちの敵じゃぞ！」

【ウエゼントネル】の優美な姿にそんな感想を漏らしたミラを、ルーツが叱りつける。

「でも、もしかしたら敵じゃないかも」

そうミラが言いかけたとき、全身を現した【ウエゼントネル】が赤い瞳でミラを捉えた。

キイイイイイイイ、と甲高い咆哮を上げる。

【ウエゼントネル】の全身を竜巻のような風が包み込み、風の鎧を展開する。

そして、【ウエゼントネル】はミラ目掛けて口から風のブレスを放った。

同じく風を扱う【クシャルダオラ原種】のブレスが、竜巻状の風なのに対して、【ウエゼントネル】のそれは圧縮された空気のかたまりだ。

「ほれ見たことか！」

そう言いながらルーツが前に出る。

その体が光に包まれ、龍の姿になったルーツに風ブレスが直撃した。

圧縮された空気が一気に解放され、風に煽られた数軒の家の屋根が吹き飛ぶ。

だが、その風はルーツに触れた時点で威力を失い、背後にはそれほど風の風も通らなかつた。

この世界の中では攻撃によってあらゆるダメージを受けないルーツの力は、【ウェゼントネル】に対しても有効なのだ。

だがそれは、逆に言えばルーツは【ウェゼントネル】にダメージを与えられないということにもなる。

「それでも奴は敵ではないと言えるかの？」

「くつ、イクシード龍装！」

齒噛みしたミラの周りに四本の光が降り注ぎ、光が鎧と翼に形を変える。

「ルーツさん、お姉ちゃんたちを頼みます！」

「任せるのじゃ！」

ルーツが守りとなってくれれば、どれだけ激しい戦いをして、流れ弾で誰かが怪我をする必要はしなくていい。

ルーツの頼もしい返事を聞きながら、ミラは地を蹴って飛び立った。

片手に握った【イグスルーヴ】が輝き、フライトエッジ気光刃が伸びる。

展開した鰐から光の粉を散らしながら、ミラは【ウエゼントネル】へと飛翔した。

「始まったみたいだね」

光を放つ剣を握って、一人のキャラクターが【ウエゼントネル】へ向かう。

それが映し出されたパソコンのディスプレイを見ながら、一人の男が呟いた。

同じ机の上には他にも何台かのディスプレイが置かれ、それぞれが別のことを表示している。

世界の中の様子を、単なるデータの推移で表示しているものや、全く関係ないニュースを表示しているもの。

【MONSTER HUNTER TRY】の世界の容量を円グラフで表示しているものもあり、グラフのほぼ全てが使用中の赤色で塗りつぶされていた。

それらのディスプレイが置いてある机の前に座っているのは、スーツを着た二十代後半くらいの男性だ。

どこにでもいそうな普通のサラリーマンといった風情だが、この男こそ、【MONSTER HUNTER TRY】を作り出した【人間】だ。

業界では有名な天才的なプログラマーであり、【MONSTER HUNTER TRY】をゲームから仮初の世界に作り変えた九種のプログラムや、その後のルーツプログラム、天敵のプログラムをも構築した。

「どうしてウエゼントネルのですか？ 今更間引きをしても……」

と、同じくスーツ姿の若い女性が聞く。

彼女は、男の助手をしている女性だ。

この部屋には、この二人だけしか存在していない。

間引き、というのは、【ウエゼントネル】を使って何度か行っていた干渉のことだ。

データ量の増加は以前から問題になっていて、空き容量を作るために、キャラクターの分解を行っていたのである。

【ウエゼントネル】を送り込み、適当に村一つ分程度のキャラクターを分解し、引き上げさせる。

中の世界からすれば、正体不明の敵によって村が壊滅したように

見えたはずだ。

その行為は、あまりにも素早いために【ミラルーツ】の観測にさえ引つかからなかった。

世界中の全ての存在の視界を共有できるという【ミラルーツ】の観測能力だが、できるというだけでいつも世界全体を観測しているわけではない。

そんなに大量の視覚情報を処理できないからだ。

【ミラルーツ】が常に観測していたのは、【ミラバルカン】や【ミラボレアス】、【ハンター】の拠点のような何かが起こりそうな場所だけなのである。

今回は、ミラのいる村を気にしていたために、偶然出現の予兆を捉えることができたのだ。

とにかく、そのキャラクターの削除のことを間引きというのだが、既にそれでは対応しきれなくなり、世界の放棄が決まったのだ。

今更、【ウエゼントネル】を送り込む理由が、女性にはよくわからなかった。

「全部分解するのは簡単だけどね。でも、それだとせっかくのよく出来たマップやなんかなくなるでしょ？」

この後ゲームとして提供されるんだから、使えそうな部分は残しておかないと。

ゲームのプログラムなんて、本来僕のやる仕事じゃないんだし、ね」

「はあ、つまり手を抜くためにキャラクターだけ削除すると」

「君は身も蓋もない言い方をするねえ……。ま、そこを気に入ってるんだけど。」

とりあえず、邪魔になりそうなキャラを片付けて、それで、空いた容量に新しいウエゼントネルを送り込む。

後は、その他大勢を分解しながらその繰り返しだよ」

「そうですか。で、その作業にはどれほどかかるのですか？ 午後には後継のゲームに関する会議で報告をする必要がありますが」

手帳を開きながら女性がそういうと、男はひらひらと手を振りながら答える。

「そんなに時間はかからないでしょ」

このキャラの、とミラの情報が表示されているディスプレイを示しながら、

「分解が終われば、後は二時間くらいかな。ほら、余裕でランチも食べられる」

第二十五話「Re 世界の終焉わる日」(後編)

【ウエゼントネル】が風ブレスを吐き出す。

ミラは大きく翼を広げて急減速し、連続して吐き出される空気弾をやり過ごした。

目の前を通り過ぎて行った空気弾が村に着弾し、一軒の家を廃屋に変える。

「村が……。っ、リライト！」

髪が銅色に代わり、風の古龍の力を宿す。

再度、【ウエゼントネル】が風ブレスを放つ。

ミラは、強烈な風の流れを作り出し、【ウエゼントネル】の風ブレスを村の外側へと押し流した。

「このっ」

【イグスルーヴ】に風を纏わせ、一閃。

剣から風の刃が放たれ、【ウエゼントネル】へと突き進んだ。

だが、その風の刃は【ウエゼントネル】の手前でかき消される。

風鎧ではなく、そこに届く前に何かにぶつかったようだった。

風による守りの前面に、オーロラのように揺蕩うたゆた紅色の光は、

「ファイアーフォール情報防壁!?! この龍も……っ」

ミラが驚きの声を上げる。

【ウエゼントネル】も、【ミラバルカン】と同様の絶対なる守りを【人間】から与えられているのだ。

【ウエゼントネル】は空中でとぐるを巻いて鎌首をもたげ、翼を大きく振るわせる。

翼から、一枚が【片手剣】ほどもある羽根が何枚も抜け、風に乗って鋭くミラへ襲いかかった。

ミラは、最初の数枚を【イグスルーヴ】で斬り落とし、

「リライト!」

髪が鋼色から桜色に変わる。

撃ち放たれた火球が羽根を焼き払い、そのまま【ウエゼントネル】に向かう。

しかし、その火球はファイアーフォール情報防壁に無力化されてしまった。

【ミラバルカン】なら、今のタイミングで攻撃が通用したはずだ。

ファイアーフォール情報防壁への追加が早すぎる。

「どっして!?!」

驚いて一瞬動きを止めたミラに、【ウェゼントネル】が空気弾を放つ。

ミラは咄嗟にそれを避けるが、ミラの避けた空気弾は村へと向かう。

「しまった!」

慌てて後を追いかけてみようとするが、そこに「大丈夫だから!」と声がかかる。

ミラの部屋の窓から顔を出している石楠花の声だ。

さすがに、この騒ぎの中では寝ていられなかったようだ。

地面に着弾した空気弾の周りに上昇気流を作り出し、荒れ狂う風の力を上手く上空へと逃がす。

「ミラお姉ちゃん、こっちのことは気にしないで、戦って!」

「うん、ミラちゃんはその籠に集中して欲しいな」

石楠花の後ろに立っているグラキシアも言葉を重ねる。

「しゅー君、茉莉たちも行くぞう!」

「セレスタ、援護に行くわよ!」

茉莉とセレスティアが飛び立とうとするが、ルーツが「待つのはや」と止める。

「ファイアーフォール情報防壁を持っている相手と戦えるのは、ミラだけじゃ。

そなたたちが行っても、どうにもならん」

「でもっ」

「茉莉、俺たちでは戦いの役に立てない。だから、ミラが全力で戦えるよう、この村を守るんだ」

「……うん」

「僕たちは、自分に出来ることでミラを手伝わないと。そうだよ、ね、姉さん」

「わかってるわよ!」

茉莉たちが石楠花にカバーできない場所を守るために、村に散って行く。

「みんなも……ありがとう!」

ミラは【ウエゼントネル】へと向き直り、一気に距離を詰めていく。

【ウエゼントネル】が風ブレスを放つが、ミラは翼を羽ばたかせて上昇してそれを躲した。

後ろに抜けた空気弾は仲間たちを信じて任せ、【ウエゼントネル】

に向かう。

【ウエゼントネル】の上を取り、下から飛んできた羽根の矢を後
方宙返りの要領で躲す。

「リライト」

天地が逆転した状態で、真上から【グラビモス進種】の熱線を浴
びせかける。

書き換えから一秒もかからずに放たれた攻撃。

しかし、それさえ情報防壁は防いでしまった。

【ウエゼントネル】が上昇しながら鋭い三叉の角でミラに突きか
かる。

ミラはその切っ先から身を躲し、急降下しながら翼を狙って斬り
つける。

だが、刃は情報防壁に阻まれ、翼まで届かない。

「っ！」

ダメージを与えられないまま【ウエゼントネル】の下まで抜けた
ミラに、鞭のようにしなつた尻尾が襲いかかる。

ミラは、咄嗟に【イグスルーヴ】を使ってそれを防いだ。

強靱な気光刃はその衝撃にも耐えたが、ミラの体は大きく弾き飛

ばされる。

「これならどうですか、リライト！」

ミラは、弾き飛ばされながら能力を書き換え、【ウエゼントネル】へ何本もの青い雷を集中させる。

天から降り注ぐ【キリン進種】の【大地の絆】ガイアタイズ。

しかし、【ウエゼントネル】の守りはその輝きを通さない。

「っ！ わかったのじゃ！」

地上から戦いを見ていたルーツが声を上げる。

ミラは【ウエゼントネル】が放つ風や羽根を避けながら「どうなってるんですか！」と叫んだ。

「そやつファイアーフォールの情報防壁には、ミラバルカンの情報が使われておるのじや！」

おそらく、ミラバルカンの戦闘記録からデータを読み込んでおるのじゃろっつ」

「ってことは、ミラバルカンに使った能力は」

「通用せん、ということになるの……」

「そんな……」

ミラは、【ミラバルカン】との戦いで、全ての能力を使ってしま

っている。

つまり、その情報を引き継いだ情報防壁を持つ【ウェゼントネル】ファイアーフォールには、最初から何の攻撃手段も持っていないということになる。

それを打開するには、まだ使っていない力を使うしかない。

「龍化を、すれば……」

龍化した状態なら、まだ使っていない能力はいくつか残っている。

「ダメじゃ！ そなたの体のことを忘れたわけではなかるうな！」

耳ざとくミラの呟きを聞きとったルーツが制止の声を上げる。

「それ、どういう意味ですか？」

ルーツの後ろから、それを聞きとがめたミュリエリアが聞く。

ルーツは、ミラを止めるにはミュリエリアが適任だろうと、真実を告げることにした。

「ミラの体は、龍化には耐えられんのじゃ。一度使って問題がなかったことがもう奇跡なのじゃ。もう一度使えば、それこそ命に関わることになるじゃろう」

「そんな……」

「だから、私にあんなことを頼もうとしたんですね……」

絶句するミユリエリアの隣で、フェルルートが納得したように頷く。

「馬鹿ですよ」と呟いて、声を張り上げる。

「ミラさん！ そんな危ないことをするのは、許しませんから！」

「そうよ、ミラ。龍化は使わないで！」

「でも、攻撃できないと、どうしようも……」

「いや、方法はあるぞ！」

エルミナが力強く断言する。

「ミラバルカンは、穴に落ちたり砂に埋まったりしていた。直接の攻撃は効かなくても、攻撃によって起こる副次的な現象だったら届くはずだぞ、うん！」

「そ、そんな副次的とか急に言われても……ひゃっ」

困惑した声を出すミラを【ウエゼントネル】が狙い撃ちし、ミラは危ないところで空気弾を避けた。

ミラは、【ウエゼントネル】に照準を定められないように飛び回りながら攻撃の方法を考える。

【ミラバルカン】にしたように土に埋めようにも、相手は空の高みにいて、同じ攻撃は出来そうにない。

うろつろと飛び回るミラの下で、村を見回していた華霞は「あれが使えるかもしれないわね」と呟いた。

近くにいたベガードを捕まえ、何事か伝える。

「なるほど、承った！」

ベガードは大きく頷き、走り出した。

【ウエゼントネル】の攻撃で倒壊していた家に駆け寄り、元は屋根だった板を持ち上げる。

「ミラ殿！ これを使われよ！」

そう叫んで、板を空へと投げ上げる。

轟竜譲りの怪力で投げ飛ばされた板は、空高く、ミラ的位置まで届く。

「ミラちゃん、それを風で飛ばすのよ！」

「あ、そっか！ リライト！」

ミラは再び【クシャルダオラ進種】の力へと書き換え、竜巻を起こして板を巻き上げる。

そして、竜巻の回転で板に勢いをつけた後、能力を停止する。

板は、それまでにかけられた力に従って、勢いよく【ウエゼントネル】へと飛んで行った。

能力による攻撃は、あくまでも風によるものだ。

この板は、ただ単に飛んできた板でしかない。

板は狙い通りに情報防壁ファイアーウォールを抜け、しかし、その奥の風鎧で逆に吹き飛ばされた。

「ぬう、届かぬか！」

「でも、情報防壁ファイアーウォールは抜けました！ もっと投げて下さい！」

「そうであったな。某としたことが、少々弱気になっていたようだ。ミラ殿、行くぞ！」

「はいっ」

ベガードが再び木材を投げ上げ、ミラが風でそれを巻き上げる。

それを見て、ミュリエリアは身を翻した。

工房の中に入りながら「誰か、セルティたちを呼び戻して来てくれませんか？」と言う。

「それなら、私が行こう」

「じゃ、私も」

六花とベルゼラがそれを引き受け、工房の前から左右に散って行く。

それを見てから、今度はそこにいたダルブルグに声をかける。

「ダルブルグさん、荷車を貸してもらえますか？」

「ああ、そりゃ別に構わねえけど」

「ありがとうございます。では、工房の前に運んで下さい」

ミュリエリアはお礼を言って、すぐに作業場に向かった。

「ミュリエリアさん！わたしにもお手伝いできることはにやいで
すか？」

「僕にも、何かないですか？」

メイミイとラキがミュリエリアに自分も手伝いたいと訴え、ミュ
リエリアは「それじゃあ、手伝って貰おうかしら」と言った。

そのころ、

ダルブルグが昨日の宴会の片付けも終わってない広場から荷車を
引いて戻ってくると、ちょうどベルゼラと六花がセレスティアたち
を連れて戻ってきたところだった。

「何なのよ、急に戻って来いって」

「さあ？ 私もミュリーに頼まれただけだし」

そんな話をしていると、工房からミュリエリアがメイミイとラキ

を連れて出てくる。

その手には、工房の中にあつた売り物にするはずの武器や鉱石が抱えられていた。

ミュリエリアはそれを荷車の荷台に置き、メイミィとラキも同じようにする。

「セルティ、これをミラに。木よりは威力があると思うわ」

「なるほどね。オツケ、任せときなさい」

セレスティアはミュリエリアの言葉に頷く。

「セレスタ、そっち持って。茉莉と柊也も」

「うん」

「わかったの」

「ああ」

三様の返事が返り、四人が荷車の四つの角につく。

「行くわよ!!」

セレスティアの号令で荷車を持ち上げ、空へと舞い上がった。

上空では、【ウェゼントネル】のミラの戦いが展開されている。

ミラの攻撃は、情報防壁はファイアーフォール抜くものの、風鎧に阻まれてまだダメージを与えられていない。

「このっ！」

ミラが放った木材を風鎧で弾いた【ウエゼントネル】は、ミラに木材を投げているベガードに目を向けた。

空中を泳いでベガードの真上へと移動し、そこから自由落下する。

二十メートルを超える巨体を使った押し潰し攻撃だ。下敷きになればただではなすまない。

ベガードは、投げようとしていた木材を捨て、その場から走り出す。

「ぬおおおおおっ」

頭上を覆う影の下から抜け出すべく、思いっきり前に体を投げ出す。

【ウエゼントネル】はベガードの足の先すれすれの位置に落下し、風鎧に吹き飛ばされたベガードが地面をごろごろと転がる。

「ベガードさん！」

「問題はない！」

ベガードは、はっきりした声で答え、すぐに立ち上がった。

どうやら、吹き飛ばされただけで大きな怪我などはしていないようだ。

「ミラ！」

荷車を引いてミラの後ろまで上がって来たセレスティアがミラを呼ぶ。

声に気がついて後ろを振り向いたミラは、四人が運んでいる荷車を見て目を丸くした。

「どうしたんですか、それ？」

「弾を運んできてやったのよ」

「これを撃ちこんでやるの！」

「あ、はい、わかりました！」

「じゃあ行くよ。はいっ」

そう言ったセレスティアが、荷台から適当に剣や鉱石を取って放り投げる。

ミラは風を起こしてそれを巻き上げ、風の流れに乗せた。

【ウエゼントネル】は地上にとぐろを巻いてベガードと向き合っている。

攻撃が通じないことがわかっているベガードは、回避に徹して渡

り合っているようだった。

ミラは、ベガードに気を取られて無防備になっている【ウエゼントネル】の背中に向けて、風に巻き込んだ物を撃ち出した。

放たれた鉱石や武器が情報防壁を越えて【ウエゼントネル】の背中に降りかかる。

鉱石は風鎧に押し流されたが、一振りの【大剣】が【ウエゼントネル】の背中に突き刺さった。

「やった！」

思わず歓声を上げる。

たった一撃だが、ようやくダメージを与えられた。

倒せないわけではないと、希望が生まれる。

【ウエゼントネル】が振り向き、翼を震わせる。

羽根が抜け、色取り取りの矢が風に乗ってミラたちへ襲いかかった。

「無駄だ」

柊也が【大地の絆】ガイアタイスを発動させ、羽根を焼き落とす。

連続して【ウエゼントネル】が風ブレスを放つが、今度はミラがその軌道を逸らした。

「もう一回、行くの！」

茉莉が大き目の武器を選んでぽんぽん空中に放り出す。

ミラはそれを風で受け取り、【ウエゼントネル】へと飛ばした。

刃の標的となった【ウエゼントネル】は、地面から離れて体を真っ直ぐに伸ばして空に向かう。

そして、その全身を覆っていた風鎧が、突然弾けた。

全方位に強い風が放たれ、【ウエゼントネル】に向かっていった武器が勢いを失って地面に落ちる。

風はミラたちのいる場所にも届き、荷車をぐらぐらと揺さぶった。

【ウエゼントネル】は、空を泳いでミラたちへと迫る。

ミラは素早くその進路上から逃れるが、荷車を支えている四人の動きは遅い。

それでも辛うじて【ウエゼントネル】の突進を躲し、【ウエゼントネル】は目標を外して通り過ぎた。

【ウエゼントネル】は空中で素早く振り返り、角を空へと振り立てる。

その角に、バチ、と音を立てて電光が散った。

黄色い電流が、風の変わりに【ウエゼントネル】の体を包み込む。

【ウエゼントネル】を守る第二の鎧、雷鎧。

ただ押し返すだけの風鎧とは違う、攻防一体の守りだ。

「何!？」

「電気の鎧!？」

風と雷を使い分けるようなモンスターなど、知らない。

その一瞬の混乱が隙を生んだ。

その隙は、最高クラスの攻撃速度を誇る雷の前では余りに大きい。

狙いをつけて金色の角から一筋の電撃が放たれ、それが茉莉を直撃した。

「あああああっ！」

電撃に撃たれた茉莉が声を上げて荷車から手を離れた。

バチバチと帯電しながら、地面へと落ちていく。

「茉莉！」

「ちよっ」

「うわ！」

柊也が茉莉を追って急降下し、重みを増した荷車をセレスティアとセレスタイトが苦勞して支える。

柊也は必死に茉莉を追うが、その目の前を白い巨体が横切る。

「邪魔だ！」

柊也が声を荒らげ、【ウエゼントネル】と競うように降下するが、【ウエゼントネル】の方が僅かに早い。

茉莉に狙いを定めた角が、凶悪に煌いた。

「そうはさせん！」

走ってきたルクスが跳び茉莉を抱き止める。

それで微妙に位置がずれ、茉莉を貫かんとした角はルクスを引っ掛けて空中に跳ね上げる。

【ウエゼントネル】は下降から急上昇に転じ、宙を舞う体に尾びれを叩き付けた。

「く、変身！」

意識を切り替える言葉。

腕の中にしっかりと茉莉を抱えたルクスの体が黒い岩のように変わり、そのまま尾びれに跳ね飛ばされた。

一軒の家に突っ込み、木製の壁を粉碎して中に突っ込む。

「茉莉！」

柊也が家の前に下りると、中から「大丈夫だ」というルクスの声が返る。

床に座ったルクスが、腕の中の茉莉の様子を確かめて返事をしていた。

「気を失っているだけだ」

「そうか……良かった。ありがとう」

「守ることが俺のやるべきことだからな……う……」

立ち上がるうとしたルクスがよろめいて床に座り込む。

「どうした？」

柊也が駆け寄ってルクスの体を見ると、尾びれを受け止めた腕が毒々しい紫色に染まっていた。

ぶつかったことによる内出血の色とは違う。

【ウエゼントネル】は、全身のいたる部分 牙、羽根、尾びれに毒を持つのだ。

「これは……毒か。待っている」

柊也は立ち上がるうとするルクスを制して、六花を呼ぶために家から出た。

再び天空に昇った【ウエゼントネル】は、その狙いを荷車に定めていた。

「こ、こっち来た!」

「来るんじゃないわよ、この馬鹿!」

二人だけでは支えるのが精一杯で、とても動くことは出来ない。

「セレスティアさん! うあ!」

ミラが【ウエゼントネル】の前に立ちふさがるが、なす術なく吹き飛ばされる。

「ミラ! しょうがない、捨てるわよ!」

「でもっ」

「死にたいの!」

「……くそおっ」

セレスティアとセレスタイトが荷車から手を離して離脱し、自由落下を始めた荷車を【ウエゼントネル】が噛み砕いて飲み込んだ。

「キイイイイイイイイイ!」

勝ち誇ったような咆哮を【ウエゼントネル】が発する。

空を舞う体から雷が発せられ、村中に降り注いだ。

無人の家が何軒も落雷を受け、そこから火の手が上がった。

冬の乾燥した大気に火の粉が散り、あっという間に燃え上がる。

「わ、わわわわわ火が、火があゝ。熱い、熱いつ」

「馬鹿、落ち着けりーヤ。火山で慣れてるだろうが。ほら消すぞ！」

「み、水、水はどこっすか!？」

「……井戸、向こうです」

「よっしゃ行くぜ!」

「怪我人は引っ込んでろ。邪魔だ」

「ですわね。わたくしたちにお任せなさい」

慌てて消火に向かうが、村のあちこちで同時に燃え上がる火に対処するには人員も水も足りていない。

まるで焦りを燃料にするかのように、炎は赤々と燃え上がる。

「ああ、村が……」

慣れ親しんだ村が炎に包まれていく様に、ミュリエリアが悲痛な

声を漏らした。

だが、ミュリエリアにはこの状況をどうすることも出来ない。

何か、誰か。

足りない力を埋める手段を求めて彷徨った視線が、真っ直ぐな瞳に受け止められた。

炎の照り返しで、白い翼を赤く染めた少女に。

「ミラ……ダメよ……」

ミラの瞳に決意を見て、ミュリエリアは呟く。

それを聞いて、ミラは引き結んでいた唇を笑みの形に緩めた。

「だいじょうぶだよ、おねえちゃん」

言葉を紡ぐ唇の動きが、やけに鮮明に見える。

「預かってて」

フライトエッジ
気光刃を消した【イグスルーヴ】が投げられ、ミュリエリアは反射的に受け止めた。

武器を使わないということが、ミラのやろつとしていることを物語る。

「ダメ、止めて！」

ミュリエリアの制止を聞かず、ミラは視線を回した。

「キイイイイイイイイイ」

視線を受けた【ウエゼントネル】が高く吼える。

「あああああああああつ!!」

角から走る雷を躲し、ミラは一直線に【ウエゼントネル】へと飛翔した。

矢のように突き進む体を光が包み込み、そのシルエットが大きく膨れ上がる。

再度放たれた雷が光を引き剥がし、中から白龍が姿を現した。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

龍の姿に転じたミラは咆哮を上げ、雷に似た金色の光を纏う。

【ラージャン原種】の【激昂】。

力を強化しながら【ウエゼントネル】に組み付くと、雷鎧が肉を焼くのも構わず、一気に村の上空から押し出した。

さらに、密着した状態から巨大な雷球を吐き出し、【ウエゼントネル】を地面に叩きつける。

即座に能力を書き換え。

ミラの口から【ウカムルバス原種】の水ブレスが放たれる。

触れるものを凍結させる超低温の水が【ウエゼントネル】を直撃し、体を凍らせていく。

ファイアーフォール
情報防壁に追加されるより先に、【ウエゼントネル】は氷の中に封じられた。

ミラは村に向き直って能力を書き換え、今度は【ガノトトス原種】の水ブレスを放った。

吹き付けられる水が、村を焼く炎を見る間に消していく。

だが、火が消し止められても、村の半分近くの家が炎の被害に遭っている。

悲しみを瞳に浮かべて、ミラは空から村を見下ろす。

そのとき、パキン、と氷の砕け散る音が響いた。

【ウエゼントネル】が全身から放電しながら、氷を内側から砕いたのだ。

はっとしてミラが振り返る。

【ウエゼントネル】は、地面から斜めに体を伸ばしてミラの方へと向いていた。

一直線に伸びた身体がバチバチと帯電し、長い毛が針のようにな

って扇状に広がる。

そして、【ウェゼントネル】の口から、荷車と一緒に飲み込んでいた鉱石が放たれた。

電流によつて生じる磁場によつて弾丸を加速させて放つ、レールガンと呼ばれる攻撃だ。

生物の体でそんなことをするには無理があるのだが、そんなのだと設定されてしまえば実際にそうなるのがこの作られた世界だ。

【回復薬】の異常な回復能力も、不自然に完成する調合も、ただの笛の音が能力を上げるといふ【狩猟笛】も、全てそう設定されているからそう働くのだ。

放たれた鉱石は秒速数千メートルという馬鹿げた速度で突き進み、ミラの目には何かが飛んで来たことすら映らなかつた。

鉱石はミラの右の翼を撃ち抜き、白い羽根が散らばる。

僅かに遅れて衝撃波が訪れ、片翼を失ったミラの体を打ちのめした。

何が起きたのかもわからないまま、ミラの体は地面に墜ちる。

【ウェゼントネル】は空中へと飛び上がり、空から斜めに第二射を撃ち下ろした。

放たれた鉱石が地面を深く抉り取る。

生物の肉体が耐えられるような威力ではなく、直撃を受けたミラの右前脚が千切れ飛んだ。

「ギヤアアアアアアアアアアッ!」

激痛に襲われ、咆哮を上げるミラ。

そしてその一撃は、腕を撃ち抜くと同時に、引いてはならない引き金を 引いてしまった。

ミラの体が地面から跳ね上がり、操り人形のような動作で直立する。

「ゴギヤイイイウヲオオアアアアウオオオオオ」

全ての【原種】の咆哮を同時に聞くような、歪な音で咆哮する。

失った右前脚の根元で肉が蠢いたかと思うと、そこから白い肉が伸びる。

先端に、牙の並んだ円形の口を供えたそれは、【フルフル原種】の首だった。

ルーツが忠告してくれた事態が、起こっていた。

【E因子】の影響で活性化された【進種】の因子によって、ミラは【龍化】して【原種】の力を使っている。

だが今、【進種】の因子はミラの制御を超えて活性化し、ミラの体をその因子そのものの体にしてしまおうとしているのだ。

首は長く伸び、【ウエゼントネル】の顔に喰らいつく。

【ウエゼントネル】の角に貫かれるのにも構わず、その頭を口の中に収めてしまった。

先端に【ウエゼントネル】の頭を銜えたまま右前脚が振り下ろされ、【ウエゼントネル】の体が地面に叩きつけられる。

その勢いは相当なもので、地面がぐらぐらと揺れるほどだった。

地震のように地面が揺れる。

その揺れは当然ミラの部屋にも伝わり、机の上に置きっぱなしにされていたオルガニートが床に転がった。

その拍子に蓋が開き、演奏が始まる。

最初の音は、ファ。

低すぎず高すぎない、優しい音。

【フルフル原種】の口の中で電光が煌く。

レールガンの第三射が放たれ、首を粉碎した。

【ウエゼントネル】はそのままミラの体に巻きつき、ギリギリと締め付ける。

体中の骨を砕いてしまいそうな凄まじい力で締め付ける上に、雷鎧が体を焼いた。

ミラが歪な声で吼える。

失った翼の根元から、甲殻種の足が三本生え、鋭い先端で【ウエゼントネル】の体を突き刺す。

これには【ウエゼントネル】も堪らず、巻きつきを解いて距離を離れた。

演奏は序盤から中盤に。

どちらかと言うと高音よりも低音が多く使われ、安定感のある穏やかな旋律を形作っていた。

【ウエゼントネル】が角から雷を放ってミラを牽制する。

だが、ミラは雷に撃たれるのも構わず、我武者羅に突っ込んだ。

もう、時間がない。

早く、【ウエゼントネル】を倒さないと。

距離を詰めたミラに、【ウエゼントネル】が噛み付いてくる。

ミラは、今は何らかの飛竜の前脚になっている右前脚を【ウエゼントネル】の口に突っ込んで噛み付かせて固定する。

痛覚なんて、もう麻痺してしまって何も感じない。

左の前脚で【ウエゼントネル】を殴ろうとすると、なぜか腕に鋭い角が生えていて、【ウエゼントネル】の体を貫く。

刻々と別物に変貌していくミラに対して、ファイアーフォール情報防壁は何の役にも立たなかった。

【ウエゼントネル】が口を離して咆哮を上げる。

身を捻って角を抜き、距離を取ろうとする。

ミラは体を回転させて【ウエゼントネル】に尻尾を叩き付けた。

尻尾の先に生えている黒い毛に覆われた手が【ウエゼントネル】の翼を鷲掴みにして、地面に引き摺り下ろす。

口に生える牙がめきめきと音を立てて伸び、容貌を恐ろしいものへと変える。

その口から放たれたのは、古龍の風を超える破壊力を持つ突風のブレス。

【アカムトルム原種】の、通称ソニックブラストと呼ばれる技だ。

突風が大地をずたずたに切り刻み、同様の裂傷を刻まれた【ウエゼントネル】が地面に転がる。

【ウエゼントネル】は不安定に揺れながら空中に飛び上がり、天に向けて咆哮した。

全身を通常よりも強化された風と雷の鎧が同時に覆い、風の強さに抜け落ちた羽根が七色の嵐を作り出した。

奏でられる音は、相変わらず穏やかに。

時折、くすりと笑うような、高音のトレモロが旋律を彩る。

【ウエゼントネル】とミラは互いに突っ込み、激突する。

美しい七色の風は、毒、麻痺、睡眠の三種類の毒羽根が舞う、死の嵐だ。

羽根が触れ、刺さる度にミラの体を毒が犯す。

だが、それは今更、何の意味もなさない。

ミラを構成する情報は狂ったように書き換えられ、蓄積されている毒さえ上書きされる情報に飲み込まれて消えていく。

風と雷が容赦なくミラの体を傷つけ、残っていた左の翼が舞い散って嵐に新しい色を添える。

翼の変わりに、左肩から長い棘が何本も生える。

斜めにお辞儀をするように体を下げ、棘が【ウエゼントネル】の体を抉った。

【ウエゼントネル】が大きく口を開けて吼えるのと同時にレールガンを放ち、肩を抉りながら砕かれた棘が宙を舞った。

肩の傷から赤い翼が生え、ばさばさと羽ばたいて粉塵を撒き散らす。

背中の右側に並ぶ脚が打ち合って火花を起こし、粉塵爆発を引き起こした。

互いを巻き込んだ大爆発で、ミラと【ウエゼントネル】は逆方向に吹き飛ばされた。

オルガニートに歌わせる譜面は、もう残り僅か。

曲調は相変わらず穏やかで、変調も何も無い。

その旋律は、ミラが持っていたミュリエリアのイメージだ。

いつも優しく、落ち着いていて、ミラを安心させてくれる。

そんなイメージ。

でも、実はそれだけではないということに、最近になってミラは
やっと気がついた。

お姉ちゃんはどこだろう、とほとんど思考が働いていない頭の片
隅で思う。

体のどこかにある目がミュリエリアを捉えたらしく、ミュリエリ
アの姿が脳裏に浮かんだ。

泣きそうな顔で、何かを必死に叫んでいる。

何かを叫んでいるのに、きこえない。

なにも。

わからない。

感覚がぐちゃぐちゃで、体は何一つ自由にならなくて。

手を動かそうとしたら翼が動いて、足を動かそうとしたら口が開
くような。

ピン、と何かを弾くような音を立てて、オルガニートの演奏が終
わる。

「ミラああああああつ」

クリアに、ミュリエリアの声が届いた。

その声は、悲痛で、泣き出しそうで、もう止めてなんて、ミラを止めていたけれど。

でも、彼女の声はいつだって。

ミラを支えて、背中を押してくれる。

その声を守るために、もう思い通りになっ
て、この命を燃やすのだ

（お姉ちゃん　ちょっと過ぎてるけど、誕生日、おめでとう）

生まれきてくれて、生きていてくれて、ありがとう。

プレゼント、受け取ってくれるかな。

千千ちぢに乱れる思考の最後に、残念だなと思う。

今ならもっと、本当のお姉ちゃんに近いイメージで作れるのに。

もっとずっと一緒にいて、沢山の知らないところを、知りたいの
に。

だけでもう、それは叶わないから。

せめて、

（お姉ちゃん、生きて　　）

ミラの口から、光が放たれる。

それは火でも雷でも水でも風でもない、純粹な力。

破壊の波は【ウエゼントネル】を飲み込み、その体を破壊しつきます。

翼や体は一欠片も残さず消滅し、破壊を免れた角だけが、墓標のごとく地面に突き刺さった。

【人間】の送り込んだ刺客を打ち破ったミラは、ゆっくりと振り返る。

ミュリエリアを筆頭に、仲間たちが駆け寄って行く。

その瞬間、ミラの胸の辺りを、背後から黒い雷が貫いた。

ミラは僅かに身を反らし、ガシャンと。

その身体が、ガラス細工のように碎け散った。

白いような、黒いような、そんな不思議な破片に、砕けた。

破片はふわふわと舞い散り、消えていく。

その後には、何も 死体すら 残らなかった。

「ミ、ミラ……？」

何が起こったのか全くわからないまま、呆然とミュリエリアが名

前を呼ぶ。

「何なのじゃ……！」

そう言っつて、ルーツが見上げた空には、新しいゲートが開いていた。

そこから、新たな龍が姿を見せていた。

見た目は、【ミラルーツ】と全く同じ。

ただ、色だけが違う。

その色は、黒。

【ミラボレアス】の黒とも違う、不気味な黒だ。

妙な光沢があり、おおよそ自然界に存在する色とは思えなかった。

黒い龍は、ただ空中に佇む。

そして、口から黒い光を放った。

雷のようにジグザグに曲がる光。

ルーツが盾になろうと前に出　カシヤンと。

黒い雷に貫かれて碎け散った。

【この世界ではあらゆる攻撃を受けないというプログラムごと、】

ミラルーツ】は砕かれた。

ルーツを貫いた光はそのまま後ろに抜け、

ガシャン、カシャン、ガシャン　と、建物も草木も【進種】たちも、全てが一緒に砕かれた。

黒い雷は何にも阻まれぬまま大地に突き刺さり、ガシャン。

余りにも呆気なく、大地が砕けて消えた。

「これは、初めて見ますね。ミラルーツと似てますけど」

ディスプレイの中の黒い龍を見て、女性が言う。

「そりゃ似てるでしょ。色をネガポジ反転させただけなんだから。名前は……そう、破解龍ネガルーツってところかな。

祖と対をなす、終焉の龍さ」

「またいい加減な……」

「まあ、単なるプログラムの出力デバイスだからね。AIも入っていないよ」

カタカタとキーボードを叩きながら男が答える。

「どうやら、直接【ネガルーツ】を操っているらしい。」

「プログラムというと、今送っているものですか。結局、全部削除なさるんですね」

女性がそう言つと、男は一度手を止め「うーん」と唸つた。

「君は削除と言つけどね、本当は少し違うんだよ」

「え？」

「君は、この内側の世界がどうやって作られているか知ってるかい？」

「いえ、そういう専門的なことは」

ディスプレイを示して聞く男に、女性が首を振る。

「それじゃあ教えてあげよう。この世界は、カオスを分化させることで成り立っているのさ」

「カオスを……分化？」

「そう。カオスとは渾沌、つまり、全てになることができるが、それゆえに何でもないもの。」

それを、事細かに分けることで、個を判別しているんだよ。物質から能力まで、全てはそうやって作られている」

「はあ………？」

よくわからないという顔で、女性が首を傾げる。

「うーん、じゃ、わかりやすく言おうか。例えば、『植物』という大きな括りがある。

それは、『野菜』と『果物』に分化させられる。

そして、『果物』を更に分化すると、『リンゴ』や『バナナ』に分けることができるだろう？

それを、世界の全てでやっているんだ」

「ああ、そういうことですか」

「そして、その分化の結果は、『1』と『0』、つまり『ある』『ない』によって保存され、それが個を形成する境界になっているんだ。

リオレウス亜種なら、リオレウスで『ある』、リオレウス原種では『ない』、リオレウス亜種で『ある』、リオレウス希少種ではない』という具合にね。

正確に言えば、境界のバイナリプロットは全事象について行われているから、リオレウス亜種の境界でもわざわざ『植物』では『ない』なんてことまで判別しているんだけどね。

じゃあ、この境界を破壊してしまうとどうなると思う？」

「それは……個がなくなってしまうのでは」

「その通り。先の例で言えば、『リンゴ』と『バナナ』は一つ境界を破壊すると『果物』として同じ存在になる。『リンゴ』＝『果物』＝『バナナ』というわけだ。

この現実では、そう言ったって、『リンゴ』と『バナナ』は別物だけど、この世界の中では違う。境界がなくなった瞬間、『リンゴ』と『バナナ』は全く同じものになるんだ」

「では、今行われているのは削除ではなく……」

「そう、境界を破壊して、存在を分解してしまうことによって、世界を破解しているんだ。」

全てで『ある』が全てで『ない』世界へとね。

分化境界が働かない限り、『存在』と『非存在』だからデータ量は0。

実際のところ、容量と言うのは、分化境界プロットのデータの大きさだからね。

進化は多様性を与えるから、世界の全ての存在のバイナリプロットに判断すべき項目がどんどん追加されていく。予想よりは随分早かったけど、この終わりは想定されていたんだよ。

何にせよ、これで問題は解決だ。後で地形なんかを再分化させる手間が増えてしまったけどね」

そう言っつて、男はまたキーボードを叩き始めた。

黒い雷 分化境界破解プログラム が世界を破解する。

空が天頂部からひび割れ、色を失いながら崩壊を始めた。

深深と、雪のように、白く黒い欠片が降ってくる。

白いがゆえに黒くも見え、黒いがゆえに白くも見える、そんな不思議な色で。

それは、よく見ると数字の『1』と『0』の形をしていた。

崩壊した世界の設計図が、大地を埋め尽くしていく。

やがて、空は崩れ、大地は砕け、その全てが形を失って。

動物も植物も鉱物も【原種】も【進種】も、その全てが一つにな
って。

そして、世界は還る。

何物にも染まる純白でありながら、何物にも染まらない漆黒でも
ある世界。

世界の原初たる、渾沌へ。

0
NEXT>最しゅうwa「11001101100100110011001
1011100100111001011101000100111001

第二十五話「Re 世界の終わる日」(後編)(後書き)

今回の理論は完璧に捏造です。

この作中においてのみ正しいといふことをお忘れなく。

最終話（前編）

『0』または『無限』。

これは神を現す数値だ。

それは、存在しないものを存在させる値だからである。

『無限』とは最大の値。

『1 + 1 + 1 + …』と繰り返して行った、その果てに存在する値。

しかし、そんな値は実際には存在しない。

一に一を一万回加算した数は一万。

一億回加算した数は一億。

一京回加算した数は一京でしかないのであり、『無限』という値は概念上にしか現れない。

しかし、『無限』は確かに存在している。

『0』とは存在しないことを表す数字だ。

だが、本来ならば存在しないものは存在しないはずである。

つまり、『0』などという値は存在しない。

しかし、『0』は確かに存在している。

『無限』は存在するはずなのに存在しない。

『0』は存在しないはずなのに存在する。

この二つは、その在り方からして同値であり、そこには確かに存在するものがある。

そこには我々の知りえない、高次元の存在　　神が存在するのだ。

そして、低次元の存在である我々が理解できる一端が『0』あるいは『無限』として現れているのである。

故に、この問題を考えるためには、視点の次元を変える必要がある。

そうした視点で見れば、『0』と『無限』は同値であるが、次元の位相として『無限』が上位にあることがわかる。

なぜなら、前述の通り『無限』の値を得ることは出来ないが、『0』の値は『1 - 1』で簡単に得られるからだ。

これは、『0』が『無限』よりも理解しやすい形で、高次元存在を表しているためである。

そのため、『0』は『無限』と同値でありながら、『無限』は『0』よりも大きい。

いささか陳腐な言い方になってしまいが、神の力の一欠片を示すのが『0』であり、神の力の一部分を示すのが『無限』なのだ。

神の力という意味では同一であり、しかし、大きさが異なるのである。

私は『0』をアイン。『無限』を『0』を二つ並べた形『
』と表し、アイン・ソフと名づけた。

そして、その先には在るはずである。

『0』を三つ並べて表記すべき、神そのものの力『^{アイン・ソフ・オウル}無限光』が。

そこにたどり着くためには、解き明かさなければならぬ。

世界を動かす神の理、『^{ルール・イレブン}世解十一式』を。

(神理学者ゾハル著 『^{神の数的証明および高位次元に関する考察}』より抜粋)

< Monster hunter try was dele

N
o
d
a
t
a
.

t
e
d
.

本当に？

私は、嫌だよ。

静かな水面に落ちた水滴のように、その声は波紋を広げた。

波は響き、そして、返る。

そうじゃな。

妾も、嫌じゃ。

気がつくくと、ミラは白い空間に立っていた。

何もないように見えるのに、立っている地面の感覚は不思議と存在する。

ミラの目の前に、人の姿のルーツが立っていた。

「ミラ。妾は、こんな終わりを認められはせん」

「はい。私もです」

「確かに、全ての物は消えた。じゃが、それでも全てが無くなったわけではないのじゃ」

「ここに在る、私たちのように、ですね」

ミラは視線を周囲へと向けた。

そこには、無数の人々が存在した。

こんな終焉を認められない、生きたいと望む人たちが。

だが、その体は幽霊のように半透明で、不安定に揺れている。

いるはずの顔を捜すのは諦めて、ミラはルーツへと向き直った。

「どうして私たちはこうやって話せてるんだろ？」

「妾もそなたも、世界の理に近い存在じゃからじゃろうな。

E 因子。あれは世界を構築する理の一つなのじゃ」

「そっか。私はそれを、ルーツさんにたくさん貰ったから」

「そういうことじゃの」

ルーツは頷き、「さて」と呟いた。

「ミラ、後を託してもよいかの？」

「え？」

「そなたに、妾の力を受け取って欲しいのじゃ」

ルーツはそう言って、自分の胸元に両手をかざした。

胸の内側から光が漏れ、そこから何かが出てくる。

小さな赤い八面体の結晶を二本の金色のリングが取り巻いている
不思議な物体だ。

原子の構造モデルに似ているといえれば似ている。

「これが妾の核、ルーツプログラムじゃ」

「ルーツプログラム……」

「ミラ。これを、受け取ってくれ」

手の平の上にルーツプログラムを浮かべて、ミラに差し出す。

「え、でも、それじゃルーツさんが……」

ルーツは、これを自分の核だと言った。

彼女を構成する主要な部分のはずだ。

「よいのじゃ。妾はもう、十分に生きた。

それに、今も妾の想いは変わっておらんからの」

「ルーツさんの、想い？」

「ミラバルカンのときと同じじゃ。妾には出来ぬことを、そなたは成すことができる」

ルーツは、優しい瞳で周囲の人影を見渡した。

近くにいる一人の男に目を止める。

「こやつはシュレイドの近くに住んでおっての、ハンターを観測しておるとよく見かけたものじゃ。」

その嫁がもつたいないほどよく出来た娘でな、息子がまた可愛らしいのじゃ。

む、よくよく見ればその老人はいつかの男か……年をとったの」

ルーツは、周りを見回しながら知った顔を見つけてはミラにエピソードを話す。

そして、不意に真剣な顔になると、ミラに頭を下げた。

「長く見守って来た……皆、妾の愛し子じゃ。」

頼む、ミラ。皆を、救ってくれ」

「ルーツさん……」

ミラは、その姿に、自分の知らない母の姿を見た気がした。

我が子のために命を賭けられる、母親の愛情。

それは多分、ミラがミュリエリアを守るために命を賭けたのと根本は同じで。

だからわかる。

ルーツは、この選択を変えたりはしないだろうと。

「……わかりました。私が、助けてみせます」

「……そうか」

ルーツが顔を上げ、ルーツプログラムを差し出す。

「すまぬ。またも過酷な戦いをそなたに強いてしまう……そなたとて、妾の子だと言っのに」

顔を曇らせるルーツに、ミラは「いいんです」と首を振った。

「私、嬉しいんです。私の大切な人たちを守る力を、ルーツさんの大切な想いを託して貰えて」

ミラが差し出した手に、ふわりとルーツプログラムが移動する。

それを胸元に押し当てると、ループプログラムはミラの中に吸い込まれた。

外見上は全く変化は無いが、その内面は、大きく作り変えられていく。

ミラは、自分の手を見下ろす。

新しく知覚した情報ちからに、戸惑っているようだった。

「ループプログラムはE因子を制御する。今のそなたなら、暴走は起こらんじやろう」

そう言うルーツの体が、半透明に薄らいでいく。

ループプログラムという理を失い、他の進種と同じようになっていた。

「そして、それだけではない。もう、わかっておるのじゃな？」

「……はい」

神妙な顔でミラが頷く。

受け取った力の大きさを感じる。

「大丈夫、かな。私、こんな力……」

「案ずるでない。そなたなら、使い道を誤ったりはせぬ。」

そなたの心が望むままに　　行け、進祖龍よ！」

力強く断言し、それっきり、ルーツは他の人と同じようにぼんやりした顔で固まってしまった。

「ルーツさん……」

ミラが呼びかけても、もう何の反応も返してくれない。

「っ……」

急に不安が高まり、ミラは思わず周りを見回した。

ミュリエリアや仲間の顔を見たら、少しは安心できるのに。

だが、ここには世界中から集まった無数の人がいるのだ。

とても、その中から探し出している暇などない。

(しっかりとしないと……私がみんなを助けるって、約束したんだから)

ミラは、心の中で自分に言い聞かせる。

そして、覚悟を決めて、呟いた。

「ツーカーリア ブレイクスル
二式証解、超克」

「ツークリア二式証解、ブレイクスルー超克」

完全に分解された世界に、声が響く。

白く黒い空間にループプログラムが浮かび上がり、それを中心に上下に二本ずつの光が伸びる。

光は絡み合って二重螺旋を描き、光の中に『1』と『0』が刻まれていく。

命の設計図 分化境界プロットだ。

背の高さ、顔の形、髪の色、能力……。

全てが事細かに判別され、全てである渾沌から唯一を導く。

背中の中ほどまである純白の髪。

銀色の瞳。

小柄な体を包むのは、白銀に輝く鎧 と言つよりは、服と鎧を合わせたような物。

鎧衣よろい、とても言えば良いだろうか。

金文字で書かれたループプログラムと【E因子】の構成式が空間を踊り、初めと終わりが接続されることによって円になる。

文字の円は高速で回転しながら演算を開始し、高速で巡る文字は残像を残して円環のようになった。

二つの式は二つの円環となり、一点を触れ合わせて『』の紋章を作る。

そして、『』の紋章は、少女の背中に翼のように浮かんだ。

ゲームでしかない世界を、不完全ながらも現実とした十一のプログラム中、進化に関わる二つ。

【ミラルーツ】に託されたそれと一体となることで、少女は神へと近づいた。

種は【ミラアーク進種】。

名を、ミラ。

【ネガルーツ】が、操作主の動揺を反映して妙な拳動をとった。

それくらい、ありえない。

ありえないことが、起きていた。

「行くよー!」

ミラが両手を左右に広げる。

右手に火球、左手には風が巻き起こった。

【リオス進種】と【クシャルダオラ進種】の能力の同時発動。

放たれた火と風は、一つに交わって炎の竜巻となり【ネガルーツ】を包み込む。

だが、動揺から立ち直った【人間】が【ネガルーツ】を操り、黒雷で炎を破解する。

【ネガルーツ】の口から、終焉の光が放たれる。

ミラは空を駆ってそれを躲す。

さっと、手が掲げられ、無数の紅い火球が流星のように【ネガルーツ】に降り注いだ。

【ミラバルカン改】の【ガイアタイス攻性プログラム】だ。

それが、ミラの得た新たな力。

神の力の一部を発現させる、【アイン・ソフ無限】という名の能力。

それは世界の全ての情報を本のように閲覧する力。

ミラ自身には無い因子だろう、滅んだ種的能力だろうと記録から引き出し、強化した変身能力によって発現させる。

強化された変身能力は、一々書き換えることなく能力を発動させられる。

同時に複数の能力を使うことも可能だ。

爆炎から【ネガルーツ】が飛び出し、ミラに雷を放つ。

ミラはそのジグザグの軌跡の間を縫って【ネガルーツ】へと翔ぶ。

ミラの目的は、世界を再構成すること。

【ネガルーツ】に消されてしまった生き物や大地の分化境界プロットを閲覧し、ミラ自身を再構成したのと同じように渾沌を書き換えることで、破解された世界を作り直す。

例え、それにどれだけの時間がかかろうとも。

だが、そのためにまず、全てを分解する黒き龍をこの世界から排除する。

青い雷が黒い雷と交錯して奔る。

数本は破解されるが、滅びを抜けた雷が【ネガルーツ】を打つ。

それほどのダメージではないが、目的はミラから目をそらさせることだ。

【ネガルーツ】目がけて急降下するミラの腕には、【ザミ進種】の鎌が光る。

接近を察知した【ネガルーツ】が勢いよく顔を上げて黒雷を放つ。

それを受けて破解される、氷の板。

光を制御して、姿を消しつつ鏡像を作るといふ荒業をやったミラが、【ネガルーツ】の下から急上昇する。

【ネガルーツ】とすれ違いざまに鎌の刃が走り、【ネガルーツ】の頭の前半分が斬り落とされた。

普通なら間違いなく致命傷。

それを確認しようと、ミラが振り向く。

「……え？」

そこにあっただのは、全く無傷な【ネガルーツ】の姿。

その口から、破解を引き起こす黒い雷が放たれる。

ミラに、それから逃れる術はなかった。

「終わったね」

倒される前のセーブデータを読み込んで【ネガルーツ】を蘇らせた男が呟く。

破解したはずのキャラクターが再生するという妙なイレギュラーがあっただが、また消してしまえば同じだ。

データは取った。

気になるなら後でいくらでも調べられる。

「そうですね。ランチには間に合いそうですね……あら？」

助手の女性が、ディスプレイを覗き込んで不思議そうな声を上げる。

「当たってないですよ？」

「何だと!？」

確実にミラを捉えるはずだった黒い雷は、ミラの手前で何かを受け止められた。

せめぎ合いは一瞬。

黒い光はあらぬ方へと捻じ曲げられる。

ミラの目の前に、きらきらと光る何かがあった。

【ネガルーツ】が黒雷を放つが、ミラを守るように周囲を取り囲む光に弾かれる。

全てを破解するはずの攻撃が、通用しない。

ミラは、自分の周りを漂う光を見て、泣きそうな笑顔を浮かべた。

「お姉ちゃん、みんなも……こんなところに、いたんだ」

「何でだ？ 何で、破解できない！？ こいつらは何だ！？」

理解し得ない事態に、男が声を荒らげる。

その横で、至極冷静な顔をして女性が言う。

「もしかして、これは心じゃないですか？」

「こ、心だとお」

普段、理詰め動くプログラムの相手をしている男には、にわか
に理解し難い話だった。

「私たちの技術は、モラルを考えなければ人間の製造を可能にして、
思考さえも支配できるようになりました。

でも、未だに心は謎に包まれたまま。それは、私たちの理論では
分解は出来ないのでは？」

「そんな馬鹿な……。心なんて、在るんだか無いんだかわからない
ようなものが……」

思々しそつに眩くと、男は凄いスピードでキーボードを叩き始めた。

ミラを守るように漂う光。

それは、ミュリエリアや仲間たちの心だ。

一個の存在を、その存在たらしめるもの。

心には、ロジックは通用しない

心が放つ、『いのちのひかり』。

それが不純物となり、分化境界の破壊を妨げたのである。

「皆の心が、私を守ってくれてるんだよね。ありがとう……」

『ふざけるな!』

突然、そんな文字が空中に浮かんだ。

【人間】 同士がゲーム内で会話をしていたチャットウィンドウを使って、【人間】が言葉を送ってきたのだ。

『作り物の分際で、何が心だ!』

「人間……」

ミラは、【人間】が声を送ってきたことに驚く。

だが、その言葉の内容には、少しも揺らされることはなかった。

作られたとか、そんなことはもう、とっくに受け入れた話だ。

そして、それでもなお、生きていると、心を信じたのだから。

「私たちにも、心はあるんです」

『ああ、そうか。でも、そんなことはどうでもいいんだよ』

『早く仕事を終わらせないと、ランチを食べにいけないんだ』

『心かどうかは知らないけど、境界を崩せないという現象は認めて
る』

『だから、別の方法を使うことにしたんだ』

『こいつは外からプログラムを送り込んで発現させる装置』

『別に、分化境界破壊しかできないってわけでもないんだよね』

『外部からプログラムを送り込みさえすれば、こいつは全知全能
神なんだよ』

次々にウィンドウが開いて言葉を並べ、それが一斉に消える。

そして、新しい一つのウィンドウが開いた。

『絶対支配・火』
エンピアル コロナ

【ネガルーツ】が口を開き、そこから雷ではなく真っ白な炎を吐き出した。

いや、それは果たして炎と呼べるのだろうか。

触れたものをプラズマ化させ、熱波だけで湖を干上がらせるような、創り出された超高温の何かだ。

【人間】は、ミラをごく普通に殺すつもりなのだ。

心を残すことも出来ない分、破解されるよりも性質が悪い。

ミラは必死に炎から遠ざかり、【ウカムルバス進種】の力を全力で使って幾重にも氷の防壁を張る。

炎から放たれた熱波が氷を舐め、水の状態を飛ばして水蒸気に変える。

数秒で高温の蒸気がミラを包み込む。

【ヴォルガノス進種】の能力が無ければ、数秒で蒸し上がっていただろう。

「これが……神」

高温の蒸気の中で冷や汗を流し、ミラが咳く。

これだけの力を見せ付けられれば、神だという言葉にも納得する
しかなかった。

「こんなの……どつすれば……」

今のミラは、確かに強大な力を持っている。

世界の中では何者にも脅かされないだろう力だ。

しかし、この世界の外の神は、それよりも遥かな高みに君臨して
いた。

（大丈夫よ、ミラ）

ふわりと、ひかりがミラの心に触れた。

（一人じゃない。そうでしょう？）

「お姉ちゃん……。うん、そうだよね」

ミラは、頷き。

「お姉ちゃん、みんな……私に力を貸して！」

そう言った瞬間、ミラは超克を解いた姿で、フレイクスルルーツと話した白い
空間に立っていた。

今ならわかる。

ここは、消えなかった人たちの心が集まって作り出した空間なのだ。

その証拠に、人の姿になった仲間たちが、ミラを囲んで立っていた。

「僕のが、どれくらい役に立つかわかりませんが、使ってくださいー！」

「ったく、仕方ねえな。俺が手伝ってやるんだ、負けんなよ」

ミラに声をかけて、ラキとエンダが手を繋ぐ。

「頑張つて、ミラちゃん。私たちの力、見せ付けてやるっ」

そこにベルゼラが手を繋ぎ、

「みや、もちろんお手伝いします　ご主人様！」

「騎士と主人は一蓮托生……いえ、友達に手を貸すのは、当然でしたわね」

「泳げなくても、水を渡る方法はいくらでもあるっす！　あきらめないでくれっす！」

「溶岩で溺れてたときは、こんなことになるとは全然思わなかったな。沈んでたら、また引っ張ってやるよ」

メイミイ、ルティエ、グレイ、アンゼリカとどんどん手を繋いでいく。

「おつそいのよ！ 何でも、一人でやるうなんてするんじゃないわ」

「ミラは僕らを何度も助けてくれたよね。今度は、僕らの番だよ」

セレスティアとセレスタイトは向かい合って重ねた手をアンゼリカと繋ぎ、逆の手はラキの空いている手に繋がる。

ラキとエンダの手、ベルゼラとメイミイの手、メイミイとルテイエの手、ルテイエとグレイの手、アンゼリカと【リオス進種】姉弟の手、【リオス進種】姉弟とラキの手の部分に角のある、六角形の輪郭が完成したことになる。

六角形は細長く、ラキと【リオス進種】姉弟の手、メイミイとルテイエの手を繋いだ線で線対称になっている。

「この戦いは決して負けられない。守るために。俺の命、預けたぞ」

ルクスは六角形の内側に入り、ラキとエンダの繋いだ手、アンゼリカと【リオス進種】姉弟が繋いだ手にそれぞれ手を重ねる。

「怪我人が出ないにこしたことはないが、怪我也出来なくなるよりはましか。世界を、取り戻さなくてはな」

エンダ、ベルゼラが繋いだ手とグレイとアンゼリカが繋いだ手に、六花が手を重ねる。

「最近わけわからんことばかりで、嫌になるっての。これで最後にしようぜ」

レグルはベルゼラとメイミィ、ルティエとグレイが繋いだ手に手を重ねる。

「……ミラさんになら、喜んで力貸すです」

「ミラお姉ちゃん、頑張つてね！ 私も、頑張るから！」

「気づいてくれないかと思ったよ。もっと早く呼んで欲しかったな。でも、良かった、呼んでくれて」

石楠花とグラキシアは手を繋ぎ、石楠花の空いている手はベルゼラ、メイミィ、レグルの手に重なる。

グラキシアは、その反対、グレイ、ルティエ、レグルの手に手を重ねた。

そして、石楠花とグラキシアの繋いだ手と、メイミィとルティエの繋いだ手に、セアラが手を重ねた。

「俺サマの世界を消しちまうたあとんでもねえ野郎だな。いっちょ灸を据えてやるうぜ！」

ダルブルグはラキ、エンダ、ルクスが重ねた手に片手を重ね、

「あんな悪者、シャキーンって倒しちゃおうね。頑張るよ〜」

リーヤはその対称の位置で、アンゼリカ、【リオス進種】姉弟、ルクスと片手を重ねる。

「私たちが繋がることで、回路を作るのね。興味深いわ。戻ったら、

一緒に実験しましょ」

華霞はエンダ、ベルゼラ、六花と、片手を

「どうしてもって言うなら……やっぱり言わなくても力を貸すの！」

「俺は茉莉を守ると誓った。必要なら、俺の力を使え」

柊也と茉莉は向かい合って手を繋ぎ、片方の手をグレイ、アンゼリカ、六花に重ねる。

「某が剣を振るい続けたのは、この戦いに望むためだったのかもしれぬな。我が命、剣と成して、参る！」

ベガードは、片手をベルゼラ、メイミィ、石楠花、レグルが重ねた手に、

「ボクがせっかく作った地図を無駄にするのは許さないぞ！」

エルミナはルティエ、グレイ、グラキシア、レグルが重ねた手に片手を重ねる。

「また勝手にいなくなりそうになってましたよね？ 戻ったら怒りますから」

フェルルートは、石楠花、グラキシア、セアラの手に片手を重ねた。

上から見れば、六角形の内部に、繋いだ手で複雑な線が引かれているように見えるだろう。

華霞が言った通り、これは回路だ。

「ここるところとここところを繋ぎ、一人では処理できない計算を行うための、演算装置。」

「ミラ」

最後に残ったミュリエリアが、ミラの右手を握る。

「あなたに会ってから今日まで、色々なことがあったわね」

「うん、そうだね」

手を引かれて、六角形の中心に向かう。

「苦しいこともあったけれど、全部乗り越えて、今日まで来たの。まだ一年にもならないくらい短い間なのに、楽しい思い出は沢山あるわ」

「私もだよ。お姉ちゃんと一緒になら、何だって楽しかった」

回路の中心で、足を止める。

「偶然に訪れた、奇跡みたいな出会いだったのよ。でももう、あなたがいけないことは考えられなくて。」

ミラ。私たちに訪れた奇跡の子。Miraculous

私たちの想い、心、力　ありったけの全てをあなたに託すから」

ミラの片手が、セレスティア、セレスタイトとラキの手に重なる。

ミュリエリアの左手に、片手の空いていたフェルルート、ダルブルグ、華霞、ベガード、エルミナ、茉莉と柊也、リーヤの手が重なり、回路が完成する。

手から手へ、光が巡る。

繋いだ手と手は絆、巡る光は心。いのちのひかり

目に見えず、形も無い。

けれど、確かに存在する。

その存在と非存在の狭間に、神が棲むのだ。

接続された心が世界を演算し、全ての事象に解を与える。

世界に隠れる神の理を、ことわり証明する。

重なった手の中から金文字の式が溢れ出し、回転することで円環を作り出した。

第一式・王冠ケテル 食物連鎖。

第二式・知恵コクマー 繁殖。

第三式・理解ヒナー 天体。

第四式・慈悲ケセド 回復。

第五式・峻巖ゲブラー 氣候。

第六式・勝利ネッアフ 成長。

第七式・栄光ホト 地形。

第八式・基盤イエソド 水の循環。

第九式・王国マルクト 天敵。

最も多くの手が重なった位置には、第十式・美ティフエルト E因子

そして、最後の第十一式・知識グアトは、ミラの中に。

心しんは神しんに通じ、神理を解く。

十一の神理を、二十二の種との絆の路が繋ぎ、大樹に似た紋章を完成させた。

「頑張つて、ミラ。私たちの 明日ミライ」

心の世界での出来事は、現実では一瞬だった。

気がつけば、ミラはまだ晴れない水蒸気の中に一人佇んでいた。

ミラを取り巻いていたひかりはもうない。

だが、繋いだ手の温もりは、残っている。

「ルルル・イレブン オールキークリア セフィロト
世解十一式全式証解、生命樹紋展開」

ミラの足元に、仲間たちと作り上げた紋章が光によって描かれる。

それは、神への階。あがほこ

【無限】を、ひかりが支えて、【無限光】へと至る。アイン・ソフ・オウル

「アセンション
神化」

もつもつと立ち込める水蒸気を、光が払う。

そして、その中から、姿を見せる。

金に縁取られた白銀の鎧衣に身を包む、白髪銀眼の少女。

背中にはルーツプログラムの円環が輝き、左右に五つずつの円環が配置される。

円環と円環の間を万象の演算に伴う光が網目のように繋ぎ、翼を編み上げている。

【無限光】によって世界を統べる、至光の神 アイン・ソフ・オウル
種】。
【ミリアーク神

「光あれ」

ぼつりと眩かれた瞬間、全てである渾沌は光と闇とに分化された。

太陽ひかりが生まれ、宇宙やみを照らす。

創世の始まりだった。

最終話（後編）

MONSTER HUNTER EVOLVE
最終話「GENESIS」

映像を早送りするように、超高速で創世が進む。

太陽の周りを回りながら小惑星が衝突を繰り返し、少しずつ大きな惑星へと成長していく。

太陽から数えて三つ目の原始惑星。

そのすぐ近くを、高速で飛翔する白と黒の姿があった。

『絶対支配・光』
エンピアル レイ

「神理 重力」

【ネガルーツ】が、光を集束して槍のように撃ち出す。

秒速三十万キロメートルという速度で突き進む光の槍は、ミラが展開した超重力領域に捕まって消える。

『絶対支配・火』
エンピアル コロナ

「神理

熱量」

白熱する炎を、同質の炎で相殺。

巻き添えを食らった隕石が二、三個、融解して燃え尽きる。

ミラと【ネガルーツ】の戦いは、文字通り人智を超えたスケールで展開されていた。

互いに何万通りのシミュレーションを行い、必殺の攻撃を繰り出すのだが、互いに全能なんでもありなのだ。

予測の中では既に何百回も相手を倒しながらも、決着はつかない。

互いにかかる言葉も無く、ただ相手を打倒することだけに全力を傾ける。

会話などとよけいなことをしている余裕がないというのもあり、立場が違いすぎて会話の意味が無いという理由でもあった。

『絶対支配・息エンピアル
ブレス』

ミラに直接干渉して窒息死させようとするが、それはミラが自身のプログラムに潜ませておいたトラップに引っかかって遮断される。

宇宙空間で戦いながら窒息はないだろう、などと思いつながら、ミラは反撃に転じる。

「神理

電磁波」

電磁波によって物質を振動させて一気に過熱する。

要するに電子レンジなのだが、生物に使えば血液などを沸騰させることができる立派な武器だ。

『エンピアル スキン
絶対支配・表皮』

【ネガルーツ】は皮膚を何らかの金属に変えたいらしい。

マイクロ波を浴びてバチバチ火花を散らす姿を見ながら、ミラはもう一つ使っていた能力を解除する。

完全なステルスによって隠されていた小惑星が、突然宇宙空間に姿を見せた。

原始惑星の直径の半分はある小惑星が【ネガルーツ】を巻き込んで原始惑星に衝突する。

原始惑星は大きく抉られ、大量の物質が宇宙空間に巻き上げられる。

この物質のいくらかはやがて衛星になるのだろう、などと一瞬意識を逸らした瞬間、地表から伸びた光がミラの腹部を貫いた。

「あぐっ」

口腔内に溢れかえった血を吐き出すと、血が球体になって漂った。

意識を閲覧に向けて地表をサーチすると、溶岩の海の上に無傷の【ネガルーツ】を見つけた。

さっきの攻撃でノーダメージというのは考え難い。

またセーブ&ロードで復元したのだろうか。

「反則だよね……」

聞こえない声でばやき、記録から読み出した情報通りに書き換えて傷を治す。

文句を言いつつも、やっていることは【ネガルーツ】と同じだ。

ミラと【ネガルーツ】が決着をつけるには、一撃で終わらせるしかない。

ミラならば、例えば脳を破壊して能力を使う暇を与えずに倒す。

【ネガルーツ】なら、【人間】が送ってくるプログラムを受信する核のような部分があるはずだ。

「神理 反射」

ミラは光を完全に反射する鏡に似た輝きを持つ領域を展開。

【ネガルーツ】が連続して撃ってきた光を跳ね返す。

反射した光は【ネガルーツ】には当たらなかったが、意味が無いと悟った【ネガルーツ】が攻撃を止める。

その場に止まって次の攻撃を受ける前に、ミラは地表に向けて下

降して行った。

隕石が次から次へと激突する原始惑星。

この隕石雨は、他の重力を持つ惑星が完成し、その重力圏に小惑星が捕らえられるまで続くことになる。

衝突のエネルギーは熱エネルギーになり、地表は岩石が溶けた溶岩の海に覆われた。

水蒸気と二酸化炭素を主成分とする大気に覆われたオレンジ色の空からなおも降り注ぐ隕石。

その隕石に紛れて、ミラは地表へと降りてきた。

「神理 ベクトル」

隕石に更なる速度を与え、【ネガルーツ】へと撃ち出す。

【ネガルーツ】はその軌道を解析しつつ回避行動。

先読みしたミラがその先に隕石を飛ばし、さらにそれを読んだ【ネガルーツ】が慣性を無視した動きで躲す。

隕石が溶岩の海へと落着し、百メートルを超える溶岩の柱が上がった。

『絶対支配・溶岩』
エンピアル
ソル
ヤ

溶岩柱がさらに伸び、五指を広げた手の形になってミラに掴みか

かる。

ミラは不定形の翼を羽ばたかせて指の隙間を抜けるが、大きな柱から小さな手が何百本も伸びてミラを付け狙う。

「うわ……気持ち悪っ」

顔をしかめて呟き、「神理 天候」、雨を呼ぶ。

見る間に天空を覆った雲から雨が降り注ぎ、溶岩を冷却する。

冷えて固まった溶岩は、自重を支えきれずに崩壊していった。

雨は地表を冷やし、溶岩を固める。

それによって気温が下がり、大気の主成分であった水蒸気もが一斉に雨となって惑星中に降り注いだ。

地表は降り続けた雨によって水に覆われ、海が完成する。

ミラは雨と共に降る雷を誘導して【ネガルーツ】を狙い、【ネガルーツ】は海中に逃れる。

海に突き刺さった雷に束ねられていたエネルギーは海中に拡散した。

その海の中ではアミノ酸や核酸塩基などの生命を作り出す有機物が合成されていた。

科学的に結合や分離を繰り返していた物質は、やがて自己の形を

持つようになる。

発生した単細胞の生命は、海の中を漂いながら有機物を利用した嫌気呼吸を行って細々と生きていた。

だが、発生した生物の中には、光合成を行う生物も存在していた。

惑星内部の動きが整うことで磁気圏が完成し、太陽風によって運ばれていた荷電粒子が防がれるようになると、太陽の光は有害な物ではなくなり、光合成を行う生物は活発な繁殖を開始する。

それによって、光合成の副産物である酸素が大量に作られるようになった。

だが、この時代のほぼ全ての生物にとっての酸素は細胞を傷つける毒でしかなかった。

『エンピアル
絶対支配・水』 オーシャン

生命が絶滅の危機を迎えた海の上に浮かぶウィンドウ。

そして、ウィンドウとは全く別の場所から【ネガルーツ】が飛び出した。

ミラの背後を取った【ネガルーツ】は、引き連れていた水の刃を撃ち出す。

一瞬にして音速を超える加速をした水の刃は、一秒もかからずミラへの距離をゼロにする。

振り返りもせず、急降下したミラを刃から生まれた衝撃波が切り裂き、引き裂かれた肌から舞った血が白い髪と共に空に散る。

ミラは、風に吹き飛ばされる勢いで反転し、

「神理 引力っ」

【ネガルーツ】の頭上に引力の中心核を形成。

引力に引かれた海が、【ネガルーツ】や周囲に浮かべていた水の刃と諸共に、空へ落ちる。

『エンピアル コロナ
絶対支配・火』

超高熱が一瞬にして水分を飛ばし、塩の柱を砕きながら【ネガルーツ】が飛び出す。

『エンピアル グレイシャル
絶対支配・氷河』

海面すれすれを飛行する【ネガルーツ】の軌跡から氷が広がり、ダイヤモンドダストを散らす氷の槍がミラを狙う。

氷の大地から次々に伸びてくる槍を躲しながら、ミラは【ネガルーツ】の後を追う。

【ネガルーツ】の位置情報を閲覧して捕捉し、槍の動きを予測し、自分にかかる物理法則を制御する。

さらに、事象制御を並列処理し、熱量を制御する。

翼を走る演算光の動きが激しくなり、輝きを増す。

放たれた劫火が槍を溶かし、氷の大地を一直線に溶断した。

氷の下に潜んでいた【ネガルーツ】が飛び出し、半分にされた氷の大地を持ち上げる。

刃渡り一キロメートルを超える氷の大剣。

重さや途中で折れる、などという当たり前は、全く意味がない。

【ネガルーツ】は木の棒を振るのと同じような気楽さで氷剣を振り抜いた。

制御された熱量が氷剣に激突する。

熱を支配するミラの神理と氷の形を保とうとする【ネガルーツ】の支配が、現実を我が物にしようとする情報戦を展開。

理論を矛盾で引き裂き捏造した数値を想定して偽を正に変え、望む事象を導き出す不可視の戦いは引き分けに終わる。

結局、ごく当たり前の現実に落ち着き、氷を溶かすと同時に熱量が奪われる。

液体に戻った海水が海に戻り、紛れるようにミラも海へと飛び込む。

海中からの急襲を狙ったのだが、同じことを考えたのか、行動を予測したのか、【ネガルーツ】も海に飛び込んできていた。

ほとんど成り行きに任せて、戦闘の場は海中へと移る。

『エンピアル
絶対支配・雷』ホルト

水中でありながら指向性を持った雷が放たれる。

拡散していかないのは凄いが、逆に言えば避けやすい。

ミラは海底に向かって身を躲し、深く身を沈めた。

目に見えないほど微細な生物しかいなかった水中は、いつの間にか多彩な動植物の住む世界へと変わっていた。

酸素に適応するために進化した原始生物は、酸素を活動元として利用できる真核生物となり、さらに動物と植物へ分化する。

そして、それまで数十種類しか存在しなかった生物は、一万種を超える数に爆発的に増殖した。

今の水中は、生命の方向性を模索する進化の実験場だった。

奇妙な形をした生物が這い回る海底を蹴り、頭上から放たれた雷を躲す。

背泳ぎをするように視線を上に向け、

「神理 圧力」

【ネガルーツ】に、深度二万メートルにも匹敵する一平方メートル

ルあたり千キロという莫大な水圧をかける。

【ネガルーツ】は効果範囲を振り切って脱出しようとしたが、僅かに遅く、下半身を押し潰される。

紙のように薄くなった下半身から血が噴き出し、水中を赤く染める。

一応血は通ってるんだ、などと埒もないことを考えつつ、急に見通しの悪くなった水中を見渡す。

視認は諦め、位置情報を検索。

思考の一つに発見した【ネガルーツ】は、空中をどこかへと飛んでいた。

押し潰した下半身は完全に復元されている。

「逃げた!？」

泡と一緒に言葉を吐き出し、ミラは海面へと飛び出す。

そこでミラを待ち受けていたのは、【ネガルーツ】の置き土産。

大気中に増加した酸素によって形成されたオゾンの下、空一面を覆う電気の球だった。

電気球が一齐に爆ぜ、落雷が発生する。

狙いも何も無い、広範囲を殲滅する雷撃。

【ネガルーツ】はこれを敷設しつつ、その攻撃範囲から離脱していたのだ。

「っ、神理 確率！」

惑星の表面積の五分の一を覆う絨毯雷撃。

とても逃げる暇などなかったが、ミラは運良くその一つにも当たらなかつた。

ミラは再度【ネガルーツ】の位置を探り、位置関係から進路を割り出すと、その逆方向へと飛ぶ。

両者は惑星を一回りしながら凄まじい相対速度で近づき、大陸同士の衝突による造山運動で生まれた最高峰の上で顔を合わせた。

「神理 斥力」

実際に激突すれば死は免れない。

ミラが展開した斥力場に突っ込んだミラと【ネガルーツ】は、反発力によって雪に覆われた山の斜面へと弾かれる。

『絶対支配・風』
エンビアル エア

「神理 気圧」

斜面を滑り降りながら、風を操る攻撃の応酬。

雪を巻き上げながら、様々な状態の風が吹き荒れた。

その頭上を、鋼色の鱗を持つ姿が過ぎる。

生存競争に勝ち残り、進化の権限を得た、二大生物の一。

ミラは、【人間】が作った設定を下敷きにした創世が、古龍誕生までたどり着いたことを知る。

惑星誕生からここまでの時間に比べれば、この先はあつと言つ間だ。

ミラは翼を大きく広げて斜面から飛び立った。

すぐさま、【ネガルーツ】が後を追う。

飛び去っていく二つの姿を、【ドドブランゴ】に率いられた【ブランゴ】たちが見上げていた。

雪山を離れ、平原へ。

【アプトノス】が群れを作って大平原を行軍し、付き従うように【ケルビ】が跳ねる。

赤い鶏冠を持つリーダーに率いられた【ランポス】たちがその後を追って駆けて行く。

平原を進むと、地を覆う緑が少なくなり、荒涼たる砂の地が広がる。

砂漠を貫く、長い長い石畳。

そこに行く旅人は、【過学】時代の人間だ。

砂の中から【ガレオス】が襲いかかるが、光を放つ銃によって撃退されていた。

少し離れた岩場の近くでは縄張り争いをする【ディアブロス】が角をぶつけあい、【ゲネポス】たちがその周りで囃し立てる。

過酷な環境を【過学】によって克服した人間の都市は、疫病によって滅んだ旧人間の衰退を象徴するように砂に埋まっていく。

時が流れると地形が変わり、流れを変えた川が砂漠から密林へと続く。

川岸を歩いていた【モス】が、川から飛び出した【ガノトトス】に水に引きずり込まれ、近くにいた【ブルファンゴ】たちが牙を振りたてて臨戦態勢に入る。

尻尾に握っていた鉱石を盗んだ【メラルー】を、顔を真っ赤にして怒った【ババコンガ】が追いかけて、巻き込まれた【ゲリヨス】が逃げ惑った。

そんな地上の喧騒を他所に、鳥たちと共に【リオレイア】が悠々と舞う。

口に銜えた獲物は、森の中の巣で待つ子供の餌だ。

その巣に、卵を求めて忍び込む不届き者が四人。

ハンターという名の、二代目の人間だ。

卵を盗んだはいいが、逃げ出したところを【リオレウス】に見つかった。

卵を抱えたまま、のろのろと走っていた一人が【リオレウス】の突進に巻き込まれて倒れる。

荷車を引いた【アイルー】が現れて、それを連れ去っていく。

残った三人の周りにウィンドウが開き、メッセージが飛び交った。

ハンターたちもいつしかいなくなり、ハンターが果敢に挑んでいた塔もすっかり寂れてしまった。

その塔の頂点に君臨する白き龍が光に包まれ、小柄な少女に姿を変える。

二度の主の滅亡で衰退した文明。

それを継承する、【進種】たちの台頭。

【ハンター】や【原種】の脅威にさらされながらも【進種】は生きる。

一所に集まった【進種】は村を作り、家族を作り、

今また一つの命が産み落とされた。

そして、その日から十九年と七日。

一軒の家の扉が開き、一振りの剣を抱えた少女が出てくる。

少女は、眩しげに目を細めて空を見上げる。

そこには、黒い龍と向き合う白い少女の姿。

そこにいることはわかっていた。

心が、繋がっているのだから。

「ミラ！」

名前を呼んで、預かっていた剣を投げた。

ミラの手に収まった【イグスルーヴ】がフライトエッジ気光刃を展開する。

「神理 距離」

【ネガルーツ】との間に存在した距離を一步分に圧縮し、瞬時に間合いを詰める。

『 『

開くウィンドウ。だが、

「遅いっ！」

世界はもう、元通りに再構成された。

世界の創造にリソースを裂く必要が無くなったミラの演算速度は、【ネガルーツ】より圧倒的に早い。

一閃。

光の刃が、【ネガルーツ】の胸部に存在していた『外部との接続』を寸分の狂いも無く切断した。

書きかけの文字ごと、ウィンドウが消える。

【人間】との接続を断たれた【ネガルーツ】は、考えることさえできないただの抜け殻。

「神理 境界」

【イグスルーヴ】が【ネガルーツ】を斬り裂き、神の座から墜ちた【ネガルーツ】は、渾沌へ還った。

【ネガルーツ】の欠片が完全に消えるのを確認して、ミラは体の力を抜いた。

演算光が弱まり、翼が薄くなる。

翼を小さくたたみ、ミュリエリアの隣に舞い降りる。

「ミラ……どうなったの？」

不安そうな顔をしたミュリエリアがミラに聞く。

心が繋がっていると言っても、主となっているのはミラだ。

何もかもが伝わるわけではない。

「終わったよ、お姉ちゃん」

『いいや、まだまだ』

「っ！」

言葉に重なるように開いたウィンドウに文字が躍る。

そして、空に再びゲートが浮かび上がる。

「何度やっても、私は負けません！」

ゲートを睨みながら、ミラが言い返す。

『どうかな？』

『別に勝つだけが勝利条件じゃないだろう？』

二つのウィンドウが文字を躍らせる。

ゲートが開き、そこから何かを送り込まれてくる。

【フルフル原種】に良く似ているが、全体的に偏平なモンスターの

頭にラッパのような部位があり、胸元を大きく膨らませた鳥型の
モンスター。

背中に柱のような突起が並び、ハンマーのように発達した下顎を持つモンスター。

首の辺りまで裂けた巨大な口を持つ、後脚が発達した鱈のようなモンスター。

そんな、見たこともないモンスターたちが次々に送り込まれてくる。

見知らぬモンスターに「何、あれ……」と呟くミラ。

送られてきたモンスターは、情報としてもこの世界に存在していないモンスターなのだ。

全てを知ることができるとは言え、それにはこの世界の内側であるという限界がある。

『この世界は容量の限界を迎えようとしていた』

『ほぼ同じに再構成された今の世界も同様なんだよ』

『こつやって新しい情報を送り込んでやれば、すぐに限界を超える』

『そうすれば、世界は止まり、死ぬ』

『これでお終いだ！……！！……！！』

大量に打ち込まれたエクスクラメーションマークでその策への自信をうかがわせ、ウィンドウが閉じた。

【人間】は、この世界の容量を増加させ、演算停死を引き起こすつもりなのだ。

確かにそれなら、この世界ごとミラを停死させてしまうことが出来る。

演算停死を引き起こすと、OSや接続しているネットワークにも不具合を出す可能性があるが、それは起きた後でも対処できることだ。

【人間】は、そのリスクよりも、この世界を止めることを選んだのだ。

「世界が……止まる……」

ミラは再び翼を大きく広げ、全体を走査する。

容量自体は知りようがないが、確かに、世界の事象演算に過負荷がかかっていた。

このままだと、この世界に起こる現象に不具合が起こるだろう。

その先にあるのは、【人間】の言う通り、世界の終わりだ。

「どうしよう……何とかしないと……」

翼で演算光が明滅し、高速で思考を展開する。

送り込まれるモンスターを倒す？

いや、それは意味がない。一度この世界に入った時点で、そのモニターかどうかを判別する項目が境界に追加されている。

容量増加の原因はそれで、それを消すことが出来ない以上は無意味だ。

【人間】がしたように、境界を破壊してもう一度容量を減らすか？
できるわけがない。論外だ。

一秒に何百の可能性が浮かび、同じ速さで棄却されていく。

そんな速さで思考していると、数秒で一つの方法にたどり着いた。

(……これしか、無いの？)

理論的には可能だ。だが、ミラがそれをやりたくないと思った。

一度保留し、他の方法を探す。

だが、いくら探しても、他の方法は見つからなかった。

そうしている間にも、世界にかかる負荷が増しているのを知覚する。

もう、時間が無かった。

「お姉ちゃん」

「何か思いついたの？」

「……うん」

ミラは頷き、【イグスルーヴ】を差し出した。

「これ……。これは、持っていけないから」

「……何を、するつもりなの？」

ミュリエリアは、【イグスルーヴ】を受け取らずに聞く。

「この世界を、進化させる……ううん、昇華かな。」

E因子とルートプログラムを拡大解釈して上手く適応すれば、この世界を次元シフトさせられるはずだから。

人間の世界とは別の位相になるはずだけど、そこには今よりもずっと広い本物の世界があるの」

「え、え？」

「……いつもと反対だね」

ミラの話の聞いて混乱するミュリエリアを見て、ミラは苦笑する。

背中を揺らして「私も、この羽を消したら全然わからなくなっちゃうんだけど」と呟いた。

「とにかく、そうすればこの世界を救えるんだよ。」

でも……そうしたら、私は……」

ミラはそこで言葉に詰まる。

「『私は』、何？ 何なの？」

「……無理やり進化させたら、新しい世界には沢山の不具合がでるはずだから。」

だから、私は世界と一つになって、その処理をお手伝いしないと
いけないの」

「そんな……」

「これしか方法がないんだよ。」

だからお姉ちゃん、これは、お姉ちゃんに返すね」

ミュリエリアの手を取って、【イグスルーヴ】を握らせる。

その手を、ミュリエリアが握り締めた。

「ダメよ、そんな方法！ あなたがいなくなるのは考えられないっ
て、言ったでしょう？」

最近のミラったら、いなくなっただけで、もう何度目だと思
ってるの？」

「……あはは、ほんとだね。でも」

ミラは、ミュリエリアの手を、そつと解いた。

感情を何もかも飲み込んでしまったような、透明な笑みを浮かべ
る。

「ちゃんとお別れできるのは、初めてだよ」

「ミラ……」

「言いたいことはいっぱいあるんだけど、全部言ったら終わらないから、一つだけ、言っね」

ミュリエリアから一歩下がり、頭を下げる。

「お姉ちゃん、ありがとう」

そう言って、ミラは背中を向けた。

「……っ、さよなら」

その言葉がスムーズに紡がれていたら、ミュリエリアは呆然としまま見送ってしまったたかもしれない。

でも、別れを告げるミラの言葉が、少し震えていたから、

「ミラ！」

ミュリエリアは、弾かれたように駆け出して、その背中に抱きついた。

「おね、ちゃん……お願い、離して……。それじゃあ、行けないよおっ……」

もう隠し切れない涙声で、ミラが言う。

体は小刻みに震える体に回した手に、熱い雫が落ちた。

「ミラ、どうしても……どうしても行かないと行けないの？」

「そっだよ。これは……私にしかできない、から。」

お願い、私　お姉ちゃんには、背中を押ししてもらいたいの……」

「……わかったわ、でも、お別れはしないわよ」

強く抱きしめたミラの肩に顔を寄せて、ミュリエリアはそう言った。

「待ってる、ずっと待ってるから、帰ってきなさい」

「おねえちゃ　」

ミラが反対するより先に、とん、と背中を押した。

「行ってらっしゃいっ！」

涙が溢れて声がなくなる前に、想いを込めて、叫ぶように紡いだ。

ミラは、齒を噛み締め、振り返りそうになる体を押さえて、空へと踏み切った。

「行ってきますっ」

一言だけ残して、ミラの体が消える。

距離を圧縮して飛んだミラは、一飛びに宇宙空間まで到達する。

空の果てで、ミラは息を呑んだ。

【ネガルーツ】との戦いの最中にみた、溶岩に覆われた姿はもうない。

水の青、草木の緑、雲の白に彩られた、美しい惑星の姿がそこにあった。

生命の溢れるこの星は、決して、喪ってはならないものだ。

「神理」

能力を限界まで使って演算が行われ、翼が金色に輝く。

翼は大きく、大きく広がり、宇宙へ広がる。

そして、

「
EVOLVE
進化」

そつと腕で抱きしめるように、翼が世界を包み込んだ。

「なあ！？」

ガタン、と椅子を倒しながら、男が立ち上がる。

「どうしました？」

少し離れた自分のデスクで書類を整理していた女性が聞く。

「消えた！」

「はい？」

「だから消えたんだよ！ TRYが！」

突然、【MONSTER HUNTER TRY】の全データがなくなつたのだ。

演算停死とは違う。

消滅だつた。

「よかつたじゃないですか」

「……何がだよ？」

無然としてそう聞くと、女性は不思議そうに答える。

「何って、これで仕事が進むじゃないですか」

「……あれ？ そうだな」

彼らの目的は、新しいゲームを作ること。

【MONSTER HUNTER TRY】が消えてしまったところで、多少手間が増えるだけで、実は何の問題も無かった。

ミラに勝つのに躍起になっていたせいで、手段と目的が摩り替わっていたらしい。

端的に言えば、『ゲームに夢中になっていた』というところか。

「よし、じゃあ午後に備えてランチを食べに行くか。一緒にどうだ？」

「ええ、お供します」

二人は連れ立って部屋を出て行く。

【人間】にとっては、その程度の話だった。

NEXT>「エンディング」

最終話（後編）（後書き）

作中では一貫して人間が悪者なんです、私は別に人間嫌いではないですよ。

むしろ、どんな困難も人間同士力を合わせればなんとかなる、とかちょっと夢見てる人です。

作中では、進種が人間の扱いなので、人間は相対的に別の存在になっってしまったんです。

メインのストーリーとしてはこれで完結です。

キャラクター図鑑（追加）

名前：無し

種族：ネガルーツ

体力：

膂力：

敏捷：

知力：

技量：

能力：【分化境界破解】

能力詳細：【分化境界破解】

あらゆる個を確立させる境界を破解し、0 || 1の渾沌へと世界を還元する力。

【人間】が送り込んできた最後の龍。

その存在は【人間】が世界の中に割り込ませて世界を改変するプログラム出力デバイスとしての役割に過ぎない。

名前：ミラ

種族：ミラアーク進種

体力：A

膂力：A（基礎値）

敏捷：A（基礎値）

知力：A

技量：S

能力：【変身】 【龍化】 【龍装】 【超克】

詳細：【超克】
フレイクスルー

全ての能力が極限にまで上昇する。

ミラオリジンが進化を司るループプログラムと一体化し、進化した姿。【進祖龍】
しそじゅう。

ループプログラムは世界の根幹をなすデータだったため、世界の理の一端を理解し、更なる強化形態への【超克】も可能となった。

名前：ミラ

種族：ミラアーク進種（イクシード）

体力：S

膂力：S（基礎値）

敏捷：S（基礎値）

知力：A

技量：S+

能力：【変身】 【飛行】 【龍化】 【超克】

名前：ミラ

種族：ミラアーク進種（龍化）

体力：S+

膂力：S+

敏捷：S

知力：A

技量：A

能力：【変身】 【飛行】 【超克】

完全な進化によって、問題なく【龍化】が使えるようになった。

名前：ミラ

種族：ミラアーク進種（ブレイクスルー）

体力：S

膂力：S+

敏捷：S+

知力：

技量：S+

能力：【飛行】 【無限】

詳細：【無限】
アイン・ソフ

世界の構成を識る能力。

姿の変化なしに、全てのモンスターの能力を自由に使う事ができる
（ナルガクルガの【刃翼】などは変化する）。

複数の能力の同時展開も可能になった。

【超克】の能力を発動中のミラ。

白銀の鎧を纏い、の形の二重の光の円環を背負う。

その円環は、世界の真理を示す十一の公式のうち、進化に関する
二つの式が高速で回転することで成り立っている。

世界にアクセスして情報を得るため、あらゆることを知ることがで
きる。

この世界には現存しないモンスターの能力も、データとして存在し
ているなら使用可能。

名前：無し

種族：外よりの神ネガルーツ

体力：

膂力：

敏捷：

知力：

技量：

能力：【分化境界破解】 【絶対支配】

能力詳細：【絶対支配】
エンピアル

世界の全てを支配する力。

名前：ミラ

種族：ミラアーク神種

体力：

膂力：

敏捷：

知力：

技量：

能力：【無限光】

詳細：【無限光】
アイン・ソフ・オウル

世界の全てを支配する力。

ミラが最後に至った姿。

新たなる世界の神であり、無限を超える全能の力を持つ。

背中に第十一式の円環を背負い、そこから左右に五つずつの式を展開、その間を網目のように世界を演算する式が流れ翼を形作る。

ミラが、【いのちのひかり】 未来を求める人々の祈り、想い、
望みなどの心 を取り込むことで世界の神理を読み解き一時的に
姿を変えた状態であり、ミラ単独でこの姿になることはできない。

エンディング

世界を賭けた、【人間】との戦いから一年。

進化した世界は、人間の手を離れ、今も続いていた。

MONSTER HUNTER EVOLVE
「エンディング」

キィ、と蝶番が軋む音がする。

扉を開いて、一人の少女が中に入ってきた。

白い髪が揺れる。

「お姉ちゃん」

少女の姿に驚く彼女に向かって、少女は告げる。

「もう、大丈夫だよ」

「っ！」

勢いよくベッドから起き上がる。

いつもの朝。

一年も経つのに、未だ慣れない、一人の工房で迎える朝だった。

「…………ダメね」

幸せな雇気楼ゆめの余韻を振り払って、ミュリエリアはベッドから起き上がる。

「…………今日も、一日頑張りましょう」

壁にかけて【イグスルーヴ】に向かってそう呟き、身支度を始めた。

CAST

ミュリエリア／ランポス

全話（特別編を除く）登場

とある森の中。

「はあっ！」

「やっ！」

掛け声と共に振り下ろされた【鉄刀】　主に鉄で作られた【太刀】、実戦に使うには頼りない　をバックステップで躲し、着地と同時に前に跳ぶ。

跳びながらベルゼラが【群蟲刃【雲霞】】を振るい、ラキは【鉄刀】でそれを受けたが、勢いに押されて尻餅をついた。

ベルゼラは切っ先を引き、ラキに手を差し伸べる。

「うんうん、だいぶ反応はできるようになってきたね。バックステップは色んなモンスターが使うから、対応できるようになるのが一人前への第一歩だよ」

「はい」

ベルゼラが差し出した手を取って、ラキが起き上がる。

ラキは、ベルゼラに【太刀】の修行をつけて貰っているのだ。

「まだまだ一人前には遠いですね……」

「でも、ラキ君ぐらい努力してたらきつとすぐに身につくよ。わざわざ私のところまで習いに来るくらいだから。」

巣ネストから遠いでしょ？」

「それはそうなんですけど。でも、僕の周りに太刀を使ってる人がいませんから」

「そっか。ミラちゃんが目標だもんね。ま、ミラちゃんは太刀以外でも使いこなすんだけど」

「でも、やっぱりミラさんは太刀ってイメージですから」

そう言って、ラキは空を見上げた。

「ミラさん、今どこにいるんでしょうね」

ベルゼラも同じように空を見上げ、「さあねえ……」と呟く。

「わからないけど、きっとまた会えるよ。そのときに備えて、練習練習」

「はい、よろしくお願いします」

CAST

ラキノイヤンクック

第三話メインゲスト

第十五話、第二十一話以降登場

ベルゼラノナルガクルガ

第四話メインゲスト

第十一話、第二十一話以降登場

エイシスアルカディア第一大学。

定員百名の講義室に一杯になった生徒に、白衣を着た六花が講義をしている。

「一年前、回復薬を初めとした人間由来の薬の効果が急激に低下した。

その日から、物好きが研究していただだけの人間医学が、最も必要とされる学問の一つになったことは、この学生なら当然知っているだろう」

ミラによって創世された世界は、【人間】によって作られた設定の効果の大部分が失われた。

【回復薬】は、傷を治す効果はあるが、それは微々たる物になり、【解毒薬】も今までのような万能の解毒効果はなくなった。

だが、鬼人化の効果やモンスターの特殊な攻撃のように変わらず残っている物もあり、異常な回復性能に関わる部分が主に修正されているようだった。

妥協できるラインのところまで現実との摺り合わせが行われたのだらう。

「諸君らには、新設された医学部の第一期生として、今の世界に不安を感じる人々を救って欲しいと私は願っている。

今日はここまでだ」

六花が講義の終わりを告げる。

すると、学生たちは六花に質問するためにぞろぞろと列を作り始めた。

長い行列を見て、六花は内心で溜息を一つ。

今日も、彼女自身の研究は進みそうに無かった。

（だが、これがお前の作った いや、私たちが本当の意味で生きる世界なのだな。

それならば、私も私にできることをやらなくてはな）

CAST

六花／キリン

第十一話メインゲスト

第五話、第十話、第十二話、第十三話、第十九話、第二十一話以降登場

エイシスアルカディア、アミューズメントエリア。

公園に作られた野外ステージに、沢山の人が集まっていた。

家族連れの数が多い。

その人々の目的は、そのステージで行われている演劇だ。

演劇は格調高く大人の見るもの、というイメージを壊した新しい演劇、ヒーローショーである。

「わははははは。この子は預かったぞ」

と、妙に露出の多い皮製の衣装で鞭を振り回しているのが、悪の女幹部役のリーヤ。

その傍で、

「きゃあああ、助けてええええ！」

いい加減演技にもなれて、真に迫った悲鳴を上げているのが、さらわれた子役の石楠花。

「大変、女の子が捕まっちゃったよ！ どうしよう」

そんな感じで、ステージの端で司会をしているのが、グラキシアだ。

元々この劇、グラキシアの発案で、グラキシアの両親が経営している孤児院の子たちに見せるための劇だったのだ。

それが、いつの間にか話題になり、今では二、三ヶ月に一度行われるエイシスアルカディアの名物になっている。

舞台などは立派になったが、役者含め主要スタッフは当初の内輪メンバーそのままである。

「ちょっと待った！ 邪悪幹部リヤ！ その子は返してもらおうぜ！」
威勢のいい声を上げて、舞台袖から紫色の鎧を着たレグルが現れる。

観客席の女性客から「きゃー、レグルくん」とか歓声が上がった。

舞台俳優として人気を獲得しつつあるレグルなのだった。

ちなみに、子供を連れてきた父親の視線はリーヤに釘付けだったりするのだが。

「この街の平和は俺が守る。変身！」

ポーズを決めると、レグルの体を隠すように白い煙が上がる。

煙に紛れて雇われのスタッフが近づき、レグルの鎧にパーツを追加して兜を渡す。

早着替えで変身を終えたレグルは、煙の中から飛び出して高々と名乗りを上げる。

「マスクドドラゴン・ブライト、ここに参上！」

「うう、またしても邪魔をするのかあ。ゆけえい、溶岩怪人ラヴァ
！」

リーヤがそう言うと、逆の舞台袖から【ヴォルガノス原種】をモ
デルにしたらしい着ぐるみがのたのたと現れる。

「うがー」

そんな声を上げて、掴みかかってきたヒレのような手を躲し、

「はっ！」

「うわっ」

レグルが着ぐるみの腹に蹴りを入れると、着ぐるみは後ろにひっ
くり返る。

「あ、あれ？ ちょ、この着ぐるみ手が着かない。リーヤ！ 起こ
してくれ〜」

自力では起き上がれないのか、そのまま手足をばたつかせた。

「ああ！ よくもアンゼ……じゃなくって怪人ラヴァを！」

「リヤ、次はお前の番だぜ」

「むむ、こうなったら……先生、お願いします」

「ふ、やはりこうなったか。悲しい宿命だな」

「あ、あんたは！」

リーヤに呼ばれ、舞台袖から現れた男を見て、レグルが驚きの声を上げる。

男は、ポーズを決めると「変身！」と叫ぶ。

練気によって鎧が展開し、黒い姿に変わった。

目の前で行われた変身に、子供たちがざわめく。

「マスクドドラゴン・ブラック！」

この名乗り、もちろん中身はルクスである。

ルクスは、村の守り手を後進に譲り、火山で隠居しているはずなのだが……

「大変！ ブライトの戦いの先生が、悪に染まった戦士ブラックになつて敵になつちゃったよ！」

わかりやすいグラフィシアのナレーションが入る。

「ちょ、聞いてないっての」

事情を知らないレグルが素の声を上げる。

「余所見をしている余裕は無いのではないか？」

「へ？ おわっ」

ルクスがレグルに駆け寄り、無防備な体に拳を叩き込んだ。

割と本気の一撃に、レグルがひっくり返る。

ルクスは、倒れたレグルに容赦なく攻撃を加える。

「よかったですか、あれ？」

舞台袖で、技術スタッフのフェルルートが隣にいる脚本家、セアラに聞く。

「……最近調子乗ってるから、お仕置きです」

着込んだ鎧を弄りながら、セアラが答える。

「あれ、嫉妬ですか？」

フェルルートがそう言うと、セアラは兜を被りながら「……………」
ありえないです」と答えた。

舞台では、まだレグルがルクスに痛めつけられている。

「ブライトがピンチだよ！ 会場のみんな、ブライトを助けてあげて欲しいな。

みんなの心を一つにして、シャクナちゃんと一緒に助けを呼んでね！」

「いや、だから聞いてないって、痛っ、痛いって!」

「シャクナちゃん」

グラキシアが呼ぶと、石楠花は頷き、大きく息を吸い込むと、

「助けて、ミラージュ!」

「みんな、聞こえたー? それじゃあみんなで呼んでみよー! せーの、」

グラキシアが号令をかけると、会場の半分くらいの子供たちから声が返ってきた。

グラキシアはわざとらしく首をかしげる。

「うーん、声が小さいよー。もっと大きな声で、も一回。せーの!」

「「「「「たすけて、ミラージュ!」「」「」「」

今度は、会場全体から声上がる。

その声は、舞台袖にも当然聞こえていた。

「……行ってくるです」

「頑張ってください」

兜の奥で頷き、セアラは舞台に駆け出す。

「……変身、^{リライト}マスクドドラゴン・ミラージュー！」

CAST

アンゼリカ/ヴォルガノス

第八話メインゲスト

第十四話、第二十一話以降登場

ルクス/グラビモス

第十話メインゲスト

第十四話、第二十一話以降登場

セアラ/フルフル

第十一話メインゲスト

第十五話、第二十一話以降登場

レグル/ゲリヨス

第十一話メインゲスト

第十五話、第二十一話以降登場

石楠花/クシャルダオラ

第十三話メインゲスト

第十四話、第十九話、第二十一話以降登場

グラキシア/ウカムルバス

第十三話メインゲスト

第十四話、第十九話、第二十一話以降登場

リーヤノダイミヨウザザミ&シヨウゲンギザミ

第十四話メインゲスト

第十七話、第二十一話以降登場

フェルルートノラージャン

第十八話メインゲスト

第十九話、第二十一話以降登場

密林、【ランゴスタ進種】の城。

城門正面の広場で、今日も決闘が行われていた。

二人の男が、武器をぶつけ合っている。

それを横目に、手にトレイを持ったメイミイは上階へと続く階段を上って行った。

お盆の上にはティーポットやカップが載せられているが、それほど揺らすこともなく慣れた足取りだった。

階段を上っていると、階下でわあ、と声が上がった。

手すりから下を覗くと、勝負が終わったらしく片方の男が膝を着いていた。

メイミイはその結果を確かめると、絨毯の敷かれた廊下を歩いて

行った。

目的の部屋の前に立つと、扉をノックする。

「どござ」

「失礼しますっ」

扉を開けて、部屋に入る。

部屋の中では、机に向かったルティエが何かの書類を読んでいた。

「ルティエさん、お茶淹れました。少し休憩しにゃいですか？」

「あら、そうですね？ よろしくお願ひしますわ」

最近、メイミィはこの城で家事研修中なのだ。

ファムが指導をしている関係で、ルティエ付き侍女見習いという立場にある。

最近、ファムに代わっていくらかの役目も任せられるようになっていた。

「はい。それじゃあ準備しますね」

トレイを机に置いて、お茶の準備を始める。

「あ、そう言えば、下の決闘トレーニャードさんが勝ってました」

「そうでしたの。後で少し労って差し上げなければなりませんわね」

「やっぱり、ルティエさんの代理だったんですね」

「ええ。一応、わたくしの騎士代理ですから」

「最近多いですね、決闘」

「どうも、お母様がわたくしに王位を譲るといふ噂が流れているようですよ。」

それで、わたくしに負い目を負わせておきたいのでしょうかね」

「みゃ！ ルティエさん、王様ににやるんですか？」

「お母様、ゲリヨスの毒で眠っている間に政務が出来なかったことを気にしているようなのですわ。」

そういう事情ですから、わたくしも王位につくことに吝かではないのですけれど、わたくしの騎士が帰ってくるまでは待つていただけることになっていますの」

「そうにやんですか。はい、お茶が入りました」

「ありがとうございますわ」

メイミィから琥珀色の液体の入ったカップを受け取り、口に運ぶ。

「ど、どうですか？」

空のお盆を胸に抱いて待っているメイミィに微笑を向け、

「ええ、美味しい。上達しましたわね」

「そうですか、よかったですっ」

「ふふ、本当に上手になりましたわ。最初に淹れていただいたときは、蜂蜜のありがたみを再認識できましたから」

「みい……それは忘れてください」

少し前を思い出して笑みを浮かべるルティエに顔を赤らめて文句を言う。

その様子にルティエはもう一度笑みを浮かべ、カップを口に運んだ。

「やっぱり、美味しいですね。……早く、本当に淹れて上げたい方に飲ませて上げられるといいですね」

「……はい。きっと」

CAST

メイミイ / アイルー

第五話メインゲスト

第七話、第十四話、第二十一話以降登場

ルティエ / ランゴスタ

第六話メインゲスト

第十二話、第十三話、第二十一話以降登場

【密林】エリア近くの港から出航し、外洋へと向かう一隻の帆船があった。

この世界にしては、結構な大型船だ。

このレベルの船は技術的には問題なく作れたのだが、運用するための港が無かったのだ。

世界の進化後、世界から【ハンター】が姿を消したことでようやく港を作れるようになったのだ。

港の完成度はまだ七割というところだが、一隻の船が完成し、今日、出航の日を迎えた。

目的は、海を越えて別の大陸へと向かうこと。

その船の甲板に、四人の男女の姿があった。

「やーっと出航か」

「そうだな。これで、やっと他の大陸の地図を作り始められるぞ」

「俺サマも、新しい商品とルートを開拓できるってもんだぜ」

船の舳先から先を望んで、エルミナとダルブルグが話している。

聞いている通り、二人はそういう目的でこの船に乗っていた。

「うわ……海の色が濃いつす……。この船沈まないつすよねえ」

「何で一番心配いらねえお前が一番びびってんだよ……」

少し離れたところで相変わらずカナツチなグレイが恐々と海を覗き込み、エンダが呆れ顔で呟く。

「なあエルミナ。こいつを連れてきたのは失敗じゃねえのか？」

「ボクも今、少しそんな気がしてるぞ」

「海に出るからちょうどいいと思ったんだがなあ」

「な、誘っておいて何すかそれ！ 大体、それ言ったらエンダがここにいるのだって意味わからないつすよ！」

「んー、そう言われりゃそうだな」

グレイの言葉に、ダルブルグがなるほど頷く。

「そう言えば、エンダは自分から乗ってきたんだつぞ。どうしてなんだ？」

エルミナに聞かれたエンダは、そっぽを向きながら答える。

「別に、新しい大陸に少し興味があったただけだ。それに、どっかに

あいつがいるかも知れねえしな……」

「え？」

後半は小声だったが、近くにいたグレイには聞こえたようだ。

「エンダ、もしかしてミラちゃんを探しにきたんっすか？」

「誰がわざわざ探すかよ。ついでだ、ついで」

「本当にそうっすかあ？」

にやにやと笑みを浮かべたグレイがそう聞いたとき

ドオン、と何かがぶつかったような音が響き、船が大きく揺れた。

何かがぶつかったらしい後方で騒ぎが起こる。

ざわざわと大きくなる声に紛れて、叫び声が聞こえた。

「ら、ラギアクルスだ！」

それを聞いて、前方甲板の四人にも緊張が走った。

「ラギアクルスってえとあれか、あのときに増えた新種の」

「人間が悪あがきで送りつけてきたやつだぞ」

「今となつては普通の原種っすけどね」

「だったら、やることは一つだ」

エンダは、そう言って背中【大剣】 【アッパーブレイズ】を強化した【マスターブレイズ】 を引き抜く。

エルミナとダブルブルグも自分の武器を構え、グレイは海の水から槍を作り上げた。

「行くぜ！」

四人は、武器を手に、後方甲板へと走り出した。

CAST

エンダノイヤンガルルガ

第三話メインゲスト

第十七話、第二十一話以降登場

グレイノガノトトス

第七話メインゲスト

第十七話、第二十一話以降登場

ダブルブルグノディアブロス

第十七話メインゲスト

第十三話、第二十一話以降登場

エルミナノアカムトルム

第十七話メインゲスト

第十九話、第二十一話以降登場

【雪山】 近くにある、一軒の木の小屋。

ここは、一組の恋人が住んでいる巣だ。ネスト

その小屋の中で、

「茉莉、手紙が届いていた」

今、郵便アイルーが運んできた手紙を、柊也が茉莉に渡す。

「手紙？ あ、お母さんからなの」

茉莉は、封筒から手紙を出して目を通す。

「うーん……」

「どうした？」

「お母さんが、婚礼の儀式をするって言ってから一年経っけどどうなってるんだーって言うてるの」

「ああ、そうか」

「どっしりよっ？ しゅー君」

「そうだな……」

柊也は少し考え、

「挙げるか？ 結婚式」

「ええ！？ それは挙げたいけど、でも、あるとき一緒に戦ったみんなが揃うまではダメなの」

「わかっている。言ってみただけだ」

「も〜、わかっているなら言わないで欲しいの！ あ、でも、しゅー君がわかっててくれるのは嬉しいんだからね！」

「ああ、それもわかっている。愛してるよ、茉莉」

「ふえ！？ どどどど、どうしたの急に!？」

真っ赤になってあたふたと慌てる茉莉。

「いや、式を挙げないでいる間に嫌われないようにな」

「も、も〜、そんなことしなくても、茉莉もしゅー君が大好きなの！」

「茉莉……」

「しゅー君……」

見詰め合う二人。

どこまでも仲の良い二人であった。

CAST

茉莉 / ナナ・テスカトリ

第十五話メインゲスト

第十九話、第二十一話以降登場

柊也 / テオ・テスカトル

第十五話メインゲスト

第十九話、第二十一話以降登場

地下へと続く階段から、大きな背囊を背負った一人の男が出てくる。

階段の入り口できよろきよると周囲を見回し「よし」と頷く。

そして、地下から飛び出した、その瞬間。

「そこまでだ」

真後ろから、そんな声をかけられる。

慌てて振り返ると、そこには一人の鎧武者が白刃を抜き放って立っていた。

「盗人よ、その荷物を返されよ。それは、エイシスアルカディアが管理する定めになっておるのだ」

鎧武者　ベガードはそう言っていると、男に刃を突きつけた。

ここは、【廃都メゼポルタ】の近くに見つかった、新しい遺跡だ。

しかも、【人間】時代以前、つまり、過学文明の遺跡なのだ。

一年前までは、こんな遺跡は存在していなかった。

しかし、世界を再構成した際に、設定でしかなかった過学文明は実在した過去になり、遺跡も見つかるようになったのである。

その中から出てくる道具は、当然過学の使われている物で、うかつに扱うと危険な物も多い。

そのため、エイシスアルカディアの考古学部が全てを回収することになったのだが、何ら法的な力があるわけではない。

施政院が力を持つのは、エイシスアルカディアの中だけだ。

危険性を説明して何とか協力をしてもらっているのだが、やはり、今回のように勝手に持ち出そうとする輩は後を絶たない。

そういう相手に対しては、力づくで何とかするしかないのが現状だった。

過学の遺産の危険性は、それほどのものなのだ。

そして、その力を行使する役に就いている一人が、ベガードだった。

「ちっ、はいはい、わかりました　よっ！」

男は背囊を下ろし、乱暴にベガードに投げつけた。

過学の遺産が入った背囊を斬り払うわけにもいかず、ベガードは落ちそうになったそれを慌てて受け止める。

その間に、男は駆け去ってしまった。

「逃げられたか……」

「盗まれた物が返って来たのなら、別に構わないわ」

そう言いながら、地下から華霞が地上に出てきた。

「華霞殿」

「ベガードさん、ご苦労様」

「いや、礼には及ばぬよ。それで、これが奴の盗もつとしたものだ」

「ええ、ありがとう」

華霞は、ベガードから受け取った背囊を地面に下ろし、中身を確かめ始めた。

中からは、どうやって使うのかもわからないような道具が色々と出てくる。

「やっぱり、一目ではさっぱりね」

「ふむ……。使い道もわからぬものを盗み出して、どうするつもりなのだろうな」

「珍しいものはそれだけで価値があるのよ。盗品とわかっていても、高値で取引されるわ」

「なるほど。そういうことであつたか。」

それにしても、これほど盗人が多いとは、困つたものだ」

ベガードがそう言うと、華霞は難しい顔になる。

「遺跡は誰の物でもないから、そこから持ち出しても罪とは言えないのよ。」

かといって、渡してしまうわけにもいかないし……。頭が痛いわね。こつちが把握してない遺跡も多いし、彼女たちがいなければ、今頃は大変なことになっていたかもしれないわね」

「あの二人か。目的は同じなのだから、協力できればよいのだがな」

「でも、あの二人、特に彼女は色々複雑なんだと思うわ。彼女も、私たちも」

「実際、悪人ではないと思うのだがな……」

「そうね。何だかんだで名前は使ってくれているようだし」

「そこはただこだわりがないだけのよような気もするが……」

「……そんな気もするわね」

華霞は、荷物を背囊に詰め直して持ち上げる。

「それじゃ、私は仕事に戻るわ」

「うむ。某も見回りに戻るとしよう」

「ええ。よろしくね」

その言葉を交わし、二人は遺跡の内と外に別れて行った。

CAST

華霞 / オオナズチ

第十五話メインゲスト

第十九話以降登場

ベガード / ティガレックス

第十六話メインゲスト

第十八話、第十九話、第二十一話以降登場

夜が明ける頃、ある森の中。

森の中で、野宿している二人の姿があった。

セレスティア、セレスタイトの姉弟だ。

両親の仇である【ミラボレアス】を追っていた二人は、今はミラを探すために旅をしているのだ。

世界と一つになったと言われても、なかなか理解が及ばない話だ。

そのため、探せばどこかで出会えるのではないかと二人は思っていた。

もつとも、一年が過ぎた今も、手がかり一つ見つからないのだが。

「っー」

突然、被っていた毛布を跳ね除けて、セレスティアが起き上がった。

その隣で、セレスタイトも同じように飛び起きる。

「……………」

「……………」

二人は無言で顔を見合わせる。

「もしかして、あんたも？」

「じゃあ、姉さんもなんだ」

そう言っつて頷き合つ二人。

傍から聞いていると意味のわからない会話だが、二人は理解しあっているらしい。

セレスティアは、そのままの姿勢で何事か考え、

「決めた！」

そう言つと、寢床から立ち上がつて出発の準備を始めた。

「姉さん？ どうするつもり？」

「行くに決まつてんでしょ」

「即決だねえ」

「何よ、文句あるなら来なくてもいいわよ」

「まさか。姉さんが行くなら僕も行くよ。だって、僕たちは二人で一つだからね」

「そこなくつちやね。行くわよ、セレスタ」

「うん！」

CAST

セレスティア／リオレイア

第九話メインゲスト

第二十話以降登場

セレスタイト／リオレウス

第九話メインゲスト

第二十話以降登場

CAST

SUB CHARACTER

アウリオ／ランゴスタ

第十話、第十一話、第十二話、第二十二話登場

トレナード／ランゴスタ

第六話、第十二話、第二十二話登場

ルーゼリア／ランゴスタ

第六話、第十二話、第二十二話登場

ファム／アイルー

第六話、第十二話、第十三話、第二十二話登場

シラタキ／アイルー

第八話、第十四話登場

アトラス／ベルキウス

コラボ企画メインゲスト

出典【CROSSING OF DESTINY】

ケイ・F・ネイチャー／人間

コラボ企画登場

出典【CROSSING OF DESTINY】

原作／MONSTER HUNTER

人間によって生み出され、tryと名づけられた世界は終わりを告げ、新しい世界が始まった。

その詳細を知るものは少ない。

だが、誰ともなく、その世界はこう呼ばれるようになった。

【EVOLVE】。

それが、今の世界の名前。

世界が常に未来へと向かえるように。

どこまでも進化し続けるようにと、そんな願いの込められた名前だ。

誰に管理されることもなく、世界はこれから無限に広がるだろう。

だから、ミラという一人の少女を追うこの話は、一度ここで完結しよう。

その後の世界に生きる者たちの無数の物語が、ここから始まるのだから

```
< Monster hunter try was deleted .
```

and

```
< Update to [EVOLVE] .
```

T
H
E
E
N
D
.

皆さん、どうしてここに？

いやー、ラギアクルスに乗ってた船に穴開けられたんっすよ

修理のために戻ったんだけど、初の航海で沈むかと思っただぞ、

うん

そういう話じゃねえよ。ここに来たのは、夢を見たからだ。何か気になってな

もしかして、あの子が出てくる夢？

それなら私も見たわよ。こいつも

……私も見たです

僕も見ました

わたくしもですわ

俺もだ。

じゃあ、みんな見たんだね。

ここまで重なると、何か意味があるとしたか思えないな

きつと……あの子が呼んでるのよ。はい

手？

繋いでみましょう？

やってみるの！

試すだけの価値はありそうね

よっしゃやってみるか

手が結ばれ、一箇所欠けた紋章を作る。

.....

みい……。繋いだけど、何も起こりませんね……

もしかして、体があるとだめだったのか？

いいえ、そんなことはないわ。ここに、心がある限り 私た
ちはみんな、ひかりになれるのよ

ひかりに……

こころを、一つに重ねて。見つけましょう。あの子を

目を閉じて、想う

一人の少女のことを

誰もが知っている、その姿を思い描いて

想いが重なるとき、繋いだ手と手を、ひかりが結んだ。

ひかりは手から手へと巡り、紋章の欠けた位置に溜まっていく

捉えるべきは、世界と同一である神

一人に認識できる存在ではない

けれど、一人一人が見つつけ出した、わずかな欠片を重ね合わせれば

ひかりが触れる度に、そこに在るなにかの存在を確かにして

空いていた手が、何かを握る

そっと目を開くと、そこには一人の少女が立っていた

欠けた紋章を埋める、最後の一人

あ……

……えっと、やっとこの世界も安定したから、人間みたいに何でもやるのはやめようって思って……

それで、みんなに教えておこっつて思ったんだけど……

……引き戻してもらえるなんて、びっくりしちゃった……

落ち着き無く視線を彷徨わせて、どこか居心地の悪そうな少女に、

告げる

皆が待っていた

ここは、あなたの帰ってくる場所なのだ

おかえりなさい

あ……うんっ

少女は、満面の笑みを浮かべて、告げる。

ただいま！

CAST

ミラノミリアーク

全話登場

It's Happy End!

.....

.....

.....

深夜。

【廃都メゼポルタ】近くにある過学時代の遺跡で、こっそりと荷車を引いている男が一人。

「やってやったぜ。何だか知らねーけど、あいつらいなくなっただし、油断大敵なんだよ。」

くく、こいつ、高く売れるだろうなあ」

遺跡から盗み出した過学の遺産を積んだ荷車を引きながら、ほくそ笑む。

「しかし、学者先生も甘いんだよな。追い払ったくらいで諦めるわけが無いってことにも気づかないんだからな」

「.....そうね」

盗人の声に、淡々とした声で返事が返される。

それに驚く間も与えず、夜闇の中から黒い火球が飛来した。

「んなっ！」

目の前に着弾した火球に、思わず足を止める。

その盗人の前に、闇から抜け出して女が姿を見せた。

黒い髪、黒い瞳、黒い翼、黒い鎧、黒い【大剣】。

黒尽くめの女。

「過学の遺産は世界に対して進歩しすぎている。世界の調和を狂わせるものは、排除されなければならない」

黒い女は、そう言って黒い剣を振り上げた。

「え、ちょ、まっ」

「さよなら」

問答無用で【大剣】が振り下ろされ、

「やめんか、ノワール」

そんな声と共に、二人の間を割って赤い雷が落ちた。

ノワール、と呼ばれた黒い女は、邪魔をした相手 彼女とは対

照的に白尽くめの少女 をじろりと睨む。

「リュミエル……何をするのよ」

「殺してはならんと言っておるじゃろっが」

やれやれ、と溜息混じりに少女 リュミエルが答える。

それから盗人の方を向き、

「ほれ、そなたはさっさと逃げよ。荷物は置いて行くのじゃぞ。そうでないと、妾も庇ってはやれんからの」

そう言うリユミエルの後ろで、ノワールが【大剣】を構える。

「……くそっ」

分が悪いと悟った盗人は、荷車を置いて闇の中に走り去って行った。

「行ったの。それにしても、荷車一杯とはよくもまあ盗んだものじや っと、これは！」

荷車を覗き込んだリユミエルが驚愕の声を上げる。

荷車には、過学の道具と一緒に、幼い少女が寝かされていた。

雨も降っていないのに、全身がぐっしょりと濡れている。

「廃棄されたとは知っておったが、そうか、あんなところに……」

「知っているの？」

「うむ。この娘もミラーージュじゃ」

「そうなの。でも、彼女とは違うように感じるわ」

「じゃろな。この娘ではなく、タイプじゃからの」

タイプミラージュ。

タイプと同時に研究されていた、ミラとは違う手段で【進種】の能力を使い分けるハンターだ。

能力的に勝る タイプが完成したため、放棄されてしまったのである。

この世界にはもう【ハンター】はいない。

だが、その少女は、人間の設定ではなく、【ハンター】に世界の中で作られた【ハンター】だから、今も存在しているのだろう。

今は眠っている少女の顔を見下ろして、ノワールが呟く。

「……もう一人の、ミラージュ」

CAST

ノワール／ミラボレアス

第一話、第二十二話、第二十二話登場

リュミエル／ミラルーツ

第二十二話以降登場

?????／ミラージュ

N
E
X
T
?>
M
O
N
S
T
E
R

H
U
N
T
E
R

E
•
S
E
Q
U
E
L

エンディング（後書き）

元はゲームの世界と言うことで、スタッフロールっぽくしてみました。

これで、本当に完結です。

友人のホームページに公開していた話を含めると、完結させた長編は五つ目になります。完結したときはいつも、嬉しさと寂しさを感じます。

やりきったと思う反面、書ききったことによって無限にあった未来を一つに定めてしまったような、そんな気持ちです。

私にとっては、この作品の中で描かれたストーリーが唯一であり、自分ではもうそれを弄ることはできないんですね。

ですが、読者の皆様はそうではないと思います。

作者は、最初から終わりが見えていて、そこに話を持っていくようにするために、その分視野が狭くなります（皆がそうとは言いませんが、私はそうです）。

ですが、それを知らない読者の方は、話の途中までで与えられた情報から、色々と先を考えてみたり、キャラ同士の絡みを想像できたのではないのでしょうか？

作品は完結しましたが、この作品の中に生きた彼ら、彼女らで色々空想を膨らませてみてください。

作者としては、そうやって愛されるキャラクターになることを祈るばかりです。

最後までお付き合いいただき、本当にありがとうございました。

といいつつ、続編の構想は既にあります。

ですが、その構想というのが

友人「なあ、この話ってTVアニメ的なものなんだろ？」

作者「あー、そんなことも言ったな（全26話的な意味で）」

友人「なら当然あるよな？」

作者「何が？」

友人「劇場版」

作者「……………（ねえよ！）」

友人「あるよな？」

作者「……………（ないってば！）」

友人「な？」

作者「考えとくよ」

という感じの会話から生まれたので、最初から最後まで一貫して最後のイベントみたいな感じになるかと。

ですので、モンハン要素はEVOOLVE終盤程度しかありません。

果たして、これを二次創作と言っているのかどうか……………

そんなわけで、設定は完成してますが、書いて公開するか迷っています。

読みたいという方がいれば書き始めますので、感想か何かで教えてください。

ちなみに、E・SEQUELは、EVOOVE SEQUELが長いので縮めた語で、勝手にイシークエルと読んでます。
意味はそのまま、続編、という意味です。

では。

また別の作品でお会いできることを祈って。

CENTERでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5780h/>

MONSTER HUNTER EVOLVE

2010年11月20日17時54分発行